サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第６冊

浜ノ町遺跡

２００４．３

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第６冊

浜ノ町遺跡

２００４．３

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

Ⅰ．浜ノ町遺跡の発掘調査

屋島から浜ノ町遺跡を望む

高松市浜ノ町と錦町にある浜ノ町遺跡は、サンポート高松整備の際に発掘調査が行われました。その結果、鎌倉から室町時代にかけての集落と江戸時代の城下としての様子が明らかになりました。

浜ノ町遺跡と工事中のサンポート高松

Ⅱ. 鎌倉～室町時代

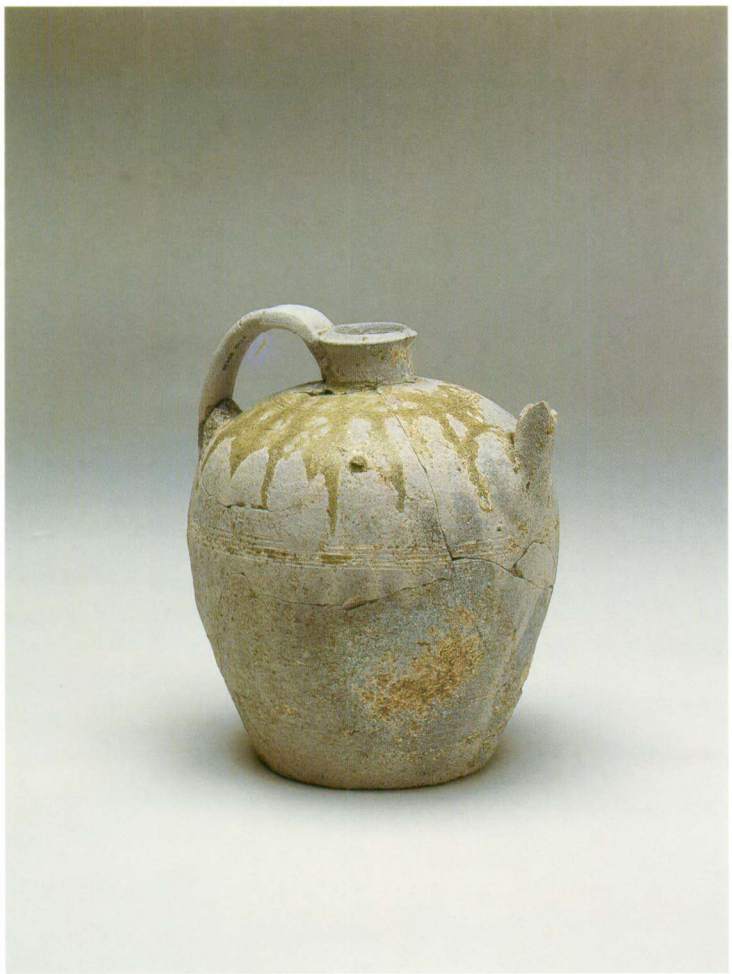
白磁四耳壺

1. 各地のやきもの

浜ノ町遺跡には、西日本各地や中国で製作されたやきものが多く持ち込まれています。これは、浜ノ町遺跡の集落が外に向かって開かれていたことを示すものです。

上と右は、中国でつくられた白磁の四耳壺です。浜ノ町遺跡では、骨を収めた骨蔵器として使用されていました。

白磁四耳壺出土の様子



古瀬戸水注

左は現在の愛知県瀬戸市で製作された古瀬戸の水注です。香川県内での出土は希です。

下は、近畿地方や岡山県など様々な地域から持ち込まれたやきものです。

様々な地域のやきもの

2．砥石の流通

浜ノ町遺跡では、当時貴重品であった京都産とみられる砥石が出土しています。その他にも、県外で採れる石材の砥石があります。

砥石

3．特徴的な井戸枠

中国からもたらされた「結物（ゆいもの）」と呼ばれる木製の容器は、鎌倉時代終わり頃に全国に普及し始めます。　井戸枠も結物の製作技術によってつくられるようになりますが、この頃の高松平野で確認できるのは、浜ノ町遺跡のみです。

結物の井戸枠

4．大規模な漁業

浜ノ町遺跡からは、多くの土錘（網のおもり）が出土しています。これらの土錘は、重く、土錘を固定する綱も太いと考えられるため、大人数での漁業が行われていたことがわかります。

土錘

5．集落の性格

他地域からもたらされたものが多い浜ノ町遺跡の集落は、物資の流通に深く携わっていたようです。それと同時に大規模な漁業を営むことにより、浜ノ町遺跡の集落が成り立っていたのでしょう。

屋敷地を区画する溝

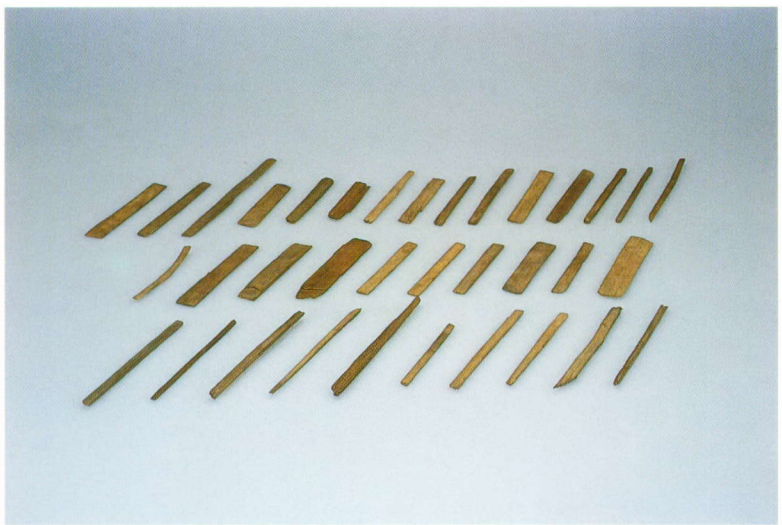
6．寺院の存在

一般集落ではみられない瓦や、仏教に関連する仏花瓶（ぶっかびん）は、寺院の存在を思わせる遺物です。

瓦と仏花瓶

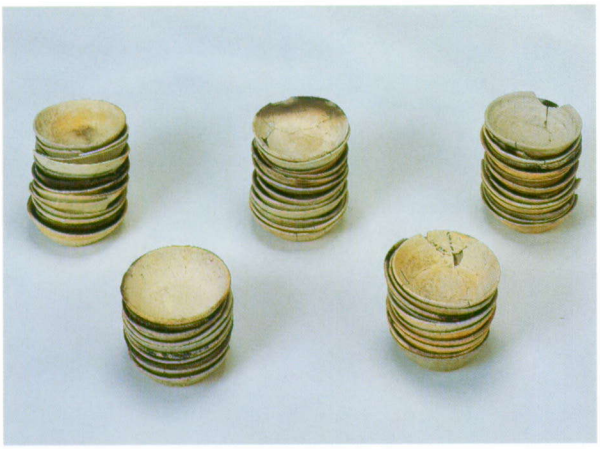
7．トイレ遺構

区画溝の一部分はトイレとして使用されていました。トイレの土を分析することで、当時の人の食生活や周辺環境復元の手がかりが得られます。下の写真は、現在のトイレットペーパーの役割を果たしていたチュウ木と呼ばれる遺物です。トイレ遺構の中から多く出土しました。



チュウ木

8．まじない



灯明皿

区画溝の一部からは、使用済みの灯明皿140個体以上がまとまって出土しました。日常的な生活跡とは明らかに異なっているため、非日常的な行為にともなうものと考えられます。

灯明皿出土の様子

呪符木簡

ある井戸の中からは、５枚１組のまじないの文字が記された呪符木簡（じゅふもっかん）が２組出土しました。井戸を埋め立てる際にまじないが行われたことを示しています。

Ⅲ. 江戸時代

17世紀初め頃の大規模な落ち込み状の遺構には、直径20～30cm程度の輪状に撚られた植物製品が並べられていましたが、その性格はわかっていません。また、ここには肥前系陶器（唐津焼）が大量に捨てられていました。城下としての整備が進む17世紀中頃には、この遺構は埋め立てられて屋敷地となります。

肥前系陶器

落ち込み状遺構の様子

序　　文

近年、交通網や情報網の急速な整備に伴い、高松を取り巻く環境は大きく変化しています。こういった中で、高松が引き続き四国および瀬戸内海地域の中で重要な役割を担い、新たな「都市」として飛躍するために、サンポート高松の整備が進められています。

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、このサンポート高松整備事業に先立って平成７年度から事業地内の発掘調査を行ってまいりました。

このたび報告しますのは、高松市浜ノ町と錦町に所在する浜ノ町遺跡です。この地区は、江戸時代には城下として整備され、現在にも土地割などにその面影を残しています。

さらに遡って、鎌倉時代から室町時代には、「野原」と呼ばれたこの地区に、高松平野の玄関口として物資の流通と大規模な漁業に携わる集落が存在していたことが明らかになりました。本遺跡の発掘調査により、従来の文献資料による中世「野原」のイメージが大きく変わったのは、重要な成果として注目されます。

本報告書によって、これらの成果が香川の中世・近世をはじめとする歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から整理・報告にいたるまでの間、サンポート高松推進局・サンポート高松推進事務所および関係機関ならびに地元関係各位には、多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成16年３月

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
所長　中　村　　仁

例　　言

1. 本報告書は、サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第６冊で、香川県高松市浜ノ町・錦町に所在する浜ノ町遺跡（はまのちょういせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部サンポート高松推進局から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当として実施した。
3. 発掘調査は平成11年度～13年度の３ヶ年度に渡り、便宜上調査対象地をＡ～Ｌ区の12調査区に分割して実施した。発掘調査期間及び各調査区の担当は以下の通りである。

平成11年度

平成12（2000）年２月15日～３月31日

Ａ区　乗松真也・岡本利・陶山仁美

平成12年度

平成12（2000）年４月１日～11月30日

Ｂ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ区　古野徳久・黒川和仁・小林明弘

平成12（2000）年４月１日～８月31日、11月１日～11月30日

Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｅ区　乗松真也・川原和生・糸山晋

平成13年度

平成13（2001）年10月１日～平成14（2002）年３月31日

Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｌ区　乗松真也・黒川和仁・中山尚子

4. 調査にあたって、以下の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）

香川県土木部サンポート高松推進局

5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の編集は乗松が担当し、執筆は下記のとおり分担した。

第１章、第２章、第３章、第４章第１節、第５章第１～４・６・７節 …… 乗松

第４章第２節 …… 古環境研究所

第４章第３節 …… 鈴木茂

第４章第４節 …… 黒澤一男

第４章第５節 …… 村川義行

第５章第５節 …… 松田朝由

6. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。

市村高男・伊藤裕偉・江浦洋・大北和美・大久保徹也・大嶋和則・海邉博史・片桐孝浩・川畑聡・日下正剛・佐藤亜聖・佐藤浩司・佐藤竜馬・柴田圭子・荘景輝・鋤柄俊夫・田中学・徳山久夫・楢崎彰一・林大智・藤澤良祐・松岡宏一・松田直則・御厨義道・森村健一・渡邉淳子

（敬称略・五十音順）

7. 本遺跡の報告にあたっては、下記の方々に鑑定、分析を依頼した。

石造物の分析・鑑定 …… 松田朝由氏

樹種同定 …… 古環境研究所

花粉分析 …… 鈴木茂氏（パレオ・ラボ）
珪藻分析 …… 黒澤一男氏（パレオ・ラボ）
鉄滓の分析・鑑定 …… 村川義行氏（安来市立和鋼博物館）
漆器の分析・鑑定 …… 北野信彦氏（くらしき作陽大学）
トイレ遺構の土壌分析 …… 金原正明氏（奈良教育大学）

8. 挿図の一部に国土地理院地形図「高松北部」「高松南部」を使用した。
9. 本書で用いる方位の北は、国土座標第Ⅳ座標系（日本測地系）の北であり、標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均海面）からのプラス値である。また、座標・標高の記載はすべてｍ単位である。
10. 本遺跡は中世（13～15世紀）及び近世（16世紀末～19世紀中葉）が中心となるが、中世と近世では遺跡の内容が大きく異なるため、第３章で中世以前、第４章で近世以降の遺構・遺物について報告する。
11. 遺構は下記の略号によって表示している。
ＳＡ　柵列　　ＳＢ　掘立柱建物・礎石建物　　ＳＤ　溝状遺構　　ＳＥ　井戸　　ＳＫ　土坑
ＳＰ　柱穴・小穴　　ＳＸ　その他の遺構
12. 遺構名は発掘調査時および概要報告時と異なっている。基本的には発掘調査時の遺構番号の先頭に、Ａ区－０、Ｂ区－１、Ｃ区－２、Ｄ区－３、Ｅ区－４、Ｇ区－５、Ｈ区－６、Ｉ・Ｊ・Ｌ区－７を付したものとなっており、ＳＰについては４桁、それ以外の遺構については３桁の数字で表している。例えば、ＳＰ 0023（本報告書）←Ａ区ＳＰ 23（発掘調査時）、ＳＤ 711（本報告書）←Ｊ区ＳＤ 11（発掘調査時）という具合である。ただし、遺構の種別が変化したものについては新たに番号を付した。
13. 土層注記中の、Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｌ区の土色については　小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳 1998年版』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
　土層注記中のその他の部分の記載ついては、発掘調査時の担当者の考えを尊重し、あえて統一していない。よって土層注記は、同一調査区内においての相対的な観察記録となっている。
14. ＣＤ２枚のうち、ＣＤ１には遺物観察表・遺構一覧表・土錘一覧表・近世瓦一覧表、ＣＤ２には写真を収めている。
15. 添付ＣＤのビューワは、株式会社トリワークス（http://www.kuraemon.com）の「蔵衛門９」を使用した。

本文目次

第１章　発掘調査および整理作業の経緯と経過…… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯と経過…… 1
　　1　発掘調査に至る経緯と経過…… 1
　　2　発掘調査の体制…… 1
　　3　発掘調査日誌抄…… 5
　第２節　整理作業の経過…… 6
　　1　整理作業の経過…… 6
　　2　整理作業の体制…… 6

第２章　地理・歴史的環境…… 7
　第１節　地理的環境…… 7
　第２節　歴史的環境…… 7
　　1　野原郷の中世遺跡…… 7
　　2　近世の絵図からみた調査地の変遷…… 10

第３章　発掘調査の記録…… 11
　第１節　発掘調査の方法…… 11
　第２節　調査地内の地形と層序…… 15
　第３節　中世以前の遺構と遺物…… 23
　第４節　近世以降の遺構と遺物…… 165
　第５節　土錘…… 263
　第６節　中世瓦…… 268
　第７節　近世瓦…… 272

第４章　自然科学的分析…… 279
　第１節　分析の目的…… 279
　第２節　香川県浜ノ町遺跡における樹種同定…… 280
　第３節　浜ノ町遺跡の花粉化石…… 285
　第４節　香川県浜ノ町遺跡の珪藻化石群集…… 294
　第５節　浜ノ町遺跡出土製鉄関連遺物の分析調査…… 298

第５章　調査の成果…… 303
　第１節　14～15世紀の土師質土器杯編年…… 303
　第２節　高松平野中世遺跡出土の砥石について…… 309
　第３節　中世の土錘について…… 313
　第４節　高松平野における井戸枠の変遷…… 315
　第５節　浜ノ町遺跡出土の石造物…… 320
　第６節　中世の浜ノ町遺跡について…… 327
　第７節　近世の遺構変遷と土地利用…… 332

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　サンポート高松総合整備事業関連遺跡位置図…… 2
第３図　浜ノ町遺跡・高松城跡（西の丸町地区）調査地位置図…… 3
第４図　高松平野中世遺跡分布図…… 8
第５図　調査区割図、土層断面位置図、土層断面略図……12
第６図　Ａ区北壁（①）・Ｅ区南壁（②）土層断面図…… 13・14
第７図　Ｇ・Ｈ区南壁（③・④・⑤）土層断面図(1)……16
第８図　Ｇ・Ｈ区南壁（③・④・⑤）土層断面図(2)……17
第９図　Ｊ区北壁・Ｉ区北壁（⑥・⑦・⑧）土層断面図……18
第10図　Ｅ区ﾍﾞﾙﾄＡ（⑨）・東壁（⑩）土層断面図……19
第11図　Ｅ区ﾍﾞﾙﾄＡ出土遺物…… 20
第12図　Ｉ区ＳＸ717ﾍﾞﾙﾄ（⑪）、Ｄ・Ｅ区下層確認ﾄﾚﾝﾁ（⑫）土層断面図…… 21
第13図　ＳＡ001出土遺物……24
第14図　ＳＡ001平・断面図…… 25・26
第15図　ＳＢ101・102平・断面図…… 27
第16図　ＳＢ201平・断面図……28
第17図　ＳＢ202・301平・断面図…… 29
第18図　ＳＢ501・502平・断面図…… 30
第19図　ＳＢ603・604平・断面図…… 32
第20図　ＳＢ605平・断面図……33
第21図　ＳＤ002平・断面図……34
第22図　ＳＤ002出土遺物……35
第23図　ＳＤ009・013・014平面図…… 36
第24図　ＳＤ009上層・下層平面図……37
第25図　ＳＤ009断面図……38
第26図　ＳＤ013断面図……39
第27図　ＳＤ014断面図……40
第28図　ＳＸ022遺物出土状況……41
第29図　ＳＸ022断面図、ＳＸ004平・断面図…… 42
第30図　ＳＤ009出土遺物(1)……43
第31図　ＳＤ009出土遺物(2)……44
第32図　ＳＤ009出土遺物(3)……45
第33図　ＳＤ009出土遺物(4)……46
第34図　ＳＤ009出土遺物(5)……47
第35図　ＳＤ009出土遺物(6)……48
第36図　ＳＤ009出土遺物(7)……49
第37図　ＳＤ009出土遺物(8)……50
第38図　ＳＤ009出土遺物(9)……51
第39図　ＳＤ009出土遺物(10)……52
第40図　ＳＤ009出土遺物(11)……53
第41図　ＳＤ010出土遺物……55
第42図　ＳＤ013出土遺物(1)……56
第43図　ＳＤ013出土遺物(2)……57
第44図　ＳＤ014出土遺物……58
第45図　ＳＥ101・102平・断面図……59・60
第46図　ＳＥ101出土遺物(1)……61
第47図　ＳＥ101出土遺物(2)、ＳＥ102出土遺物(1)…… 62
第48図　ＳＥ102出土遺物(2)……63
第49図　ＳＥ303平面図……64
第50図　ＳＥ303断面図……65
第51図　ＳＥ303出土遺物……66
第52図　ＳＥ304平・断面図……67
第53図　ＳＥ304出土遺物……68
第54図　ＳＥ403平・断面図……69
第55図　ＳＥ403出土遺物(1)……70
第56図　ＳＥ403出土遺物(2)…… 71
第57図　ＳＥ512平・断面図、出土遺物……73
第58図　ＳＥ514平・断面図……74
第59図　ＳＥ514出土遺物……75
第60図　ＳＥ520平・断面図、出土遺物……76
第61図　ＳＥ520出土遺物……77
第62図　ＳＥ521平・断面図……78
第63図　ＳＥ521出土遺物……79
第64図　ＳＥ602平・断面図……80
第65図　ＳＥ602出土遺物……81
第66図　ＳＫ004・008・009・016平・断面図……83
第67図　ＳＫ004・006・008～010・012出土遺物……84
第68図　ＳＫ016・017・019～021・101・110・115出土遺物……85
第69図　ＳＫ130・134・135～143平・断面図……87
第70図　ＳＫ130・135・136・139～141出土遺物……88
第71図　ＳＫ146・147・165平・断面図…… 90
第72図　ＳＫ144・146・148・154・165・167出土遺物…… 91
第73図　ＳＫ168・170平・断面図…… 92
第74図　ＳＫ168・170出土遺物…… 93
第75図　ＳＫ201・203平・断面図…… 94
第76図　ＳＫ202・212平・断面図…… 95
第77図　ＳＫ212遺物出土状況……95
第78図　ＳＫ201・202・203・212出土遺物…… 96
第79図　ＳＫ304・ＳＸ301平・断面図……97
第80図　ＳＫ302・305・308・309平・断面図… 98
第81図　ＳＫ304・ＳＸ301・ＳＫ305・310出土遺物……99
第82図　ＳＫ405・406平・断面図…… 101
第83図　ＳＫ405出土遺物…… 101
第84図　ＳＫ406出土遺物…… 102

第85図　ＳＫ407平・断面図、出土遺物…… 103
第86図　ＳＫ507・510・512・516・517・543・555出土遺物…… 105
第87図　ＳＫ601・602・605・606・608・612出土遺物…… 106
第88図　ＳＫ615・622・624平・断面図…… 108
第89図　ＳＫ615・622出土遺物…… 108
第90図　ＳＫ618・620出土遺物…… 109
第91図　ＳＫ624出土遺物…… 110
第92図　ＳＫ634・641・643・644・652出土遺物…… 111
第93図　ＳＫ661平・断面図、出土遺物…… 112
第94図　ＳＸ006平・断面図、出土遺物…… 113
第95図　ＳＸ012・014出土遺物…… 114
第96図　ＳＸ121平面図(1)…… 115
第97図　ＳＸ121平面図(2)…… 116
第98図　ＳＸ203平面図…… 117
第99図　ＳＸ203出土遺物…… 118
第100図　ＳＸ300平・断面図、出土遺物…… 119
第101図　ＳＸ018・019・401・402・405・408・411・413～416平面図…… 120
第102図　ＳＸ018・019・405平面図…… 121
第103図　ＳＸ416断面図…… 122
第104図　ＳＸ405・411断面図…… 122
第105図　ＳＸ018・019出土遺物…… 123
第106図　ＳＸ401出土遺物(1)…… 124
第107図　ＳＸ401出土遺物(2)…… 125
第108図　ＳＸ402出土遺物(1)…… 126
第109図　ＳＸ402出土遺物(2)…… 127
第110図　ＳＸ405出土遺物(1)…… 128
第111図　ＳＸ405出土遺物(2)…… 129
第112図　ＳＸ408出土遺物…… 131
第113図　ＳＸ411出土遺物(1)…… 132
第114図　ＳＸ411出土遺物(2)…… 133
第115図　ＳＸ411出土遺物(3)…… 134
第116図　ＳＸ411出土遺物(4)、ＳＸ413出土遺物…… 135
第117図　ＳＸ413・414出土遺物…… 136
第118図　ＳＸ413・414、ＳＸ415出土遺物…… 137
第119図　ＳＸ416出土遺物…… 138
第120図　ＳＸ406・407断面図、出土遺物…… 139
第121図　ＳＸ530平面図、出土遺物…… 140
第122図　ＳＸ642・643平・断面図…… 141
第123図　ＳＸ643遺物出土状況…… 141
第124図　ＳＸ642出土遺物(1)…… 142
第125図　ＳＸ642出土遺物(2)…… 143
第126図　ＳＸ642出土遺物(3)…… 144
第127図　ＳＸ642出土遺物(4)…… 145
第128図　ＳＸ643出土遺物(1)…… 146
第129図　ＳＸ643出土遺物(2)…… 147
第130図　ＳＰ0034平・断面図、出土遺物…… 148
第131図　ＳＰ0200平・断面図、出土遺物…… 148
第132図　Ａ・Ｂ区ﾋﾟｯﾄ出土遺物…… 150
第133図　Ｃ区ﾋﾟｯﾄ出土遺物…… 152
第134図　Ｄ・Ｇ区ﾋﾟｯﾄ出土遺物…… 154
第135図　ＳＰ6011平・断面図、出土遺物…… 156
第136図　Ｈ区ﾋﾟｯﾄ出土遺物…… 156
第137図　遺構外出土遺物(1)…… 158
第138図　遺構外出土遺物(2)…… 159
第139図　遺構外出土遺物(3)…… 160
第140図　遺構外出土遺物(4)…… 161
第141図　ＳＡ301・302・303平・断面図…… 163
第142図　ＳＡ701～704平・断面図…… 164
第143図　ＳＢ503平・断面図…… 165
第144図　ＳＤ003・008平・断面図…… 166
第145図　ＳＤ003・008出土遺物…… 167
第146図　ＳＤ303平・断面図、出土遺物…… 168
第147図　ＳＤ502平・断面図、ＳＸ542平・立面図…… 169・170
第148図　ＳＤ502出土遺物、ＳＸ542出土遺物(1)…… 172
第149図　ＳＸ542出土遺物(2)…… 173
第150図　ＳＸ542出土遺物(3)…… 174
第151図　ＳＤ504平面図、出土遺物(1)…… 175
第152図　ＳＤ504断面図…… 176
第153図　ＳＤ504出土遺物(2)…… 177
第154図　ＳＤ504出土遺物(3)…… 178
第155図　ＳＤ703・704・705平・断面図…… 179
第156図　ＳＤ703・704出土遺物…… 180
第157図　ＳＤ710・711平・断面図…… 181・182
第158図　ＳＤ710・711出土遺物…… 183
第159図　ＳＥ301平・断面図…… 185
第160図　ＳＥ301出土遺物…… 186
第161図　ＳＥ302平・断面図…… 187
第162図　ＳＥ302出土遺物…… 187
第163図　ＳＥ516平・断面図…… 188
第164図　ＳＥ516出土遺物(1)…… 189
第165図　ＳＥ516出土遺物(2)…… 190
第166図　ＳＥ519平・断面図…… 191
第167図　ＳＥ519出土遺物…… 192
第168図　ＳＥ601・704平・断面図…… 193
第169図　ＳＥ601出土遺物…… 194
第170図　ＳＫ007出土遺物…… 194
第171図　ＳＫ104・105・106・112・122平・断面図…… 195
第172図　ＳＫ104・105・112出土遺物…… 196
第173図　ＳＫ108・111・126・127・128平・断面図…… 197
第174図　ＳＫ108・111出土遺物…… 198
第175図　ＳＫ126、ＳＫ127・128出土遺物…… 199
第176図　ＳＫ114・131平・断面図…… 201・202
第177図　ＳＫ114出土遺物(1)…… 203
第178図　ＳＫ114出土遺物(2)…… 204
第179図　ＳＫ114出土遺物(3)…… 205

第180図　ＳＫ114出土遺物(4)…… 206
第181図　ＳＫ114出土遺物(5)…… 207
第182図　ＳＫ131出土遺物…… 208
第183図　ＳＫ124平・断面図…… 209
第184図　ＳＫ124出土遺物…… 210
第185図　ＳＫ132・145・152出土遺物…… 210
第186図　ＳＫ155・157・158平・断面図…… 211
第187図　ＳＫ155・164出土遺物…… 212
第188図　ＳＫ157・158出土遺物…… 213
第189図　ＳＫ303平・断面図…… 214
第190図　ＳＫ306平・断面図…… 214
第191図　ＳＫ303・306出土遺物…… 215
第192図　ＳＫ414平・断面図、
ＳＫ404・414出土遺物…… 216
第193図　ＳＫ501出土遺物…… 217
第194図　ＳＫ505・521平・断面図…… 218
第195図　ＳＫ502～506出土遺物…… 219
第196図　ＳＫ524・525・527・528
平・断面図…… 220
第197図　ＳＫ524・525・530出土遺物…… 221
第198図　ＳＫ576出土遺物…… 222
第199図　ＳＫ604・607出土遺物…… 223
第200図　ＳＫ609・610平・断面図…… 223
第201図　ＳＫ610出土遺物…… 223
第202図　ＳＫ616・623平・断面図…… 224
第203図　ＳＫ614・616出土遺物…… 225
第204図　ＳＫ617・625・631・633
出土遺物…… 226
第205図　ＳＫ632出土遺物…… 227
第206図　ＳＫ671・ＳＸ619平・断面図、
ＳＫ671出土遺物…… 228
第207図　ＳＸ619出土遺物…… 229
第208図　ＳＫ702・703・704平・断面図…… 230
第209図　ＳＫ702・704出土遺物…… 231
第210図　ＳＫ705・709・713～716
平・断面図…… 232
第211図　ＳＫ706・713～715・720
出土遺物…… 233
第212図　SK710・711・723・742・755・762
平・断面図…… 235・236
第213図　ＳＫ710・711出土遺物…… 237
第214図　ＳＫ742出土遺物…… 238
第215図　ＳＫ762出土遺物…… 239
第216図　ＳＫ753・756・764
平・断面図…… 240
第217図　ＳＫ721・723・725～728
平・断面図…… 242
第218図　ＳＫ721・725・727・728
出土遺物…… 243
第219図　ＳＫ729平・断面図、出土遺物…… 244
第220図　ＳＫ732・743・770平・断面図、
ＳＫ770出土遺物…… 244
第221図　ＳＫ769平・断面図、出土遺物…… 245
第222図　ＳＸ001平・断面図…… 247
第223図　ＳＸ001出土遺物(1)…… 248
第224図　ＳＸ001出土遺物(2)…… 249
第225図　ＳＸ003平・断面図…… 249
第226図　ＳＸ003出土遺物(1)…… 250
第227図　ＳＸ003出土遺物(2)…… 251
第228図　ＳＸ531遺物出土状況、出土遺物…… 251
第229図　ＳＰ1055・6027出土遺物、
ＳＰ1081平・断面図、出土遺物…… 252
第230図　ＳＤ707・708・ＳＸ717平面図…… 253
第231図　ＳＸ717平・断面図、
ＳＤ707・708断面図…… 255・256
第232図　ＳＤ707・708出土遺物、
ＳＸ717出土遺物(1)…… 257
第233図　ＳＸ717出土遺物(2)…… 258
第234図　近世遺構外出土遺物(1)…… 259
第235図　近世遺構外出土遺物(2)…… 260
第236図　ＳＫ106出土遺物…… 262
第237図　土錘(1)…… 265
第238図　土錘(2)…… 266
第239図　中世瓦(1)…… 269
第240図　中世瓦(2)…… 270
第241図　中世瓦分布図…… 270
第242図　近世瓦(1)…… 273
第243図　近世瓦(2)…… 275
第244図　近世瓦(3)…… 276
第245図　近世瓦(4)…… 277
第246図　浜ノ町遺跡ＳＤ013の
主要花粉化石分布図…… 289
第247図　浜ノ町遺跡ＳＸ717の
主要花粉化石分布図…… 290
第248図　浜ノ町遺跡における
珪藻化石分布図…… 293
第249図　ＳＰ2001出土遺物…… 304
第250図　空港跡地遺跡ＳＫｃ74出土遺物…… 307
第251図　14～15世紀の土師質土器杯編年図…… 308
第252図　砥石分類図…… 309
第253図　漆による接合が認められる砥石…… 310
第254図　高松平野中世遺跡における
砥石出土比率図…… 311
第255図　土錘の生産地・消費地関係概念図…… 314
第256図　浜ノ町遺跡、高松城跡井戸変遷図…… 316
第257図　高松平野井戸変遷図…… 317
第258図　火輪分類図…… 320
第259図　地輪分類図…… 321
第260図　石造物変遷図…… 323
第261図　石造物石材産地とＡ類層塔の分布…… 325
第262図　中世遺構変遷図…… 327
第263図　伊勢町遺跡位置図…… 330
第264図　伊勢町遺跡出土遺物実測図…… 331
第265図　近世主要遺構変遷図…… 332

表目次

第１表　発掘調査工程表…… 1
第２表　高松平野中世遺跡消長表…… 9
第３表　調査区別中世瓦出土比率表…… 270
第４表　中世瓦文様パターン
　　・接合時調整手法相関表…… 271
第５表　浜ノ町遺跡における樹種同定結果…… 282
第６表　産出花粉化石一覧表…… 288
第７表　珪藻化石産出表…… 296
第８表　資料明細…… 298
第９表　化学成分分析値…… 300
第10表　化学組成まとめ…… 300
第11表　杯型式組成表…… 306
第12表　土錘孔径・溝幅―重量相関グラフ…… 314
第13表　高松平野中世遺跡出土土器組成表　…… 328

写真目次

Ａ区調査前風景　東から…… 335
Ａ区 0.6 m全景　東から…… 335
ＳＤ 003・008 検出状況　北東から…… 335
ＳＸ 405A 区部分検出状況　南東から…… 335
Ａ区区画部完掘状況　北から…… 335
ＳＸ 001 検出状況　南東から…… 336
ＳＸ 004 検出状況　南東から…… 336
ＳＤ 009 下層ＳＸ 022 遺物出土状況　東から…… 336
ＳＤ 009 下層ＳＸ 022 遺物出土状況　北東から…… 336
ＳＸ 022 調査風景…… 336
ＳＫ 114 石列検出状況　南から…… 336
ＳＫ 135 配石？検出状況　南から…… 336
ＳＤ 009 Ｂ区部分完掘状況　南から…… 336
Ｂ区 0.9m 全景　東から…… 337
Ｂ区 0.7m 全景　南西から…… 337
ＳＫ 165 検出状況　南西から…… 338
ＳＫ 165 調査風景　北東から…… 338
ＳＥ 101 調査風景　南西から…… 338
ＳＥ 101 井戸枠検出状況　北から…… 338
ＳＥ 101 井戸枠検出状況　南から…… 338
ＳＥ 102 井戸枠検出状況　東から…… 339
Ｂ・Ｃ区全景　北東から…… 339
ＳＢ 201 完掘状況　東から…… 340
ＳＫ 212 遺物出土状況　東から…… 340
ＳＰ 2068 遺物出土状況　東から…… 340
ＳＡ 001 ｅ－ｅ′土層断面図　北西から…… 340
Ｄ区全景　北から…… 340
ＳＥ 303 井戸枠検出状況　北から…… 341
ＳＥ 303 井戸枠断面見通し　南から…… 341
ＳＥ 304 井戸枠検出状況　南から…… 342
ＳＥ 304 遺物出土状況　南から…… 342
ＳＤ 013・014 Ｄ区部分完掘状況　南から…… 343
ＳＤ 013 Ｄ区部分完掘状況　南から…… 343
ＳＤ 014 Ｄ区部分完掘状況　南西から…… 343
ＳＤ 008 Ｅ区部分完掘状況　南東から…… 343
ＳＫ 414 完掘状況　南から…… 343
Ｅ区全景（上位）　北東から…… 344
Ｅ区全景（下位）　北東から…… 344
ＳＥ 403 井戸枠（下部）検出状況　南から…… 345
ＳＥ 403 遺物出土状況　南から…… 345
ＳＸ 401 検出状況　南西から…… 346
ＳＸ 405 Ｅ区部分検出状況　南西から…… 346
ＳＸ 416 完掘状況　北西から…… 346
ＳＫ 407 遺物出土状況　北から…… 346
ＳＸ 407 遺物出土状況　南から…… 346
ＳＤ 502・504 完掘状況　南から…… 347
ＳＸ 542 崩落石検出状況　西から…… 347
ＳＸ 542 調査風景…… 347
ＳＸ 542 断面　南から…… 347
ＳＸ 542 検出状況　南西から…… 347
ＳＸ 542 検出状況　西から…… 348
ＳＥ 512 井戸枠検出状況　北から…… 348
ＳＥ 514 井戸枠検出状況　西から…… 349
ＳＥ 516 井戸枠検出状況　南西から…… 349
ＳＥ 519 井戸枠断面見通し　東から…… 349
ＳＥ 520 井戸枠断面見通し　南から…… 349
ＳＥ 520 呪符木簡出土状況　南東から…… 349
ＳＥ 521 井戸枠断面見通し　南から…… 350
ＳＫ 521 底板検出状況　南から…… 350
ＳＸ 530・531 遺物出土状況　南から…… 350
ＳＸ 531 遺物出土状況　南東から…… 350
ＳＸ 531 土錘出土状況　南東から…… 350
Ｈ区全景　西から…… 351
ＳＥ 601・602 井戸枠検出状況　南西から…… 351
ＳＸ 642 集石検出状況　南東から…… 352
ＳＥ 602 井戸枠上部検出状況　東から…… 352
ＳＥ 602 井戸枠（下部）検出　南西から…… 353
ＳＢ 603・ＳＡ 001 柱材検出状況　南から…… 353
ＳＰ 6011・ＳＫ 661 遺物出土状況　南東から…… 353
ＳＫ 661 遺物出土状況　南東から…… 353
周辺風景（2002 年１月）　西から…… 353
Ｉ区全景　東から…… 354
ＳＫ 742 石積み検出状況　北から…… 354
ＳＸ 717 遺物出土状況　西から…… 355
ＳＸ 717 西端部遺物出土状況　南東から…… 355
ＳＸ 717 遺物出土状況　南東から…… 356
ＳＸ 717 遺物出土状況　北から…… 356
ＳＤ 708 集石検出状況　北東から…… 356
ＳＡ 701 検出状況　南東から…… 356
ＳＡ 702 検出状況　北西から…… 356
ＳＡ 703 検出状況　西から…… 356
発掘調査参加者…… 356
発掘調査参加者…… 356
出土遺物…… 357 ～ 366

第１章　発掘調査および整理作業の経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯と経過

1. 発掘調査に至る経緯と経過

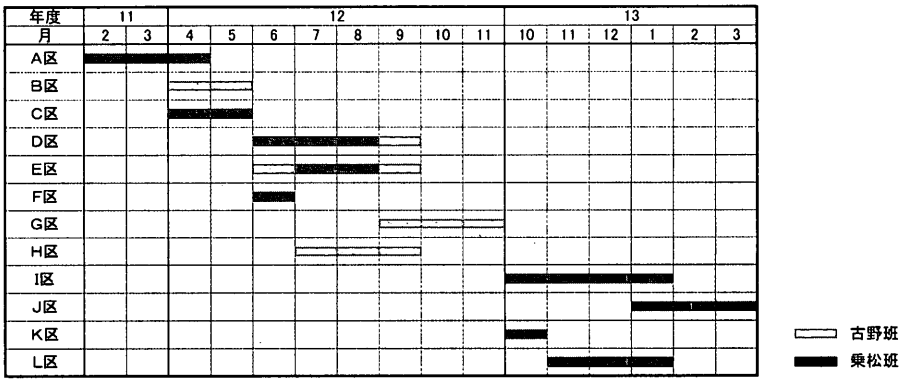
サンポート高松総合整備事業（平成 10 年度までは高松港頭地区総合整備事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査は、西打（にしうち）遺跡（高松市香西南町・鬼無町）、高松城跡（西の丸町地区）（高松市西の丸町・浜ノ町）、浜ノ町遺跡（高松市浜ノ町・錦町）の３遺跡について行われた。その諸経緯については木下 2001、古野 2001、佐藤編 2003 に詳しいのでここでは省略し、浜ノ町遺跡に関わる部分についてのみ補足することとする。

高松市浜ノ町・錦町の区画整理部にあたる浜ノ町遺跡は平成 11 ～ 13 年度に発掘調査が行われた。

平成 11 年度は、それまで高松城跡（西の丸町地区）の発掘調査を行っていた１班が、２～３月にかけて浜ノ町遺跡 357㎡ の発掘調査に携わった（古野・乗松編 2000）。

平成 12 年度は、調査を予定していた仮駅の駐輪場周辺部が次年度送りになったため、２班でそれぞれ、４～ 11 月、４～８月の延べ 13 ヶ月（調査面積 3,035㎡）実施した。（乗松編 2001）。

平成 13 年度は前年度着手できなかった駐輪場周辺部 1,600㎡ の発掘調査を 10 ～３月まで行った（乗松 2002）。平成 13 年度末で総面積 4,992㎡ の浜ノ町遺跡の発掘調査は終了し、これに伴いサンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査も完了した。



第１表　発掘調査工程表

2. 発掘調査の体制

平成 11 年度

香川県教育委員会文化行政課

総　括　課　長　小原克己

課長補佐　小国史郎

副主幹　廣瀬常雄

総　務　係長　中村禎伸

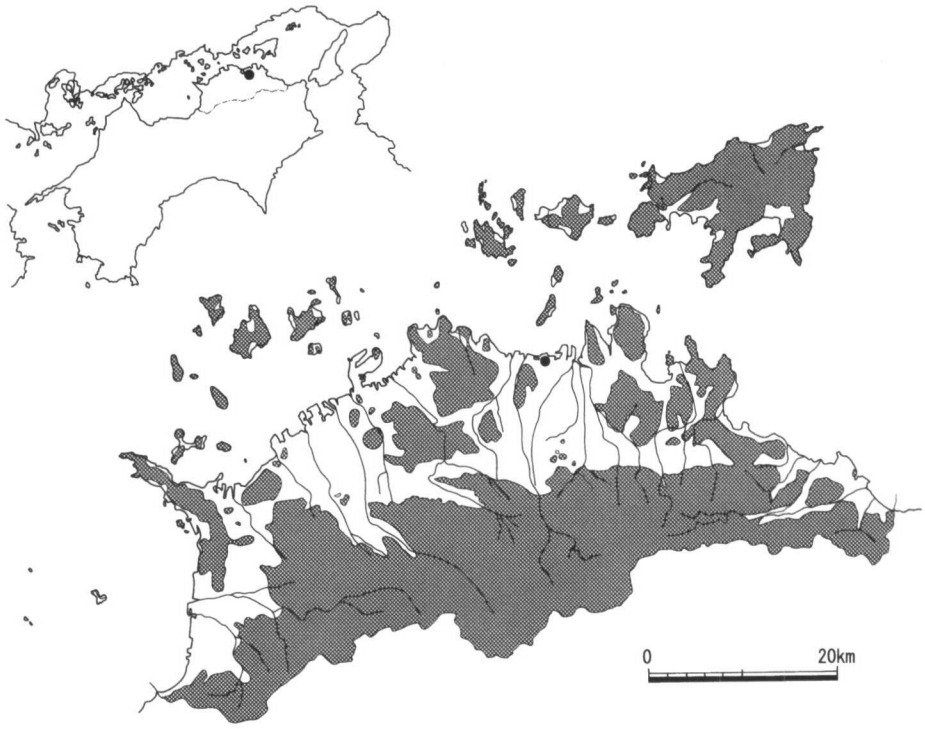
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　括　所長　菅原良弘

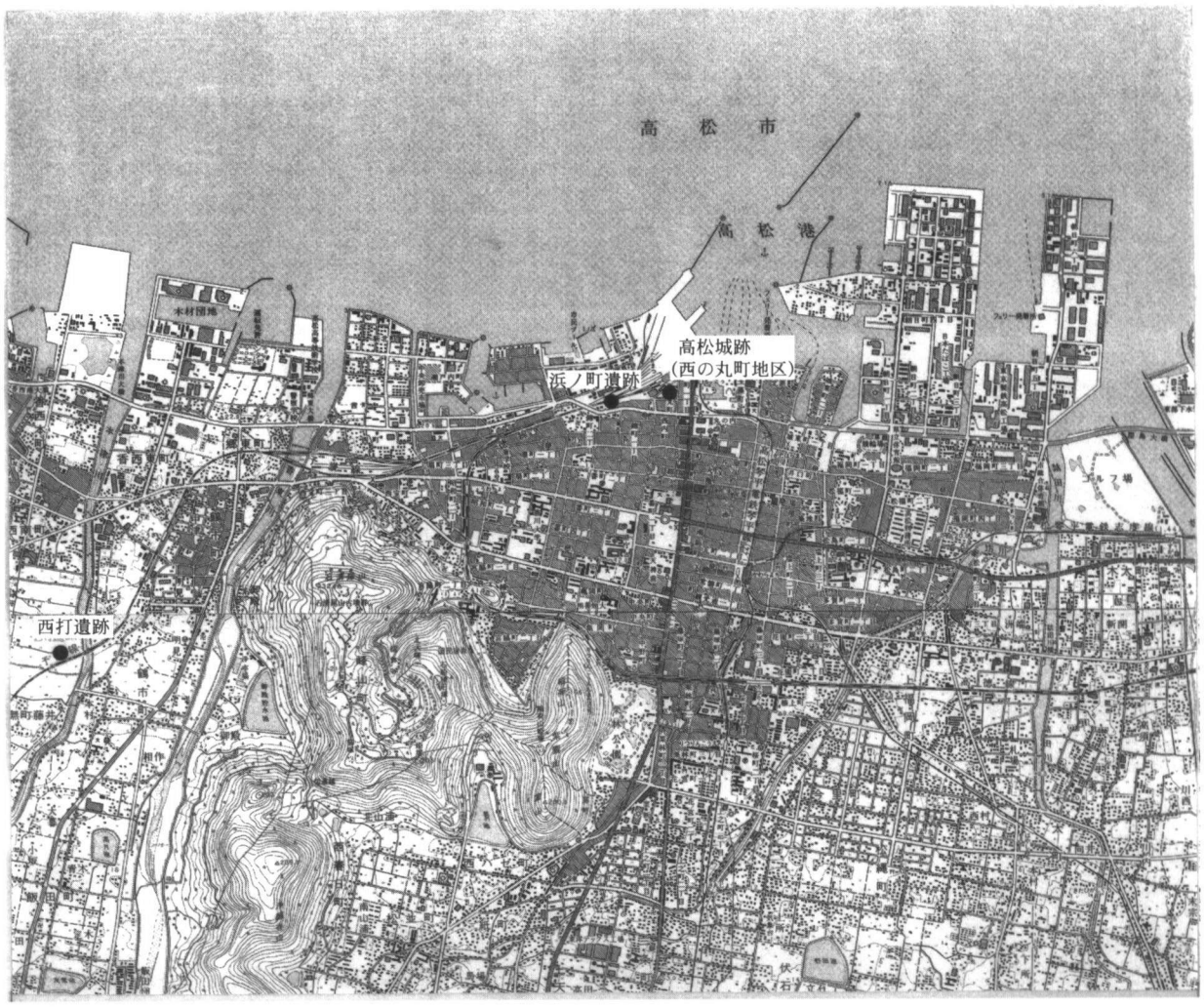
次長　川原裕章

総　務　副主幹兼係長　六車正憲・田中秀文

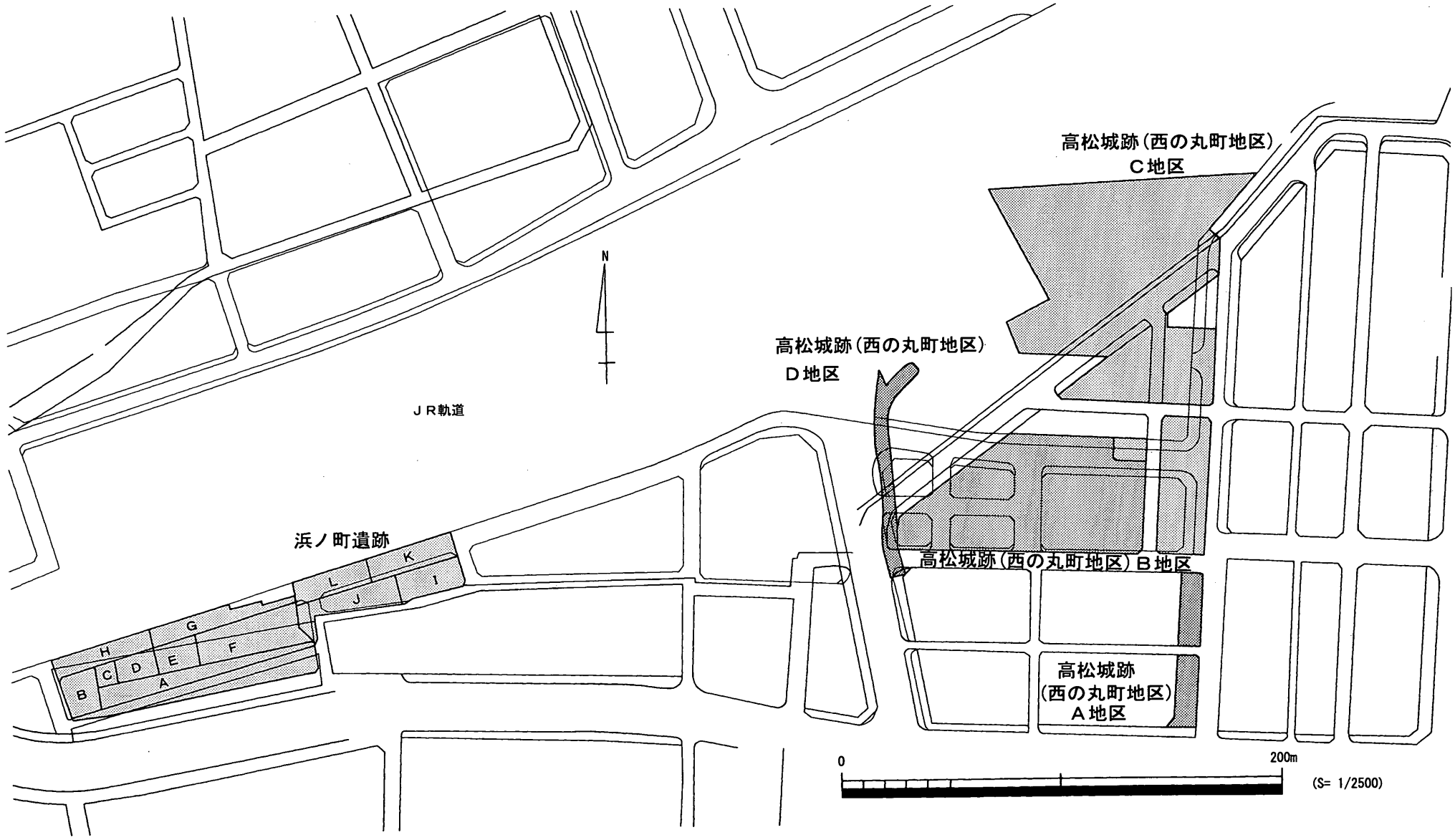
主任主事　細川信哉



第１図　遺跡位置図



第２図　サンポート高松総合整備事業関連遺跡位置図（S＝1/50,000）



第３図　浜ノ町遺跡・高松城跡（西の丸町地区）調査地位置図

主査　三宅陽子・松村崇史

埋蔵文化財　係長　西村尋文
文化財専門員　森格也
主任技師　塩崎誠司

調　査　参事　長尾重盛
主任文化財専門員　藤好史郎
文化財専門員　岡本利
技師　乗松真也
調査技術員　陶山仁美

平成 12 年度

香川県教育委員会文化行政課

総　括　課長　小原克己
課長補佐　小国史郎
副主幹　廣瀬常雄

総　務　係長　中村禎伸
主査　三宅陽子
主事　亀田幸一

埋蔵文化財　係長　西岡達哉
文化財専門員　森格也・宮崎哲治

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　括　所長　菅原良弘（～ 10. 31）
小原克己（11. 1 ～　兼務）
次長　川原裕章

総　務　副主幹　大西誠治
副主幹兼係長　六車正憲
主任主事　高木康晴

調　査　参事　長尾重盛
主任文化財専門員　藤好史郎
文化財専門員　黒川和仁・古野徳久・川原和生
主任技師　小林明弘
技師　乗松真也
調査技術員　糸山晋

平成 13 年度

香川県教育委員会文化行政課

総括・総務　課長　北原和利

総務・芸術文化グループ　課長補佐　小国史郎
副主幹　中村禎伸
主事　亀田幸一

文化財グループ　副主幹　大山真充
係長　西岡達哉
文化財専門員　森格也・古野徳久

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　括　所長　小原克己
次長　川原裕章

総　務　副主幹　大西誠治
係長　多田敏弘
主任主事　高木康晴

調　査　参事　梅木正信・河野浩征
主任文化財専門員　廣瀬常雄・藤好史郎・真鍋昌宏
文化財専門員　黒川和仁
主任技師　乗松真也
調査技術員　中山尚子

現場整理作業員

松本恭子（平成 11 年度）・飯間高子（平成 12 年度）・漆原陽子（平成 12 年度）・小笠原千恵子（平成 12・13 年度）

3. 発掘調査日誌抄

平成12(2000)年2月16日　A区調査開始(乗松班)。0.95mで面を揃える。

2月23日　A区東1/3部分は撹乱によって遺構が残存していないことが判明。

2月28日　0.7m付近のレベルまで重機で掘り下げ(後にこのレベルが本来の遺構面であることが判明する)。

2月29日　精査を行うも明瞭な遺構は確認できないことから、人力で0.6mまで掘り下げ。

3月9日　白磁四耳壺埋納遺構断ち割り後、写真撮影、図面作成。調査区東部分は0.45mまで掘り下げ。

3月10日　白磁四耳壺取り上げ。

3月14日　A区航空測量。

3月15日　0.45mまで掘り下げ。A区東部分は0.3mまで掘り下げ。

3月23日　五輪塔の火輪が並ぶ異様な遺構SX004検出。

3月29日　平成11年度の発掘調査終了。

4月4日　0.3mまで掘り下げ。SX022杯集中遺構検出。

4月5日　B区調査開始(古野班)。

4月19日　A区北壁土層断面注記、遺構と遺構面の関係を整理。A区では遺構面を確実に把握できないまま調査を進めていたため、本来の遺構面よりかなり低いレベルで遺構を検出していたことが判明。

4月20日　A区調査終了。

4月27日　C区調査開始(乗松班)。

5月2日　B・C区高所作業車による写真撮影。

5月24日　C区調査終了。

5月29日　B区調査終了。

6月6日　F区トレンチ掘り下げ。撹乱の範囲を確定。

6月7日　D区調査開始(乗松班)。

6月14日　E区調査開始(古野班)。

7月3日　D・E区航空測量。H区調査開始(古野班)。

7月4日　香川大学学生2名、レポート作成のため来訪。E区の調査担当を古野班から乗松班へ変更。

7月11日　高松市立下笠居中学校職場体験学習。

8月9日　山陽新聞記者来訪。遺跡の概要について取材。

8月18日　H区航空測量。

8月23日　高松市立古高松中学校職場体験学習。

8月31日　乗松班が9月1日から他遺跡の調査を行うため、D・E区の調査を古野班に引き継ぐ。

9月6日　D・E区調査終了。G区調査開始(古野班)。

9月7日　H区調査終了。

9月14日　香川大学教育学部附属中学校職場体験学習。

10月6日　午後、地震(震度5)あり。現場には特に被害なし。

10月18日　G区西半部分航空測量。

10月25日　SD502東岸石積みSX542検出。A区SX004は石垣状護岸の基礎部分であったことが判明。

11月1日　大雨。調査途中の井戸崩壊。

11月15日　G区調査終了。平成12年度の発掘調査終了。

平成13(2001)年10月10日　I区調査開始(乗松班)。文化ボランティア来訪、調査風景撮影。

11月28日　L区調査開始(乗松班)。

12月20日　I区下層確認トレンチを掘り下げたところ、完形に近い肥前系陶器数点出土。調査工程を変更し、I区の調査を続行。

平成14(2002)年1月15日　J区調査開始(乗松班)。

1月16日　L区調査終了。

1月17日　I区SX717で輪状植物製品出土。

1月18日　文化ボランティア来訪。輪状植物製品調査風景ビデオ撮影。

1月22日　引田町歴史民俗資料館館長徳山久夫氏来訪。輪状植物製品について御教示頂く。

1月25日　高所作業車による写真撮影。山陽新聞記者来訪、輪状植物製品について取材。

1月29日　I区調査終了。

3月31日　J区調査終了。

第２節　整理作業の経過

1. 整理作業の経過

整理作業は平成14年４月から15年３月の12ヶ月の期間で行った。遺物の洗浄については現場で行っていたため、遺物の注記・接合・図下・写真撮影作業と、遺構の図面・写真の整理・浄書作業を行い、報告書としてまとめる作業を実施した。

出土遺物量は28リットル入りコンテナ約380箱で、おおよそ中世：近世＝３：２の割合であった。整理作業期間が限られていたことから、遺構出土遺物の図化を最優先とし、遺構外出土遺物については特徴的なもののみ図化することとした。また、同一遺構から出土している同一型式と認定できるものについては、基本的に１点のみを図化することとした。よって、出土遺物実測図から受ける印象と実際の遺物の組成には隔たりがあることを断っておく。

2. 整理作業の体制

平成14年度

香川県教育委員会文化行政課

総　括	課長　北原和利	
総務・課長補佐	渡邊勇人	
芸術文化 主任	香川浩章	
グループ	主事　亀田幸一	
文化財	副主幹　大山真充	
グループ	文化財専門員	片桐孝浩・古野徳久・佐藤竜馬

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　括	所長　小原克己	
	次長　渡部明夫	
総　務	副主幹　野保昌弘	
	係長　多田敏弘	
調　査	主任文化財専門員	藤好史郎・真鍋昌宏
	主任技師　乗松真也	

整理作業員

岡崎江伊子・矢野ゆかり・佐々木博子・森光恵・白川智子・香川洋子・上原慶子・土屋実加

第２章　地理・歴史的環境

第１節　地理的環境

現在の高松市街地とその周辺は、高橋学氏によって旧香東川の作用を受けた三角州帯に分類されている（高橋 1996）。香東川は、寛永期に現在の石清尾山西麓の流路に固定されるまで、石清尾山の東側の高松平野中央部を流れていた。中世～近世初頭までは、石清尾山麓から西浜に到る流路群（現擂鉢谷川に並行）と、石清尾山南麓から現上福岡町に到る流路群（現御坊川に並行）を旧香東川の主な流路とし、それらに挟まれた地域が現在の高松市街地である。そしてこの地域は、微高地状を呈する比較的安定した土地であった可能性が指摘されている（佐藤編 2003）。

浜ノ町遺跡は、現高松市街地海浜部の砂堆上に位置している。この砂堆（砂堆Ａ）は、現在の地割から南西－北東方向であったことが推測される。浜ノ町遺跡の遺構面を形成する基盤層中からは弥生時代後期～平安時代の遺物が出土し、基盤層上面の包含層中には 13 世紀代の遺物が認められることから、砂堆Ａは古代までの堆積によって形成され、古代末～中世前半に安定したと考えられる。浜ノ町遺跡の南約 200 ｍには扇町一丁目遺跡（13 世紀末～ 15 世紀前葉）が存在する。扇町一丁目遺跡周辺（現扇町付近）には砂堆Ａよりもやや東に振る方向の地割が認められ、砂堆Ａとは別の砂堆（砂堆Ｂ）の存在が推測される。砂堆Ｂの形成時期は、砂堆Ａよりも遡ると考えられるが、出土遺物などでは確認できない。砂堆Ａ・Ｂ間は標高がやや低く、後背湿地状を呈していたようである。地元住民の間でも、この部分一帯の水はけが悪いことはよく知られている。

第２節　歴史的環境

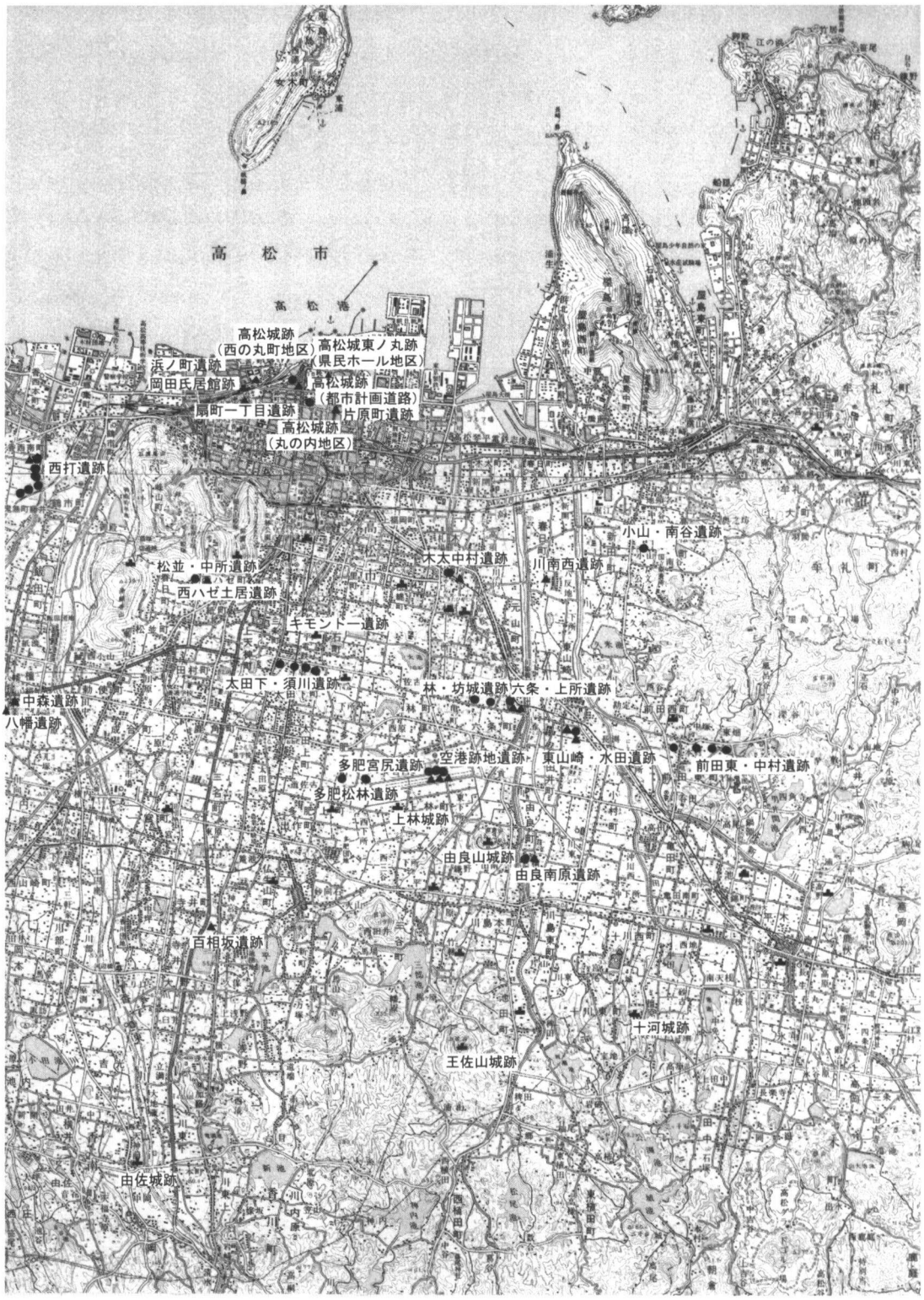
1. 野原郷の中世遺跡

現在の高松市街地とその周辺部は、野原郷と呼ばれ、一部は 1086 年に野原庄が立庄されている。また、『兵庫北関入舩納帳』には船籍地として「野原」の名がみられることから、郷内に港があったことが窺える。近年高松市街地の発掘調査が進み、断片的ながら中世におけるこの地域の実態が明らかになりつつある。

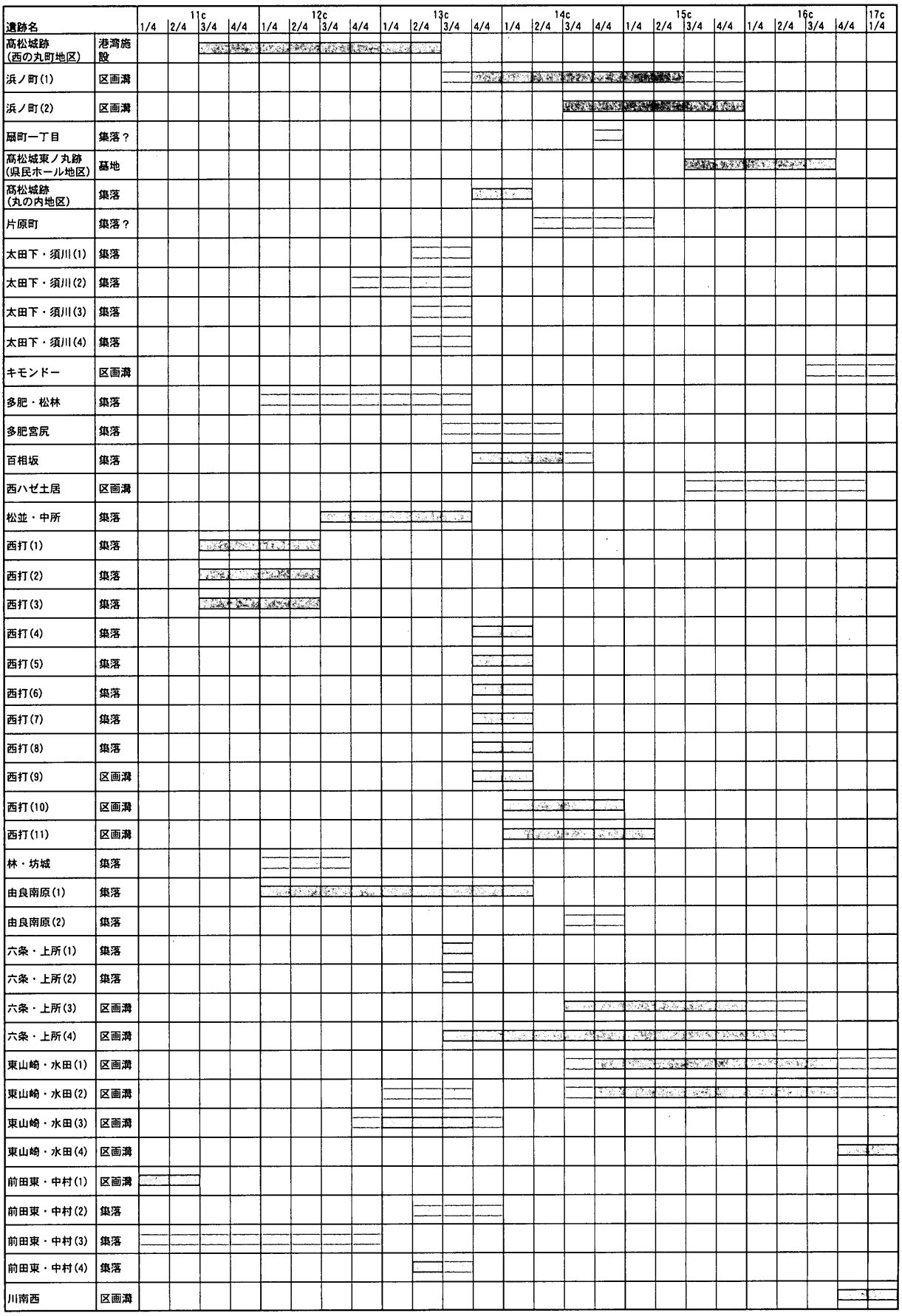
調査地が含まれる西浜では、遺跡の立地や搬入品の多さなどから港湾施設と考えられる 11 世紀後半～ 13 世紀前半の礫敷遺構が検出されている（佐藤編 2003）。また、浜ノ町遺跡の南の砂堆上に立地する扇町一丁目遺跡では、14 世紀前葉～ 15 世紀末の遺構・遺物が確認されている。浜ノ町遺跡の北西に位置する蓮華寺と南西にある若一王子神社は、野原郷地頭岡田氏の居館跡とされている。蓮華寺は 1444 年（文安元年）空山が開創し、1471 年（文明３年）岡田氏が保護、若一王子神社は 1275（健治元年）岡田丹後守宗重が紀州熊野の若一王子権現を勧請して創建したとされている。1412 年（応永 19 年）書写の京都北野社一切経奥書には野原西浜極楽寺の名がみえ、所在地は特定できないものの、調査地周辺に極楽寺という寺院があったとされる。都市計画道路高松駅南線建設に伴う高松城跡の調査では、16 世紀の遺構から「野原浜村無量寿院」の線刻がある丸瓦が出土しており（註）、高松城築城に伴い西浜に移転した無量寿院が、それまで八輪島（現高松城

本丸付近）にあったと伝えられていることと符号する。

一方、現高松城本丸の南部分では、高松城跡（丸の内地区）で13世紀末～14世紀前葉の井戸2基が検出されており（松本2003）、付近一帯が居住域であったことがわかる。中世遺構面直下の包含層からは土師器甕や飯蛸壺などの古代の遺物も一定量出土し、西浜地域とは異なり、この段階ですでに安定した土地条件を備えていたものと考えられる。片原町遺跡では14世紀後半～15世紀初頭の遺構が検出され、同時期には高松城東の丸跡（県民ホール地区）でも遺物が確認されている。



第４図　高松平野中世遺跡分布図（S＝1/50,000）



第２表　高松平野中世遺跡消長表

16 世紀末、生駒親正が新たに城を築くにあたって野原の地を選んだ理由については、讃岐の中心であるという地理的な長所のみが伝えられている。ところが、発掘調査により判明しつつある中世野原の状況は、地形的な要因や前代までに形成された経済的基盤なども新城建設の背景として考慮する必要があることを示している。

2. 近世の絵図からみた調査地の変遷

高松城の築城は 1588 年（天正 16 年）生駒親正によって開始され、現在の高松市街地域に相当する城下の整備も同時期に始められたと考えられる。ここでは、高松城西側外堀の西に位置する調査地部分が、城下として整備され変遷する過程を現存する絵図から追うこととする。

『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（推定製作年代 1648 ～ 49 年）では調査地東端のＩ・Ｋ区部分にのみかろうじて「船頭」と記された屋敷地が表現され、それ以西のＡ～Ｈ・Ｊ・Ｌ区には何も描かれていない。これはＩ・Ｋ区部分のみが「城下」として扱われていたことを示している。Ｉ・Ｋ区部分と同じブロック内の屋敷地には、西嶋八兵衛関連の「西嶋下屋敷」「使者屋敷」を除いて、「舟奉行　因野平兵衛」「蔵舟奉行」「船頭」の記述がみえ、このブロックは、すぐ東に隣接する外堀にあった「西浜舟入」に関連する役職についていた人物と、そこでの作業に従事する人物の居住地であったことが窺える。

『高松城下図屏風』（推定製年代 1650 年代前半）によれば、調査地東部のＩ～Ｌ区部分は整然とした区画を持った屋敷地であるのに対して、西部のＡ～Ｈ区部分は海岸線に沿って小さな建物が密集している前時代的な景観であり、調査地西部が「城下」としては未整備であったことが明白である。なお、調査地の北側には真行寺と推定されている寺院の表現がみられる（森下 1996）。

『高松城下図』（推定製作年代 1716 ～ 36 年）の段階に至ってようやく調査地西部にも区画された屋敷地と個人名の記載がみられる。一方、Ｉ～Ｌ区部分は「御船蔵」となっており屋敷地の表現は認められない。これらは、西側外堀にあった船蔵（西浜船入）を、調査地の北側に移転・整備する際（1676 年以降）、周辺地域を大規模に区画整理した結果であろう。

『元文５申年６月讃岐国高松地図』（推定製作年代 1740 年）では、調査地周辺は「畑」「畠」と表現されており、屋敷地としては利用されていない。『小神野夜話』には、享保年間に御家人が減少したため侍屋敷が移転・縮小したことが記されており（森下 1996）、船蔵の南に位置する調査地付近についても「・・・御船蔵南手、今御用地に成居申候所、是も侍屋敷にて御座候、・・・」「・・・御舟蔵御門前迄、加子長屋御座候、皆々引け御用地と成候、・・・」とあり、屋敷地が移転したことがわかる。また、『小神野夜話』には 1720 年（享保５年）頃から波風が強くなり、浜ノ町遺跡の北西に位置する蓮華寺の東側の侍屋敷が移転したことも記されているが、調査地部分に屋敷地が存在しないことも波風の影響と無縁ではなかったと考えられる。

その後、幕末までに製作されたとされている絵図数点においても、調査地部分は「畑」「畠」「御用地」とされているか、もしくは何も記されていないかのいずれかであり、18 世紀中葉以降は屋敷地として利用されていない。

註　2003 年３月 25 日の四国新聞記事を参照した。

第３章　発掘調査の記録

第１節　発掘調査の方法

1. 発掘調査の方法

発掘調査は、便宜上Ａ～Ｌ区の 12 調査区に分割して調査を行った。そのうち、Ｆ・Ｋ区およびＡ区の東 1/3 部分に関しては、予備調査の結果撹乱により遺構が破壊されていたため、全面調査には至っていない。

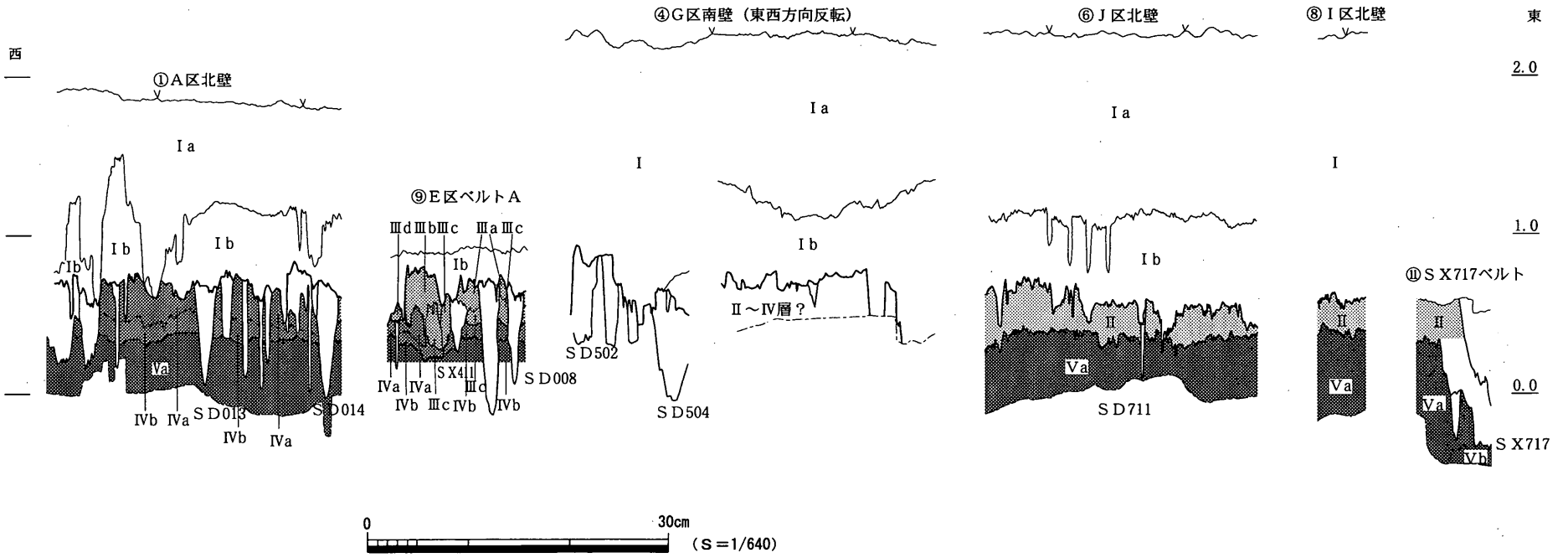
調査区全体の図化は、Ａ・Ｄ・Ｅ・Ｇ・Ｈ区については業者に委託して航空測量を行い、1/50 の縮尺で製図した。また、航空測量とは別に調査区全体の図下を 1/40・1/50 の縮尺で行った。主要な遺構については、1/20・1/10 の縮尺で適宜実測を行った。

2. 遺構外出土遺物取り上げの記録

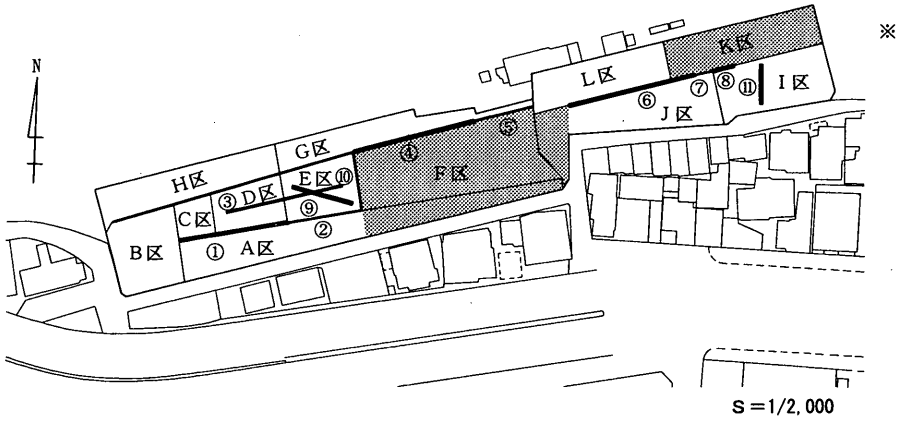
遺構外から出土する遺物から歴史的意義を引き出すためには、出土位置（平面座標・標高・層位）を記録する必要があるのは当然であるが、緊急調査の場合、１点ごとの取り上げが調査工程上困難であるがために、やむを得ずグリッドでの取り上げを行っている。当センターはこれまで、20ｍ四方のグリッドでの遺物取り上げを基本としていたが、大規模な面積の発掘調査が減少したこともあり、20ｍ四方では取り上げの精度が低すぎるという問題が表面化している。特にサンポート高松総合整備事業関連などの市街地での調査では、周辺環境によって一度に調査できる面積はごく限られたものとなっている。実際、平成 11・12 年度は、高松城跡（西の丸町地区）と連続する 20ｍメッシュを用いて遺物を取り上げることにしていたが、１つの調査区の面積が狭く（平均 416㎡）現実的ではないため、任意での取り上げとなった。

また、発掘調査の簡便さを意図して、建設道路予定地（＝調査地）のセンター杭を基準とするグリッドや、条里型地割の方向に沿ったグリッド設定を行うこともある。しかし、近年、調査地が市町と隣接する（結果として、も含めて）事例が増加している。この場合前述のような、限られたある一時期の調査の簡便さを目的としたグリッド設定では、周辺調査との統一グリッドを設定することは困難で、同一の基準での遺物の取り上げは行われず、結果として、調査地ごと（調査組織ごと）の成果が統一できないということが生じる可能性が非常に高い。そのため、国土座標等を基準にグリッドを設定し、同一基準で遺物の取り上げを行うことが必要であろう。

これらの状況と、調査工程への影響を考慮して、平成 13 年度については国土座標第Ⅳ系を基準とする４ｍメッシュのグリッド単位で遺物の取り上げを行った。しかし、平成 13 年度に行った４ｍ四方のグリッドで取り上げた遺物を報告書作成の段階では十分生かすことはできなかった。平成 13 年度調査分のみではほとんど成果が得られないと判断したからであるが、平成 11・12 年度調査で細かく、統一基準で遺物の取り上げを行っていれば、中世の時期別の居住域の推定や、近世の土地利用の変遷に関して、更に詳細な分析ができたはずである。遺構外出土遺物に対する認識の甘さが悔やまれる。

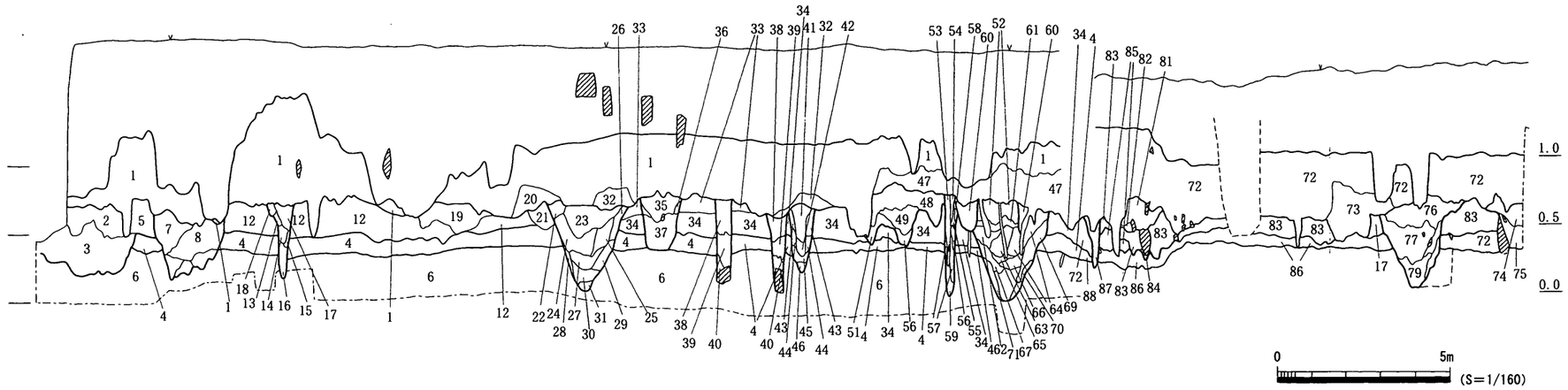


I　近代以降の整地層
II　近世初頭整地層
III　中世後半整地層
IV　中世前半堆積層
V　古代以前の堆積層



※トーンは撹乱部分

第５図　調査区割図、土層断面位置図、土層断面略図



1. 5Y3/1 オリーブ黒色細砂質土　0.5～3.0cm大の小礫多く含む(均一)　Ⅰb層
2. 5Y4/2 灰オリーブ色極細砂　しまり弱い　SX203
3. 5YR4/2 灰褐色砂質土　Fe多量に含む 炭化物若干含む　SK203
4. N4/(Y) 灰色細砂弱粘質土　Ⅳb層
5. 2.5Y7/4 浅黄色細砂質土　しまり強い　SX203
6. 5Y5/2 灰オリーブ色細砂
7. 7.5Y4/1 灰色細砂質土　5Y6/6 オリーブ色　10YR6/8 明黄褐色粘土ブロックを多く含む　遺構
8. 5Y4/1 灰色細砂質土　基本的には混入物は7層と同じ　ただし炭化物が多い　遺構
9. 7.5Y4/1 灰色細砂質土　基本的には混入物は7層と同じ　ただし炭化物が多い　遺構
10. 5Y5/3 灰オリーブ色細砂質土　5Y5/6 オリーブ色細砂ブロック含む　遺構
11. 7.5Y5/2 灰オリーブ色細砂質土　炭化物多量に含む　遺構
12. 5Y6/4 オリーブ黄色細砂質土　5Y5/6 オリーブ色粘土ブロックを多量に含む　Ⅳa層
13. 5Y6/4 オリーブ黄色細砂質土　炭化物を含む　SP
14. 7.5Y4/1 灰色細砂質土　5Y5/3 灰オリーブ色粘土ブロック含む　炭化物含む　SP
15. 5Y6/1 灰色細砂　SP
16. 10Y4/1 灰色細砂質土　5Y5/2 灰オリーブ色細砂ブロック　炭化物を多く含む　SP
17. 5Y4/1 灰色細砂質土　炭化物含む　SP
18. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂　SP
19. 2.5Y3/2 黒褐色砂　しまりかなり強い　Ⅳa層
20. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂　Ⅰb層
21. 10Y7/2 灰白色砂　Ⅳa層
22. 7.5Y4/1 灰色細砂質土　SD013
23. 5Y5/1 灰色細砂質土　SD013
24. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂質土　5Y6/4 オリーブ黄色細砂質土ブロック含む　SD013
25. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂質土　5Y6/4 オリーブ黄色細砂質土ブロック含む　ただしN3/(Y)　暗灰色砂ブロックを含むため黒っぽく見える　SD013
26. 5Y4/1 灰色細砂質土　混入物は25層とほぼ同じ　ただしさらにN3/(Y)　暗灰色砂ブロックを含む割合が大きい　SD013
27. 7.5Y5/1 灰色細砂　SD013
28. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂質土　5Y5/2 灰オリーブ色細砂+Fe　SD013
29. 7.5Y5/2 灰オリーブ色弱粘質土　SD013
30. N3/(Y) 暗灰色粘土　SD013
31. 2.5Y5/1 黄灰色細砂　SD013
32. 10Y6/1 灰色細砂　Ⅰb層
33. 5Y6/3 オリーブ黄色細砂　Ⅳa層
34. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土　しまりかなり強い　Fe含む　10YR5/6 黄褐色ブロック多量に含む　12層と基本的には同じ　Ⅳa層
35. 2.5Y4/1 黄灰色細砂　遺構
36. 5Y6/2 灰オリーブ色細砂　遺構
37. 2.5Y4/1 黄灰色細砂質土　10YR6/8 明黄褐色粘土ブロック含む　遺構
38. 5Y6/3 オリーブ黄色細砂質土　33層との区別はかなり微妙　SP
39. 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂質土　SP
40. 2.5Y5/1 黄灰色細砂弱粘質土　SP
41. 5Y5/1 灰色砂質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土ブロック多く含む　SP
42. N5/(Y) 灰色細砂弱粘質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土ブロック少量含む　SP
43. 2.5Y6/2 灰黄色細砂質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土ブロック多く含む　SP
44. 2.5Y5/1 黄灰色細砂弱粘質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土ブロック含む　Fe含む　SP
45. 5Y5/3 灰オリーブ色細砂質土　5Y5/2 灰オリーブ色細砂ブロック含む　SP
46. N2/(Y) 黒色弱粘質土　SP
47. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土　混入物等1層に似ている。1層より多少赤みが強い　Ⅰb層
48. 2.5Y3/2 黒褐色細砂質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土ブロック含む　遺構
49. 7.5Y5/1 灰色細砂質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土ブロック　暗灰色砂ブロック多く含む　遺構
50. 2.5Y5/4 黄褐色細砂質土　暗灰色砂ブロックを少量含む　遺構
51. 5Y6/2 灰オリーブ色細砂質土　暗灰色砂ブロック、2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土ブロックを含む
52. 10YR5/2 灰黄褐色細砂質土　SD014
53. N3/(Y) 暗灰色弱粘質土　SP
54. 5Y4/1 灰色細砂質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土ブロック含む　SP
55. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂質土　SP
56. 5Y4/1 灰色細砂質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土ブロック含む　SP
57. 5B5/1 青灰色細砂　N3/(Y) 暗灰色粘土ブロック含む　SP
58. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂　SP
59. N3/(Y) 暗灰色粘質土　5B5/1 青灰色細砂ブロック少量含む　SP
60. 5Y4/1 灰色細砂質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土ブロック含む　遺構
61. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂質土　SD014
62. 2.5Y5/3 黄褐色細砂質土　SD014
63. 2.5Y6/2 灰黄色細砂質土　SD014
64. 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂質土　SD014
65. 2.5Y6/6 明黄褐色細砂質土　SD014
66. N6/(Y) 灰色細砂質土　5Y5/2 灰オリーブ色細砂質土もしくは2.5Y6/6 明黄褐色細砂質土ブロックを多く含む　SD014
67. N6/(Y) 灰色細砂質土　SD014
68. N3/(Y) 暗灰色粘質土　SD014
69. N6/(Y) 灰色細砂質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土　5Y5/2 灰オリーブ色細砂質土ブロック含む　SD014
70. N5/(Y) 灰色細砂質土　5Y5/2 灰オリーブ色細砂質土ブロック若干含む　SD014
71. N6/(Y) 灰色細砂質土　2.5Y6/4 にぶい黄色細砂質土、5Y5/2 灰オリーブ色細砂質土ブロック含む　SD014
72. 10YR3/1 黒褐色粘質土　炭化物・砂粒・橙色砂含む　Ⅰb層
73. 10YR3/2 黒褐色粘質土　5.0～8.0cm大の小礫含む、炭化物・砂粒含む　Ⅰb層
74. 7.5YR5/4 にぶい褐色砂質土　Fe多く含む　SD008
75. 2.5Y4/1 黄灰色粘土　10YR5/4 にぶい黄褐色粘土ブロック少量含む　SD008
76. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土　SD003
77. N4/(Y) 灰色粘土　2.5Y5/6 黄褐色粘土ブロック多く含む　砂質っぽい部分あり　SD003
78. 2.5Y5/2 暗灰黄色弱粘質土　2.5Y5/6 黄褐色粘土ブロック　SD003
79. N3/暗灰色粘土　SD003
80. 2.5Y5/1 黄灰色弱粘質土　2.5Y5/6 黄褐色粘土ブロック若干含む　SD003
81. 5Y5/2 灰オリーブ色弱粘質土　砂粒含む　Ⅲa層もしくはⅢb層
82. 2.5Y7/3 浅黄色細砂　Ⅲa層
83. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　2.5Y5/6 黄褐色砂ブロック多く含む　Fe？含む　Ⅲa層
84. 5Y4/1 灰色砂質土　2.5Y5/6 黄褐色砂ブロック含む　SX411
85. 5Y5/1 灰色砂質土　2.5Y5/6 黄褐色砂ブロック多く含む　Ⅳa層
86. 2.5Y4/1 黄灰色弱粘質土　2.5Y5/6 黄褐色砂ブロック少量含む。1.0～3.0cm大の小礫若干含む　Ⅳb層
87. 7.5Y4/1 灰色砂質土　SP
88. 2.5Y5/1 黄灰色砂質土　5Y5/6 オリーブ色砂質土ブロック　N4/ 灰色砂質土ブロック含む　Va層

第６図　Ａ区北壁(①)・Ｅ区南壁(②)土層断面図

第２節　調査地内の地形と層序

1. 各層の概要

Ⅰ層

調査地内全域に認められる近代～現代の整地層。

Ⅰａ層

ＪＲ（旧日本国有鉄道）の関連用地として利用されていた段階のバラスを主体とする整地層。バラスの状態から見てかなり最近の整地層と考えられる。

Ⅰｂ層

暗褐色系砂質シルト～シルト質粘土層の整地層。調査地全体に渡って確認できる。この層中には近世の遺物に加え、コバルトを使用した型紙摺の磁器も含まれる。いずれも細片であるため、廃棄されたものが撹拌されている可能性がある。また、本層に類似する土は近世遺構面以下では認められない。これらの状況から本層は、1880 年以降に周辺地域の大規模な整地を目的として、別の場所から運んできたものと考えられる。その契機としては、1895 ～ 1910 年の鉄道整備に伴う可能性が高い。

Ⅱ層

Ｉ・Ｊ・Ｌ区で確認できる 17 世紀前葉の整地層。この層の下面で検出したＳＸ 717 の埋め戻しと同時に本層が形成される。

Ⅲ層

Ａ区東部及びＥ区で確認された、本格的な集落遺構が展開する時期（14 ～ 15 世紀）の整地層。Ｇ区の土層観察記録には本層に相当する記録が認められないものの、中世遺構の分布状況を考慮すれば、Ｇ区東部は低地部で、本層によって整地されていた可能性は高い。

Ａ区の調査の結果、Ｅ区は低地にあたり、地割方向とは異なる遺構の存在が想定されたため、地形に沿う方向で設定したのがＥ区ベルトＡである。このベルトの土層観察では、大まかな土質の差異を根拠にⅢａ～Ⅲｄの整地単位と遺構との先後関係が確認でき、低地部が段階的に整地されたことが判明した。整地層と遺構の先後関係は、

Ⅳｂ層→Ⅳａ層→Ⅲｄ層→Ⅲｃ層→ＳＸ 411 →ＳＸ 405・Ⅲｂ層→Ⅲａ層

となる。

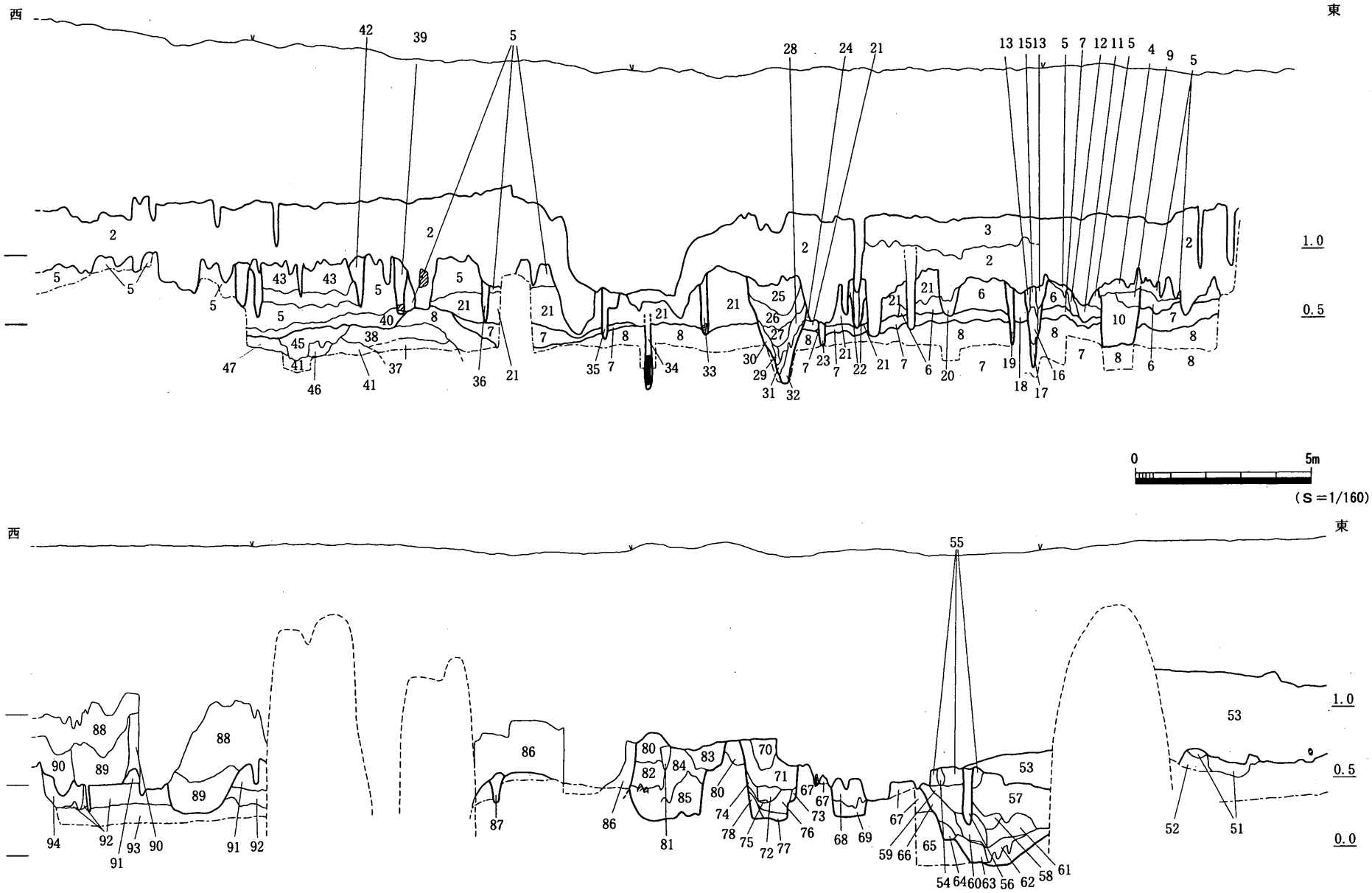
Ⅳａ層からは１ａ型式に先行する土師質土器杯が出土（**1**）しており、13 世紀後半の時期が与えられる。１ａ型式（**3**）・１ｂ型式（**4・5**）の土師質土器杯が出土しているⅢｄ層は 14 世紀前半と考えられ、Ⅲｃ層は１ｃ～１ｄ型式の土師質土器杯（**6・7**）から 14 世紀後半と考えられる。

Ⅳ層

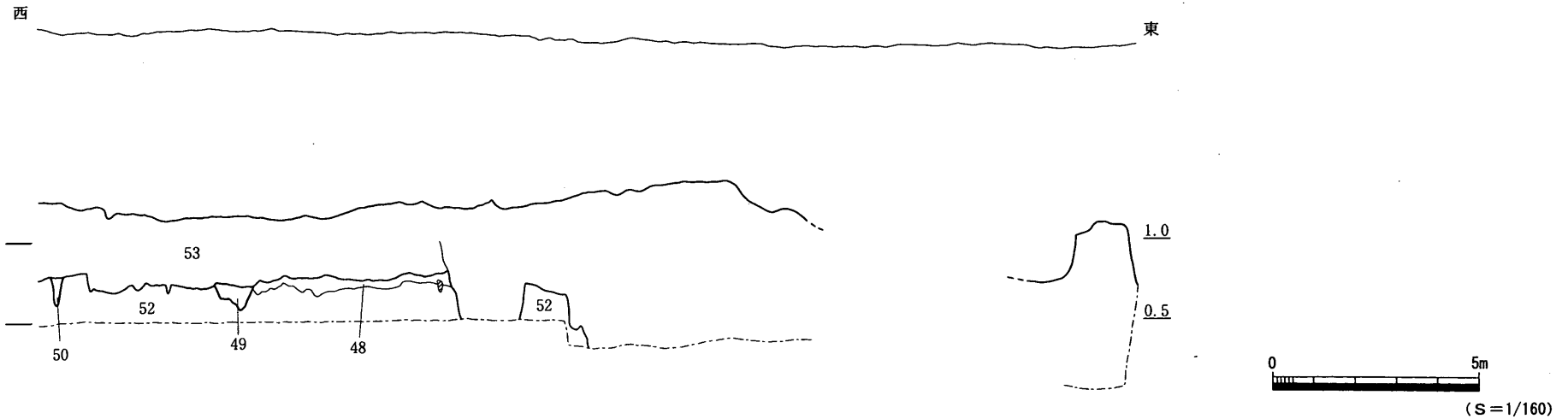
本格的な集落が展開する直前の遺物包含層。ブロック土が含まれるため整地層と判断した。本層中には瓦器椀・吉備系土師質土器椀等の 13 世紀後半の遺物が少量含まれる。土質・色調によってⅣａ層・Ⅳｂ層に分割した。

Ⅳａ層

黄色系のシルト～砂を主体とする。Ｂ・Ｃ区北部、Ｈ区では砂質が強く、南西に向かうほどシル

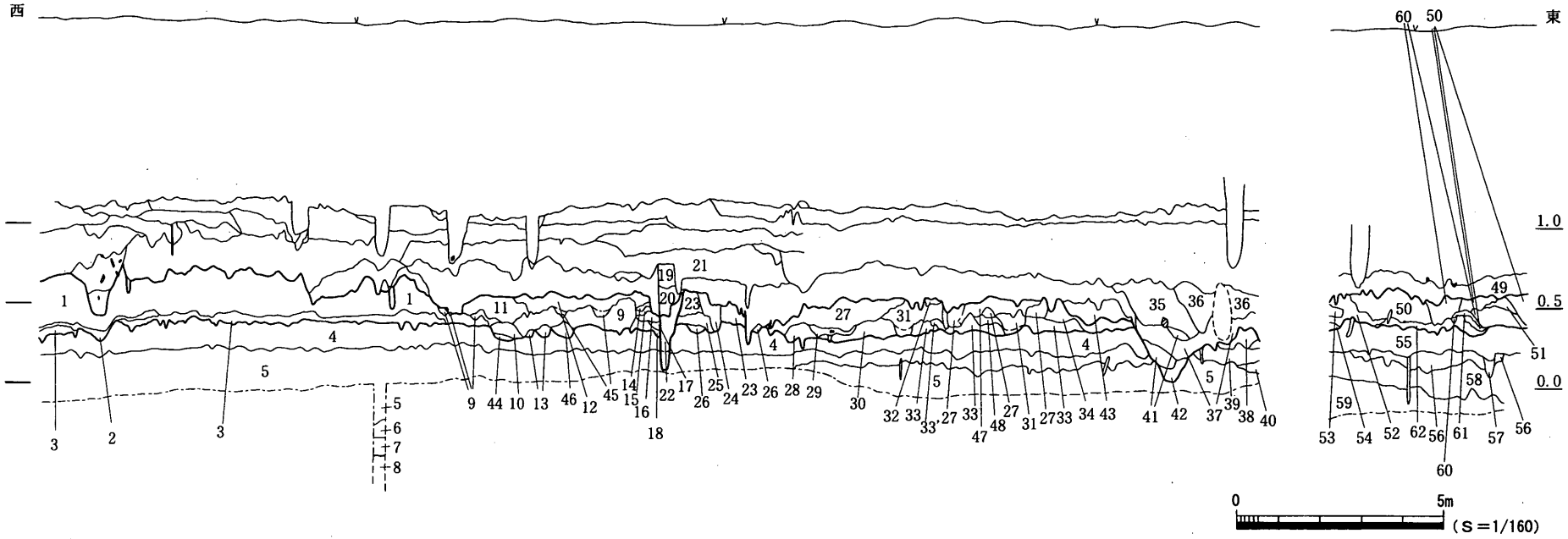


第７図　Ｇ・Ｈ区南壁（③・④・⑤）土層断面図（１）



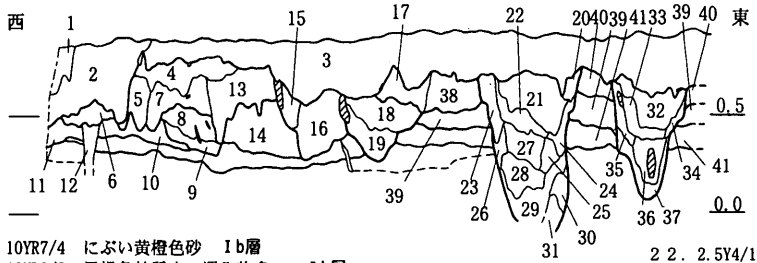
1．Ⅰa層
2．7.5YR3/2　黒褐色粘質土　Ⅰb層
3．10YR4/1　褐灰色粘質土　Ⅰb層
4．10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土　遺構
5．10YR6/4　にぶい黄橙色細砂　Ⅳa層
6．10YR7/4　にぶい黄橙色細砂　Ⅳa層
7．10YR4/2　灰黄褐色微細砂質土　Ⅳb層
8．2.5Y5/3　黄褐色粘質土　Ⅴa層
9．2.5Y7/3　浅黄色砂質土　炭少混　遺構
10．10YR4/2　灰黄褐色粘質土　炭混　6～8層の基盤層の混在　遺構埋め戻し土
11．10YR4/2　灰黄褐色微細砂質土　Ⅳa層
12．7.5YR4/1 褐灰色粘質土　炭混　Ⅳa層
13．10YR5/1　褐灰色粘質土　炭混　SP
14．10YR6/2　灰黄褐色粘質土　SP
15．10YR5/1　褐灰色粘質土　10YR7/6　明黄褐色粘土ブロック混　SP
16．10YR4/1　褐灰色粘質土　粘性大　SP
17．2.5Y5/1　黄灰色粘質土　SP
18．10YR6/2　灰黄褐色砂質土　Ⅳa層
19．2.5Y4/1　黄灰色粘質土　SP
20．7.5YR3/2 黒褐色粘質土と10YR7/4　にぶい黄橙色細砂の混在　Ⅰb層
21．2.5Y6/4　にぶい黄色粘質土Ⅳa層
22．7.5YR5/1 褐灰色粘質土　SP
23．10YR4/2　灰黄褐色粘質土　炭混　SP
24．10YR5/2　灰黄褐色粘質土　Ⅳa層
25．10YR4/1　褐灰色粘質土　土器混　SD013
26．10YR4/1　褐灰色粘質土　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土ブロック多混　SD013
27．10YR3/1　黒褐色粘質土　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土ブロック多混　SD013
28．10YR3/1　黒褐色粘質土　炭混　SD013
29．N3/　暗灰色シルト　SD013
30．2.5Y6/2　灰黄色細砂質土と2.5Y4/1黄灰色シルトの斜方向堆積　SD013
31．2.5Y6/2　灰黄色細砂質土と2.5Y4/1黄灰色シルトの斜方向堆積　30層より砂質土多　SD013
32．2.5Y6/2　灰黄色細砂質土と2.5Y4/1黄灰色シルトの水平堆積　31層より砂質土多　ほとんど砂質土　SD013
33．2.5Y5/2　暗灰黄色細砂質土　SP
34．N4/　灰色粘質土　径10.0cmの柱痕残存　SP
35．10YR5/2　灰黄褐色砂質土　SP
36．10YR5/1　褐灰色砂質土　SP
37．2.5Y4/1　黄灰色微細砂質土　Ⅴa層
38．2.5Y6/3　にぶい黄色微細砂質土　Ⅴa層
39．10YR6/3　にぶい黄橙色砂質土　炭多混　SP
40．2.5Y6/4　にぶい黄色細砂　Ⅳa層
41．2.5Y6/2　灰黄色粘質土　Ⅴa層
42．2.5Y6/1　黄灰色砂質土　SP
43．2.5Y6/4　にぶい黄色細砂　Ⅳa層
44．2.5Y6/2　灰黄色細砂　炭多混　Ⅴ層
45．2.5Y4/1　黄灰色粘質土と2.5Y6/3にぶい黄色細砂の細かい水平堆積　Ⅴa層
46．2.5Y5/4　黄褐色細砂　Ⅴa層
47．2.5Y5/2　暗灰黄色細砂　Ⅴa層
48．10YR4/1　褐灰色砂質土　Ⅲ層
49．10YR4/1　褐灰色粘質土　炭混　SD506
50．10YR3/2　黒褐色砂質土　SP
51．10YR3/2　黒褐色砂質土　Ⅲ層
52．10YR5/2　灰黄褐色細砂　Ⅴa層
53．10YR3/1　黒褐色粘質土　炭混　Ⅰb層
54．10YR3/1　黒褐色粘質土　SD504
55．2.5Y6/2　灰黄色砂質土　炭少混　SD504
56．2.5Y4/1　黄灰色粘質土　礫混　SP
57．10YR5/2　灰黄褐色粘質土　10YR3/1　黒褐色粘質土ブロック混　SD504埋め戻し土？
58．10YR5/2　灰黄褐色砂質土　10YR3/1　黒褐色粘質土ブロック混　水平堆積有　流水状態の堆積か　SD504
59．2.5Y6/2　灰黄色細砂　SD504
60．2.5Y6/2　灰黄色粘質土　10YR3/1　黒褐色粘質土ブロック混　SD504
61．2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土　10YR3/1　黒褐色粘質土ブロック混　SD504
62．5Y7/1　灰白色と5Y6/3オリーブ黄色砂質土の層状堆積　SD504
63．N4/　灰色粘土　SD504
64．2.5Y7/2　灰黄色細砂　SD504
65．5Y6/1　灰色粘質土　固い　炭少混　Ⅳ層もしくはⅤ層（Ⅲ層の可能性もあり）
66．10YR5/1　褐灰色微細砂質土　斜方向の堆積　SD504
67．10YR7/2　にぶい黄橙色細砂　Ⅳ層もしくはⅤ層（Ⅲ層の可能性もあり）
68．10YR5/1　褐灰色粘質土　10YR7/3　にぶい黄橙色粘土ブロック混　SK
69．5Y4/1　灰色粘質土　SK
70．10YR3/1　黒褐色粘質土　炭混　SK525
71．10YR4/1　褐灰色粘質土　炭、10YR6/2　灰黄褐色細砂多混　SK525
72．10YR3/1　黒褐色粘質土　炭多混　礫混　SK525
73．2.5Y6/2　灰黄色粘土　SK525
74．2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土　SK525
75．2.5Y6/2　灰黄色細砂　SK525
76．10YR3/1　黒褐色粘質土　炭多混・礫混　SK525
77．N1.5/　黒色炭化物　生木・小礫少混　SK525
78．2.5Y5/1　黄灰色粘質土　炭多混　SK525
79．10YR4/1　褐灰色粘質土　Ⅳ層
80．SD502
81．SD502
82．SD502
83．SD502
84．SD502
85．SD502
86．Ⅰb層
87．SP
88．10YR3/1　黒褐色粘質土　Ⅰb層
89．10YR2/1　黒色粘質土　炭化物多混　Ⅰb層
90．10YR3/1　黒褐色粘質土　88層より砂質強い　Ⅰb層
91．10YR7/2　にぶい黄橙色砂質土　Ⅲ～Ⅴa層
92．10YR6/1　褐灰色細砂質土　Ⅲ～Ⅴa層
93．10YR5/3　にぶい黄褐色粗砂　Ⅲ～Ⅴa層
94．10YR5/2　灰黄褐色細砂質土　Ⅲ～Ⅴa層

第８図　Ｇ・Ｈ区南壁（③・④・⑤）土層断面図（２）



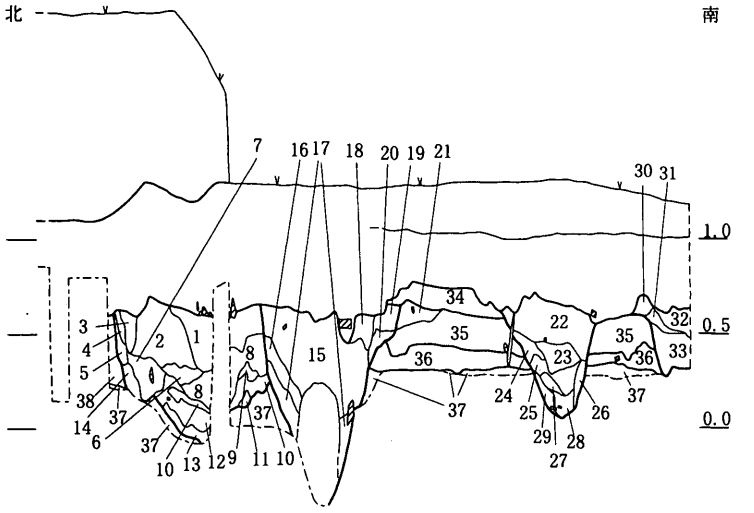
１．2.5Y7/4～2.5Y6/4 浅黄色～にぶい黄色粗砂　Ⅱ層
２．10YR4/1　褐灰色細砂　Ⅱ層
３．7.5YR3/4　暗褐色シルト質砂　Ⅱ層
４．7.5Y5/1～10Y6/1　灰色粘質シルト～灰色シルト質砂　Ｖa層
５．5Y5/2～10Y6/1　灰オリーブ色～灰色細砂～砂　2.5Y6/6　明黄褐色砂　Ｖ層
６．7.5GY4/1　暗緑灰色シルト質粘土　径2.0cm程度の2.5Y4/4オリーブ褐色ブロックを多量に含む　Ｖa層
７．10BG4/1　暗青灰色粘質シルト　Ｖa層
８．10BG4/1　暗青灰色砂質シルト　径2.0cm程度の2.5Y4/6オリーブ褐色ブロックを均一に含む小礫を多量に含む　Ｖb層
９．5Y6/3　オリーブ黄色粘質シルト　Ⅱ層
１０．2.5Y6/3～10YR5/6　にぶい黄色砂質シルト～黄褐色細砂　部分的に炭化物が帯状に堆積　Ⅱ層
１１．2.5Y7/6～7.5YR5/8　明黄褐色～明褐色砂～中粒砂　Ⅱ層
１２．5Y6/1　灰色砂質シルト　炭化物をわずかに含む　Ⅱ層
１３．10YR3/3　暗褐色粗砂　Ⅱ層
１４．10YR4/1　褐灰色細砂～砂　Ⅱ層
１５．7.5Y6/1　灰色シルト質粘土　Ⅱ層
１６．10YR6/8～2.5Y7/4　明黄褐色～浅黄色粗砂　Ⅱ層
１７．7.5Y5/1　灰色中粒砂　Ⅱ層
１８．10YR3/3　暗褐色細砂～粗砂　Ⅱ層
１９．10YR4/3～2.5Y6/4　にぶい黄褐色～にぶい黄色シルト質砂～細砂　Ⅱ層
２０．2.5Y4/2～5Y5/6　暗灰黄色シルト質砂～オリーブ色シルト質砂　Ⅱ層
２１．2.5Y7/4　浅黄色シルト質砂　Ⅱ層
２２．10YR4/3～5Y4/1　にぶい黄褐色～灰色砂質シルト　N3/暗灰色粘土　底部（破線より下）は灰色を帯びる　SD711
２３．2.5Y4/2　暗灰黄色シルト質砂と2.5Y7/4　浅黄色砂の混合層　径0.5cm程度の7.5YR5/8　明褐色沈着　Ⅱ層
２４．2.5Y6/6～10YR3/2　明黄褐色～黒褐色砂～シルト質砂径0.5cm程度の7.5YR5/8明褐色沈着　Ⅱ層
２５．10YR3/1～10YR3/2　黒褐色シルト質砂　径0.5cm程度の2.5Y5/6黄褐色沈着　Ⅱ層
２６．7.5Y5/2～7.5Y6/1　灰オリーブ色～灰色シルト質粘土　径0.5cm程度の2.5Y5/6黄褐色沈着　Ⅱ層
２７．2.5Y7/6～5Y7/4　明黄褐色砂質シルト～浅黄色砂質シルト　径0.5cm程度の10YR5/6黄褐色沈着　Ⅱ層
10YR3/2～2.5Y7/6　黒褐色～明黄褐色砂質シルト　27層に黒褐色土を含む　Ⅱ層
２８．2.5Y4/1　黄灰色細砂　Ⅱ層
２９．10YR4/1～10YR3/1　褐灰色～黒褐色砂質シルト　径0.5cm程度の5Y6/6オリーブ色沈着遺物、礫、炭化物を均一に含む　Ⅱ層
３０．10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　径0.5cm以下の7.5YR4/6褐色（砂？）を多く含む　Ⅱ層
３１．10YR4/2～10YR6/8　灰黄褐色～明黄褐色砂　底部（破線より下）2.5Y3/2黒褐色粘質シルト　Ⅱ層
３２．2.5Y5/2～2.5Y7/6　暗灰黄色～明黄褐色砂質シルト　Ⅱ層
３３．2.5Y6/4～2.5Y6/6　にぶい黄色～明黄褐色細砂シルト　7.5YR5/8　明褐色沈着・炭化物をわずかに含む　Ⅱ層
３４．10YR4/4　褐色細砂　Ⅱ層
３５．2.5Y6/3　にぶい黄色細砂　炭化物・礫若干含む　撹乱
３６．2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト　炭化物・瓦多量に含む　撹乱
３７．2.5Y4/1～7.5Y4/1　黄灰色～灰色砂質シルト～粘質シルト　炭化物多量に含む　撹乱
３８．2.5Y6/4　にぶい黄色粘質粘土シルト　10YR6/8明黄褐色沈着　撹乱
３９．2.5Y6/2～2.5Y6/4　灰黄色～にぶい黄色砂質シルト　10YR6/8明黄褐色沈着　撹乱
４０．5Y4/2　灰オリーブ色細砂　撹乱
４１．３５層と３７層の混合層　撹乱
４２．5Y5/1灰色細砂　底部にN4/灰色粘土堆積　撹乱
４３．10YR4/4　褐色細砂　撹乱
４４．2.5Y6/3～10YR5/6　にぶい黄色砂質シルト～黄褐色粗砂　Ⅱ層
４５．2.5Y7/4～10YR3/1　浅黄色砂～黒褐色細砂　Ⅱ層
４６．10YR3/3　暗褐色細砂　底辺部にうすく炭が堆積　Ⅱ層
４７．炭層　33層の中で炭が集中していた層　Ⅱ層
４８．10YR3/2～2.5Y7/6　黒褐色～明黄褐色砂質シルト　27層に黒褐色土を含むⅡ層
４９．Ⅰ層
５０．2.5Y7/6　明黄褐色砂質シルト　Ⅱ層
５１．10YR5/6　黄褐色細砂　Ⅱ層
５２．10YR6/6　明黄褐色細砂　Ⅱ層
５３．10YR6/6　明黄褐色粗砂　Ⅱ層
５４．2.5Y6/1　黄灰色粘質シルト　Ⅱ層
５５．5Y5/1　灰色砂質シルト　2.5Y6/6　明黄褐色が均一に沈着　Ｖa層
５６．5Y7/4　浅黄色砂質シルト　Ｖa層
５７．2.5Y5/1　黄灰色シルト質砂　径2.0cmの5Y7/4　浅黄色砂質シルトブロック若干含む　Ｖa層
５８．5Y4/1　灰色砂質シルト　Ｖa層
５９．5Y4/1　灰色砂質シルト　10YR6/8明黄褐色の沈着が激しい　Ｖa層
６０．2.5Y7/6　明黄褐色砂質シルトと37層の混合層　Ⅱ層
６１．2.5Y7/6　明黄褐色砂質シルト　炭化物を多く含む層　Ⅱ層
６２．5Y5/1　灰色砂質シルト　2.5Y6/6　明黄褐色が均一に沈着　10YR6/6明黄褐色細砂を一部帯状に含んだ層　層の下には1.0cm幅で炭化物が帯状に堆積　Ⅱ層

第９図　Ｊ区北壁・Ⅰ区北壁（⑥・⑦・⑧）土層断面図



E区ベルトA（⑨）

1．10YR7/4　にぶい黄橙色砂　Ⅰb層
2．10YR2/2　黒褐色粘質土　混入物多い　Ⅰb層
3．10YR3/2　黒褐色粘質土　0.5～1.0cm大の小礫多く含む　黄褐色粘質土ブロック・炭化物含む　Ⅰb層
4．10YR4/2　灰黄褐色砂質土　1.0～5.0cm大の小礫（川原石）多く含む　Ⅲb層
5．2.5Y5/2　暗灰黄色砂　1.0～10.0cm大の小礫（川原石）多く含む　Fe沈着　Ⅲb層
6．2.5Y5/3　黄褐色砂質土　Ⅲd層
7．5Y5/1　灰色細砂質土　炭化物若干含む、Fe沈着著しい　Ⅲd層
8．5Y5/1　灰色細砂弱粘質土　Fe若干　7層より黄色味強い　Ⅳa層
9．2.5Y5/4　黄褐色細砂　若干粘性あり　Ⅳa層
10．10YR5/1　褐灰色砂質土　炭化物微量含む　Ⅳa層
11．10YR5/2　灰黄褐色細砂質土　Fe沈着少量　Ⅳa層
12．N3/(Y)　灰色弱粘質土　基盤層ブロック少量含む　SP
13．10YR4/1　褐灰色弱粘質土　炭化物若干含む　Mn多く含む　Ⅲb層
14．5Y5/1　灰色細砂弱粘質土　Fe若干　2.5Y6/4　にぶい黄色粘土ブロック含む　Ⅲc層
15．10YR4/1　褐灰色弱粘質土　13層よりも赤み若干強い　Ⅲb層
16．2.5Y5/1　黄灰色弱粘質土　炭化物多く含む　1.0～10.0cm大の小礫含む　Ⅲc層
17．10YR4/1　褐灰色粘質土　Ⅲa層
18．10YR3/1　黒褐色粘質土　0.5～5.0cm大の小礫含む　SX411
19．N3（YR）暗灰色粘土　炭化物含む　SX411
20．10YR4/1　褐灰色弱粘質土　SK414
21．2.5Y4/1　黄灰色粘質土　2.5Y6/4　にぶい黄色粘土ブロック多く含む　SK414
22．2.5Y4/1　黄灰色粘質土　21層に比べにぶい黄色ブロックの比率が２～３倍　SK414
23．10YR4/1　褐灰色粘質土　2.5Y6/4にぶい黄色粘土ブロック少量含む　SK414
24．2.5Y6/4　にぶい黄色粘質土　2.5Y4/1黄灰色粘質土ブロック含む　SK414
25．2.5Y6/4　にぶい黄色粘質土　黄灰色粘質土ブロック少量　SK414
26．2.5Y6/4　にぶい黄色粘質土　2.5Y4/1黄灰色粘質土ブロック含む　SK414
27．10YR4/1　褐灰色粘質土　にぶい黄色粘土ブロック含む　SK414
28．N3/(YR)　暗灰色粘質土　にぶい黄色粘土ブロック含む　Mn含む　SK414
29．N3/(YR)　暗灰色粘質土　SK414
30．2.5Y6/4　にぶい黄色粘質土　2.5Y4/1　黄灰色粘質土ブロック含む　SK414
31．N3/　暗灰色粘土　SK414
32．10YR4/1　褐灰色粘質土　SD008
33．2.5Y4/1　黄灰色粘質土　Mn若干含む　SD008
34．10YR4/1　褐灰色弱粘質土　SD008
35．2.5Y5/1　黄灰色弱粘質土　Fe沈着少量　SD008
36．N3/(Y)　暗灰色粘土　SD008
37．N4/(YR)　灰色粘質土　SD008
38．10YR5/1　褐灰色細砂弱粘質土　Fe　Mn多く含む　Ⅲa層
39．2.5Y5/1　灰色細砂弱粘質土　Mn沈着少量　Ⅲc層
40．2.5Y5/1　灰色細砂弱粘質土　Ⅲa層
41．5Y4/1　灰色細砂質土　Ⅳa層
42．5Y6/4　オリーブ黄色細砂質土～弱粘質土　一部Fe沈着激しい　Ⅴa層

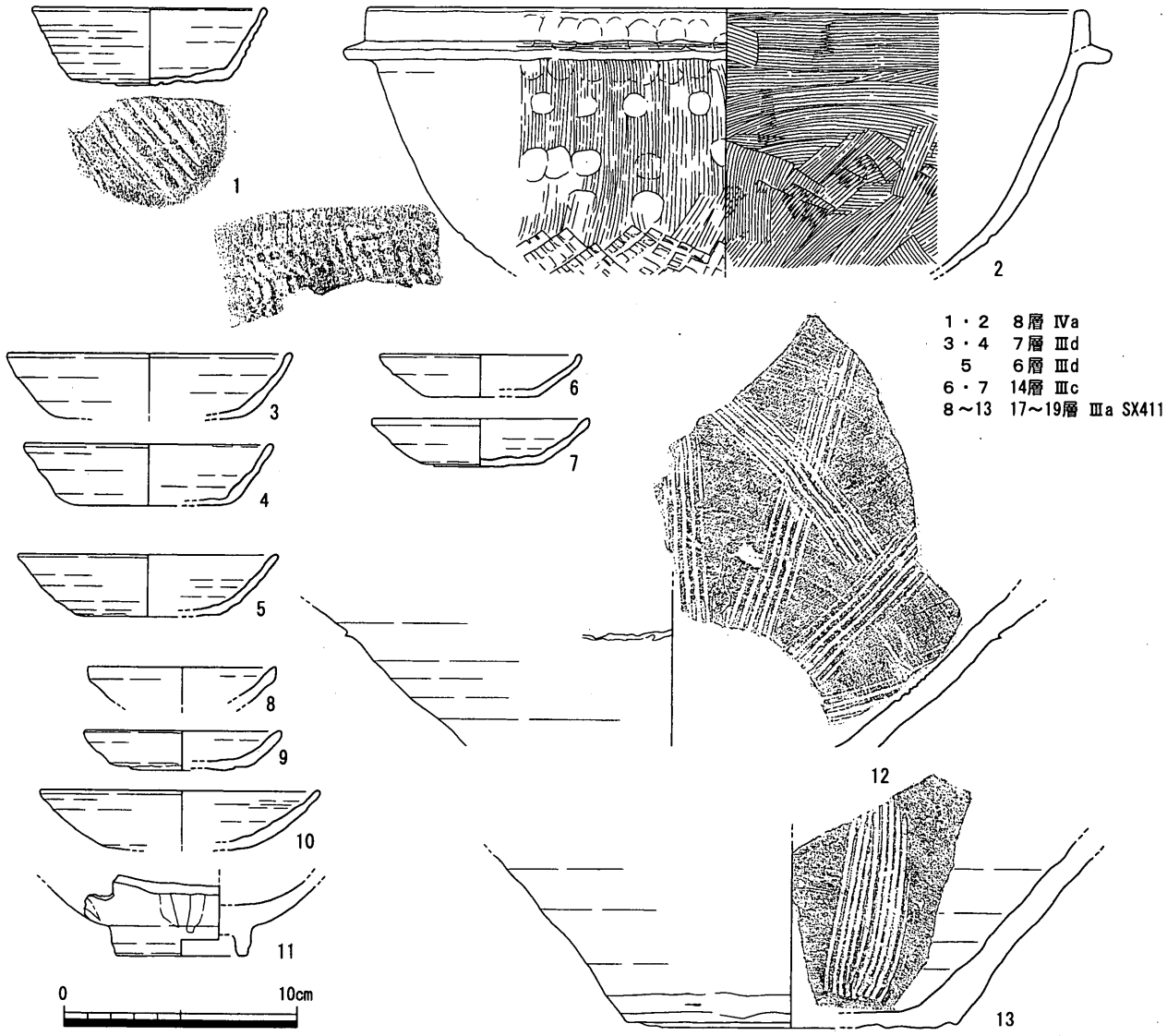


E区東壁（⑩）

1．7.5YR4/1　褐灰色弱粘質土　Mn多く含む　SK406
2．10YR5/2　灰黄褐色砂質土　Mn含む　SK406
3．2.5Y4/1　黄灰色弱粘質土　Mn、10YR5/2 灰黄褐色砂質土ブロック含む　SK406
4．2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土　Mn若干含む　SK406
5．10YR4/1　褐灰色砂質土　Mn含む　SK406
6．2.5Y6/6　明黄褐色粘質土　2.5Y5/1黄灰色を呈する部分あり　SK406
7．N5/(Y) 灰色粘質土　2.5Y6/6　明黄褐色を呈する部分あり　SK406
8．N5/(Y) 灰色粘質土　2.5Y6/6　明黄褐色を呈する部分あり　SK406
9．N5/(Y) 灰色砂質土　2.5Y6/3　にぶい黄色砂ブロック含む　SK406
10．N3/　暗灰色粘質土2.5Y6/3　にぶい黄色砂質土ブロック含む　SK406
11．2.5Y5/1　黄灰色砂質土　基盤層ブロック含む　SK406
12．5BG5/1　青灰色砂質土　基盤層ブロック、N3 /暗灰色粘質土ブロック含む　SK406
13．N4(Y)灰色弱粘質土　基盤層ブロック少量含む　SK406
14．N4/　灰色弱粘質土　SK406
15．N3/(Y)暗灰色弱粘質土　2.5Y6/8　明黄褐色粘土ブロック多量に含む(約５０％)　SK405
16．5Y5/3　灰オリーブ色粘質土　N3/(Y)暗灰色砂質土ブロック少量含む　SK405
17．N3/(Y)　暗灰色砂質土　5Y5/3　灰オリーブ色粘質土ブロック含む　SK405
18．7.5Y4/1　灰色弱粘質土　Fe含む　SK405
19．2.5Y6/6　明黄褐色粘質土　10YR6/8明黄褐色粘土ブロック含む　SK405
20．5Y5/1　灰色弱粘質土　Fe多く含む　SK405
21．10YR4/1　褐灰色弱粘質土　Mn多量に含む　Ⅲb層
22．10YR4/1　褐灰色粘質土　SD003
23．10YR3/1　黒褐色弱粘質土　SD003
24．2.5Y4/1　黄灰色粘質土　Mn含む　SD003
25．N4/　灰色粘質土　SD003
26．N4/(YR)　灰色粘質土　基盤層ブロック少量含む　SD003
27．10YR4/2　灰黄褐色弱粘質土　SD003
28．N3/(Y)　暗灰色粘土　SD003
29．N4/(YR)　灰色粘質土　SD003
30．10YR4/2　灰黄褐色砂質土　SD008
31．2.5Y4/1　黄灰色弱粘質土　Fe多く含む　SD008
32．7.5YR5/4　にぶい褐色砂質土　Feを多く含む　SD008
33．2.5Y4/1　黄灰色粘土　SD008
34．2.5Y5/2　暗灰黄色細砂質土　Ⅲa層
35．5Y5/2　灰オリーブ色弱粘質土　Mn多量　Ⅲb層
36．N4/　灰色細砂質土　Ⅳb層
37．2.5Y6/4　にぶい黄色粘質土　Fe　N4/灰色粘土ブロック含む　Ⅴa層
38．2.5Y4/1　黄灰色細砂質土　上位層(撹乱)の影響で色調変化？Ⅲb層

0　5m　（S＝1/160）

第10図　E区ベルトA（⑨）・東壁（⑩）土層断面図



第11図　Ｅ区ベルトＡ出土遺物

ト質を呈する。

Ⅳｂ層

Ⅳａ層下位で確認できる灰色系のシルト～シルト質砂層。

Ⅴ層

遺構が確認できない層。

Ⅴａ層

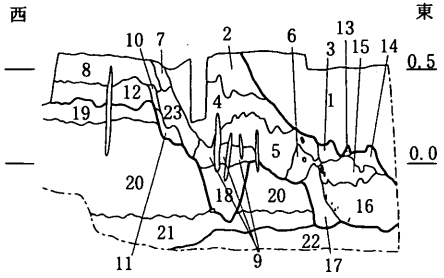
シルト質砂～砂層を主体とする。本層は９世紀代の須恵器（1434）を含むことから、古代以降に堆積した層と考えられる。

Ⅴｂ層

小礫が混じる砂層もしくは礫層。希に弥生時代後期の土器や摩滅した須恵器を含む。

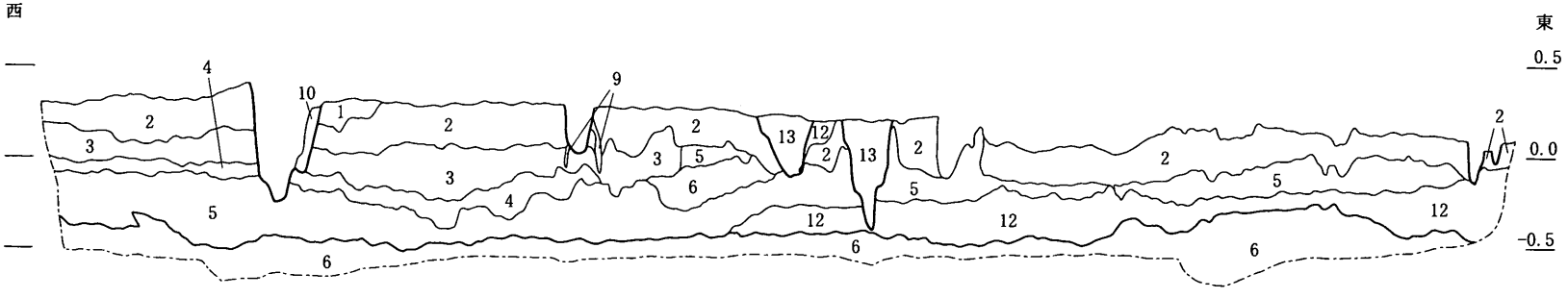
2. 調査地内の地形

Ⅳ・Ⅴ層から調査地は中世前半頃に安定したと考えられる。



Ⅰ区ＳＸ717ベルト(⑪)

1．2.5Y5/1～10YR5/2黄灰色～灰黄褐色シルト質砂　径1.0～5.0cmのN4/(YR)灰色粘土質シルトブロック多量・径0.5～2.0cmの2.5Y6/4～2.5Y6/6　にぶい黄色～明黄褐色質シルト～シルトブロック多量・径0.2～1.0cmの砂粒多量に含む　まだらに7.5YR5/6明褐色化(酸化)顕著　SX17上層
2．2.5Y5/1～5Y5/1　黄灰色～灰色シルト質砂～砂質シルト　径0.2～1.0cmの7.5Y6/2～7.5Y6/6　灰黄色～明黄褐　色砂質シルト～シルトブロック多量　に含む　Ⅱ層
3．N4/　灰色粘土質シルト　炭化物少量含む　Ⅱ層
4．2.5Y6/4～2.5Y6/6　にぶい黄色～明黄褐色シルト質砂～砂質シルト　径0.2～1.0cmの7.5YR6/2～7.5Y6/6　灰黄色～明黄褐色砂質シルト～シルトブロック多量に含む　まだらに7.5YR5/6　明褐色化(酸化)　顕著　Ⅱ層
5．N5～2.5Y5/1　灰色～黄灰色砂質シルト～シルト質砂　径0.5～1.0cmの7.5Y6/2～7.5Y6/6　灰黄色～明黄褐色　砂質シルト～シルトブロック含む　まだらに7.5YR5/6　明褐色化(酸化)顕著　Ⅱ層
6．N5/　灰色砂質シルト　5層とよく似る　Ⅱ層
7．10YR5/1　褐灰色シルト質砂　径0.5～3.0cmのN5/灰色シルトブロック含む　Ⅱ層
8．5Y5/2～5Y6/1　灰オリーブ色～灰色シルト質砂　径0.5～3.0cmのN5/灰色シルトブロック・径0.5～2.0cmの7.5Y7/3　浅黄色砂質シルトブロック多量に含む　径0.2～0.　5cmの砂粒含む　まだらに7.5YR5/6　明褐色化(酸化)顕著　Ⅱ層
9．N5/(YR)灰色シルト～砂質シルト　径0.5～1.0cmの2.5Y6/2～2.5Y6/6灰黄色～明黄褐色砂質　シルト～シルトブロック含む　まだらに7.5YR5/6明褐色化(酸化)顕著　Ⅱ層
10．2.5Y6/1　黄灰色砂質シルト　まだらに7.5YR5/6　明褐色化(酸化)顕著　Ⅱ層
11．N6/(YR)　灰色シルト質砂　まだらに7.5YR5/6　明褐色化(酸化)顕著　Ⅱ層
12．2.5Y6/1～2.5Y6/2　黄灰色～灰黄色砂質シルト～シルト質砂　径0.5～1.0cmの7.5Y7/3　浅黄色砂質シルトブロック含む　まだらに7.5YR5/6明褐色化(酸化)顕著　Ⅱ層
13．N4/灰色粘土　ブロック　SX717下層
14．2.5Y8/2～2.5Y7/4　灰白色～浅黄色細砂　部分的に15・16層ブロック含む　SX717下層
15．N4/灰色粘質シルト　帯状に細かい砂粒含む　SX717下層
16．N4/～N3/灰色～暗灰色粘土層　砂粒を若干含む　SX717下層
17．N4/　灰色シルト～粘土質シルト　径0.2～0.5cmの20層ブロック若干含む砂粒をブロック状に若干含む　SX717下層
18．N4/　灰色粘土　SD707
19．N5/(YR)　灰色シルト質砂　12層より灰色強い　Ⅴ層
20．2.5Y6/2～2.5Y5/1　灰黄色～灰色砂質シルト　径0.5～1.0cmの砂粒を若干含む、径0.2～0.5cmの砂粒を含む　Ⅴ層
21．N5/　灰色砂質シルト～粘土質シルト　径0.5～1.0cmの砂粒若干含む、径0.2～0.5cmの砂粒含む。20層に比べ色調と土質が多少異なる　Ⅴ層
22．10BG6/1～10BG5/1　青灰色粗砂　径1.0～10.0cmの礫多量に含む　Ⅴ層
23．5Y6/1　灰色シルト質砂　8層に似る　Ⅴb層



Ｄ・Ｅ区下層確認トレンチ(⑫)

1．2.5Y6/2　灰黄色灰黄色微細砂　古代以前の堆積層(Ⅴa層)
2．2.5Y5/3　黄褐色粘質土　炭・木質含む　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
3．2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土　2層に比べて粘質大　2.5Y5/1　黄灰色シルト混・木質混　古代以前の堆積層(Ⅴa層)
4．7.5Y5/2　灰オリーブ色粘質土と7.5Y4/1灰色粘土の混在　水平堆積　古代以前の堆積層(Ⅴa層)
5．7.5Y5/1　灰色砂質土　木質混　古代以前の堆積層(Ⅴa層)
6．2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土　木質混　古代以前の堆積層(Ⅴa層)
7．7.5Y4/1　灰色粘土と7.5Y4/1灰色粘質土の混在　古代以前の堆積層(Ⅴa層)
8．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色砂質土　木質・2.5GY4/1　暗オリーブ灰色シルト・礫多混　古代以前の堆積層(Ⅴa層)
9．N4/　灰色砂礫　湧水層　弥生土器？・須恵器片混　古代以前の堆積層(Ⅴb層)
10．2.5Y5/3　黄褐色微細砂　SD013
11．2.5Y6/3　にぶい黄色砂質土　SD014
12．5Y5/1　灰色粘質土　SD014
13．2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土　大礫混　遺構？
14．2.5Y6/2　灰黄色粘質土　SP

（S＝1/160）

第12図　Ⅰ区ＳＸ717ベルト(⑪)、Ｄ･Ｅ区下層確認トレンチ(⑫)土層断面図

中世段階では、B・H区をピークとして緩やかに南・東に下り、A区東部・E区・G区東部以東は低地部分となっている。第3節で述べるように、これより東に遺構は認められない。これは、地形的要因によるものであろう。

ただし低地部分は、段階的に整地が行われていることがⅢ層から分かる。16世紀末～17世紀初頭には低地部分にも遺構が認められるが、居住遺構ではないため、日常的な生活を営む場ではなかったものと思われる。その後、17世紀前半に低地部分は大規模に整地され、西部とほぼ同じ標高となる。

第３節　中世以前の遺構と遺物

1. 柵列（ＳＡ）

ＳＡ 001（第 13・14 図）

Ａ・Ｄ・Ｈ区にまたがっている南北方向の溝に、ほぼ等間隔に杭とピットが認められる柵列である。溝の埋土は基盤層ブロックを多く含む土であることから、最終的には人為的に埋められたものであろう。この溝には先端の尖った杭が 0.5 ～ 1.0 m間隔で打ち込まれ、杭の周りには溝の埋土よりも濃い灰色の灰色細砂質土が確認できるが、土中の含有物が基盤層と差がないことから、杭のために変色したものと判断した。杭の基盤層中部分とそれ以上の残存部分を比較しても、風化度合いに明瞭な差はなく、溝埋め立て後の杭列設置、もしくは溝がオープンな状態で杭が打設されたとしても、打設から埋め立てまでの期間はごく短いと考えられる。さらに、杭は確実に溝部分に打ち込まれており、溝が掘削後のオープンな状態で杭列が設置された可能性は高い。またこの溝は、周辺のピットと比較してもさほど深くなく、後述するように区画施設として単体で機能していたとは考えにくいため、地上の構造物があってはじめて区画施設の性格を有すると思われる。以上のことから、溝掘削→杭打設→溝埋め立ての工程が想定され、各工程間は短期間であると考える。

この柵列はＳＥ 304 部分で途切れ、ＳＥ 304 と重複しないことから、ＳＥ 304 と同時並存であった可能性が高い。

本柵列は、区画溝ＳＤ 013・ＳＤ 014 と並列し、出土遺物からも両溝と並存していると考えられるため、両溝と共に区画施設を構成するものと考えられる。

Ａ区出土遺物（14 ～ 16）　14 は土師質土器小皿。15 は土師質土器杯。16 は京都系土師器皿。

Ｄ区出土遺物（17 ～ 29）　17 ～ 23 は土師質土器杯。煤の付着が認められる 17 は１ｂ型式、19 は３ａ型式、23 は１ｃ型式。24 は土師質土器擂鉢。口縁部上面に強いナデを施し、口縁部下端を若干突出させる。25 は備前擂鉢。乗岡中世３ｂ期・４ａ期と考えられる。26 は備前壺。27 は土師質土器足釜。28 は大和産瓦質土器風炉。29 は丸瓦を転用した円盤状加工品。

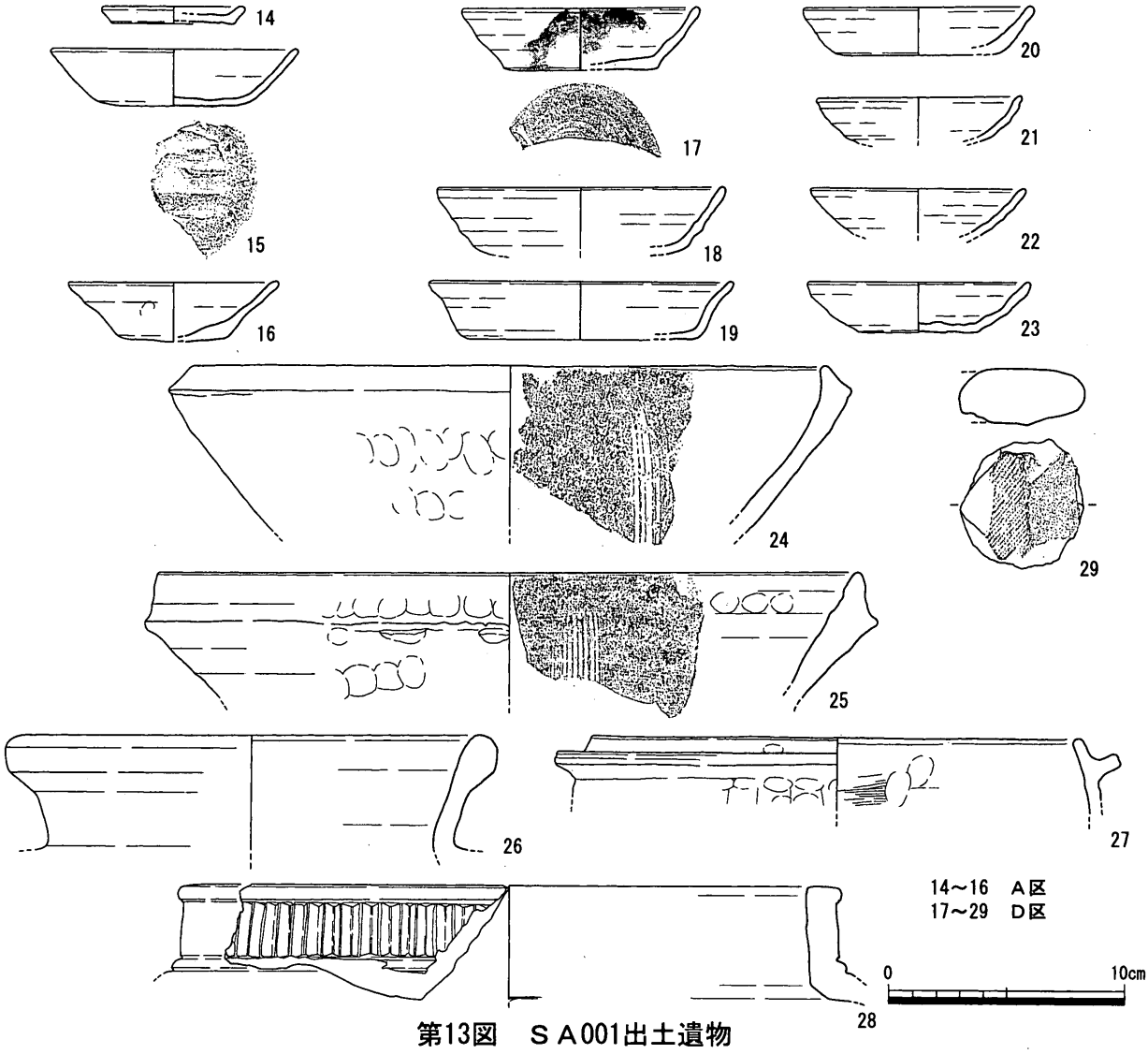
時期　25 から 15 世紀前葉と考えられる。20 についても時期は不明ながら、器高が低いため 15 世紀以降と考えられ矛盾はないと思われる。

2. 掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ 201・603 については現場での検討により復元した掘立柱建物である。一方残りの掘立柱建物については、ピットが集中する部分を中心として平面図上で復元を行ったものである。よって、ＳＢ 201・603 以外の掘立柱建物は遺構として成り立たないことも十分考えられるが、「ピット集中域＝居住域の可能性が高い」という考えを示すために、あえて建物の復元を行った。

ＳＢ 101（第 15 図）

Ｂ区北西部で検出した。ＳＢ 102 と重複するため両建物間には時期差を考えざるを得ないが、出土遺物による時期差は認められない。よって、両建物の先後関係は不明であるものの、短期間での



第13図　ＳＡ001出土遺物

建て替えの結果であると想定できる。

出土遺物　残存率 2/3 の土師質土器杯３ａ型式（ＳＰ 1040）の他、土師質土器小皿（ＳＰ 1020）・杯１ａ（ＳＰ 1051）・１ｃ（ＳＰ 1040）型式、土師質土器足釜（ＳＰ 1018・1020）が出土している。

時期　残存状況の良好なＳＰ 1040 出土杯から 14 世紀第３四半期中心と考えられる。

ＳＢ 102（第 15 図）

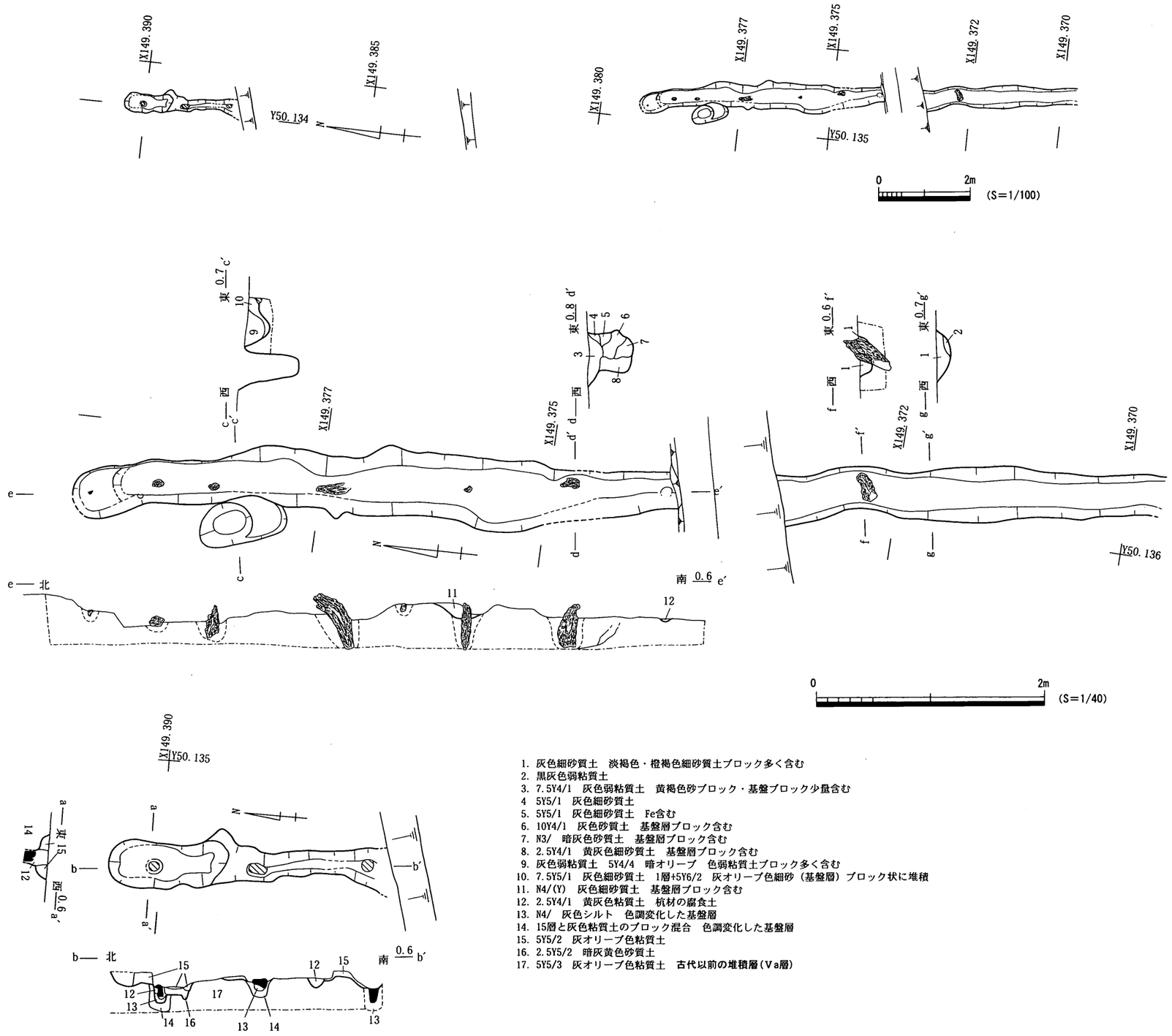
Ｂ区北西部、ＳＢ 101 と切り合って検出した。先述のとおり、ＳＢ 101 とはかなり短い期間での建て替えがあったと考えられる。

出土遺物　１ｃ型式の土師質土器杯（ＳＰ 1123・1146）・足釜（ＳＰ 1146）細片が出土している。

時期　細片ではあるが、土師質土器杯から 14 世紀第３四半期廃絶と考えられる。

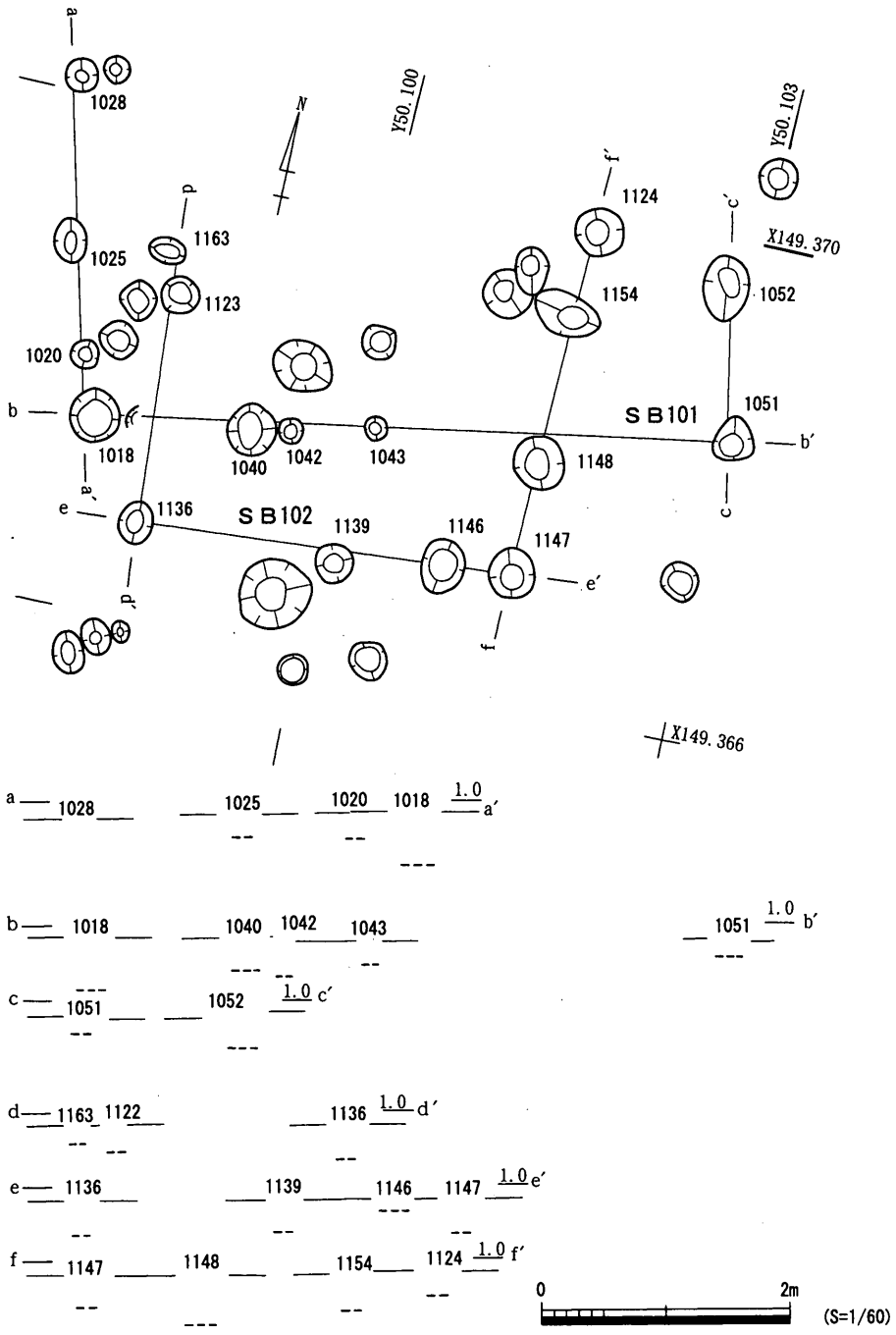
ＳＢ 201（第 16 図）

Ｃ区中央部で検出。板状の安山岩を根石とするピットを中心に掘立柱建物を復元した。この建物については、現場の調査段階で検討した結果復元できたものであるため、建物としての信頼性はかなり高いと考える。



1. 灰色細砂質土　淡褐色・橙褐色細砂質土ブロック多く含む
2. 黒灰色弱粘質土
3. 7.5Y4/1　灰色弱粘質土　黄褐色砂ブロック・基盤ブロック少量含む
4　5Y5/1　灰色細砂質土
5. 5Y5/1　灰色細砂質土　Fe含む
6. 10Y4/1　灰色砂質土　基盤層ブロック含む
7. N3/　暗灰色砂質土　基盤層ブロック含む
8. 2.5Y4/1　黄灰色細砂質土　基盤層ブロック含む
9. 灰色弱粘質土　5Y4/4　暗オリーブ　色弱粘質土ブロック多く含む
10. 7.5Y5/1　灰色細砂質土　1層+5Y6/2　灰オリーブ色細砂（基盤層）ブロック状に堆積
11. N4/(Y)　灰色細砂質土　基盤層ブロック含む
12. 2.5Y4/1　黄灰色粘質土　杭材の腐食土
13. N4/　灰色シルト　色調変化した基盤層
14. 15層と灰色粘質土のブロック混合　色調変化した基盤層
15. 5Y5/2　灰オリーブ色粘質土
16. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土
17. 5Y5/3　灰オリーブ色粘質土　古代以前の堆積層（Va層）

第14図　ＳＡ001平・断面図



第15図　ＳＢ101・102平・断面図

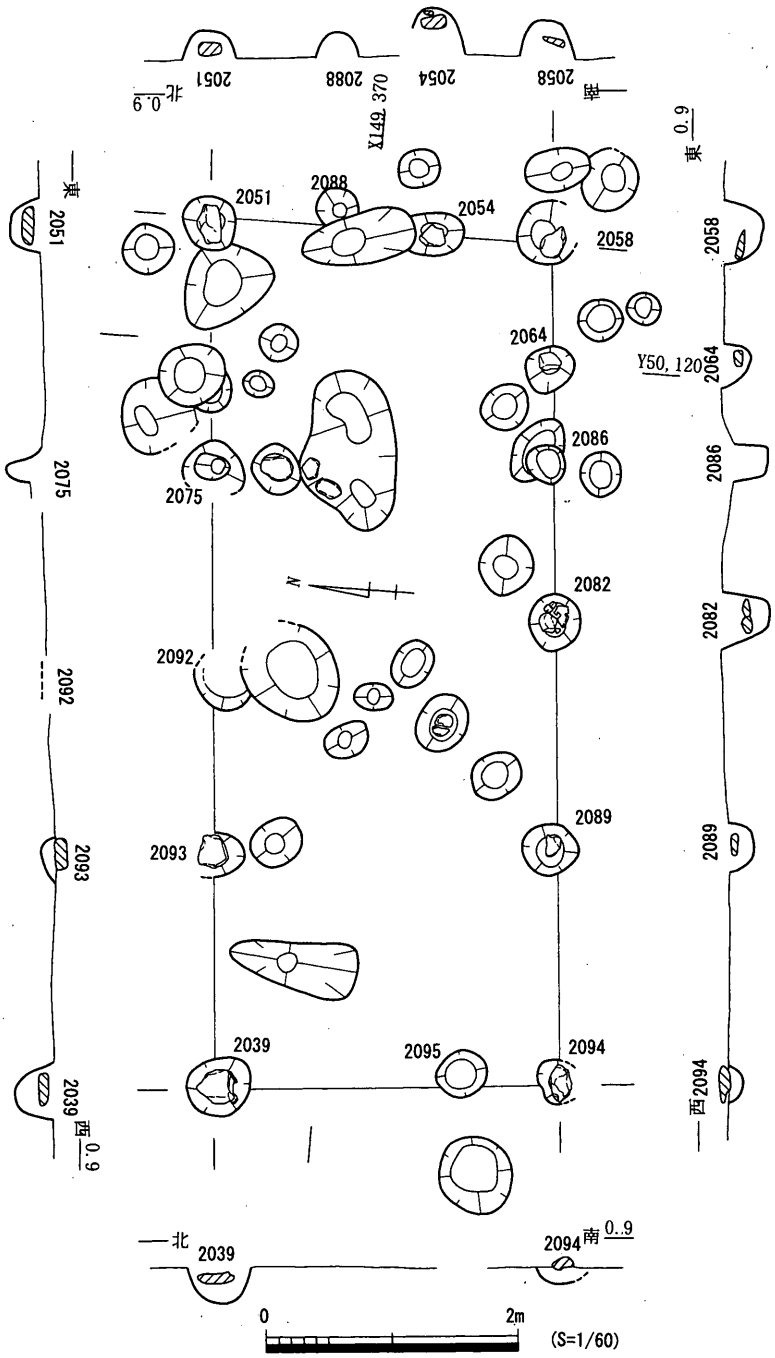
出土遺物　土師質土器杯は、残存状態の良好な１ａ型式（ＳＰ 2086）以外に、１ｃ型式（ＳＰ 2054・2058・2064・2092・2094）・１ｄ型式（ＳＰ 2082）の細片がある。その他須恵器椀（ＳＰ 2051・2089・2093）・備前（2051・2082）細片等が出土している。

時期　残存率の高い１ａ型式を根拠とすれば13世紀末～14世紀前葉と判断できるが、細片ではあるものの１ｃ型式が多くの柱穴から出土しているため、14世紀第３四半期にまで降る可能性もある。

ＳＢ 202（第17図）

Ｃ区中央部で検出。ＳＢ 201とは重複するため、時期差が想定できる。

出土遺物　土師質土器杯１ａ型式の小片（ＳＰ 2055・2074）と１ｂ型式（ＳＰ 2006）・１ｃ型式（ＳＰ 2055）細片が出土している。吉備系土師質土器椀（ＳＰ 2074）・東播系須恵器鉢（ＳＰ 2074）・



第16図　ＳＢ201平・断面図

備前（ＳＰ 2037）・京・信楽系陶器（ＳＰ 2003）細片がある。

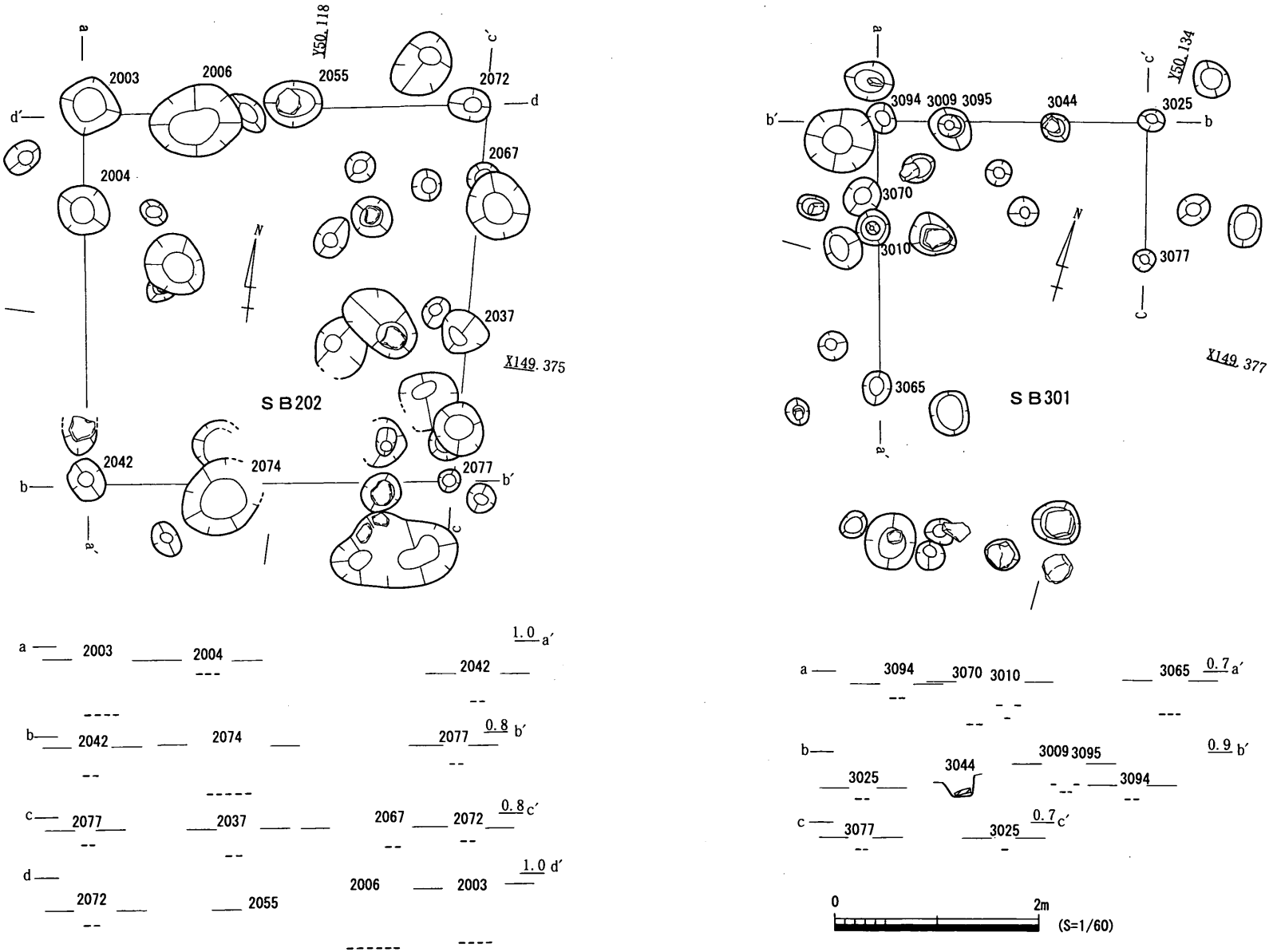
時期　小片の１ａ型式から 13 世紀末～ 14 世紀前半と考えられる。京・信楽系陶器で時期を決定すれば 18 世紀以降となるが、細片１点のみであるため京・信楽系陶器は混入と判断したい。

ＳＢ 301（第 17 図）

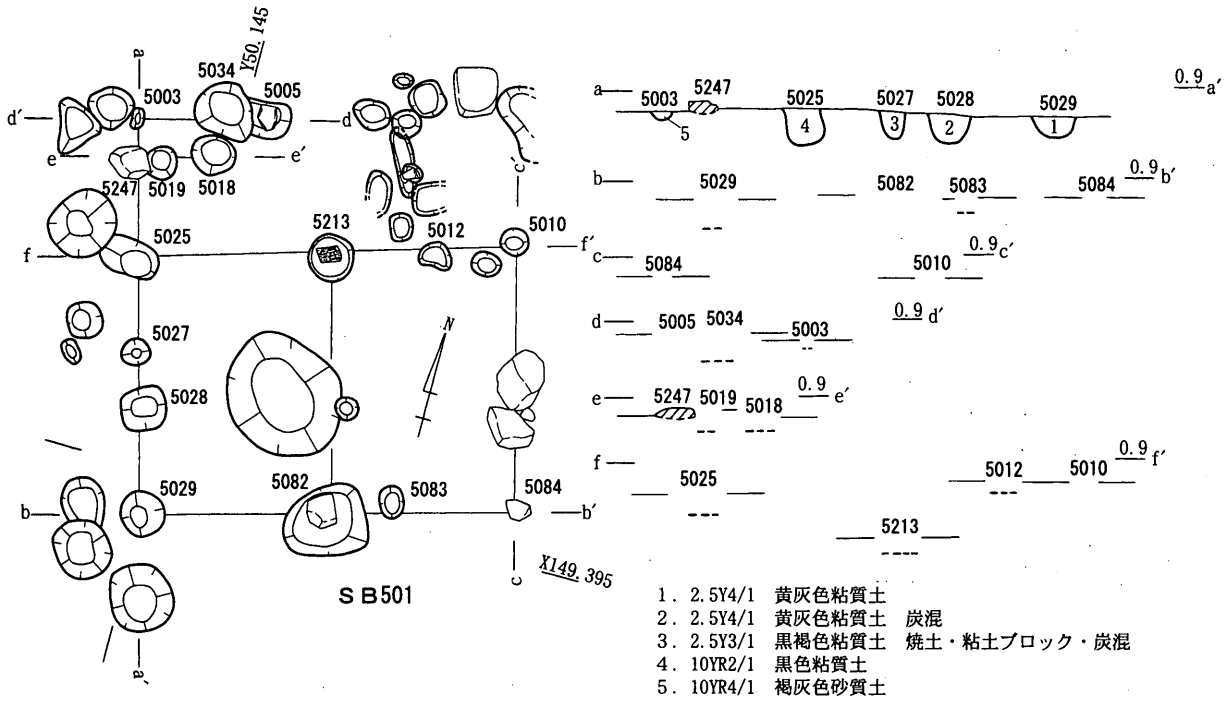
Ｄ区中央部、区画溝ＳＤ 013・014 に挟まれた場所で検出した。ＳＢ 301 を構成するＳＰ 3044・3077 については、近世の溝ＳＤ 303 掘り下げ後に検出した。

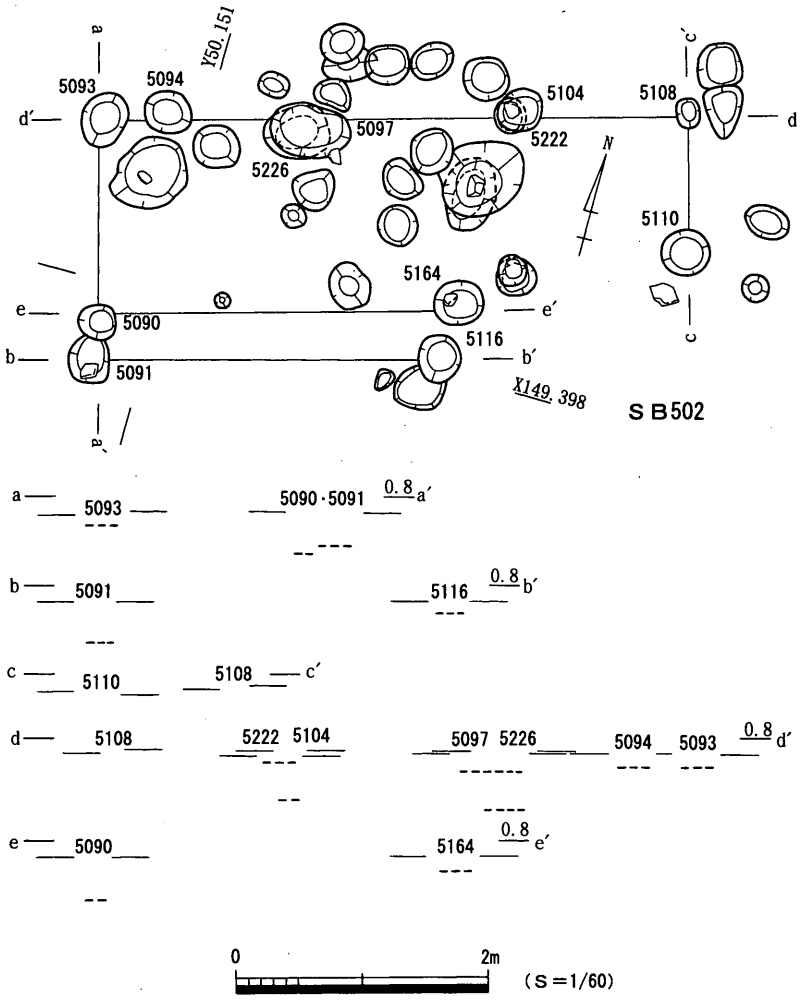
出土遺物　土師質土器杯１ｃ型式（ＳＰ 3070）・足釜（ＳＰ 3070）・鍋（ＳＰ 3010）細片が出土している。

時期　唯一時期決定可能な土師質土器杯１ｂ型式から、14 世紀第２四半期と判断できる。ただし、この杯は細片１点のみであるため断定はできない。



第17図　ＳＢ202・301平・断面図





第18図　ＳＢ501・502平・断面図

ＳＢ 501（第 18 図）

Ｇ区北西部で検出した。ＳＰ 5213 内には礎板が認められる。

出土遺物　土師質土器杯１ｂ型式（ＳＰ 5025）・１ｃ型式（ＳＰ 5028）・瓦器椀（ＳＰ 5082）細片、備前転用円盤状加工品（ＳＰ 5028）、近世施釉陶器細片・近代磁器細片（ＳＰ 5082）が出土している。

時期　細片資料ではあるが、１ｃ型式の土師質土器杯から 14 世紀第３四半期と考えられる。ＳＰ 5082 については記録がなく詳細が不明であることから、近世・近代遺物については保留としておきたい。

ＳＢ 502（第 18 図）

Ｇ区中央部で検出した。

出土遺物　小片である土師質土器杯１ａ型式（ＳＰ 5104）以外の出土遺物はいずれも細片で、土師質土器杯１ｂ型式（ＳＰ 5094・5110・5222）・１ｃ型式（ＳＰ 5108）・足釜（ＳＰ 5091）がある。

時期　３基の柱穴から出土している土師質土器杯１ｂ型式を根拠とすれば、14 世紀第２四半期と考えられる。

ＳＢ 603（第 19 図）

Ｈ区東部、ＳＫ 618 掘り下げ後に検出したが、ＳＫ 618 とは範囲が重複しているため、ＳＫ 618 とは同時併存であった可能性が高い。ピット中にはいずれも柱材が残存していた。建物の面積が狭く、ＳＡ 001 の北端部分と隣接していることから、住居建物ではなく、ＳＡ 001 に関連する施設であったと考えられる。

なお、柱穴内から遺物は出土していない。

時期　ＳＫ 618 と同時期であれば、15 世紀後半となる。

ＳＢ 604（第 19 図）

Ｈ区中央部で検出した建物。

出土遺物　土師質土器１ｃ型式（ＳＰ 6025・6032）、備前細片（ＳＰ 6032）等が出土している。

時期　出土した土師質土器杯から 14 世紀後半と考えられる。

ＳＰ 605（第 20 図）

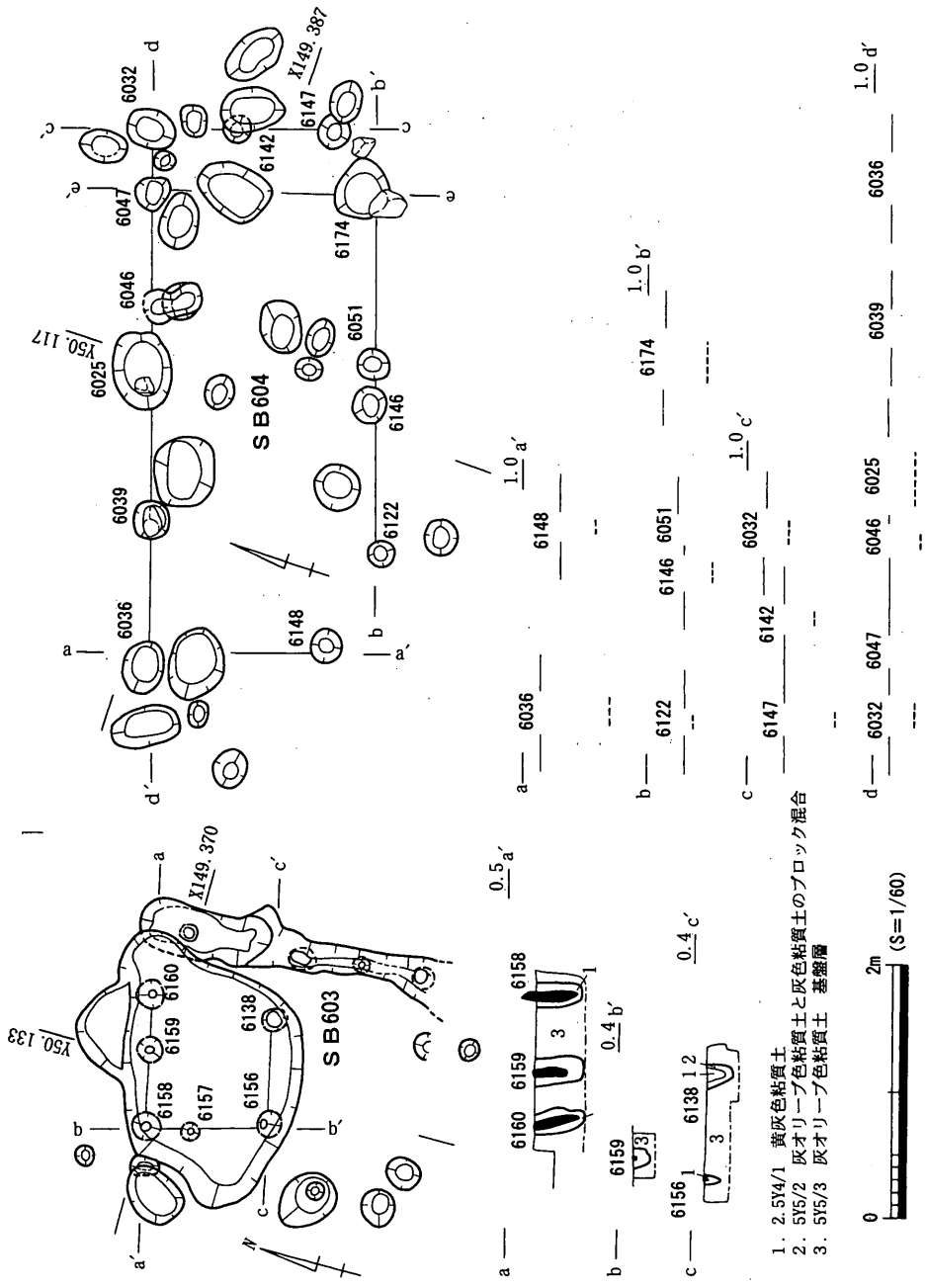
Ｇ区西端部からＨ区東端部にかけて検出した。

出土遺物　土師質土器杯１ｅ型式（ＳＰ 5048）、十瓶山窯系須恵器椀・瓦器椀（ＳＰ 6091）、備前細片（ＳＰ 6109）他、土師質土器杯細片が出土している。

時期　１ｅ型式の土師質土器杯から 15 世紀初頭と判断できる。

ＳＤ 002（第 21・22 図）

Ａ・Ｄ・Ｈ区で検出した南北方向に走る浅い溝状遺構。埋土や周辺の状況からみて流水状態で



第19図 SB603・604平・断面図

あったとは考えにくい。区画溝ＳＤ 013・014、柵列ＳＡ 001 と並行することから、それらに関連する区画的な性格を持った遺構と考えられる。

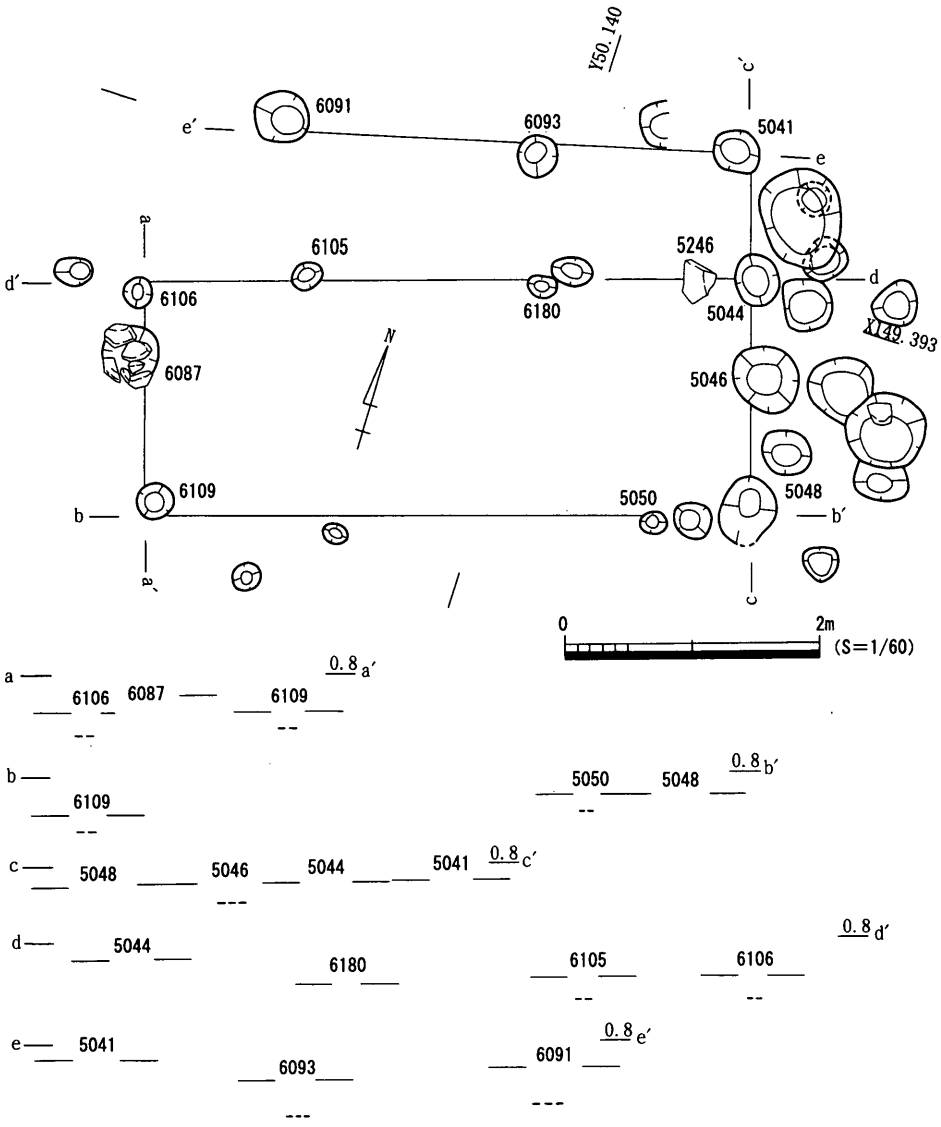
Ａ・Ｄ区部分ではＳＤ 002 の西にピットが南北方向に並び、ＳＤ 002 に関連する遺構（柵列？）が存在した可能性もある。

Ａ区出土遺物（30 ～ 34） 土師質土器杯（30・31）は１ｂ型式。32 は土師質土器足釜。33 は土師質土器擂鉢。34 は平瓦転用の円盤状加工品。

Ｄ区出土遺物（35 ～ 42） 35・36 は土師質土器杯。35 は１ｃ型式。37 は土師質土器擂鉢。38 は東播系須恵器鉢の片口部分。39 は乗岡２ｂ期の備前擂鉢。40 は備前壺。41 は備前甕。42 は土師質土器足釜。

時期 小片ではあるが 35 から 14 世紀代３四半期埋没と考えられる。

ＳＤ 009・ＳＸ 021・ＳＸ 022・ＳＸ 004（第 23 ～ 25・28 ～ 40 図）



第20図　ＳＢ605平・断面図

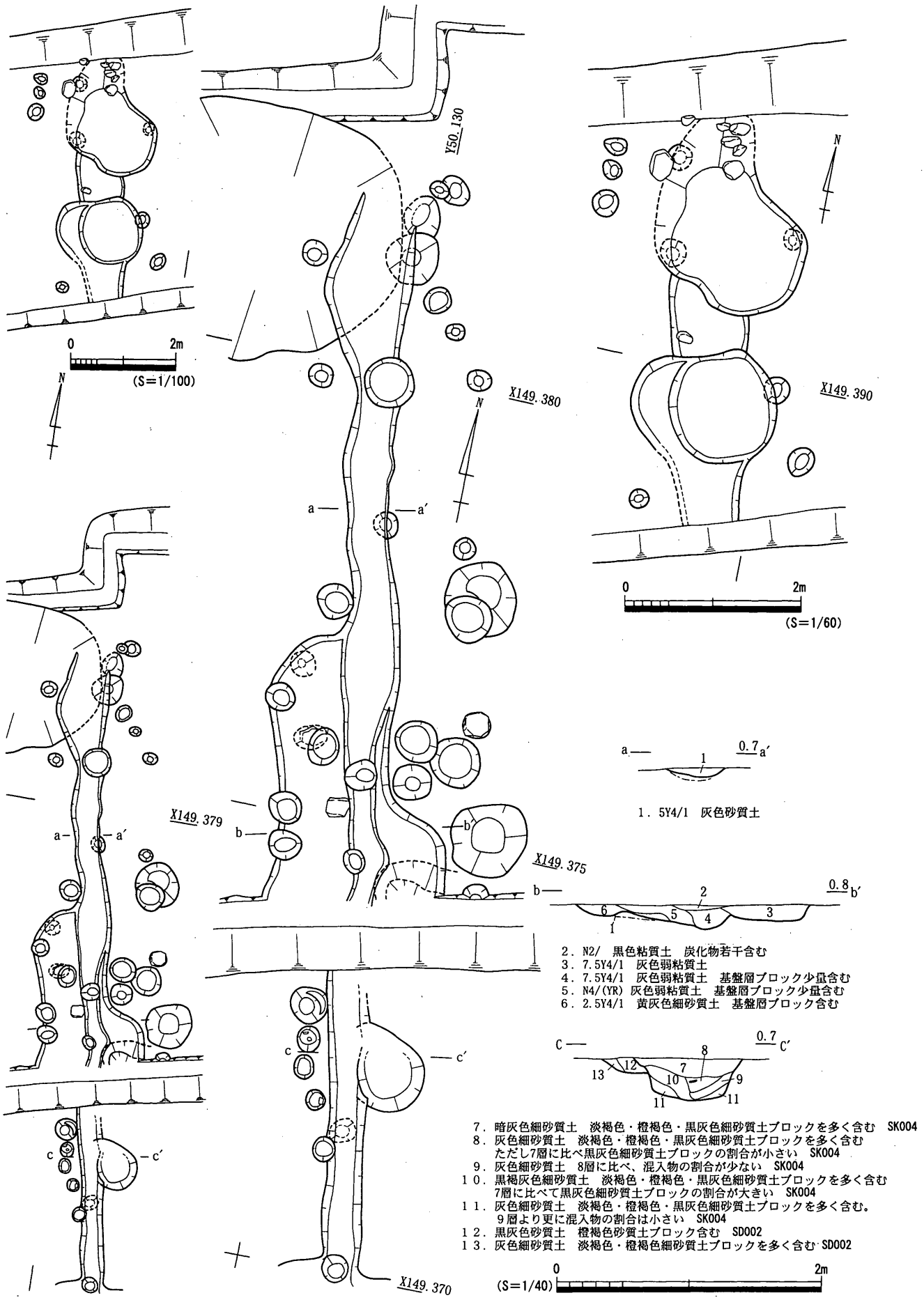
ＳＤ 009 はＡ・Ｂ区南部にある東西方向の溝。上下２層に大別され、上層は近世初頭、下層は中世後半に埋没している。

下層は東端部で屈曲して南北方向のＳＤ 014 に連続し、Ａ区中央部やや西では同じく南北方向のＳＤ 013 と合流する。また、Ｂ区南西部では収束し、それより西に溝が延びていた痕跡は確認できない。ＳＤ 009 下層とＳＤ 013・014 は、その北西部分を取り囲む区画溝であったと考えられる。

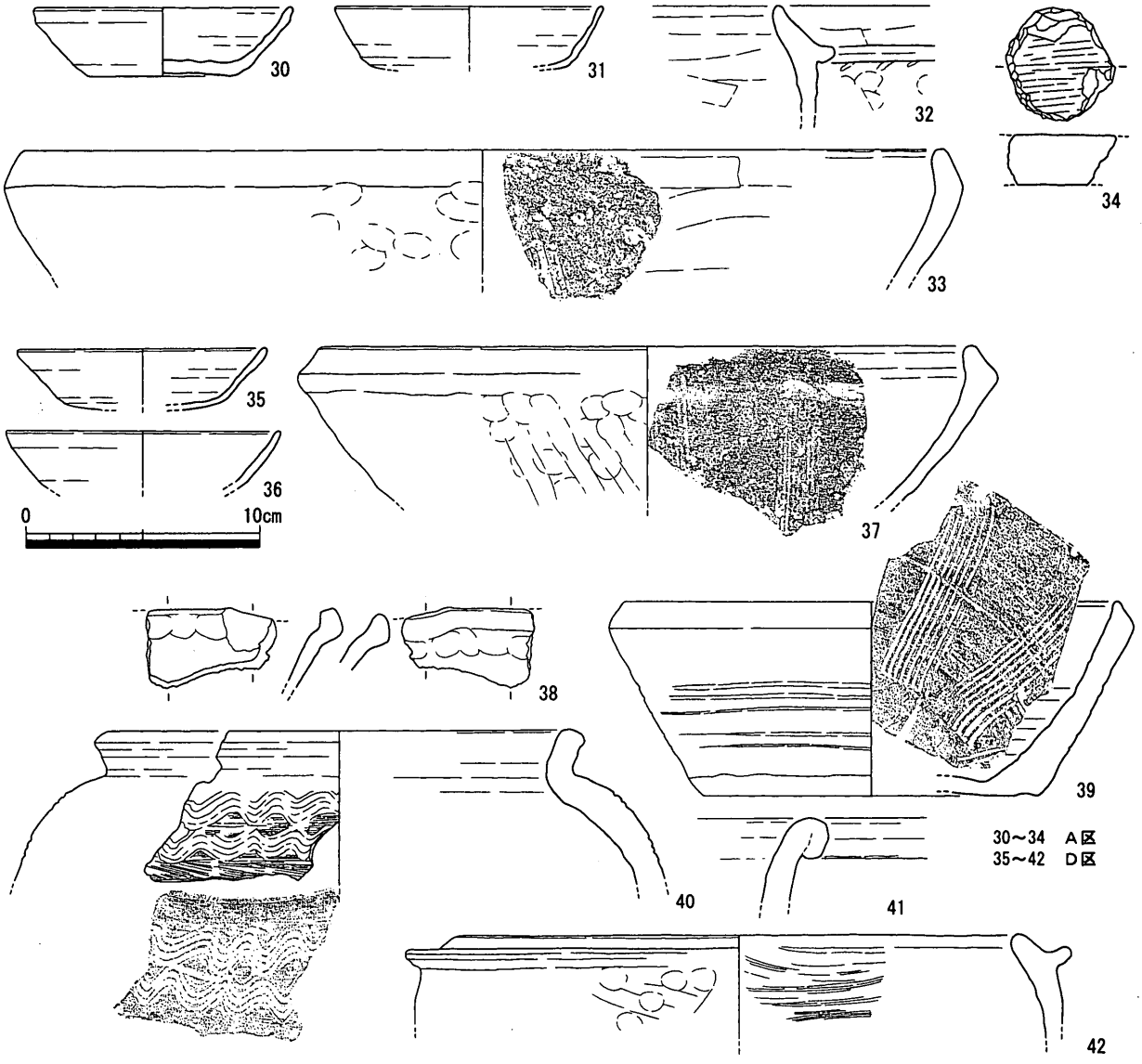
おおまかに４段階に分けられる埋土は、堆水状態による堆積土と人為的な埋め戻し土の交互堆積で、この溝が流水状態にあったとは考えにくい。地形的に高い南側から導水が認められず、収束する箇所があることも、本溝が沖積地にみられる水路を兼ねた区画溝とは異なることを示している。

西端部分の下層②（ＳＸ 021）からは、ウリの種子や多数のチュウ木が出土し、当該部分がトイレ遺構であった可能性が非常に高い。

ＳＤ 014 への屈曲部分に近い場所では、130 個体以上の完形に近い土師質土器、１点の十瓶山窯系須恵器杯、２点の漆器皿が出土している（ＳＸ 022）。これらは、出土状況から見てＳＤ 009 下層の北肩部に廃棄されていたと考えられる。土師質土器杯 108 点中（煤・タール状物質付着の有無が確認できない破片資料は除く）、煤・タール状物質の付着が認められるもの（124 ～ 126）は 88



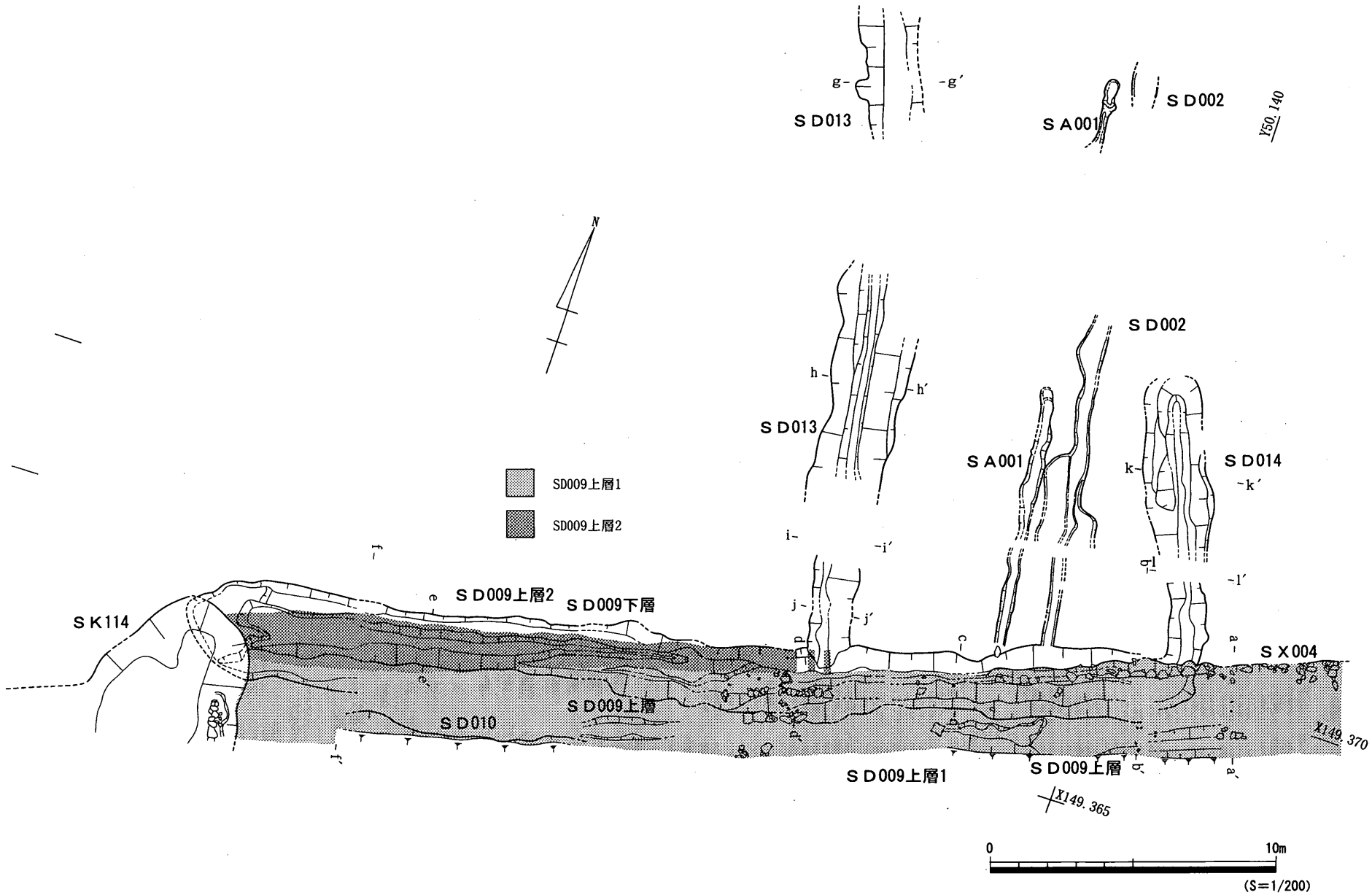
第21図　ＳＤ002平・断面図



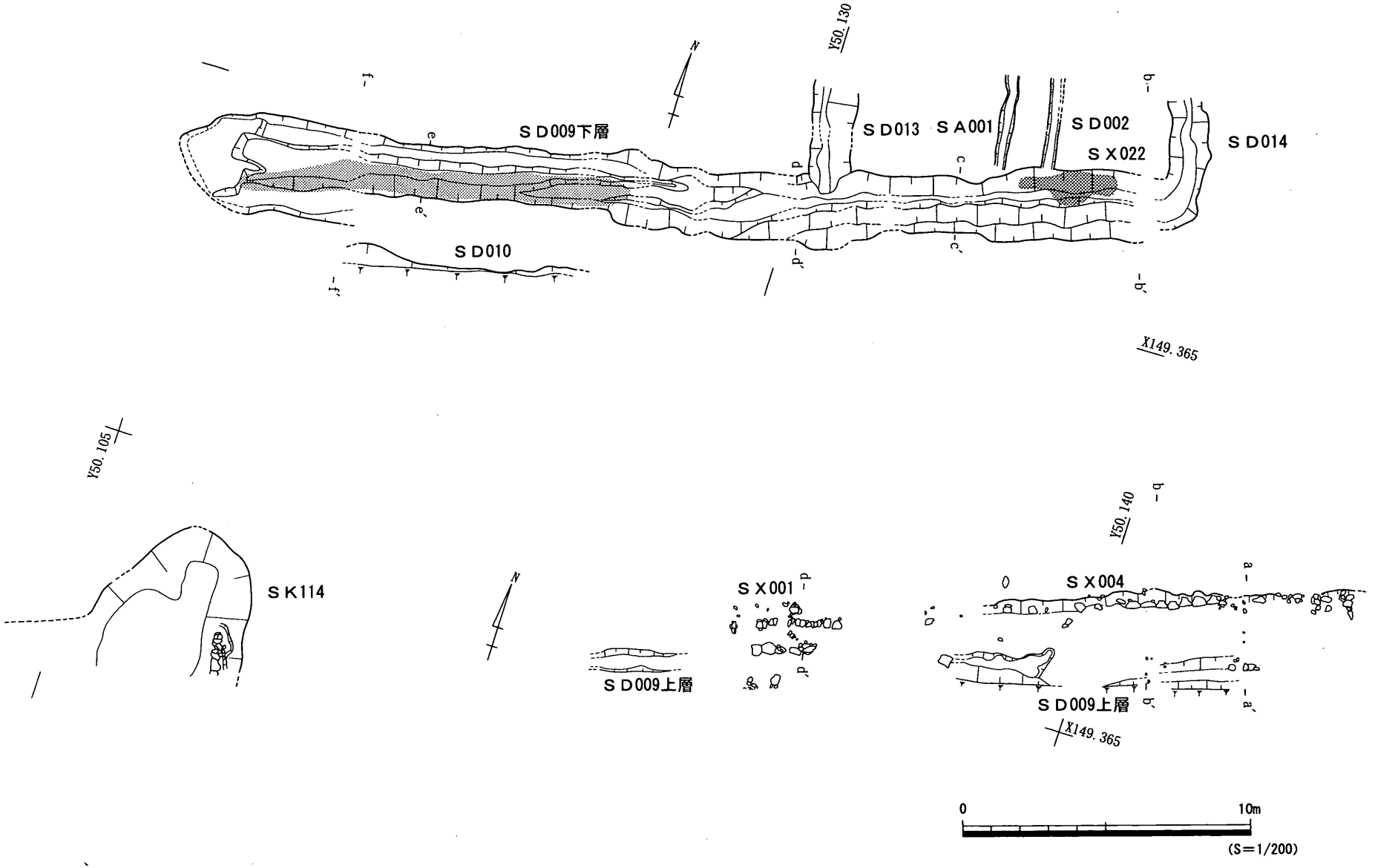
第22図　ＳＤ002出土遺物

点、認められないもの（127～129）は20点である。よって、出土した杯の大多数は、完形に近いとはいえ、1度以上の使用があったことが窺え、煤・タール状物質の付着状況からは杯が灯明皿として使用されたと想定するのが無難であろう。灯明皿としての使用痕跡や、近接した建物が存在しないことから、「饗宴」に伴う廃棄とは想定しがたい。広島県草戸千軒町遺跡ではこういった杯の出土状況を遺構埋め戻し儀式に伴うものと捉えているが（鈴木1996）、本遺構では、埋め戻し時ではなく、この後も溝が存続することから、同様の「儀式」とは考えにくい。また、後述する土師質土器杯埋納遺構では煤の付着は確認できず、これについても「儀式」の内容が異なっていた可能性がある。

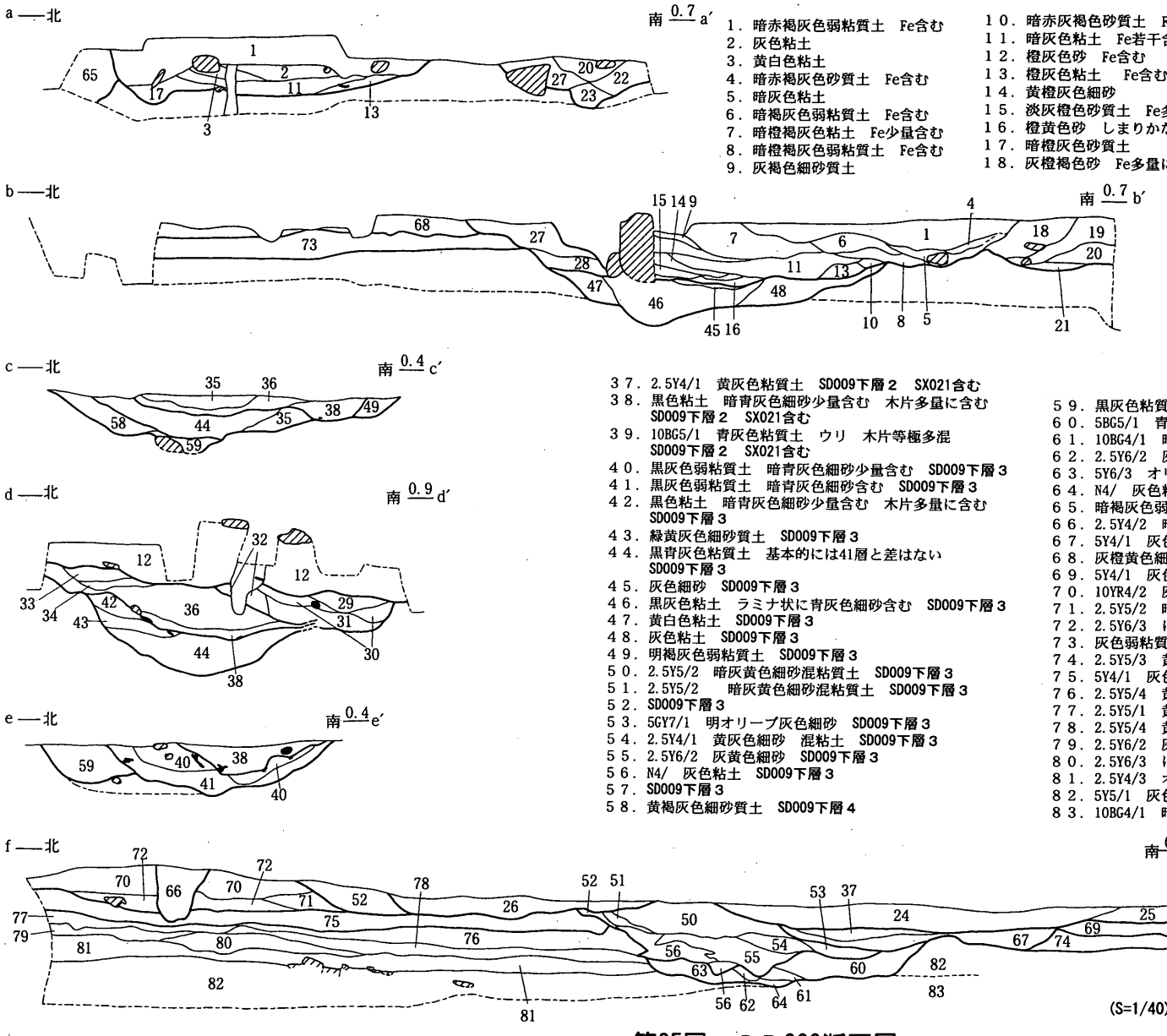
その後、近世初頭になって再度掘削が行われ（ＳＤ009上層）、その際ＳＸ004が形成される。ＳＫ114がＳＤ009埋没後に掘削され、ＳＫ114以西にＳＤ009上層が続かないことから、ＳＤ009上層の西端部はＳＫ114部分で収束していたか、南の調査区外へ屈曲して延びていたか、どちらかの可能性が考えられる。ＳＫ114東肩部の護岸施設をＳＤ009上層に伴うものであるとすれば、ＳＤ009上層が調査区外へ延びていた可能性の方が高い。東端部については、発掘調査時のミス（遺構形成面より低いレベルで遺構を検出した）のため確認できなかった。ただし、下層・ＳＤ014



第23図　ＳＤ009・013・014平面図

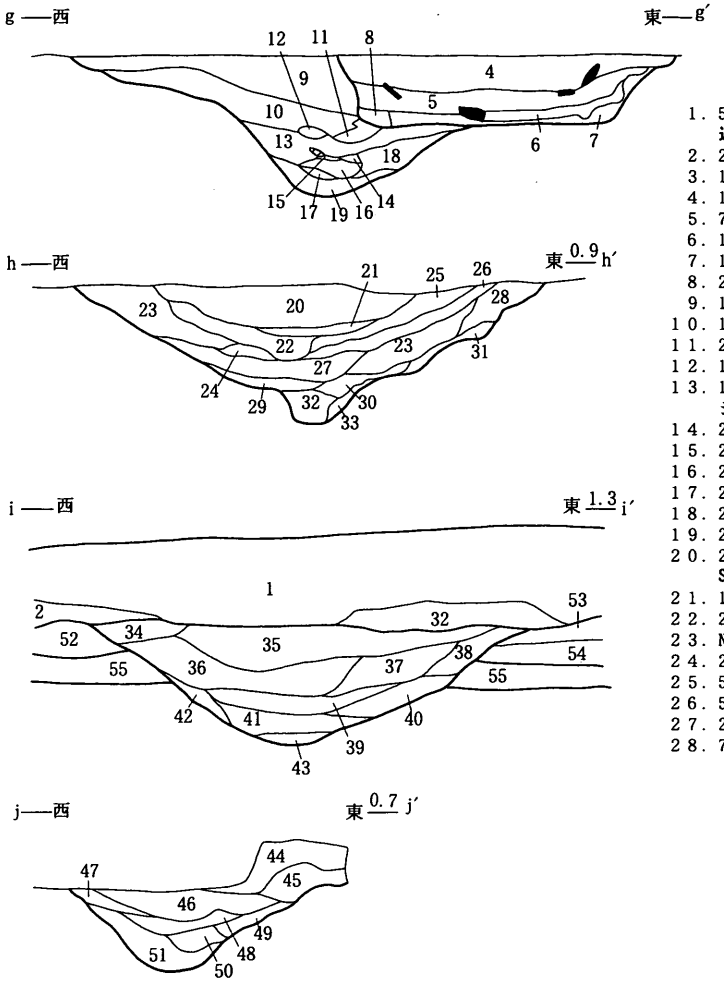


第24図　ＳＤ009上層・下層平面図



1．暗赤褐灰色弱粘質土　Fe含む
2．灰色粘土
3．黄白色粘土
4．暗赤褐灰色砂質土　Fe含む
5．暗灰色粘土
6．暗褐灰色弱粘質土　Fe含む
7．暗橙褐灰色粘土　Fe少量含む
8．暗橙褐灰色弱粘質土　Fe含む
9．灰褐色細砂質土
10．暗赤灰褐色砂質土　Fe多量
11．暗灰色粘土　Fe若干含む
12．橙灰色砂　Fe含む
13．橙灰色粘土　Fe含む
14．黄橙灰色細砂
15．淡灰橙色砂質土　Fe多量含む
16．橙黄色砂　しまりかなり強い
17．暗橙灰色砂質土
18．灰橙褐色砂　Fe多量に含む
19．暗橙褐灰色粘土　Fe若干含む
20．灰色粘土　Fe多く含む
21．淡橙灰色細砂弱粘質土
22．明灰色弱粘質土
23．濃灰色弱粘質土
24．10YR3/2　黒褐色細砂質土　SD009上層
25．10YR4/1　褐灰色細砂混粘質土 SD009上層
26．SD009上層
27．暗橙灰色砂質土
SD009下層(SX004裏込めの可能性あり)
28．暗褐灰色弱粘質土
SD009下層(SX004裏込めの可能性あり)
29．橙灰色粘土　Fe含む　SD009下層１
30．暗黄灰色砂　しまりやや強い　SD009下層１
31．灰色弱粘質土　砂粒細かい　SD009下層１
32．淡緑黄灰色砂質土　SD009下層１
33．淡黄褐灰色弱粘質土　SD009下層２　SX021含む
34．暗黄褐灰色細砂質土　SD009下層２　SX021含む
35．灰色細砂質土　SD009下層２　SX021含む
36．橙灰褐色細砂質土　SD009下層２　SX021含む
37．2.5Y4/1　黄灰色粘質土　SD009下層２　SX021含む
38．黒色粘土　暗青灰色細砂少量含む　木片多量に含む
SD009下層２　SX021含む
39．10BG5/1　青灰色粘質土　ウリ　木片等極多混
SD009下層２　SX021含む
40．黒灰色弱粘質土　暗青灰色細砂少量含む　SD009下層３
41．黒灰色弱粘質土　暗青灰色細砂含む　SD009下層３
42．黒色粘土　暗青灰色細砂少量含む　木片多量に含む
SD009下層３
43．緑黄灰色細砂質土　SD009下層３
44．黒青灰色粘質土　基本的には41層と差はない
SD009下層３
45．灰色細砂　SD009下層３
46．黒灰色粘土　ラミナ状に青灰色細砂含む　SD009下層３
47．黄白色粘土　SD009下層３
48．灰色粘土　SD009下層３
49．明褐灰色弱粘質土　SD009下層３
50．2.5Y5/2　暗灰黄色細砂混粘質土　SD009下層３
51．2.5Y5/2　暗灰黄色細砂混粘質土　SD009下層３
52．SD009下層３
53．5GY7/1　明オリーブ灰色細砂　SD009下層３
54．2.5Y4/1　黄灰色細砂　混粘土　SD009下層３
55．2.5Y6/2　灰黄色細砂　SD009下層３
56．N4/　灰色粘土　SD009下層３
57．SD009下層３
58．黄褐灰色細砂質土　SD009下層４
59．黒灰色粘質土　暗青灰色細砂含む　SD009下層４
60．5BG5/1　青灰色細砂　腐植木質極多混　SD009下層４
61．10BG4/1　暗青灰色細砂　SD009下層４
62．2.5Y6/2　灰黄色細砂　SD009下層４
63．5Y6/3　オリーブ黄色細砂　SD009下層４
64．N4/　灰色粘土　SD009下層４
65．暗褐灰色弱粘質土　遺構
66．2.5Y4/2　暗灰黄色粘質土　SP
67．5Y4/1　灰色粘質土　遺構
68．灰橙黄色細砂質土（シルト）　中世前半堆積層（Ⅳa層）
69．5Y4/1　灰色細砂混粘質土　中世前半堆積層（Ⅳa層）
70．10YR4/2　灰黄褐色粘質土　中世前半堆積層（Ⅳa層）
71．2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土　中世前半堆積層（Ⅳa層）
72．2.5Y6/3　にぶい黄色粘質土　中世前半堆積層（Ⅳa層）
73．灰色弱粘質土　砂粒細かい　中世前半堆積層（Ⅳb層）
74．2.5Y5/3　黄褐色細砂　中世前半堆積層（Ⅳb層）
75．5Y4/1　灰色粘質土　中世前半堆積層（Ⅳb層）
76．2.5Y5/4　黄褐色細砂　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
77．2.5Y5/1　黄灰色微細砂　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
78．2.5Y5/4　黄褐色細砂　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
79．2.5Y6/2　灰黄色細砂　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
80．2.5Y6/3　にぶい黄色細砂　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
81．2.5Y4/3　オリーブ褐色細砂　礫、炭混　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
82．5Y5/1　灰色細砂　粘土・炭・木片・土器片混　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
83．10BG4/1　暗青灰色細砂　粘土混　古代以前の堆積層（Ⅴa層）

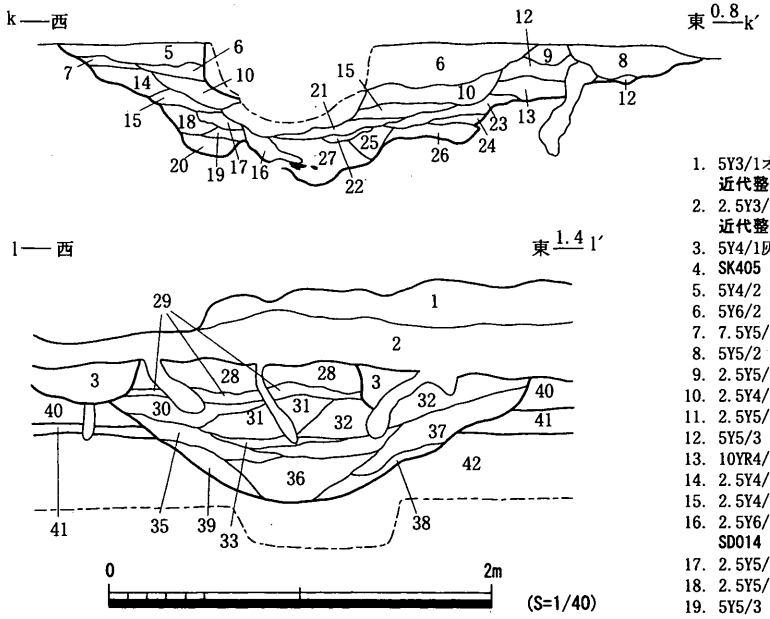
第25図　ＳＤ009断面図



1．5Y3/1　オリーブ黒色細砂質土　0.5～3.0cm大の小礫多く含む
近世整地層（Ⅱb層）
2．2.5Y4/3　オリーブ褐色砂　近代整地層（Ⅱb層）
3．10Y6/1　灰色細砂
4．10YR4/2　灰黄褐色粘質土　10YR6/2　灰黄褐色粘土ブロック少混　SK625
5．7.5YR3/1　黒褐色粘質土　炭小混　SK625
6．10YR3/2　黒褐色粘質土　5層より少し砂質　SK625
7．10YR4/2　灰黄褐色粘質土　10YR4/2灰黄褐色粘土ブロック多混　SK625
8．2.5Y5/2暗灰黄色粘土　SK625
9．10YR4/2　灰黄褐色砂質土　炭・焼土少混　SD013
10．10YR4/1　褐灰色粘質土　SD013
11．2.5Y5/2暗灰黄色砂質土　SD013
12．10YR4/2　灰黄褐色細砂　SD013
13．10YR3/1　黒褐色細砂質土　中央へと傾斜するラミナ状堆積、中央ほどシルト質　SD013
14．2.5Y5/2暗灰黄色細砂質土　SD013
15．2.5Y4/1　黄灰色シルト　SD013
16．2.5Y2/1　黒色シルト　SD013
17．2.5Y6/2　灰黄色細砂　SD013
18．2.5Y5/3　黄褐色細砂　SD013
19．2.5Y6/3　にぶい黄色細砂　SD013
20．2.5Y4/1　黄灰色細砂質土　7.5Y6/2　灰オリーブ色粘土ブロック少量含む　SD013
21．10Y5/1　灰色細砂質土　SD013
22．2.5Y5/2　暗灰黄色細砂質土　炭化物若干含む　SD013
23．N4/(Y)　灰色弱粘質土　2.5Y5/3　黄褐色粘土ブロック多く含む SD013
24．2.5Y6/2　灰黄色細砂　N4/(Y)　灰色細砂質土ブロック若干含む　SD013
25．5Y5/1　灰色細砂質土　基盤層+N4/(Y)　灰色細砂質土　SD013
26．5Y4/1　灰色細砂質土　基盤層+N4/(Y)　灰色細砂質土　SD013
27．2.5Y5/1　黄灰色弱粘質土　N4/(Y)　灰色粘土ブロック若干含む　SD013
28．7.5Y6/1灰色細砂質土　基盤層+N4/(Y)灰色砂質土　SD013
29．2.5Y6/2　灰黄色細砂　上下Fe沈着　SD013
30．N5/(Y)　灰色弱粘質土　Fe沈着　SD013
31．N5/(Y)　灰色砂質土　SD013
32．N3/　暗灰色粘土　SD013
33．5Y5/2　灰オリーブ色細砂質土　SD013
34．7.5Y4/1　灰色細砂質土　SD013
35．5Y5/1　灰色細砂質土　SD013
36．2.5Y5/2　暗灰黄色細砂質土　5Y6/4　オリーブ黄色細砂質土ブロック含む　SD013
37．2.5Y5/2　暗灰黄色細砂質土　5Y6/4　オリーブ黄色細砂質土ブロック含む　ただし N3/(Y)　暗灰色砂ブロックを含むため黒っぽく見える　SD013
38．5Y4/1　灰色細砂質土　混入物は37層とほぼ同じ　ただしさらにN3/(Y)暗灰色砂ブロックを含む割合が大きい　SD013
39．7.5Y5/1灰色細砂　SD013
40．7.5Y5/2灰オリーブ色弱粘質土　SD013
41．N3/(Y)暗灰色粘土　SD013
42．10YR4/3にぶい黄褐色細砂質土　5Y5/2　灰オリーブ色細砂+Fe　SD013
43．2.5Y5/1黄灰色細砂　SD013
44．淡橙黄褐灰色弱粘質土　SD013
45．褐灰色砂質土　SD013
46．橙褐灰色砂質土　SD013
47．橙褐灰色弱粘質土　SD013
48．SD013
49．暗黄灰色粘質土　SD013
50．SD013
51．SD013
52．10Y7/2灰白色砂　中世前半埋積層(Ⅳa層)
53．5Y6/3オリーブ黄色細砂　中世前半堆積層(Ⅳa層)
54．2.5Y6/4にぶい黄色細砂質土　しまりかなり強い　Fe含む　10YR5/6黄褐色ブロック多量に含む　中世前半堆積層(Ⅳa層)
55．N4/(Y)灰色細砂弱粘質土　中世前半堆積層(Ⅳb層)

0　2m　(S=1/40)

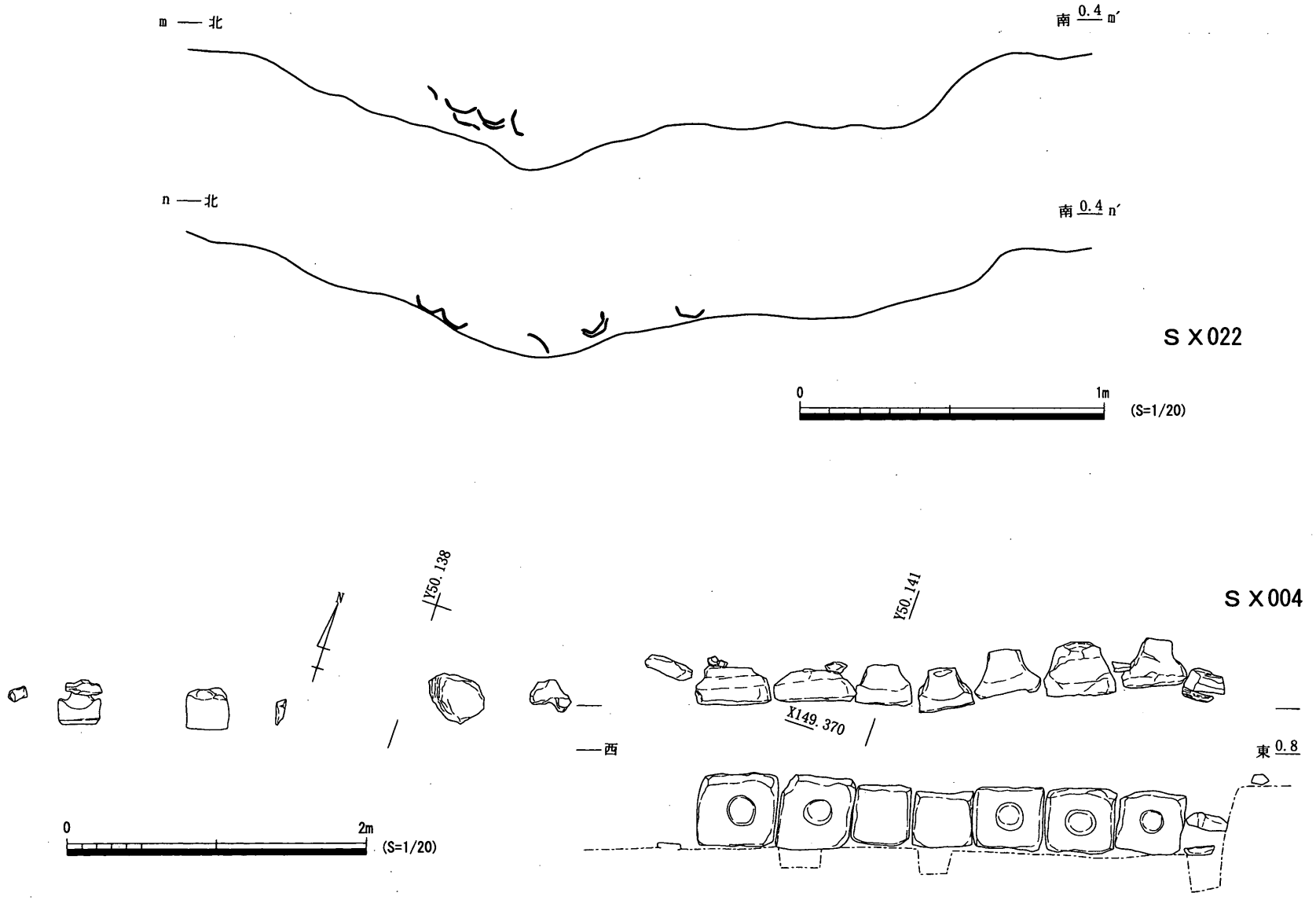
第26図　ＳＤ013断面図



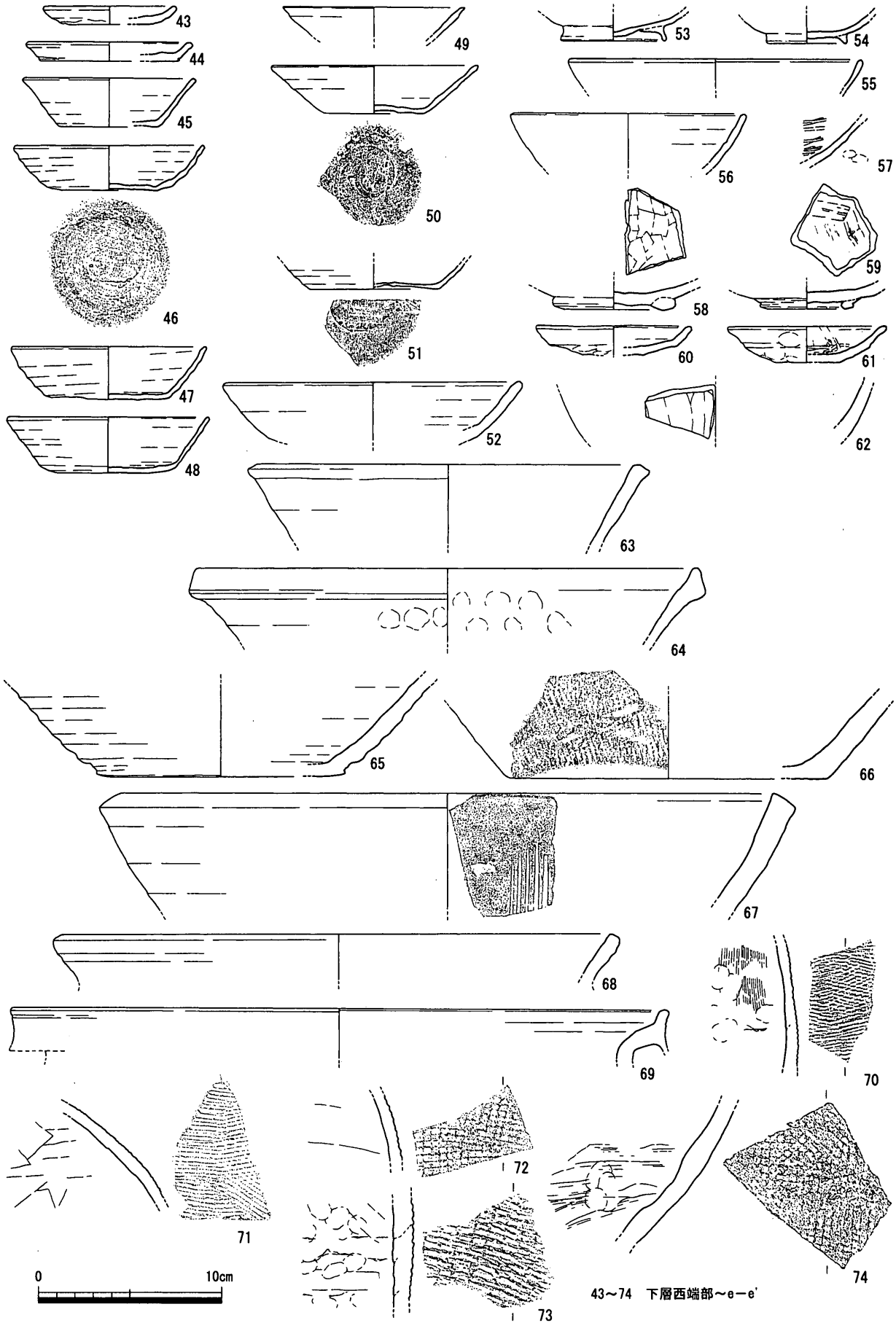
1. 5Y3/1オリーブ黒色細砂質土　0.5～3.0cm大の小礫多く含む
近代整地層（Ｉb層）
2. 2.5Y3/1黒褐色砂質土　混入物等1層に似る　1層より多少赤みが強い
近代整地層（Ｉb層）
3. 5Y4/1灰色細砂質土　2.5Y6/4　にぶい黄色細砂質土ブロック含む　遺構
4. SK405
5. 5Y4/2　灰オリーブ色砂質土　灰色砂質土に黄色砂ブロック　SD014
6. 5Y6/2　灰オリーブ色砂　SD014
7. 7.5Y5/2　灰オリーブ色弱粘質土　SD014
8. 5Y5/2　灰オリーブ色弱粘質土　SD014
9. 2.5Y5/1　黄灰色砂質土　5Y5/2灰オリーブ色粘土ブロック含む　SD014
10. 2.5Y4/1　黄灰色砂質土　若干粘性あり　SD014
11. 2.5Y5/1　灰色砂質土　N4/(Y)灰色弱粘質土ブロック少量含む　SD014
12. 5Y5/3　黄褐色弱粘質土　SD014
13. 10YR4/1　褐灰色砂質土　炭化物少量含む　SD014
14. 2.5Y4/2　暗灰黄色弱粘質土　SD014
15. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土　若干粘性あり　SD014
16. 2.5Y6/1　黄灰色細砂　N4/(Y)灰色弱粘質土ブロック含む　木片少量含む
SD014
17. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂　SD014
18. 2.5Y5/2　暗灰黄色砂　N4/(Y)灰色砂質土ブロック含む　SD014
19. 5Y5/3　灰オリーブ色砂質土　SD014
20. 5Y5/2+N4/(Y)　灰オリーブ色砂質土+灰色弱粘質土　SD014
21. 10YR4/1　褐灰色砂　13層に似るが若干褐色強い　SD014
22. 10Y4/1　灰色粘質土　SD014
23. 10Y6/1　灰色砂　Fe含む　SD014
24. 10Y6/1　灰色砂　5Y6/6　オリーブ色粘質土ブロック含む
25. 10Y4/1　灰色粘質土　22層より黄色強い　木片含まない　SD014
26. N4/(Y)　灰色弱粘質土　SD014
27. N3/(Y)　暗灰色粘土　2.5Y6/1　黄灰色細砂部分的に含む　SD014
28. 10YR5/2　灰黄褐色砂質土　SD014
29. 2.5Y5/2　暗灰黄色細砂質土　SD014
30. 2.5Y5/3　黄褐色細砂質土　SD014
31. 2.5Y6/2　灰黄色細砂質土　SD014
32. 2.5Y6/3　にぶい黄色細砂質土　SD014
33. 2.5Y6/6　明黄褐色細砂質土　SD014
34. N6/(Y)　灰色細砂質土　5Y5/2　灰オリーブ色細砂質土もしくは2.5Y6/6
明黄褐色細砂質土ブロック多く含む　SD014
35. N6/(Y)　灰色細砂質土　SD014
36. N3/(Y)　暗灰色粘質土　SD014
37. N6/(Y)　灰色細砂質土　2.5Y6/4　にぶい黄色細砂質土・5Y5/2灰オリーブ色
細砂質土ブロック含む　SD014
38. N5/(Y)　灰色細砂質土　5Y5/2灰オリーブ色細砂質土ブロック若干含む　SD014
39. N6/(Y)　灰色細砂質土　2.5Y6/4にぶい黄色細砂質土・5Y5/2灰オリーブ色
細砂質土ブロック含む　SD014
40. 2.5Y6/4　にぶい黄色細砂質土　しまりかなり強い　Fe含む　10YR5/6
黄褐色ブロック多量に含む　中世前半堆積層（IVa層）
41. N4/(Y)　灰色細砂弱粘質土　中世前半堆積層（IVb層）
42. 5Y5/2　灰オリーブ色細砂質土　古代以前の堆積層（Ｖa層）

第27図　ＳＤ014断面図

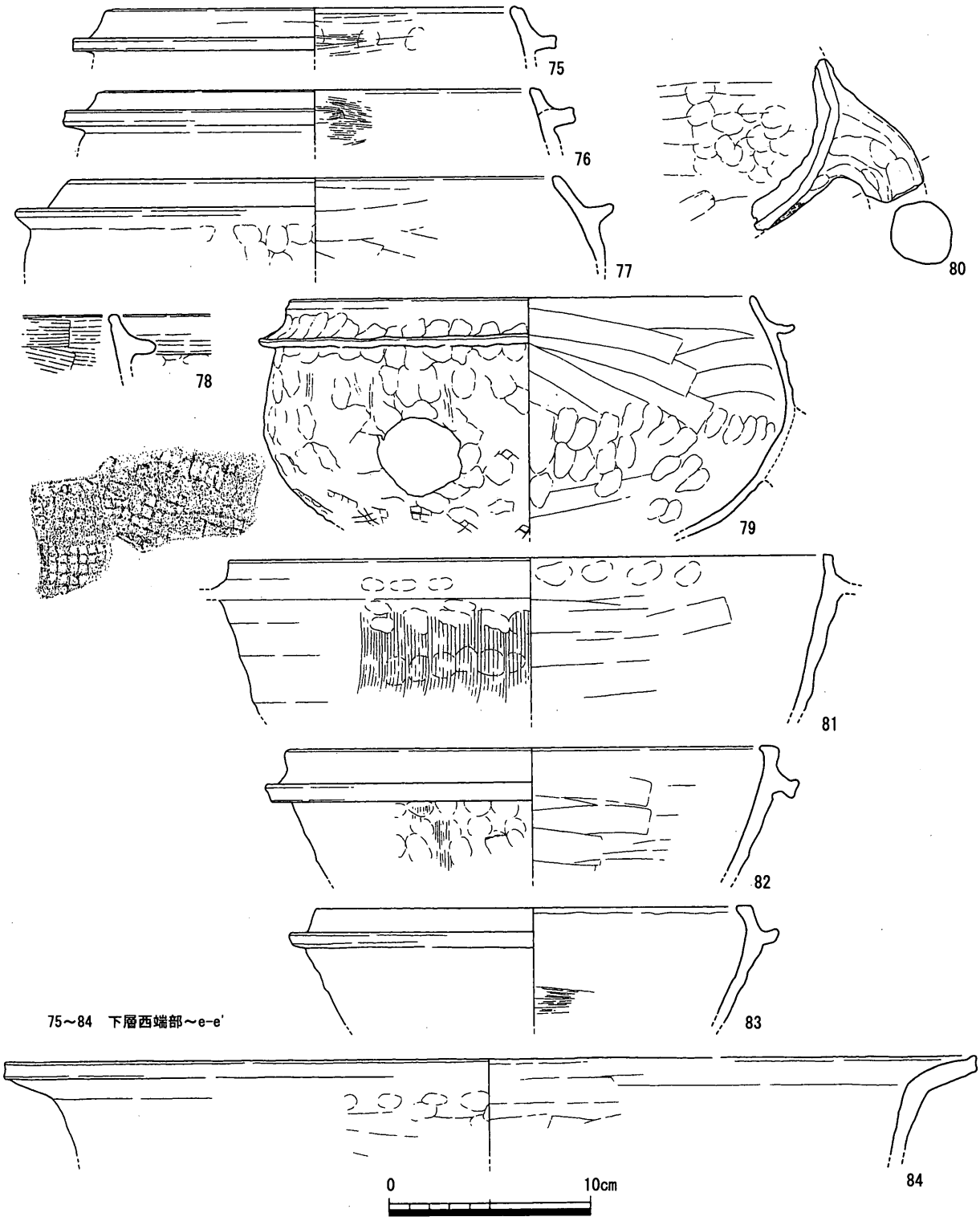
第28図　ＳＸ022遺物出土状況



第29図　ＳＸ022断面図、ＳＸ004平・断面図



第30図　ＳＤ009出土遺物（１）



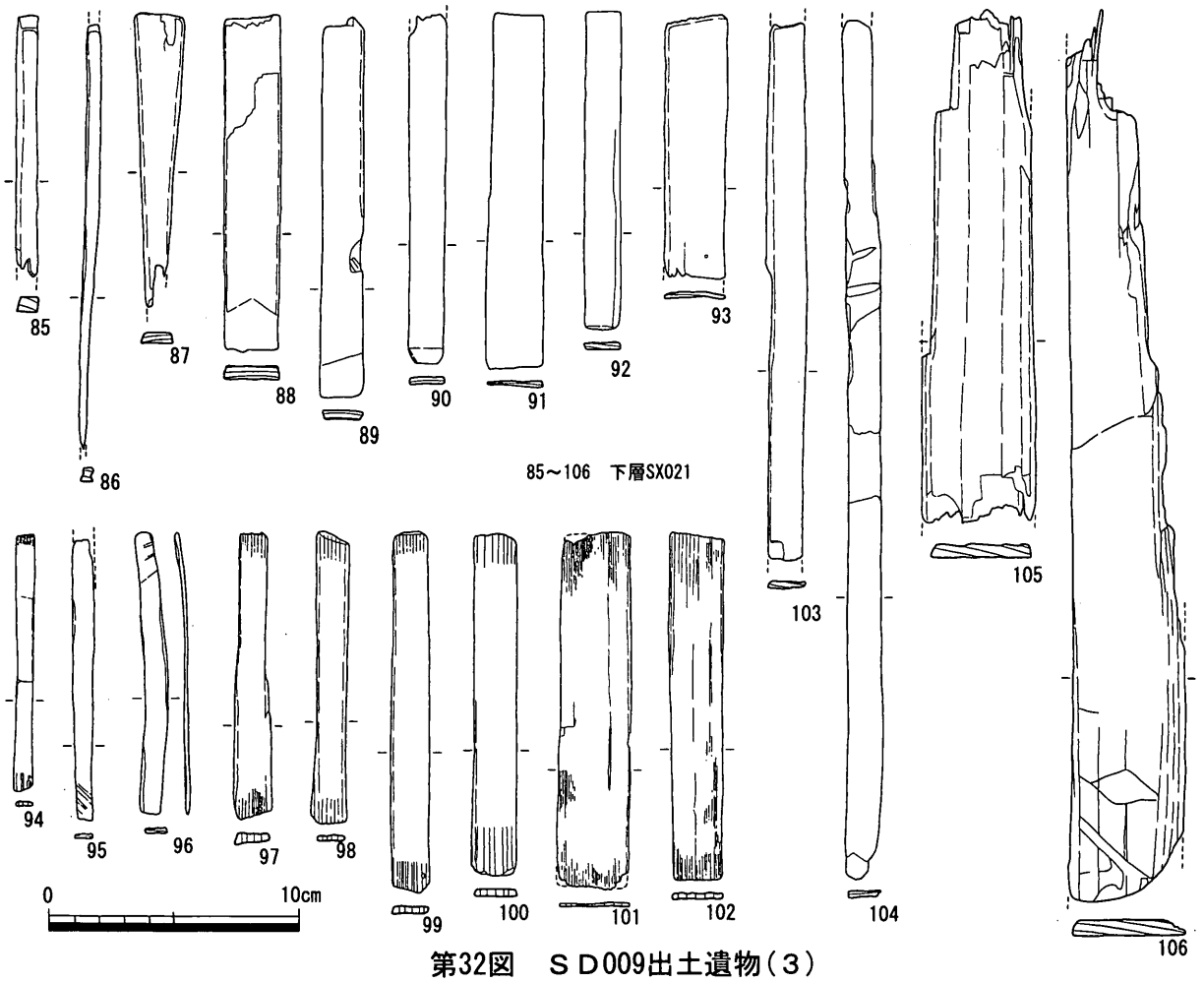
第31図　ＳＤ009出土遺物（２）

の屈曲部以東に延びることは間違いなく、南西一北東方向のＳＤ 003・008 に連続していた可能性が高い。

なお、上層埋土中からは多量の獣骨が出土している。

調査時には、上層と下層の一部を「上層」として同時に掘削したため、「上層」取り上げ遺物には中世と近世のものが混在している。ここでは、確実に下層取り上げのもの以外に、「上層」取り上げのものを中世遺物と近世遺物に分けて報告することとする。よって、上層取り上げ遺物のうち中世遺物は、下層堆積時の最終埋没を示す時期のものを含むと考えられる。

下層西端部～ｅ－ｅ′出土遺物（43～74）　43・44 は土師質土器小皿。45～52 は１ａ型式に含まれる土師質土器杯。椀には吉備系土師質土器（53・54）、十瓶山窯系須恵器（55・56・58・59）、



第32図　ＳＤ009出土遺物（３）

瓦器（57）がある。60・61は瓦器皿。63は須恵器鉢。64・65は東播系須恵器鉢。66は瓦質土器鉢。67は備前擂鉢。68～74は須恵器甕。うち73は十瓶山窯系須恵器、69は東播系須恵器。75～84は土師質土器足釜。81～83は土師質土器羽釜、84は土師質土器鍋。

下層ＳＸ021出土遺物（85～106）　85～106はチュウ木と考えられる木製品。断面正方形の棒状のもの（85・86）と板目取りで板状のもの（87～106）、柾目取りで薄い板状板のものがある。104～106のように、チュウ木として使用するには大きすぎるものも見られることから、排泄時にこれらを適宜削る、割るなどして適当な大きさのチュウ木をつくり出して使用していた可能性が考えられる。

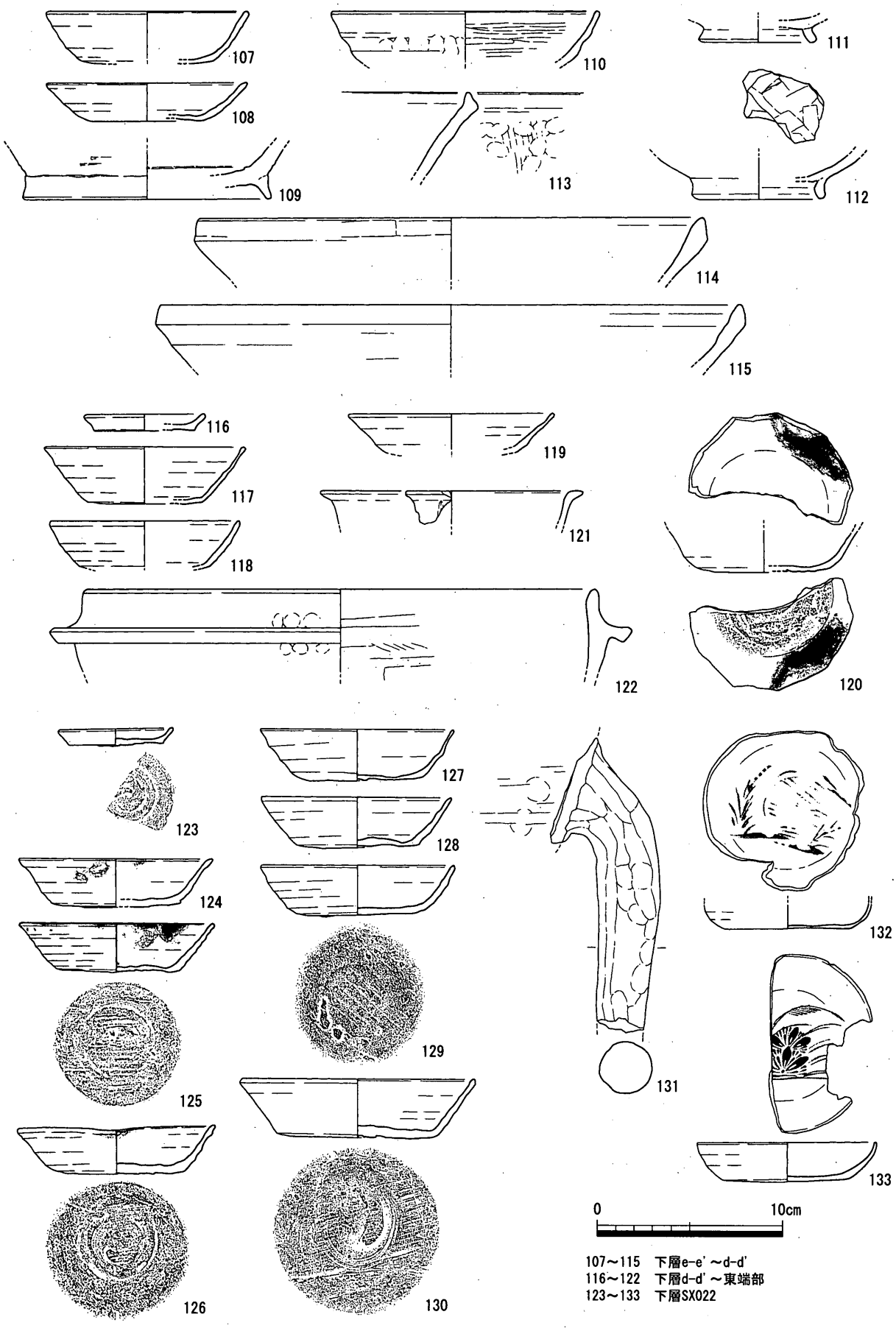
下層ｅ－ｅ′～ｄ－ｄ′出土遺物（107～115）　107は１ａ型式、108は１ｃ型式の土師質土器杯。109は尾張型山茶碗。６型式。110は十瓶山窯系須恵器椀。111・112は土師質土器椀。113は土師質土器鉢。114は楠井窯産擂鉢。115は須恵器鉢。

下層ｄ－ｄ′～東端部出土遺物（116～122）　116は土師質土器小皿。117～120は土師質土器杯。うち117・118は１ａ型式、119は１ｃ型式。121は青磁碗。122は土師質土器羽釜。

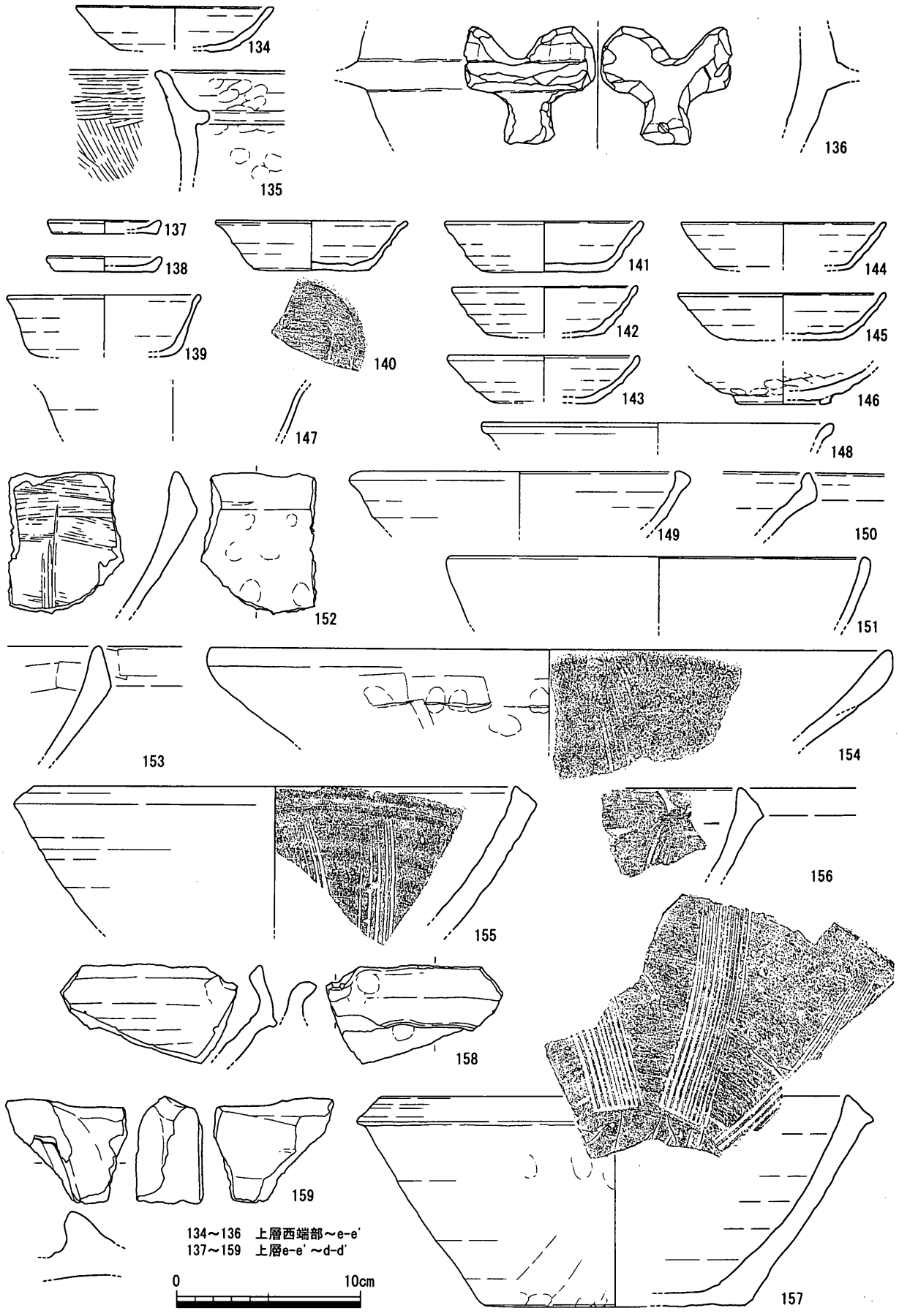
下層ＳＸ022出土遺物（123～133）　123は土師質土器小皿。124～129は１ａ型式の土師質土器杯。130は十瓶山窯系須恵器杯。131は土師質土器足釜。132・133は漆器皿。

上層西端部～ｅ－ｅ′出土中世遺物（134～136）　134は１ｂ型式の土師質土器杯。135は土師質土器足釜。136は滑石製石鍋転用の石製品。鍔部を中心に「Ｙ」字状に打ち欠いて成形されている。

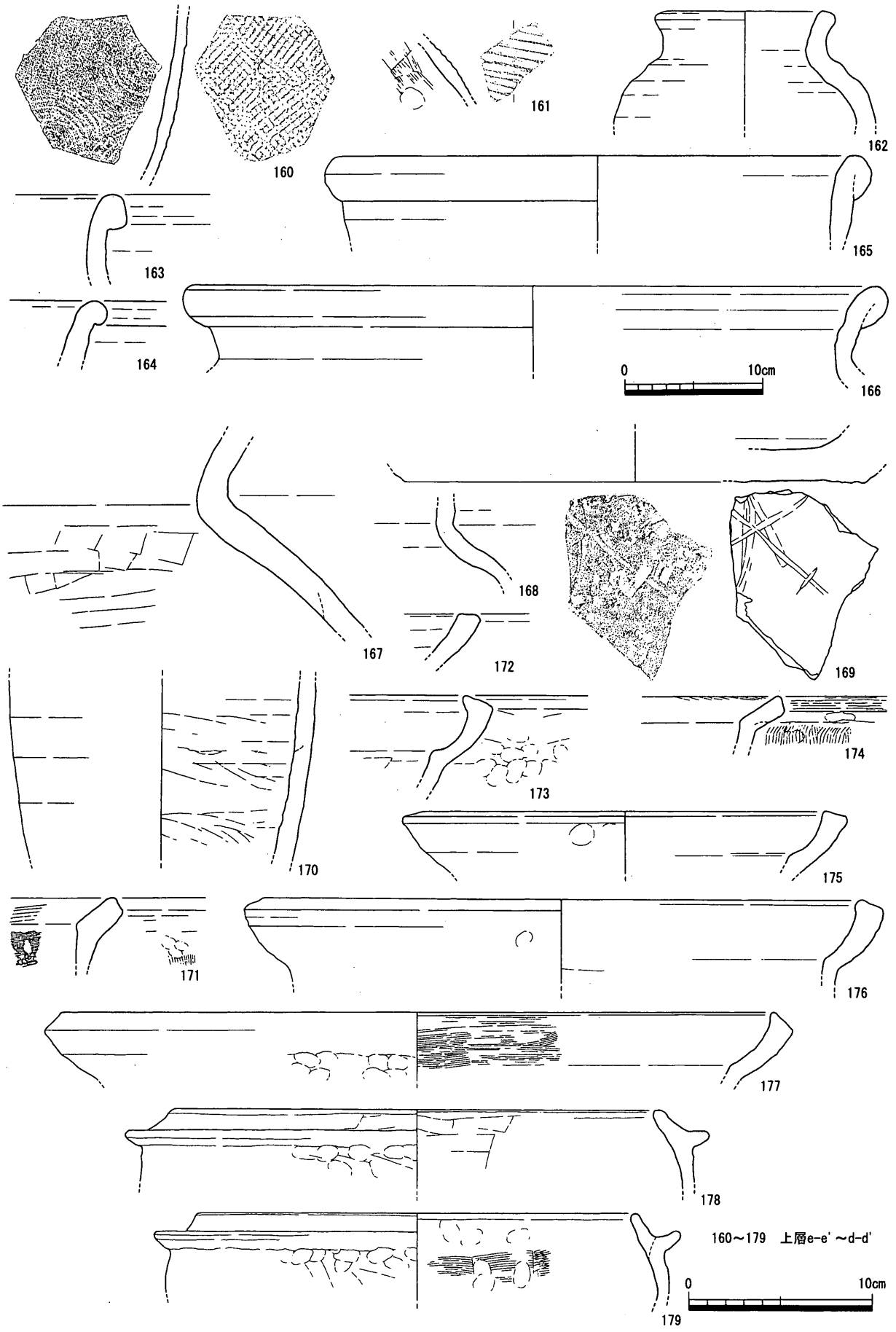
上層ｅ－ｅ′～ｄ－ｄ′出土中世遺物（137～182）　137・138は土師質土器小皿。139～145は土師質土器杯。139は立ち上がりがかなり急な体部をもつ。その他は１ａ型式もしくは１ｂ型式に



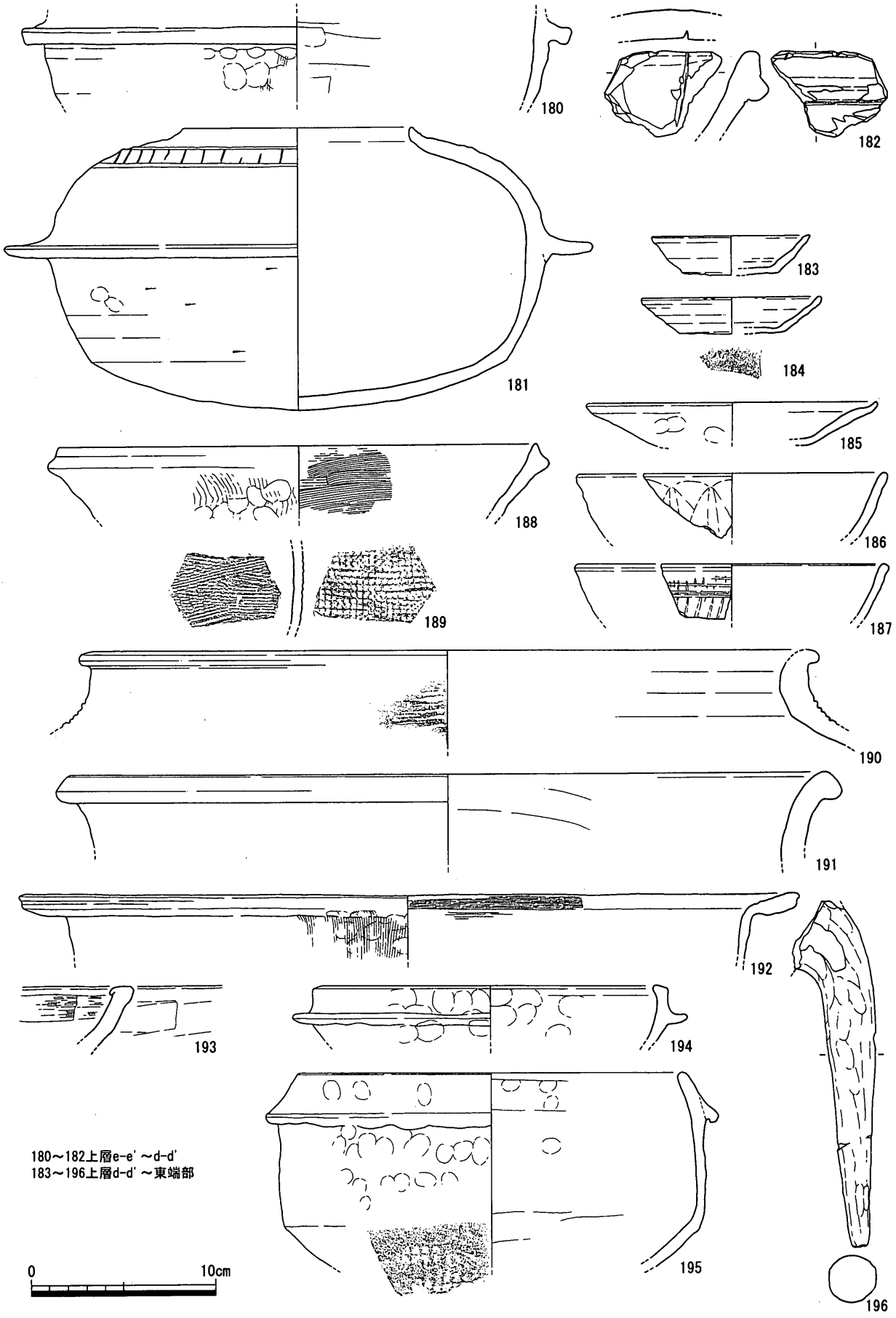
第33図　ＳＤ009出土遺物（４）



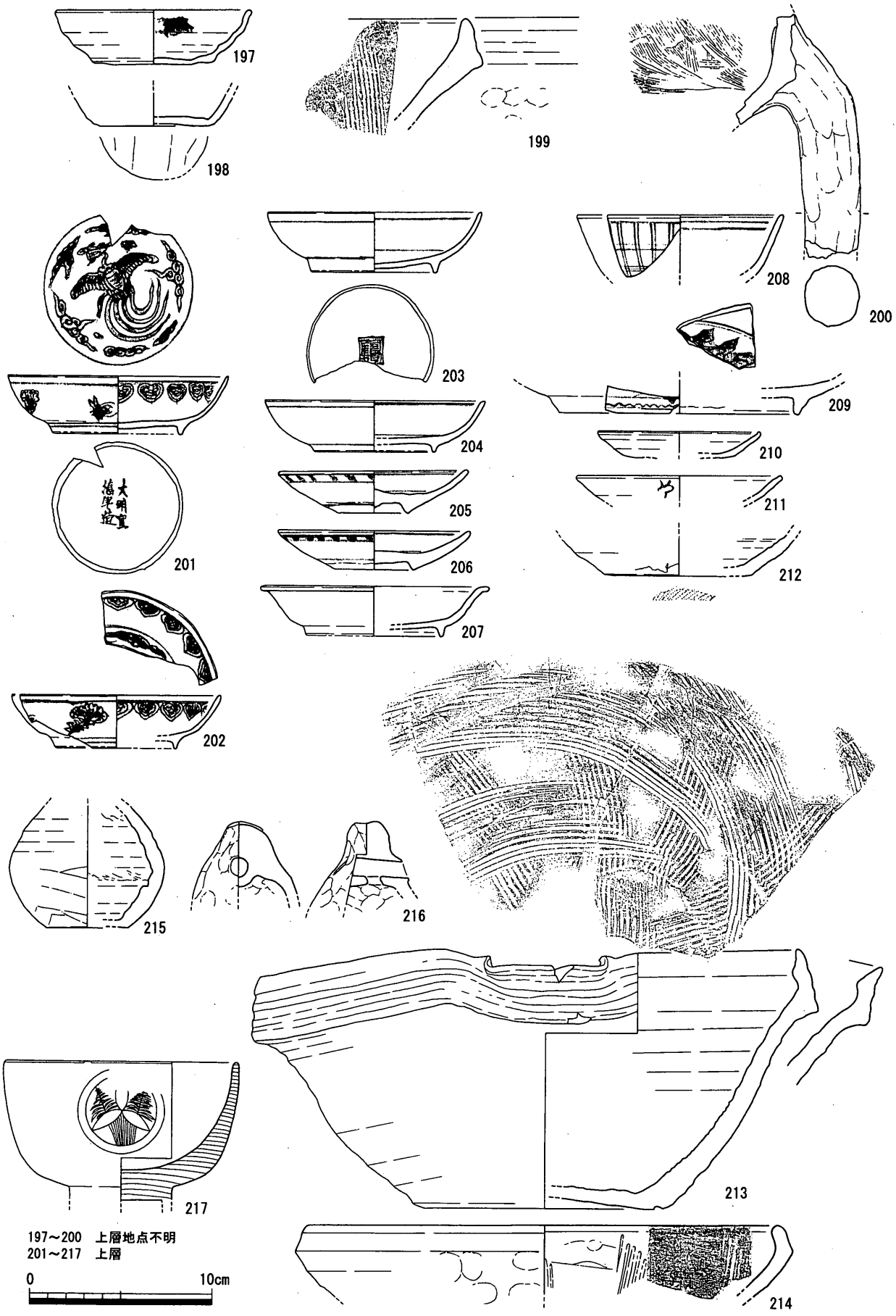
第34図　ＳＤ009出土遺物（５）



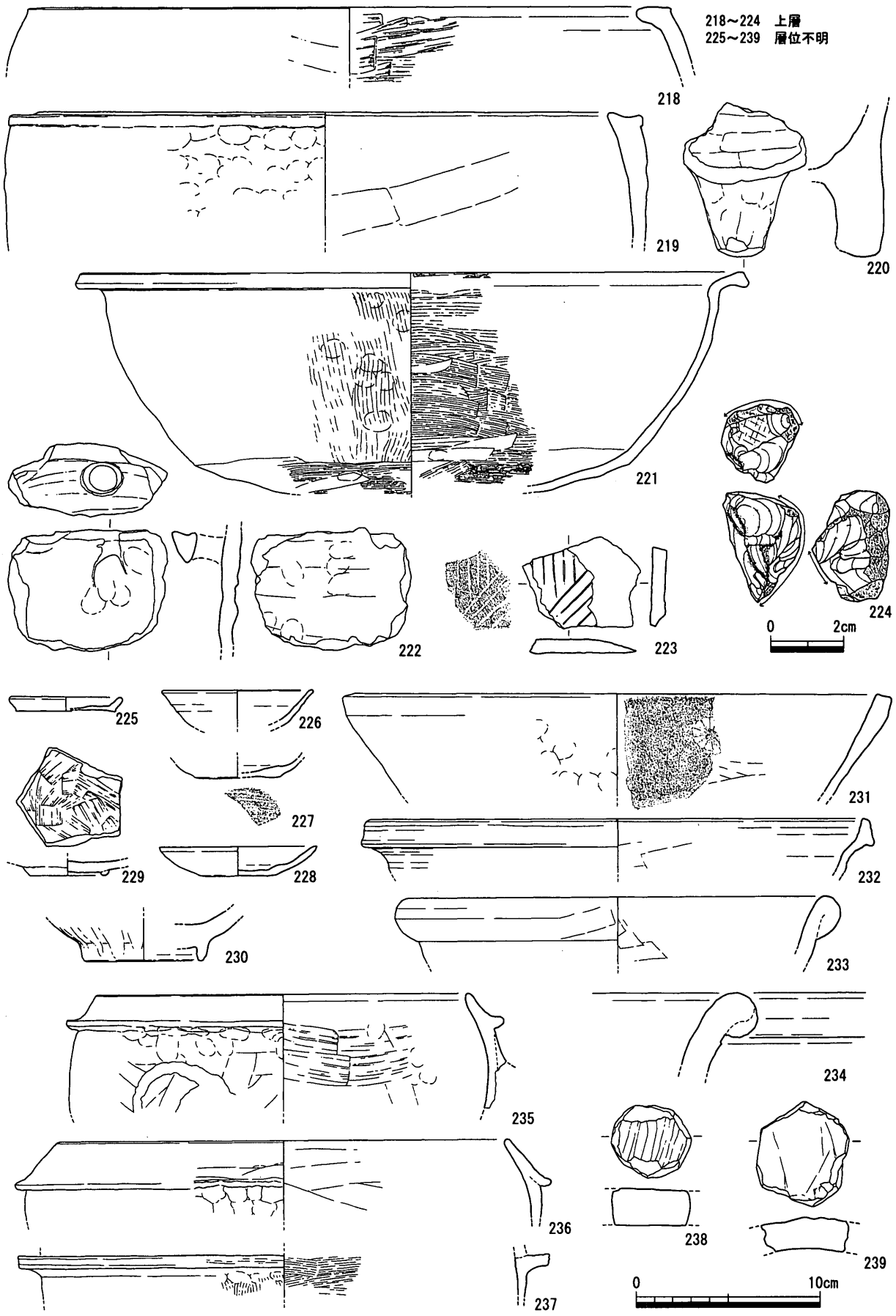
第35図　ＳＤ009出土遺物（６）



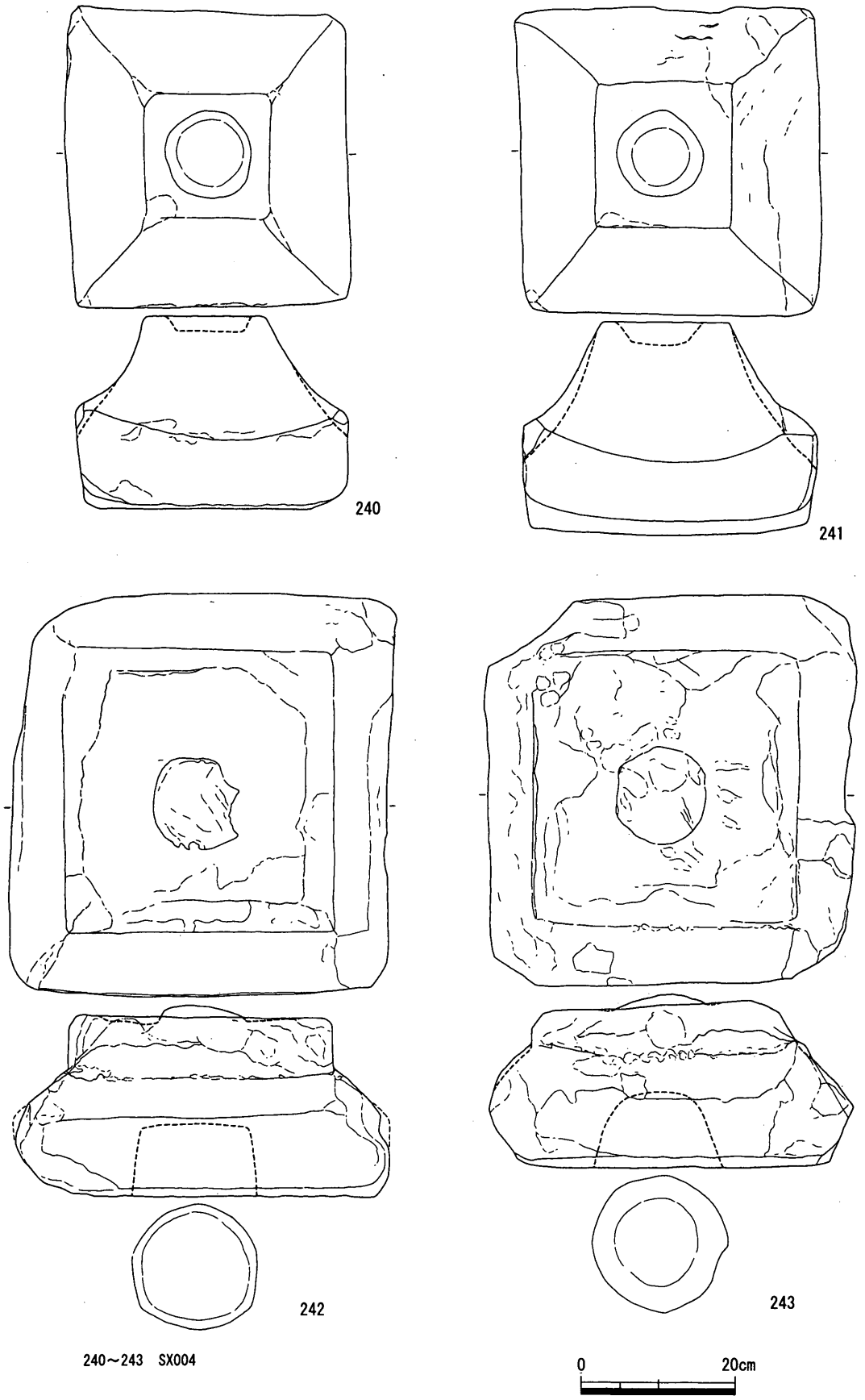
第36図　ＳＤ009出土遺物（７）



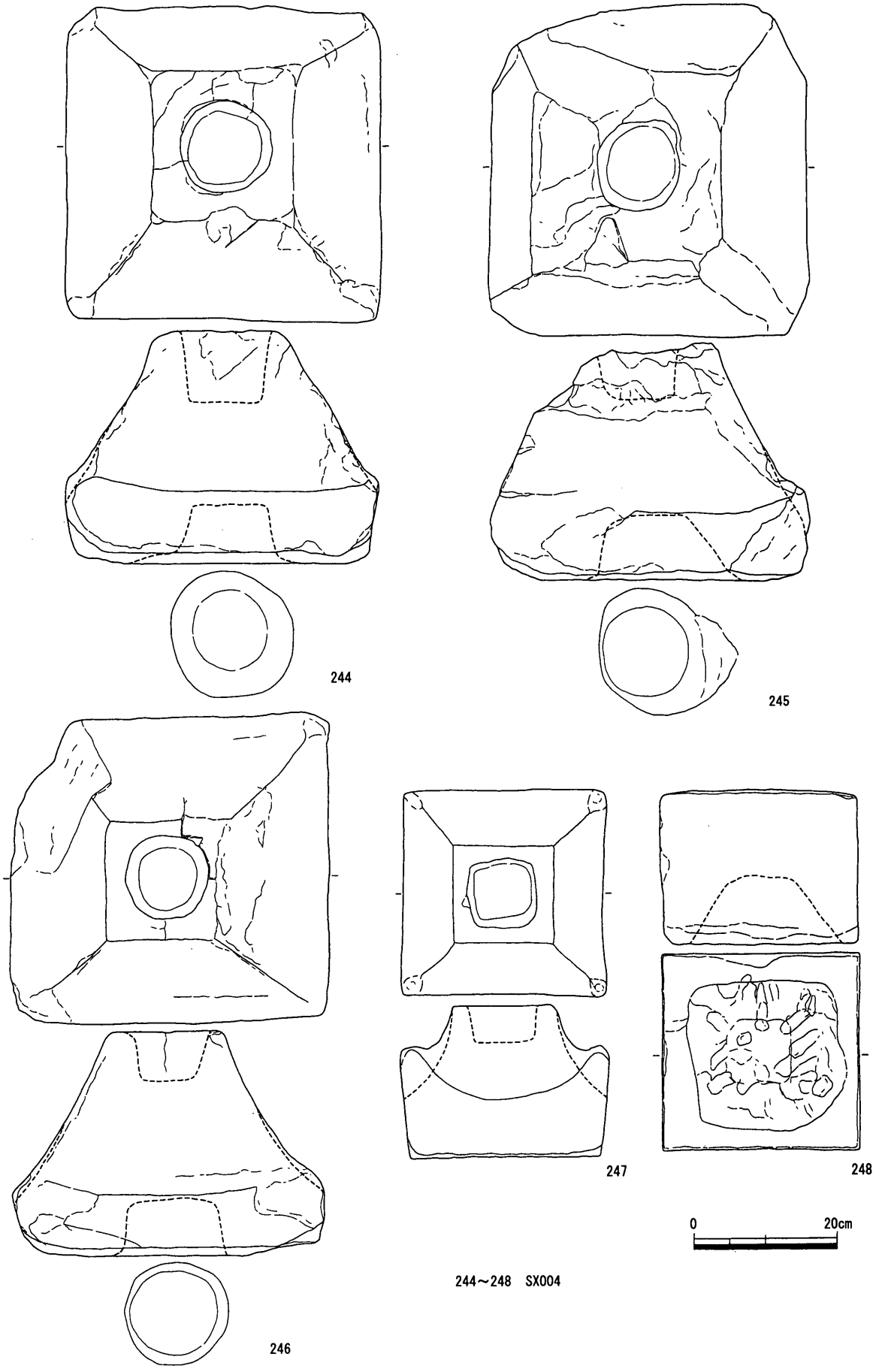
第37図　ＳＤ009出土遺物（８）



第38図　ＳＤ009出土遺物（９）



第39図　ＳＤ009出土遺物（１０）



第40図　ＳＤ009出土遺物（１１）

属する。146は瓦器椀。147・148は龍泉窯系青磁碗。149・150は東播系須恵器鉢。151は須恵器鉢。152～154は楠井窯産擂鉢。152・153は佐藤ＡⅢ類。154は佐藤ＢⅠ類。155～158は備前擂鉢。159は竈。160は亀山窯系須恵器甕。161は瓦質土器甕。162は産地不明焼締陶器の壺。163～167・169は備前甕。169は底部外面にヘラ記号が確認できる。168は備前甕。170は古瀬戸瓶子。171～177は土師質土器鍋。178・179は土師質土器足釜。180は土師質土器羽釜。181は瓦質土器羽釜。182は滑石製石鍋片。内面には切断途中と思われる擦り切り痕が認められる。

上層ｄ－ｄ′～東端部出土中世遺物（183～196）　183・184は土師質土器杯。184は１ｃ型式。185は京都系土師器皿。186・187は龍泉窯系青磁碗。188は亀山窯系須恵器鉢。189は亀山窯系須恵器甕。190は堺近郊産瓦質土器甕。191は備前甕。192・193は土師質土器鍋。194は土師質土器羽釜。195・196は土師質土器足釜。

上層出土地点不明中世遺物（197～200）　197は１ｂ型式の土師質土器杯。198は白磁皿。底部には施釉に先行する板ナデの痕跡が確認できる。199は備前擂鉢。200は土師質土器足釜。

上層出土近世遺物（201～224）　201～204は景徳鎮窯系青花皿。205・206は漳州窯系青花皿。207は白磁皿。208は肥前系磁器碗。209は肥前系磁器皿。210・211・212は土師質土器皿。211の口縁直下には墨書が認められる。213は備前擂鉢。214は土師質土器擂鉢。215は備前壺。216は飯蛸壺。217は漆器椀。胴部外面には、剥がれているものの家紋の痕跡が確認できる。218～220は土師質土器鉢。221は瓦質土器鍋。222は土師質土器内耳付鍋。223は砂岩製の板状石製品片。２方向の並行線が刻まれている。224は青緑色系チャート製火打石。

出土層位不明遺物（225～239）　225は土師質土器小皿。226～228は土師質土器杯。１形式の228は口径・器高が２ｅ型式とほぼ同じで、１ｅ型式に後続する型式（１ｇ型式）と考えられる。229は十瓶山窯系須恵器椀。230は青磁碗。231は土師質土器鉢。外面の口縁部からやや下った位置には押印が施されている。232は東播系須恵器鉢。233・234は備前甕。235・236は土師質土器足釜。237は土師質土器羽釜。238・239は瓦転用の円盤状加工品。

ＳＸ004構成遺物（240～248）　240・241は三豊郡三野町弥谷寺周辺産（柏・松田Ｂ１類）と推定される石材が使用された五輪塔火輪。上面のみにほぞ穴が確認できる。軒は両端に向かって反り、ほぼ垂直に切られる。屋根は緩く外反しながら傾斜する。242～246はさぬき市大川産のいわゆる火山石（柏・松田Ａ類）を石材とする。242・243は層塔。上面にほぞ、下面にほぞ穴が形成されている。屋根は緩く直線的に下り、軒は若干斜めに傾斜する。本来は、1477と同一塔で、上から1477→243→242の順で層を構成していたものであろう。製作時期は13世紀後葉～14世紀初頭。244～246は五輪塔火輪。上下面にほぞ穴がある。軒は両端に向かい緩く反り、若干斜めに傾斜。軒幅に対する高さの割合が大きい。屋根は直線に近い傾斜を持つ。247・248は小豆郡土庄町豊島産の豊島石（柏・松田Ｃ類）と推測される石造物。247は五輪塔火輪。上面のみにほぞ穴がある。軒は反っていない。屋根は直線的に傾斜して軒付近で大きく外反しながら軒隅に至る。軒幅は強く突出、軒幅が大きく、方形のほぞ穴を持つ。248は地輪。下面の掘り込みが深く、工具痕が残存している。

時期　出土遺物の主体は13世紀末～14世紀後半であるが、154・228から最終埋没は15世紀中葉～後半と考えられるがｄ－ｄ′～東端部については、15世紀前葉以降には継続していないと思われる。堆水状態と埋め戻しが繰り返されている土層の堆積状況からみても、この溝が長期間機能していたことが推測できる。

第41図　ＳＤ010出土遺物

ＳＤ 010（第 41 図）

Ａ区南西端部で、ＳＤ 009 上層掘り下げ後に検出した東西方向の浅い溝。Ａ区中央部以東・Ｂ区では検出できなかったため、落ち込み状遺構の可能性が高い。

出土遺物（249 ～ 251）　249 は１ｂ型式の土師質土器杯。250 は吉備系土師質土器椀。251 は備前擂鉢。

時期　249 から 14 世紀第２四半期埋没と考えられる。

ＳＤ 013（第 23・26・42・43 図）

ＳＤ 013 は、Ａ区中央部・Ｄ区西部・Ｈ区東部で検出した南北方向の溝。東西方向のＳＤ 009 下層から分岐し、北へは調査地外に延びる。

下層の粘土層は堆水状態を示すと思われるが、それより上位の層には多量の基盤層ブロックが含まれ、人為的に埋め戻されたと考えられる。また、ｈ－ｈ’の断面形からは再掘削が行われたことが考えられ、この溝が一定期間機能していたことを表しているといえよう。

下層Ａ区出土遺物（252・253）　252 は１ａ型式の土師質土器杯。253 は土師質土器足釜。

下層Ｄ区出土遺物（254 ～ 258）　254 ～ 256 は土師質土器杯。255 は１ｅ型式。257 は須恵器甕。258 は丸瓦転用の円盤状加工品。

下層Ｈ区出土遺物（259 ～ 263）　259 は土師質土器杯。260 は土師質土器擂鉢。261 は亀山窯系須恵器鉢。262 はミニチュアの備前擂鉢。263 は瓦質土器香炉。

上層Ｄ区出土遺物（264 ～ 276）　264・265 は土師質土器小皿。266 ～ 269 は土師質土器杯。266 は１ｂ型式、268 は１ｅ型式。270 は京都系土師器皿。271 は東播系須恵器鉢。272 は備前擂鉢。273 は備前大甕。外面底部付近には別個体の一部が付着している。274 は瓦質土器香炉。275 は土師質土器足釜。276 は竈。

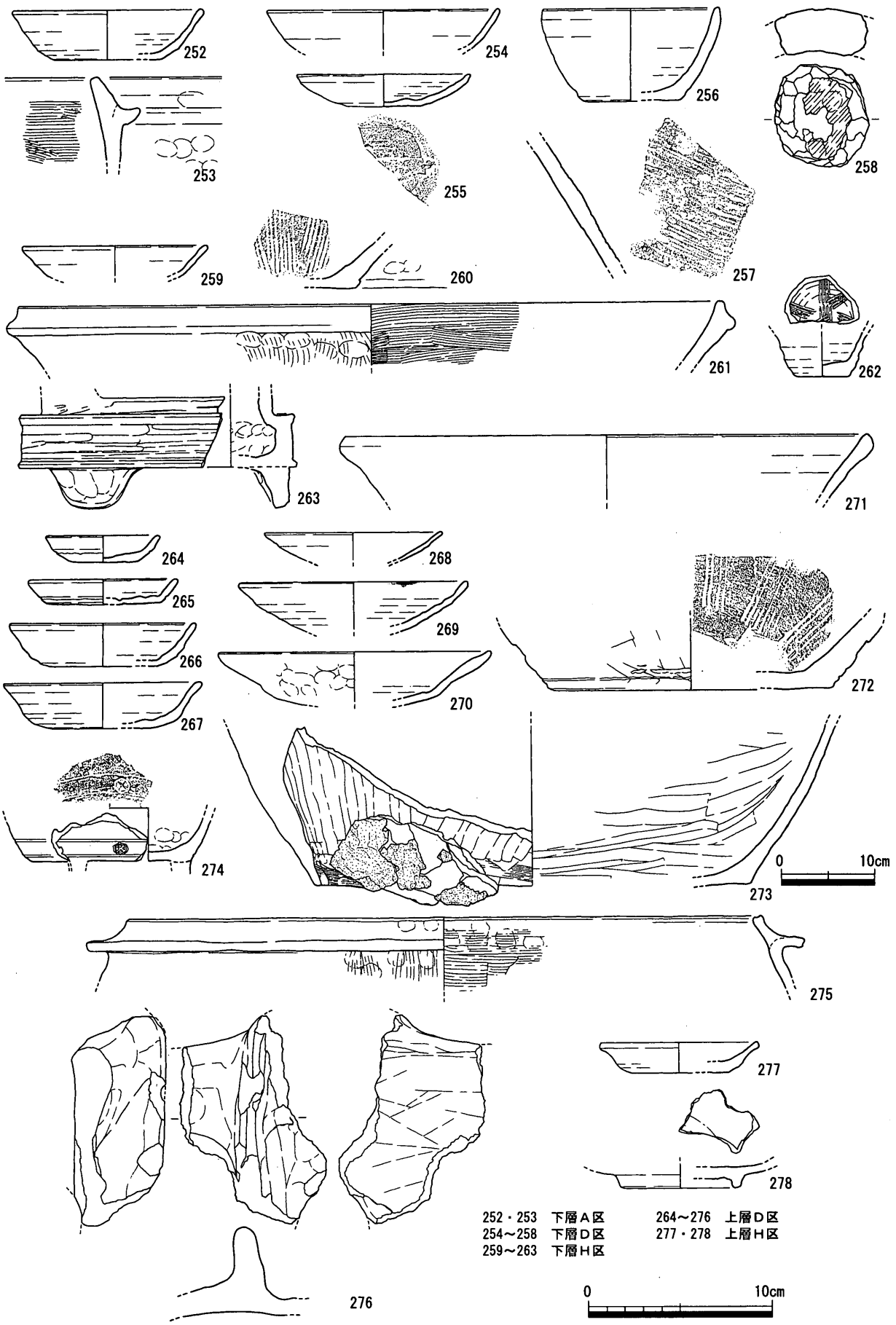
上層Ｈ区出土遺物（277・278）　277 は土師質土器小皿。278 は土師質土器杯。279 は龍泉窯系青磁碗。

層位不明Ａ区出土遺物（279・280）　279 は亀山窯系須恵器甕。280 は土師質土器鍋。

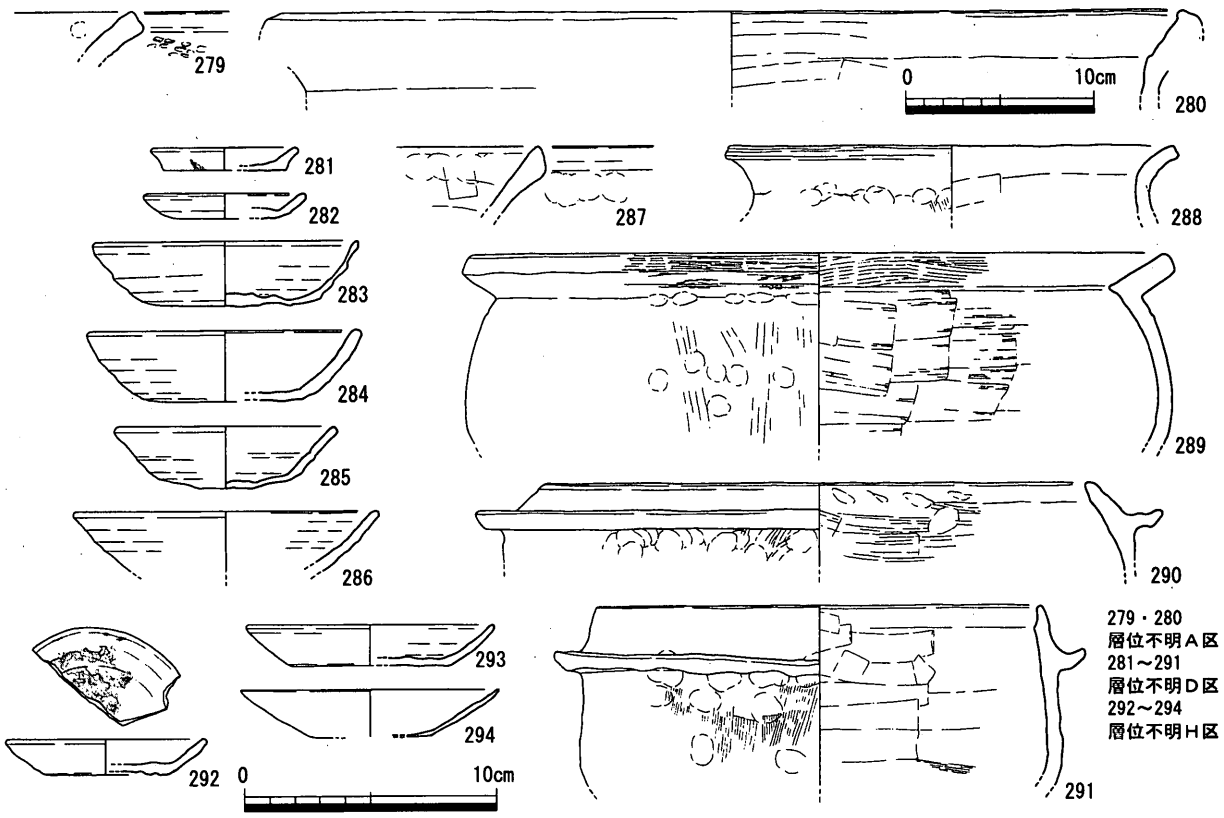
層位不明Ｄ区出土遺物（281 ～ 291）　281・282 は土師質土器小皿。283 ～ 286 は土師質土器杯。283・284 は１ａ型式。287 は東播系須恵器鉢。288・289 は土師質土器甕。290・291 は土師質土器足釜。

層位不明Ｈ区出土遺物（292 ～ 294）　292 ～ 294 は土師質土器杯。

時期　14 世紀前半の遺物が中心を占めるが、最終埋没は 292・293 から 15 世紀中葉～後半と考えられる。



第42図　ＳＤ013出土遺物（１）



第43図　ＳＤ013出土遺物（２）

ＳＤ 014（第 27・44 図）

Ａ区東部からＤ区東部にかけて検出した南北方向の溝。南端部はほぼ直角に屈曲して、ＳＤ 009 下層に連続する。北端部はＤ区東部中央付近で収束し、それ以上は延びない。

埋土最下層には堆水状態による堆積層が認められるが、それより上位は基盤層ブロックを多量に含む人為的な埋め戻し土で構成されている。

下層Ａ区出土遺物（295）　295 は土師質土器足釜脚部片。

下層Ｄ区出土遺物（296・297）　296・297 は土師質土器杯。

上層Ｄ区出土遺物（298 ～ 306）　298 ～ 306 は１ａ型式の土師質土器杯。304 は青磁鉢か。305 は土師質土器鍋。306 は土師質土器羽釜。

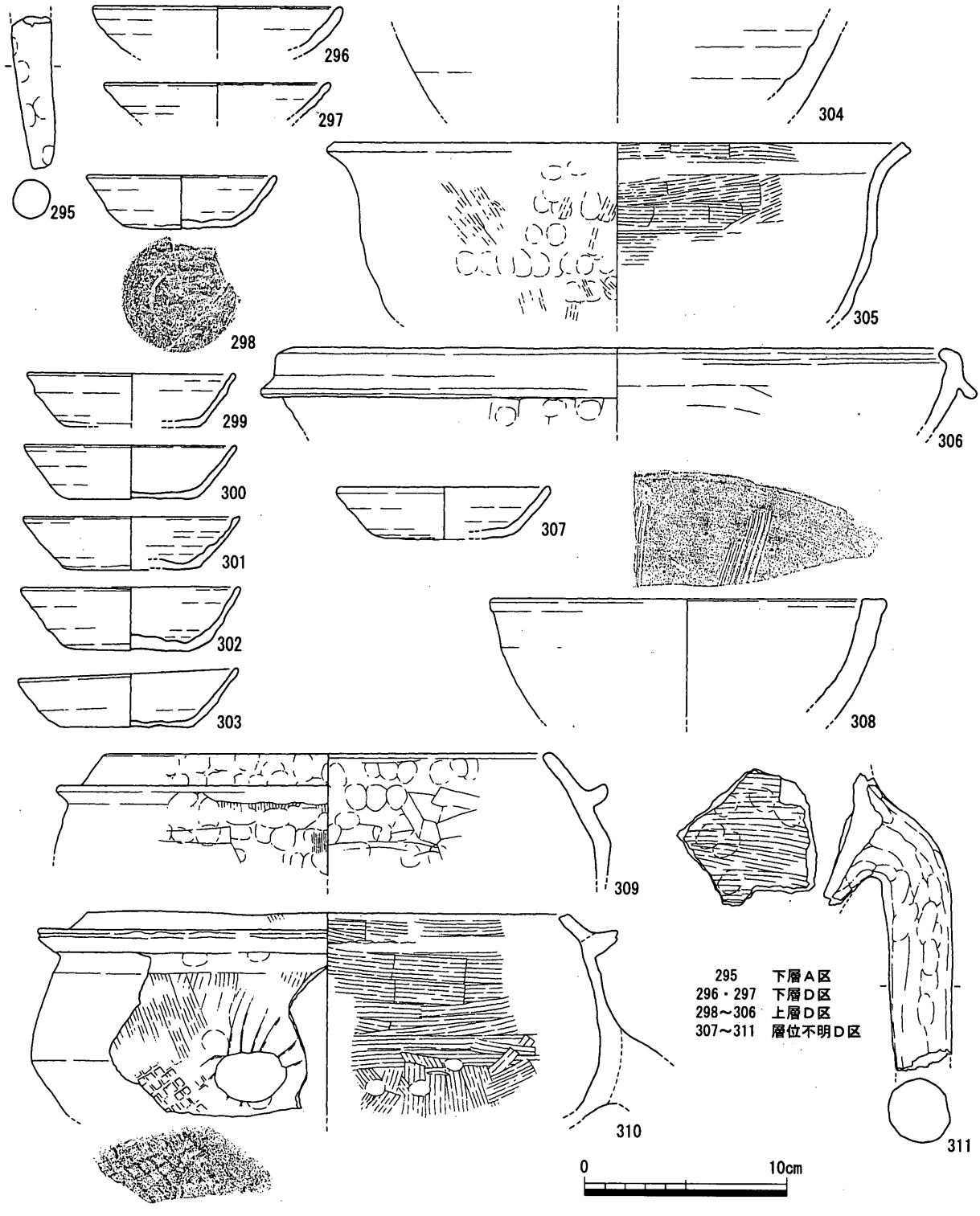
層位不明Ｄ区出土遺物（307 ～ 311）　307 は１ｂ型式の土師質土器杯。308 は備前擂鉢。乗岡中世２ｂ期。309 ～ 311 は土師質土器足釜。

時期　出土遺物の時期は 14 世紀前半を示す。ＳＤ 009 下層・ＳＤ 013 と同時に開削され（13 世紀末～ 14 世紀前葉）、14 世紀第２四半期にこの溝のみ先行して埋め戻されていると考えられる。

ＳＥ（井戸）

ＳＥ 101（第 45 ～ 47 図）

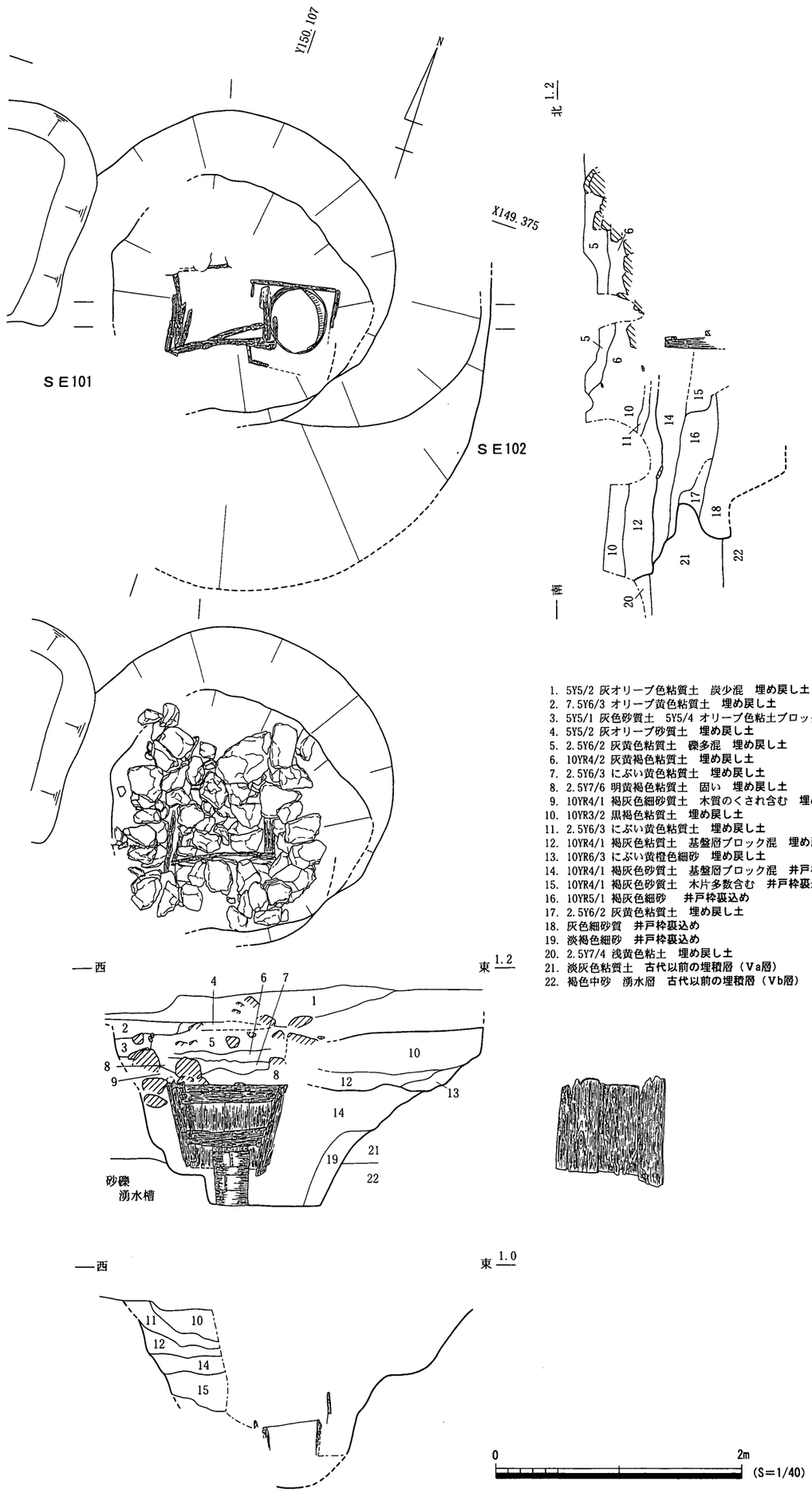
Ｂ区北東部で検出した。２段積まれた曲物を井筒とし、井側の下部は縦板組横桟支柱型で横桟の組み方は目違いほぞ組みと相い欠きほぞ組が併用されている。井側上部は石組構造である。



第44図　ＳＤ014出土遺物

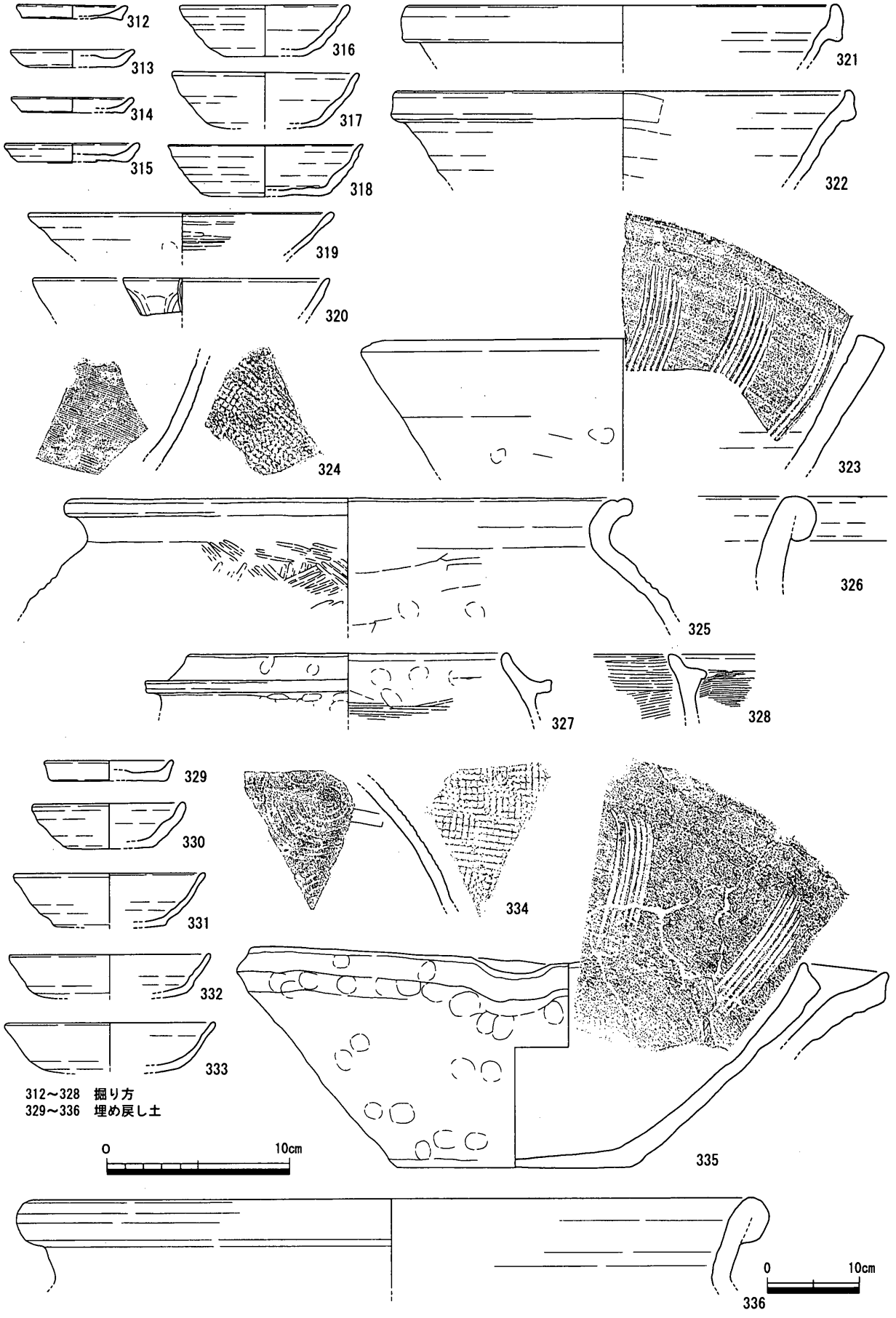
ＳＥ102の井戸枠を検出するまで１基の井戸として調査していたため、出土遺物中にはＳＥ102の遺物を含む可能性がある。

掘り方出土遺物（312～328）　土師質土器小皿には佐藤ＢⅢ－３（313～315）・ＢⅢ－４型式（312）がある。杯317は１ａ型式。東播系須恵器鉢は森田Ⅲ期１段階（322）Ⅲ期２段階（321）。325は東播系須恵器甕。頸部外面直下にはタタキが確認できる。外表面は剥離が著しい。備前擂鉢（323）は口縁部断面方形で、焼き締めが甘い。乗岡中世２ｂ期。326は備前大甕。乗岡中世２ｂ期

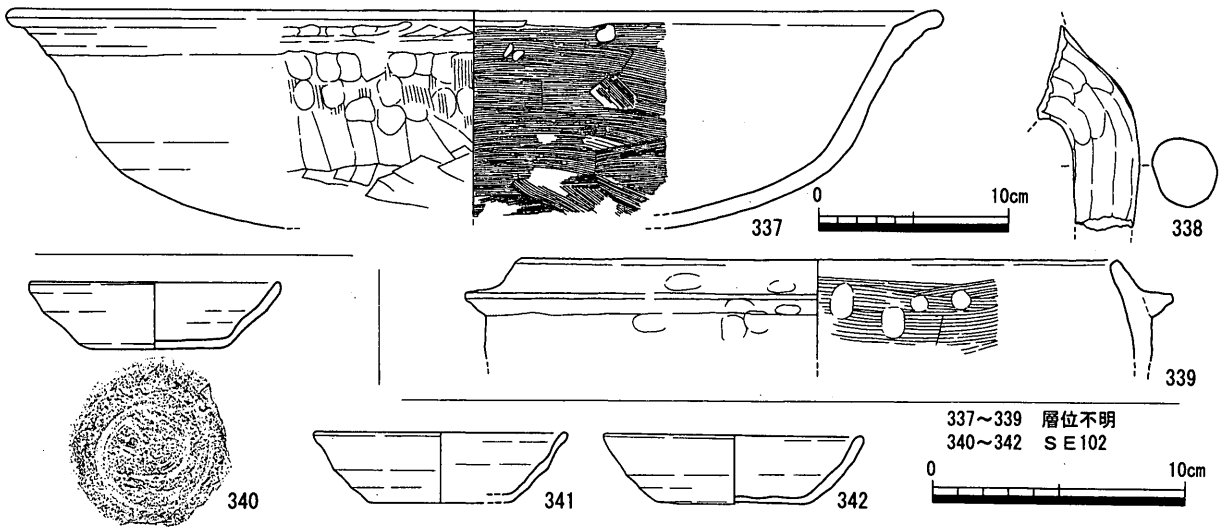


1. 5Y5/2 灰オリーブ色粘質土　炭少混　埋め戻し土
2. 7.5Y6/3 オリーブ黄色粘質土　埋め戻し土
3. 5Y5/1 灰色砂質土　5Y5/4 オリーブ色粘土ブロック多混　埋め戻し土
4. 5Y5/2 灰オリーブ砂質土　埋め戻し土
5. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土　礫多混　埋め戻し土
6. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土　埋め戻し土
7. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土　埋め戻し土
8. 2.5Y7/6 明黄褐色粘質土　固い　埋め戻し土
9. 10YR4/1 褐灰色細砂質土　木質のくされ含む　埋め戻し土
10. 10YR3/2 黒褐色粘質土　埋め戻し土
11. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土　埋め戻し土
12. 10YR4/1 褐灰色粘質土　基盤層ブロック混　埋め戻し土
13. 10YR6/3 にぶい黄橙色細砂　埋め戻し土
14. 10YR4/1 褐灰色砂質土　基盤層ブロック混　井戸枠裏込め
15. 10YR4/1 褐灰色砂質土　木片多数含む　井戸枠裏込め
16. 10YR5/1 褐灰色細砂　井戸枠裏込め
17. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土　埋め戻し土
18. 灰色細砂質　井戸枠裏込め
19. 淡褐色細砂　井戸枠裏込め
20. 2.5Y7/4 浅黄色粘土　埋め戻し土
21. 淡灰色粘質土　古代以前の埋積層（Va層）
22. 褐色中砂　湧水層　古代以前の埋積層（Vb層）

第45図　ＳＥ101・102平・断面図



第46図　ＳＥ101出土遺物（１）



第47図　ＳＥ101出土遺物（２）、ＳＥ102出土遺物（１）

以降か。327・328は土師質土器足釜。

埋め戻し土出土遺物（329～336）　329は土師質土器小皿。330～333は土師質土器杯。331は１ａ型式。333は１ｂ型式。佐藤ＡⅡ類の楠井窯産擂鉢（335）は須恵質焼成。玉縁状口縁の備前大甕（336）は、玉縁上下に稜線を持たないことから乗岡中世２ａ期と考えられる。

出土層位不明遺物（337～339）　337は土師質土器鍋。338・339は土師質土器足釜。

時期　取り上げ単位ごとの時期差は考えられず、323・332・335から本遺構の埋没時期は14世紀第２四半期と考えられる。

ＳＥ102（第45～48図）

Ｂ区北東部で検出。曲物２段を井筒とする。井側は縦板組横桟支柱型であるが、残存状況が悪いため詳細は不明である。また、木枠より上部の構造の存在も推測できる（ＳＥ101を考慮すれば石組か）ものの、不明である。廃絶時に井側が抜き取られている可能性が非常に高いことから、隣接するＳＥ101より先に構築され、ＳＥ101構築前に埋め立てられたと考えられる。

井筒内底部出土遺物（340）　340は１ａ型式の土師質土器杯。明瞭に「口縁部→体部ナデ」技法が認められる。

井筒掘り方出土遺物（341・342）　いずれも１ａ型式の土師質土器杯。

時期　出土遺物から13世紀末～14世紀前葉と判断できる。

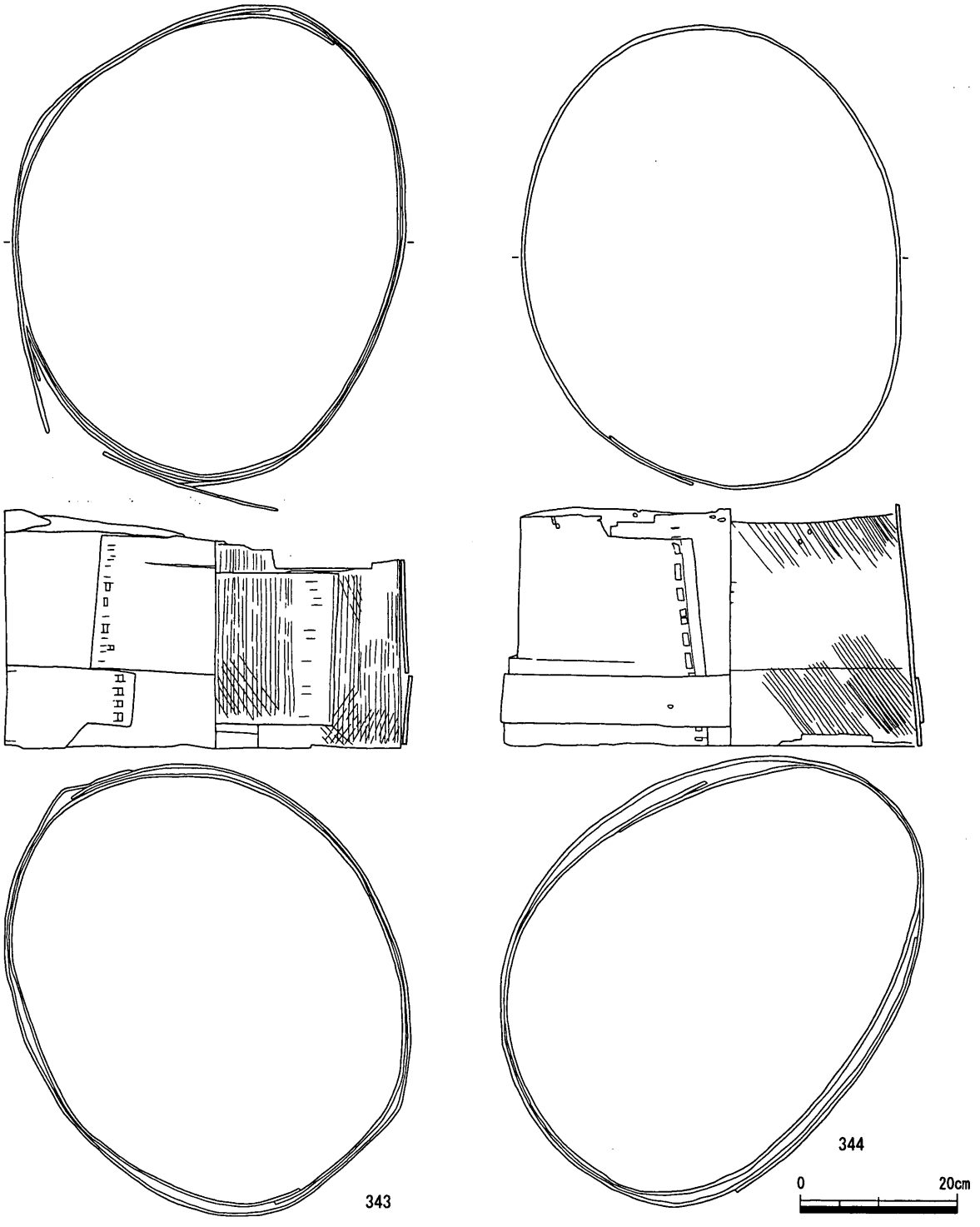
ＳＥ303（第49～51図）

Ｄ区北部で検出した。井側上部は平面形約150cm×120cmの方形を呈する石組、井側下部は、一辺約75cm、高さ約75cmの縦板組横桟型で、桟の組み方は目違いほぞ組である。井筒は確認できず、井側下端が湧水層（礫層）に達していることも井筒が存在しなかったことの裏付けとなる。

掘り方出土遺物（345～352）　345～350は土師質土器杯。349・350は１ｅ型式よりも後出する形態。

石組（上部井側）間・石組直下出土遺物（353～357）　353は乗岡５ａ期の備前擂鉢。

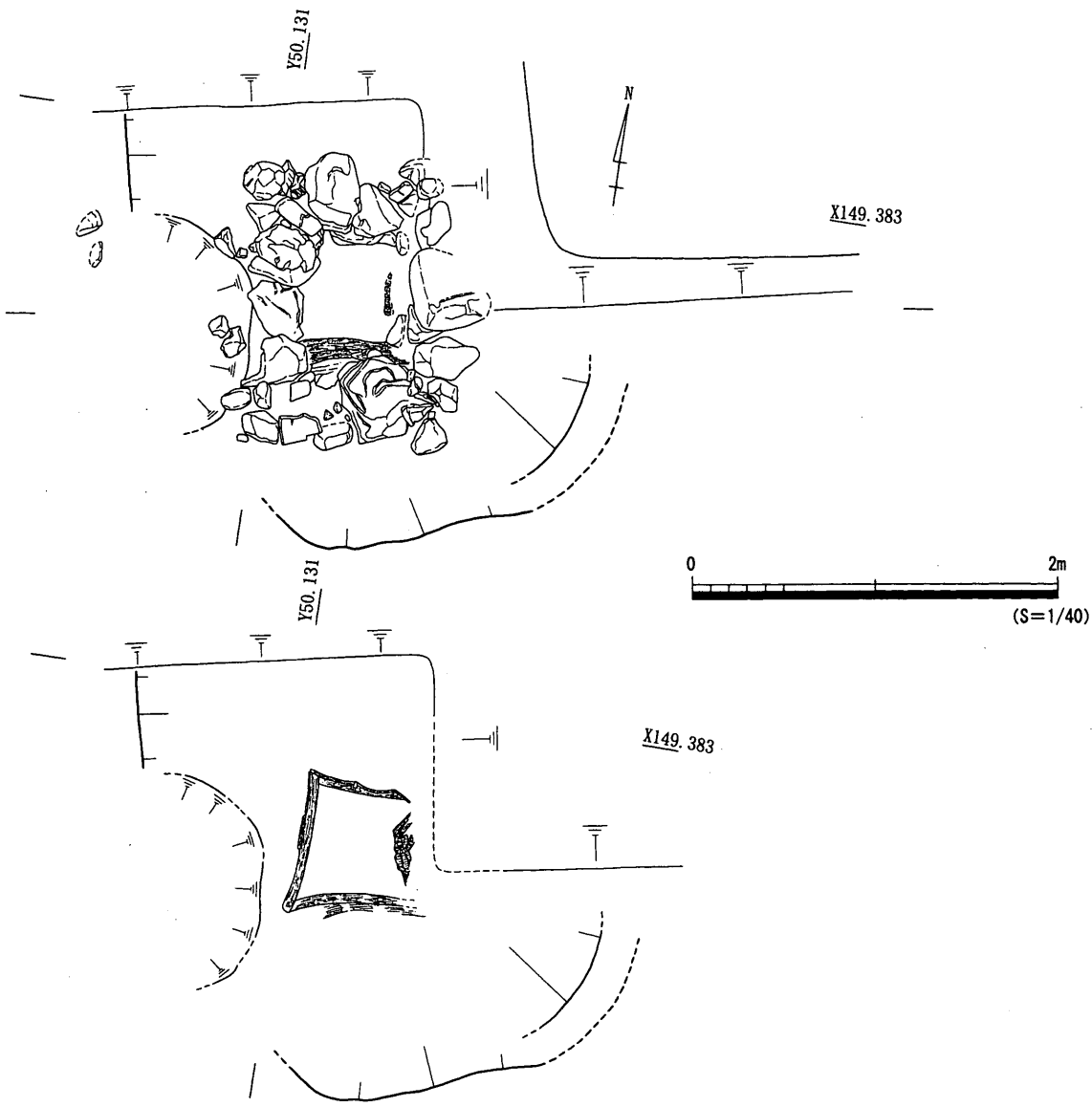
358は下部井側（木枠）内出土遺物の瓦質焼成の楠井窯産擂鉢。佐藤ＡⅡ－２類でも新しい段階



第48図　ＳＥ102出土遺物（２）

のものか。

359 ～ 366 は出土層位不明であるが、廃絶時の埋め戻し土中出土の可能性が高い。359 は佐藤ＤⅡ－７型式。363 は軟質な須恵質焼成の楠井窯産擂鉢。佐藤Ａ－３類。364 は土師質土器羽釜。体部成形後、外面に調整（上→下方向のハケ）を施し、上端部を外に折り曲げて鍔部をつくり出し、



第49図　ＳＥ303平面図

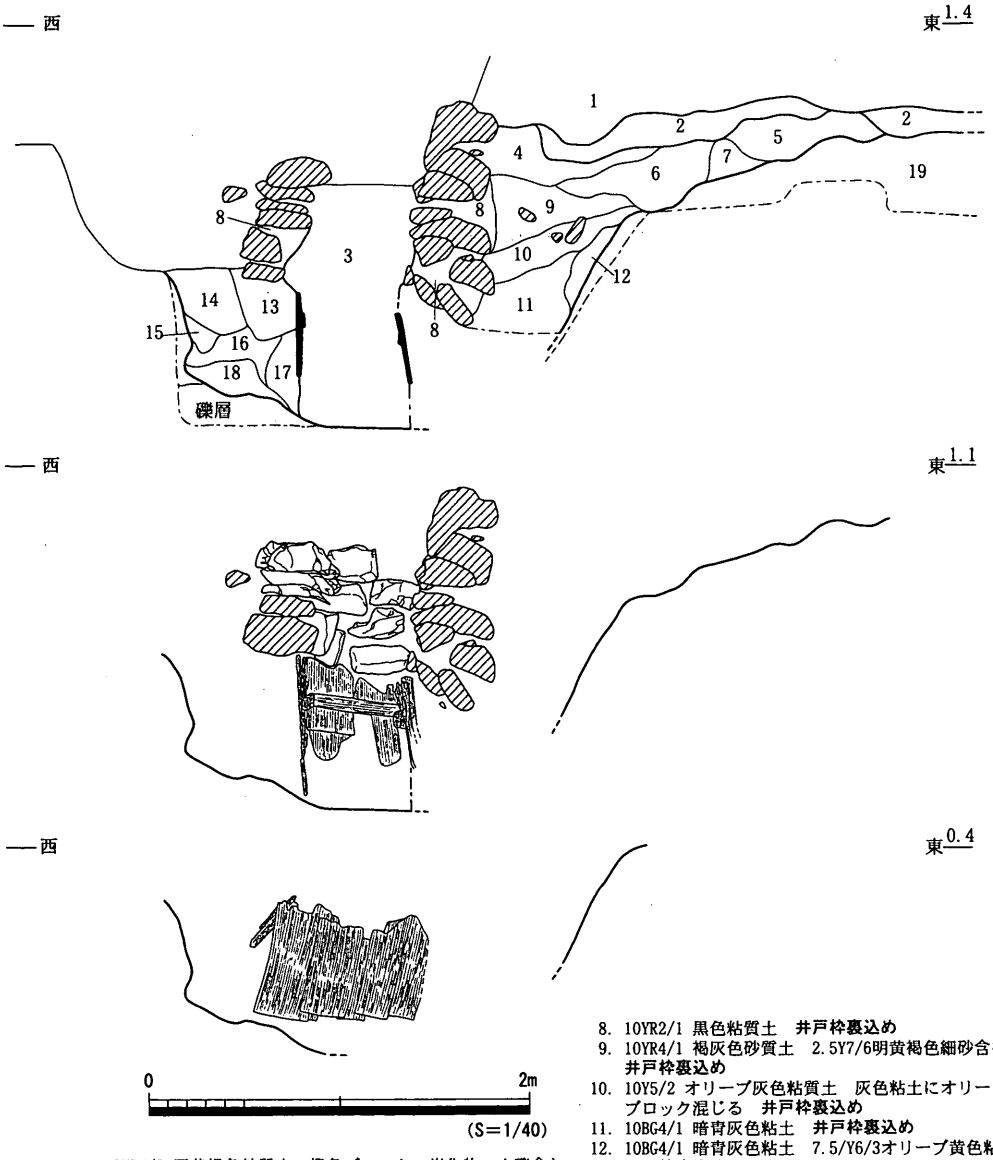
口縁部を接合している。365は備前大甕口縁部片。乗岡中世３期。366は羽釜底部転用の円盤状加工品。内面全域に煤が付着しており、羽釜として一定期間使用された後加工されていることが確実である。破断面の一部には、外面に達しない程度に内面から連続する煤の付着が認められる。内面にひび割れがあった状態で使用したことを示すものであろうか。

時期　掘り方出土遺物349・350から15世紀中葉～後半に築かれた井戸であると判断できる。

ＳＥ304（第52・53図）

Ｄ区北東部で検出した。井筒は曲物２つを上下に重ねたもの。井側は認められなかったが、掘り方上面から井筒上端まで連続した埋め戻しの痕跡が確認できるため、本来は井側が存在し、本遺構廃絶時に井側が抜き取られた可能性が高い。

井筒内底面からは完形の土師質土器杯（368）が１点出土している。井筒内の埋土は全体的にグライ化し、井筒より上層と色調では異なっているが、ブロック状の混入物を含むため、人為的な埋め戻し土と判断できる。よって、土師質土器杯は本井戸埋め戻しの際に意図的に井筒内に入れら



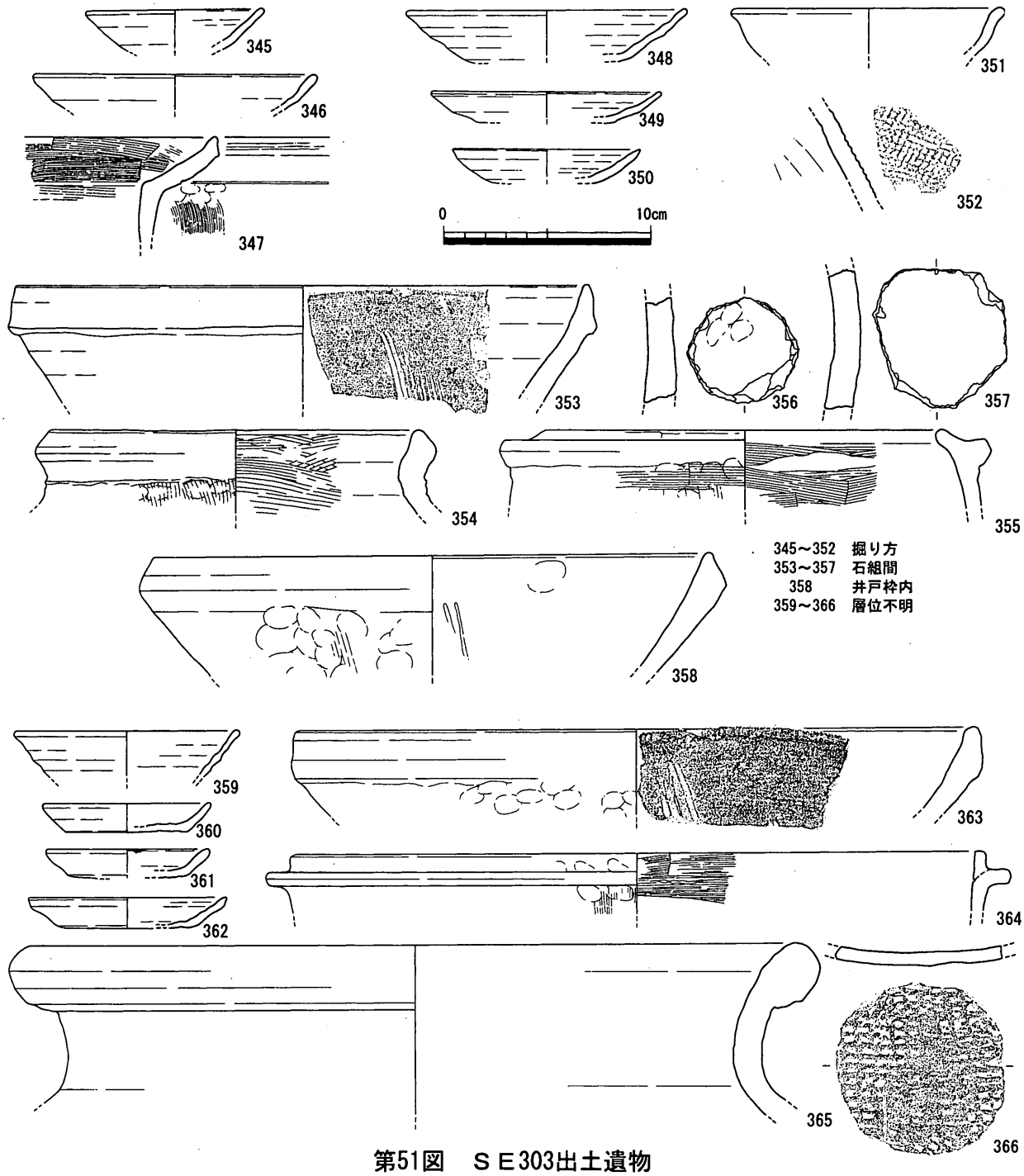
1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土　橙色ブロック・炭化物・小礫含む　近代整地層（Ⅰb層）
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂質土　2.5Y7/4浅黄色細砂が1/4を占める　遺構？包含層？
3. 5PB3/1 暗青灰色粘土　小礫含む　埋め戻し土
4. 7.5YR4/1 褐灰色細砂質土　井戸枠裏込め
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂質土　井戸枠裏込め
6. 10YR4/1 褐灰色細砂質土　井戸枠裏込め
7. ５層と６層の中間　井戸枠裏込め
8. 10YR2/1 黒色粘質土　井戸枠裏込め
9. 10YR4/1 褐灰色砂質土　2.5Y7/6明黄褐色細砂含む　井戸枠裏込め
10. 10Y5/2 オリーブ灰色粘質土　灰色粘土にオリーブ色粘土ブロック混じる　井戸枠裏込め
11. 10BG4/1 暗青灰色粘土　井戸枠裏込め
12. 10BG4/1 暗青灰色粘土　7.5/Y6/3オリーブ黄色粘土ブロック含む　井戸枠裏込め
13. 5B4/1 暗青灰色粘質土　小礫・砂粒多量に含む　井戸枠裏込め
14. 10BG4/1 暗青灰色粘土　井戸枠裏込め
15. 5Y5/2 灰オリーブ色砂質土　N3/(Y)暗灰色砂質土ブロック含む　井戸枠裏込め
16. 7.5/Y5/2 灰オリーブ色粘質土　13層ブロック含む　井戸枠裏込め
17. 7.5Y5/2 灰オリーブ色砂質土　井戸枠裏込め
18. N3/(Y) 暗灰色弱粘質土　10BG5/1青灰色ブロック含む　井戸枠裏込め
19. 10YR5/1 褐灰色細砂質土　中世前半以前の埋積層（Ⅳ・Ⅴ層）

第50図　ＳＥ303断面図

れた（廃棄された）可能性も否定できない。なお、この杯には底部付近の内外面に変色したタール状付着物の痕跡と、口縁部に煤の付着が確認できることから、灯明皿として使用されたものと考えられる。

井戸枠内出土遺物（368・369）　368・369は１ａ型式の土師質土器杯。

埋め戻し土出土遺物（370～380）　370･371は土師質土器小皿。372～375は土師質土器杯。372は１ａ型式、373は１ｂ型式。376・377は吉備系土師質土器椀。378は８～９型式の東濃型山茶碗。379の備前擂鉢は乗岡中世４ａ期。380は東播系須恵器鉢。森田第Ⅲ期第２段階。体部の一部内外



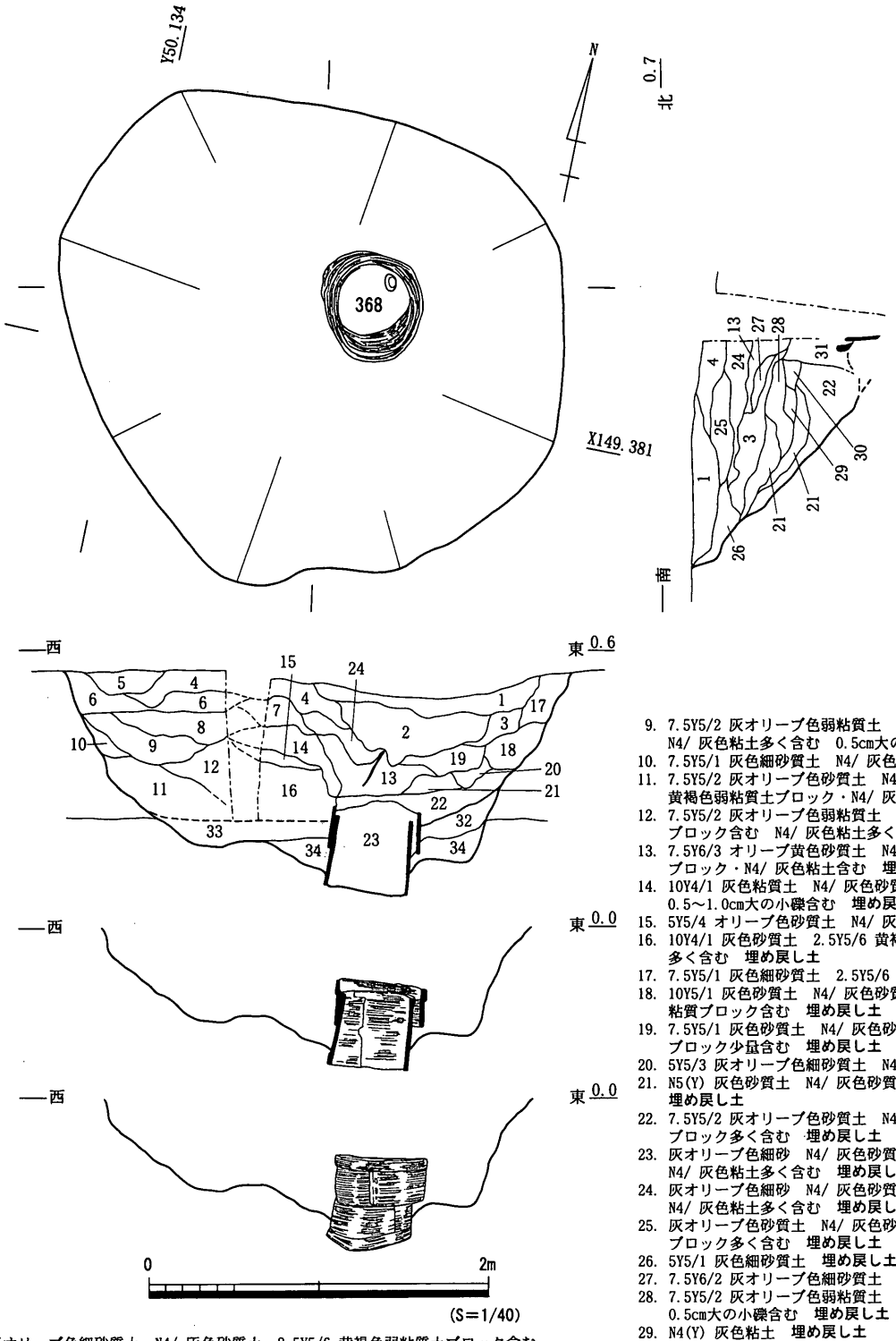
第51図　ＳＥ303出土遺物

面には煤が付着している。

時期　379 から最終埋没は 15 世紀前葉と考えられる。

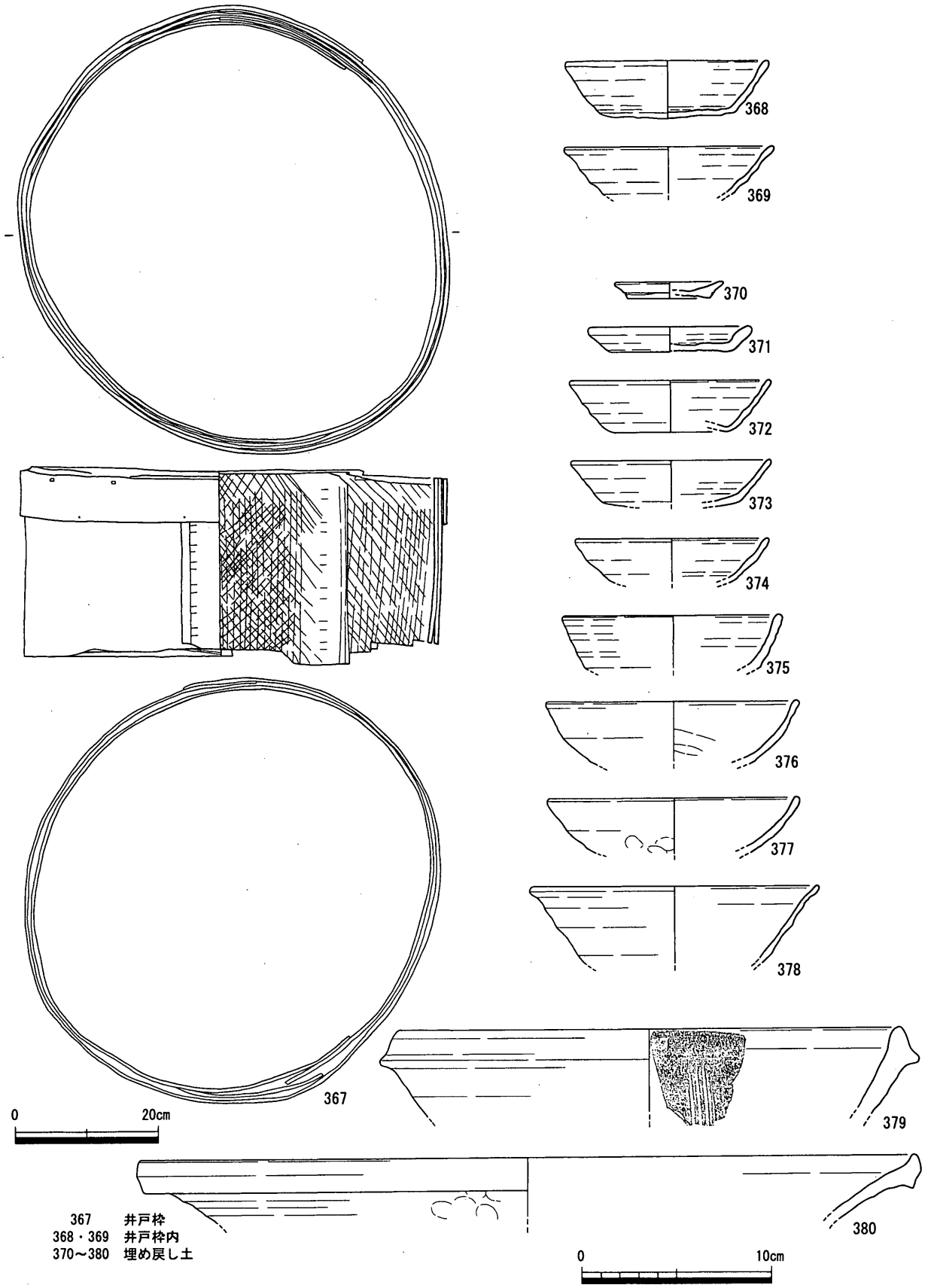
ＳＥ 403・ＳＫ 408（第 54 ～ 56 図）

Ｅ区北西部で検出した。井側は２段確認できる。上部は、板を 23 枚以上組み合わせて直径約 90 cm の平面円形にしたもの。各板はほぞで組み合わせられている。各板をほぞによって組み合わせるものは多角形の井戸に多いことから、当井戸も多角形である可能性がある。２ヶ所にたがらしき痕跡が確認できたものの残存状況が悪く詳細は不明である。

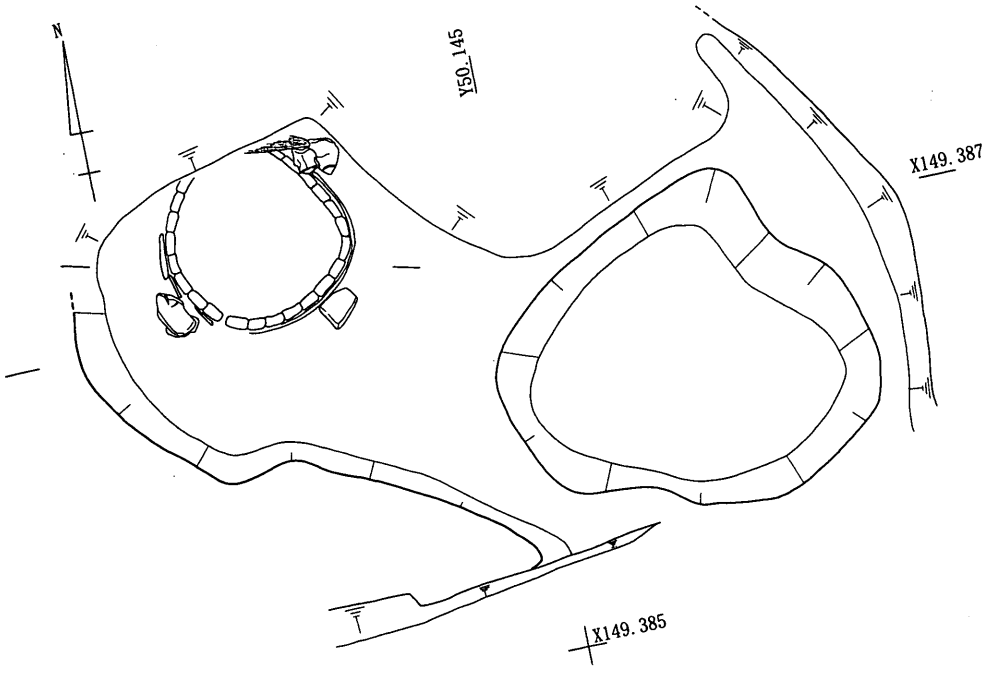


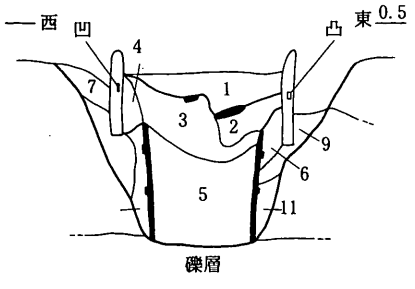
1. 5Y5/2 灰オリーブ色細砂質土　N4/ 灰色砂質土・2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック含む　埋め戻し土
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土　N4/灰色砂質土多く含む　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質ブロック含む　0.5cm大の小礫含む　埋め戻し土
3. 5Y5/1 灰色砂質土　N4/ 灰色砂砂質土若干含む　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック含む　埋め戻し土
4. 7.5Y5/1 灰色砂質土　N4/ 灰色粘土若干含む　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質ブロック少量含む　埋め戻し土
5. 7.5Y4/1 灰色砂質土　埋め戻し土
6. 2.5Y5/3 黄褐色細砂　N4/ 灰色砂質土若干含む　埋め戻し土
7. N4/ 灰色粘土　埋め戻し土
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂質土　N4/ 灰色砂質土若干・N4/ 灰色粘土・2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック含む埋め戻し土
9. 7.5Y5/2 灰オリーブ色弱粘質土　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質ブロック若干　N4/ 灰色粘土多く含む　0.5cm大の小礫多く含む　埋め戻し土
10. 7.5Y5/1 灰色細砂質土　N4/ 灰色砂質土含む　埋め戻し土
11. 7.5Y5/2 灰オリーブ色砂質土　N4/ 灰色砂質土少量・2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック・N4/ 灰色粘土含む　埋め戻し土
12. 7.5Y5/2 灰オリーブ色弱粘質土　N4/ 灰色砂質土・2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック含む　N4/ 灰色粘土多く含む　埋め戻し土
13. 7.5Y6/3 オリーブ黄色砂質土　N4/ 灰色砂質土・2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック・N4/ 灰色粘土含む　埋め戻し土
14. 10Y4/1 灰色粘質土　N4/ 灰色砂質土・2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック含む　0.5～1.0cm大の小礫含む　埋め戻し土
15. 5Y5/4 オリーブ色砂質土　N4/ 灰色砂質土・N4/ 灰色粘土含む　埋め戻し土
16. 10Y4/1 灰色砂質土　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック少量・N4/ 灰色粘土多く含む　埋め戻し土
17. 7.5Y5/1 灰色細砂質土　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック含む　埋め戻し土
18. 10Y5/1 灰色砂質土　N4/ 灰色砂質土・N4/ 灰色粘土少量・2.5Y5/6 黄褐色弱粘質ブロック含む　埋め戻し土
19. 7.5Y5/1 灰色砂質土　N4/ 灰色砂質土・2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック少量含む　埋め戻し土
20. 5Y5/3 灰オリーブ色細砂質土　N4/ 灰色砂質土少量含む　埋め戻し土
21. N5(Y) 灰色砂質土　N4/ 灰色砂質土・2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック含む　埋め戻し土
22. 7.5Y5/2 灰オリーブ色砂質土　N4/ 灰色砂質土含む　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック多く含む　埋め戻し土
23. 灰オリーブ色細砂　N4/ 灰色砂質土含む　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック・N4/ 灰色粘土多く含む　埋め戻し土
24. 灰オリーブ色細砂　N4/ 灰色砂質土含む　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック・N4/ 灰色粘土多く含む　埋め戻し土
25. 灰オリーブ色砂質土　N4/ 灰色砂質土若干含む　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック多く含む　埋め戻し土
26. 5Y5/1 灰色細砂質土　埋め戻し土
27. 7.5Y6/2 灰オリーブ色細砂質土　埋め戻し土
28. 7.5Y5/2 灰オリーブ色弱粘質土　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック含む　0.5cm大の小礫含む　埋め戻し土
29. N4(Y) 灰色粘土　埋め戻し土
30. 7.5Y5/2 灰オリーブ色弱粘質土　28層より2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロックを多く含む　0.5cm大の小礫少量含む　埋め戻し土
31. 7.5Y5/2 灰オリーブ色砂質土　N4/ 灰色砂質土含む　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック多く含む　22層より若干粘性あり　井戸枠裏込め
32. 5Y4/1 灰色砂質土　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック若干含む　井戸枠裏込め
33. 5BQ4/1 暗青灰色砂質土　2.5Y5/6 黄褐色弱粘質土ブロック若干・N4/ 灰色粘土少量含む　井戸枠裏込め
34. 10GY4/1 暗緑灰色砂層　径1.0～3.0cm大の小礫含む　一部酸化による赤色化　井戸枠裏込め

第52図　ＳＥ304平・断面図

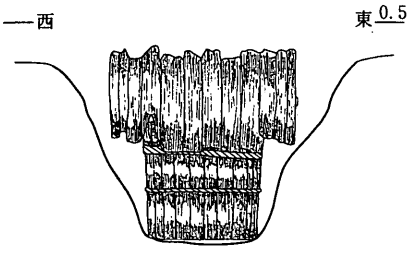


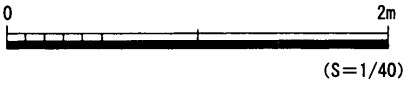
第53図　ＳＥ304出土遺物





1. N3/ 暗灰色粘土・2.5Y5/4黄褐色砂層互層　埋め戻し土
2. N3/ 暗灰色粘土　5BG4/1暗青灰色細砂含む　井戸枠内埋積層
3. N3/ 暗灰色粘土　井戸枠内埋積層
4. N3/ 暗灰色弱粘土　井戸枠内埋積層
5. 7.5GY4/1 暗緑灰色粘質土　井戸枠内埋積層
6. N3/ 暗灰色弱粘質土　井戸枠内埋積層
7. 5BG4/1 暗青灰色シルト　井戸枠裏込め
8. 7.5GY5/1 緑灰色砂質シルト　井戸枠裏込め
9. 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土　基盤層ブロック含む　井戸枠裏込め
10. 10BG4/1 暗青灰色砂　拳大の礫を多量に含む　井戸枠裏込め
11. 10Y5/1 灰色シルト　井戸枠裏込め





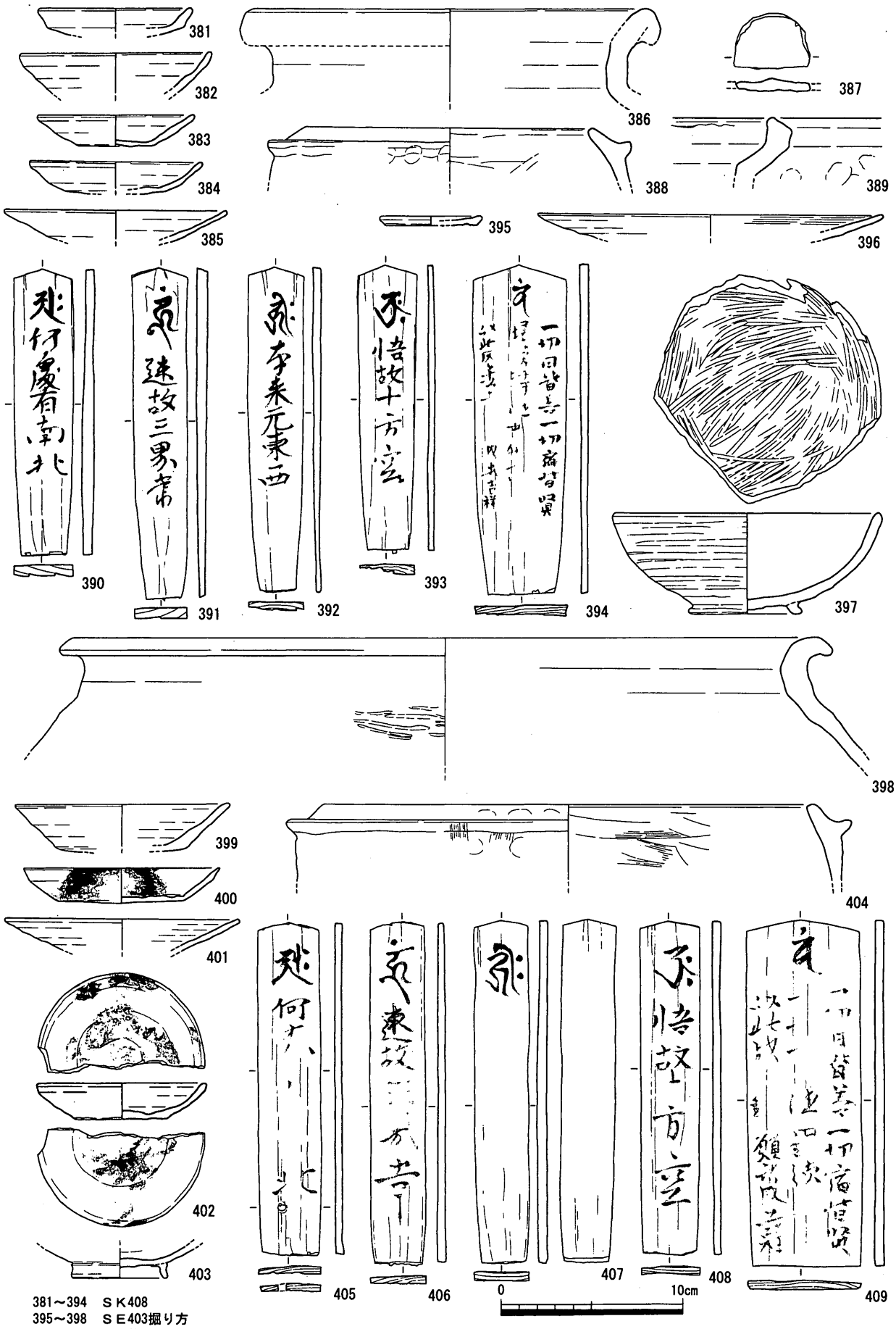
第54図　ＳＥ403平・断面図

井側下部は、高さ約60cm、直径60cmの結物を使用している。竹製のたがが２ヶ所に巻かれている。

井側上部の外側には扁平な安山岩礫３点が認められた。３点の礫は井側を中心として90°ごとに配置されており、調査地外にも更に１点あるものと思われる。この礫は、何らかの支えとして機能していたものと考えられ、更に上部の井側の存在を想定させる。

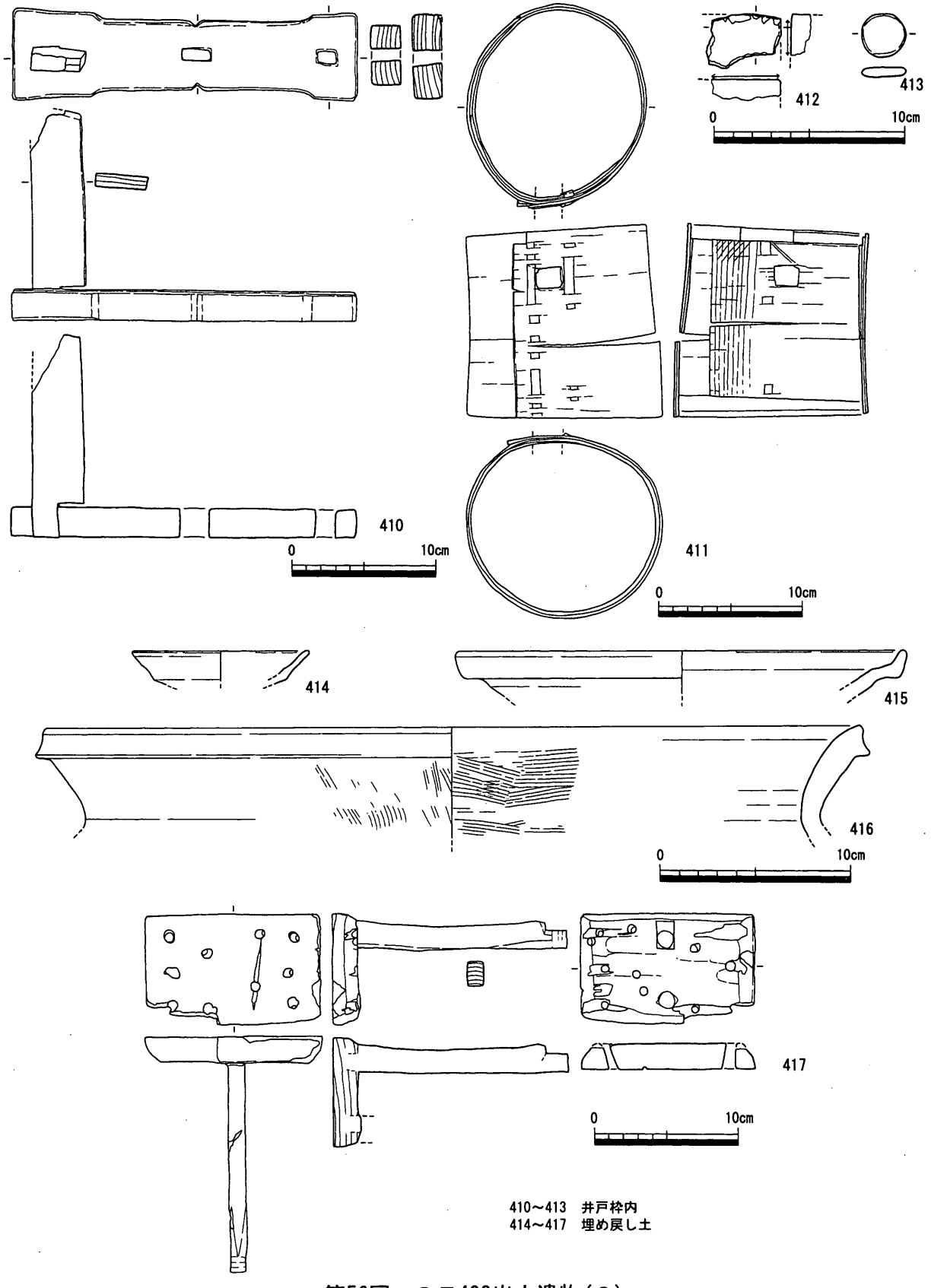
ＳＥ403南西部に隣接して土坑ＳＫ408が確認できる。発掘調査時にはＳＥ403埋め戻し土との区別がつかなかったため、ＳＥ403埋め戻し土と連続した土層堆積であると想定される。ＳＥ403廃絶に際しての井側上部構造抜き取り時にある程度掘削され、ＳＥ403と同時に埋め戻されたと考えられる。ＳＫ408とＳＥ403井筒内からは、それぞれ５枚１組の呪符木簡（390～394・405～410）が出土していることから、ＳＫ408は、ＳＥ403廃絶に際して呪符木簡を埋納するために掘削されたとも考えられる。

ＳＫ408出土遺物（381～394）　381は土師質土器小皿。382～385は土師質土器杯。383・384は１ｄ型式。386は備前壺。387は土師質土器杯転用の円盤状加工品。388は土師質土器足釜。389



381～394　ＳＫ408
395～398　ＳＥ403掘り方
399～409　井戸枠内

第55図　ＳＥ403出土遺物（１）



第56図　ＳＥ403出土遺物（２）

は土師質土器鍋。390～394は上端部が山形に成形された板状の呪符木簡。釈文はそれぞれ「(梵字アク)　何処有南北」(390)、「(梵字ウーン)　迷故三界当」(391)、「(梵字キリーク)　本来无東西」(392)、「(梵字タラーク)　悟故十方空」(393)、「(梵字バン)　一切日皆善一切宿皆賢／□□□□□□□□／以此□□□□□□［　］吉祥」(394)である。

ＳＥ403掘り方出土遺物（395～398）　395は土師質土器小皿。396は京都系土師器皿模倣の土師質土器杯。397は黒色土器椀。398は瓦質土器甕。

ＳＥ403井戸枠内出土遺物（399～413）　399～401は土師質土器杯。400は３ｂ型式とほぼ口径であるが、明瞭な「口縁部→体部ナデ手法」が認められ、器壁も若干薄いことから３形式とは別形式の可能性がある。401は京都系土師器皿模倣形態。402は１ｄ型式。403は吉備系土師質土器椀。404は土師質土器足釜。405～409はＳＫ408出土資料と同形状の呪符木簡。釈文はそれぞれ「(梵字アク)　何処□□北」(405)、「(梵字ウーン)　迷故三界当」(406)、「(梵字キリーク)　［　］」(407)、「(梵字タラーク)　悟故十方空」(408)、「(梵字バン)　一切日皆善一切宿皆賢／□□□□徳□□□□□□／以此成□□願□□吉祥」(409)であり、記載内容についてもＳＫ408出土木簡と同様であった可能性が高い。410は不明木製品。３箇所の長方形の孔を持つ板材に、直交する方向に別の板材が組み合わされている。樹種はスギである(第５章第２節参照)。411は曲物の柄杓。柄は出土していない。

埋め戻し土出土遺物(414～417)　414は土師質土器杯。415は東播系須恵器鉢。415は青磁。416は亀山窯系須恵器甕。417は織機の一部。平面長方形、断面台形の板材に複数の孔があり、中心部分の２孔には、直交する方向に棒状の部材が差し込まれている。樹種はスギである。

時期　ＳＥ403埋め戻し時に形成された形成されたＳＫ408出土の383・384から、廃絶時期は15世紀初頭と判断できる。ただし、井戸枠内から出土している400・402から、機能していた時期の中心は14世紀末頃と考えられる。

ＳＥ512（第57図）

Ｇ区南西部で検出した。井側は高さ90cm強、直径約65cmの平面形円形の結物。上端と中位より若干下った場所に竹製のたがが巻かれている。なお、この上部に更に１段結物が積まれていたことを確認しており、結物２段で井側を構成する構造であったことが分かる。井筒は無い。井側内底部には廃絶時に投げ込まれたと考えられる巨大な礫が詰まっている。

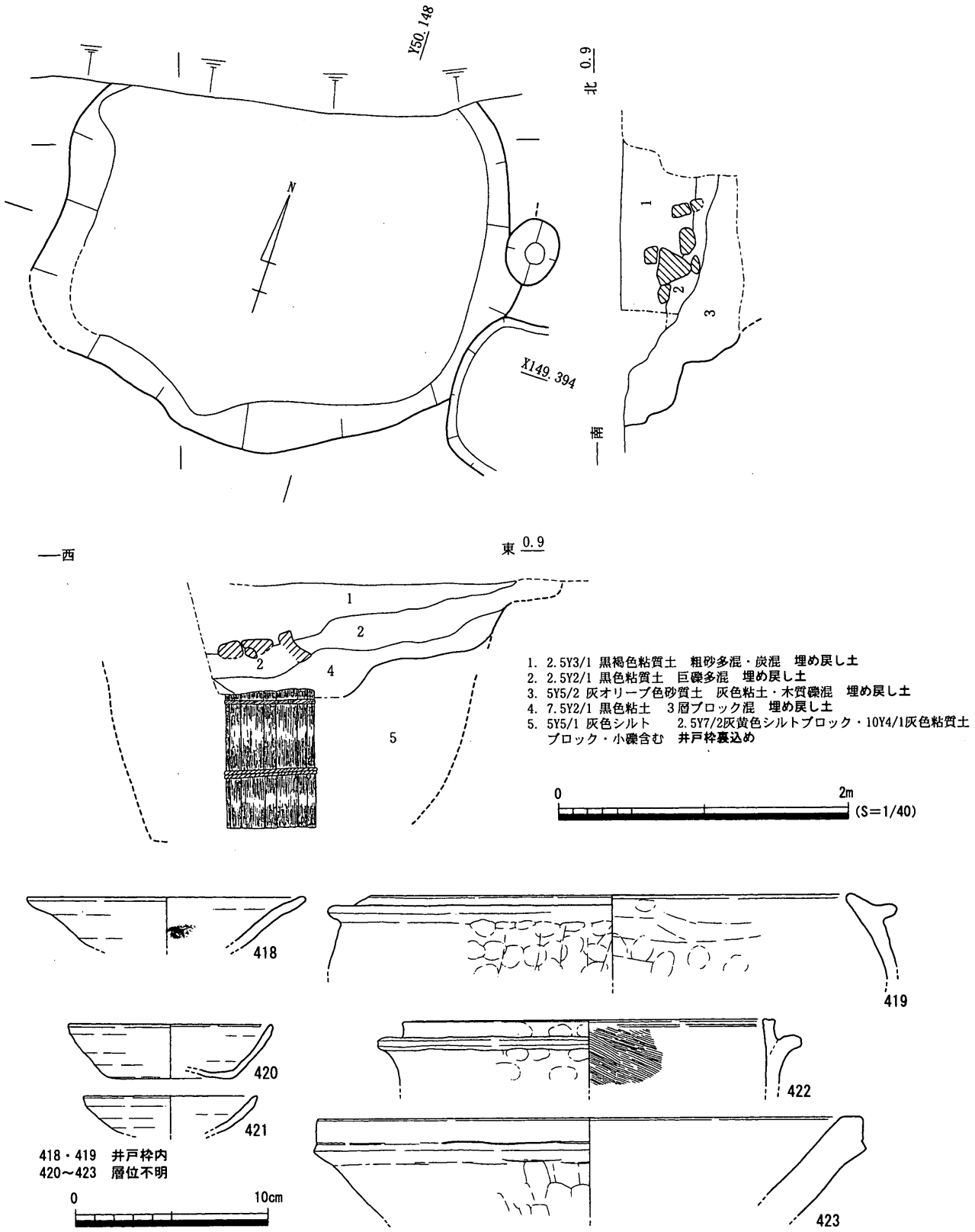
井戸枠内出土遺物（418・419）　井戸機能時の堆積土中出土なのか、廃絶時の埋め戻し土中出土かは不明である。418は京都系土師器皿。内面には煤が付着している。15世紀後半頃の資料か。419は土師質土器足釜。

出土層位不明遺物（420～423）これらの資料は同一単位での取り上げであるが、他遺構のものである可能性もある。420・421は土師質土器杯。422は土師質土器羽釜。423は井戸廃絶に伴う層中から出土した石鍋。木戸Ⅲ－ｅ－２型式。

時期　418・423から15世紀後半の廃絶と考えられる。

ＳＥ514（第58・59図）

Ｇ区西部で検出した。井側は直径約140cm の平面円形の石組。井筒は２つの曲物を積み重ねたもの。井筒は上段よりも下段の方が径は大きい。



第57図　ＳＥ512平・断面図、出土遺物

井戸枠内埋土出土遺物（424 ～ 429） 424 は土師質土器小皿。425 ～ 428 は土師質土器杯。429 は須恵器鉢。

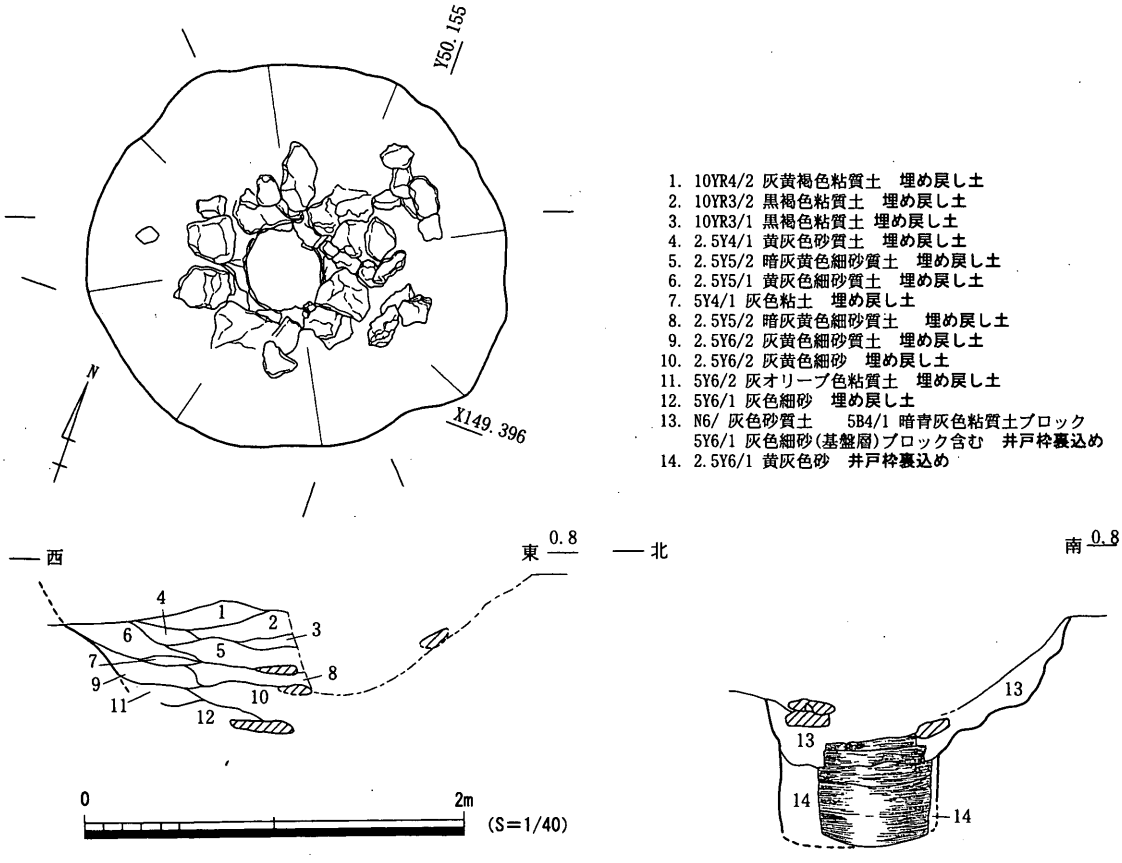
埋め戻し土出土遺物（430 ～ 454） 430・431 は土師質土器小皿。432 ～ 442 は土師質土器杯。443 は土師質土器椀。444・445 は土師質土器鉢。446 は森田第Ⅲ期第１段階と考えられる東播系須恵器鉢。447 は須恵器甕。448 は亀山窯系須恵器甕転用の円盤状加工品。449 は土師質土器甕。450・451 は土師質土器足釜。452・453 は土師質土器羽釜。454 は流紋岩製砥石。幅 4.1cm で、両長側面には成形時に使用した糸鋸によるものと考えられる線状の工具痕が確認できる。使用痕は両最大面に認められ、その方向は一定しない。

出土層位不明遺物（455） 455 は土師質土器足釜。

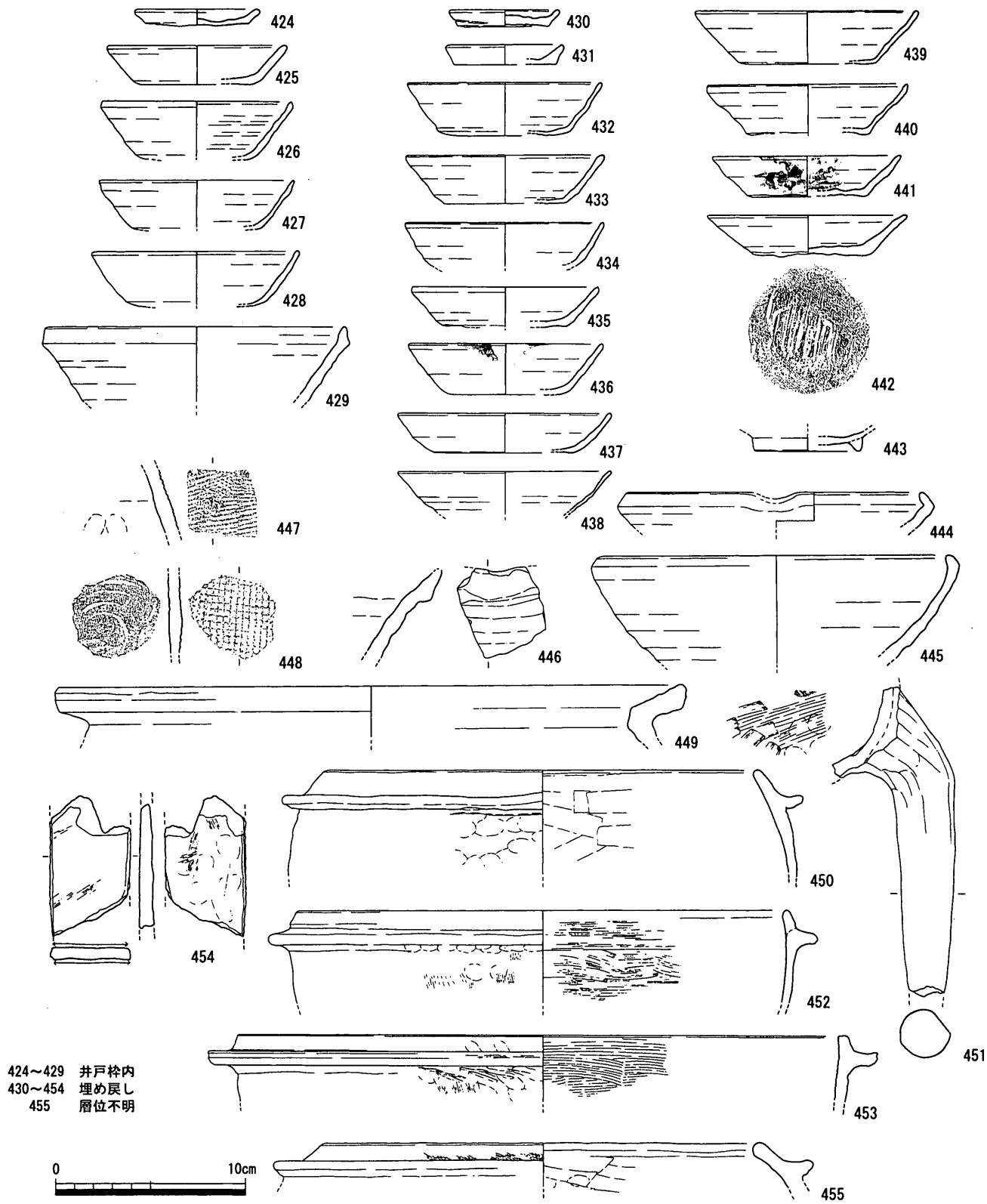
時期 425 を除く井戸枠内から出土した土師質土器杯の大部分（426・427・428）は深手であることから、本井戸は 13 世紀後葉～末を中心に機能していたと思われる。埋め戻し土出土遺物は１ａ型式の杯が多数を占めるが、１ｂ型式の 435・441 から最終廃絶時期は 14 世紀第２四半期と考えられる。

ＳＥ 520（第 60・61 図）

Ｇ区北西部で検出した。井側は一辺約 110cm の平面方形の石組。石組南辺の下部には高さ約 40

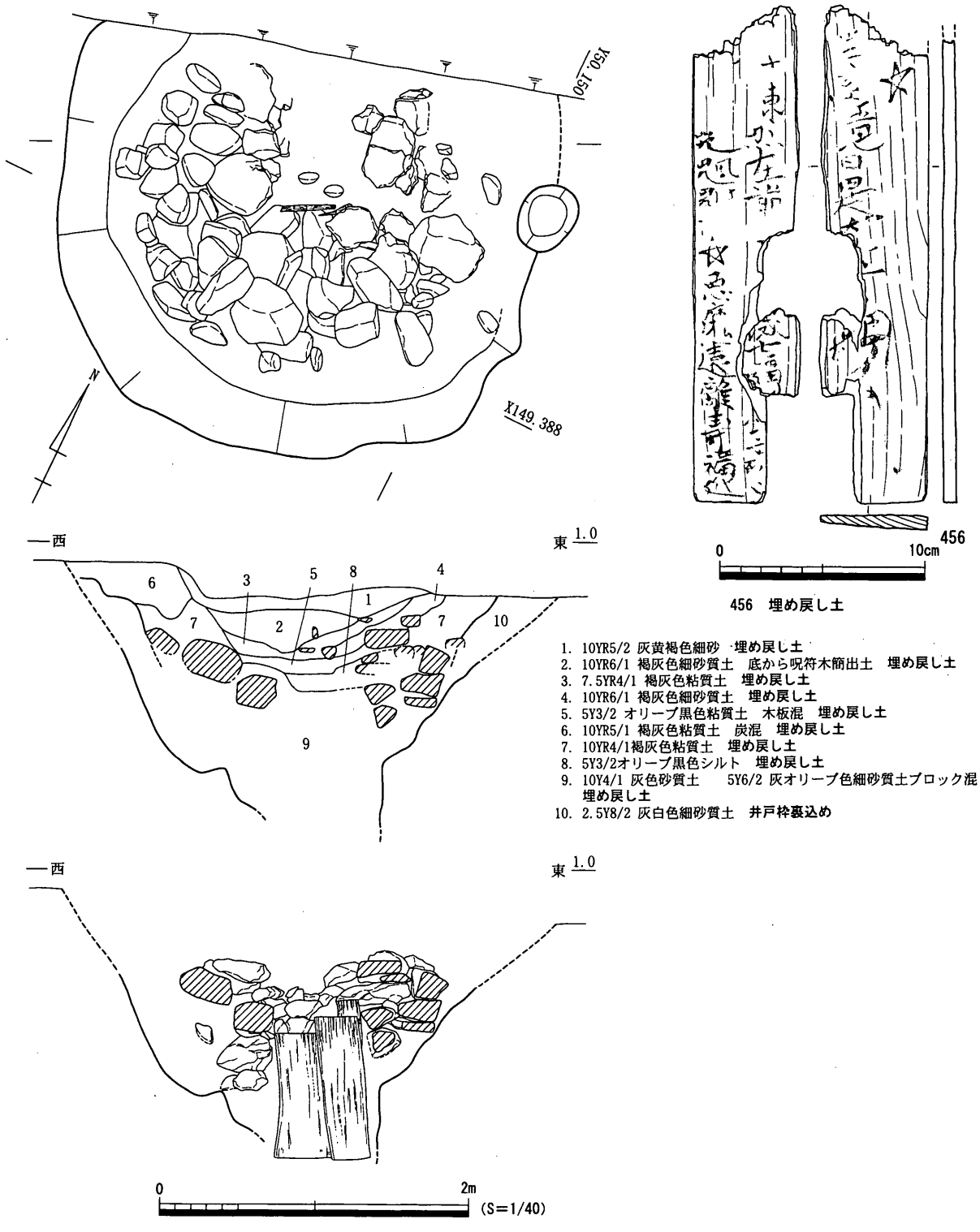


第58図　ＳＥ514平・断面図



第59図　ＳＥ514出土遺物

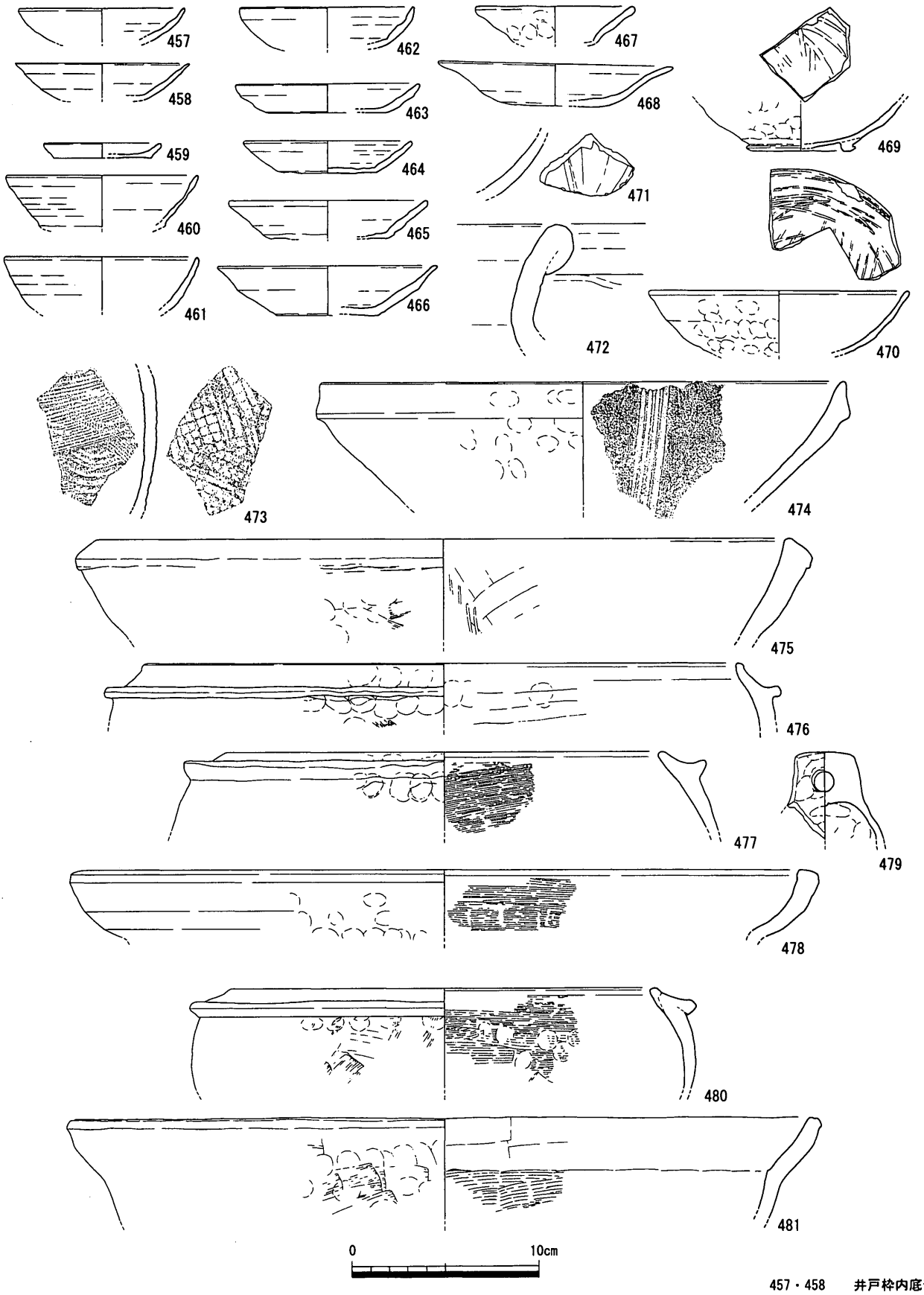
～50cm、幅約10～15cmの板材３枚が認められた。うち西端の１枚は板材の両長側面にはほぞ穴が、板目面には釘穴が１ヶ所確認できることから転用材と考えられる。他の２枚に関してはそういった痕跡は認められない。縦板組井側の残存部分の可能性もあるが、上部の石組がある程度破壊されていないため、抜き取りとは考えにくい。井側としては石積みのみで、例えば崩落防止のために



第60図　ＳＥ520平・断面図、出土遺物

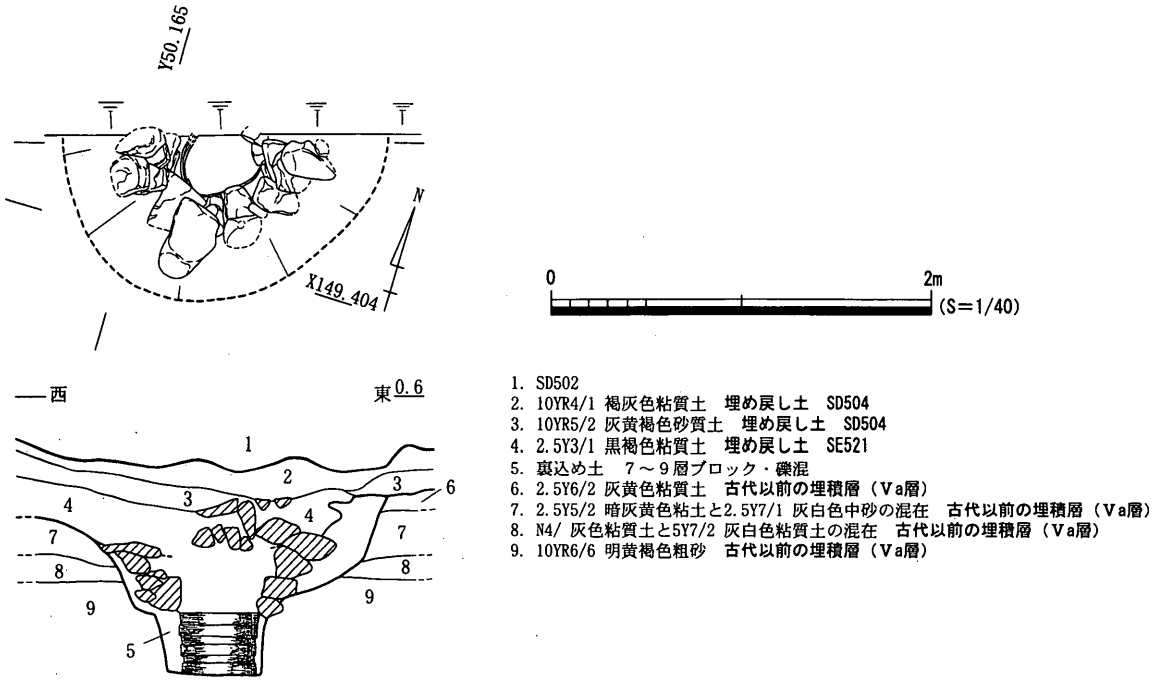
板材をいれたものと考えたい。

埋め戻し土中からは呪符木簡（456）が１点出土したが、井戸廃絶時の祭祀行為を示すものなのか、廃棄物として埋め立て土に含まれていたものなのかは判断できない。ところで、呪符木簡はＳＥ403、ＳＫ408からも出土しているが、いずれも15世紀代に比定される。高松平野では、空港



457・458　井戸枠内底部
459～479　埋め戻し土
480・481　層位不明

第61図　ＳＥ520出土遺物



第62図　ＳＥ521平・断面図

跡地遺跡や東山崎・水田遺跡といった15～16世紀の区画溝を伴う集落に呪符木簡が伴い、中世後半に特徴的な現象として捉えられる（乗松2003）。

井戸枠内底部出土遺物（457・458）　457・458は土師質土器杯。

埋め戻し土出土遺物（456・459～479）　456は呪符木簡。釈文は、（表）□□□〔陳烈カ〕在前　□七福□［　］／　□□［　］☆悪魔遠離壽福近」（裏）☆　／［　］是［　］である。459は土師質土器小皿。460～466は土師質土器杯。464は1ｄ型式。467は京都系土師器皿。467は指オサエとナデにより成形されている。468は京都系土師器皿を模倣したと考えられる土師質土器杯。在地産の系譜上にある一般的な土師質土器杯・小皿に比べて胎土は緻密である。ただ、468のような京都系土師器よりは黒雲母の含有量が少なく、焼成は固い。また、口縁部から回部にかけての器壁の厚さが一定である。469・470は瓦器椀。471は青磁碗。472は備前大甕。473は亀山窯系須恵器甕。474･475は楠井窯産擂鉢。焼成は474が須恵質、475が土師質。474は佐藤ＡⅢ－１類、475は佐藤ＡⅡ－１類。476・477は土師質土器足釜。478は土師質土器鍋。479は飯蛸壺。吊手部上面はナデにより平坦に仕上げられ、窪みは認められない。

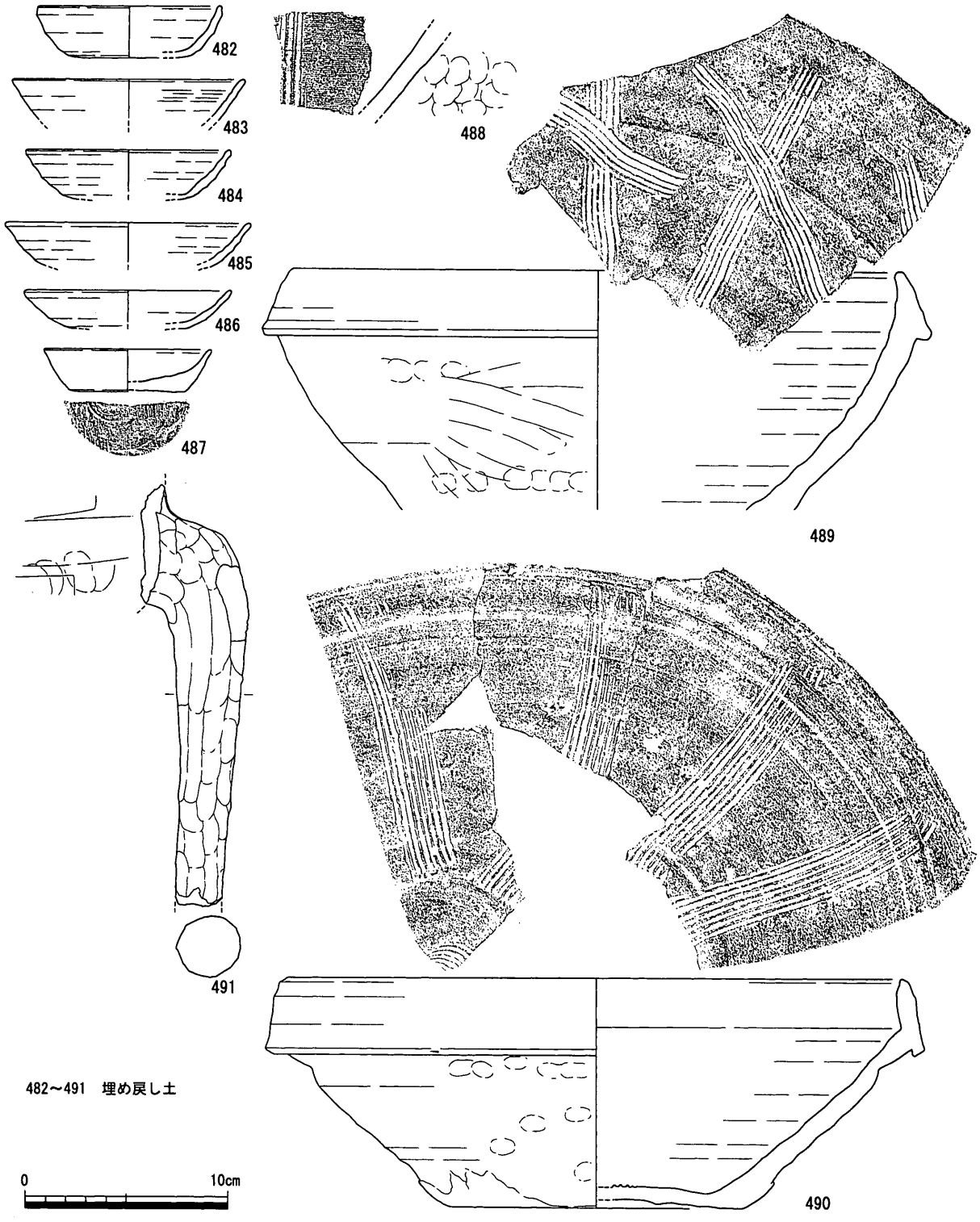
出土層位不明遺物（480・481）　480は土師質土器足釜。481は土師質土器鍋。

時期　廃絶時期は464･474から15世紀初頭～前葉と判断できるが、小片資料である463は更に降る時期の遺物であると想定され、15世紀初頭～中葉の幅を持って考えたい。

ＳＥ521（第62・63図）

Ｇ区北部で検出した。井側は直径約110cmの平面円形の石組で、２段もしくは３段積みの曲物を井筒とする。

埋め戻し土出土遺物（482～491）　482～487は土師質土器杯。488は楠井窯産鉢。489・490は備前擂鉢。489は乗岡中世４ａ期、490は乗岡中世５ａ期。489には斜め方向の擂り目を持つが、この段階ではごく少数である。491は土師質土器足釜。

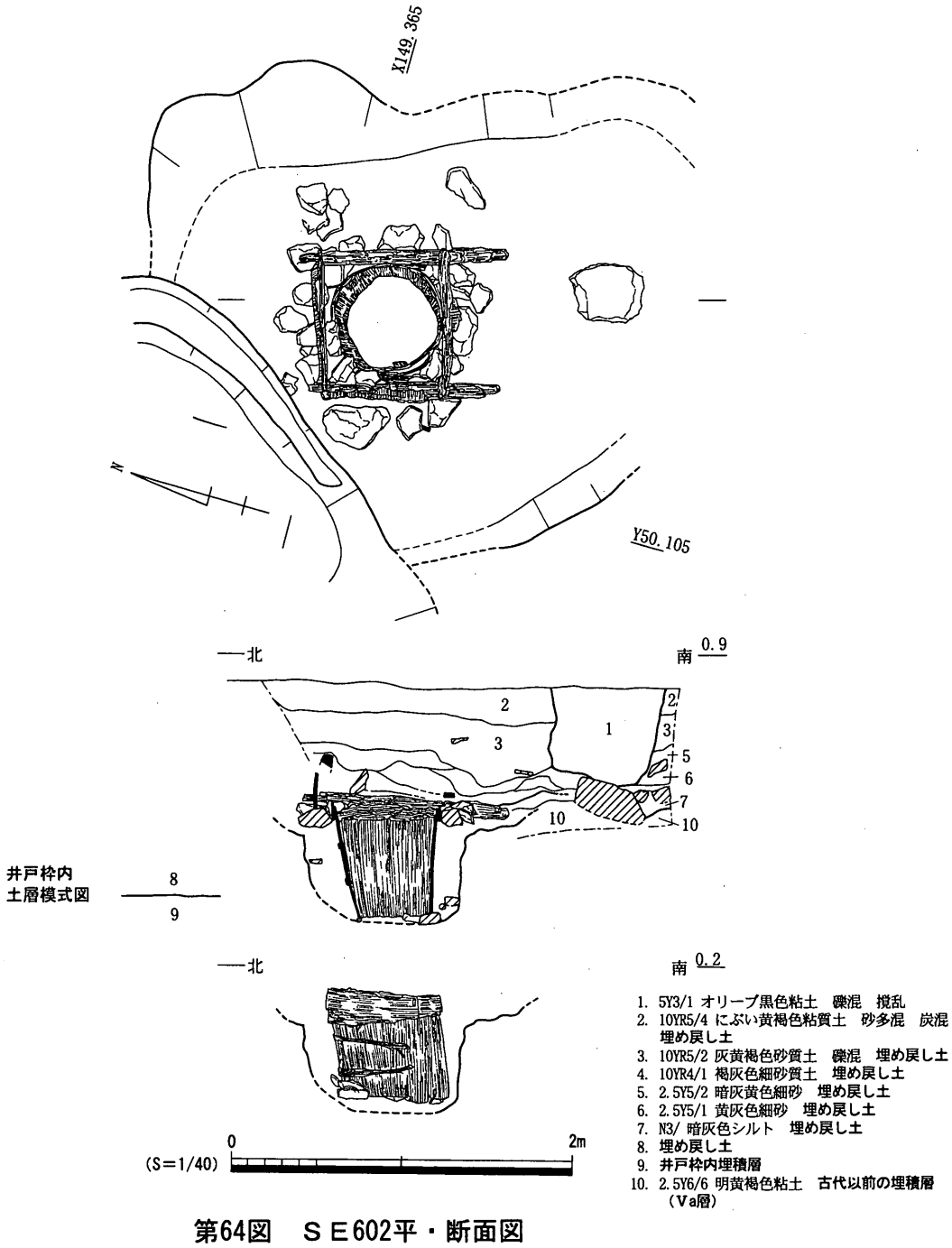


第63図　ＳＥ521出土遺物

時期　最終埋没は、490から15世紀中葉と考えられる。

ＳＥ602（第64・65図）

Ｈ区北西部で検出した。径約20～60cmの安山岩礫を敷いたものを基礎とし、その直上に長さ80

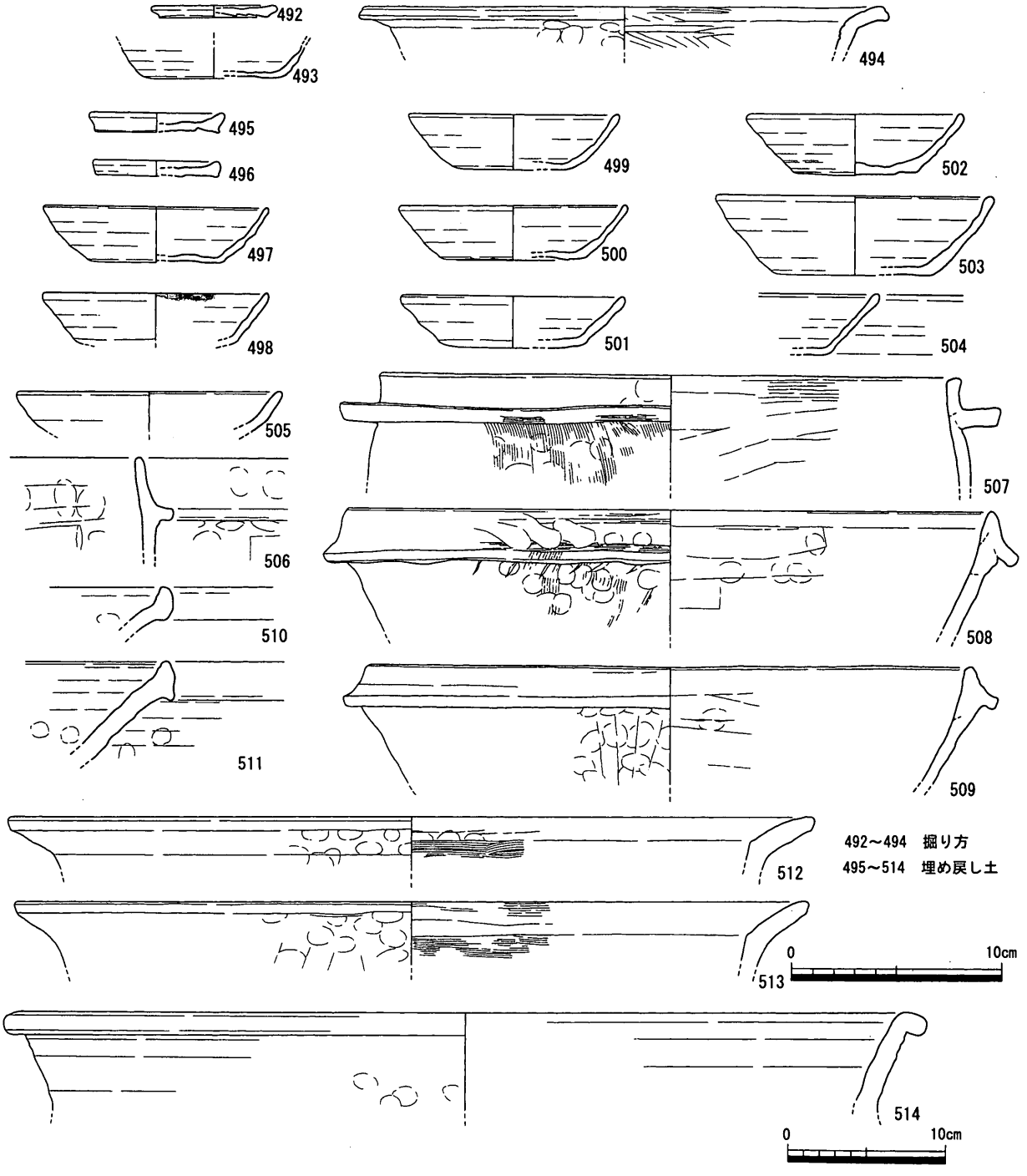


第64図　ＳＥ602平・断面図

～120cmの棒状の材を平面「はしご」状に組んだものを検出した。この組み材の外側面にたてかけられたような状態の薄い板材が部分的に残存していることから、組み材を下端部とした縦板組を井側としていた可能性が高い。またその下部には、高さ65cm、直径約60cmの結物が使用されている。結物の中段２ヶ所に竹製のたがが、上端部には高さ約15cmの曲物がたがとして巻かれている。結物の直下には安山岩が設置されており、井側の落ち込み防止の役割を果たしていたものであろう。

掘り方出土遺物（492～494）　492は土師質土器小皿。493は土師質土器杯。494は吉備系土師質土器鍋。

埋め戻し土出土遺物（495～514）　495･496は土師質土器小皿。497～505は土師質土器杯。497～502・504は１ａ型式。506～509は土師質土器羽釜。510・511は東播系須恵器鉢。森田第Ⅲ期



第65図　ＳＥ602出土遺物

第１段階。512・513は土師質土器鍋。514は備前大甕。

時期　出土した土師質土器杯から、14世紀初頭廃絶と考えられる。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ004（第66・67図）

Ａ区中央北部で検出した。ＳＤ002埋没後に掘削されている。埋土中にはブロックが多量に認

められるため、掘削された後、短期間で埋め戻しが行われていたと考えられる。

出土遺物（515～519） 515・516は佐藤ＢⅢ－４型式の土師質土器小皿。516の方が若干後出する形態か。517・518はそれぞれ１ｃ型式・１ｂ型式の土師質土器杯。

時期 ＳＤ002との関係から14世紀後半の時期を考えておきたい。

ＳＫ006（第67図）

Ａ区北東部で検出した平面形円形の土坑。

出土遺物（520～524） 520・521は土師質土器杯。520はロクロ目が明瞭に残る１ａ型式。521は、口径が大きいものの体部の立ち上がりは１ｃ型式に近い。522は備前擂鉢。523・524は土師質土器足釜。

時期 521と土師質土器足釜523・524から14世紀前葉～14世紀後葉と考えられる。

ＳＫ008（第66・67図）

Ａ区西部で検出した。ＳＤ009肩部埋没後に掘削された土坑で、ＳＰ0200に隣接する。埋土はブロックを含んでおり、掘削後、人為的に埋め戻されたものであることが分かる。

出土遺物（525～527） 525・526は十瓶山窯系須恵器椀。525は高台の形状から佐藤ＡⅡ－８型式もしくはＡⅡ－９型式と判断できる。

時期 出土遺物は13世紀後半を示すが、13世紀末掘削と想定されるＳＤ009との関係上齟齬をきたす。出土遺物は小破片であり量も少ないことから遺構形成以前の遺物の混入と考え、14世紀前半以降としたい。

ＳＫ009（第66・67図）

Ａ区南西部で検出した。検出レベルが低いこともあって、検出面から底面まで15cmしか残っていなかった。一応土坑扱いにしたが、ＳＤ009の上層を掘り下げた結果検出したため、ＳＤ009内の落ち込みであった可能性が非常に高い。

出土遺物（528・529） 528は土師質土器杯。529は東播系須恵器鉢。口縁部上端がやや丸みを帯びている。森田第Ⅲ期第２段階か。

時期 529を根拠とすれば14世紀前半の時期を与えることができる。

ＳＫ010（第67図）

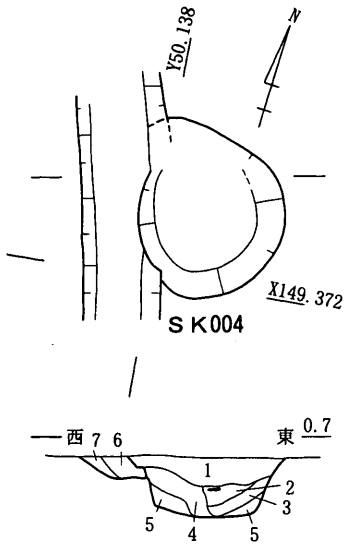
Ａ区北東部で検出した平面形円形の土坑。

出土遺物（530～532） 530は土師質土器杯。口径が大きく、胎土が緻密であるため、京都系土師器皿の影響を受けた在地産の杯であると考えられる。なお、体部内外面は回転ナデの痕跡が明瞭に残る。531は土師質土器足釜。532は土師質土器羽釜。

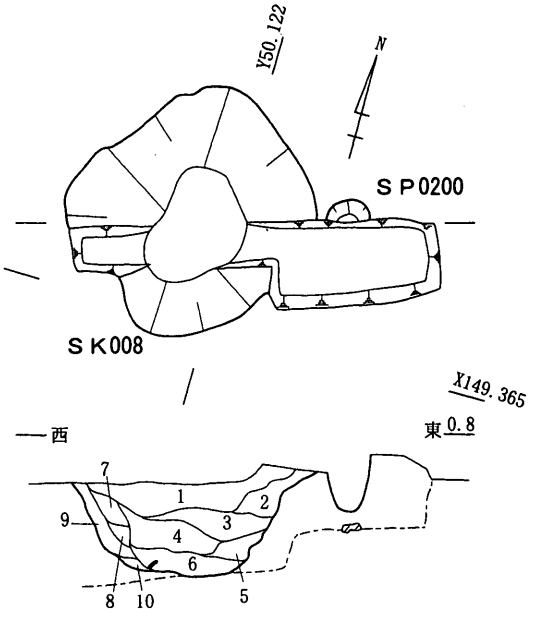
時期 埋没時期は、530から14世紀後半以降と考えられる。

ＳＫ012（第67図）

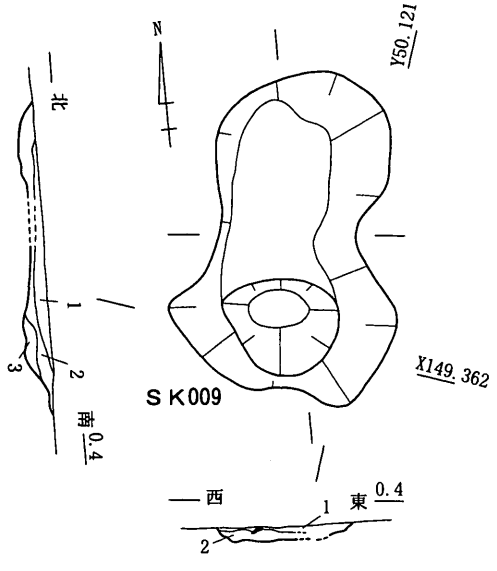
Ａ区東部で、近世段階のＳＤ008を掘り下げた後に検出した。埋土は黒色が強い粘土で、他遺構には見られない色調と土質である。



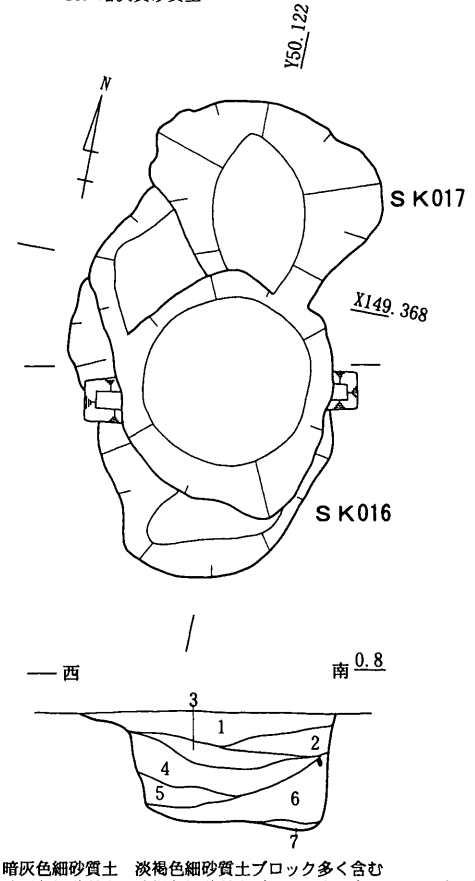
1. 暗灰色細砂質土　淡褐色・橙褐色・黒灰色細砂質土ブロックを多く含む　SK004
2. 灰色細砂質土　淡褐色・橙褐色・黒灰色細砂質土ブロックを多く含む　ただし1層に比べ黒灰色細砂質土ブロックの割合が小さい　SK004
3. 灰色細砂質土　２層に比べ混入物の割合が少ない　SK004
4. 黒褐色細砂質土　淡褐色・橙褐色・黒灰色細砂質土ブロックを多く含む　１層に比べ黒灰色細砂質土ブロックの割合が大きい　SK004
5. 灰色細砂質土　淡褐色・橙褐色・黒灰色細砂質土ブロックを多く含む　３層より更に混入物の割合は小さい　SK004
6. 黒灰色砂質土　橙褐色砂質土ブロック含む　SD002
7. 灰色細砂質土　淡褐色・ 橙褐色砂質土ブロックを多く含む　SD002



1. 暗灰色細砂質土　暗黄色砂質土ブロック少量含む
2. 暗灰褐色細砂質土　１層+基盤層ブロック
3. 暗褐灰色細砂質土
4. 暗灰色細砂質土　暗黄色砂質土ブロック含む
5. 暗黄灰色細砂質土　暗黄色砂質土ブロック多量に含む
6. 黒灰色細砂質土　粘性多少あり　暗黄色砂質土ブロック含む
7. 赤褐灰色砂層　Fe多い
8. 黄灰色砂層　基盤層ブロック？
9. 黒灰色粘質土
10. 暗灰黄砂質土



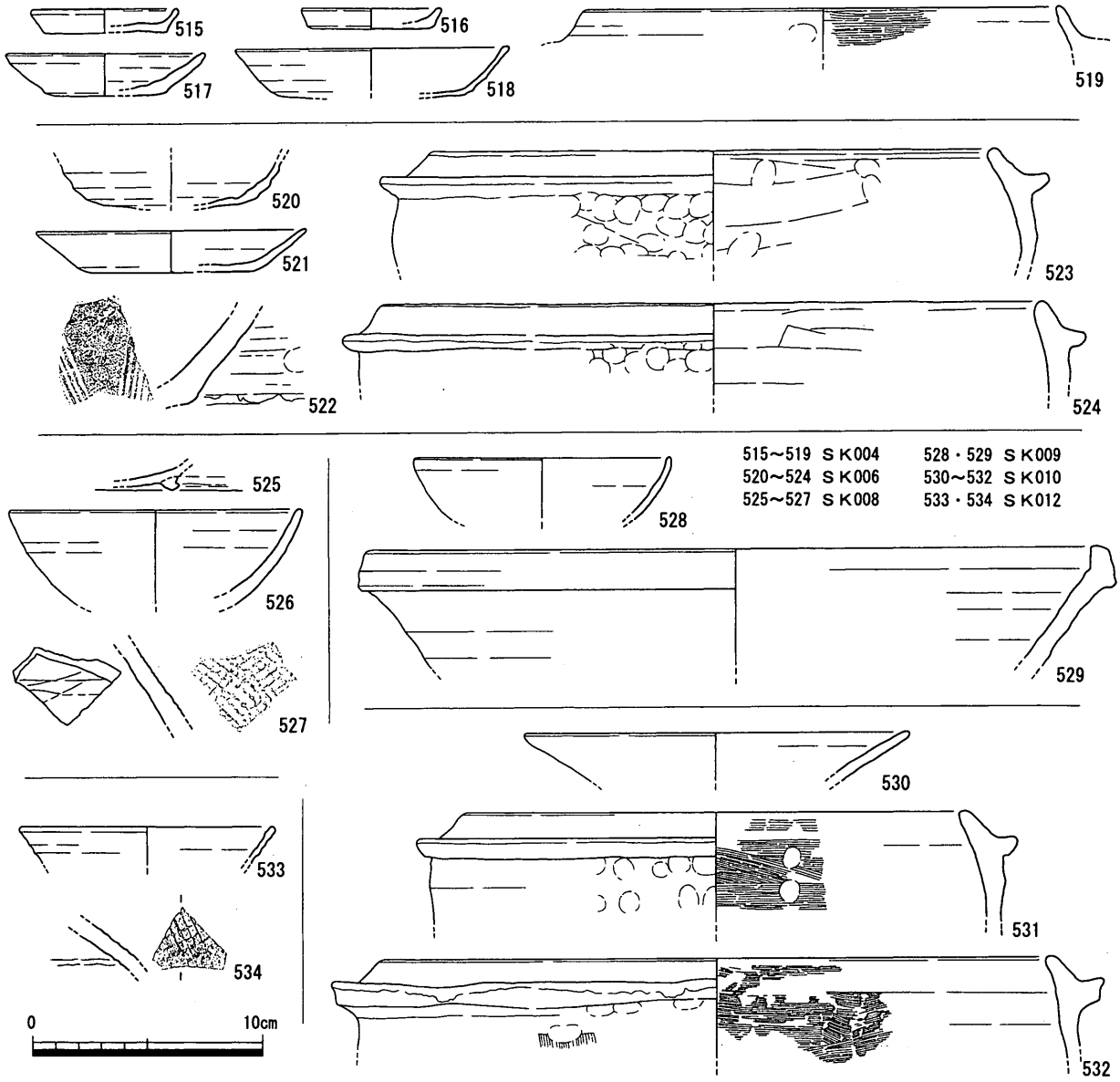
1. 黒褐灰色弱粘質土
2. 黒灰色弱粘質土　　暗黄灰色砂質土（基盤層）ブロック少量含む
3. 暗灰色砂質土　　暗黄灰色砂質土（基盤層）ブロック少量含む



1. 暗灰色細砂質土　淡褐色細砂質土ブロック多く含む
2. 暗灰色細砂質土　淡褐色細砂質土ブロック多く含む、マンガン多く含む
3. 灰色細砂質土　淡褐色細砂質土ブロック多く含む
4. 黒灰色弱粘質土　淡褐色弱粘質土ブロック・橙褐色粘土ブロック多く含む
5. 黒灰色弱粘質土　淡褐色弱粘質土ブロック・橙褐色粘土ブロック多く含む　４層に比べ淡褐色弱粘質土ブロックの比率が多い
6. 黒灰色粘質土　淡褐灰色・橙褐色粘土ブロックを多量に含む
7. 明灰色細砂質土　暗灰色粘土ブロック含む

0　　2m　(S=1/40)

第66図　ＳＫ004・008・009・016平・断面図



第67図　ＳＫ004・006・008～010・012出土遺物

出土遺物（533・534）　533の土師質土器杯は口縁部の細片であるが、ロクロ目が目立ち、1ａ型式と考えられる。534は須恵器甕。

時期　細片の遺物が少量出土しているのみだが、533から13世紀末～14世紀前葉と考えておきたい。

ＳＫ016・017（第66・68図）

Ａ区西部で検出した切り合う２基の土坑。２基の先後関係は確認できなかった。ＳＫ016は底部からほぼ直立する壁をもつ。埋土中は多量のブロック土を含み、人為的に埋め戻されたことがわかる。

ＳＫ016出土遺物（535～542）　535は土師質土器小皿。536～539は土師質土器杯。536～538は１ａ型式。539は１ｂ型式。540は十瓶山窯系須恵器椀。541は瓦器椀。542は白磁四耳壺。

ＳＫ016・017出土遺物（543～548） 543～546は土師質土器杯。543は１ａ型式、545は１ｂ型式、546は１ｃ型式。547は東播系須恵器鉢。548は土師質土器羽釜。

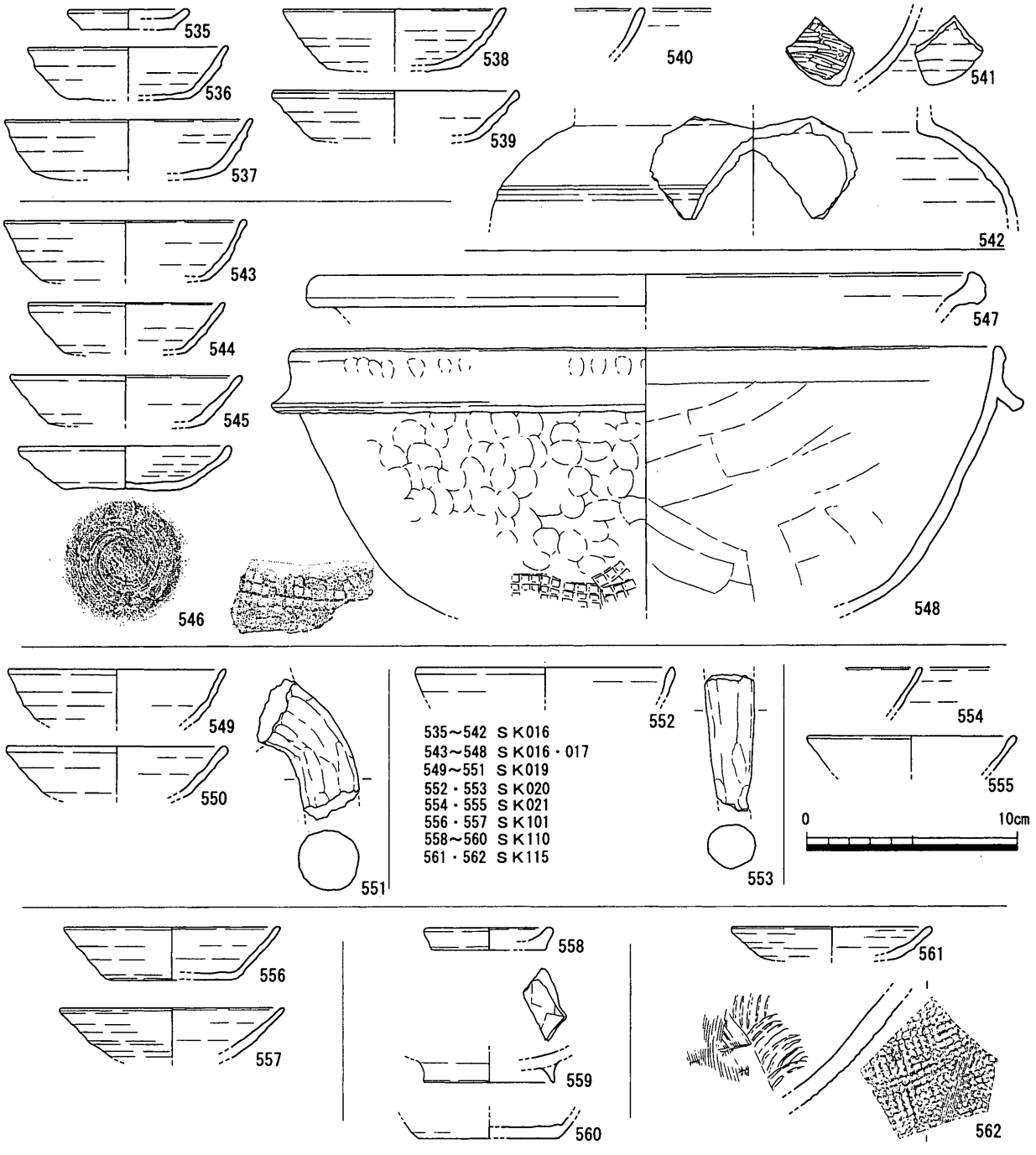
時期 539・545・546から14世紀中葉前後と考えられる。

ＳＫ019（第68図）

Ａ区中央部で検出した南北に長い溝状の土坑。

出土遺物（549～551） 549・550は土師質土器杯。549はロクロ目が明瞭に残る１ａ型式。551は土師質土器足釜。

時期 549から13世紀末～14世紀前葉と考えられる。



第68図　ＳＫ016・017・019～021・101・110・115出土遺物

ＳＫ 020（第 68 図）

Ａ区中央北端部で検出した土坑。

出土遺物（552・553） 552 は土師質土器杯小片。553 は土師質土器足釜。

時期 小片であり、不安定な資料ではあるが、552 から 14 世紀前半頃と考えたい。

ＳＫ 021（第 68 図）

Ａ区西部で検出した溝状の浅い土坑。

出土遺物（554・555） 554・555 は土師質土器杯。小片のため型式を判断し難いが、焼成・色調等からいずれも１ａ型式もしくは１ｂ型式と推測できる。

時期 出土した杯から 14 世紀前半と考えられる。

ＳＫ 101（第 68 図）

Ｂ区西部で検出した土坑。

出土遺物（556・557） 556・557 は土師質土器杯。556 は１ａ型式。

時期 556 から 13 世紀末～ 14 世紀前葉と考えられる。

ＳＫ 110（第 68 図）

Ｂ区中央やや北東よりで、近世段階の土坑列掘り下げ後に検出した。

出土遺物（558 ～ 560） 558 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。559 は吉備系土師質土器椀。560 は白磁皿。

時期 558 から 13 世紀末～ 14 世紀前葉と考えられる。

ＳＫ 115（第 68 図）

Ｂ区西部で検出した平面形がほぼ正円形の土坑。

出土遺物（561・562） 561 は１ｄ型式の土師質土器杯。562 は須恵器甕。

時期 561 から 14 世紀末頃と考えられる。

ＳＫ 130（第 69・70 図）

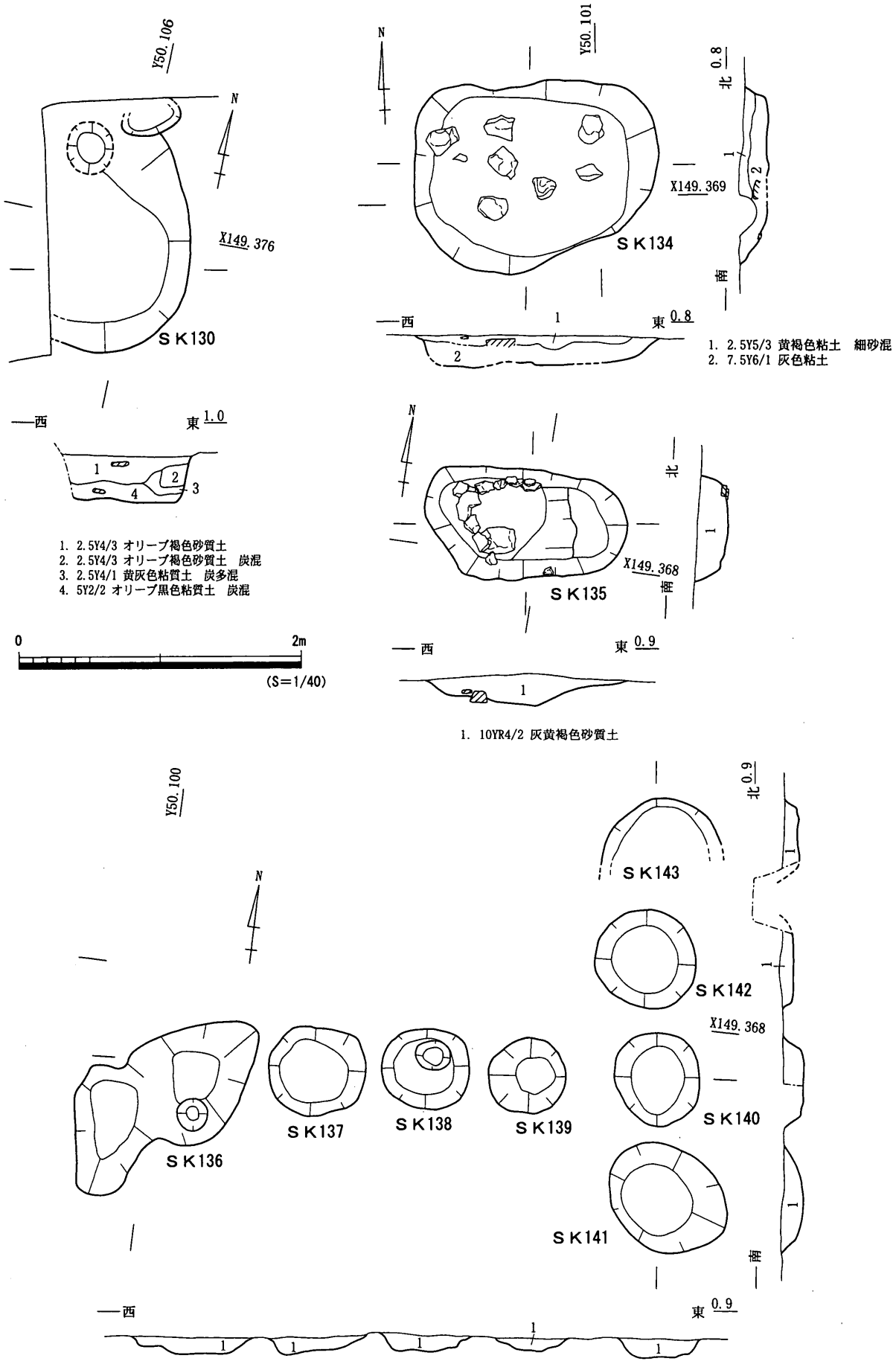
Ｂ区中央北端部分で部分的に検出した。

出土遺物（563 ～ 566） 亀山窯系須恵器鉢（563）、畿内産瓦質土器羽釜（564）、土師質土器鉢（565）、肥前系陶器碗（566）が出土している。564 は二次焼成のためか、炭素の吸着が認められない。566 の畳付には、胎土目積みと砂目積みの痕跡が確認できる。

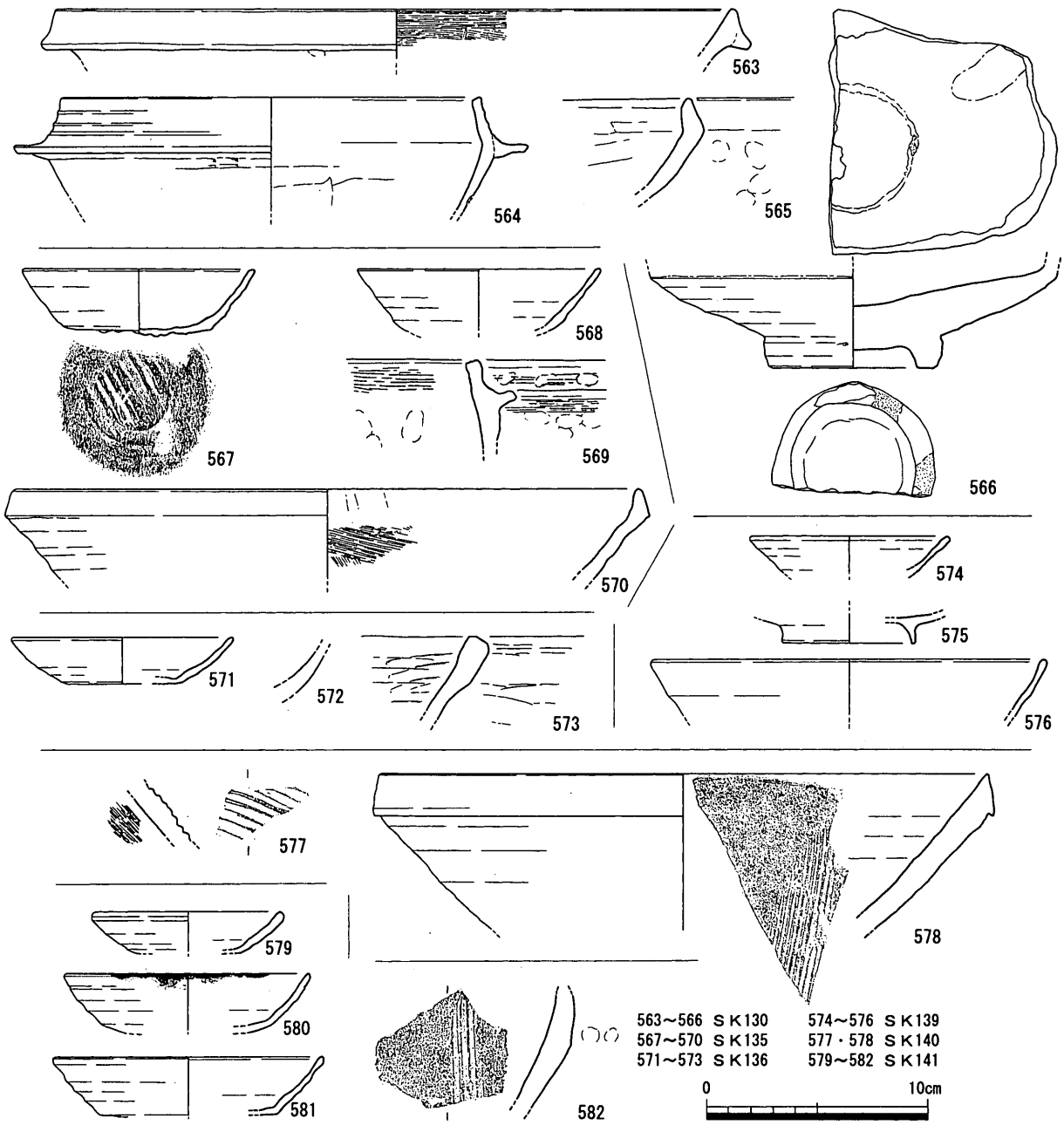
時期 563・564 から 14 世紀前半に位置づけることができる。小破片ではないものの、566 は混入と考えたい。

ＳＫ 135（第 69・70 図）

Ｂ区中央部やや北西よりに位置する東西方向を長軸とする平面楕円形の土坑。東から西に向けて緩やかに傾斜を持って落ち込む。落ち込み部分には、北・西に辺を持つ「Ｌ」字状に拳大の板状



第69図　ＳＫ130・134・135～143平・断面図



第70図　ＳＫ130・135・136・139～141出土遺物

安山岩が並べられ、南側には人頭大の安山岩が置かれている。人為的な配石遺構であることは間違いないが、その性格については不明である。

出土遺物（567 ～ 570）　土師質土器杯（567・568）・足釜（569）、東播系須恵器鉢（570）が出土している。

時期　出土した土師質土器杯（567・568）から 13 世紀末～ 14 世紀前葉と判断できる。

ＳＫ 136・137・138・139・140・141・142・143（第 69・70 図）

Ｂ区西部で検出した「Ｔ」字状に並ぶ８基の土坑群。底面の標高や埋土の色調は非常に類似しており、これらの土坑が有機的な関係を持っていたことは容易に推測できる。この土坑群の北にはＳＢ 101・102 を含むピット集中域が存在し、その南東端を区画するものであろうか。

ＳＫ 136 出土遺物（571 ～ 573） 571 は１ｃ型式の土師質土器杯。572 は青磁碗小片。573 は土師質土器鉢か。

ＳＫ 139 出土遺物（574 ～ 576） 574 は土師質土器杯。575 は吉備系土師質土器椀。576 は須恵器椀。

ＳＫ 140 出土遺物（577・578） 577 は須恵器甕胴部小片。578 は乗岡中世４ａ期の備前擂鉢。

ＳＫ 141 出土遺物（579 ～ 582） 579 ～ 581 は土師質土器杯。582 は楠井窯産鉢。佐藤ＡⅢ－１型式。

時期 578・582 から 15 世紀初頭と考えられる。

ＳＫ 144（第 72 図）

Ｂ区中央やや南よりで検出した土坑。近世段階の遺構ＳＫ 114・131 による撹乱を受けていたため、全体形は不明である。

出土遺物（583） 583 は１ａ型式の土師質土器杯である。

時期 583 から 13 世紀末～ 14 世紀前葉と判断できる。

ＳＫ 146（第 71・72 図）

Ｂ区東部で検出。砂系の土と炭化物が混じる土が相互に堆積しており、これは人為的な埋め戻しの単位を表していると考えられる。記録が不十分なため、ＳＫ 167 との切り合い関係については不明であるが、出土遺物から判断すれば本遺構がＳＫ 167 を切る可能性が高い。

出土遺物（584 ～ 603） 584 ～ 587 は土師質土器小皿。588 ～ 594 は土師質土器杯。588 は３ａ型式、590・591 は１ａ型式、592 は１ｃ型式。595 は吉備系土師質土器高台小片。596 は須恵器椀底部片。597 は山本第Ⅲ期第１段階の東播系須恵器鉢口縁部小片。598 は備前甕口縁部小片。乗岡中世２ｂ期。599・600 は土師質土器鍋口縁部小片。601 は土師質土器羽釜。折り曲げによって鍔部を作り出した後、口縁部を接合している。602 は土師質土器足釜。佐藤ＢⅢ型式。

時期 588・592 から 14 世紀後半と判断できる。

ＳＫ 148（第 72 図）

Ｂ区中央やや南東寄りで検出した、平面不定形の土坑。落ち込み部が北東・南の２箇所にあるため、２基の土坑が切り合っている可能性もある。南部落ち込みの底部にはブロック状の堆積が認められるため、人為的な埋め戻しが想定できる。

出土遺物（604 ～ 609） 604 は佐藤ＢⅢ－４型式の土師質土器小皿。605・606 は土師質土器杯。605 は１ａ型式。607・608 は須恵器椀。609 は須恵器甕。

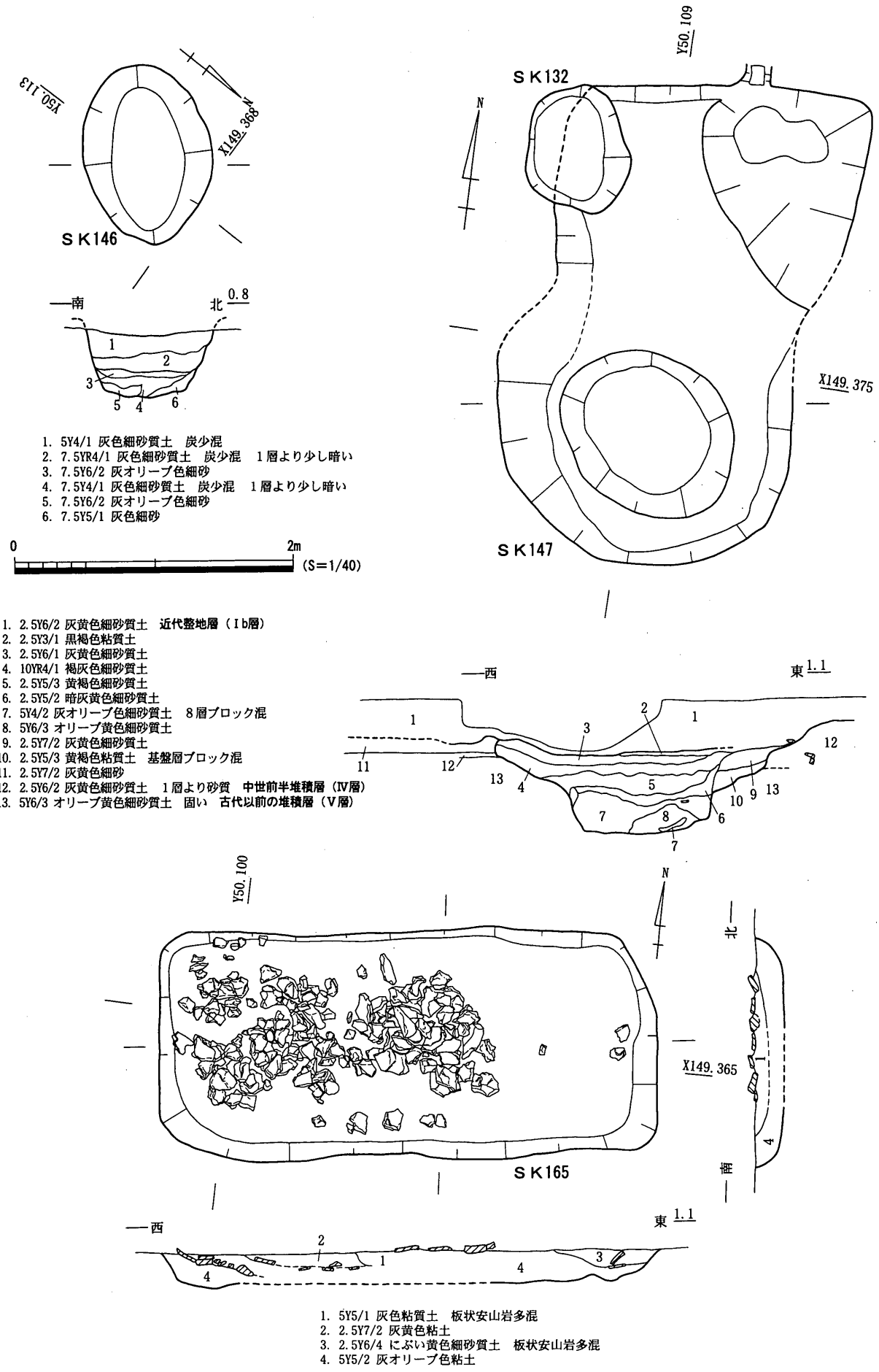
時期 604・605 から 13 世紀後半～ 14 世紀初頭に位置づけられる。

ＳＫ 154（第 72 図）

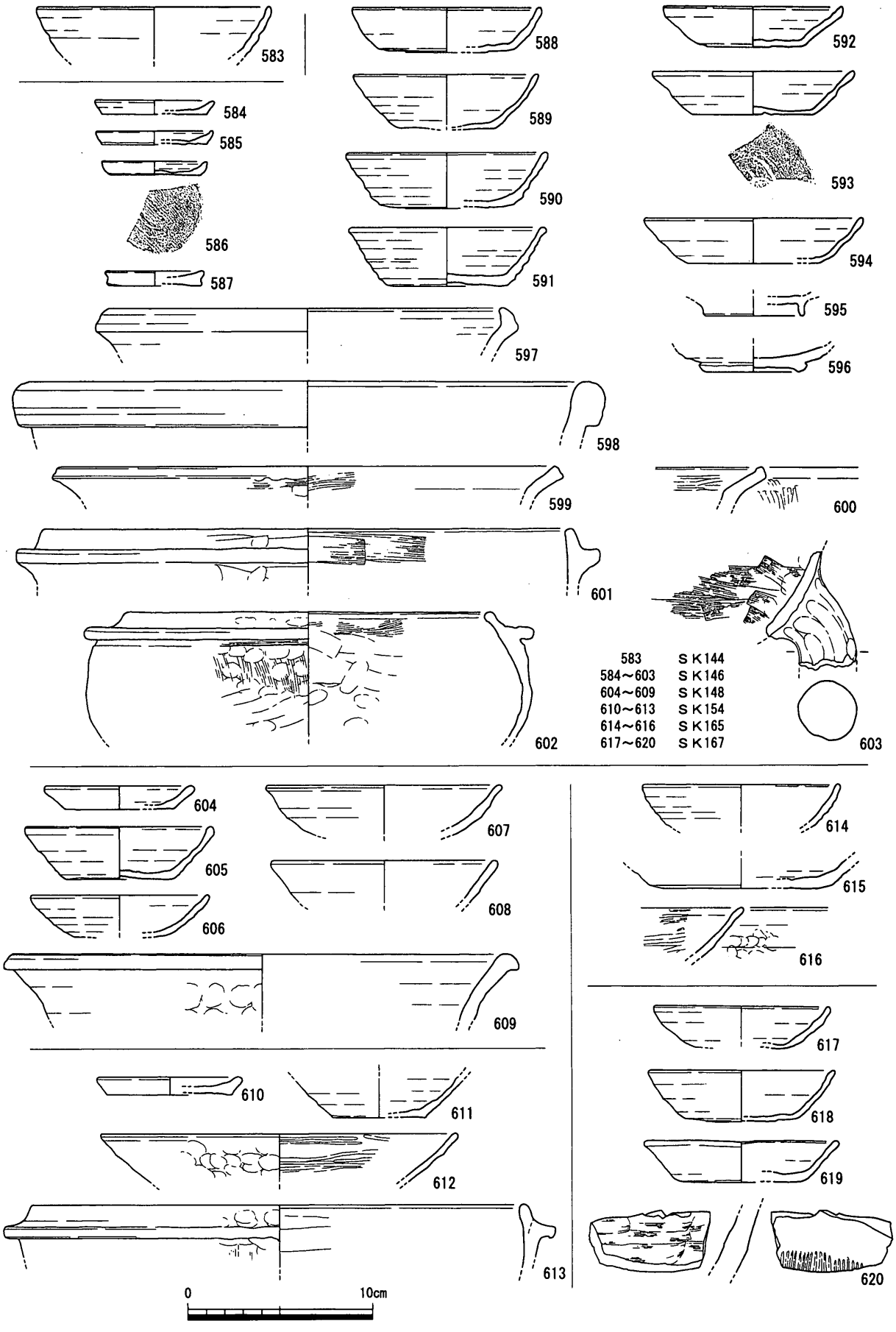
Ｂ区北部で検出した平面不定形の落ち込み状の土坑。

出土遺物（610 ～ 613） 610 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。611 は１ａ型式の土師質土器杯。612 は和泉型瓦器椀。尾上Ⅲ－３期～Ⅳ－２期に該当か。613 は土師質土器羽釜。

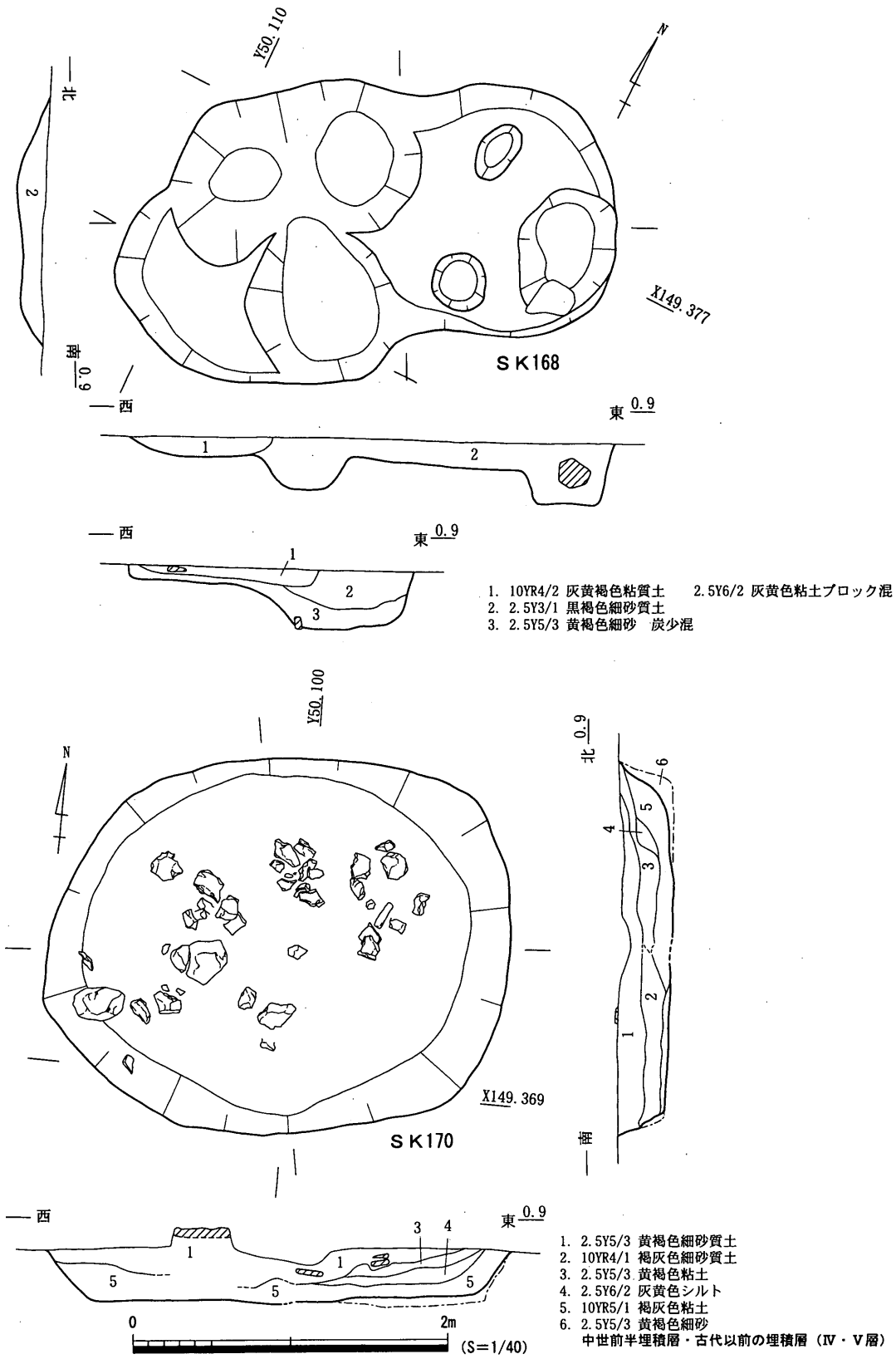
時期 出土遺物がいずれも小片で一括性もないため、時期比定は困難であるが、13 世紀後半～



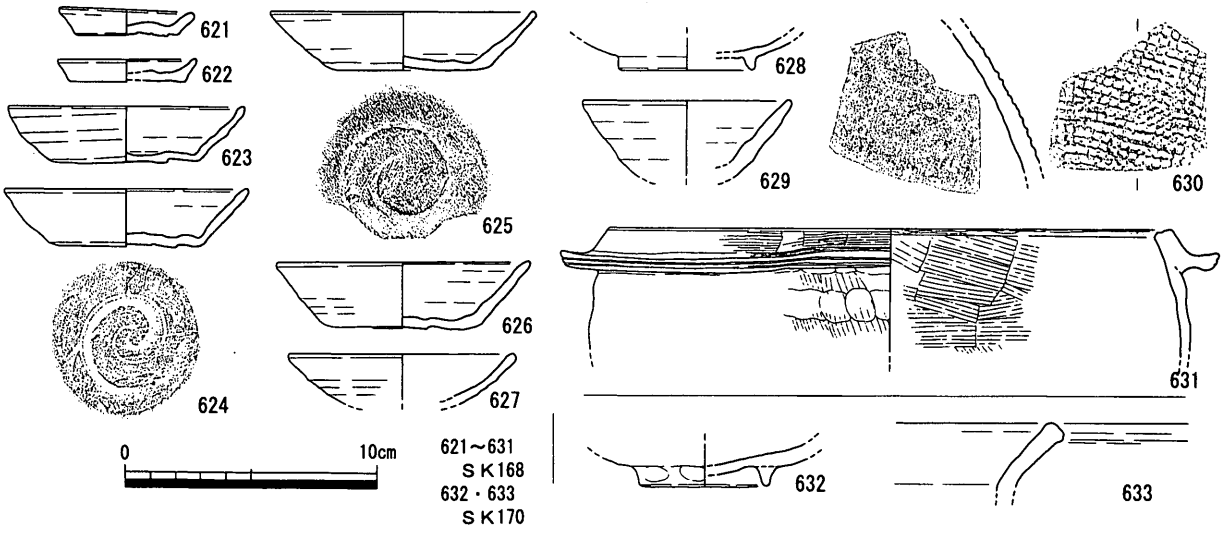
第71図　SK146・147・165平・断面図



第72図　SK144・146・148・154・165・167出土遺物



第73図　ＳＫ168・170平・断面図



第74図　ＳＫ168・170出土遺物

14 世紀初頭としておきたい。

ＳＫ 165（第 71・72 図）

Ｂ区西端部で検出した、平面長方形の土坑。底面から側面にかけて粘土系の土が堆積し、その上面に拳大の板状の安山岩礫が敷き詰められている。平面形は異なるが、同様の遺構は高松城跡（西の丸町地区）Ｃ地区でも確認できる（ＳＸｃ 46・47）。いずれも砂系の基盤層上に構築されており、粘土系の土は土坑内を補強するためのものであったと考えられるが、板状の礫の性格は不明である。

出土遺物（614 ～ 616）　614 は土師質土器。にぶい橙色を呈し、14 世紀後半以降に降る可能性がある。615 は大型の土師質土器杯の底部片。616 は尾上Ⅲ－３期～Ⅳ－１期の和泉型瓦器椀小片。

時期　出土遺物は少量で、いずれも小片のため時期決定は困難であるが、614 の色調から 14 世紀後半としておきたい。

ＳＫ 167（第 72 図）

Ｂ区東部で検出。記録が不十分なため、ＳＫ 146 との切り合い関係については不明であるが、出土遺物から判断すれば本遺構がＳＫ 146 に切られる可能性が高い。

出土遺物（617 ～ 620）　617 は１ｂ型式、618 は１ａ型式、619 は１ｃ型式の土師質土器杯。620 は常滑甕の胴部小片。

時期　619 から 14 世紀後半と考えられる。

ＳＫ 168（第 73・74 図）

Ｂ区北東端部で検出した土坑。平面形が不定形のうえ、落ち込み部も数ヵ所認められることから、数基の土坑が切り合っている可能性が高い。

出土遺物（621 ～ 631）　621・622 は土師質土器小皿。623 ～ 627 は土師質土器杯。623・624・626 は１ｂ型式。628 は吉備系土師質土器椀。629 は近世段階の混入の可能性も考えられる備前杯。

630は須恵器甕。631は土師質土器羽釜。

時期　623・624・626から14世紀第2四半期と考えられる。

ＳＫ170（第73・74図）

Ｂ区北西部で検出した平面形が円形の土坑。土坑内からは、底部から浮いた状態で板状の赤色安山岩礫が出土しているが、出土状況から本土坑に直接伴うものではないと考える。

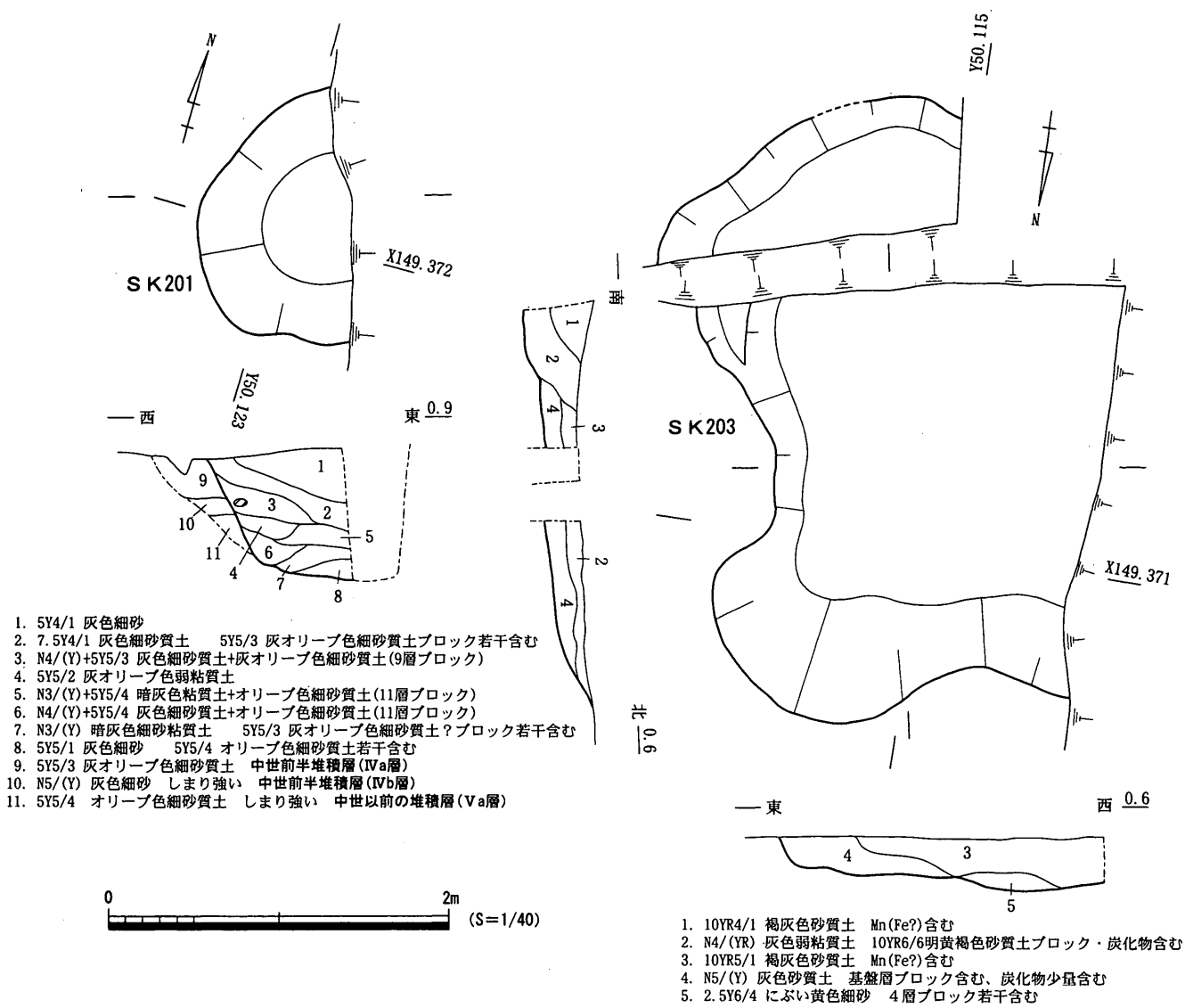
出土遺物（632・633）　632は吉備系土師質土器椀。633は土師質土器鍋。

時期　632は13世紀後半を示すが、周辺の遺構を考慮して、13世紀後半～14世紀前葉の幅で埋没時期を捉えたい。

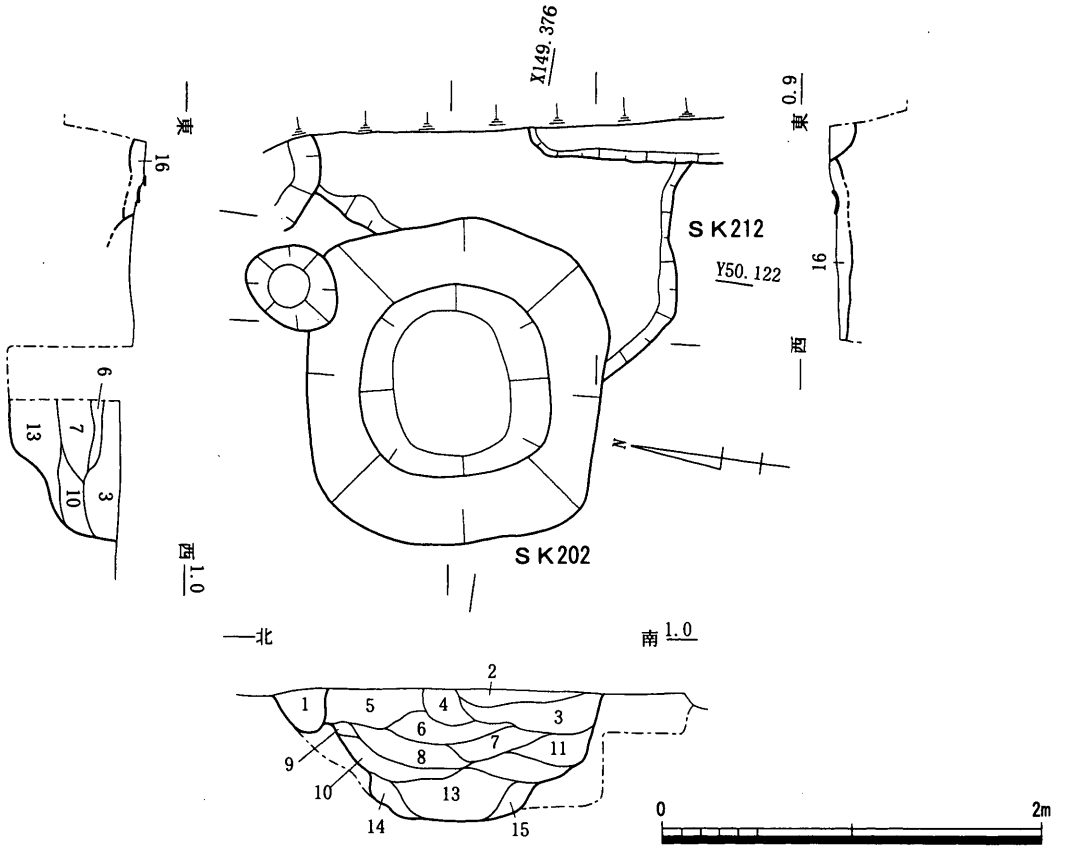
ＳＫ201（第75・78図）

Ｃ区南東部で検出。埋土には基盤層ブロックが混じることから人為的に埋め戻された土坑であることが分かる。

出土遺物（634～637）　634・635は1ａ型式の土師質土器杯。636は須恵器鉢。佐藤Ｅ－6型式。

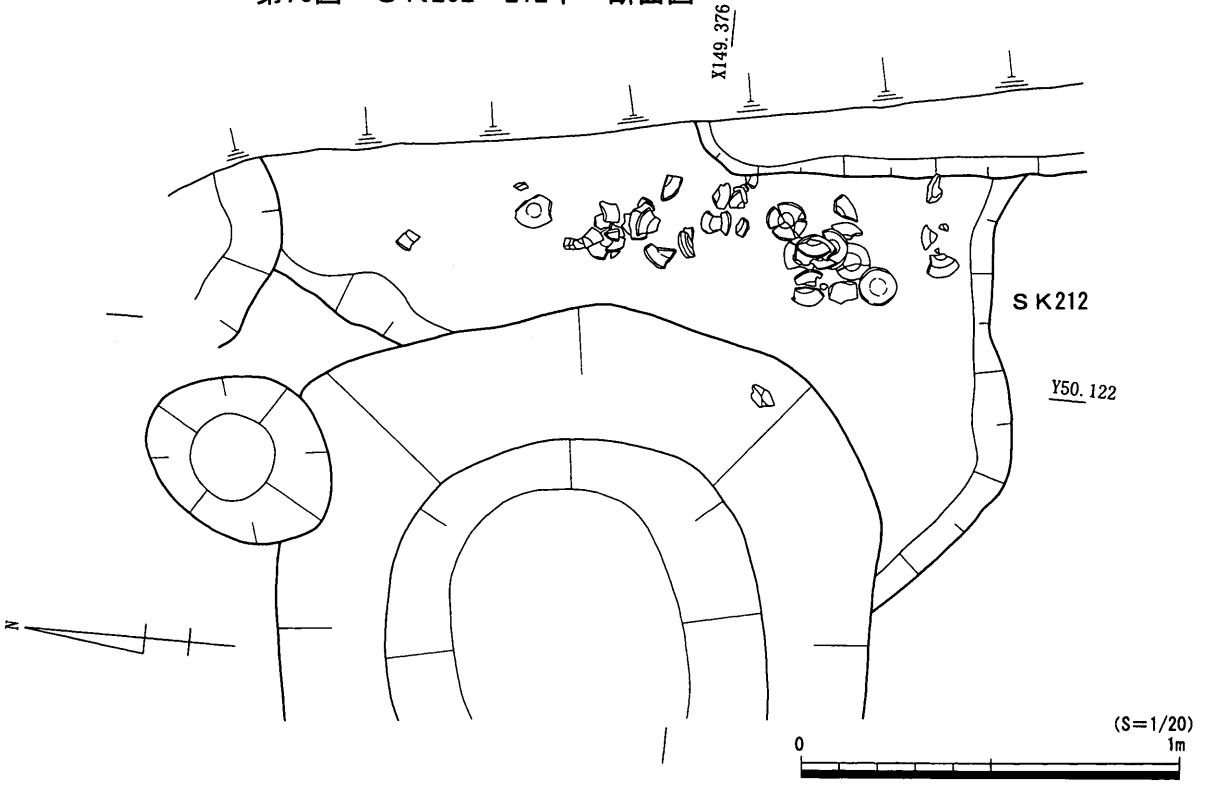


第75図　ＳＫ201・203平・断面図

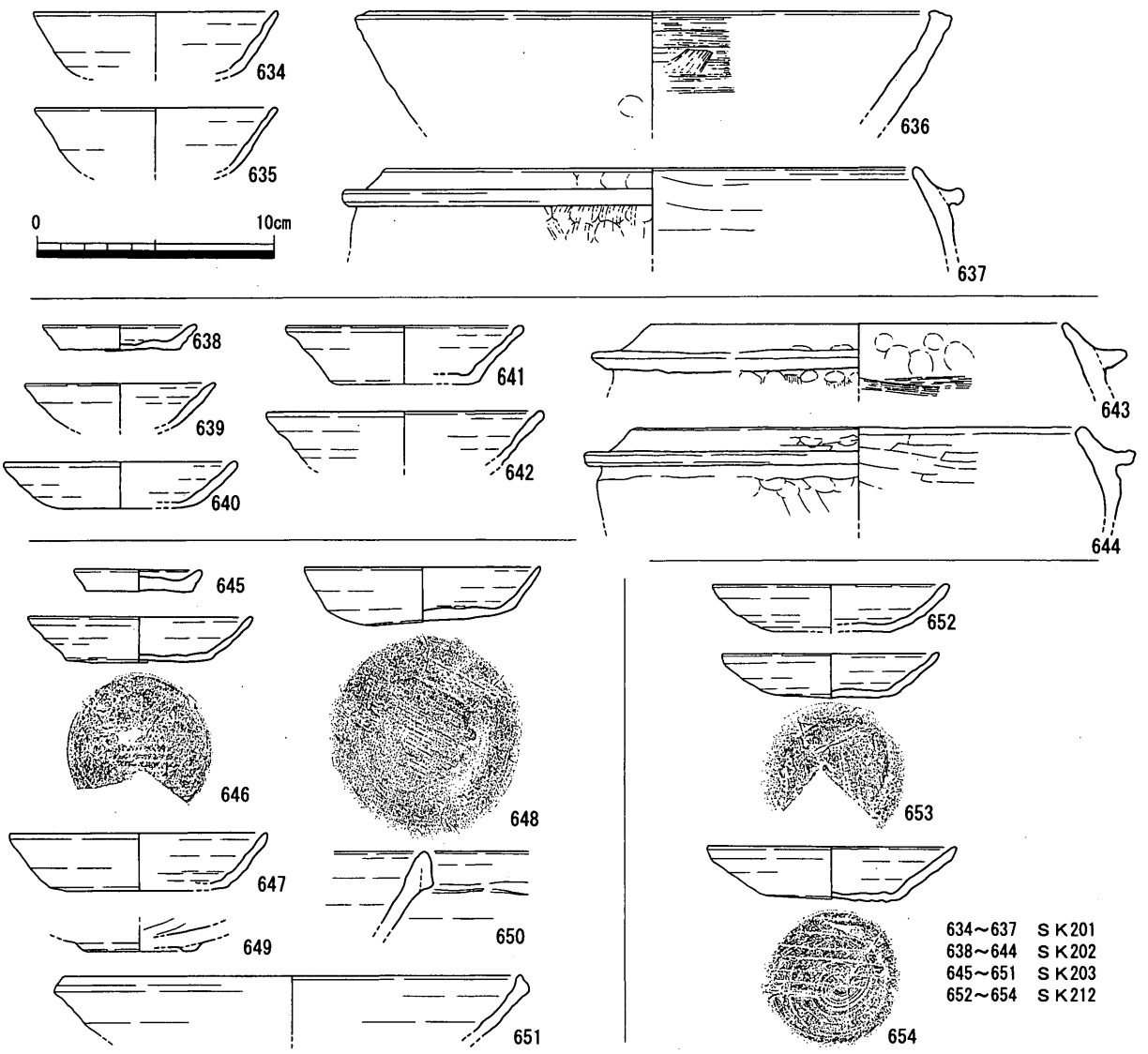


1. 柱穴　SP
2. 5Y4/1 灰色細砂質土　SK202
3. 10YR5/2 灰黄褐色細砂　SK202
4. N4/(Y) 灰色弱粘質土　炭化物・黄褐色粘土ブロック含む　SK202
5. 5YR4/4 褐色細砂　部分的に灰色化　SK202
6. 10YR5/1 褐灰色細砂　炭化物若干　10YR6/2 灰黄褐色粘土ブロック少量含む　SK202
7. 2.5Y5/1 黄灰色細砂質土　炭化物若干含む　SK202
8. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂　SK202
9. 2.5Y7/4 浅黄色細砂　基盤層が崩れたものか？　SK202
10. 5Y4/1 灰色粘質土　10YR5/6 黄褐色粘土含む　SK202
11. 5Y4/1 灰色弱粘質土　10YR5/6 黄褐色粘土含む　SK202
12. N4/(Y) 灰色粘質土　10YR5/6 黄褐色粘土含む　SK202
13. N4/(Y)+5Y5/6 灰色粘質土+オリーブ色粘土 10YR5/6 黄褐色粘土少量含む　SK202
14. 7.5Y4/1 灰色粘質土　5Y5/6 オリーブ色粘土含む　SK202
15. 7.5Y4/1 灰色粘質土　5Y5/6 オリーブ色粘土含む　SK202
16. 10YR3/2 黒褐色細砂質土　SK212

第76図　ＳＫ202・212平・断面図



第77図　ＳＫ212遺物出土状況



第78図　ＳＫ201・202・203・212出土遺物

637は土師質土器足釜。佐藤Ｂ－Ⅱ型式。

時期　634・635から13世紀末～14世紀前葉と判断できる。

ＳＫ202（第76・78図）

Ｃ区東端部で検出、ＳＫ212埋没後に形成された土坑である。埋土は基盤層ブロックを多量に含み、人為的な埋め戻しが行われている。

出土遺物（638～644）　638は佐藤ＢⅢ－４型式の土師質土器小皿。639～642は土師質土器杯。640・641は１ｃ型式。643・644は佐藤ＢⅢ型式の土師質土器足釜。

時期　640・641から14世紀後半と考えられる。

ＳＫ203（第76・78図）

Ｃ区南西部のＳＸ203下層で検出した。一部はＡ区北西部にも続くことを確認している。埋土中には基盤層ブロックが多く認められ、人為的に埋め戻されていると考えられる。

出土遺物（645～651）　645は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。646～648は土師質土器杯。

646は１ｃ型式。647・648は１ｂ型式。649は須恵器椀高台小片。650は須恵器鉢。651は土師質土器鉢。

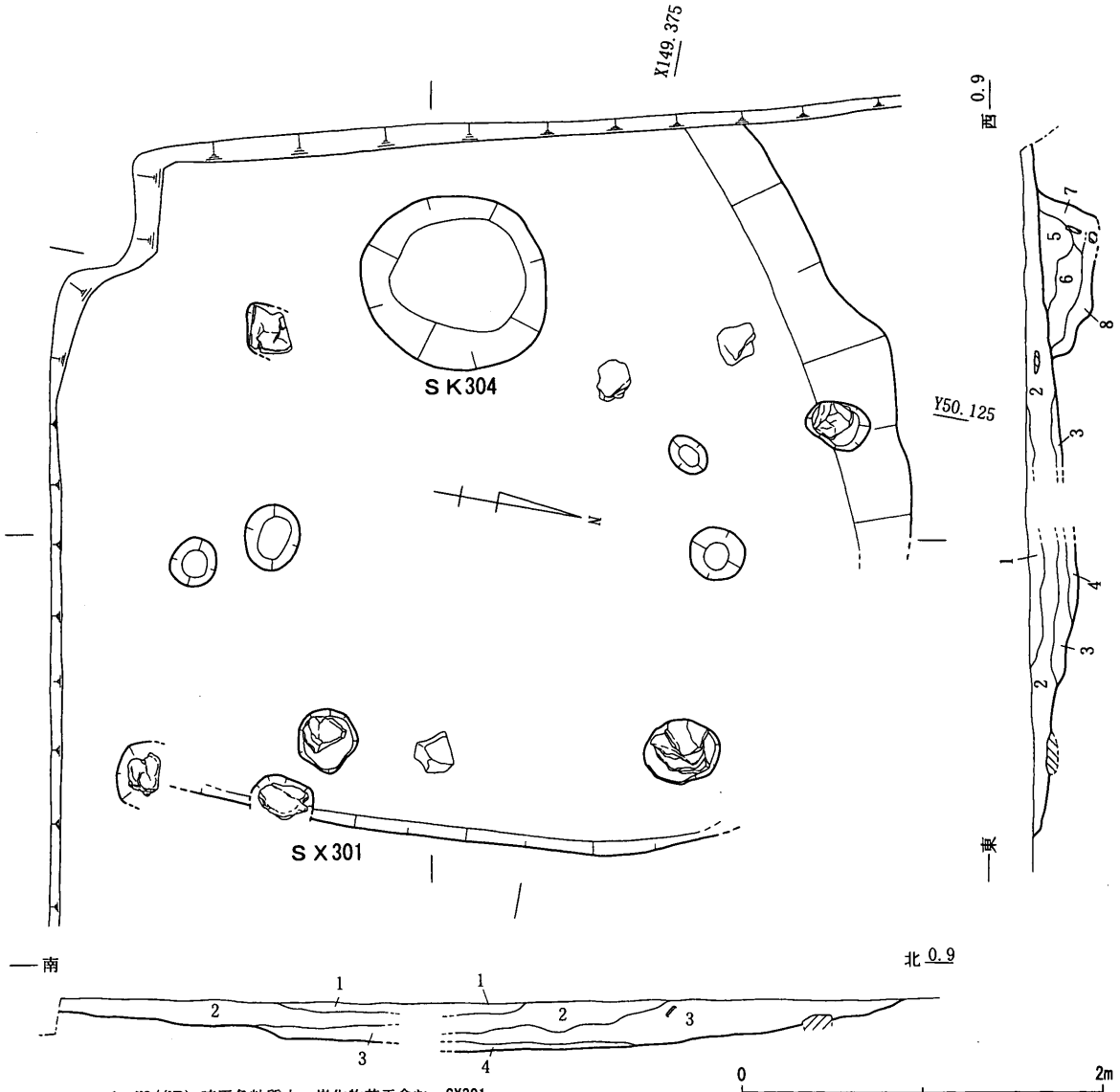
時期　646から14世紀後半に位置づけられる。

ＳＫ212（第76～78図）

Ｃ区東部で検出した落ち込み状の浅い杯埋納遺構。中央部と南部の２箇所を中心に、30個体強の土師質土器杯が重ねられた状態で出土している。ほとんどの杯は完形、もしくは完形に近い。全ての個体に灯明皿としての使用痕は確認できない。

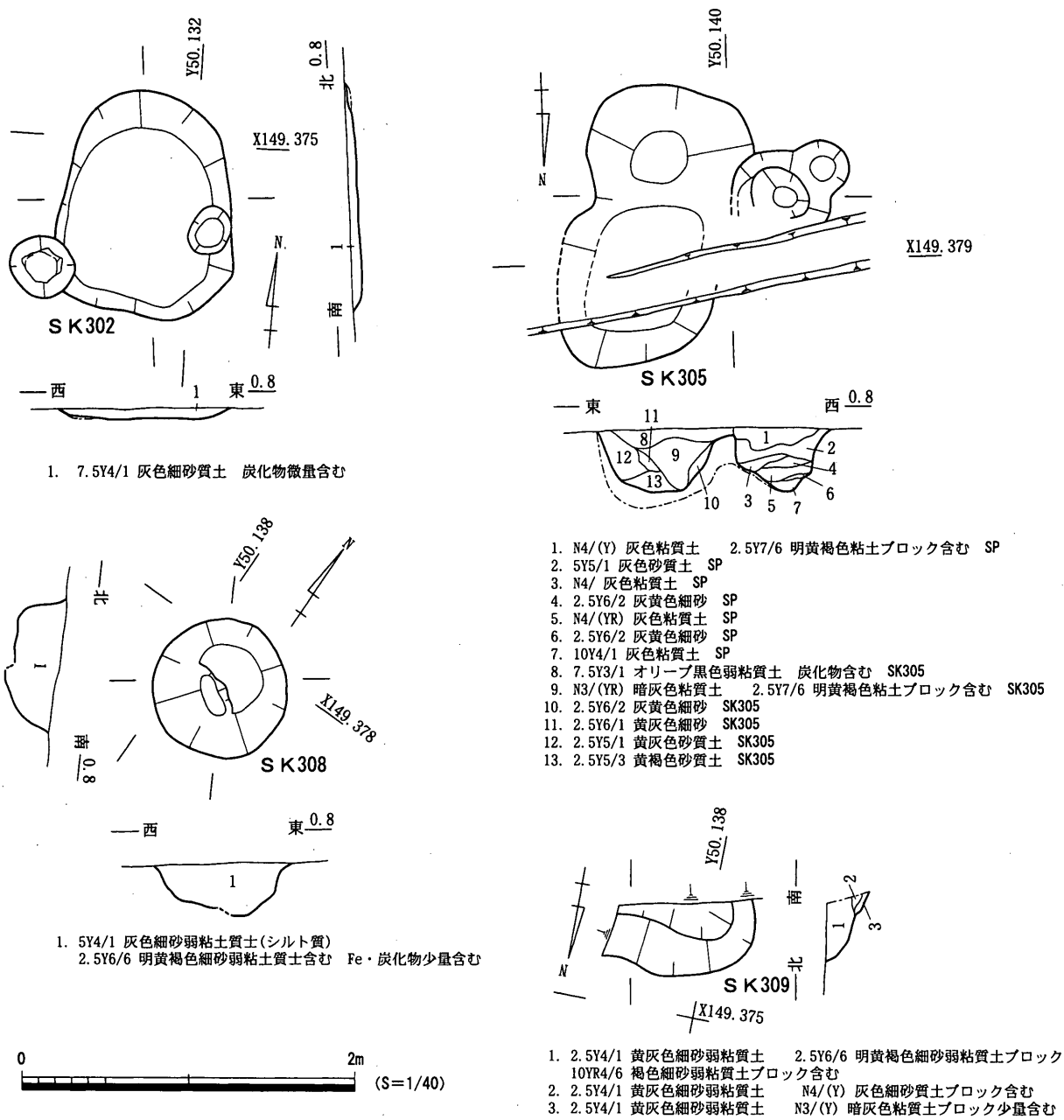
出土遺物（652～654）　652・653は１ｃ型式、654は２ｂ型式の土師質土器杯。

時期　出土した杯から14世紀後半と考えられる。



1. N3/(YR) 暗灰色粘質土　炭化物若干含む　SX301
2. 7.5Y5/1 灰色砂質土　SX301
3. N3/ 暗灰色弱粘質土　SX301
4. N2/ 黒色粘質土　SX301
5. N3/(YR) 暗灰色弱粘質土　SK304
6. N3/(YR) 暗灰色砂質土　SK304
7. 5Y3/1 オリーブ黒色砂質土　SK304
8. 10Y3/2 オリーブ黒色粘質土　６層+基盤層中の5Y6/6 オリーブ色粘土ブロック　SK304

第79図　ＳＫ304・ＳＸ301平・断面図



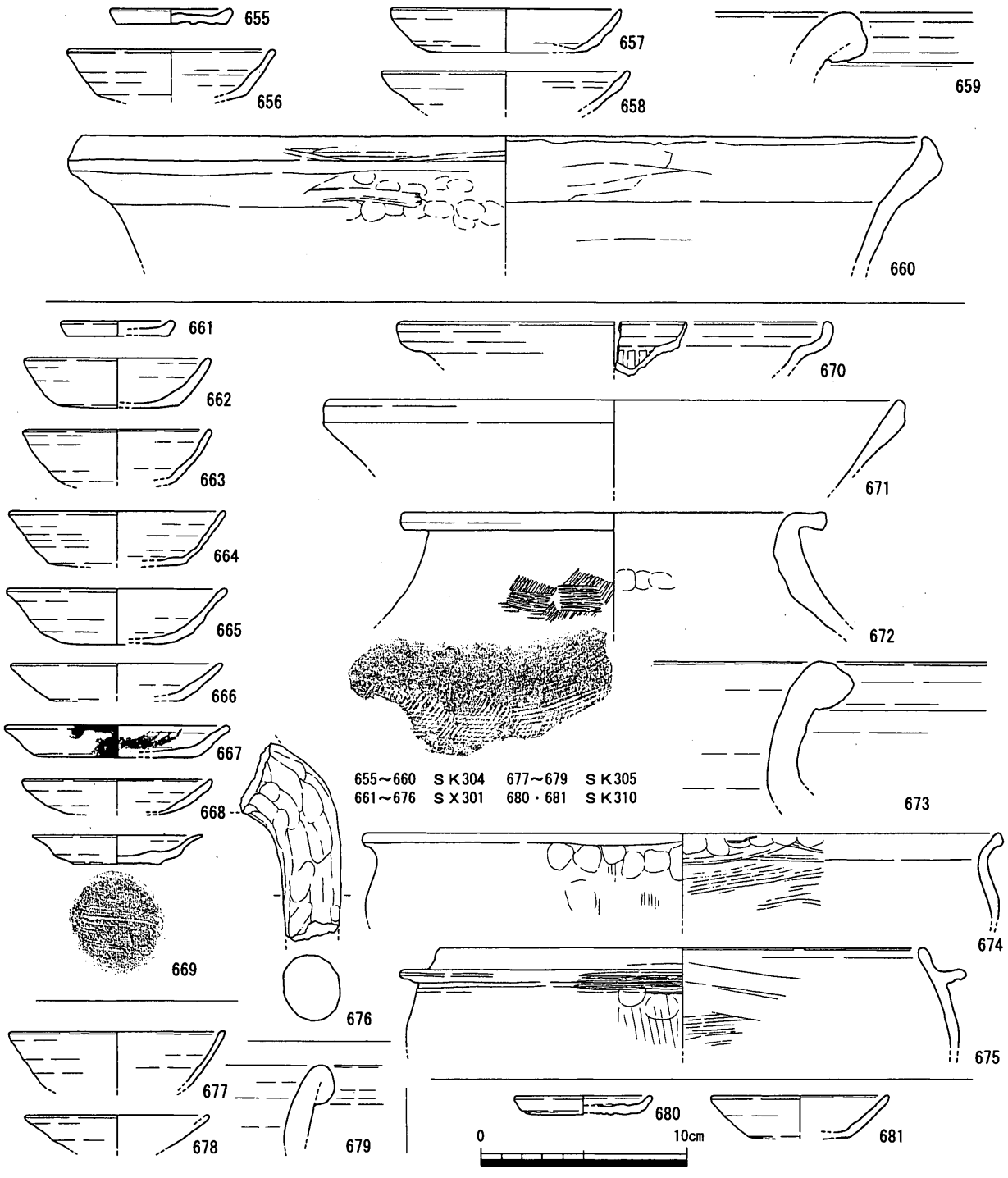
第80図 ＳＫ302・305・308・309平・断面図

ＳＫ 304・ＳＸ 301（第 79・81 図）

ＳＸ 301 はＤ区南西部で検出した不定形の落ち込み。ＳＫ 304 はＳＸ 301 の下面で検出した土坑。層位から両者の時期的な先後関係は明白であるが、土質・混入物の類似度が高く、埋没時期にさほど時間差を見積もる必要はないと考える。

ＳＫ 304 出土遺物（655 ～ 660） 655 は土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－５型式と考えられるが、器壁がかなり薄く器高も低いことから、後出する型式の可能性もある。656 ～ 658 は土師質土器杯。658 は１ｅ型式の土師質土器杯。器壁が薄く、器高が低い 657 は１ｅ型式段階よりも降る時期のものと考えられる。659 は玉縁状の口縁を持つ備前甕。乗岡中世３ａ期。660 は土師質土器鍋。

ＳＸ 301 出土遺物（661 ～ 676） 661 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。662 ～ 669 は土師



第81図　ＳＫ304、ＳＸ301、ＳＫ305・310出土遺物

質土器杯。664・665は１ａ型式、666は１ｄ型式、668は１ｅ型式。668にのみ「口縁部→体部ナデ手法」が認められる。667は器高が低く、口径と底径の差が小さい形式で、15世紀中葉以降に出現すると考えられる。669は体部上半に強い回転ナデが施されることで、体部中位から口縁部にかけて外反する器形を持つ。本遺跡で唯一、静止糸切り痕が認められる資料でもある。本遺跡で主体となる土師質土器杯に比べ、石英を主とした砂粒を多く含み、見込み部のナデも若干粗い。670は青磁碗。671は佐藤ＡⅢ類楠井窯産鉢。口縁は回転ナデにより若干窪む。軟質の須恵質焼成。672は瓦質土器甕。673は備前大甕口縁部片。乗岡中世３ａ期。674は土師質土器甕口縁部片。頸部には、口縁部成形の際に行われたと考えられる指オサエ痕が顕著に残る。口縁部外面と頸部直

下には煤が付着している。

時期　ＳＫ 304 出土遺物はいずれも小片で、14 世紀初頭～ 15 世紀中葉までの時期幅をもつ。また、ＳＸ 301 からは、14 世紀初頭（664）から 15 世紀中葉～後半と考えられる（667）土師質土器杯が出土している。ここでは、不安定ながらも最も時期が降る遺物に頼り、両遺構の最終埋没時期を 15 世紀中葉～後半としておきたい。

ＳＫ 305（第 80・81 図）

Ｄ区南東部、ＳＤ 014 上面で検出された土坑。層位関係から、当遺構がＳＤ 014 埋没後に形成され、ＳＰ 3080 に切られることは確実である。

出土遺物（677 ～ 679）　677 は１ａ型式の土師質土器杯。678 には明瞭な「口縁部→体部ナデ手法」は確認できないが、１ｅ型式と考えられる土師質土器杯小片。色調は橙色を呈する。679 は乗岡３ａ～３ｂ期と考えられる備前甕口縁部細片。

時期　678 から 15 世紀初頭と考えられる。

ＳＫ 310（第 81 図）

Ｄ区北東端部で検出した落ち込み状の浅い不定形な土坑。

出土遺物（680・681）　680 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。681 は１ｃ型式の土師質土器杯。

時期　出土遺物はいずれも小片であるが、681 から 14 世紀後半と判断できる。

ＳＫ 405（第 82・83 図）

Ｅ区東部で検出した、隣接するＳＫ 406 埋没後に形成された土坑。検出面から底部に向かって擂鉢状にすぼみ、底部は湧水層に達していることから井戸であった可能性がある。ただし、井戸枠の存在を推測させるような遺物（曲物や転用材）は出土していない。仮に本遺構が井戸であれば、ＳＫ 406 との切り合いを示す部分については井戸枠抜き取りに伴う再掘削によるものと考えることも可能で、遺構の形成がＳＫ 406 埋没後であったとは断定できない。

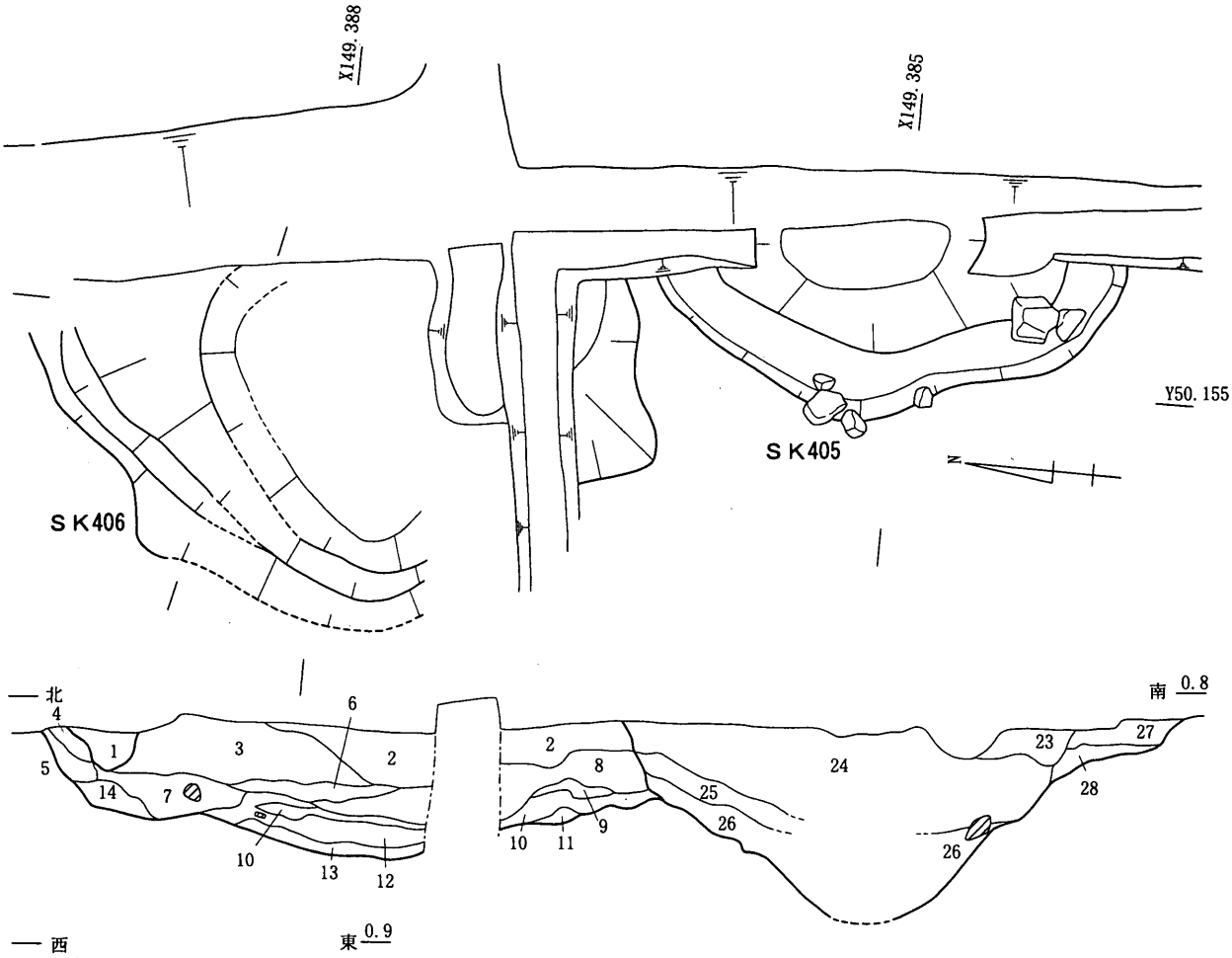
出土遺物（682 ～ 686）　682 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。683 は１ａ型式の土師質土器杯。684 は土師質土器鉢。楠井窯産佐藤ＡⅡ類の可能性もある。685 は土師質土器羽釜、686 は土師質土器足釜。ともに外面鍔部以下には煤の付着が顕著に認められ、685 の内面下半にも煤が付着している。

時期　埋没時期は、ＳＫ 406 の埋没時期（14 世紀第 2 四半期）から 684・686 の下限である 14 世紀後葉と考えられる。ただし、上述のように当遺構の性格次第で形成時期が遡る可能性もある。

ＳＫ 406（第 82・84 図）

Ｅ区北東部で検出した土坑。Ｅ区北東部に拡がるⅢ層（中世後半整地層）堆積後に掘削されている。ただし、第 82 図 16・18・19 層（ＳＫ 406 埋土）と 29 層（Ⅲ層）の土質・色調は類似し、区別がかなり困難であったことから、Ⅲ層堆積以前に形成された遺構である可能性も残る。

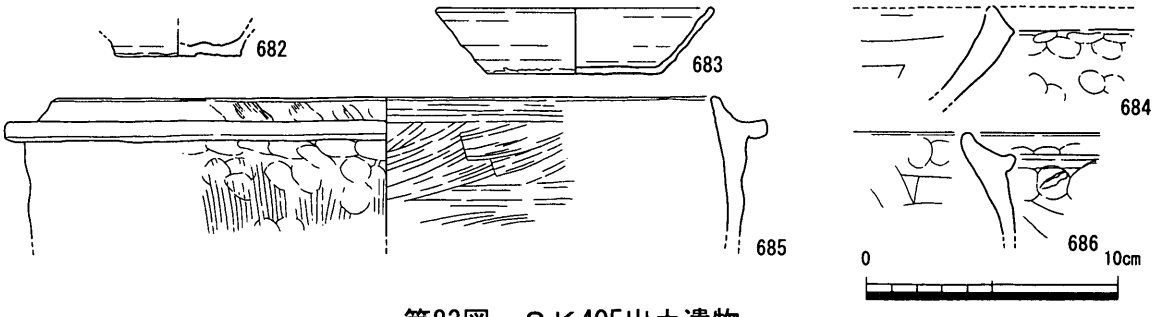
下層出土遺物（687 ～ 695）　687 ～ 689 は１ａ型式、690 は１ｂ型式の土師質土器杯。691 は東播系須恵器鉢。森田第Ⅲ期第１段階。692 は吉備系土師質土器鍋。693・694 はＢⅡ類の土師質土器



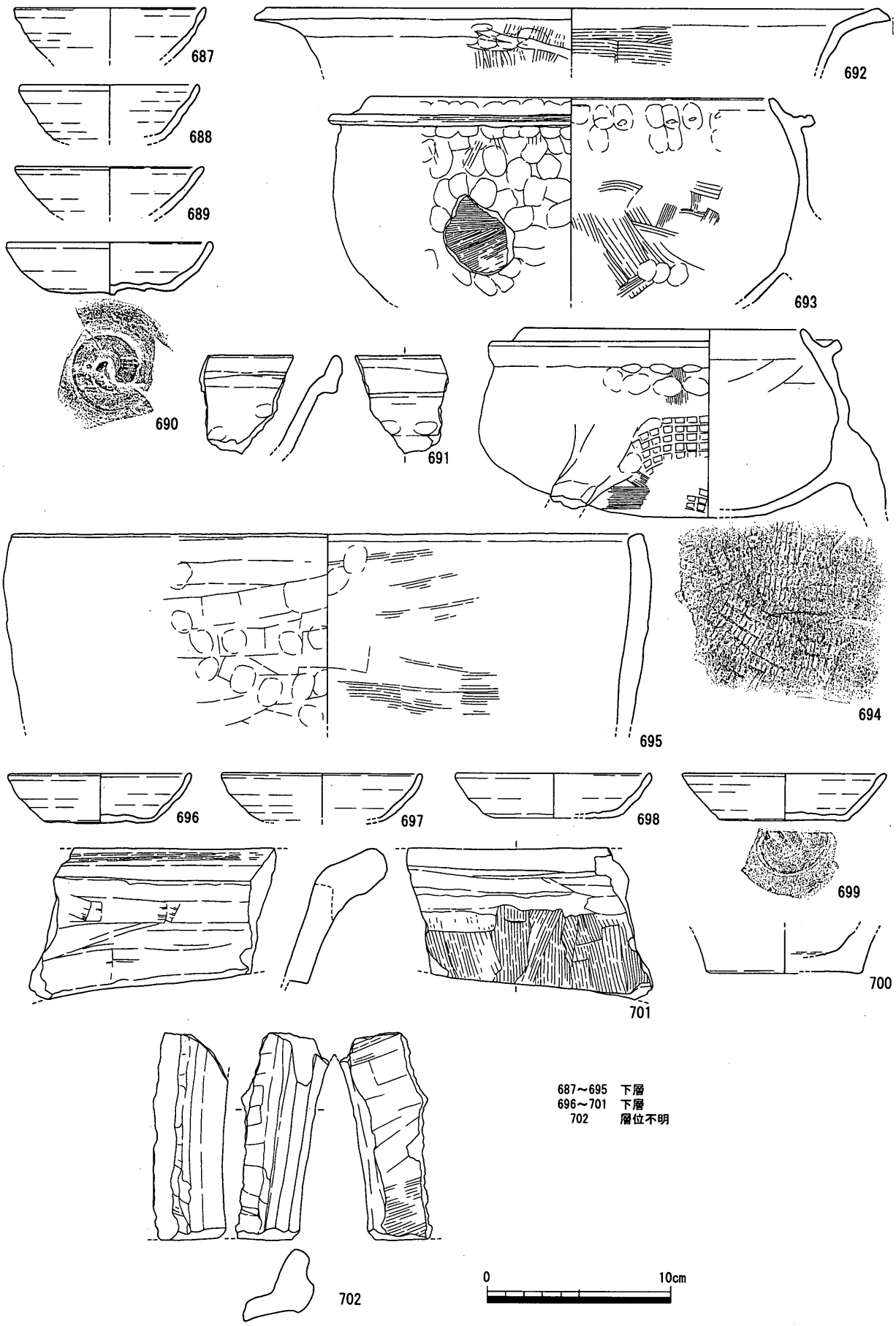
1. 2.5Y4/1 黄灰色弱粘質土 Mn・３層ブロック含む SP
2. 7.5YR3/1 褐灰色弱粘質土 Mn多く含む SK406
3. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 Mn含む SK406
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 Mn若干含む SK406
5. 10YR4/1 褐灰色砂質土 Mn含む SK406
6. 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土 2.5Y5/1 黄灰色を呈する部分あり SK406
7. N5/(Y) 灰色粘質土 2.5Y6/6 明黄褐色を呈する部分あり SK406
8. N5/(Y) 灰色粘質土 2.5Y6/6 明黄褐色を呈する部分あり SK406
9. N5/(Y) 灰色粘質土 2.5Y6/3 にぶい黄色砂ブロック含む SK406
10. N3/ 暗灰色粘土 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質土ブロック含む SK406
11. 2.5Y5/1 黄灰色砂質土 基盤層ブロック含む SK406
12. N4/(Y) 灰色弱粘質土 基盤層ブロック少量含む SK406
13. 5BG5/1 青灰色砂質土 基盤層ブロック・N3/ 暗灰色粘質土ブロック含む SK406
14. N4/ 灰色弱粘質土 SK406
15. 7.5Y4/1 灰色弱粘質土 小礫・炭化物含む SK406
16. 7.5Y3/1 オリーブ黒色砂質土 SK406
17. 5Y5/1 灰色弱粘質土 10YR5/6 黄褐色砂ブロック含む SK406
18. 10YR5/1 褐灰色砂質土 Fe多く含む SK406
19. 10Y5/1 オリーブ灰色砂質土 10YR5/6 黄褐色砂ブロック含む SK406
20. N4/ 灰色細砂質土 ３１層ブロック若干含む SK406
21. N4/ 灰色細砂質土 ２２層ブロック少量含む SK406
22. N3/(Y) 暗灰色弱粘質土 5BG6/1 青灰色細砂含む SK406
23. 7.5Y4/1 灰色弱粘質土 Fe含む SK405
24. N3/(Y) 暗灰色弱粘質土 2.5Y6/8 明黄褐色粘土ブロック多量に含む(約５０％) SK405
25. 5Y5/3 灰オリーブ色粘質土 N3/(Y) 暗灰色砂質土ブロック少量含む SK405
26. N3/(Y) 暗灰色砂質土 ２５層ブロック含む SK405
27. 2.5Y6/6 明黄褐色粘質土 10YR6/8 明黄褐色粘土ブロック含む SK405
28. 5Y5/1 灰色弱粘質土 Fe多く含む SK405
29. 5Y5/1 灰色砂質土 Fe含む 中世後半整地層(Ⅲ層)
30. N4/ 灰色細砂質土 中世前半堆積層(Ⅳb層)
31. 5Y5/2 灰オリーブ色砂質土 古代以前の堆積層(Ⅴa層)

0 2m (S=1/40)

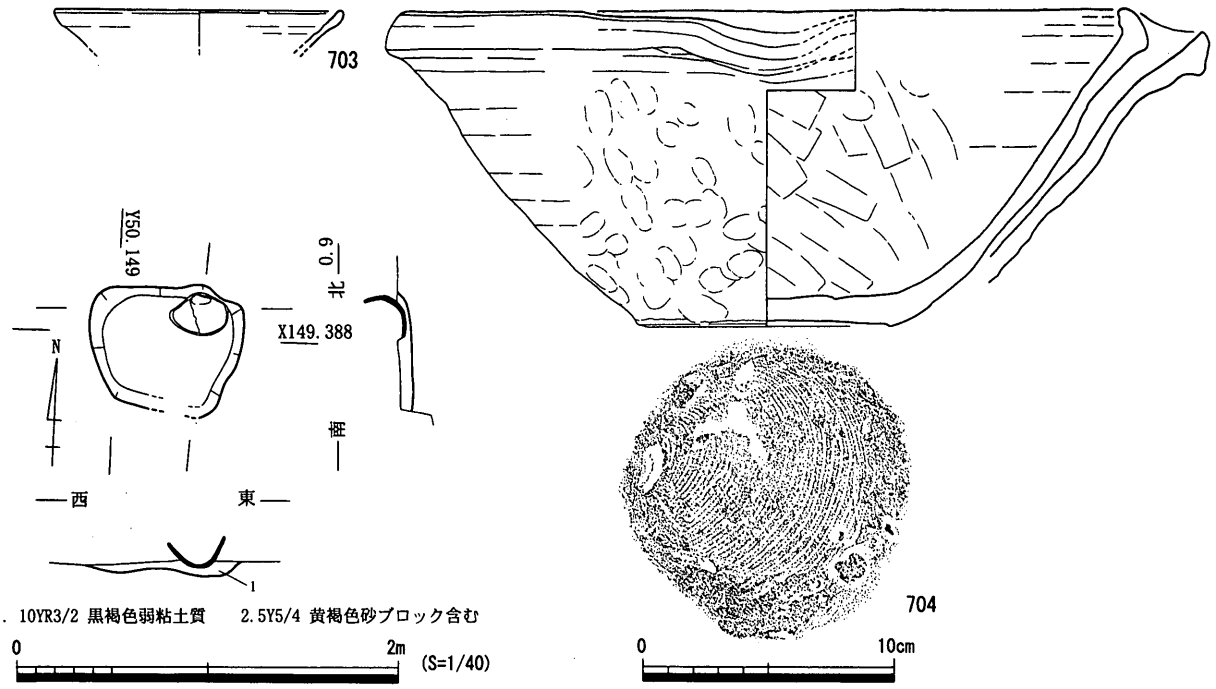
第82図　ＳＫ405・406平・断面図



第83図　ＳＫ405出土遺物



第84図　ＳＫ406出土遺物



第85図　ＳＫ407平・断面図、出土遺物

足釜。693 は鍔部以下の外面と内面底部、694 は鍔部以下の内外面に煤が付着している。695 は竈。胎土は粗く、黒雲母を多量に含む。内面は煤の付着が著しい。

上層出土遺物（696 ～ 701）　696・697・699 は１ａ型式、698 は１ｂ型式の土師質土器杯。700 は備前壺底部片。701 は竈。口縁部内面に煤を確認できる。

出土層位不明遺物（702）　702 は竈。

時期　上下層の出土遺物に時期差はない。13 世紀末～ 14 世紀前葉の遺物を含むものの、690・699 から埋没時期は 14 世紀第２四半期頃と考えられる。693・694 についてもほとんど矛盾はないと考える。

ＳＫ 407（第 85 図）

Ｅ区北部で検出した土坑。当初は東播系須恵器鉢を確認したが、その段階で周囲の掘り込みは確認できず、土坑の平面形を検出した時点では、すでに鉢の 4/5 程度が露出した状態となっていた。本来は、鉢よりも上位のレベルからの掘り込みを持つ土坑であるとするのが妥当であろう。

鉢は体部を底にし、横転した状態で出土している。接地していない側の体部～口縁部に、約 1/6 程度の欠損が認められるが、これは後世の削平によるものであろう。土坑に埋納？された時点では完形であった可能性が高い。

出土遺物（703・704）　703 は１ｃ～１ｅ型式と考えられる土師質土器口縁部細片。704 は森田第Ⅲ期第２段階の東播系須恵器鉢。

時期　出土遺物から 14 世紀中葉頃と考えられる。

ＳＫ 507（第 86 図）

Ｇ区北東端部で検出した規模の小さな土坑。

出土遺物（705 ～ 708）　705 は土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－５型式。706 は空港跡地遺跡ＳＤｆ 57 出土資料（1532）とほぼ同様の形態を呈する土師質土器杯小片。口縁形と底径の差は小さい。器

高から判断して１ｅ型式段階よりも降る時期の所産と考えられる。707は土師質土器鍋口縁部片。佐藤ＢⅡ類。内外面ともに煤が付着している。708は佐藤ＢⅢ類の土師質土器足釜。外面鍔部以下に煤の付着が少量認められる。

時期　706は小片であることから混入と考え、707・708から14世紀前葉～後葉の幅で埋没時期を捉えたい。

ＳＫ510（第86図）

Ｇ区北西部端で検出した土坑。

出土遺物（709～711）　709は土師質土器細片。実測図に表現はしていないものの、内面と外面口縁端部に煤の付着が認められる。710は土師質土器足釜小片。口縁部と鍔部の長さがほぼ等しく、佐藤ＢⅣ類と考えられる。711は頁岩製の砥石。実測図の左面が本来の使用面で使用痕も確認できるが、反対側の高台内の面にも使用痕が認められ、一部に墨らしきものも付着している。

時期　出土遺物が少量でいずれも小片であるため、確実な時期決定は困難であるが、14世紀末頃と考えられる。

ＳＫ512（第86図）

Ｇ区北西部、ＳＫ507の南で検出した土坑。

出土遺物（712）　712は土師質土器杯細片。

時期　細片の遺物1点のみの出土であるが、14世紀後半としておきたい。

ＳＫ516（第86図）

Ｇ区南西部で検出した土坑。

出土遺物（713・714）　713は１ｄ型式の土師質土器杯。内外面に顕著な煤の付着が認められる。714は１ａ型式もしくは１ｂ型式の土師質土器杯。明瞭な「口縁部→体部ナデ手法」は認められない。

時期　713から14世紀末頃と考えられる。

ＳＫ517（第86図）

Ｇ区北西部で検出した土坑。ピットや撹乱に切られるため、全体形は不明である。

出土遺物（715・716）　715は１ａ型式の土師質土器杯。716は土師質土器足釜底部片。

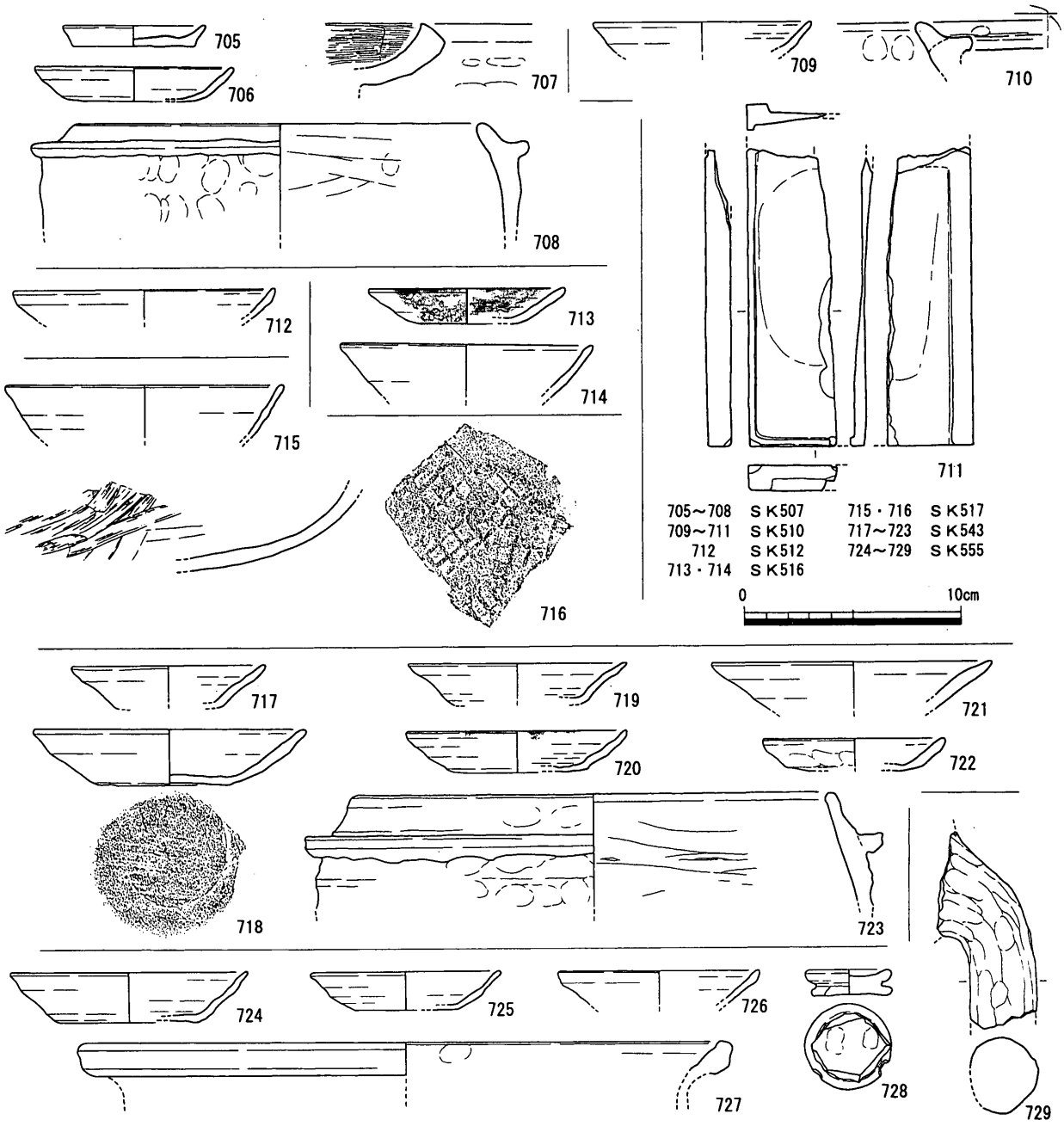
時期　715から13世紀末～14世紀前葉と判断できる。

ＳＫ543（第86図）

Ｇ区中央南部で検出した、平面形が方形を呈する落ち込み状の浅い土坑。

出土遺物（717～723）　717～720は土師質土器杯。口径が12cm 代の718は京都系土師器皿の影響を受けた形態の可能性がある。内面の底・体部境に明瞭な屈曲をもつ719は、２ｂ型式に後出する型式と考えられる。二次焼成が原因で割れたような痕跡がある。灯明皿としての使用によるものか。720は１ｄ型式。721は京都系土師器皿。722は瓦器皿。二次焼成のためか、カーボンは付着していない。722は土師質土器羽釜。

時期　719・720から14世紀末頃と考えられる。



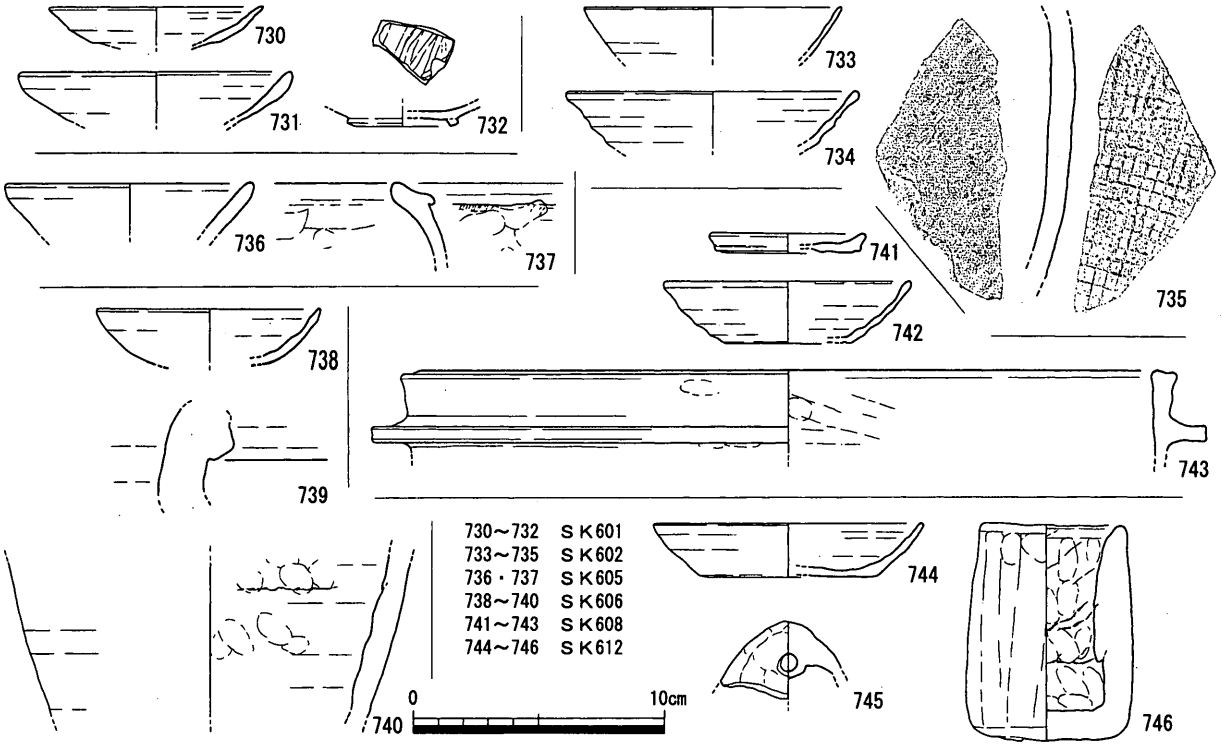
第86図　ＳＫ507・510・512・516・517・543・555出土遺物

ＳＫ 555（第 86 図）

ＳＫ 555 は調査時にＧ区ＳＸ 15 として調査を行った遺構であるが、記録がないため詳細は不明である。

出土遺物（724 ～ 729）　724 ～ 726 は土師質土器杯。724 は１ｂ型式。725 は体部中位に「口縁部→体部ナデ手法」による明瞭な屈曲部が認められる。１ｄ型式か。727 は亀山窯系甕か。二次焼成により器壁表面は剥落している。728 は古代の須恵器蓋を円盤状加工品に転用したもの。

時期　725 から 14 世紀末と考えられる。



第87図　ＳＫ601・602・605・606・608・612出土遺物

ＳＫ 601（第 87 図）

Ｈ区西部で検出した平面形円形の土坑。

出土遺物（730 ～ 732）　730 は１ｅ型式の土師質土器杯。731 は口縁部直下の器壁が厚いタイプの土師質土器杯。回転ナデにより成形を行っているが、口径も大きく、京都系土師器皿の影響を受けた可能性が高い。732 は瓦器椀底部細片。

時期　小片であるが、730 から 15 世紀初頭頃の遺構と考えられる。732 は細片でもあり、混入としたい。

ＳＫ 602（第 87 図）

Ｈ区西部で検出した。南半部は撹乱により削平されている。

出土遺物（733 ～ 735）　733 は「口縁部→体部ナデ手法」が認められない１ａ型式の土師質土器杯である。734 も１ａ型式の土師質土器杯。外面にはロクロ目が顕著に残る。735 の内面には、板ナデにより消されているものの当て具痕がわずかに確認できる。亀山窯系の須恵器甕か。

時期　出土した杯から 13 世紀末～ 14 世紀前葉と判断できる。

ＳＫ 605（第 87 図）

Ｈ区西部で検出した土坑。北部はＳＥ 601 により破壊されている。

出土遺物（736・737）　736 は器壁の厚いタイプの土師質土器杯。737 は佐藤Ｃ類の土師質土器足釜。

時期　737 から 15 世紀中葉以降と考えられる。

ＳＫ 606（第 87 図）

Ｈ区中央やや西、ＳＸ 642 集石の上位で検出した土坑。

出土遺物（738 ～ 740） 738 は「口縁部→体部ナデ手法」が認められない、体部から口縁部にかけて内湾するタイプの土師質土器杯。739 は備前甕口縁部小片。乗岡中世３ａ期。古瀬戸（740）は胴部径から四耳壺と考えられる。藤澤前期２。

時期 738 を口径・器高から１ｃ型式に並行する段階の所産と捉えると、14 世紀後半埋没と考えられる。

ＳＫ 608（第 87 図）

Ｈ区北部中央で検出した土坑。北半部は調査区外になる。

出土遺物（741 ～ 743） 741 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。742 は１ｂ型式（佐藤ＤⅡ－８型式）の土師質土器杯。743 は瓦質土器羽釜。

時期 742 から 14 世紀前半と考えられる。

ＳＫ 612（第 87 図）

Ｈ区中央部で検出した平面形が楕円形の土坑。

出土遺物（744 ～ 746） 掲載している出土遺物は、ＳＫ 612 の他に一部撹乱を含む可能性があるものである。744 は１ｃ型式の土師質土器杯。745 は飯蛸壺。胴部上端をつぶして吊手部を成形し、吊手部上端には窪みが認められない。746 は焼塩壺。

時期 中世（744）と近世（746）の遺物を含むが、埋土がＣ区中世遺構のものと類似するという調査時の所見に従い、本遺構は中世段階のものと判断したい。詳細な時期は、744 から 14 世紀後半と考えられる。

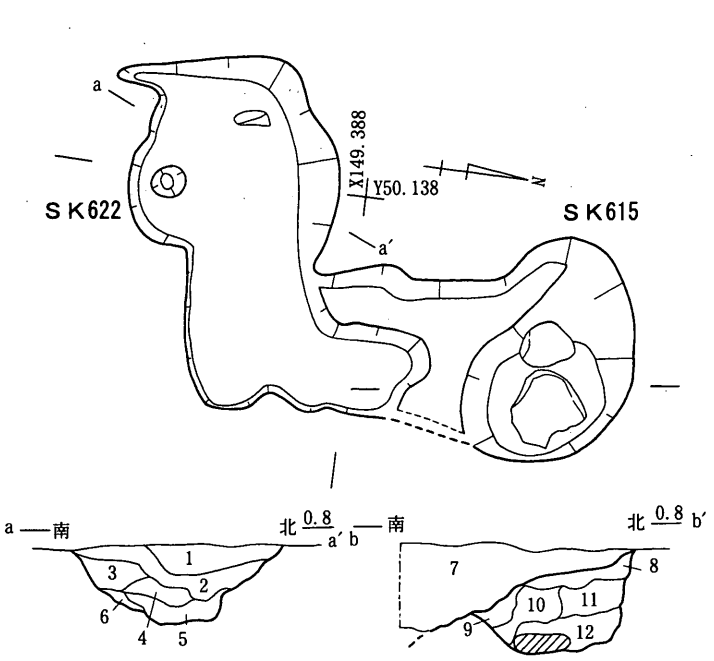
ＳＫ 615・622（第 88・89 図）

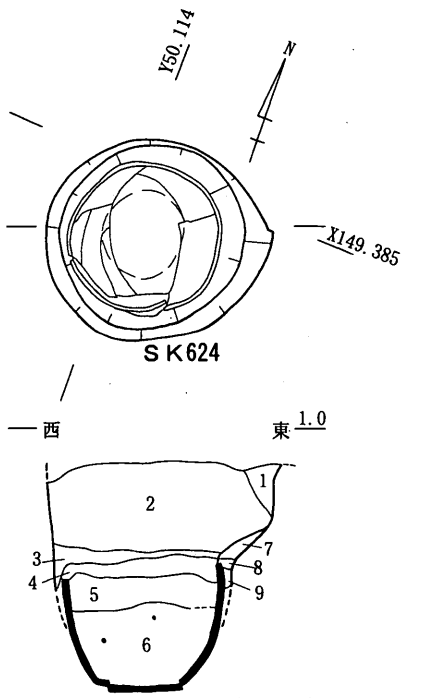
Ｈ区北部やや西よりで検出。ＳＫ 615 は平面形がほぼ円形の土坑。底部には板状の礫が存在し、根石を持つ柱穴の可能性もある。基盤層ブロックを含む土で埋め戻されている。ＳＫ 622 はＳＫ 615 埋め戻し後に形成された平面形不定形の土坑である。埋土全体に焼土・炭化物を含む。

ＳＫ 615 出土遺物（747 ～ 752） 747 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。748 ～ 752 は土師質土器杯。いずれも「口縁部→体部ナデ手法」は確認できない。748 は口縁部直下の器壁が厚いタイプ。749 は口縁部外面直下に屈曲部を持ち、口縁部が内湾するタイプ。いずれも１ｅ型式と並行する段階のものと考えられる。751・752 は器壁が薄く器高もかなり低い、空港跡地遺跡ＳＤｆ 57 出土資料（1531・1532）と同形式の土師質土器杯。ただし、器高に差があることから本遺構出土 751・752 の方が後出するものと考えられる。

ＳＫ 622 出土遺物（753 ～ 764） 753 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。754 ～ 760 は土師質土器杯。754・755 は１ａ型式、756 ～ 759 は１ｂ型式。760 はＳＫ 615 出土の 752 と器形・胎土・成形手法いずれもが類似し、同一個体の可能性がある資料である。761 は京都系土師器皿。内面口縁部直下には強いナデが施されている。工具による成形（板ナデ？）の可能性もある。762 は土師質土器足釜。763 は土師質土器鍋。764 は備前甕。乗岡中世３ａ期。

時期 ＳＫ 615 の埋没時期は、751・752 から 15 世紀中葉以降に比定され、ＳＫ 622 は更に降る



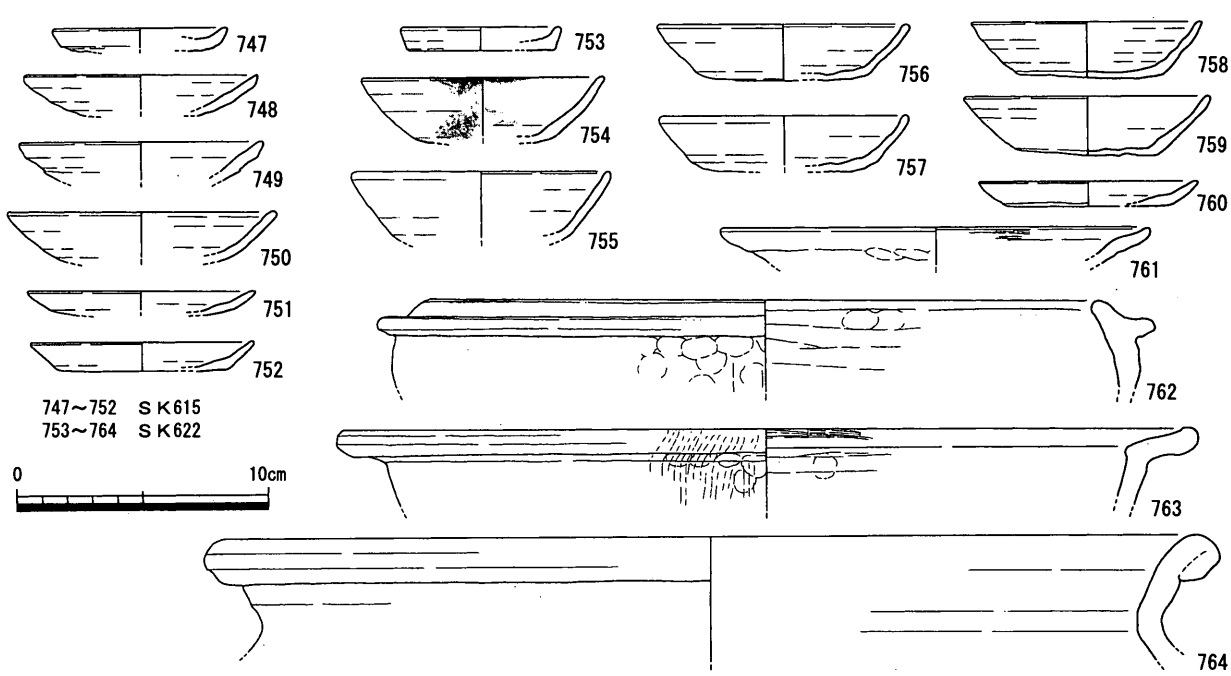


1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土　SK622
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　10YR6/1 褐灰色細砂ブロック混　SK622
3. 10YR3/2 黒褐色粘質土　焼土混　SK622
4. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土　焼土・炭混　SK622
5. 10YR4/1 褐灰色砂質土　焼土・炭混　SK622
6. 10YR6/1 褐灰色細砂　SK622
7. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土　焼土・炭混、10YR6/2 灰黄褐色細砂(基盤層)ブロック多混　SK622
8. 10YR4/1 褐灰色砂質土　焼土・炭混、10YR6/2 灰黄褐色細砂(基盤層)ブロック混　SK615
9. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土　10YR6/2 灰黄褐色細砂(基盤層)ブロック多混　SK615
10. 10YR6/2 灰黄褐色砂質土　10YR6/2 灰黄褐色細砂(基盤層)ブロック少混　SK615
11. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土　10YR6/2 灰黄褐色細砂(基盤層)ブロック多混　SK615
12. 10YR5/1 褐灰色砂質土　巨礫混　5Y6/2 灰オリーブ色粘土ブロック多混　SK615

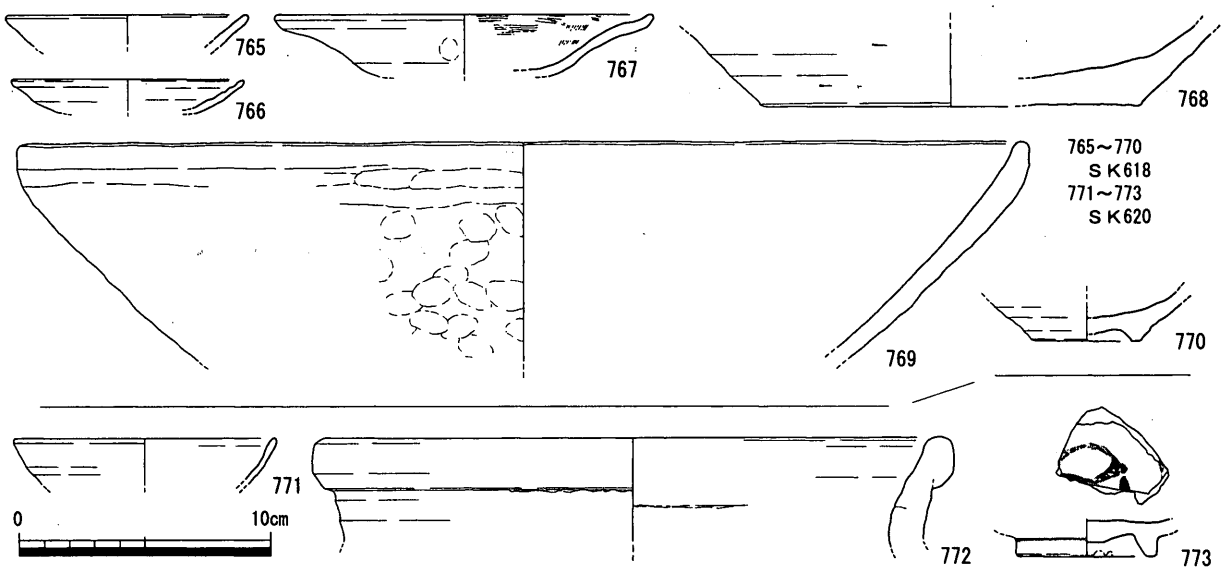
1. 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂　基盤層の崩壊？　1層と2層の境不明瞭　埋め戻し土
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土　2.5Y5/2 暗灰黄色粘土ブロック少混　埋め戻し土
3. 7.5YR5/4 にぶい褐色砂質土　2層と3層の境大きい。Fe少し沈殿　埋め戻し土
4. 7.5YR4/4 褐色砂質土　Fe沈殿大。炭、粘土ブロック混　埋め戻し土
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土　炭・木多混　埋め戻し土
6. 10YR4/1 褐灰色砂質土　炭・木多混　埋め戻し土
7. 10YR6/2 灰黄褐色細砂　裏込め
8. 10YR6/3 にぶい黄橙色細砂　炭混　裏込め
9. 10YR5/1 褐灰色細砂　裏込め

0　2m　(S=1/40)

第88図　SK615・622・624平・断面図



第89図　SK615・622出土遺物



第90図　ＳＫ618・620出土遺物

時期の埋没といえよう。

ＳＫ 618（第 90 図）

Ｈ区東部で検出した浅い落ち込み状の遺構。本遺構は小規模建物ＳＢ 603 とほぼ同範囲に拡がることから、ＳＢ 603 に伴う遺構であると考えられる。

出土遺物（765 ～ 770）　765・766 は１ｇ型式段階よりも降る時期の土師質土器杯。766 は空港跡地遺跡ＳＤｆ 57 出土 1531 と同型式のものである。767 は京都系土師器皿を模倣した回転ナデ成形の在地産土師質土器杯。通常見られる在地産の杯に比べて黒雲母を多く含む精緻な胎土を有する。外面に煤が付着し、二次焼成のために割れたような痕跡がある。灯明皿としての使用によるものか。768 は古瀬戸盤類（折縁深皿もしくは卸目大皿）。藤澤後期３～４。769 は楠井産鉢。佐藤ＢＩ類。770 は肥前系陶器碗。

時期　765・766・768・769 から 15 世紀後半の遺構と考えられる。770 は小片でもあり、明らかに混入である。

ＳＫ 620（第 90 図）

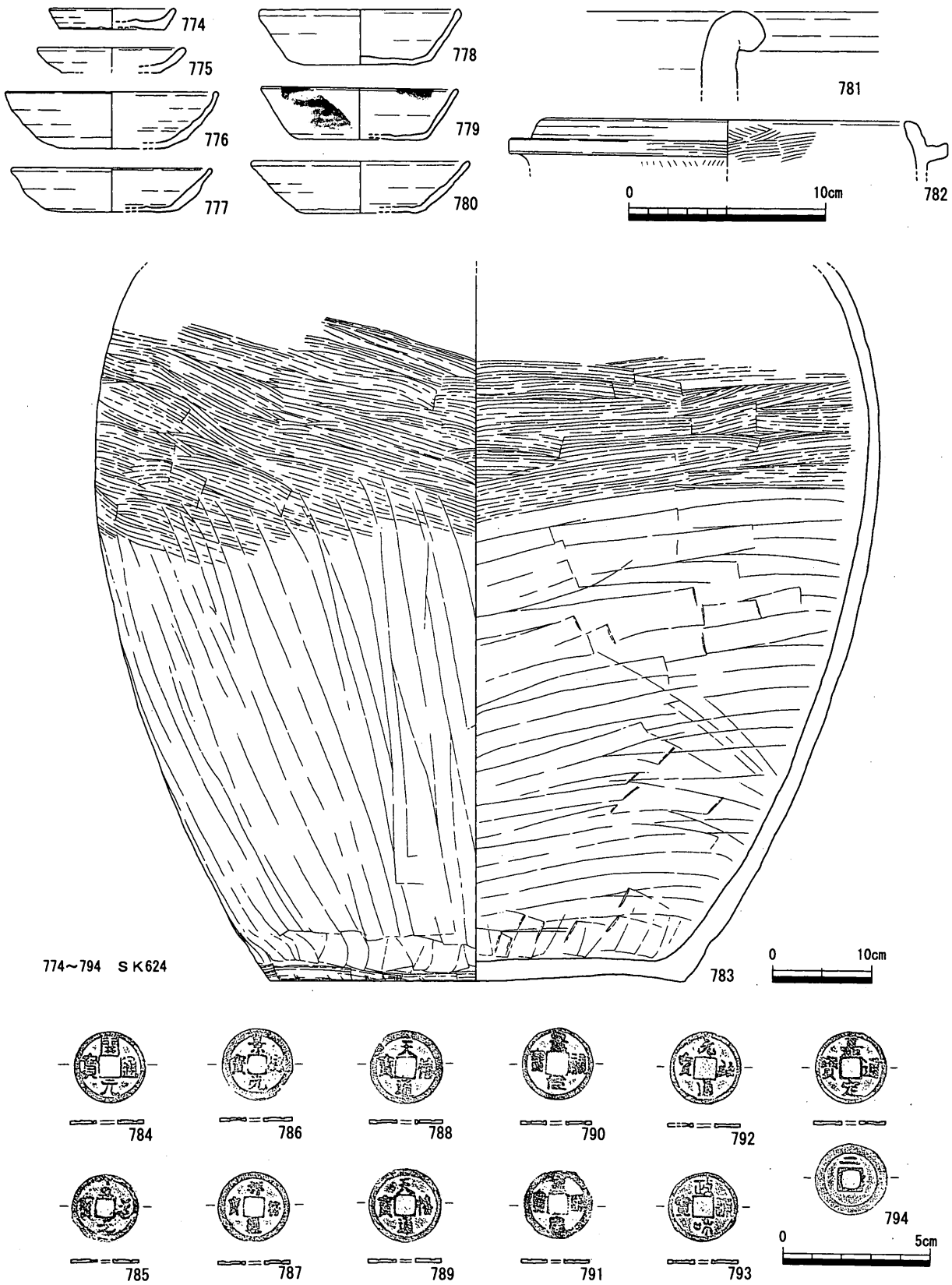
Ｈ区中央の南端部で検出した。一部は調査区外に延びるため全体の平面形は不明である。ＳＤ 013 と接する部分が近代以降の井戸により撹乱を受けているため、ＳＤ 013 との先後関係は判断できない。

出土遺物（771 ～ 773）　771 は１ａ型式か１ｂ型式の土師質土器杯小片。772 は備前甕。773 は漳州窯系青花皿。

時期　771・772 から 14 世紀前半と考えられる。773 は混入であろう。

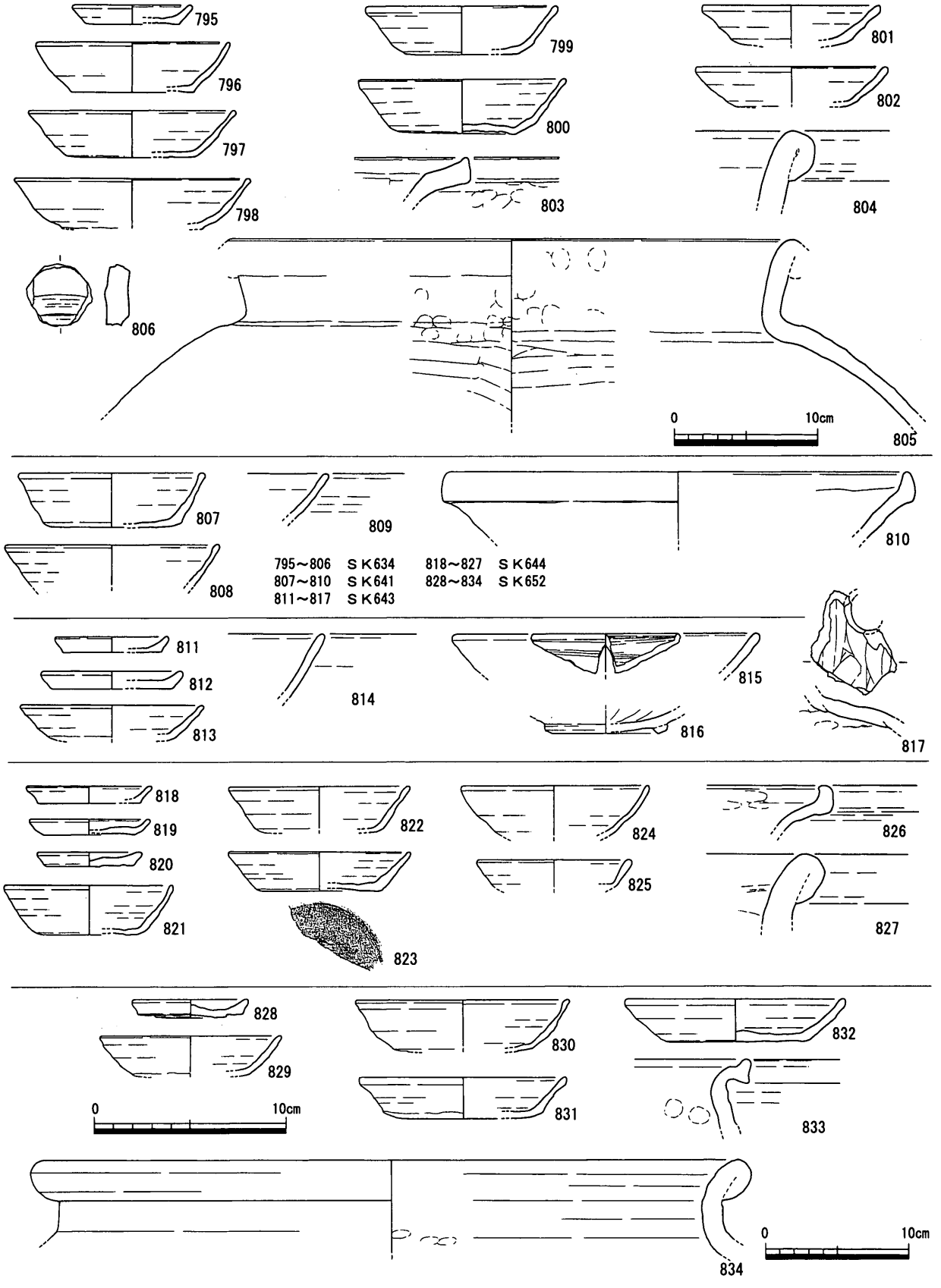
ＳＫ 624（第 91 図）

Ｈ区西部で検出した備前大甕埋納遺構。検出面での平面形は 1.2ｍ× 1.0ｍの楕円形を呈する。断面形は、北東壁がテラスを持って段状になっている他はほぼ垂直に掘り込まれ、中位のテラス部



第91図　ＳＫ624出土遺物

分より下方では平面径0.9ｍ×0.9ｍのほぼ正円形の平面形で、埋め込まれている備前大甕に合わせた堀り方となっている。テラス部分から上方に大甕上半部が残存していないことから、テラス部は本遺構廃絶に伴って掘り込まれ、大甕上半部が掘り出された痕跡であると推測できる。埋土には確実に堆水状態であったことを示す痕跡が確認できないことから、水溜遺構であるとは考え



第92図　ＳＫ634・641・643・644・652出土遺物

がたい。また、棒状木製品が数点出土しているが、埋土中には種子や寄生虫卵が含まれず、大甕内面にも白色の付着物が認められないことからトイレ遺構の可能性も考えられない。銭貨が11枚出土していることから、ここでは、本遺構を銭貨やその他の物資を蓄積していた遺構としておきたい。

出土遺物（774～794） 774は佐藤ＢⅢ－４型式の土師質土器小皿。775は一応土師質土器小皿と考えるが、杯の系譜上にあるものかもしれない。776～780は土師質土器杯。776・778・779は１ａ型式、780は１ｂ型式。781は備前壺。782は土師質土器羽釜。鍔部上部にハケが施されている。783は備前大甕。784は開元通寶、785は至道元寶、786は景祐元寶、787は祥符通寶、788・789は天禧通寶、790・791は景祐元寶、792は元祐通寶、793は政和通寶。794は嘉定通寶であるが、裏面には「二」が認められる。

時期 780から廃絶時期は14世紀前半と考えられる。

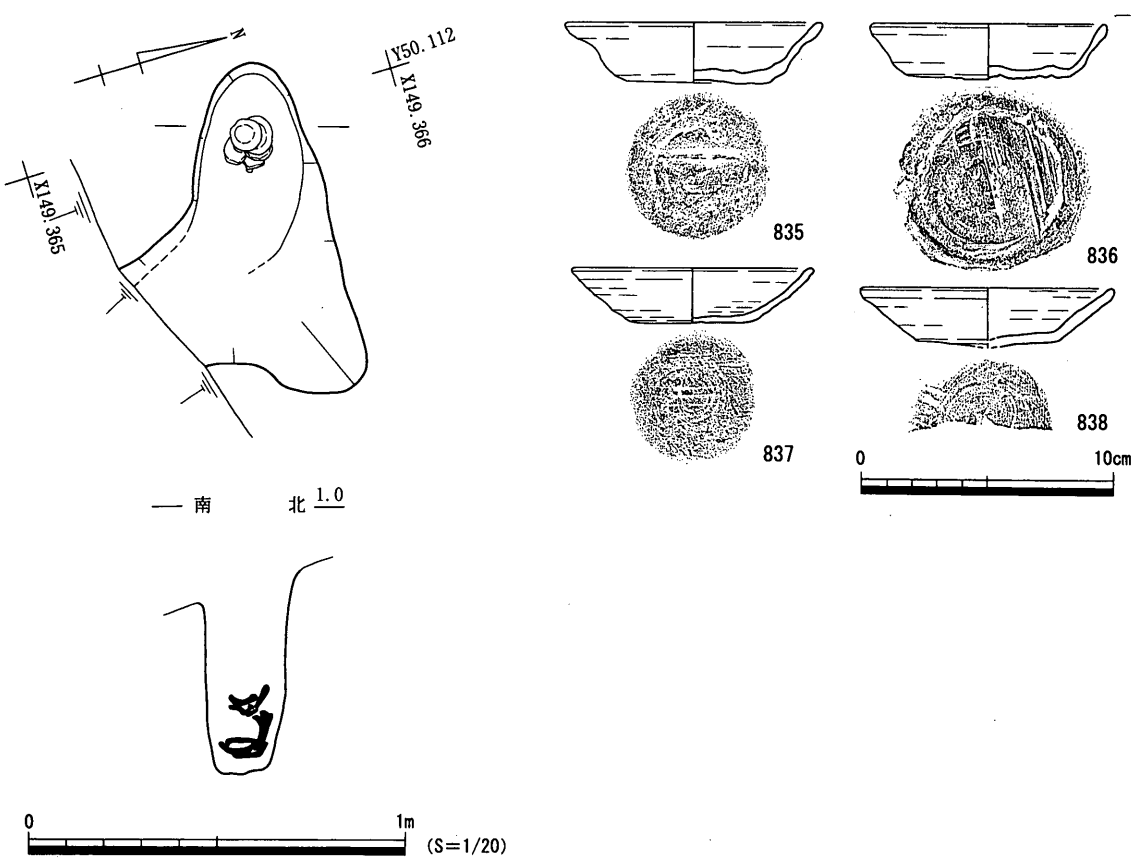
ＳＫ634（第92図）

Ｈ区東部で検出した不定形の落ち込み状遺構。

出土遺物（795～806） 795は佐藤ＢⅢ－４型式の土師質土器小皿。796～802は土師質土器杯。796～799は１ｂ型式、800は１ａ型式、802は１ｃ型式。803は土師質土器鍋。804・805は備前甕。806は土師質土器煮炊具転用の円盤状加工品。

時期 出土した杯の多くは14世紀前半（796～799）のものであるが、一部14世紀後半にまで降る（802）ことから、本遺構の埋没時期を14世紀前半から後半までの幅を持って捉えたい。

ＳＫ641（第92図）



第93図　ＳＫ661平・断面図、出土遺物

H区中央やや西よりで検出した落ち込み状遺構。

出土遺物（807～810） 807・808は1ａ型式の土師質土器杯。809は須恵器椀小片。810は東播系須恵器鉢。森田第Ⅲ期第1段階。

時期 出土遺物から13世紀末～14世紀前葉と考えられる。

ＳＫ643（第92図）

H区西端部で検出した不定形の落ち込み状遺構。明確な掘り方を持たないため、包含層の一部の可能性もある。

出土遺物（811～817） 811・812は土師質土器小皿。811は佐藤ＤⅢ－５型式。813は1ｃ型式の土師質土器杯。814～816は須恵器椀。817は茶釜か。

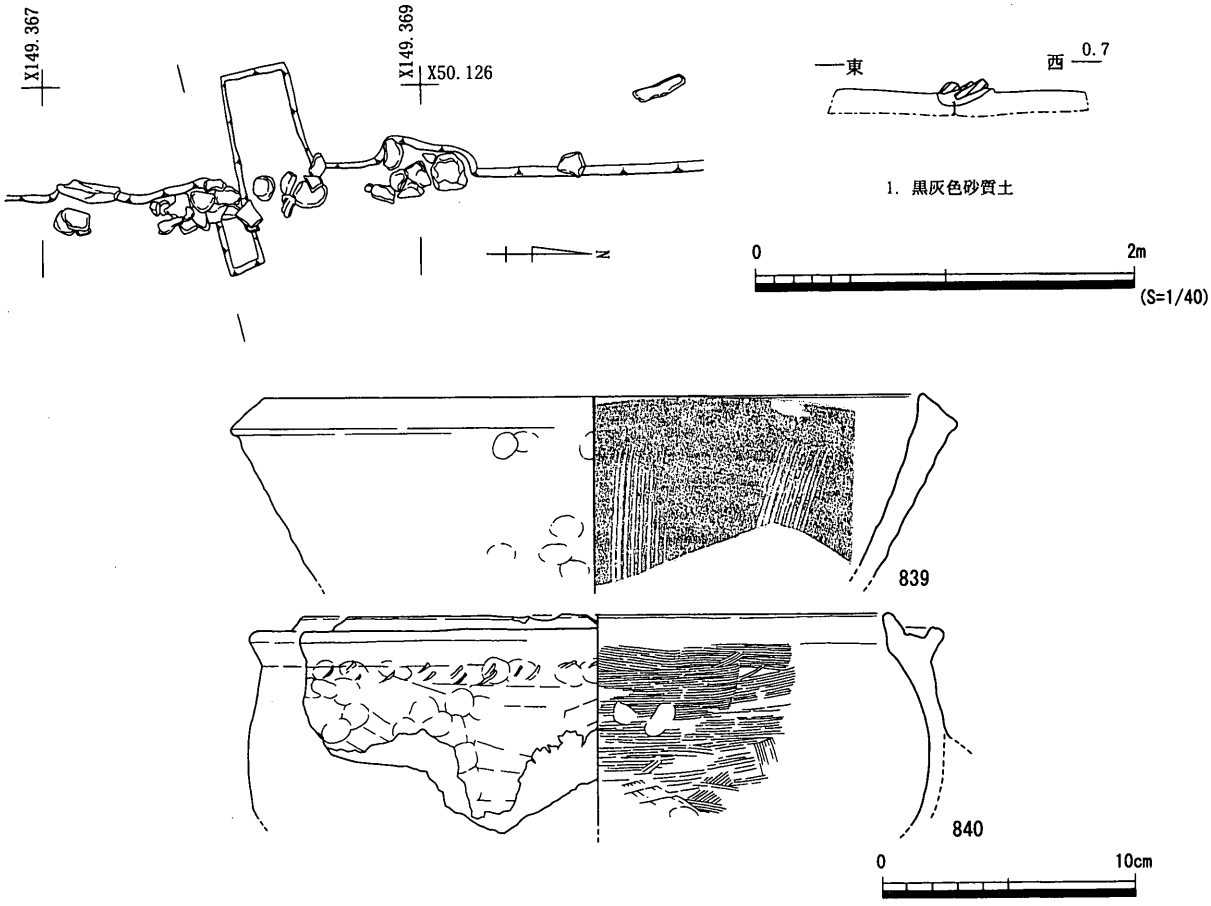
時期 813から14世紀後半と考えられる。

ＳＫ644（第92図）

H区北西部で検出した東西方向に長軸を持つ楕円形の浅い土坑。

出土遺物（818～827） 818・819は佐藤ＢⅢ－４型式、820はＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。821～824は非「口縁部→体部ナデ手法」の土師質土器杯。821・822は1ａ型式、823は1ｂもしくは1ｃ型式。825は須恵器小皿片か。826は東播系須恵器鉢。森田第Ⅲ期第1段階。

時期 出土遺物は、823がやや降る時期を示すものの、他は13世紀末～14世紀前葉に時期に比定できる。よって、当遺構の埋没時期は13世紀末～14世紀前葉を中心とし、14世紀前半～後半



第94図　ＳＸ006平・断面図、出土遺物

まで含むものと考えられる。

ＳＫ 652（第 92 図）

Ｈ区中央やや東よりで検出した不定形の落ち込み状遺構。西に隣接するＳＸ 642 と連続している可能性も考えられる。

出土遺物（828 ～ 834） 829 ～ 832 は土師質土器杯。829 は１ｃ型式、830 は１ｂ型式、831 は３ａ型式。833 は常滑甕。834 は備前甕。乗岡中世３ａ期か。

時期 831 から 14 世紀後半と判断できる。

ＳＫ 661（第 93 図）

Ｈ区中央やや西よりで検出した土師質土器杯埋納遺構。杯が埋納されている部分はピット状の平・断面形を呈しているが、上位レベルでの平面形は不定形を呈している。これは、東部から掘り込みが行われ、杯を埋納する部分のみ杯の大きさに合わせて掘り込まれた結果であると推測できる。

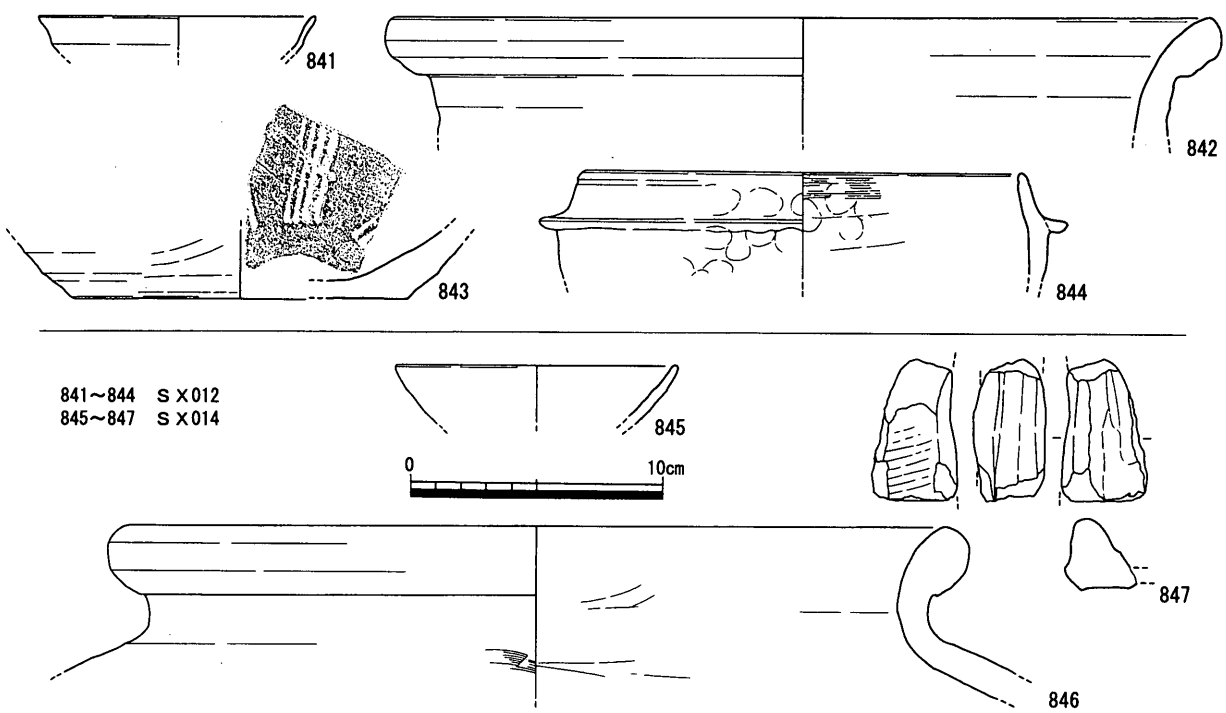
土坑東端部からは、18 個体の土師質土器が、見込み部を上に向けて重ねられた状態で出土した。杯のすべてに煤の付着は確認できない。

出土遺物（835 ～ 838） 835 は２ｂ、836 は３ａ、837・838 は１ｃ型式の土師質土器杯。

時期 埋納時期は 14 世紀後半と考えられる。

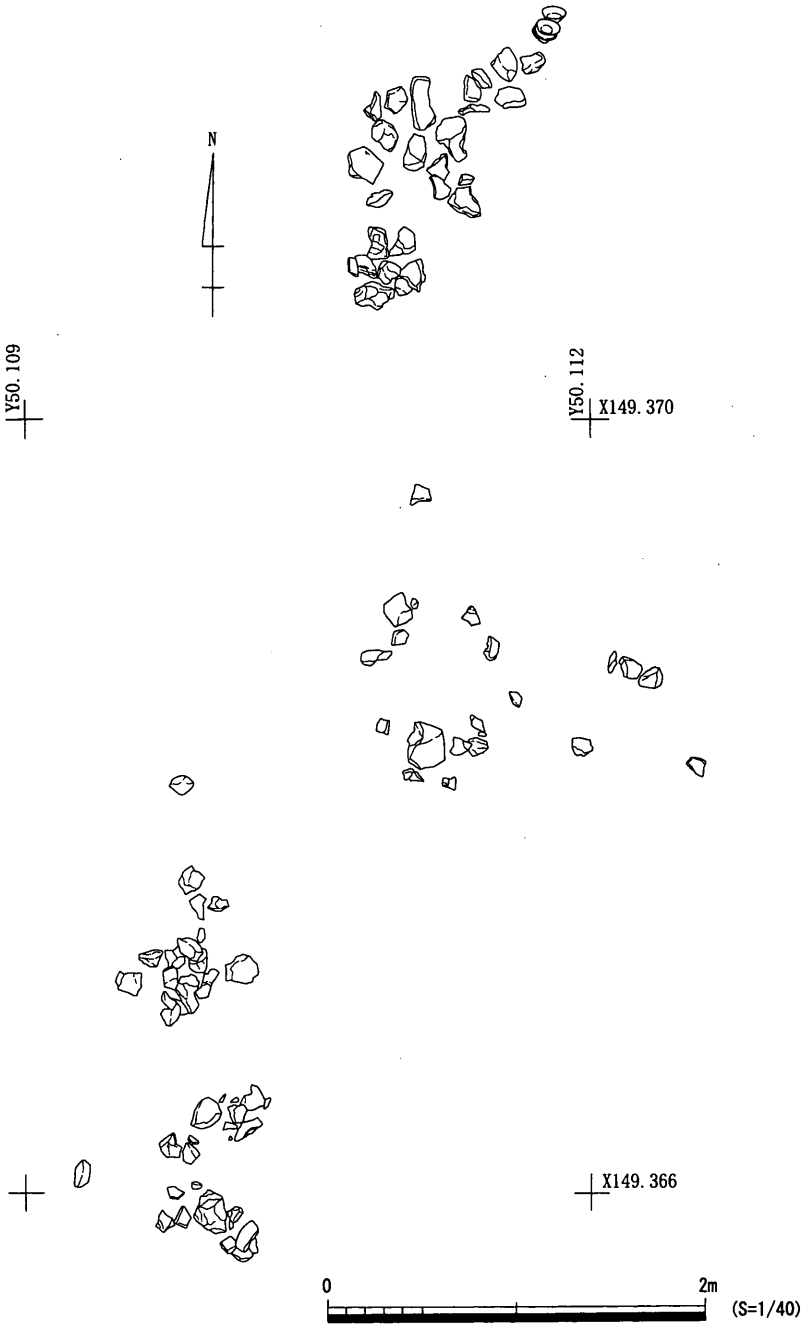
その他の遺構（ＳＸ）

ＳＸ 006（第 94 図）



第95図　ＳＸ012・014出土遺物

第96図　ＳＸ121平面図（１）



第97図　ＳＸ121平面図（２）

Ａ区中央やや西よりで検出した、安山岩・花崗岩礫が南北方向に並べられた遺構。なんらかの境界を示す遺構である可能性は高いが、礫の大きさ、配置の方向、石材等に強い規則性は認められず、数段積み重ねられたような状況も確認できないため、ＳＤ013やＳＡ001よりは下位レベルの区画遺構と考えられる。

遺物はいずれも礫の直上、もしくは礫と礫の間から出土した。

出土遺物（839・840）　839は備前擂鉢。乗岡中世３ｂ期。840は土師質土器足釜。鍔部は折り曲げによりつくり出され、鍔部上面は強いナデにより浅い窪みが生じている。

時期　839から14世紀後葉と考えられる。

ＳＸ 012（第 95 図）

Ａ区北部中央やや東よりで検出した平面形不定形の浅い落ち込み状の遺構。

出土遺物（841 ～ 844） 841 は土師質土器杯口縁部細片。胎土・焼成から１ａもしくは１ｂ型式と考えられる。842 は備前甕。口縁部の玉縁はやや扁平で、外面には強いナデにより浅い窪みが生じている。乗岡中世４ｂ期か。843 は楠井産擂鉢。軟質の須恵質焼成。844 は土師質土器羽釜もしくは足釜。鍔部は折り曲げによって成形され、胴部は内外面ともに丁寧なナデが施されている。外面鍔部以下には煤の付着が確認できる。

時期 842 から最終埋没は 15 世紀中葉頃と考えられる。841 はやや遡る時期の遺物であるが、細片のため紛れ込みと判断した。

ＳＸ 014（第 95 図）

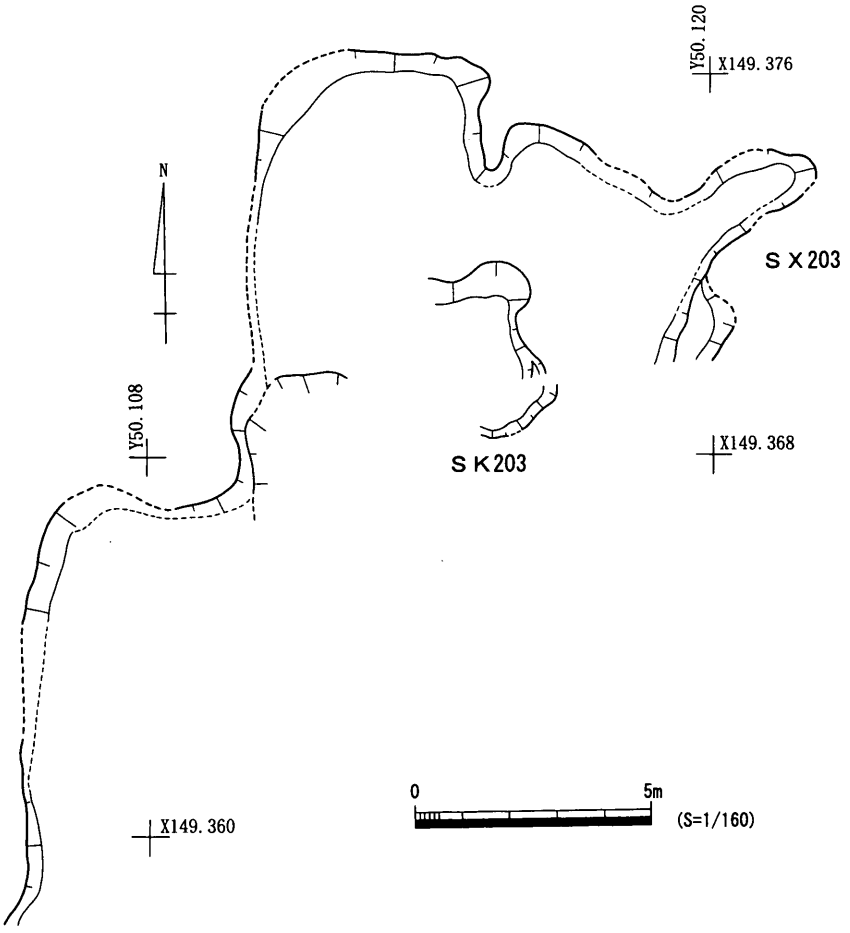
Ａ区北部西よりで検出した不定形の浅い落ち込み状遺構。

出土遺物（845 ～ 847） 845 は１ａもしくは１ｂ型式の土師質土器杯。846 は備前甕。847 は竈。

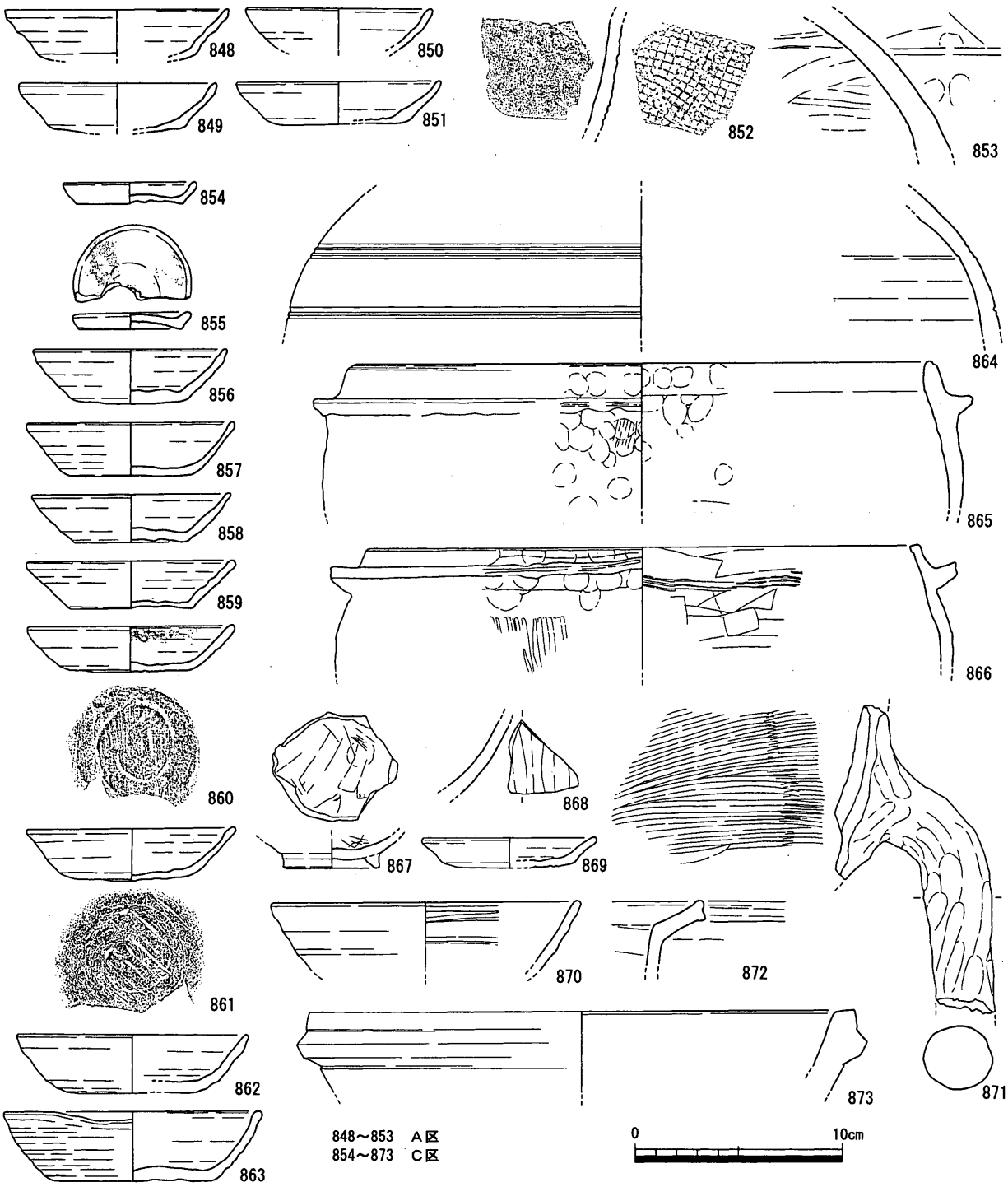
時期 845 から 14 世紀前半と判断できる。

ＳＸ 121（第 96・97 図）

板状の赤色安山岩で構成される礫敷遺構。一部方形に密集する部分があるほかは、礫が点在し



第98図　ＳＸ203平面図

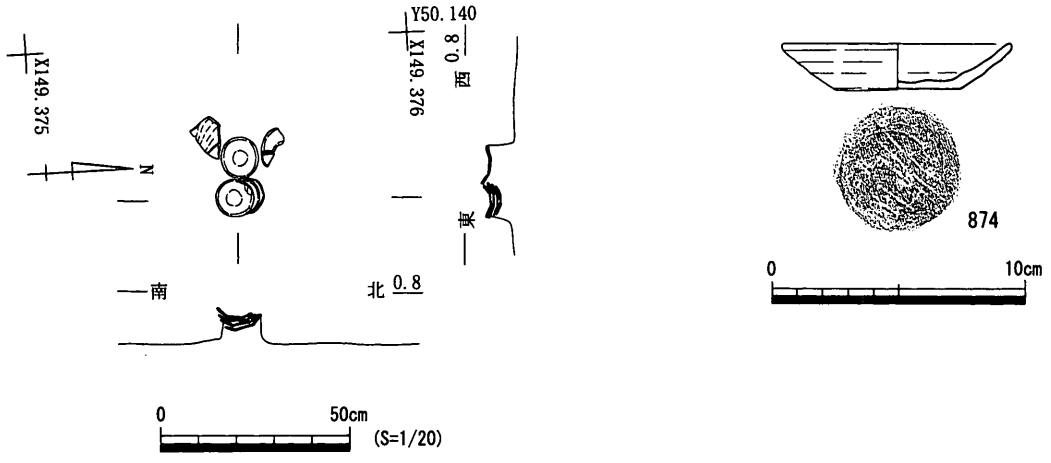


第99図　ＳＸ203出土遺物

ているような状況である。近隣に水域を想定できる地形環境にないことから、高松城跡（西の丸町地区）で検出した港湾施設関連の礫敷遺構とは異なるものと考えられる。Ⅳ層（中世前半包含層）中、もしくはⅣ層の下面で検出した。

時期　検出状況から、13世紀末以前、本遺跡内に本格的な集落遺構が形成される前の遺構と考えられる。

ＳＸ 203（第 98・99 図）



第100図　ＳＸ300平・断面図、出土遺物

Ａ区北西部、Ｂ区東部、Ｃ区南西部に拡がる不定形の落ち込み状遺構。当遺構の下面でＳＫ 203を検出した。

Ａ区（ＳＫ 203 を含む）出土遺物（848 ～ 853）　848 ～ 851 は土師質土器杯。848・849 は２ａ型式。851 は口径と底径の差がやや小さい形態であるが、１ｃ型式段階と考えられる。852 は須恵器甕。853 は備前甕肩部小片。沈線が１条巡る。

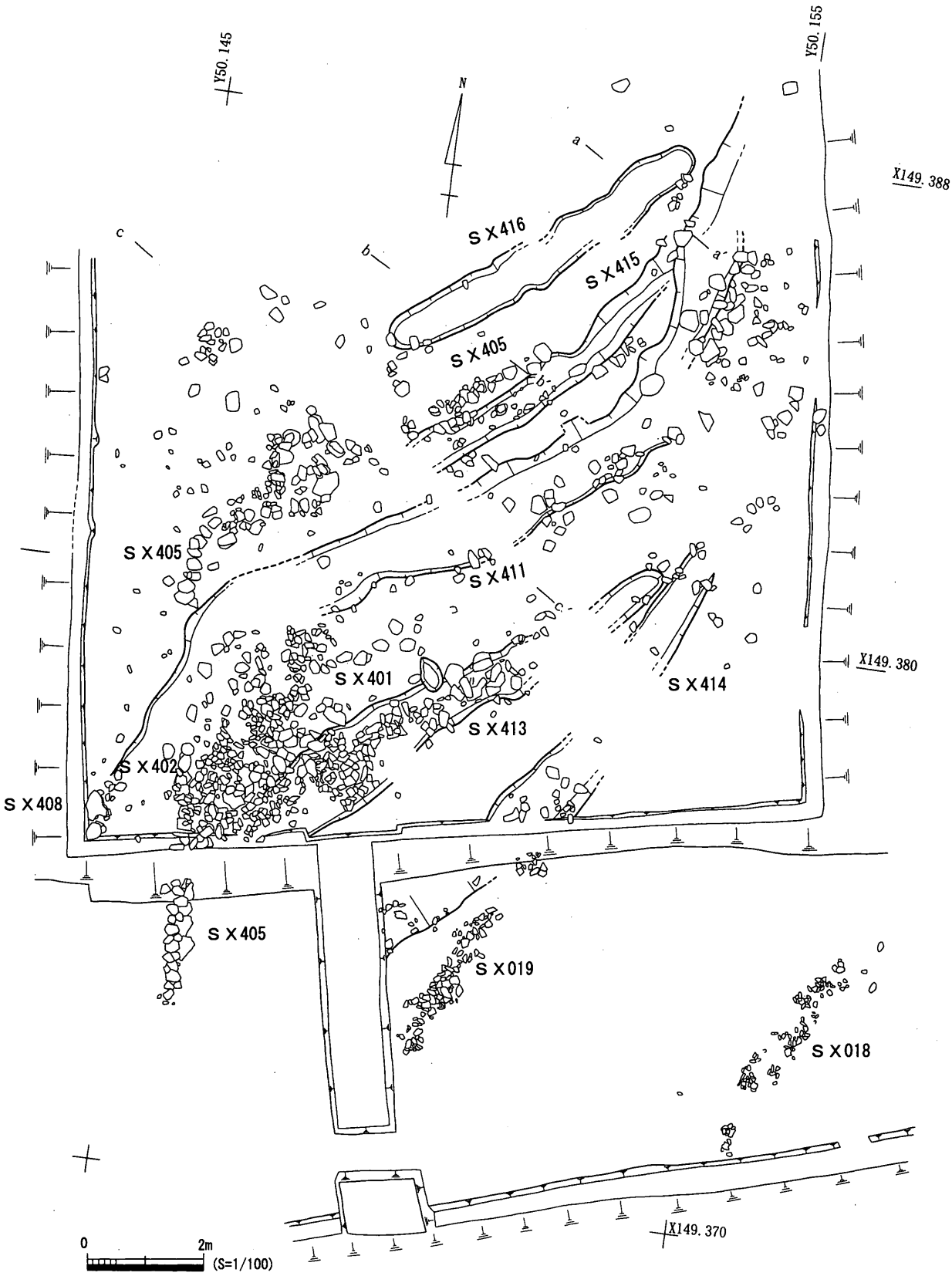
Ｃ区出土遺物（854 ～ 873）　854・855 は土師質土器小皿。856 ～ 863 は土師質土器杯。いずれも「口縁部→体部ナデ手法」は認められない。856・857・863 は１ａ型式、858・859・861・862 は１ｂ型式、860 は１ｃ型式。863 にはロクロ目が明瞭に残る。864 は備前甕。865・866 は土師質土器羽釜。いずれも折り曲げによって鍔部をつくり出している。866 は鍔部端面がハケによって平坦に仕上げられている。867 は吉備系土師質土器椀。868 は龍泉窯系青磁碗。869 は須恵器皿。口縁端部の内外面に油分の付着が認められる。灯明皿としての使用痕か。870 は須恵器椀。873 は滑石製石鍋。木戸Ⅲ－ｃ～Ⅲ－ｄ類。

時期　土師質土器杯の多くは１ａ～１ｂ型式段階のものであることから、14 世紀前半を中心とする時期の埋没と考えられる。14 世紀後半以降に降る遺物（860・873）に関しては、本遺構埋没後に掘り込まれた遺構に伴う可能性を想定しておきたい。

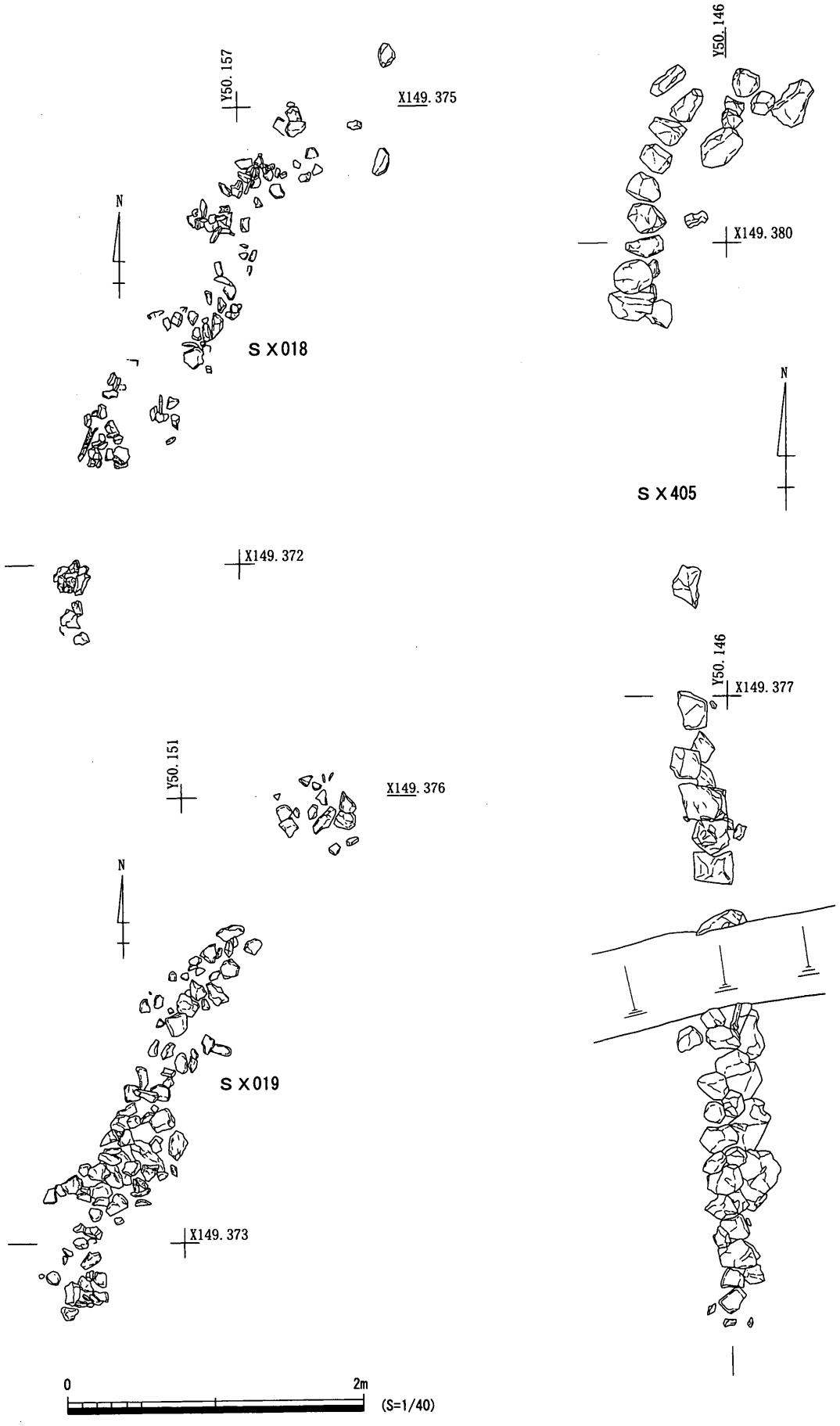
ＳＸ 300（第 100 図）

Ｄ区南東部、ＳＤ 014 よりも上位で検出した。掘り込みのラインを確認できなかったが、ＳＫ 661 等の状況から考えると、ピット状の掘り込みをもつ土師質土器杯埋納遺構であったと考えられる。杯は、西側に４個体が重ねられた状態で、東側に２個体がやや離れて検出された。東側の２個体のうち、北側の１個体のレベルは西側の最上位の個体とほぼ同じで、南側の１個体のレベルは西側の最下位のものと近いことから、東側についても、西側同様４個体が重ねられていたとの想定が可能である。なお、６個体すべての杯に灯明皿としての使用痕は確認できない。

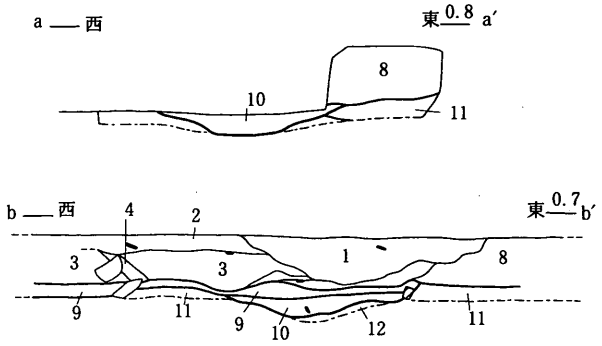
出土遺物（874）　874 の土師質土器杯は、底部から口縁部まで直線的に立ち上がり、器壁の厚さが一定でやや厚いタイプ。非「口縁部→体部ナデ手法」。口径・器高から１ｃ型式段階より若干降る時期の所産と思われる。



第101図　ＳＸ018・019・401・402・405・408・411・413～416平面図

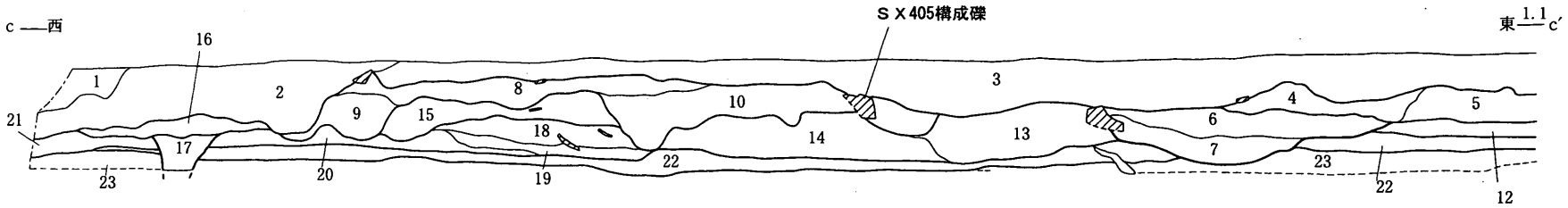


第102図　SX018・019・405平面図



1. 10YR4/2 灰黄褐色弱粘質土　炭化物・Mn(Fe?)多く含む　中世後半整地層(Ⅲb層)
2. 10YR4/2 灰黄褐色弱粘質土　炭化物・Mn(Fe?)多く含む　2.5Y6/4 にぶい黄色砂粒含む　中世後半整地層(Ⅲb層)
3. 10YR4/1 褐灰色細砂質土　中世後半整地層(Ⅲb層)
4. 2.5Y5/4 黄灰色細砂質土　中世後半整地層(Ⅲb層)
5. 2.5Y5/4 黄褐色細砂　中世後半整地層(Ⅲb層)
6. N5(YR) 灰色砂質土　5・7層ブロック少量含む　中世後半整地層(Ⅲb層)
7. 10YR4/4 褐色砂質土　6層ブロック少量含む　Fe沈着著しい　中世後半整地層(Ⅲb層)
8. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土　N4/ 灰色砂質土と互層状を呈する　中世後半整地層(Ⅲb層)
9. N4(YR) 灰色細砂質土　中世後半整地層(Ⅲb層)
10. N3/ 暗灰色弱粘質土　2.5Y6/1 黄灰色砂ブロック含む　SX416
11. N4/ 灰色砂質土　中世前半堆積層(Ⅳa層)
12. 5Y5/3 灰オリーブ色細砂質土　古代以前の堆積層(Ⅴa層)

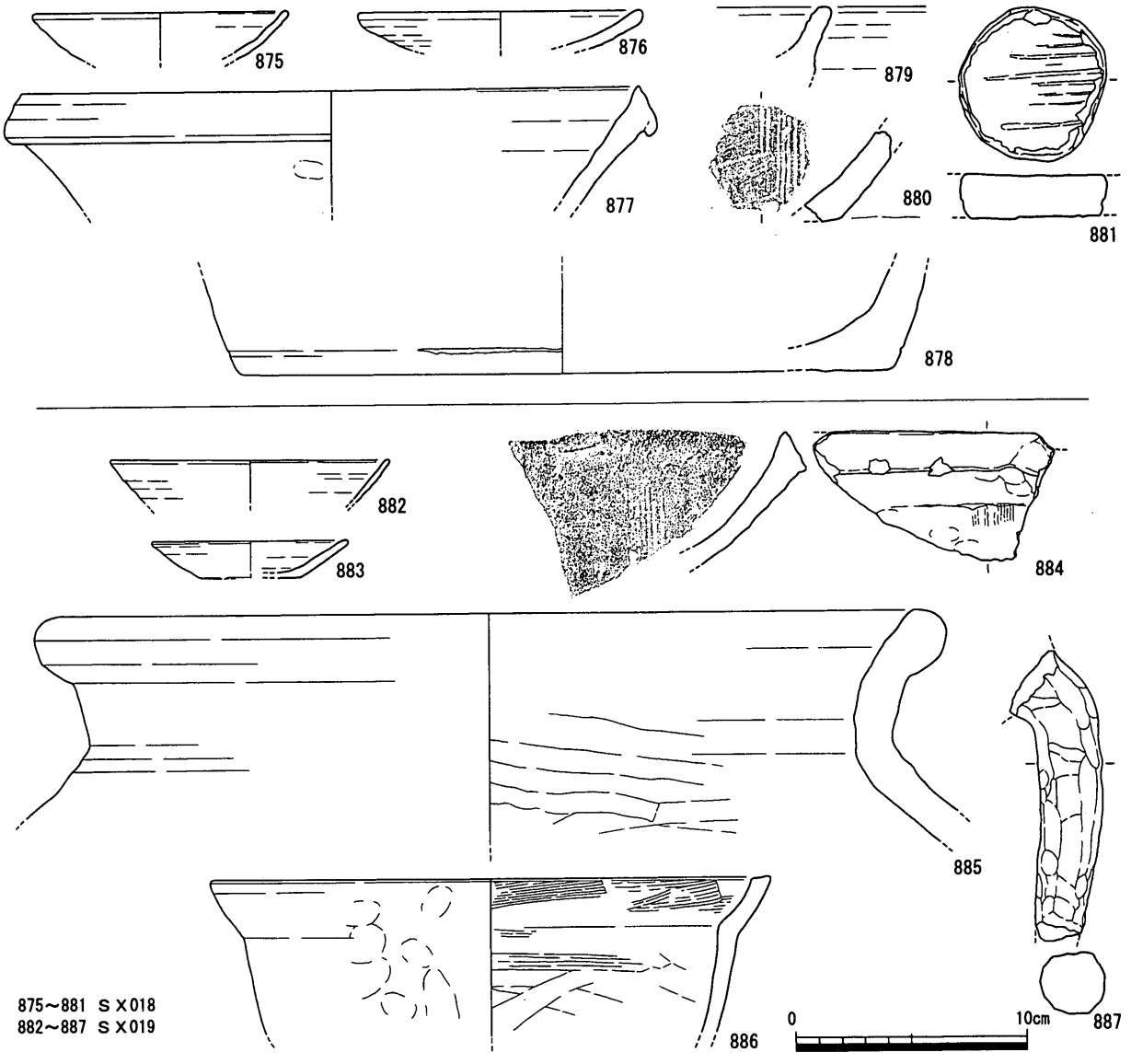
第103図　ＳＸ416断面図(S=1/40)



1. 10YR7/4 にぶい黄橙色砂　近代整地層(Ⅰb層)
2. 10YR2/2 黒褐色粘質土　混入物多い　近代整地層(Ⅰb層)
3. 10YR3/2 黒褐色粘質土　0.5～1.0m大の小礫多く含む　機褐色粘質土ブロック炭化物含む　近代整地層(Ⅰb層)
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土　中世後半整地層(Ⅲa層)
5. 10YR5/1 褐灰色細砂弱粘質土　Fe Mn多く含む　中世後半整地層(Ⅲa層)
6. 10YR3/1黒褐色粘質土　0.5～5.0cm大の小礫含む　SX411
7. N3(YR) 暗灰色粘土　炭化物含む　SX411
8. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土　1.0～5.0cm大の小礫(川原石)多く含む　中世後半整地層(Ⅲb層)
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂　1.0～10.0cm大の小礫(川原石)多く含む　Fe沈着　中世後半整地層(Ⅲb層)
10. 10YR4/1 褐灰色弱粘質土　炭化物若干含む　Mn多く含む　中世後半整地層(Ⅲb層)
11. 10YR4/1 褐灰色弱粘質土　10層よりも赤み若干強い　中世後半整地層(Ⅲb層)
12. 2.5Y5/1 灰色細砂弱粘質土　Mn沈着少量　中世後半整地層(Ⅲc層)
13. 2.5Y5/1 黄灰色弱粘質土　炭化物多く含む　1.0～10.0cm大の小礫含む　中世後半整地層(Ⅲc層)
14. 5Y5/1 灰色細砂弱粘質土　Fe若干　2.5Y6/4 にぶい黄色粘土ブロック含む　中世後半整地層(Ⅲc層)
15. 5Y5/1 灰色細砂質土　炭化物若干含む　Fe沈着著しい　中世後半整地層(Ⅲd層)
16. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土　中世後半整地層(Ⅲd層)
17. N3(Y) 灰色弱粘質土　基盤層ブロック少量含む　SP
18. 5Y5/1 灰色細砂弱粘質土　Fe若干　7層より黄色味強い　中性前半堆積層(Ⅳa層)
19. 2.5Y5/4 黄褐色細砂　若干粘性あり　中世前半堆積層(Ⅳa層)
20. 10YR5/1 褐灰色砂質土　炭化物微量含む　中世前半堆積層(Ⅳa層)
21. 10YR5/2 灰黄褐色細砂質土　Fe沈着少量　中世前半堆積層(Ⅳa層)
22. 5Y4/1 灰色細砂質土　中世前半堆積層(Ⅳa層)
23. 5Y6/4 オリーブ黄色細砂質土～弱粘質土　一部Fe沈着激しい　古代以前の堆積層(Ⅴa層)

0　2m
(S=1/40)

第104図　ＳＸ405・411断面図



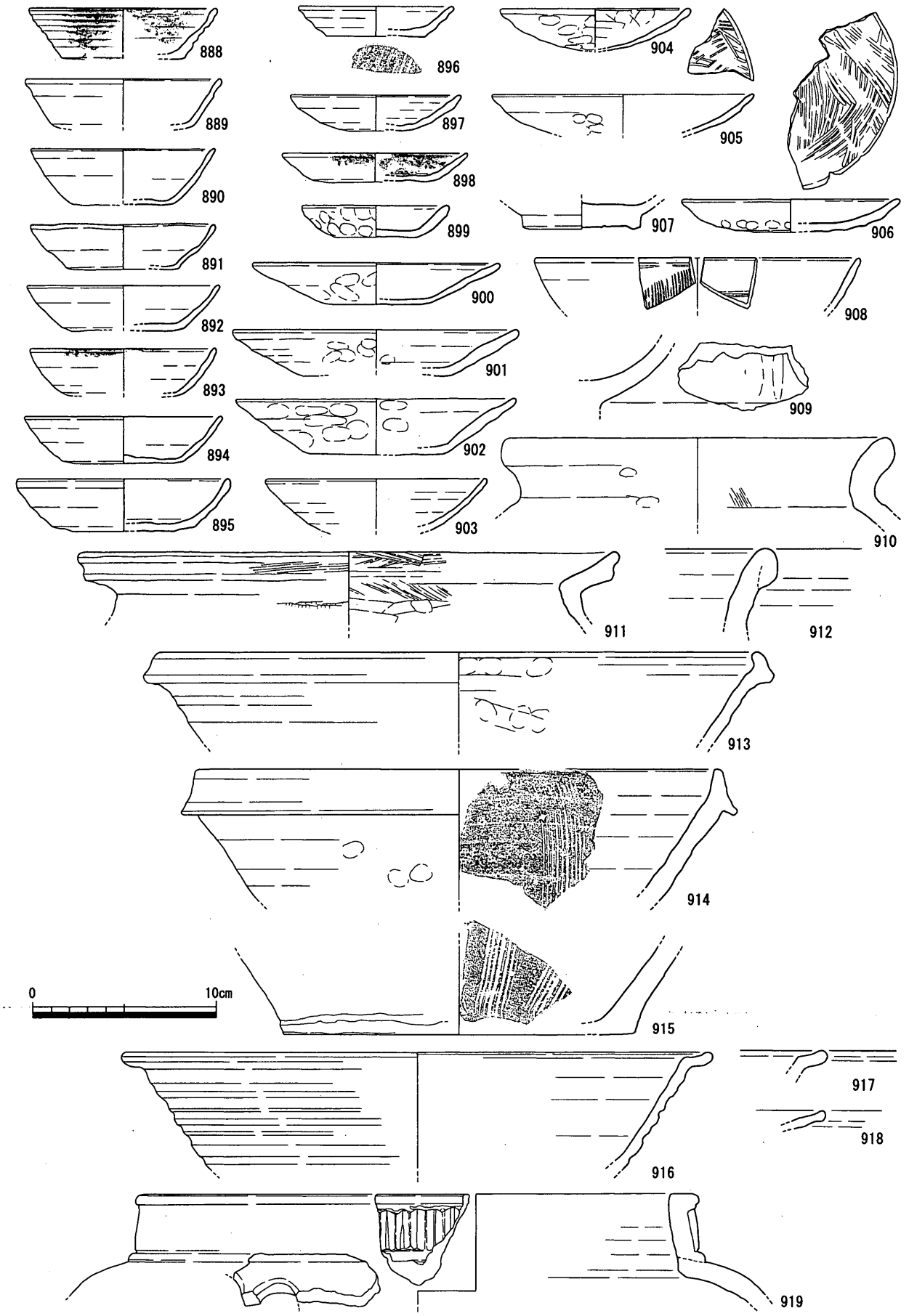
第105図　ＳＸ018・019出土遺物

時期　本遺構の形成時期については、検出状況からＳＤ 014 埋没後であることは間違いなく、土師質土器杯の口径・器高から 14 世紀後葉～末と考えられる。

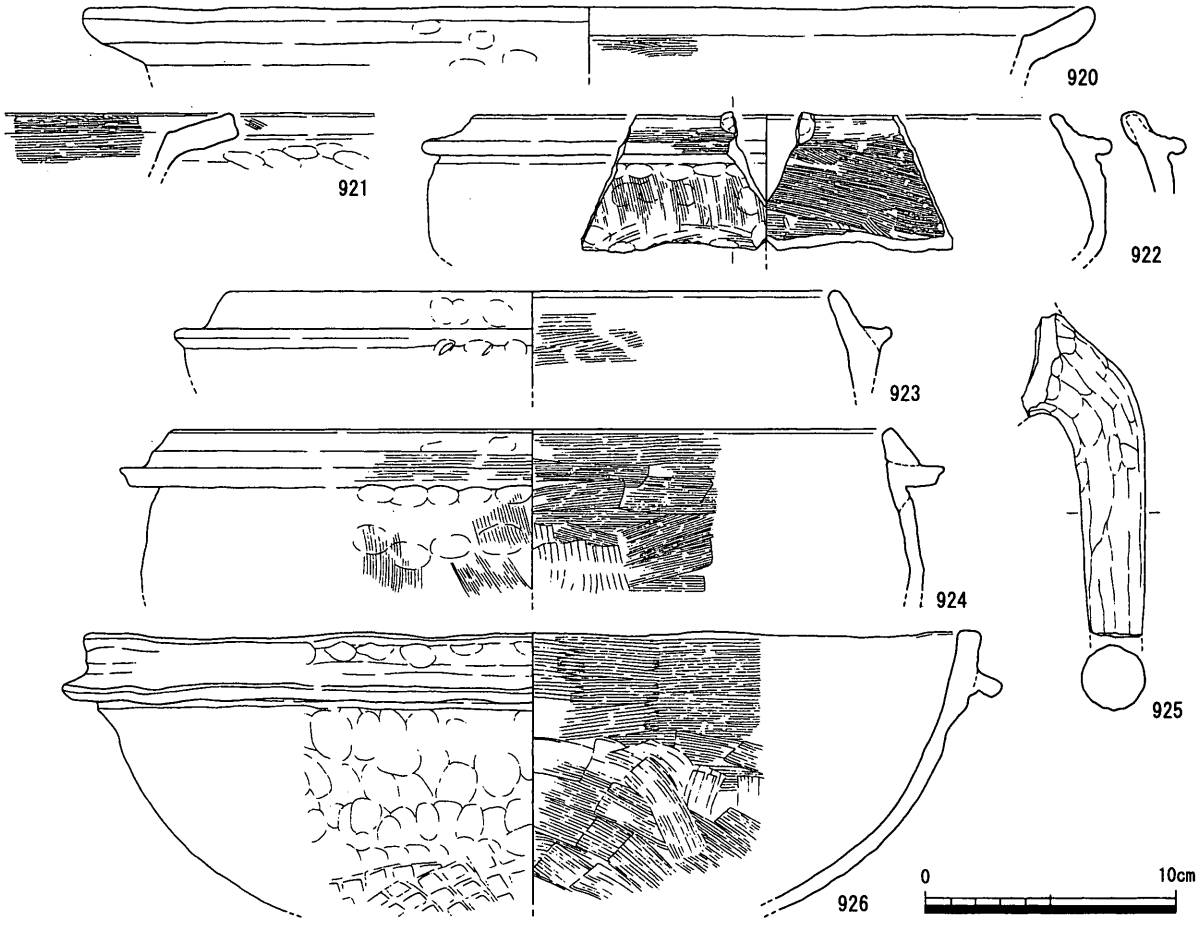
Ａ区東部・Ｅ区検出石列・集石・溝状遺構群

第３章第２節で述べたとおり、調査対象地内の旧地形は西から東に向かって下がることが分かっている。区画溝が掘削され、当遺跡内で本格的に集落経営が始まる 13 世紀末～ 14 世紀では、ＳＤ 014 のあるＤ区東端部以西が安定した部分と推測できる。Ａ区東部及びＥ区以東の窪地状部分は、中世後半に段階的に整地が行われ、整地に伴って石列遺構や溝状遺構が形成されている。これらの遺構の性格について言及するのは困難であるが、北東－南西の方向を示すことから、旧地形を反映する整地の単位を示すとも考えられる。

ちなみに、近世の溝ＳＤ 03・08 についても同様の方向で掘削されており、付近は 17 世紀初頭まで地形的な規制を受けていたと思われる。



第106図　ＳＸ401出土遺物（１）



第107図　ＳＸ401出土遺物（２）

ＳＸ 018（第 101・102・105 図）

Ａ区東端の低地部で検出した拳大の安山岩・花崗岩・砂岩礫が乱雑に並べられた遺構。礫はほぼ北東―南西方向に並べられている。

出土遺物（875 ～ 881）　875 は１ｃ型式の非「口縁部→体部ナデ手法」土師質土器杯。876 は器壁が厚いタイプの土師質土器杯。外面の色調は赤色。877 は備前擂鉢。乗岡中世４ａ期。878 は備前甕底部。879 は不明焼締陶器。備前に比べて胎土は緻密。880・881 は円盤状加工品。880 は備前擂鉢の転用。881 は平瓦の転用。加工時に伴う剥離面の稜線が側面に残らず、上下面と側面の境がやや丸みを帯びていることから、加工後に使用されたことは確実である。

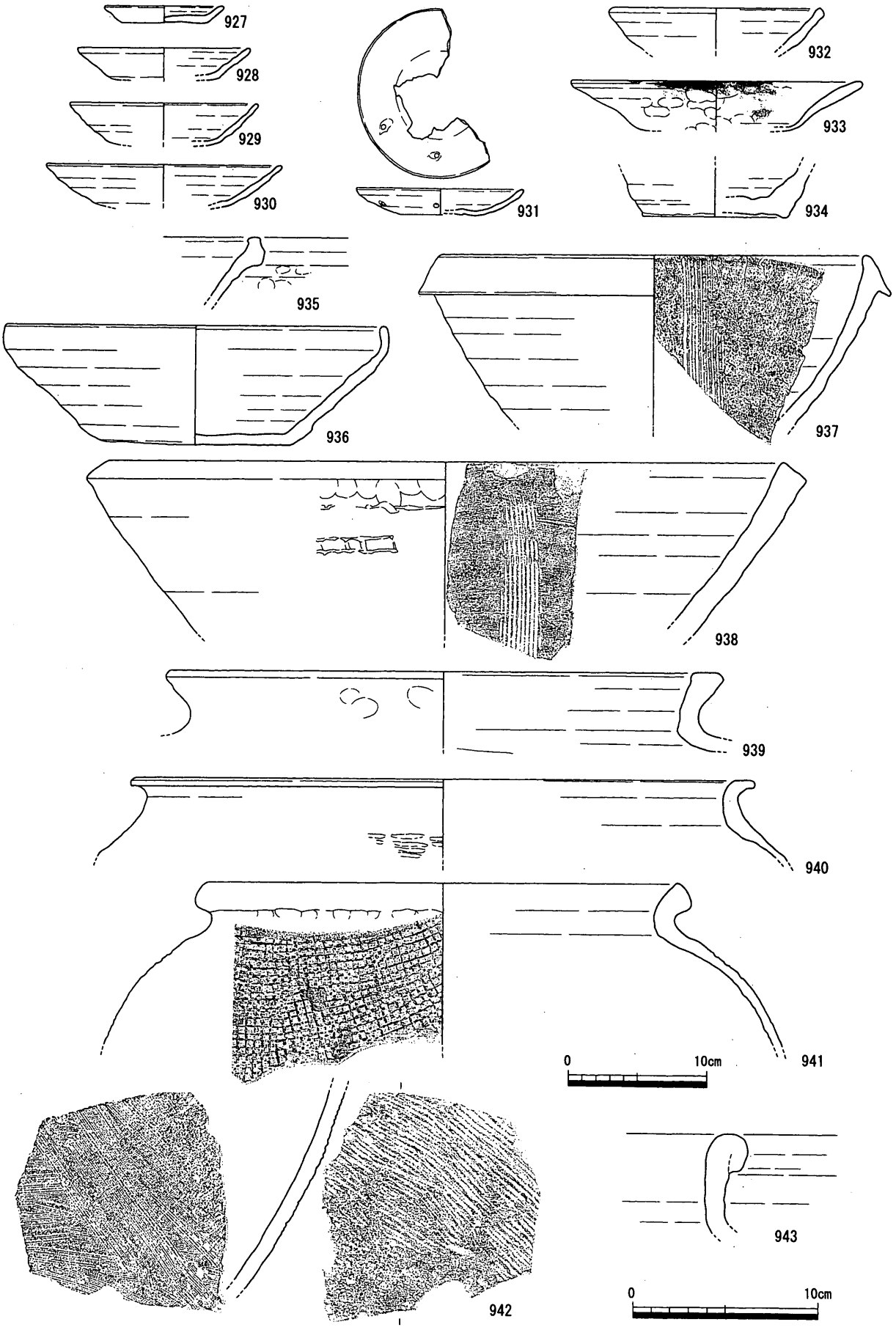
時期　876・877 からＳＸ 018 の形成時期は 15 世紀前葉と考えられる。

ＳＸ 019（第 101・102・105 図）

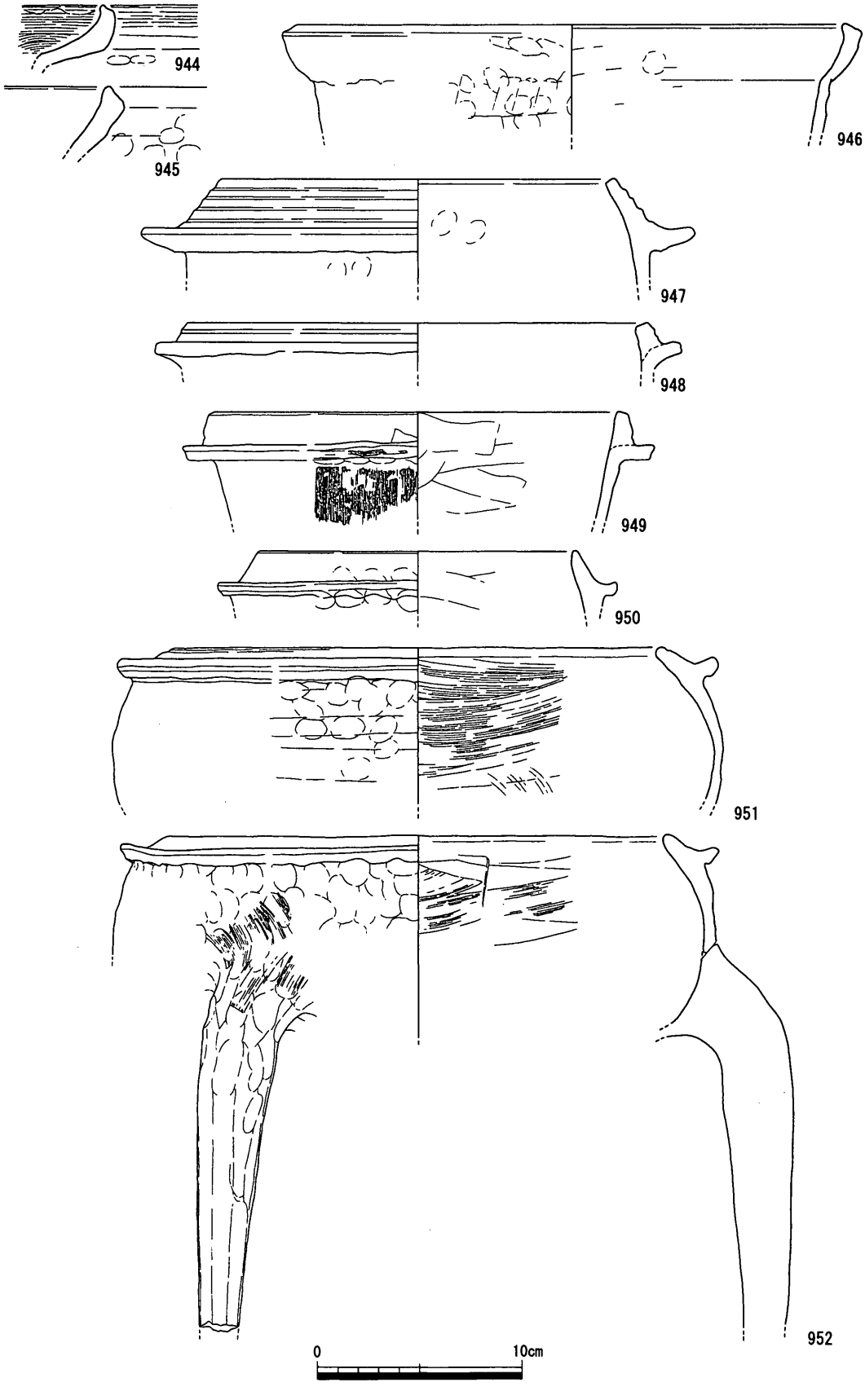
Ａ区東部で検出した北東―南西方向に礫が並べられた遺構。安山岩・花崗岩・砂岩礫が使用されている。

出土遺物（882 ～ 887）　882 は器壁が薄いタイプの土師質土器杯。883 は１ｄ型式の土師質土器杯。「口縁部→体部ナデ手法」は認められない。884 は乗岡中世４ａ期の備前擂鉢。885 は備前甕。886 は瓦質土器鍋。

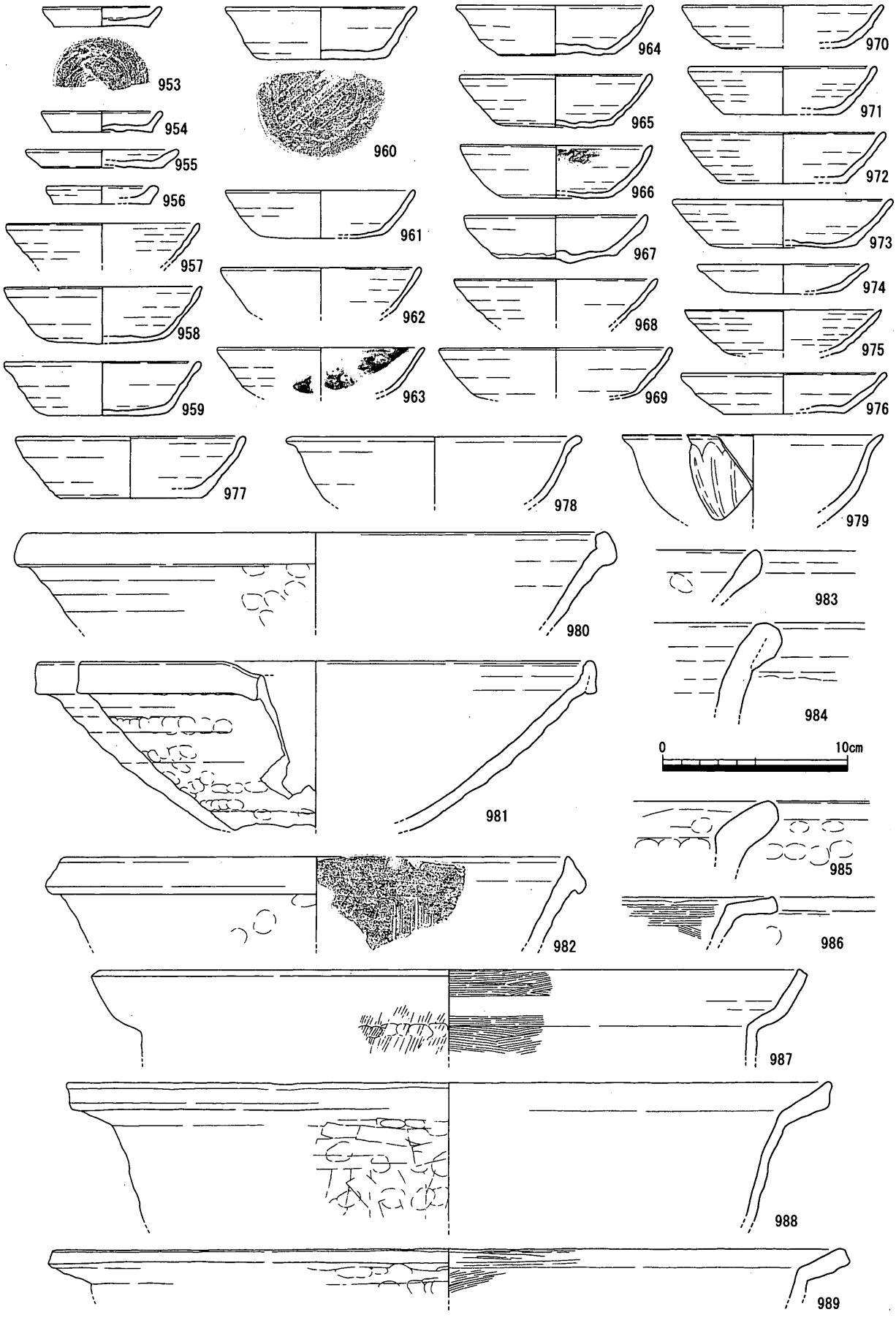
時期　884 から 15 世紀前葉と考えられる。



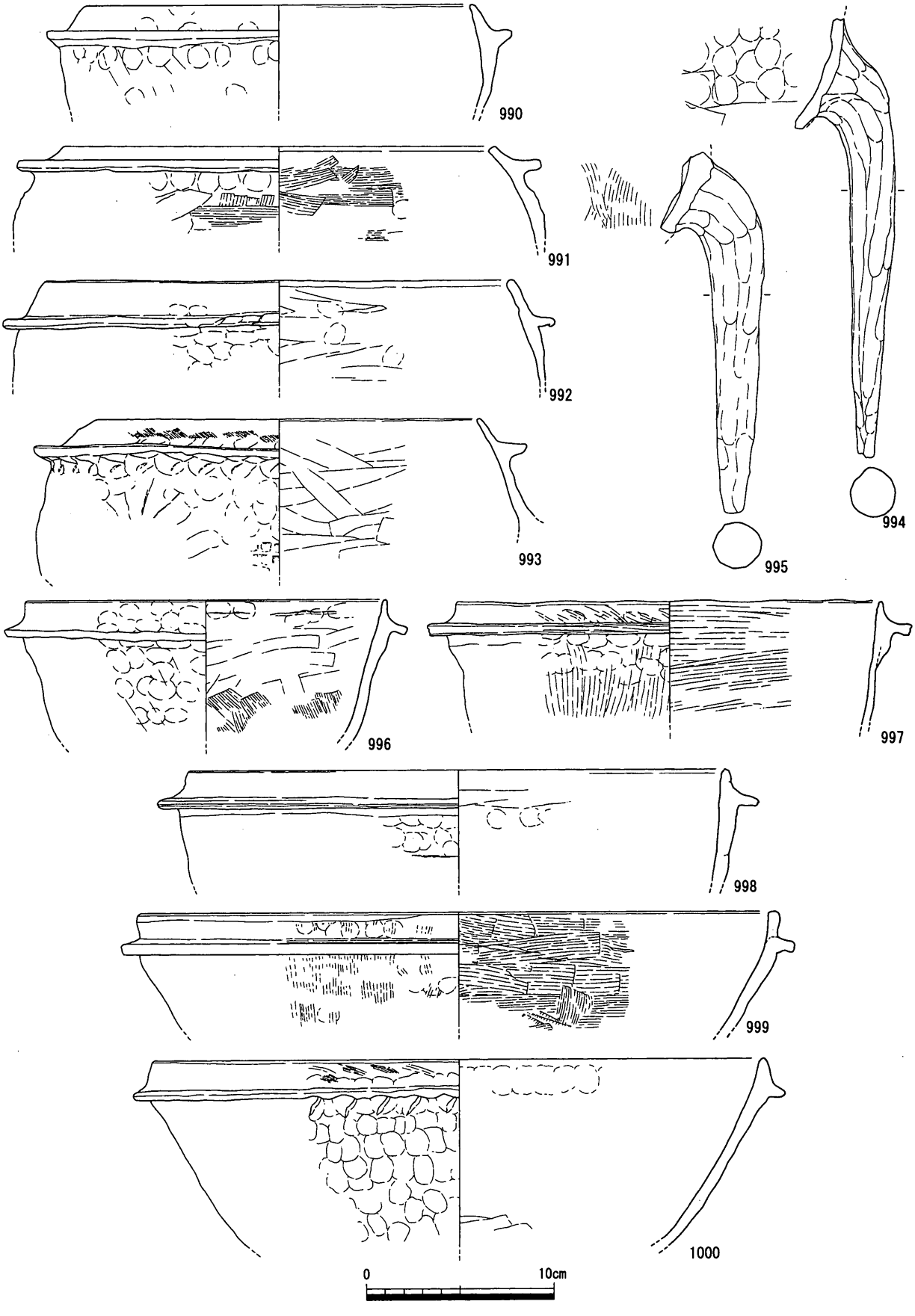
第108図　ＳＸ402出土遺物（１）



第109図　ＳＸ402出土遺物（２）



第110図　ＳＸ405出土遺物（１）



第111図　ＳＸ405出土遺物（２）

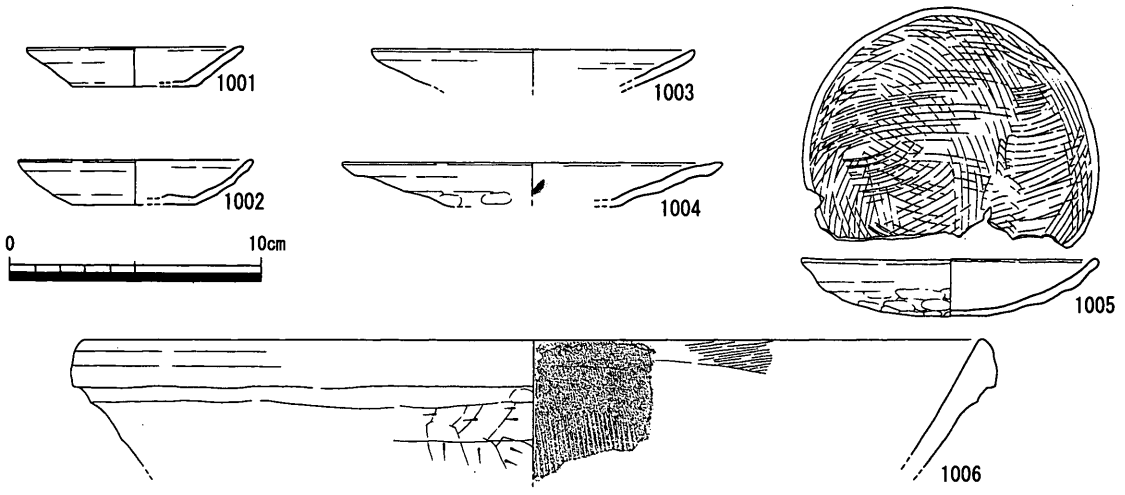
ＳＸ 401・402（第 101・106 ～ 109 図）

ＳＸ 401・402 両遺構はＳＸ 405 の崩落したものとＳＸ 405 に後出する集石遺構。集石は拳大程度の大きさの安山岩・花崗岩・砂岩で構成されている。ＳＸ 401・402 には、石列（ＳＸ 405）の形成、礫の転落、集積遺構の形成、整地といった複数段階の遺構形成過程を含むと思われるが、調査時にそれらを認識することができずに遺物の取り上げを行った。

ＳＸ 401 出土遺物（888 ～ 926） 888 ～ 898 は土師質土器杯。888・889・890 は１ａ型式。888 にはロクロ目が顕著に残る。889・890 は口径がやや大きく体部の立ち上がりが急であることから、佐藤ＤⅡ－６型式まで遡る可能性もある。891 は２ａ型式。「口縁部→体部ナデ手法」は確認できない。892 ～ 894 は１ｂ型式。896 はＳＸ 300 出土杯と同型式のもの。897 は「口縁部→体部ナデ手法」が確認できる１ｅ型式。898 は器高が低く、１ｅ型式段階よりも更に後出する型式と考えられる。899 ～ 902 は京都系土師器皿。903 は土師質土器杯。器高・口径から京都系土師器皿の影響を受けた可能性がある。904 ～ 906 は瓦器皿。904 は内面に煤の付着が認められる。906 は内面には粗いハケが施され、それに伴う指オサエが外面に残る。外面口縁部直下は強いナデにより若干窪みが生じている。なお、二次焼成のためかカーボンは付着していない。907 は白磁Ⅳ類の底部。908・909 は龍泉窯系青磁碗。910 は土師質土器壺。911 は土師質土器甕。912 は備前甕。913 は東播系須恵器鉢。森田第Ⅲ期第２段階。914 は乗岡中世５ａ期の備前擂鉢。915 は備前擂鉢底部片。916・917 は藤澤後期３～４の古瀬戸盤類。両者は同一個体の可能性が高い。918 も古瀬戸盤類。藤澤後期３。919 は瓦質土器風炉。920・921 は土師質土器鍋。920 は口縁端部を丸くおさめるタイプ。口縁部外面に煤付着。921 は口縁端部に面をもつタイプ。922・923 は土師質土器足釜。口縁端部内外面に粘土粒？が添付されている。口縁部・鍔部の成形技法は、体部上端に重ねた１本の粘土紐から口縁部と鍔部をつくり出す「一体接合法」。佐藤ＢⅣ類。924 は土師質土器羽釜か。925・926 は土師質土器羽釜。外面鍔部以下と内面中位以下に煤が付着している。

ＳＸ 402 出土遺物（927 ～ 952） 927 は佐藤ＢⅢ－４型式の土師質土器小皿。928 ～ 930 は土師質土器杯。928 は１ｄ型式、929 は１ｃ型式。930 は口径が大きく、京都系土師器皿の影響を受けている可能性があるもの。931 は１ｅ型式か、若干下る型式の「口縁部→体部ナデ手法」で成形された土師質土器杯。体部中位に焼成後の穿孔が認められる。932 は器壁がやや厚く、口縁端部に面をもつタイプの土師質土器杯。当遺跡内では希なタイプ。933 は灰白色の京都系土師器皿。内外面に煤が付着し、器面が薄くはがれるように割れていることから、灯明皿としての機能を果たしていたことはほぼ間違いない。934 は須恵器壺底部片。内面に自然釉が確認できる。935 は東播系須恵器鉢。森田第Ⅲ期第２段階。936 は大型の土師質土器鉢。937・938 は備前擂鉢。937 は乗岡中世５ａ期。擂目上端は口縁部上端にまで達している。938 は中世３ａ期。939 は土師質土器甕。940 は瓦質土器甕。941 は土師質焼成の十瓶山窯産甕。内面の器面剥落が著しい。942 は亀山窯産須恵器甕。内面には細かなハケを施している。943 は備前甕。944・945 は土師質土器鉢。944 の外面口縁直下には煤が付着している。946 は土師質土器鍋。外面口縁部以下に煤付着。947 は瓦質土器鍋。カーボンの付着は認められない。二次焼成のためか。948 ～ 950 は土師質土器羽釜。951・952 は土師質土器足釜。

時期　出土遺物は多量で、14 世紀初頭～ 15 世紀後半までのものを含む。前述のとおり、複数段階の遺構形成過程を認識しないまま一括して取り上げを行った結果、時期幅を持つ遺物組成と



第112図　ＳＸ408出土遺物

なったと思われる。

ＳＸ 405（第 101・102・104・110・111 図）

Ａ区東部からＥ区西部にかけての石列状遺構。石列は、拳大かその３倍程度までの安山岩、花崗岩、砂岩で構成され、Ａ区からＥ区中央部にかけてはほぼ南北方向に、Ｅ区中央部から北へは南西―北東方向、ＳＸ 411 の北側に沿うかたちで並べられている。

「ＳＸ 405」として取り上げを行った遺物は石列とその周辺の遺物を含む。よって本遺構形成段階以降の遺構・整地層に伴う遺物を含む可能性があることを断っておく。

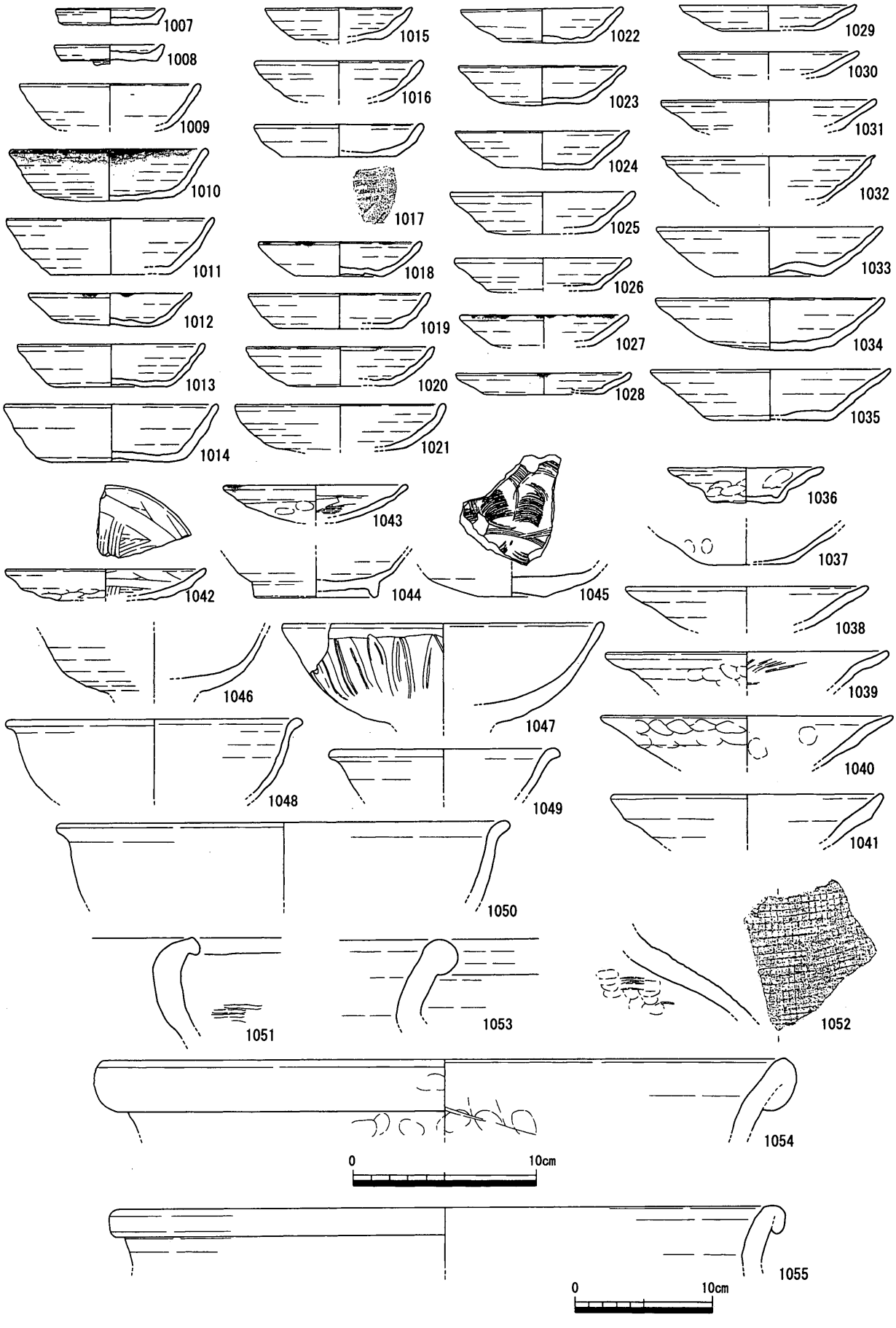
出土遺物（953 ～ 1000）　953 ～ 956 は土師質土器小皿。953 ～ 955 は佐藤ＢⅢ－４型式、956 は佐藤ＢⅢ－５型式。957 ～ 976 は土師質土器杯。957 ～ 960・962 ～ 966 は１ａ型式、961・971・972 は１ｂ型式、967・975・976 は１ｃ型式。974 は１ｅ型式段階よりも降る型式。977 は十瓶山窯系須恵器杯。978・979 は青磁碗。980・981 は東播系須恵器鉢。980 は森田第Ⅲ期第３段階か。981 は第Ⅲ期第２段階。982 は乗岡中世４ｂ期の備前擂鉢。983 は佐藤ＢⅠ類の楠井窯産鉢。焼成は須恵質。984 は備前擂鉢。985・986・988・989 は土師質土器鍋。986 は佐藤ＡⅠ類、988・989 はＡⅡ類。987 は瓦質土器鍋。990 ～ 995 は土師質土器足釜。990 は佐藤ＢⅡ類。991・993 はＢⅢ類。991 は外面鍔部以下と内面下半部に煤が付着。996 ～ 1000 は土師質土器羽釜。996・997 は外面鍔部以下と内面口縁部以下に煤の付着が認められる。

時期　出土遺物の多くは 14 世紀前半を中心として、14 世紀内に収まるものであるが、974・982 といった 15 世紀中葉～後半の遺物も認められる。ここでは、15 世紀以降の遺物を混入と考え、本遺構の形成が 14 世紀前半を中心とした時期と捉えておきたい。

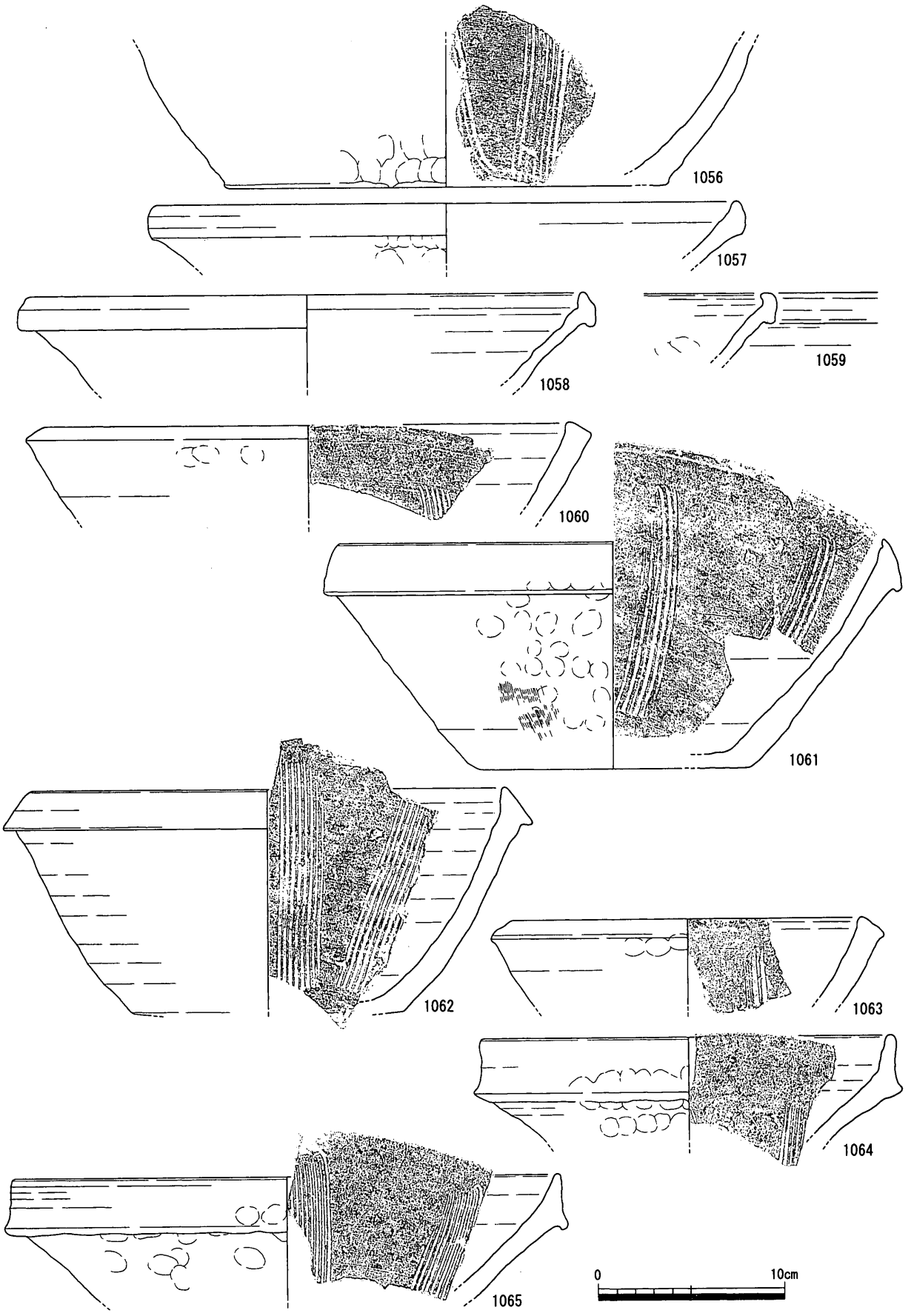
ＳＸ 408（第 101・112 図）

Ｅ区南西端部で検出した集石遺構。径 20cm 程度の礫が南北方向に並んでいるようにも見えることから、本来はＳＸ 405 のような石列遺構であったものが、その後の整地に伴う破壊によって一部のみ残存したものであるとも考えられる。

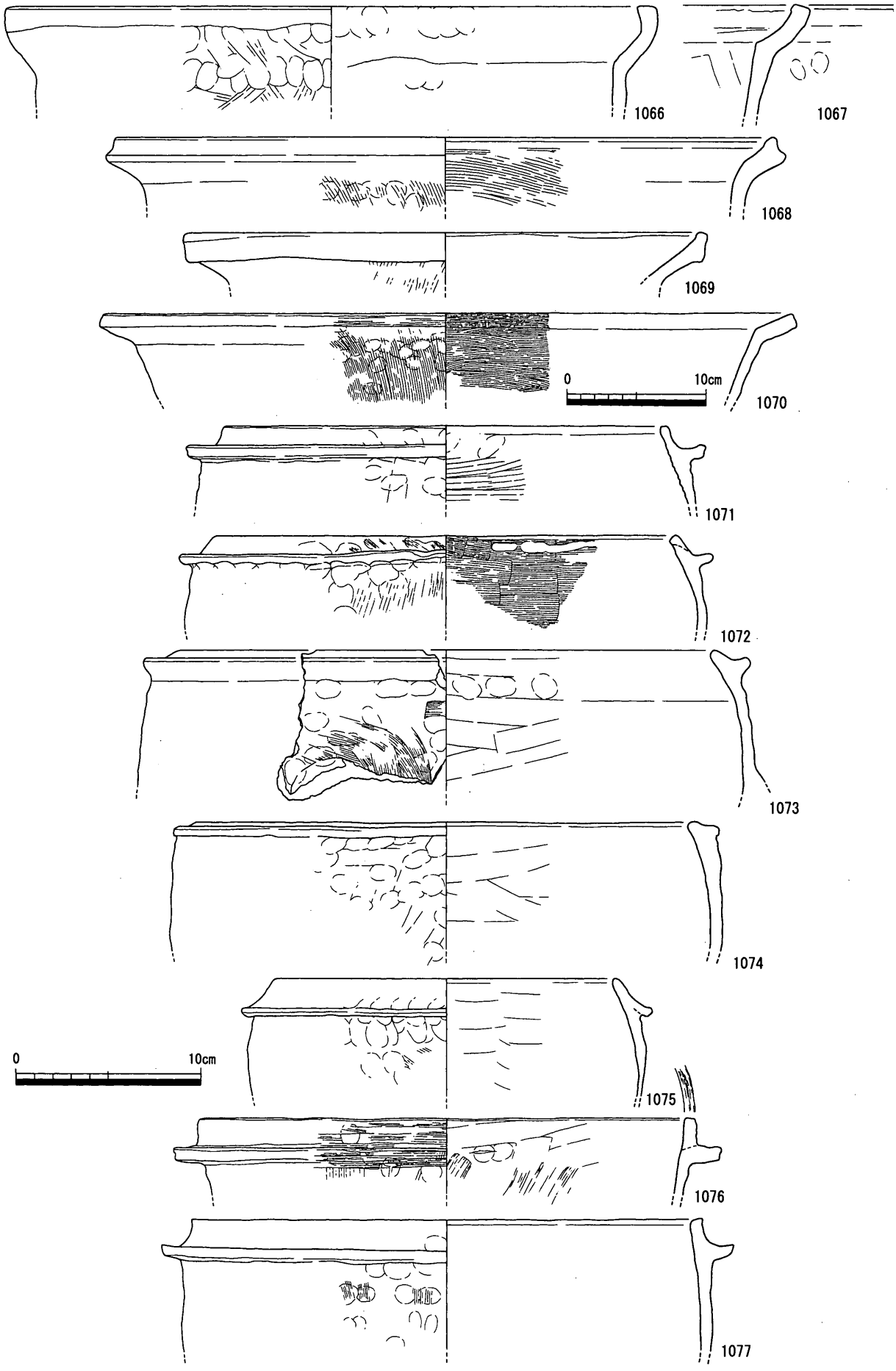
なお、出土遺物は集石とその周辺のものを含むため、確実に本遺構に伴うものであるとは言えな



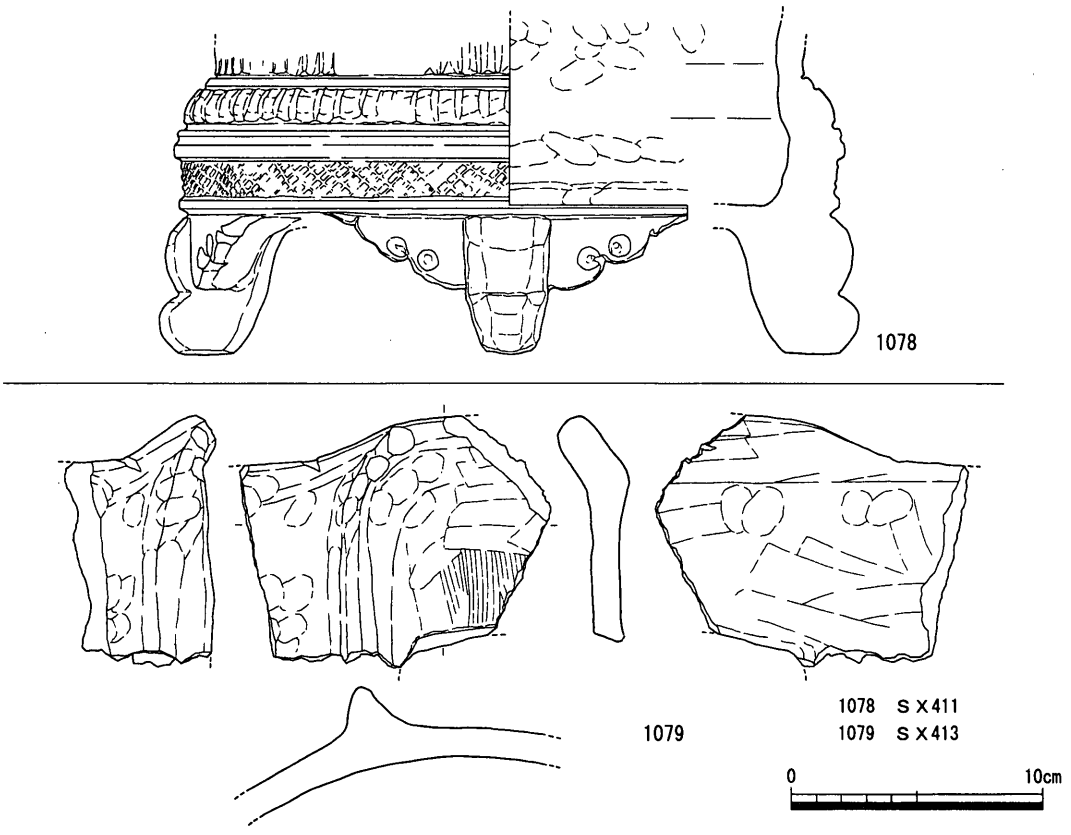
第113図　ＳＸ411出土遺物（１）



第114図　ＳＸ411出土遺物（２）



第115図　ＳＸ411出土遺物（３）



第116図　ＳＸ411出土遺物（４）、ＳＸ413出土遺物

い。

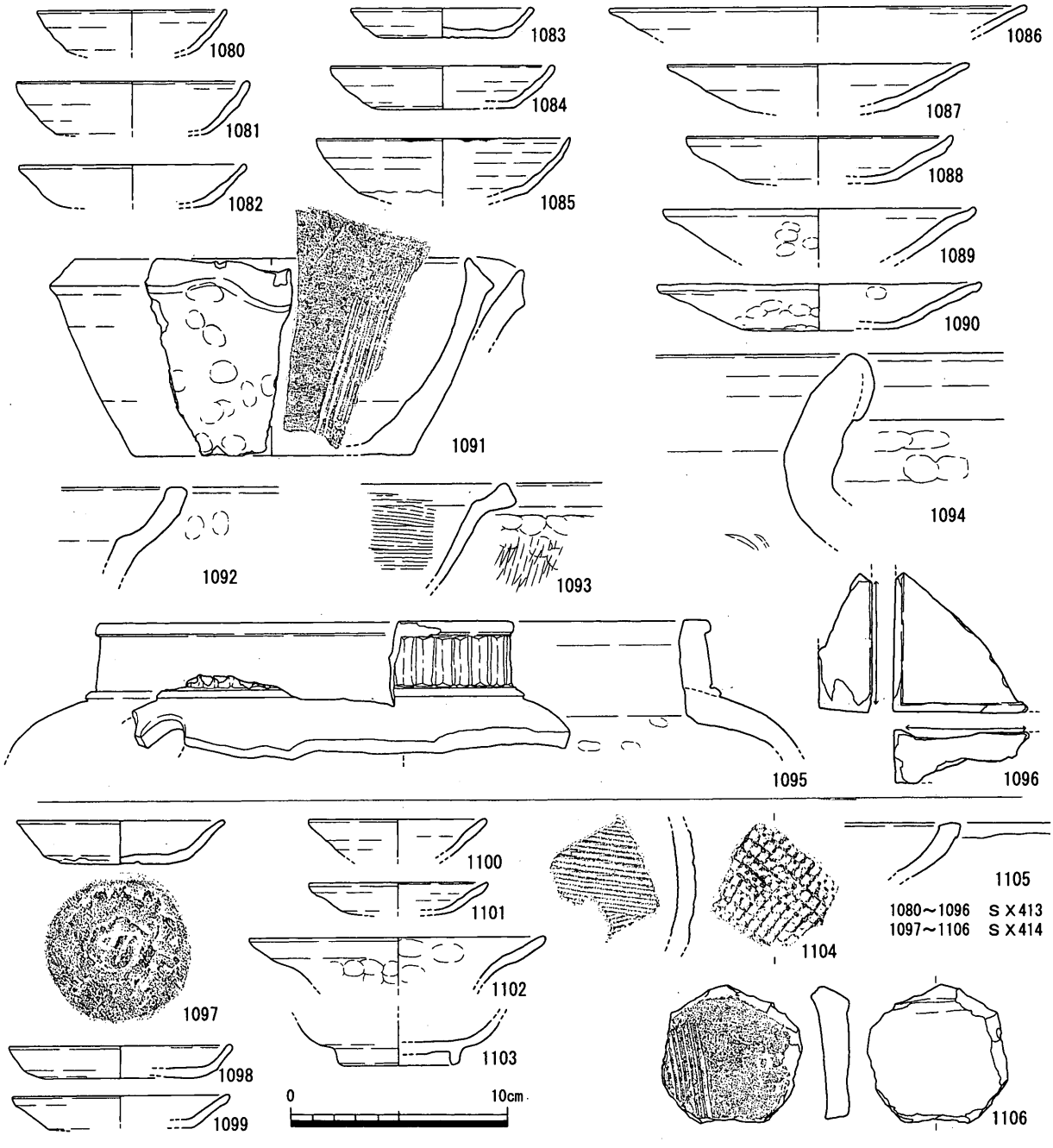
出土遺物（1001 ～ 1006）　1001 は１ｅ型式段階に形態がよく似る土師質土器杯。非「口縁部→体部ナデ手法」。1002 は「口縁部→体部ナデ手法」が確認できる１ｄ型式の土師質土器杯。1003・1004 は灰白色を呈する京都系土師器皿。ともに内面には煤が付着し、1004 の破断面ははじけたように見えることから、これらの皿は灯明皿として使用されていたことが分かる。1005 は瓦器皿。内面には粗いハケの痕跡が残る。口径・器高から尾谷 2 ～ 3 類と判断できる。1006 は瓦質土器鉢。口縁部よりやや下の体部には、ヘラケズリが施されている。鋤柄Ａ－Ⅰ類。

時期　1001・1002・1005・1006 から 14 世紀末～ 15 世紀初頭と考えられる。

ＳＸ 411（第 101・104・113 ～ 115 図）

Ｅ区中央部で検出した、南西―北東方向の溝状を呈する落ち込み状遺構。北東部では徐々に浅くなり、ＳＫ 406 との切り合い関係は不明である。

出土遺物（1007 ～ 1079）　1007・1008 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。1009 ～ 1035 は土師質土器杯。1009 は橙色を呈する１ｂ型式。1010 はロクロ目が顕著に残る１ｂ型式。内外面に煤が顕著に付着していること、器面の一部が薄く剥離していることから、灯明皿としての使用が考えられる。1011 は１ａ型式。1012 は１ｄ型式。1013 は１ｂ型式。1014 は１ａ型式に先行する佐藤ＤⅡ－６型式か。非「口縁部→体部ナデ手法」。1015 は１ｅ型式。内外面の色調はにぶい橙色。1017・1019 は３ｂ型式。1022 ～ 1025 は１ｃ型式。1028 は１ｅ型式段階より時期的に降ると思われる型式。1029・1030 は若干厚めの器壁で直線的に体部が立ち上がるタイプ。口径に対して器高が低いものの、京都系土師器皿の影響を受けた可能性もある。1033 ～ 1035 は京都系土師器皿を模倣した可能性が高いもの。1033 は見込みが凸状に盛り上がっている。



第117図　ＳＸ413・414出土遺物

1036 ～ 1041 は京都系土師器皿。在地産土器に比べ、胎土は精緻で、若干大きめの黒雲母粒が目立つ。1040 には灯明皿としての使用痕が確認できる。1042・1043 は瓦器皿。1043 にはカーボンが付着していない。二次焼成によるものか。1044 は白磁碗。1045 ～ 1050 は龍泉窯系青磁碗。1051 は瓦質土器甕。1052 は亀山窯系須恵器甕。1053 ～ 1055 は備前甕。1056 は底部のみの資料で断定はできないが、土師質土器擂鉢と思われる。ただし、軟質焼成の備前擂鉢の可能性もある。1057 ～ 1059 は東播系須恵器鉢。1057 は森田第Ⅱ期第２段階～第Ⅲ期第１段階。1058 は第Ⅲ期第２段階。軟質焼成。1059 は第Ⅲ期第３段階まで降るものか。1060 ～ 1065 は備前擂鉢。1060 は乗岡中世３ａ期。1061・1062 は中世４ａ期。1063 は中世３ｂ期。1064・1065 は中世５ａ期。1066 ～ 1070 は土師質土器鍋。1066 は佐藤ＢⅢ類。1067 はＢⅡ類。1068・1069 はＡⅡ－２類。1070 はＡⅡ－１類。

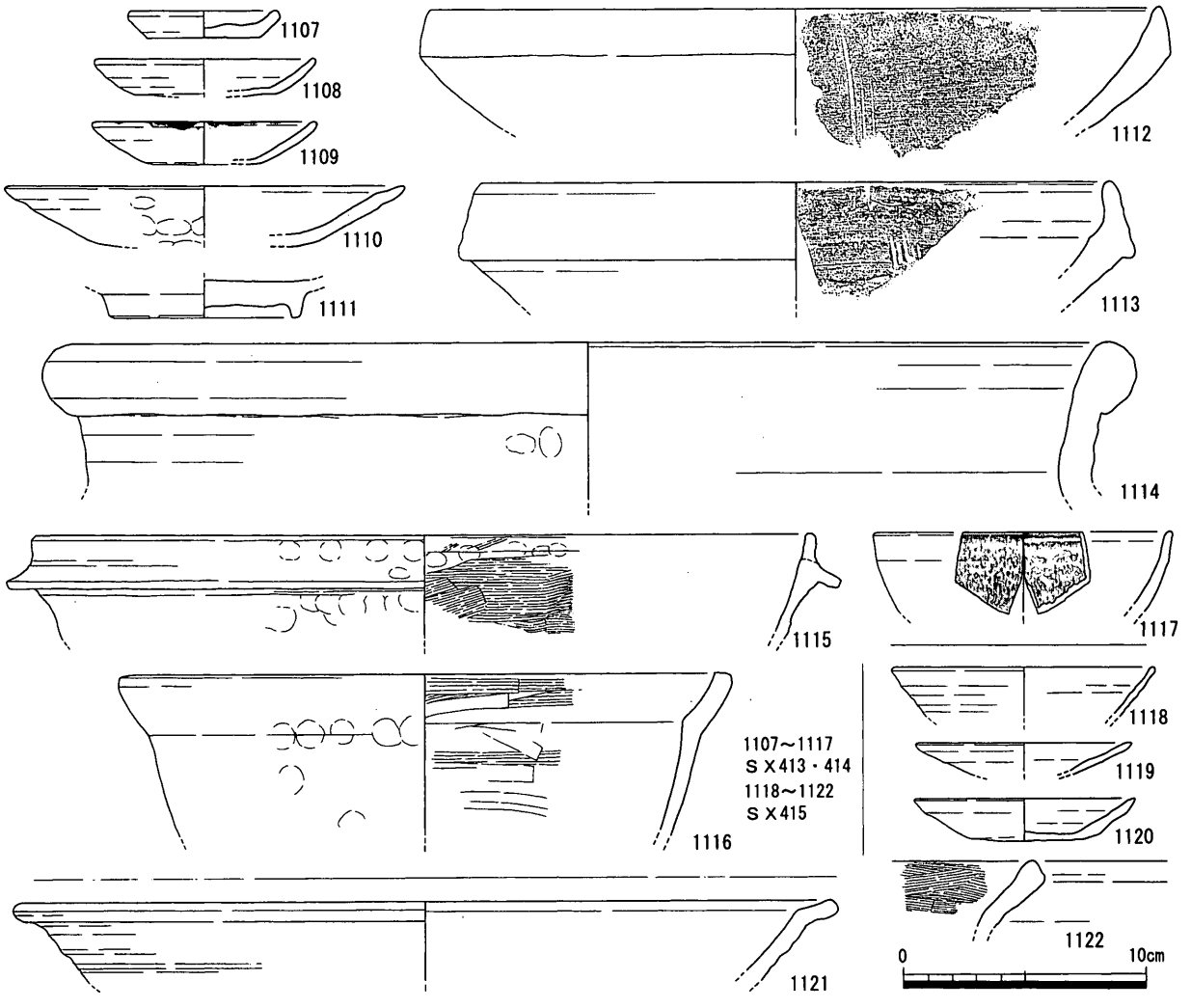
1071～1075は土師質土器足釜。1071は羽釜の可能性もある。鍔部は折り曲げにより作出されている。1072は佐藤ＢⅡ類。1073・1074は佐藤Ｃ類。1074の方が後出する形態と思われる。1073～1075は外面のみでなく、内面にも少量煤が付着している。1076・1077は土師質土器羽釜。1076は、鍔部を折り曲げによってつくり出された後、口縁部が接合され、口縁上端は板ナデによって平坦に仕上げられている。1078は瓦質土器風炉。1079は竈。

時期　出土遺物には14世紀前半のものを一部含むが、多数を占める資料から本遺構の形成時期は14世紀後半（1022～1025・1062）から15世紀後半（1028・1064・1065・1073・1074）と考えられる。

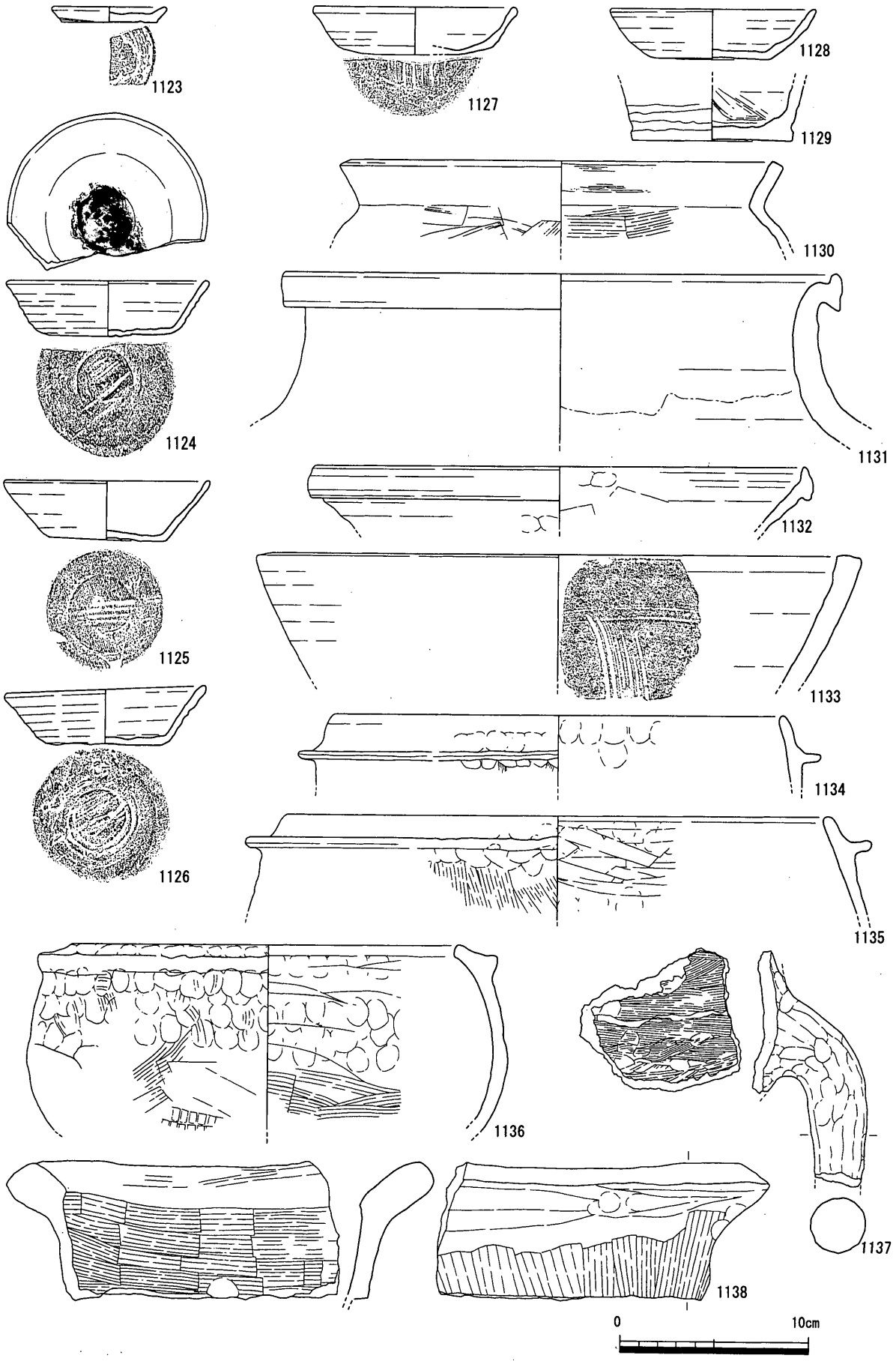
ＳＸ413・414（第101・116～118図）

ＳＸ411より南東に位置する、北東―南西方向の溝状を呈する落ち込み状遺構。出土遺物は、落ち込み部分とそれを覆う層（整地層）からの資料を含む。

ＳＸ413出土遺物（1080～1096）　1080～1087は土師質土器杯。1081は１ｂ型式。1082は１ｃ型式。1083は３ｂ型式に後続する型式か。1084・1085には灯明皿としての使用痕が残る。1086・1087は京都系土師器皿の影響を受けた土師質土器杯。1086は細片のため、口径は縮小する可能性がある。1088は明瞭な指オサエは確認できないものの、明らかな回転ナデの痕跡も残っていない



第118図　ＳＸ413・414、ＳＸ415出土遺物



第119図　ＳＸ416出土遺物

ため、京都系土師器皿と考えられる。1089・1090は京都系土師器皿。1091は乗岡中世４ａ期の備前擂鉢。焼成は須恵質に近い。1092・1093は瓦質土器鍋。1094は口縁部の玉縁が扁平な備前甕。乗岡４ｂ～５ａ期。1095は瓦質土器風炉。1096は赤色頁岩製の硯。陸部には使用痕が認められる。

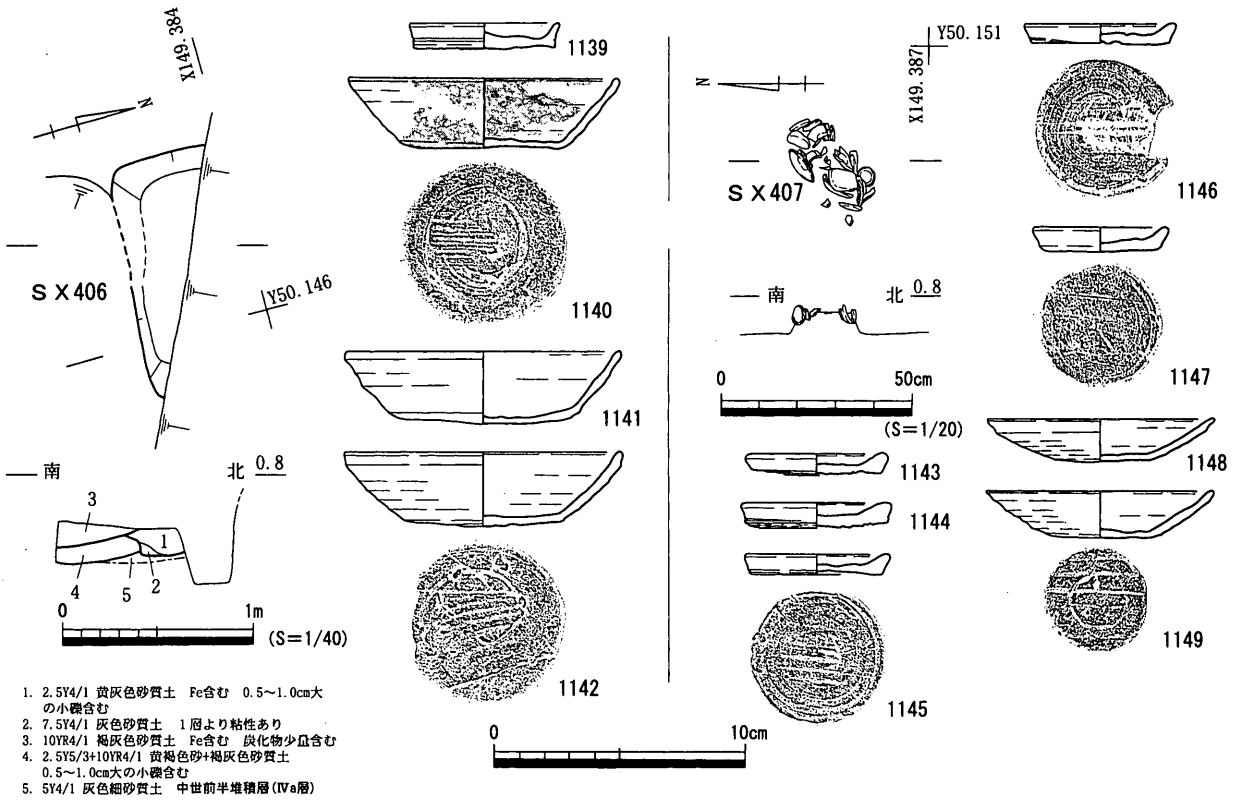
ＳＸ414出土遺物（1097～1106） 1097～1099は土師質土器杯。1097は１ｃ型式。内面には若干煤の付着が認められる。1098は５型式。1100・1101はいずれも小片であるが、京都系土師器皿と考えられる。1102は京都系土師器皿。精緻な胎土中には多量の黒雲母粒を含む。色調は浅黄橙色～黄橙色。1103は青磁碗。1104は須恵器甕。1105は瓦質焼成の鍋。1106は乗岡中世３ａ期の備前擂鉢を転用した円盤状加工品。

ＳＸ413・414出土遺物（1107～1117） 1107は土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－４型式か。1108・1109は１ｅ型式の土師質土器杯。1108には「口縁部→体部ナデ手法」の痕跡が認められる。1110は浅黄橙色の京都系土師器皿。1111は青磁碗。1112は佐藤ＡⅢ－３類の楠井産鉢。内面には煤が付着している。1113は口縁部外面に回転ナデによる凹線状の若干の窪みをもつ備前擂鉢。乗岡５ａ期。1114は備前甕。1115は土師質土器羽釜。1116は瓦質土器鍋。1117は天目茶碗。

時期 ＳＸ413は1083・1091・1094から15世紀前半～後半を中心とする時期、ＳＸ414は1098・1099から15世紀後半を中心とする時期と考えられる。

ＳＸ415（第101・118図）

Ｅ区中央部、ＳＸ411とＳＸ416に挟まれた部分で検出した、北東―南西方向の細長い落ち込み状遺構。



第120図 ＳＸ406・407平・断面図、出土遺物

出土遺物（1118～1122）　1118～1120は土師質土器杯。1118は１ａ型式。1119は１ｅ型式に後続する型式。「口縁部→体部ナデ手法」で成形されている。1120は１ｄ型式。1121は古瀬戸盤類。藤澤後期３～４。1122は土師質土器鉢。内面は口縁端部までハケが施されている。

時期　1118を除けば、おおむね14世紀末～15世紀中葉に位置づけられる。

ＳＸ416（第101・119図）

Ｅ区中央やや北よりで検出した、溝状を呈する落ち込み状遺構。

出土遺物（1123～1138）　1123は土師質土器小皿。1124～1128は土師質土器杯。1124～1126は１ａ型式。1124・1126にはロクロ目の痕跡が目立つ。1127・1128は１ｂ型式。1129は須恵器壺。1130は土師質土器甕。外面の口縁端部に煤が付着している。1131は常滑甕。1132は森田第Ⅲ期第２段階の東播系須恵器鉢。1133は備前擂鉢。乗岡中世２ｂ期。1134～1137は土師質土器足釜。1134は折り曲げによって鍔部を作出している可能性がある。1135は口縁部を成形した後に鍔部を接合する佐藤ＢⅢ類。1136は佐藤ＢⅣ類。1138は竈。

時期　15世紀にまで降りうる1136を除けば、1123～1128・1132・1133から14世紀前半埋没と考えられる。

ＳＸ406（第120図）

Ｄ区北西部で検出した立ち上がりの緩い落ち込み状の杯埋納遺構。小皿が１個体、杯が25個体以上出土した。杯25個体のうち14個体は７割以上残存している。また、ほぼ完形の1140を含む杯３個体に煤の付着が認められる。

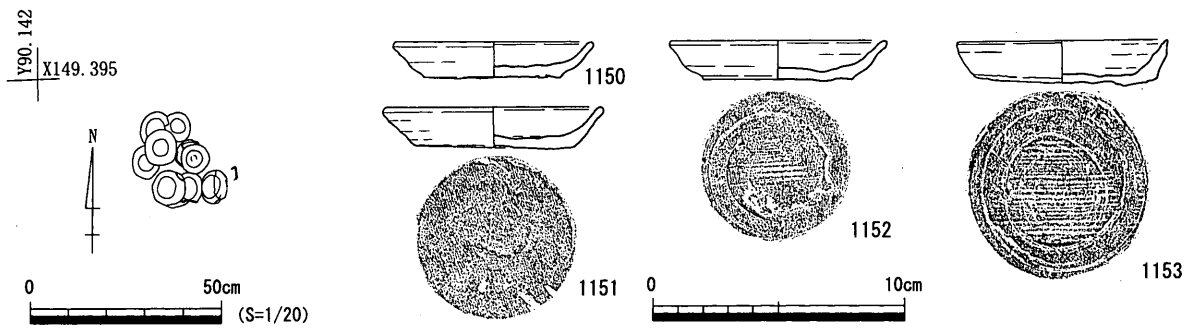
出土遺物（1139～1142）　1139は土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－５型式。1140～1142は１ａ型式の土師質土器杯。

時期　出土した杯から13世紀末～14世紀前葉と考えられる。

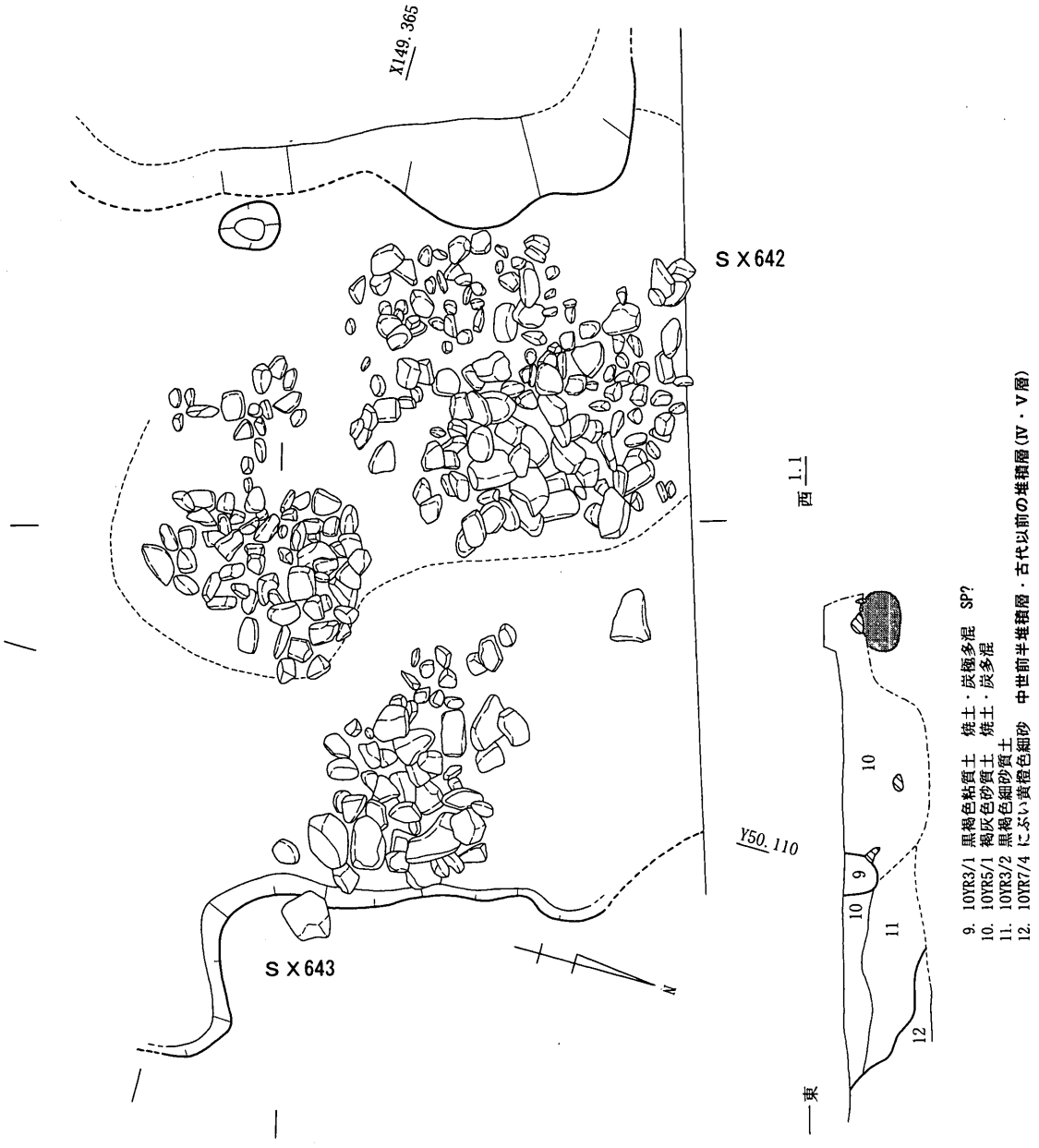
ＳＸ407（第120図）

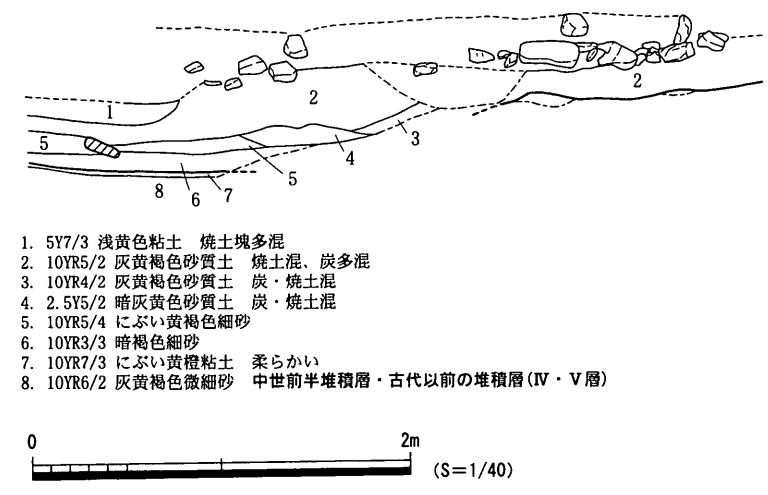
Ｄ区北部で検出した。包含層を掘り下げる途中で、集中する小皿15個体・杯５個体を検出した。ほとんどの杯・小皿が側縁部を上にして直立した状態で出土したことから、小皿・杯の出土範囲程度の平面径をもつピット状の小皿・杯埋納遺構であった可能性が高い。

出土遺物（1143～1149）　1143～1147は土師質土器小皿。つくりはかなり粗雑。1148・1149は

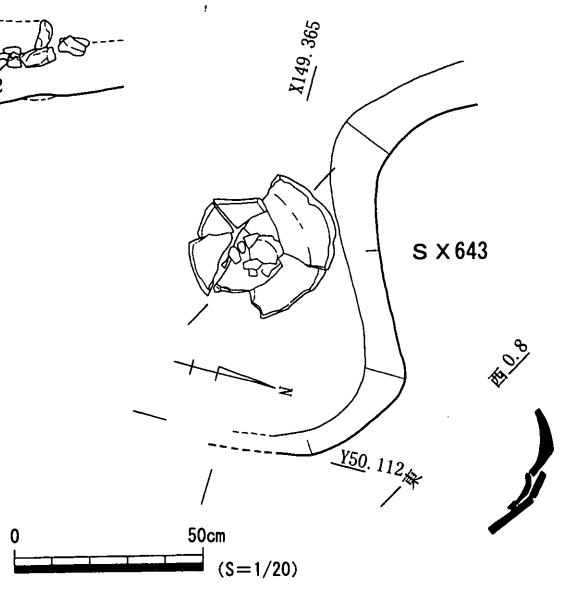


第121図　ＳＸ530平面図、出土遺物

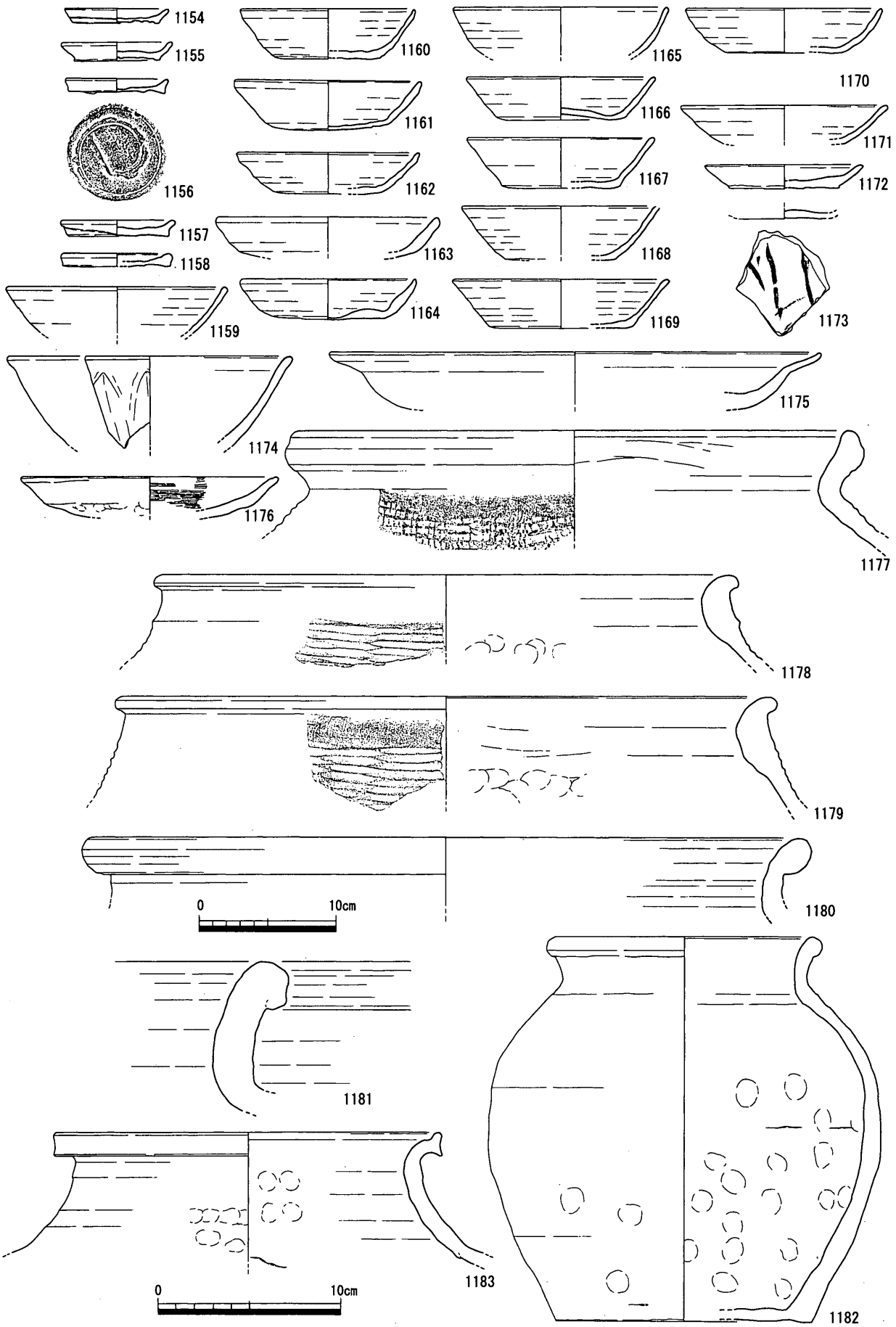




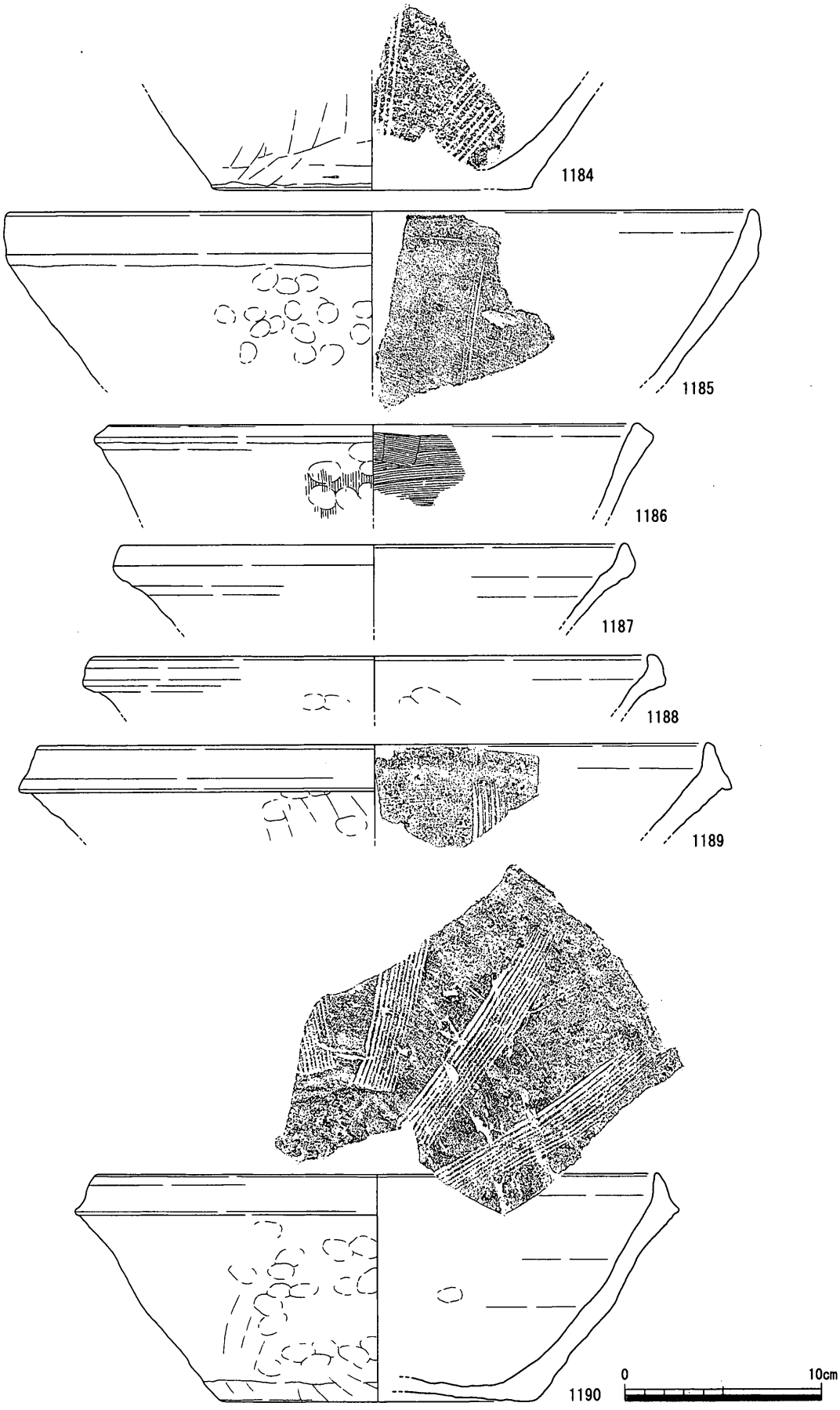
第122図　ＳＸ642・643平・断面図



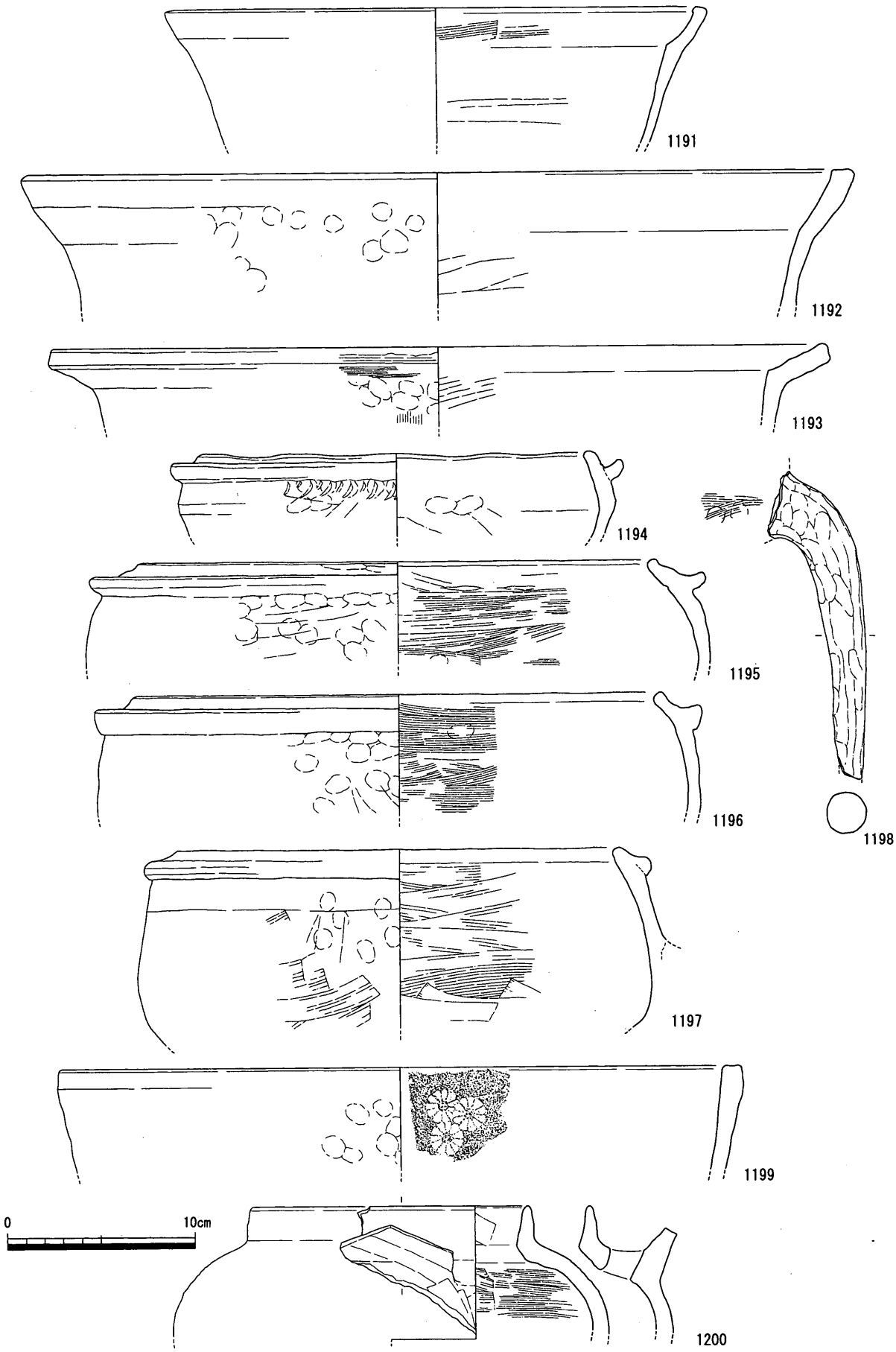
第123図　ＳＸ643遺物出土状況



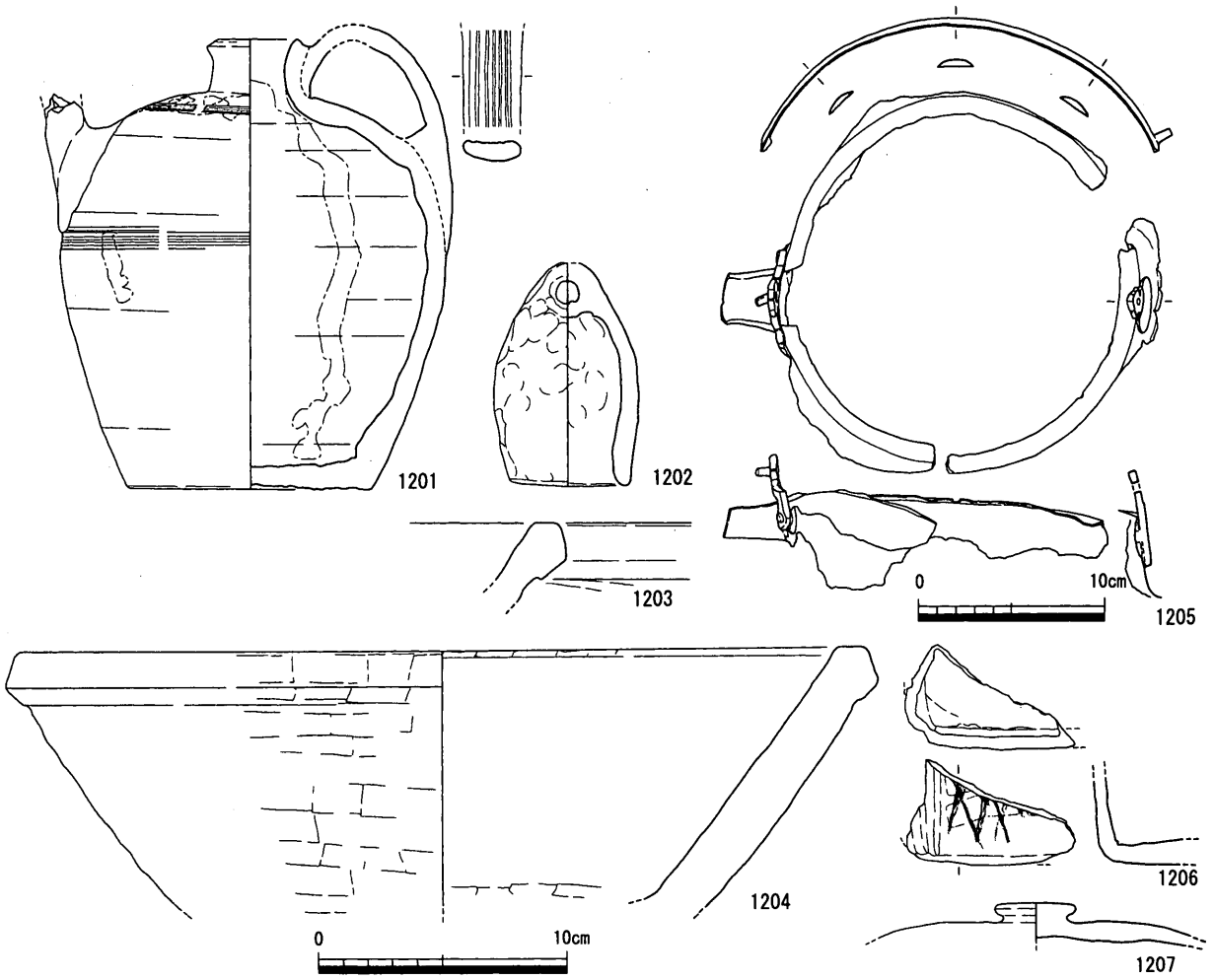
第124図　ＳＸ642出土遺物（１）



第125図　ＳＸ642出土遺物（２）



第126図　ＳＸ642出土遺物（３）



第127図　ＳＸ642出土遺物（４）

１ｅ型式の土師質土器杯。「口縁部→体部ナデ手法」の痕跡が明瞭に認められる。全ての小皿・杯はにぶい橙色～橙色を呈する。

時期　出土した杯から15世紀初頭と考えられる。

ＳＸ530（第121図）

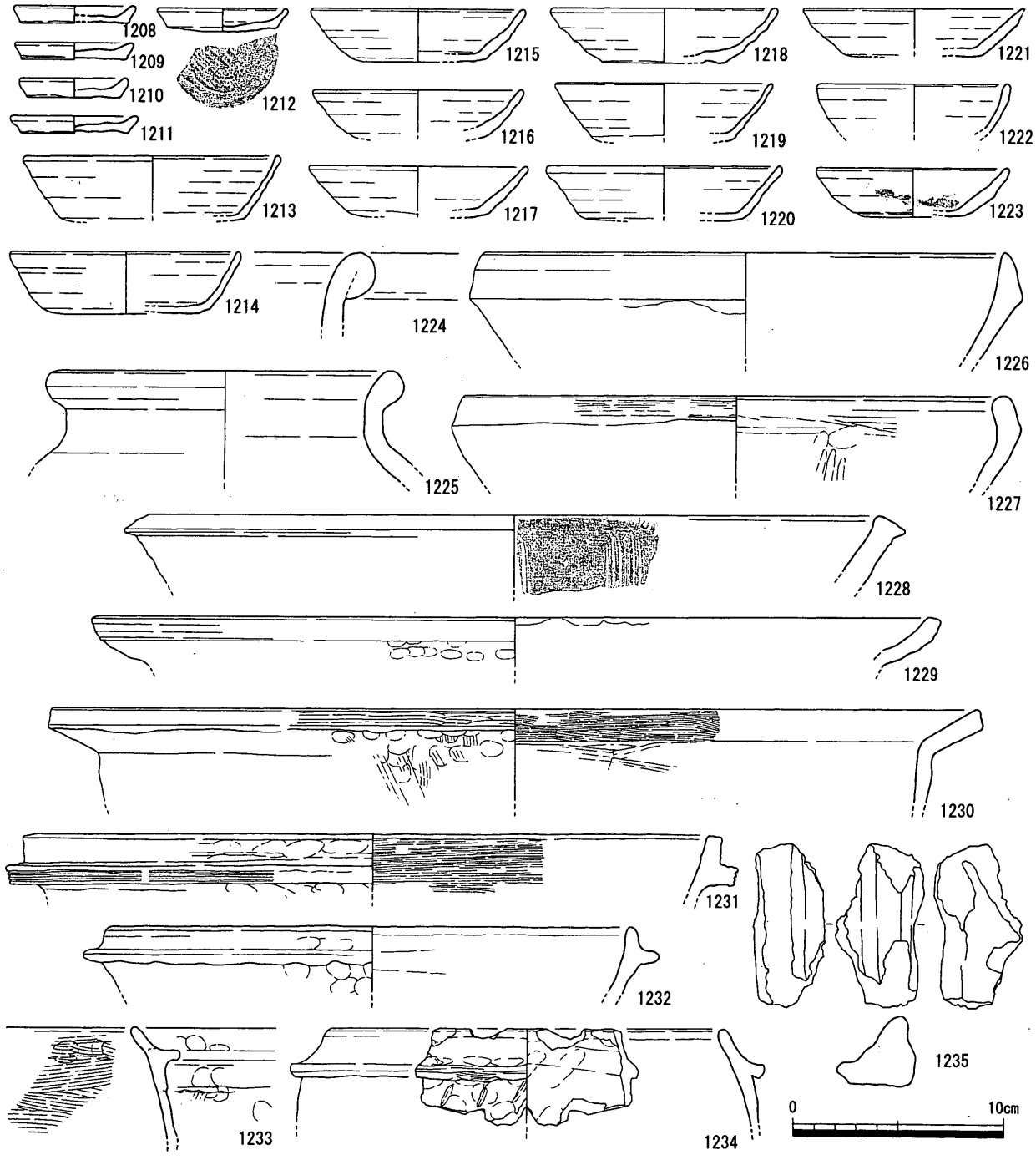
Ｇ区で検出した。ＳＸ300・407同様、包含層の掘り下げ途中に、集中する杯を検出した。杯が集中部の中央に向かって傾斜していることから、やはりピット状の掘り方をもつ杯埋納遺構であったと思われる。

出土遺物（1150～1153）　1150～1153は４形式の土師質土器杯。「口縁部→体部ナデ手法」は認められない。

時期　出土した杯から15世紀中葉以降と考えられる。

ＳＸ642・643（第122～130図）

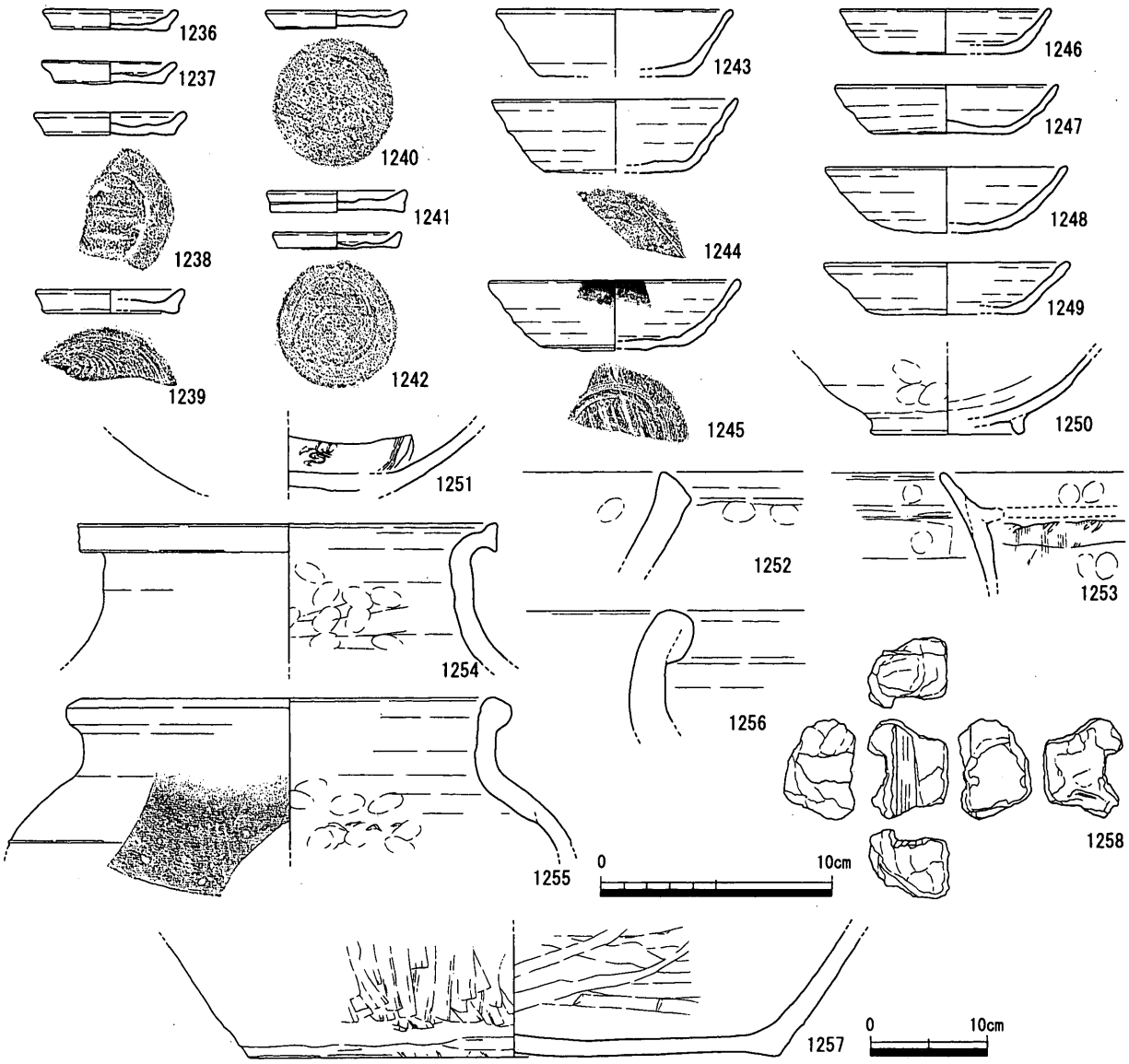
Ｈ区西部北端で検出した、不定形の落ち込み状遺構とその上位の集石遺構。落ち込み部分がある程度埋没（人為的な埋め戻しか）した後、10～30cm大板状の安山岩を主とした多量の礫が集中している。本遺構の性格は不明であるが、集石部分とその下層の埋土からは多量の土器を中心とした遺物が出土していることから、大規模な廃棄に伴って形成された遺構であると考えておきたい。



第128図　ＳＸ643出土遺物（１）

また、発掘調査段階ではＳＸ 642 の東側に隣接する落ち込み部分と集石をＳＸ 643 として調査を行ったが、集石を構成する礫がＳＸ 642 のものとほぼ同様であること、ＳＸ 642 との切り合い関係が不明瞭であることから、本来はＳＸ 642 と一連の遺構である可能性が高い。

ＳＸ 642 出土遺物（1154 ～ 1207）　1154 ～ 1158 は土師質土器小皿。いずれも佐藤ＢⅢ－５型式と考えられる。1159 は十瓶山窯系須恵器杯。1160 ～ 1172 は土師質土器杯。1167・1168・1169 は１ａ型式、1161・1166 は１ｂ型式、1162・1171 は１ｃ型式、1164 は３ｂ型式。1172 は器壁が薄いものの、５形式に形態が近似するタイプ。1173 は墨書が認められる土師質土器底部片。1174 は青

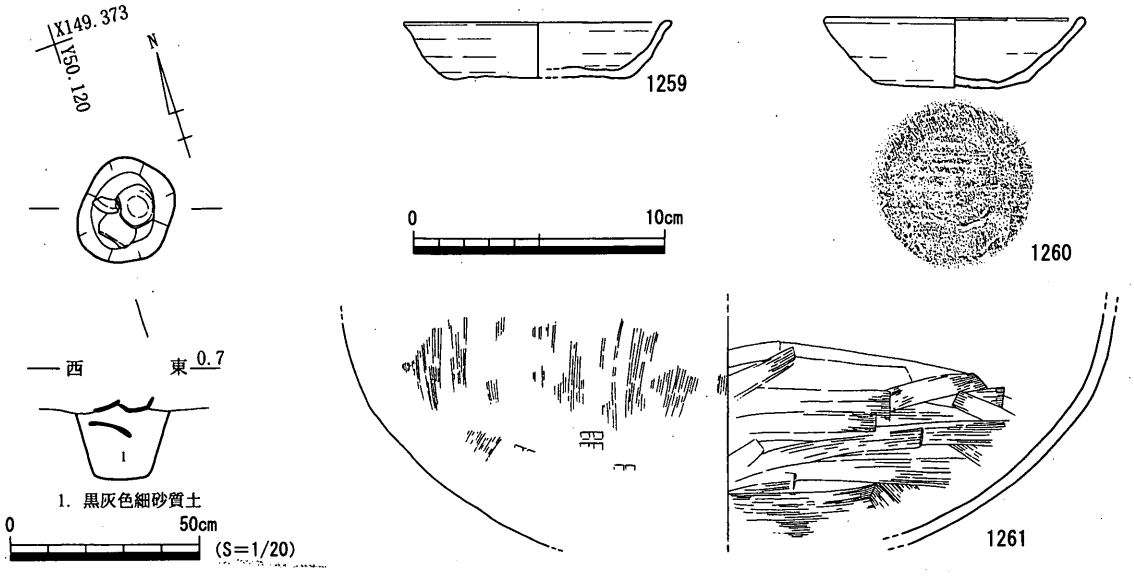


第129図　ＳＸ643出土遺物（２）

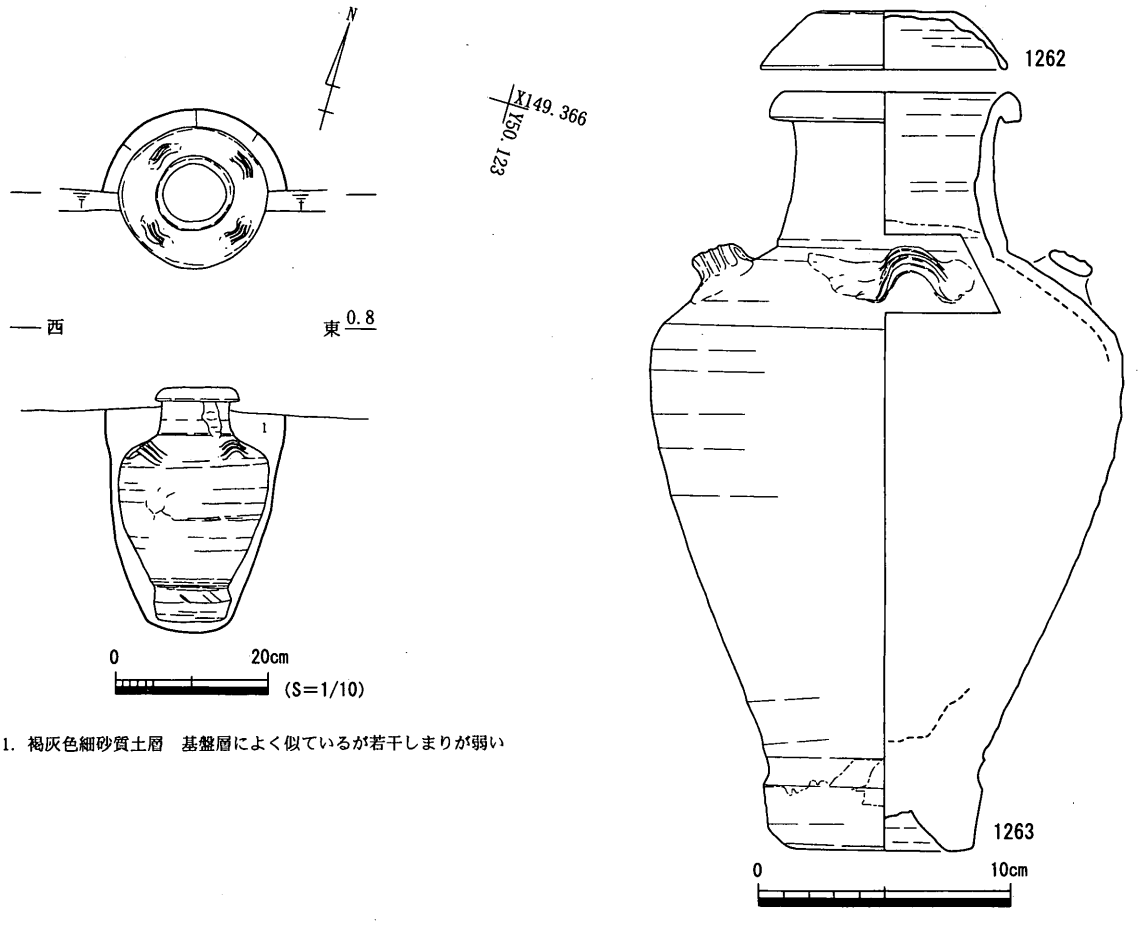
磁碗。1175は白磁皿。1176は瓦器皿。1177は土師質土器甕。1178・1179は瓦質土器甕。1180・1181は備前甕。1180は乗岡中世３ａ期、1181は中世４ａ～４ｂ期。1182は備前壺。乗岡中世３ｂ期。1183は常滑甕。1184は土師質土器鉢。1185は佐藤ＢＩ類の須恵質焼成楠井産擂鉢。1186は須恵器鉢か。1187・1188は森田第Ⅲ期第２段階の東播系須恵器鉢。1189・1190は備前擂鉢。1189は乗岡中世４ｂ～５ａ期、1190は中世４ｂ期。1191は瓦質土器鍋。1192・1193は土師質土器鍋。1194～1198は土師質土器足釜。1199は瓦質土器火鉢。1200は瓦質土器茶釜。1201は藤澤中期１の古瀬戸水注。内面には、部分的に口縁部から流れ込んだ灰オリーブ色の釉が認められる。1202は飯蛸壺。吊手部上端部は丸みを帯びている。1203・1204は滑石製石鍋。木戸Ⅲ類－ｅ－２。1205は銅製の鍋。取手取り付け部外面には菊の文様が施されている。1206は志野向付小片。1207は須恵器蓋。1206・1207は本遺構に伴うものではないだろう。

ＳＸ643出土遺物（1208～1258）　1208～1234はＨ区ＳＸ23として、1236～1257はＨ区ＳＸ24として取り上げを行ったもの。ここでは取り上げの単位ごとに報告する。

1208 ～ 1212 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。1213 ～ 1223 は土師質土器杯。1213・1214・1219 は１ａ型式（佐藤ＤⅡ－７型式）。1215 ～ 1218 は１ｂ型式。器壁がやや厚く、「口縁部→体部ナデ手法」の痕跡が明瞭に残る 1221 は１ｃ型式。1224・1225 は備前壺。1226 は佐藤ＡⅢ類の楠井窯産擂鉢。軟質の須恵質焼成。1227 は土師質土器擂鉢。1228 は備前擂鉢。乗岡中世３ａ期。



第130図　ＳＰ0034平・断面図、出土遺物



第131図　ＳＰ0200平・断面図、出土遺物

1229・1230は土師質土器鍋。1231・1232は土師質土器羽釜。1233・1234は土師質土器足釜。いずれも佐藤ＢⅣ類。1235は竈。

1236～1242は土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－５型式。1242の底部はかなり薄い。1243～1249は土師質土器杯。1243・1244は佐藤ＤⅡ－６型式か。1245は１ａ型式。1246は３ｂ型式。1247・1249は１ｃ型式。1250は吉備系土師質土器椀。山本Ｃ２類。1251は龍泉窯系青磁碗。1252は乗岡中世３ａ期の備前擂鉢。1253は土師質土器足釜。1254は常滑甕。1255は備前壺。頸部直下にタタキ？の痕跡が確認できる。1256は備前壺。1257は乗岡中世３ａ～３ｂ期の備前甕底部。上部は欠損しているが、据えられたような状態で出土した。なんらかの目的で設置されていたが、底部より上位は後世の撹乱によって破壊されたものと考えられる。1258は壁土か。２面に平坦面をもつ窪みが認められる。

時期　ＳＸ642出土遺物は13世紀末（1160・1168・1169）～15世紀後半（1172・1185・1203・1204）、ＳＸ643出土遺物は13世紀末（1243・1244）～14世紀末（1246）を示すが、前述のとおりＳＸ642・643と同一遺構であると考えられるため、一括して13世紀末～15世紀後半と捉えたい。

ピット（ＳＰ）

ＳＰ0034（第130図）

Ａ区北西部で検出したピット。底部から浮いた状態で土師質土器杯が２個体出土した。埋土からの判断はできなかったが、遺構の性格上、埋土は人為的な埋め戻し土である可能性が高く、２個体の杯は埋め戻し途中に埋納されたと考えられる。

出土遺物（1259～1261）　1259は３ａ型式、1260は１ｃ型式の土師質土器杯であるが、いずれも形態的にはやや遡る型式の可能性がある。1261は土師質土器足釜。外面のみでなく、底部内面にも煤が付着している。

時期　1259・1260から14世紀後半でも早い段階であると考えられる。

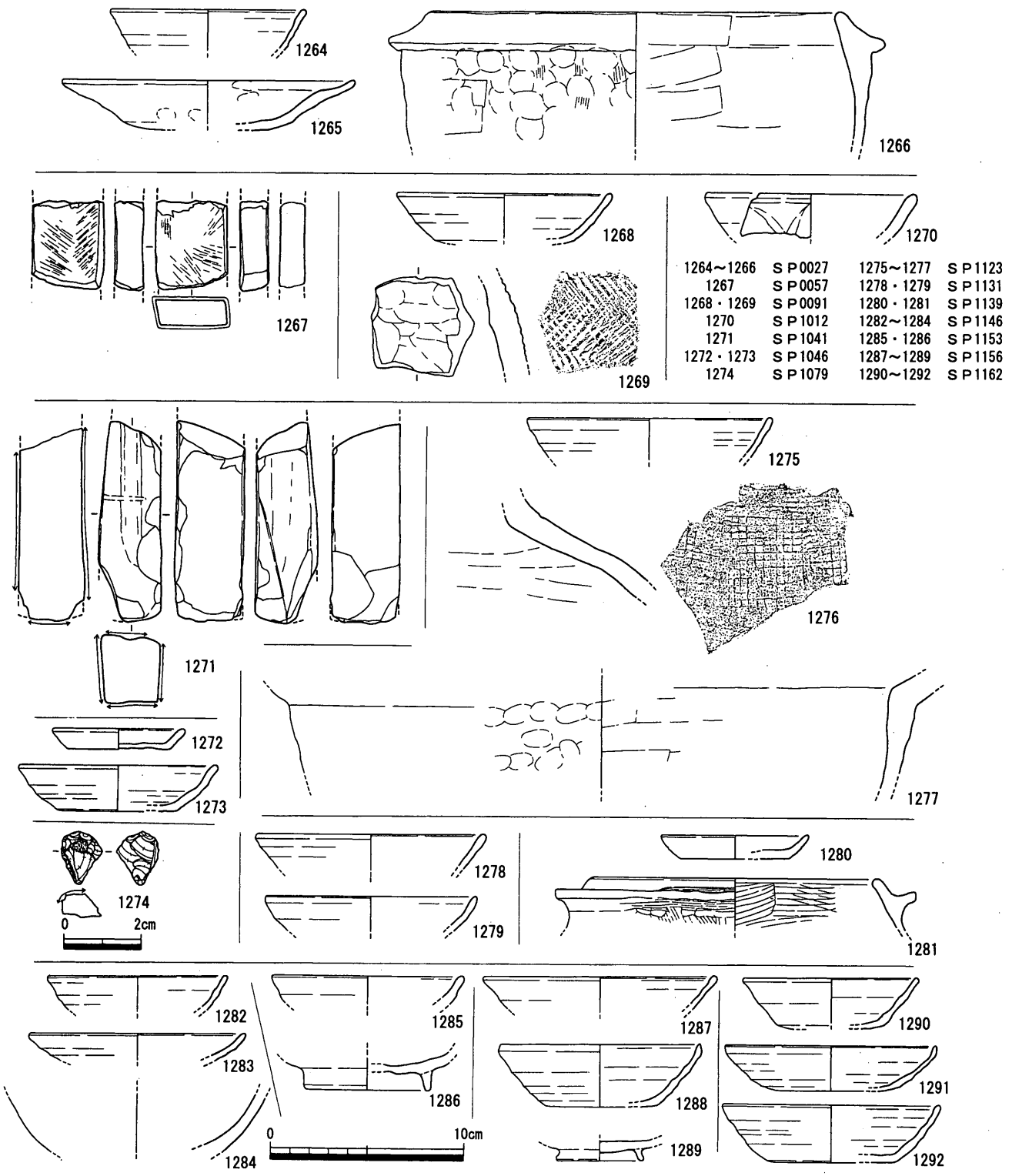
ＳＰ0200（第131図）

完形の白磁四耳壺が直立状態で埋納されていたピット。四耳壺内部と四耳壺外の土師質土器杯が接合して１個体となるため、本来は四耳壺口縁部上に杯が置かれていたと考えられる。これらの状況から四耳壺は骨臓器として埋められていた可能性が高いが、四耳壺内に堆積した土中からは前述の杯片以外の遺物は確認できなかった。

また、本遺構は区画溝ＳＤ009下層の北岸がある程度埋まり、掘削当初よりも溝幅は狭小になっている段階（区画溝としては機能している）で掘り込まれている。本遺構形成時点でのＳＤ009下層の北岸際に埋葬しようとした意図が読みとれる。

出土遺物（1262・1263）　1262は１ｂ型式の土師質土器杯。1263は白磁四耳壺。頸部の一部表面を打ち欠いた痕跡が認められる。また、高台畳付はかなりすり減っており、骨臓器として埋納される以前に別の目的で長期に渡って使用されたことを示している。

時期　1262から14世紀第２四半期と判断できる。



第132図　A・B区ピット出土遺物

ＳＰ 0027（第 132 図）

出土遺物（1264 ～ 1266）　1264 は土師質土器杯。1265 は京都系土師器皿。1266 は土師質土器足釜。佐藤ＢⅢ類。

時期　1265・1266 から 14 世紀後半と考えられる。

ＳＰ 0057（第 132 図）

出土遺物（1267） 1267 は板状の安山岩製砥石。折損している小口２面以外の４面すべてに使用痕が確認できる。擦痕の方向は一定ではない。

時期 時期決定可能な遺物は出土していないが、周辺遺構の状況から、中世段階の遺構であると考えられる。

ＳＰ 0091（第 132 図）

出土遺物（1268・1269） 1268 は１ｂ型式の土師質土器杯。1269 は土師質土器甕。焼成不良の須恵器の可能性もある。

時期 1268 から 14 世紀第２四半期と考えられる。

ＳＰ 1012（第 132 図）

出土遺物（1270） 1270 は龍泉窯系青磁碗。

時期 断定するのは困難であるが、13 世紀末～ 14 世紀前葉までの埋没と考えられる。

ＳＰ 1041（第 132 図）

出土遺物（1271） 断面が正方形に近い長方形の方柱状を呈する砂岩製の砥石（1271）が出土している。長軸方向の２面はいずれも折損しており確認できないが、その他の４面については使用した痕跡が残っている。うち１面には緩やかな窪みが認められる。その他の遺物は細片のため図化していないが、中世と考えられる土師質土器杯３点と須恵器甕１点がある。

時期 土師質土器杯・須恵器甕細片から中世と判断できるものの、詳細な時期は不明である。

ＳＰ 1046（第 132 図）

出土遺物（1272・1273） 1272 は土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－４型式。1273 は１ｂ型式の土師質土器杯。

時期 1273 から 14 世紀第２四半期と判断できる。

ＳＰ 1079（第 132 図）

出土遺物（1274） 青緑色系チャート製の火打石（1274）が出土している。その他土師質土器杯２点（14 世紀代か）と煮沸具細２点が出土しているが、細片のため図化は行っていない。

時期 土師質土器片から 14 世紀代と考えられるが、細片のため詳細な時期は不明である。

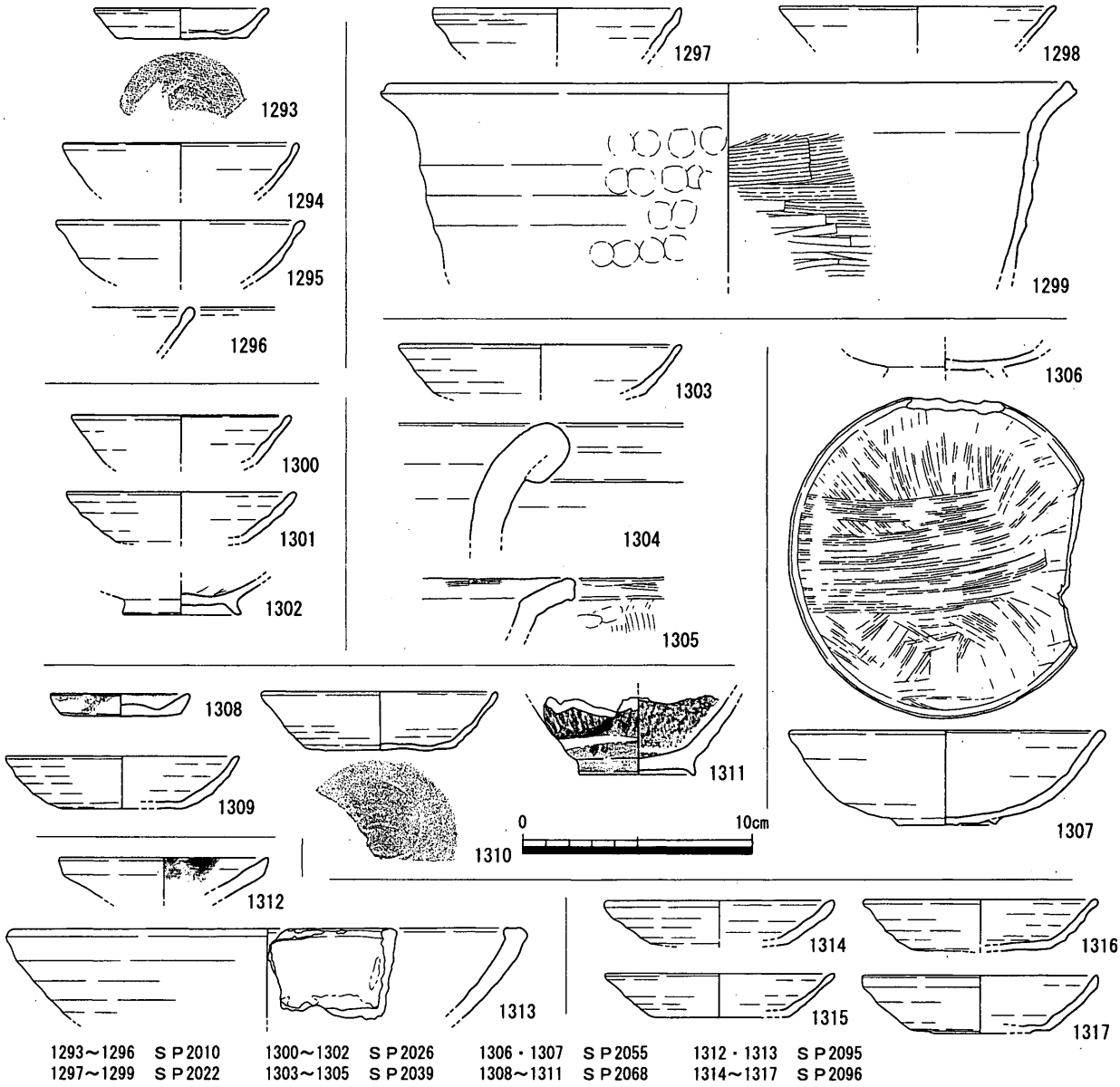
ＳＰ 1123（第 132 図）

出土遺物（1275 ～ 1277） 1275 は土師質土器杯。1276 は須恵器甕。1277 は土師質土器鍋。

時期 小破片のため時期決定が困難であるが、1275 から 13 世紀末～ 14 世紀前葉としておきたい。

ＳＰ 1131（第 132 図）

出土遺物（1278・1279） 1278・1279 は土師質土器杯。1278 は浅黄橙色を呈する。



第133図　Ｃ区ピット出土遺物

時期　1278と1279はともに小破片で時期決定は困難であるが、色調などから14世紀前半としておきたい。

ＳＰ 1139（第132図）

出土遺物（1280・1281）　1280は橙色の土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－５型式。1281は土師質土器足釜。佐藤ＢⅡ類か。

時期　1280・1281から13世紀末～14世紀前葉と考えられる。

ＳＰ 1146（第132図）

出土遺物（1282～1284）　1282・1283は土師質土器杯。1283は１ｄ～１ｅ型式。1284は龍泉窯

系青磁碗。

時期　小破片のため時期決定は難しいが、1283から14世紀末～15世紀初頭と考えたい。

ＳＰ1153（第132図）

出土遺物（1285・1286）　1285は土師質土器杯。1286は備前系土師質土器椀。高台は細身で高く、高台径が6.3cm。山本Ｃ１類か。

時期　小片の資料であるが、1285から14世紀代と判断できる。1286に限らず、吉備系土師質土器椀は、やや降る時期の遺構から出土する例が多く見られる。

ＳＰ1156（第132図）

出土遺物（1287～1289）　1287・1288は土師質土器杯。いずれも１ａ型式（佐藤ＤⅡ－７型式）もしくは若干先行する佐藤ＤⅡ－６型式。1289はＣ２類の吉備系土師質土器椀。

時期　1287～1289から13世紀末と考えられる。

ＳＰ1162（第132図）

出土遺物（1290～1292）　1290～1292は土師質土器杯。1291は１ｂ型式、1292は１ａ型式。

時期　1291・1292から14世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＰ2010（第133図）

出土遺物（1293～1296）　1293は佐藤ＢⅢ－４型式の土師質土器小皿。1294～1296は土師質土器杯。1294・1295は１ａ～１ｂ型式。

時期　1293～1295から14世紀前半に比定できる。

ＳＰ2022（第133図）

出土遺物（1297～1299）　1297・1298は土師質土器杯。1299は土師質土器鍋。外面のみでなく、内面下半部にも若干煤が付着している。

時期　小片のため時期決定は困難であるが、1297・1298から14世紀前半としておきたい。

ＳＰ2026（第133図）

出土遺物（1300～1302）　1300は１ｂ型式、1301は１ｃ型式の土師質土器杯。1301の内外面は橙色である。1302は吉備系土師質土器椀。山本Ｃ２類と考えられるが、高台径が5.0cmと矮小なためＣ３類まで降る可能性もある。

時期　1300・1301から14世紀中葉～後半に比定できる。

ＳＰ2039（第133図）

出土遺物(1303～1305)　1303は３形式の土師質土器杯。1304は乗岡中世４ａ期の備前甕。1305は土師質土器鍋。

時期　1304から15世紀前葉と考えられる。

ＳＰ 2055（第 133 図）

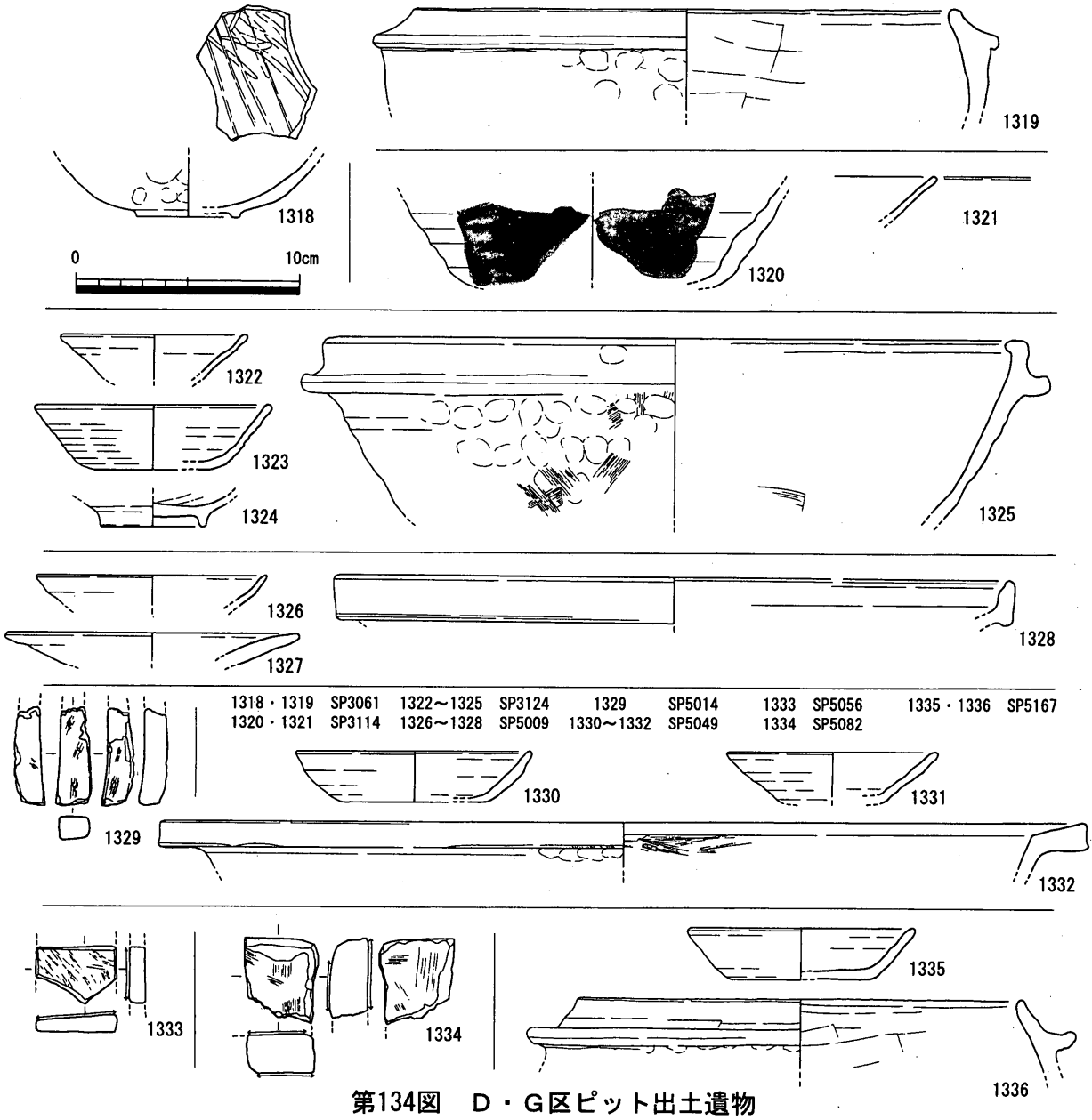
出土遺物（1306・1307） 1306 は高台を欠損している吉備系土師質土器椀。1307 はほぼ完形の十瓶山窯系須恵器椀。

時期 1307 から 13 世紀後半と考えられる。

ＳＰ 2068（第 133 図）

出土遺物（1308 ～ 1311） 1308 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器小皿。1309・1310 は１ｂ型式の土師質土器杯。1311 は古瀬戸天目茶碗。二次焼成のためか色調が変化し、釉がかかっている部分については多数の気泡がはじけたように見える。藤澤中期２。

時期 1309 ～ 1311 から 14 世紀前半と考えられる。



第134図　Ｄ・Ｇ区ピット出土遺物

ＳＰ 2095（第 133 図）

出土遺物（1312・1313） 1312 はにぶい橙色の土師質土器杯。明瞭に「口縁部→体部ナデ手法」の痕跡が認められる。1313 は古瀬戸鉢。

時期 1312 の口径・器高から、15 世紀中葉～後半に位置づけられる。

ＳＰ 2096（第 133 図）

出土遺物（1314 ～ 1317） 1314 ～ 1317 は１ｃ型式の土師質土器杯。ただし、1314・1315 は１ｄ型式にまで降る可能性を含む。

時期 1314 ～ 1317 から 14 世紀後半と考えられる。

ＳＰ 3061（第 134 図）

出土遺物（1318・1319） 1318 は和泉型瓦器椀。1319 は土師質土器足釜。佐藤ＢⅣ類。内面下部に煤の付着が認められる。

時期 1318 と 1319 の帰属時期には差があるが、後出する 1319 から 14 世紀末～ 15 世紀前葉埋没の遺構と判断したい。

ＳＰ 3114（第 134 図）

出土遺物（1320・1321） 1320 は大型の土師質土器杯。内外面にタール状の付着物が顕著に認められる。1321 は土師質土器杯小片。

時期 1321 は小片で型式の判断に苦慮するが、色調・回転ナデの雰囲気から 14 世紀前半～中葉に比定することが可能で、本遺構の埋没時期を同時期と考えたい。

ＳＰ 3124（第 134 図）

出土遺物（1322 ～ 1325） 1322・1323 は土師質土器杯。1323 は１ａ型式。1324 は吉備系土師質土器椀。山本Ｃ３類。1325 は土師質土器羽釜。

時期 1323 より若干時期が降る可能性のある 1322 から 13 世紀末～ 14 世紀前半と考えられる。

ＳＰ 5009（第 134 図）

出土遺物（1326 ～ 1328） 1326 は土師質土器杯小片。1327 は京都系土師器皿。1328 は森田第Ⅲ期第２段階の東播系須恵器鉢。

時期 1326・1327 から 15 世紀代と考えられる。

ＳＰ 5014（第 134 図）

出土遺物（1329） 1329 は緻密な凝灰岩製の砥石。長軸の１面は破断面で残り５面中３面に使用痕が確認できる。残存面間の計測値は 1.4cm、1.3cm、破断面・残存面間は 5.2cm で、本来は柱状の直方体であった可能性が高い。砥石に共伴して土師質土器杯片６点が出土し、うち１点は 14 世紀前半頃と考えられる土師質土器杯口縁部細片、２点は回転ヘラ切り痕が残る底部片、３点は細片である。その他、煮沸具２点と陶胎染付碗小片１点が出土している。

時期 土器・陶器の出土状況から陶胎染付碗小片を混入遺物とし、本遺構は中世段階のピットと

判断できる。さらに、唯一時期決定可能な土師質土器杯から14世紀前半頃と考えられるが、小片であるため詳細な時期決定には問題を残す。

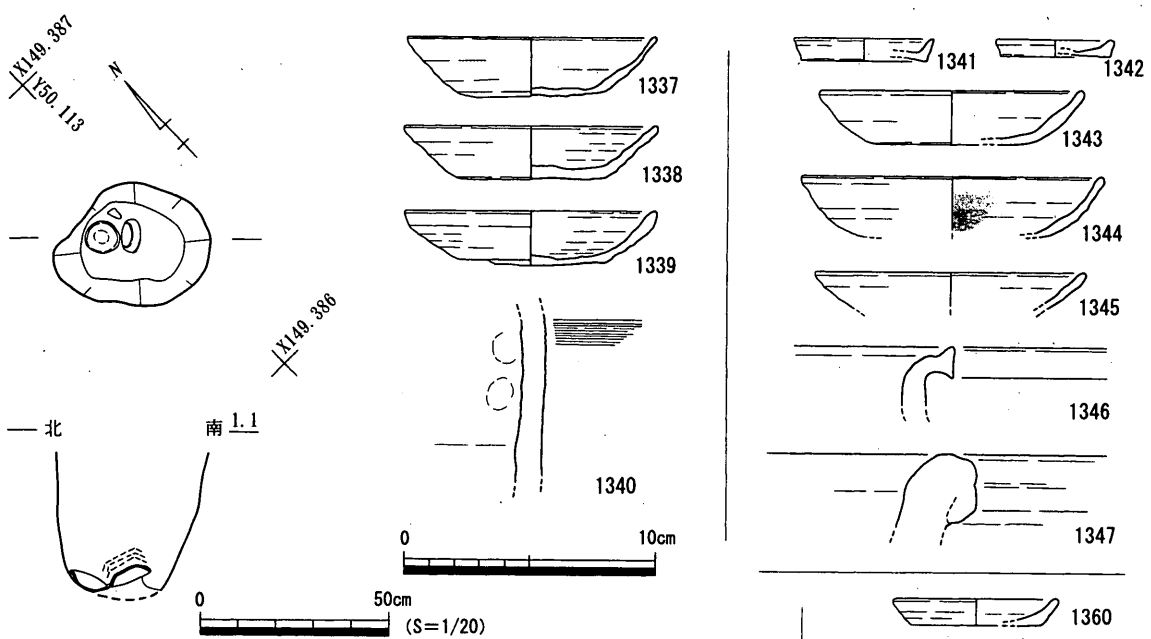
ＳＰ 5049（第134図）

出土遺物（1330～1332） 1330・1331は土師質土器杯。1330は3ａ型式。1332は土師質土器鍋。

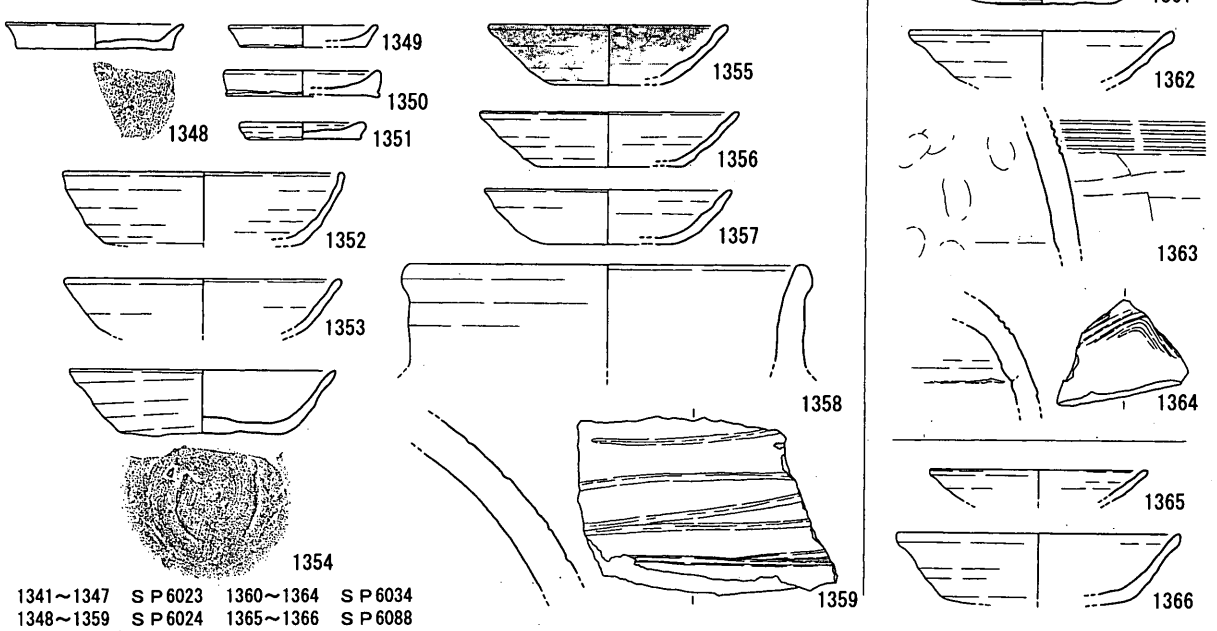
時期 1330から14世紀後半頃と考えられる。

ＳＰ 5056（第134図）

出土遺物（1333） 1333は安山岩製の砥石が出土している。形状は板状を呈するが、454・2302



第135図　SP6011平・断面図、出土遺物



1341～1347　ＳＰ6023　1360～1364　ＳＰ6034
1348～1359　ＳＰ6024　1365～1366　ＳＰ6088

第136図　Ｈ区ピット出土遺物

に見られる鋸による切断痕は確認できない。残存面４面中１面に使用痕が確認できる。

共伴遺物は中世段階のものと考えられる土師質土器杯細片が７点、土師質土器羽釜底部細片が出土している。

時期　杯細片はいずれも橙色系であることから 14 世紀末～ 15 世紀代の可能性が高く、本遺構の埋没時期の同時期と考えられる。

ＳＰ 5079

出土遺物　図化は行っていないが、青緑色系チャート製の火打石が１点出土している。共伴遺物は土師質土器杯細片２点、土師質土器の細片２点（内１点は胎土に径 5.0mm 程度の砂粒を多く含むことから煮炊具の可能性がある）のみである。

時期　出土土器が細片であるため、本遺構の時期決定は困難である。ただし、土師質土器杯の色調・胎土は中世のものに類似することから、本遺構は中世段階のものと判断しておく。

ＳＰ 5082（第 134 図）

出土遺物（1334）　1334 は安山岩製の砥石。４つの残存面中相対する２面に使用痕が確認できる。使用面間の計測値は 1.7cm、残り２つの残存面・破断面間は 3.1cm、3.5cm であり、本来は板状であったと考えられる。

共伴遺物は、中世の土師質土器杯口縁部細片、土師器甕口縁部片、瓦器椀細片、青磁細片、備前甕小片、産地不明（瀬戸・美濃系？）磁器小杯片、土師質土器煮沸具？片２点、土師質土器杯細片１点である。

時期　土器・陶磁器の出土状況から、磁器小杯小片を混入として、本遺構は中世に帰属するものと考えたい。

ＳＰ 5167（第 134 図）

出土遺物（1335・1336）　1335 は１ｂ型式の土師質土器杯。1336 は土師質土器足釜。佐藤ＢⅡ類。

時期　1335・1336 から 14 世紀第２四半期と考えられる。

ＳＰ 6011（第 135 図）

ピット内底部から、完形の土師質土器杯が 12 個体底部を上に向け、重ねられた状態で出土した。土師質土器杯埋納遺構と考えられる。いずれも煤の付着は認められない。

出土遺物（1337 ～ 1340）　1337 ～ 1339 は１ｃ型式の土師質土器杯。1340 は須恵器甕。

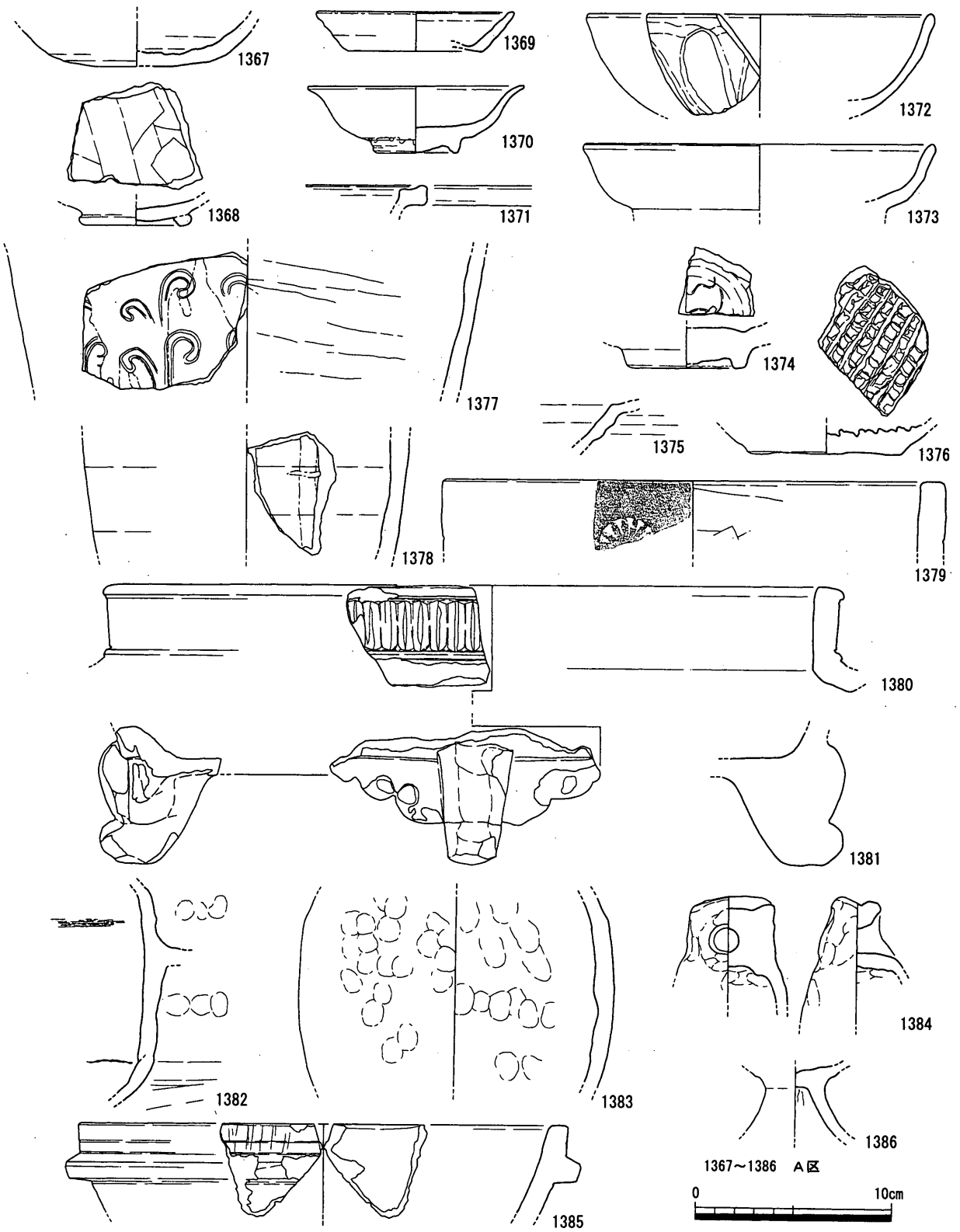
時期　1337 ～ 1339 から 14 世紀後半と考えられる。

ＳＰ 6023（第 136 図）

出土遺物（1341 ～ 1347）　1341・1342 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器杯。1343 ～ 1345 は土師質土器杯。1343 は１ｃ型式か。1346 は常滑甕。1347 は備前甕。乗岡２ｂ～３ａ期。

時期　1343・1347 から 14 世紀後半と考えられる。

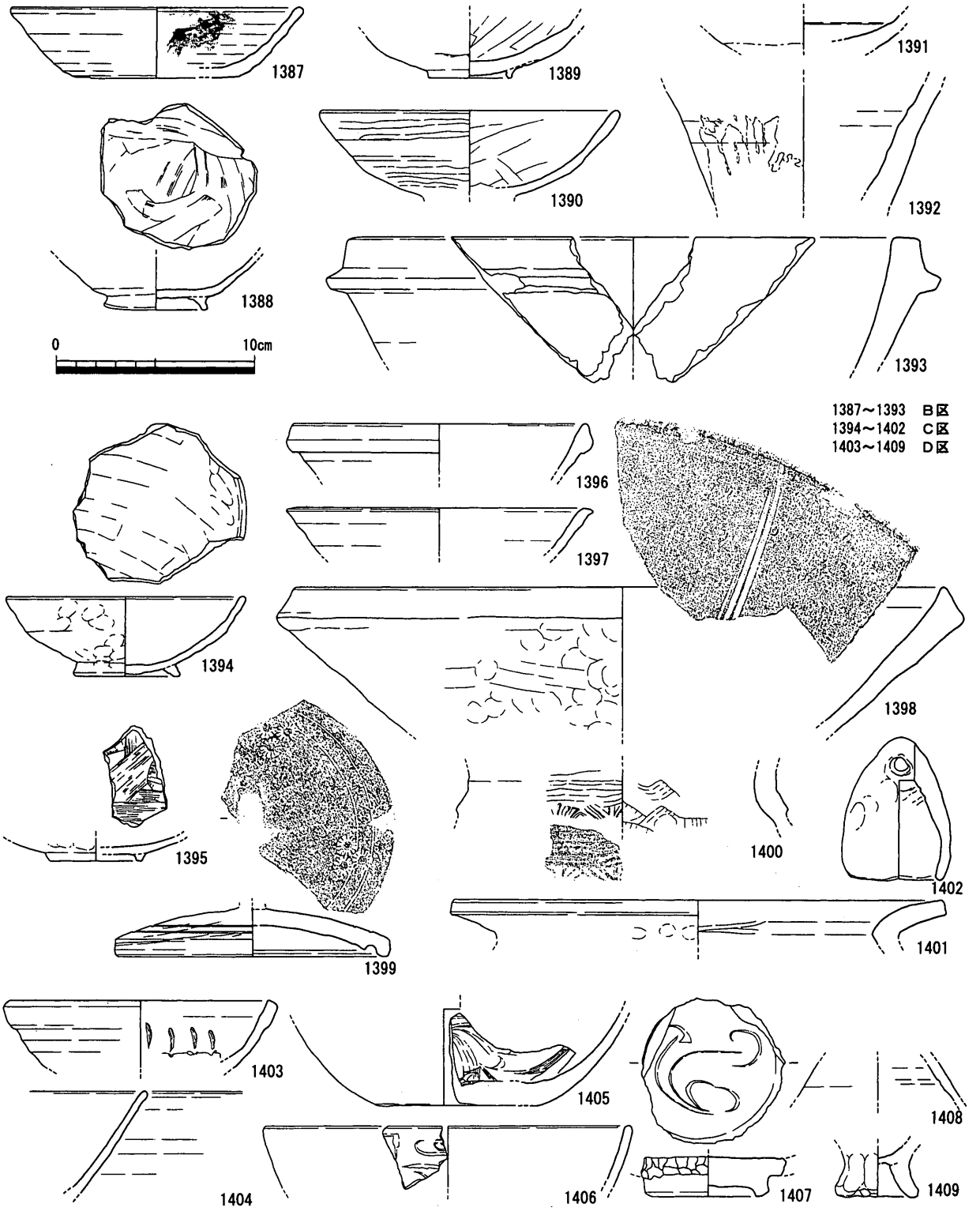
ＳＰ 6024（第 136 図）



第137図　遺構外出土遺物（1）

出土遺物（1348 ～ 1359）　1348 は佐藤ＢⅢ－４型式、1349 ～ 1351 は佐藤ＢⅢ－５型式の土師質土器杯。1352 ～ 1357 は土師質土器杯。1352 は１ａ型式、1354 は１ｂ型式、1355 ～ 1357 は１ｃ型式。1358 は備前壺。1359 は５～６条の沈線が巡る備前甕。

時期　出土遺物には時期差があることから、13 世紀末～ 14 世紀後半の幅をもって考えたい。

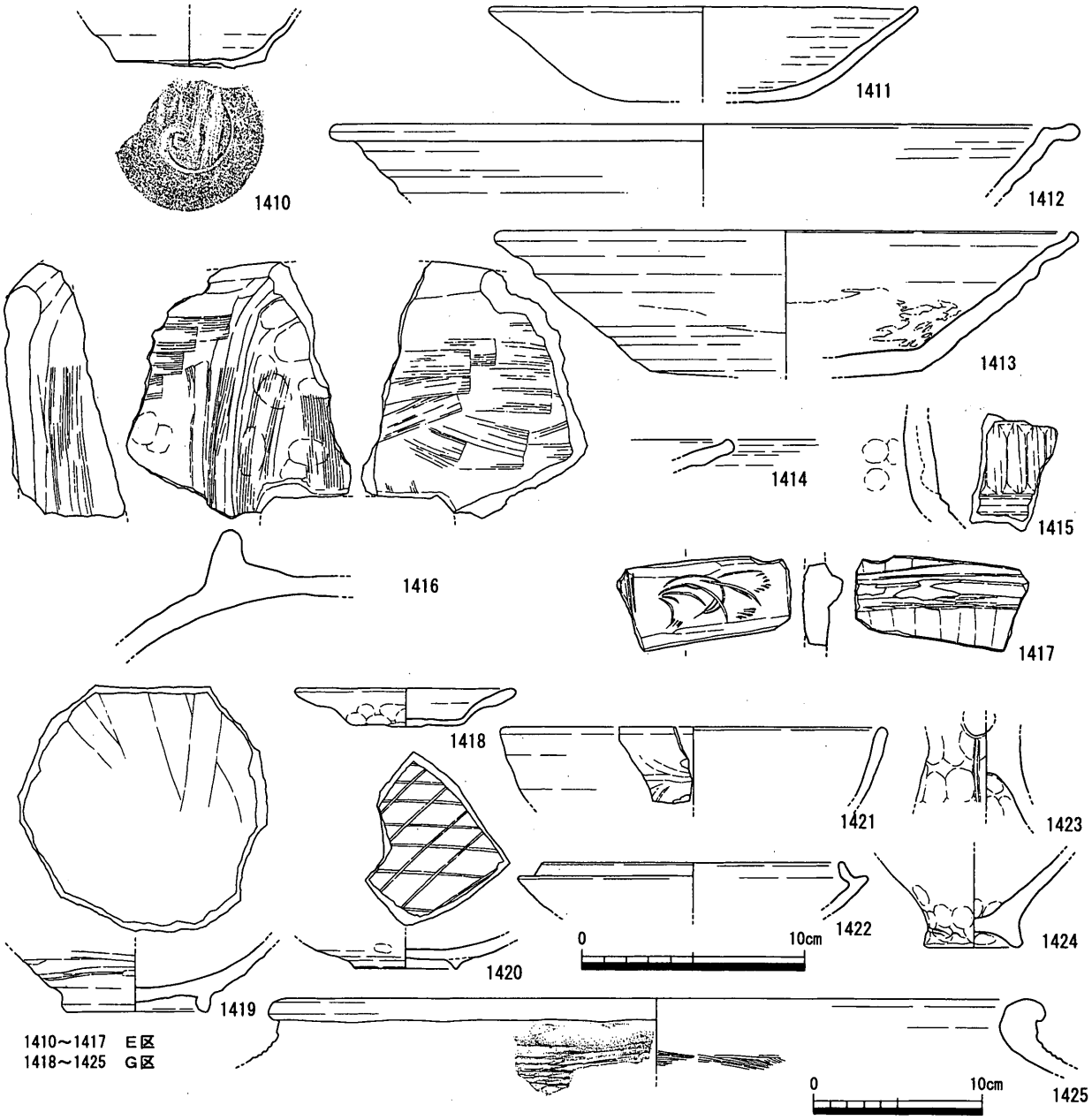


第138図　遺構外出土遺物（2）

ＳＰ 6034（第 136 図）

出土遺物（1360 ～ 1364）　1360 は土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－５型式。1361 は１ｂ型式、1362 は１ｃ型式の土師質土器杯。1363・1364 は備前甕。

時期　1361・1362 から 14 世紀中葉～後半と考えられる。



第139図　遺構外出土遺物（３）

ＳＰ 6070

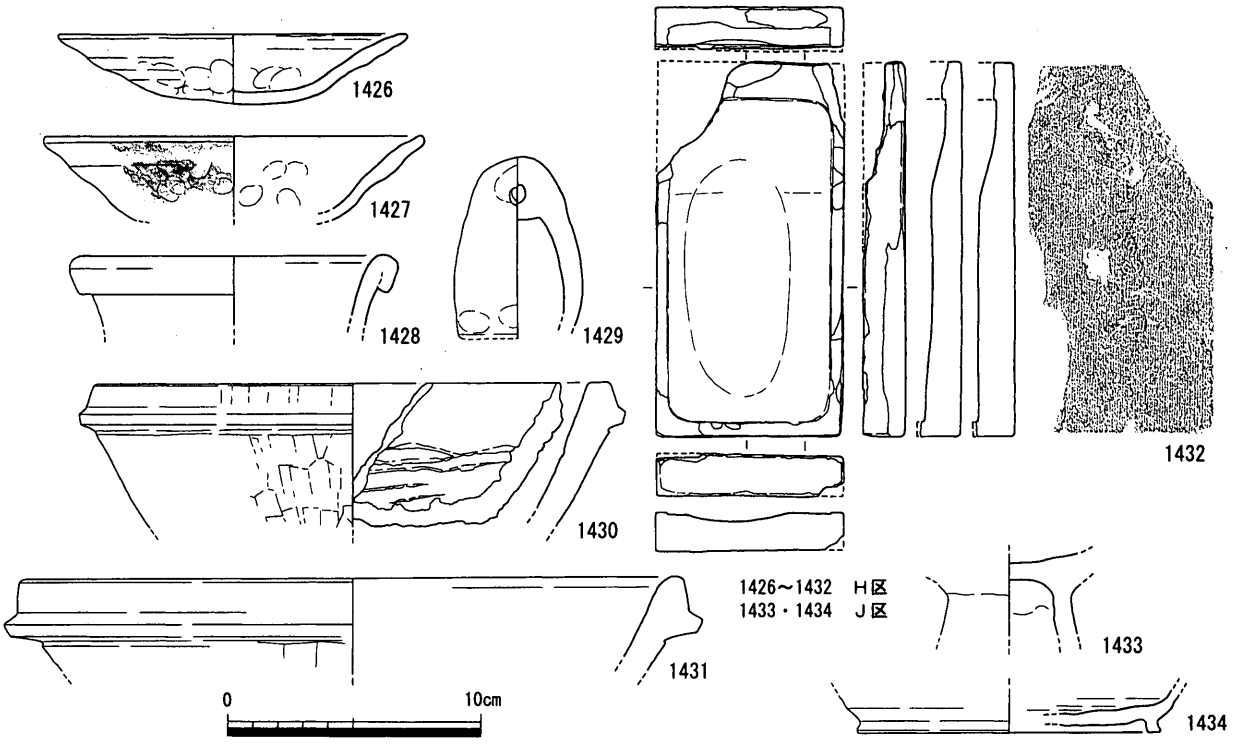
出土遺物　図化は行っていないが、直方体の結晶片岩製の砥石が出土している。４面の残存面中、３面に使用痕が確認できる。

その他、中世の土師質土器杯、須恵器甕小片、足釜脚部、備前大甕片と17世紀中葉の肥前系陶器鉢小片、18世紀の御厩系焙烙口縁部細片が共伴している。

時期　近世の遺物はいずれも小片・細片であるため混入と捉え、本遺構は中世段階のものと考えたい。

ＳＰ 6088（第136図）

出土遺物（1365・1366）　1365は小片の土師質土器杯。1366は１ａ型式の土師質土器杯。



第140図　遺構外出土遺物（４）

時期　1366は14世紀前葉に比定できるが、小片の1365の帰属時期が若干降る可能性が高いため、14世紀前葉～後半程度の幅をもって考えたい。

遺構外出土遺物（第137～140図）

Ａ区出土遺物（1367～1386）　1367は大型の土師質土器杯。1368は十瓶山窯系須恵器椀。1369はⅨ類の白磁皿。1370は白磁碗。森田Ｅ－２類か。1371は龍泉窯系？青磁。釉は明青色を呈している。1372は龍泉窯系青磁碗。太宰府浅型碗　Ⅱ－ａ類。1373は青磁皿。1374は太宰府Ⅰ類もしくはⅡ類の龍泉窯系青磁碗。1375は古瀬戸盤類。藤澤後期３～４。1376は藤澤前期３～４の古瀬戸卸皿。1377は鉄釉の古瀬戸梅瓶。藤澤中期１～２。1378は古瀬戸四耳壺もしくは梅瓶。藤澤中期３～４。1379は瓦質土器火鉢。1380・1381は瓦質土器風炉。1382は瓦質土器羽釜。1383は坩堝か。胎土中には多量の砂粒と黒雲母を含む。内外面に成形時の指オサエが顕著に認められる。1384は飯蛸壺。吊手部状端面は意図的に窪められている。1386は後期の弥生土器高杯。胎土中には多量の角閃石・黒雲母を含む。1385は滑石製石鍋。木戸Ⅲ類－ｂ。

Ｂ区出土遺物（1387～1393）　1387はやや大振りの土師質土器杯。1388は吉備系土師質土器椀。山本Ｃ２類。1389・1390は十瓶山窯系須恵器椀。1391は白磁碗。1392は藤澤前期３～４の古瀬戸瓶子。1393は滑石製石鍋。木戸Ⅲ類－ｃ。工具痕らしきものが確認できる破断面はやや研磨されており、転用品の可能性がある。

Ｃ区出土遺物（1394～1402）　1394土師質土器椀。高台貼り付け後の調整は甘く、接合痕が明瞭に残る。1395は十瓶山窯系須恵器椀。1396・1397は白磁碗。1398は佐藤ＡⅠ類の楠井窯産擂鉢。

焼成は須恵質。1399 は蓋。焼成は軟質の須恵質。1400 は土師質土器甕。頸部直下には菊花状の押印が認められる。1401 は瓦質土器甕。1402 は飯蛸壺。吊手部上端部は丸く仕上げられている。

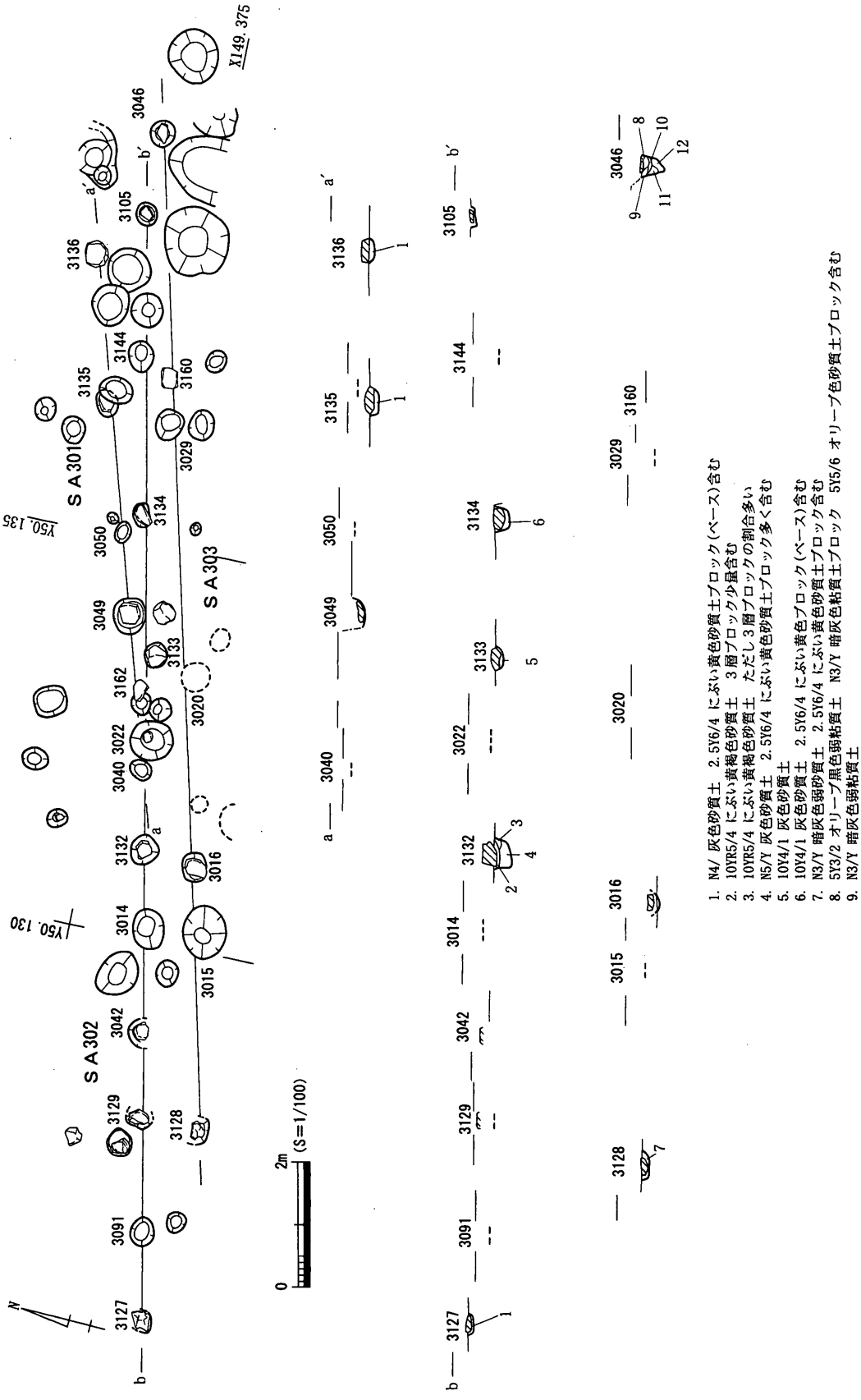
Ｄ区出土遺物（1403 ～ 1409） 1403 は藤澤前期３の古瀬戸卸皿。1404・1405 は龍泉窯系青磁碗。1406 は上田Ｃ－２類の青磁碗。1407 は龍泉窯系青磁碗転用の円盤状加工品。1408 は古瀬戸徳利か。1409 は製塩土器脚部。胎土中には角閃石を多く含む。

Ｅ区出土遺物（1410 ～ 1417） 1410 は土師質土器杯。1411 は灰白色を呈する京都系土師器皿。1412 は藤澤後期３～４の古瀬戸盤類。1414 は藤澤後期３の直縁大皿。1415 は瓦質土器風炉。1416 は竈。1417 は木戸Ⅲ類－ｃの滑石製石鍋の転用品。口縁部･鍔部の一部を板状に切断し、内面には弧状の文様が掘り込まれている。切断面は研磨されているが、線状痕が若干残る。

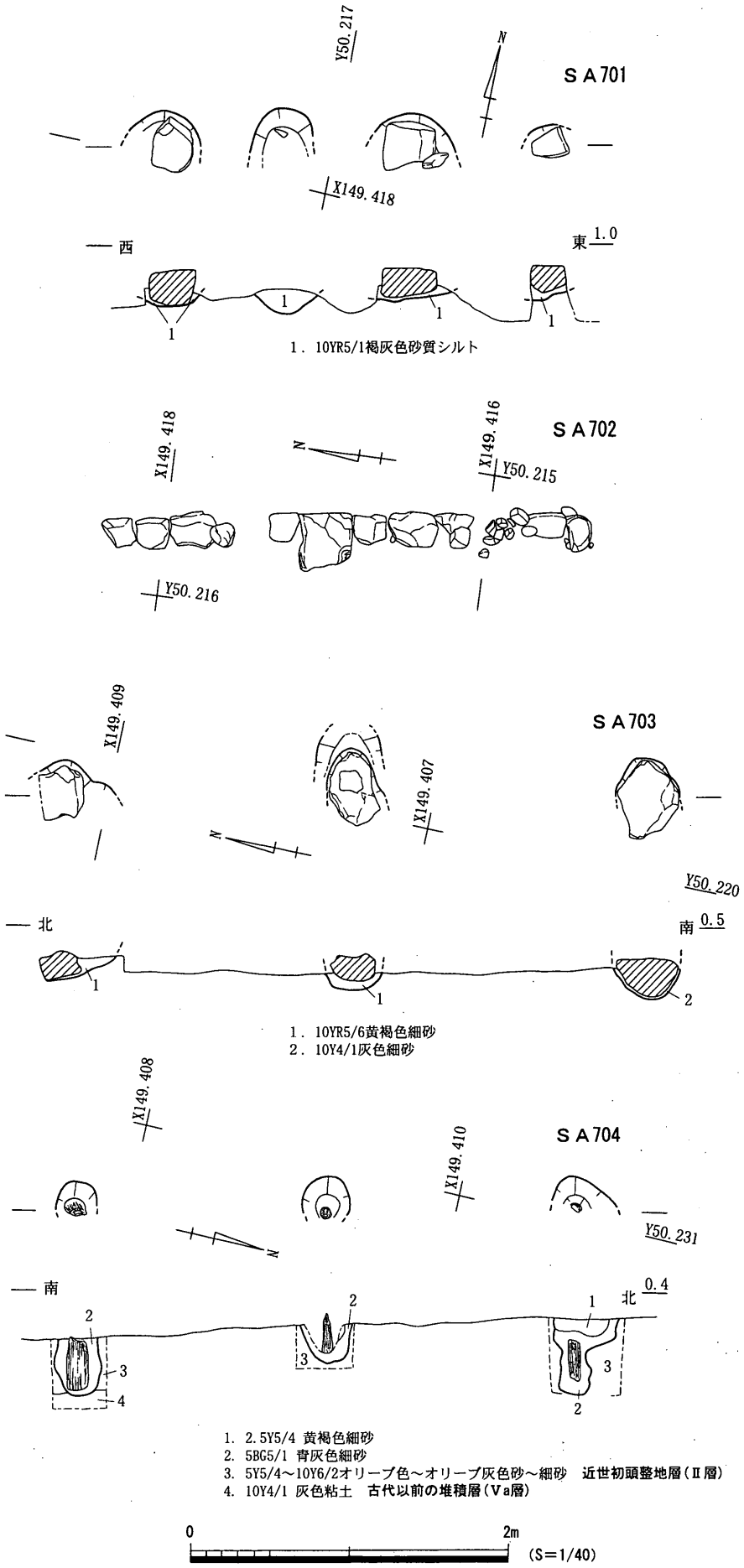
Ｇ区出土遺物（1418 ～ 1425） 1418 は京都系土師器皿。1419 は十瓶山窯系黒色土器椀。1420 は和泉型瓦器椀。1421 は龍泉窯系青磁碗。1422 は須恵器杯。1423 は飯蛸壺。孔から下方に向かって線状の記号が施されている。1424 は摩滅が著しい製塩土器。胎土中には角閃石･黒雲母を多量に含む。1425 は瓦質土器甕。

Ｈ区出土遺物（1426 ～ 1432） 1426・1427 は京都系土師器皿。1426 は在地産の土師質土器同様にぶい橙色を呈し、胎土も類似している。一方、灰白色の 1427 は緻密な胎土である。1428 は藤澤前期２の古瀬戸四耳壺口縁部片。1431 は滑石製石鍋。木戸Ⅲ類－ｃ。1432 は頁岩製の硯。底部裏面には文字が掘り込まれている。

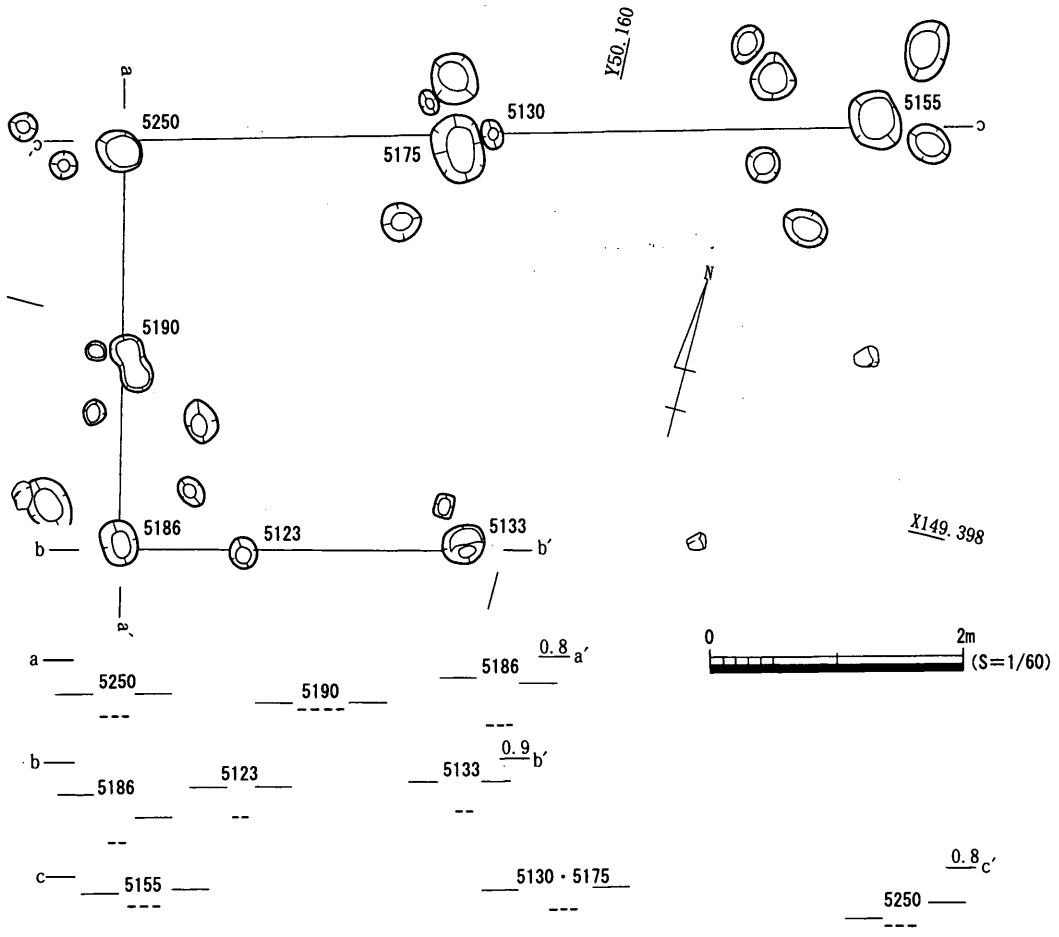
Ｊ区出土遺物（1433・1434） 1433 は摩滅が顕著な弥生土器高杯片。胎土中には多量の角閃石が認められる。1434 はＶｂ層中から出土した須恵器杯高台片。



第141図　ＳＡ301・302・303平・断面図



第142図　ＳＡ701～704平・断面図



第143図　ＳＢ503平・断面図

1. 17世紀前葉以降（Ⅱ層上面）の遺構と遺物

柵列（ＳＡ）

ＳＡ 301・302・303（第141図）

Ｄ区南部で検出した柵列。全てではないが、多くのピット中には20cm大の安山岩の礎石が認められる。ほぼ東西方向の３列認められるが、非常に近接していることから、同時併存ではなく時期差によるものと思われる。

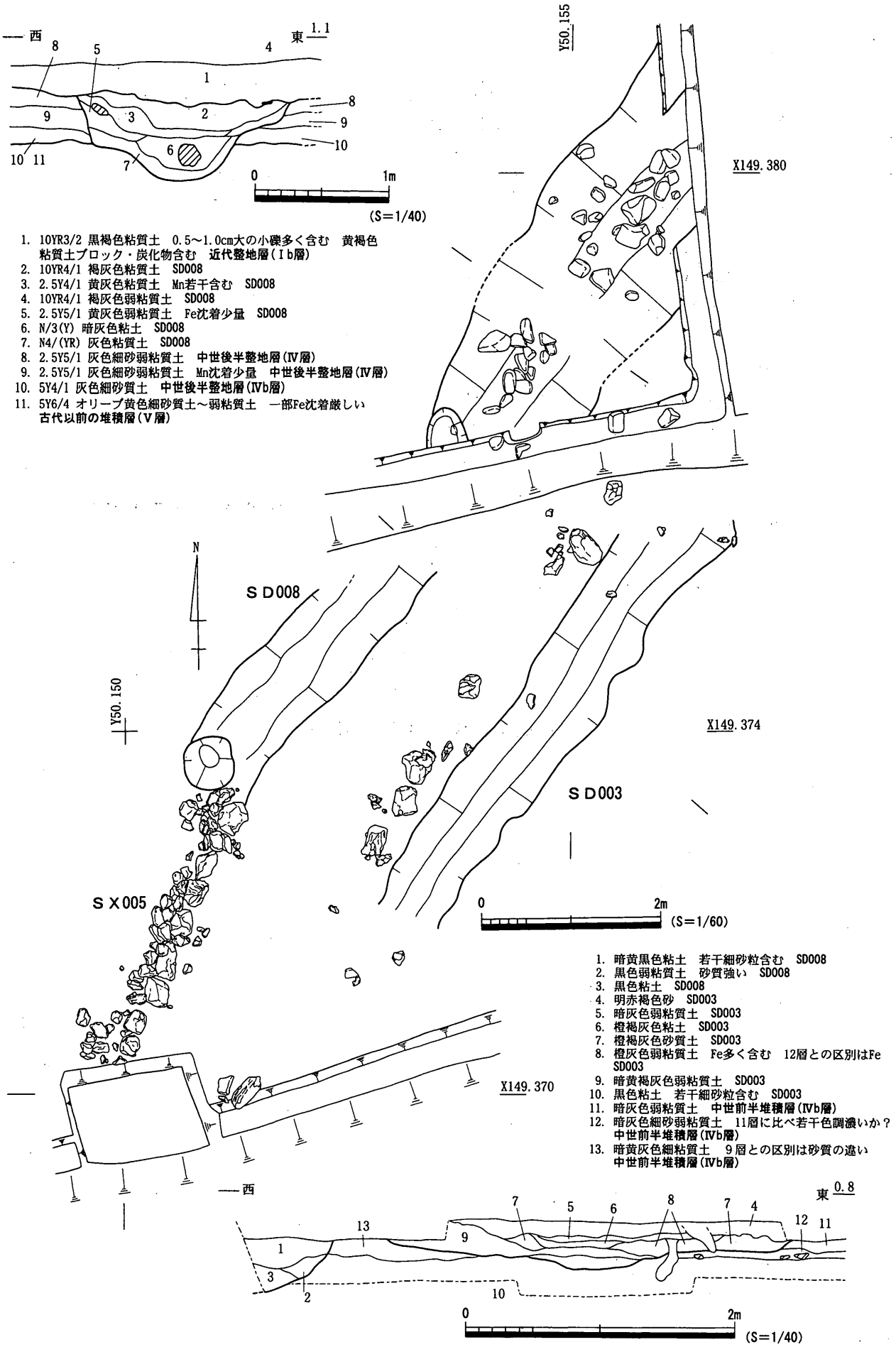
これらの柵列は、中世段階のＳＸ401・ＳＤ002・013・014埋没後に形成されていることから、近世段階の遺構と断定できる。

出土遺物　図化は行っていないが、ＳＰ3022から肥前系磁器片が出土している。その他のピットからは、遺物が出土していないか、もしくは混入である中世土器が出土しているのみである。

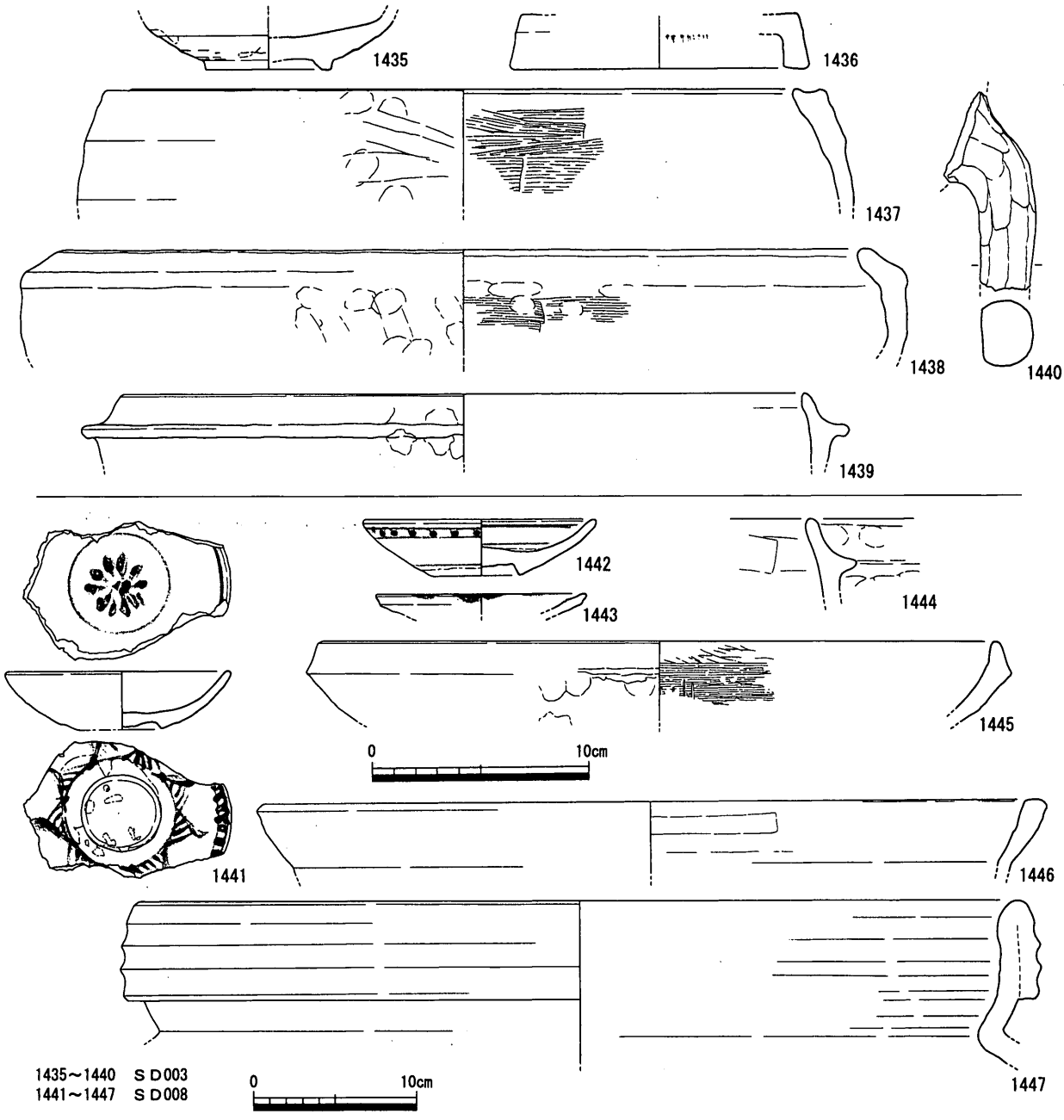
時期　出土遺物から17世紀中葉以降と考えられるが、詳細な時期は不明である。

ＳＡ 701（第142図）

Ｌ区で検出した東西方向の礎石列。30～40cm大の安山岩礫を石材とし、礫の平坦面が頂部とし



第144図　ＳＤ003・008平・断面図



第145図　ＳＤ003・008出土遺物

て用いられている。

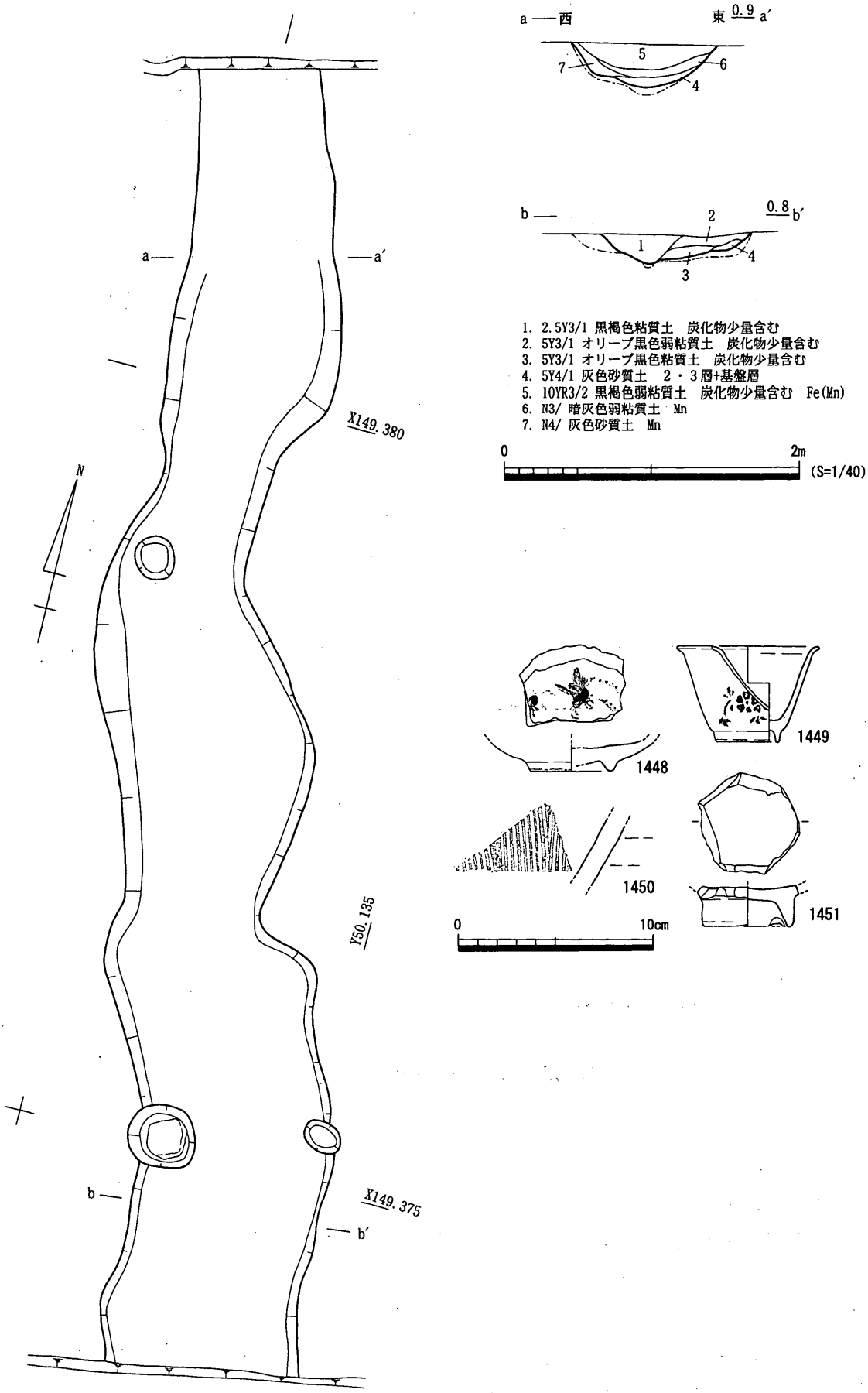
遺物は出土していない。

時期　詳細な時期決定は不可能であるが、周辺遺構の状況から17世紀以降であると考えられる。

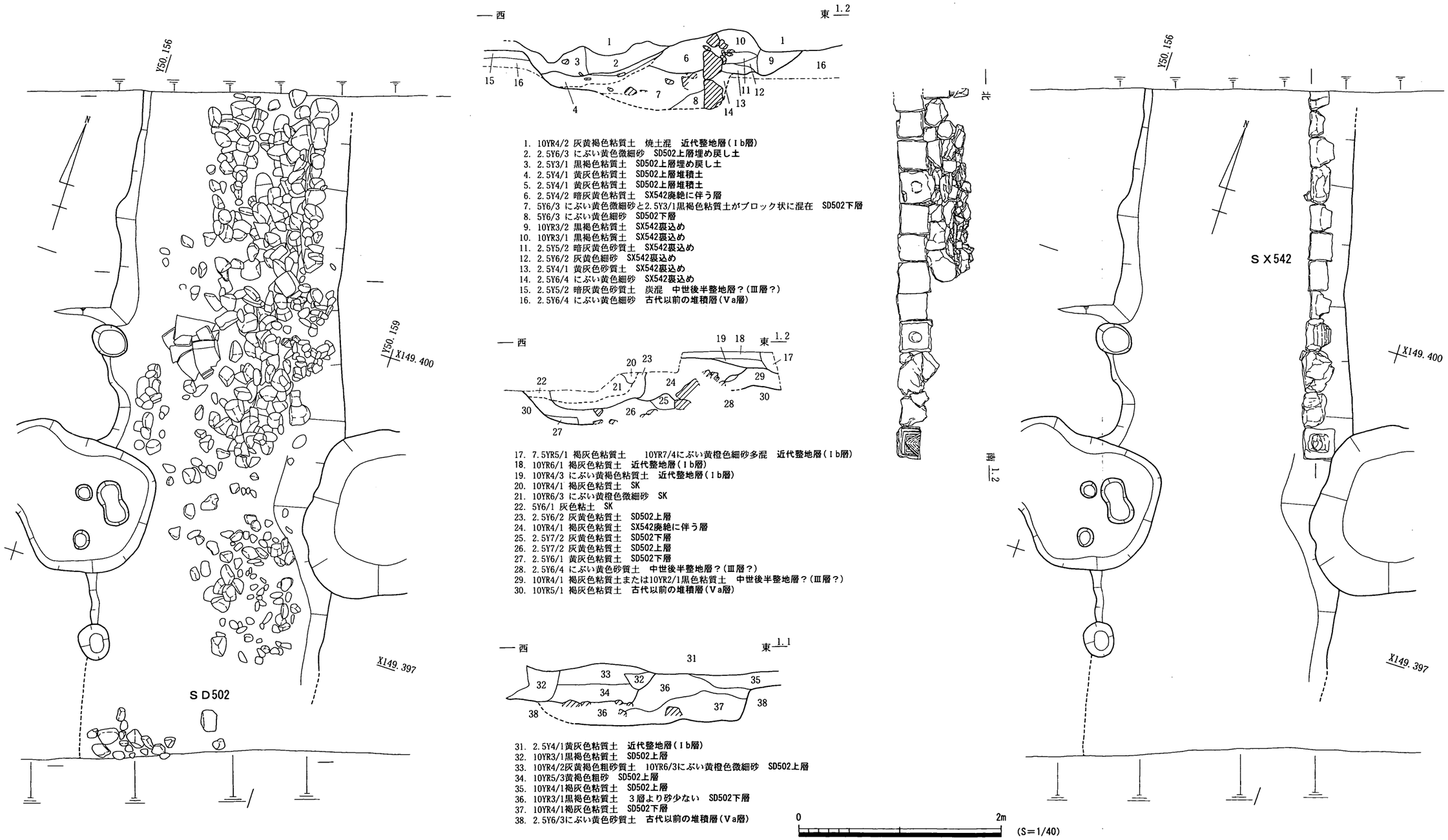
ＳＡ702（第142図）

Ｌ区で検出した南北方向の石列。石列には10～40cm程度の直方体に近い形状の安山岩・花崗岩礫が用いられ、東側に面をもつように並べられている。

遺物は出土していない。



第146図　ＳＤ303平・断面図、出土遺物



1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土　焼土混　近代整地層（Ｉb層）
2. 2.5Y6/3 にぶい黄色微細砂　SD502上層埋め戻し土
3. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土　SD502上層埋め戻し土
4. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土　SD502上層堆積土
5. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土　SD502上層堆積土
6. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土　SX542廃絶に伴う層
7. 5Y6/3 にぶい黄色微細砂と2.5Y3/1黒褐色粘質土がブロック状に混在　SD502下層
8. 5Y6/3 にぶい黄色細砂　SD502下層
9. 10YR3/2 黒褐色粘質土　SX542裏込め
10. 10YR3/1 黒褐色粘質土　SX542裏込め
11. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土　SX542裏込め
12. 2.5Y6/2 灰黄色細砂　SX542裏込め
13. 2.5Y4/1 黄灰色砂質土　SX542裏込め
14. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　SX542裏込め
15. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土　炭混　中世後半整地層？（Ⅲ層？）
16. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　古代以前の堆積層（Ｖa層）

17. 7.5YR5/1 褐灰色粘質土　10YR7/4にぶい黄橙色細砂多混　近代整地層（Ｉb層）
18. 10YR6/1 褐灰色粘質土　近代整地層（Ｉb層）
19. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　近代整地層（Ｉb層）
20. 10YR4/1 褐灰色粘質土　SK
21. 10YR6/3 にぶい黄橙色微細砂　SK
22. 5Y6/1 灰色粘土　SK
23. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土　SD502上層
24. 10YR4/1 褐灰色粘質土　SX542廃絶に伴う層
25. 2.5Y7/2 灰黄色粘質土　SD502下層
26. 2.5Y7/2 灰黄色粘質土　SD502上層
27. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土　SD502下層
28. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土　中世後半整地層？（Ⅲ層？）
29. 10YR4/1 褐灰色粘質土または10YR2/1黒色粘質土　中世後半整地層？（Ⅲ層？）
30. 10YR5/1 褐灰色粘質土　古代以前の堆積層（Ｖa層）

31. 2.5Y4/1黄灰色粘質土　近代整地層（Ｉb層）
32. 10YR3/1黒褐色粘質土　SD502上層
33. 10YR4/2灰黄褐色粗砂質土　10YR6/3にぶい黄橙色微細砂　SD502上層
34. 10YR5/3黄褐色粗砂　SD502上層
35. 10YR4/1褐灰色粘質土　SD502上層
36. 10YR3/1黒褐色粘質土　３層より砂少ない　SD502下層
37. 10YR4/1褐灰色粘質土　SD502下層
38. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質土　古代以前の堆積層（Ｖa層）

第147図　ＳＤ502平・断面図、ＳＸ542平・断面図

時期　周辺遺構の状況から17世紀以降であると考えられる。

ＳＡ703（第142図）

Ｊ区西端部で検出した南北方向の礎石列。いずれも、30～50cm大の不定形の安山岩礫が用いられている。東に位置するＳＡ704と方向を同じくし、ピット間距離がほぼ等しいことから、ＳＡ704と同時期であると考えられる。

遺物は出土していない。

時期　Ⅱ層（近世初頭整地層）上面に形成されていることから、17世紀以降であることは確実であるが、詳細な時期は不明である。

ＳＡ704（第142図）

Ｊ区で検出した南北方向の柵列。検出した3基のピット中にはいずれも柱材が残存している。西に位置するＳＡ703と同方向で、ピット間距離がほぼ同じであることから、ＳＡ703と同時期の遺構であると考えられる。

遺物は出土していない。

時期　Ⅱ層（近世初頭整地層）上面に形成されていることから、17世紀以降であることは確実であるが、詳細な時期は不明である。

掘立柱建物（ＳＢ）

ＳＢ503（第143図）

Ｇ区中央部、18世紀前半の溝ＳＤ502を切るかたちで検出した。ただし、本建物は発掘調査時には確認できず、図上での検討の結果建物と判断したため、確証に乏しい。

出土遺物　ＳＰ5133から肥前系陶器碗が出土しているが、その他のピットからは、中世遺物の細片が認められるのみである。

時期　肥前系陶器碗から18世紀前半と考えられる。

溝（ＳＤ）

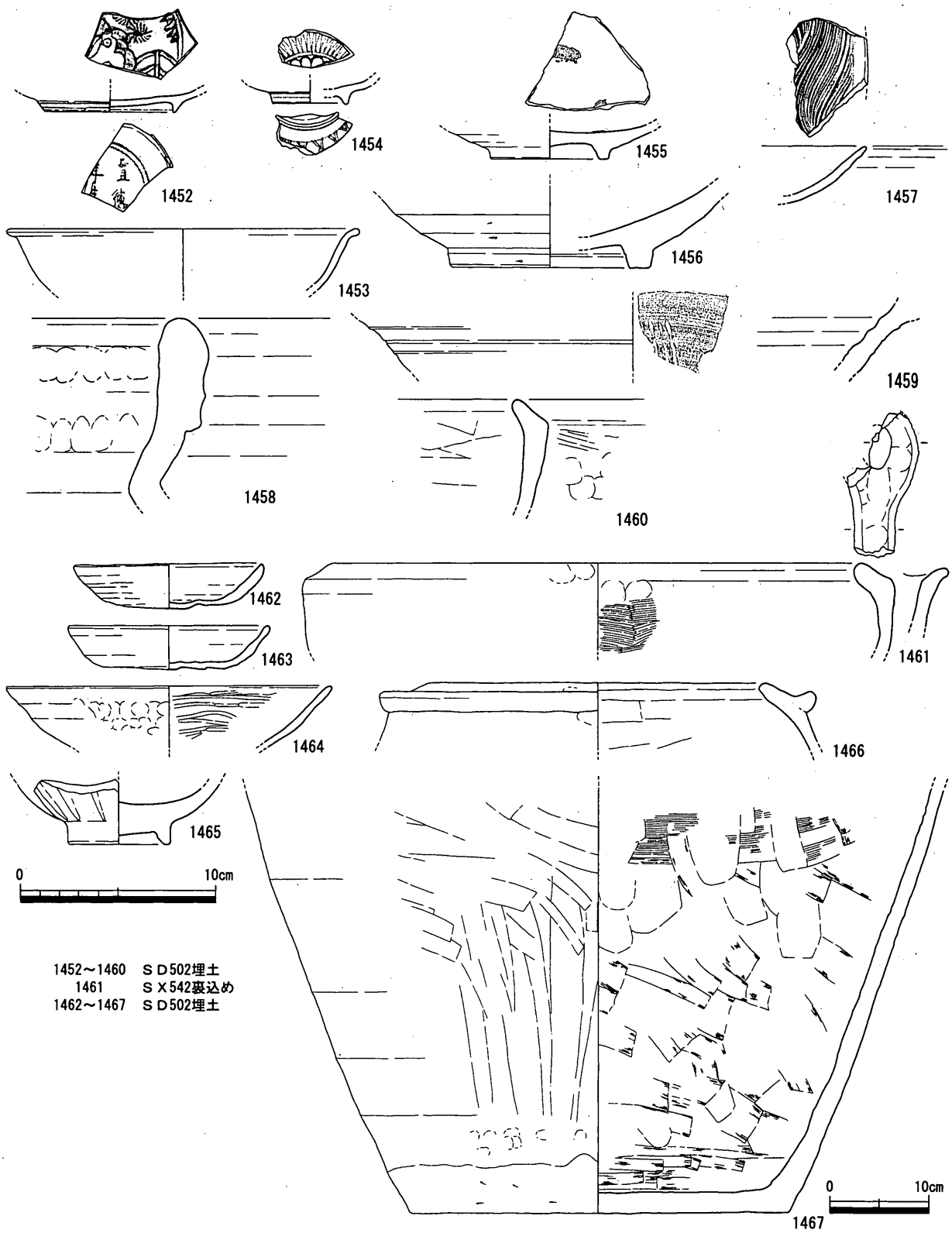
ＳＤ003・ＳＤ008（第144・145図）

Ａ区東部・Ｅ区南東部で検出した南西－北東方向の溝。溝埋土中には拳大～人頭大の安山岩礫が多く含まれている。後述するように、出土遺物から時期差は想定できないため、両溝は同時併存していた可能性が高く、道路の側溝であった可能性も考えられる。

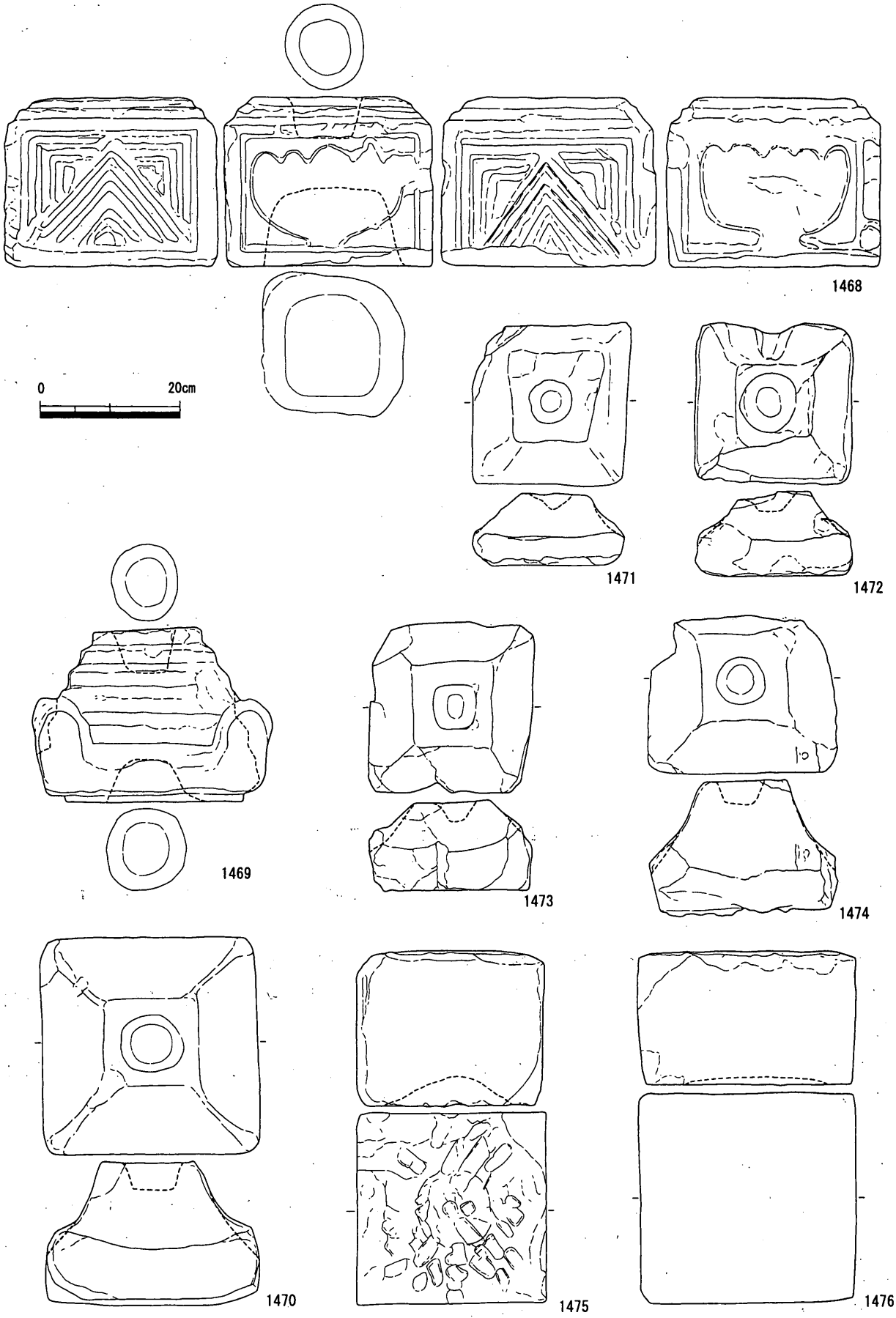
第2節で述べたように、中世段階では本遺構周辺は低地で、北西から南東に向かって徐々に整地が行われたことが想定されている。

『高松城下図屏風』（推定1650年代製作）には南西－北東方向の地割が表現されていないことから、『高松城下図屏風』製作時点で両溝は埋没していると考えられ、両溝が周辺整備段階以前の遺構であることが分かる。

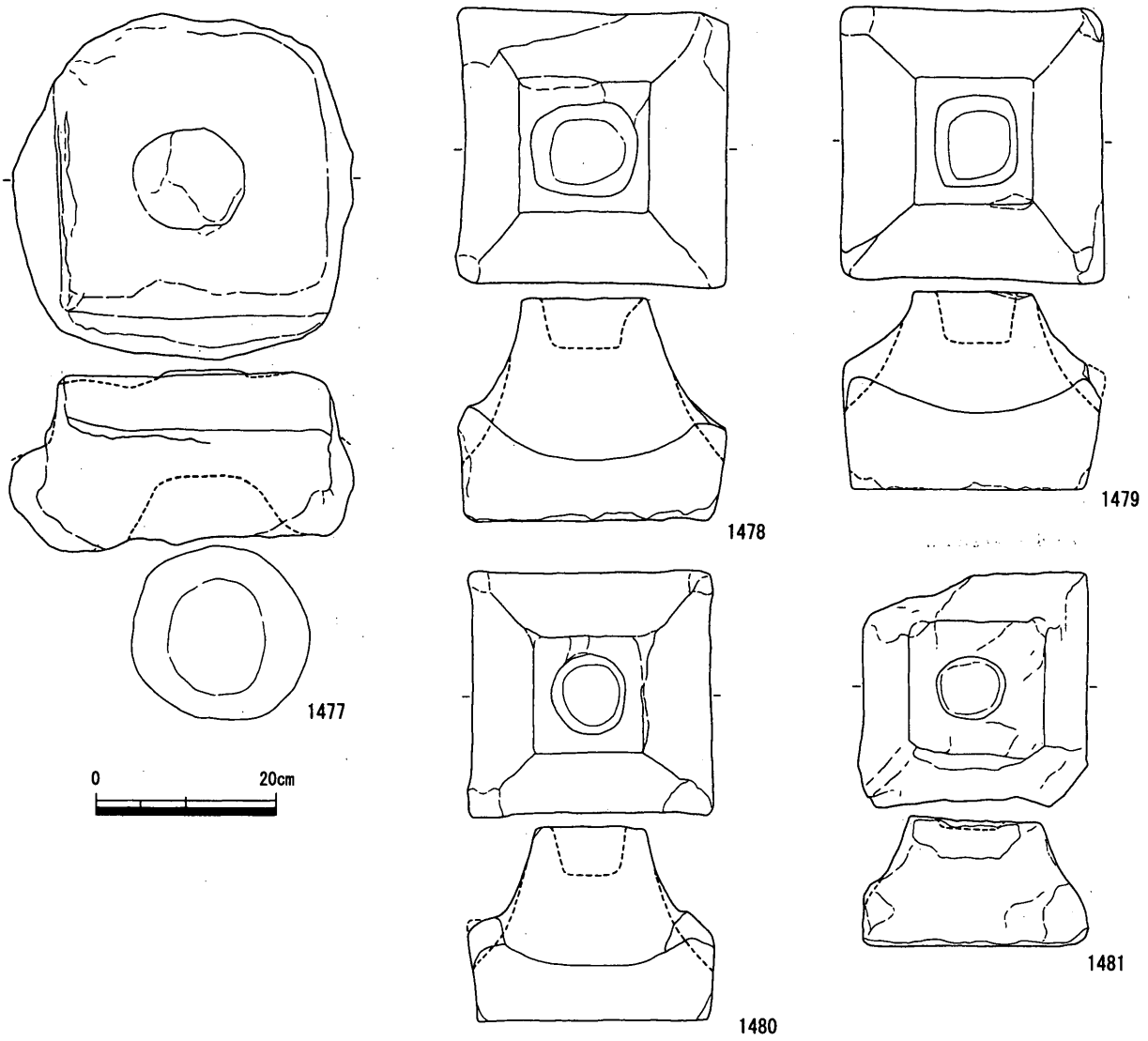
ＳＤ003出土遺物（1435～1440）　1435は鉄釉が施された肥前系陶器碗。1436は中世遺物の可



第148図　ＳＤ502出土遺物、ＳＸ542出土遺物（１）



第149図　ＳＸ542出土遺物（２）



第150図　ＳＸ542出土遺物（３）

能性がある瓦質土器？蓋。1437 は土師質土器鉢。1438 は土師質土器鍋。1439・1440 は土師質土器足釜。中世段階のものである可能性が高い。

ＳＤ 008 出土遺物（1441 ～ 1447）　1441 は景徳鎮窯系青花碗。1442 は漳州窯系青花皿。1443 は土師質土器杯。1444 は土師質土器足釜。1445 は土師質土器鉢。1446 は土師質土器鍋。1447 は乗岡近世１ｂ期の備前甕。

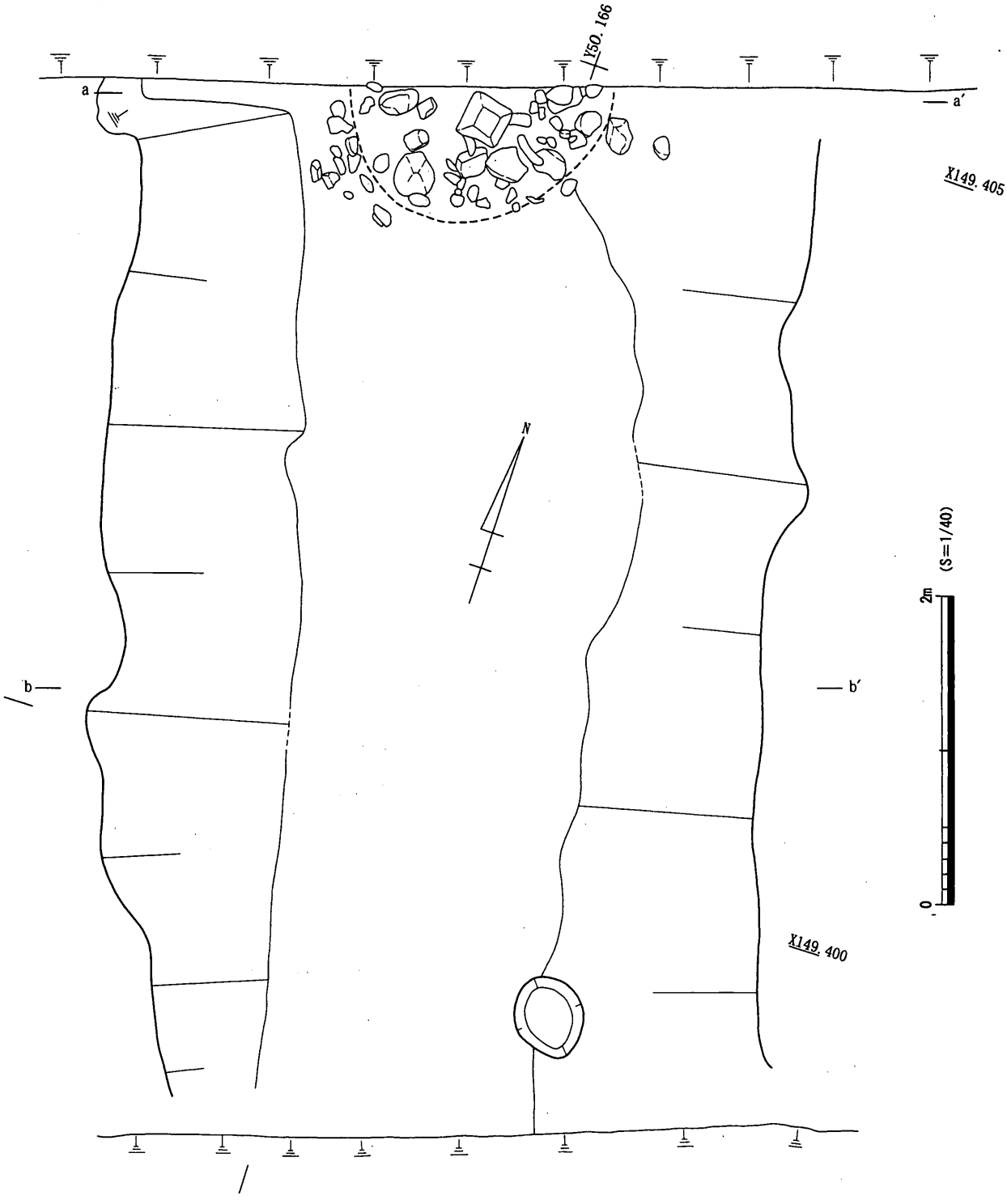
時期　出土遺物は少量だが、埋没時期を 17 世紀初頭（松本・佐藤様相１）に位置づけることができる。

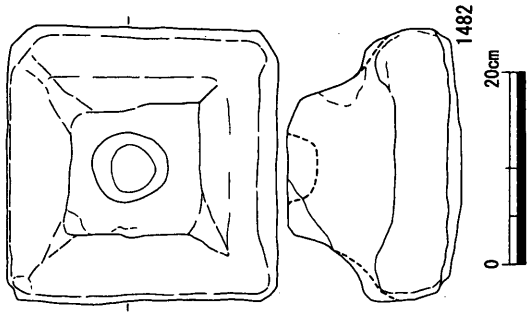
ＳＤ 303（第 146 図）

Ｄ区中央部を南北に縦断する浅い溝。埋土からは、この溝が流水状態にあったとは判断できない。

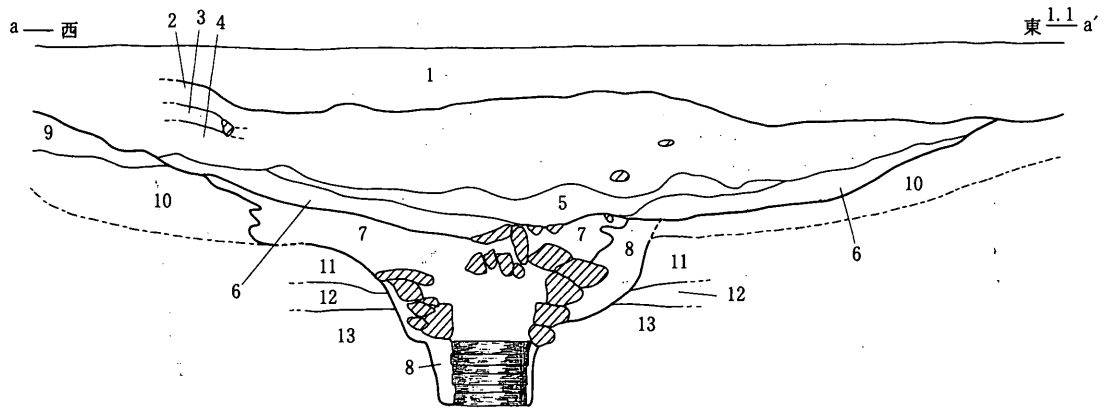
出土遺物（1448 ～ 1451）　1448 は肥前系磁器碗。1449 はコンニャク印判が認められる肥前系磁器猪口。1450 は備前擂鉢。1451 は京・信楽系陶器碗転用の円盤状加工品。

時期　1449 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

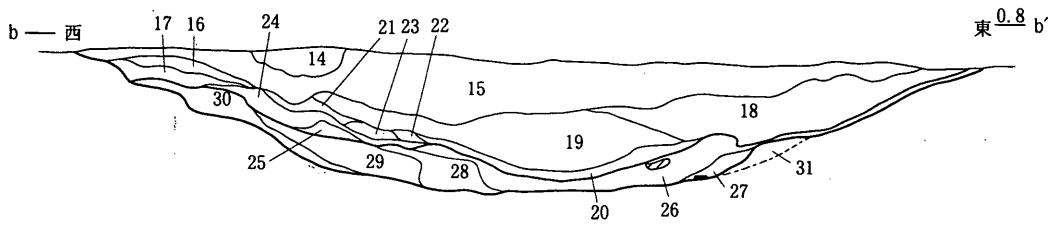




第151図　ＳＤ504平面図、出土遺物（１）



1. 10YR3/1 黒褐色粘質土　近代整地層（Ｉb層）
2. 10YR2/3 黒褐色砂質土　SD504埋め戻し土
3. 10YR2/1 黒色粘質土　SD504埋め戻し土
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土　SD504 埋め戻し土
5. 10YR4/1 褐灰色粘質土　SD504 埋め戻し土
6. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土　SD504 埋め戻し土
7. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土　SE521 埋め戻し土
8. 裏込め土　7～9層ブロック・礫混
9. 10YR6/3 にぶい黄橙色微細砂　古代以前の堆積層？（Va層？）
10. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土　古代以前の堆積層（Va層）
11. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土と2.5Y7/1 灰白色中砂の混在
12. N4/ 灰色粘質土と5Y7/2 灰白色粘質土の混在
13. 10YR6/6 明黄褐色粗砂



14. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土　炭多混　SD504 埋め戻し土
15. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土　SD504 埋め戻し土
16. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土　SD504 埋め戻し土
17. 2.5Y7/2 灰黄色細砂　SD504 埋め戻し土
18. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 SD504 埋め戻し土
19. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土　SD504 埋め戻し土
20. 2.5Y6/1 黄褐色細砂　SD504 埋め戻し土
21. 10YR6/2 灰黄褐色粘質土　SD504 埋め戻し土
22. 10YR5/2 褐灰色粘土　SD504 埋め戻し土
23. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　SD504埋め戻し土
24. 10YR5/1 褐灰色砂質土　SD504 埋め戻し土
25. 2.5Y6/2 灰黄色細砂　SD504 埋め戻し土
26. N3/ 暗灰色粘土　SD504 堆積土
27. N6/ 灰色細砂　SD504 堆積土
28. N4/ 灰色粘土とN7/ 灰白色細砂の水平互層堆積　SD504 堆積土
29. 2.5Y6/2 灰黄色細砂　水平堆積　SD504 堆積土
30. 2.5Y6/2 灰黄色細砂質土　SD504 堆積土
31. 2.5Y6/2 灰黄色細砂　古代以前の堆積層（Va層）

0　2m　(S=1/40)

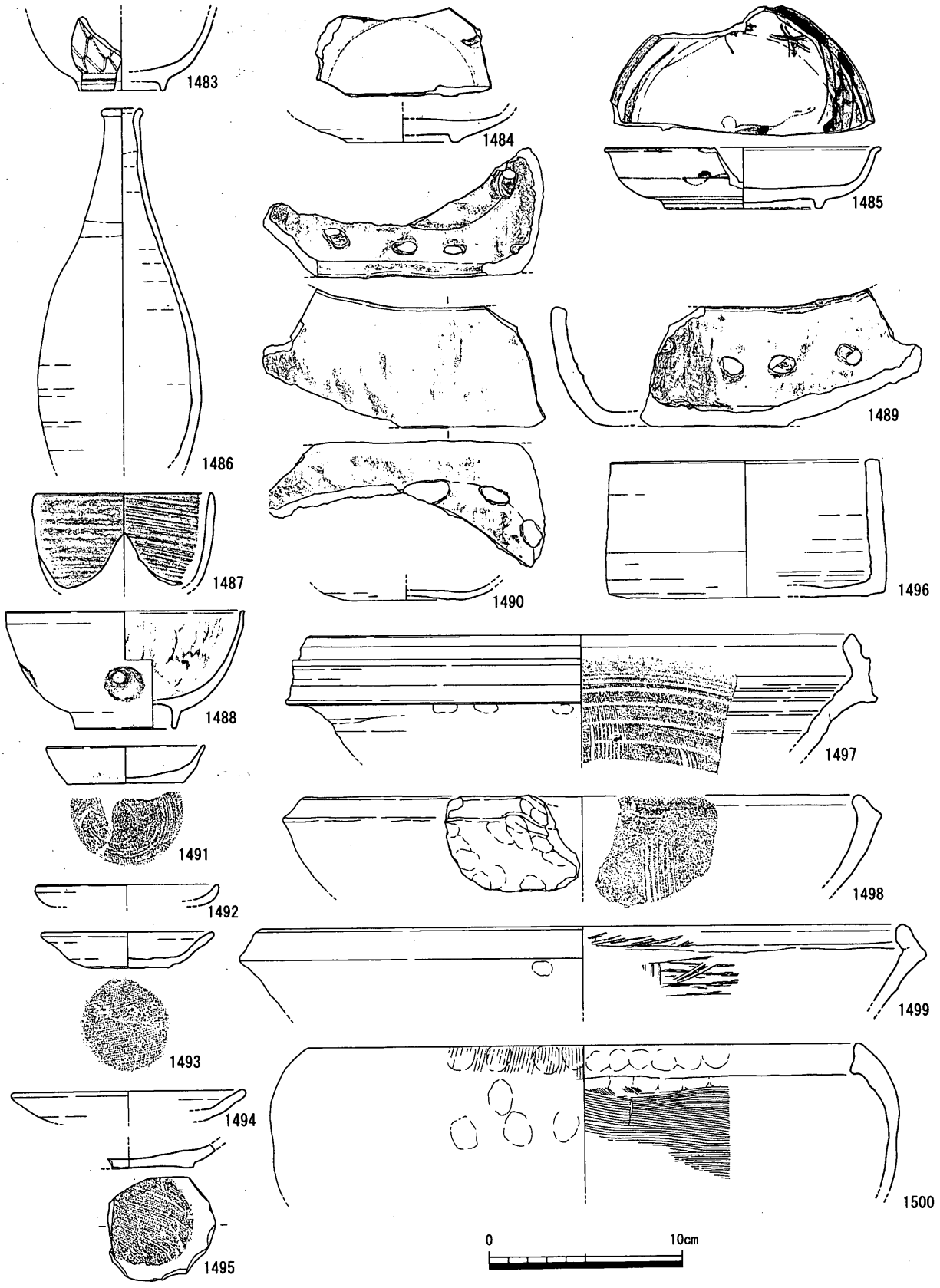
第152図　ＳＤ504断面図

ＳＤ 502・ＳＸ 542（第 147 ～ 150 図）

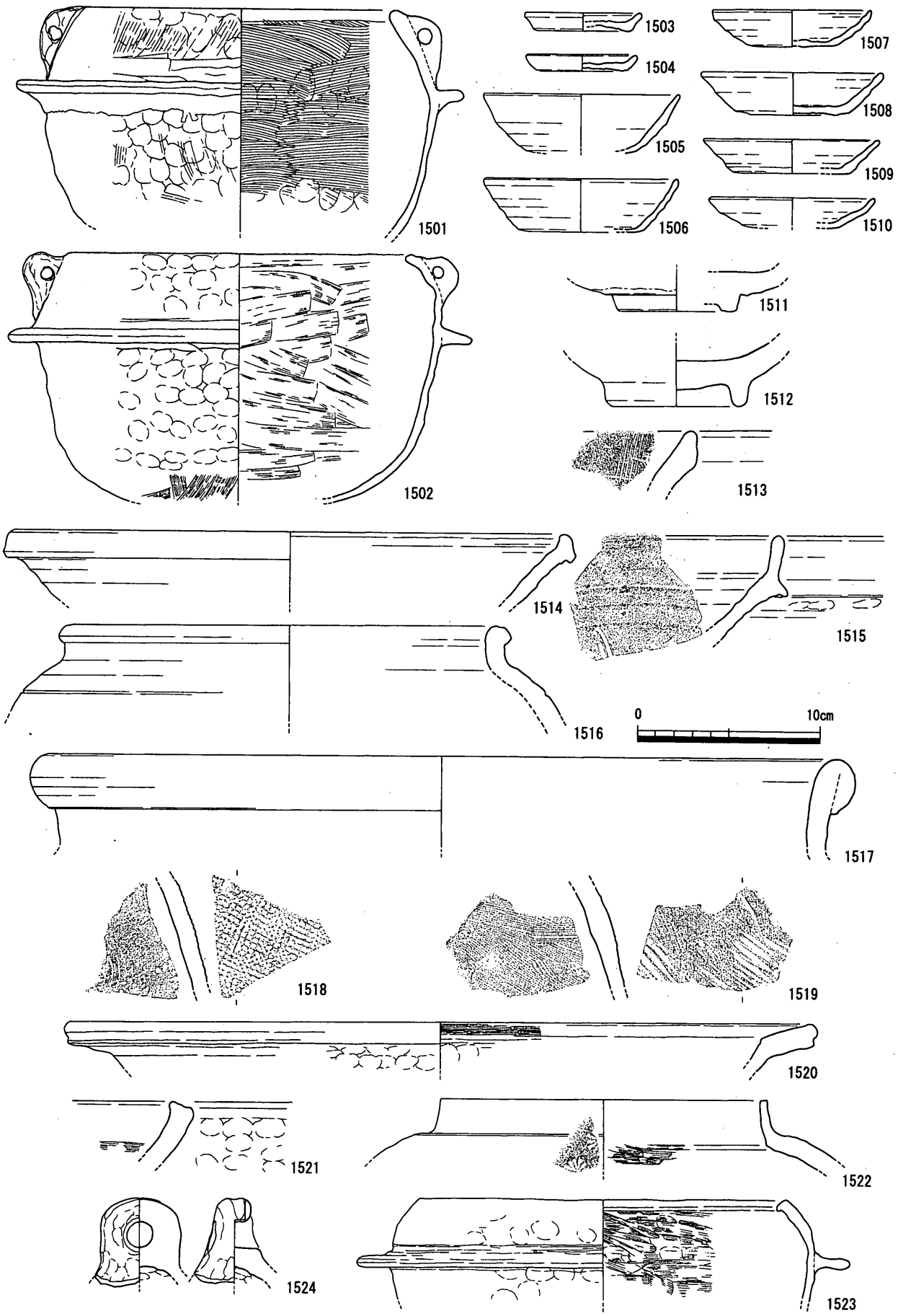
Ｇ区中央部で検出した南北方向の溝。本溝の東には並行する溝ＳＤ 504 がある。両溝の規模はほぼ等しく、埋没時期もほぼ同時であることから両溝は併存していたと考えられる。さらに、後述する護岸施設が東肩に存在することを考慮すれば、両溝は道路の側溝であった可能性がある。また本溝は、再掘削の痕跡が確認できるため一定期間機能していたと思われる。

本溝の東岸には護岸施設と思われる石積み遺構（ＳＸ 542）が築かれている。ＳＸ 542 は、最下段およびＧ区北壁際の一部分については下から２段までが中世の石造物を転用したもので構成され、その上位については拳大の安山岩礫が積み重ねられている。石造物の転用による１段しか残存していなかったＳＤ 009 上層に伴うＳＸ 004 も同様の構造であったものと推測される。

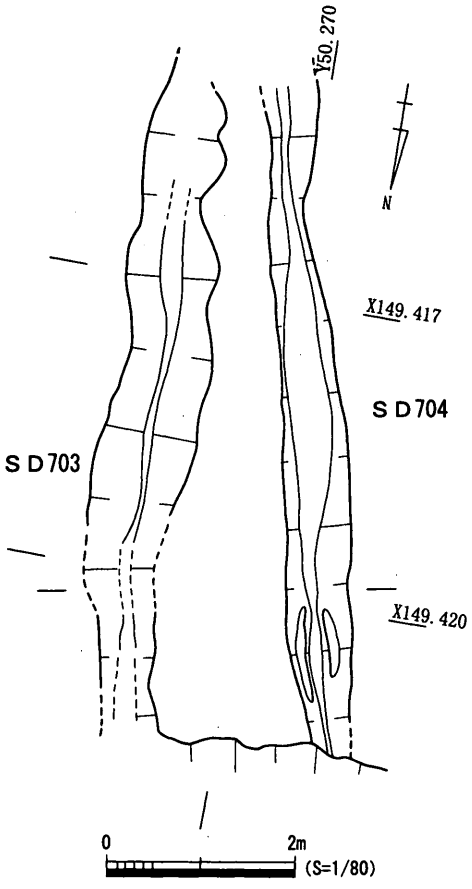
ＳＤ 502 出土遺物（1452 ～ 1460・1462 ～ 1467）　1452 は景徳鎮窯系青花皿。1453 は白磁？碗。1454 は肥前系磁器碗。1455・1456 は肥前系陶器碗。1457 は産地不明陶器皿。1458 は備前甕。1459 は備前擂鉢。1460 は土師質土器鉢。1464 は備前甕。内面には、排泄物の痕跡である白色の付着物

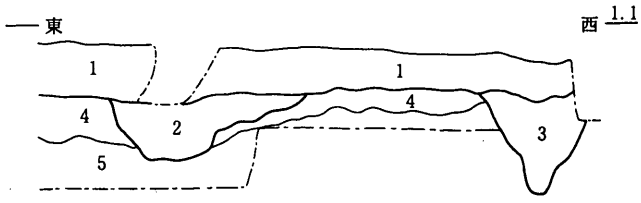


第153図　ＳＤ504出土遺物（２）



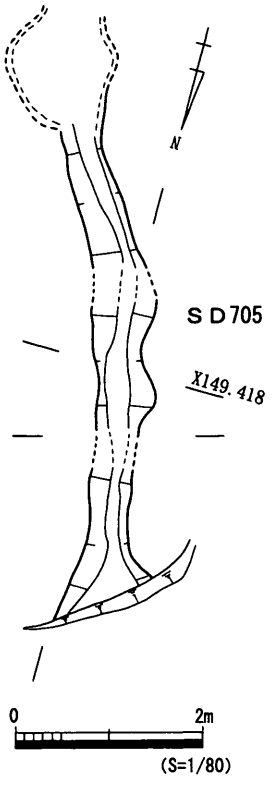
第154図　ＳＤ504出土遺物（３）





1. 10YR5/1 褐灰色砂質シルト　径1.0～2.0cm程度の礫を均一に含む　炭化物を若干含む
近代整地層(Ⅰb層)
2. 2.5Y3/1 黒褐色シルト質砂　炭化物を均一に含む SD703
3. 10YR4/1 褐灰色シルト質砂　径1.0cm程度の2.5Y7/6 明黄褐色ブロックを多く含む　SD704
4. 10YR4/1 灰黄褐色砂質シルト　径1.0cm小の10YR7/6 明黄褐色ブロックを多く含む(特に層の下)
1層に比べ炭化物を多く含む　近世初頭整地層(Ⅱ層)
5. 2.5Y5/1 黄灰色シルト質砂　径3.0cm程度の2.5Y7/6 明黄褐色ブロックを多量に含む
近世初頭整地層(Ⅱ層)

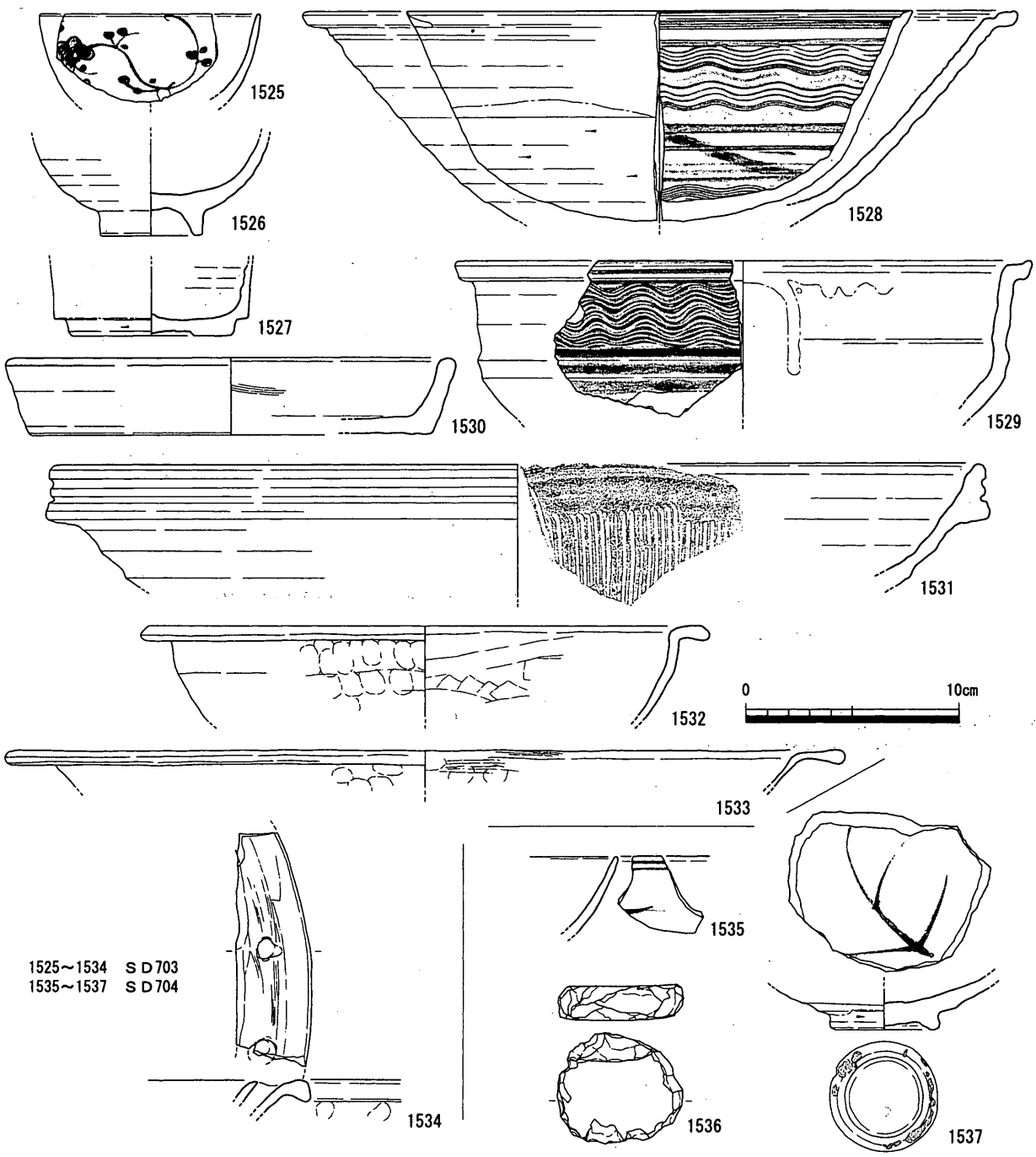
0　2m
(S=1/40)



1. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂　径1.0cm小の
5Y7/6 黄色ブロックを一部含む
2. 2.5Y6/1 黄灰色シルト質砂　径1.0cm大の
5Y7/8 黄色ブロックを多量に含む　近世初頭整地層(Ⅱ層)

0　2m
(S=1/40)

第155図　ＳＤ703・704・705平・断面図

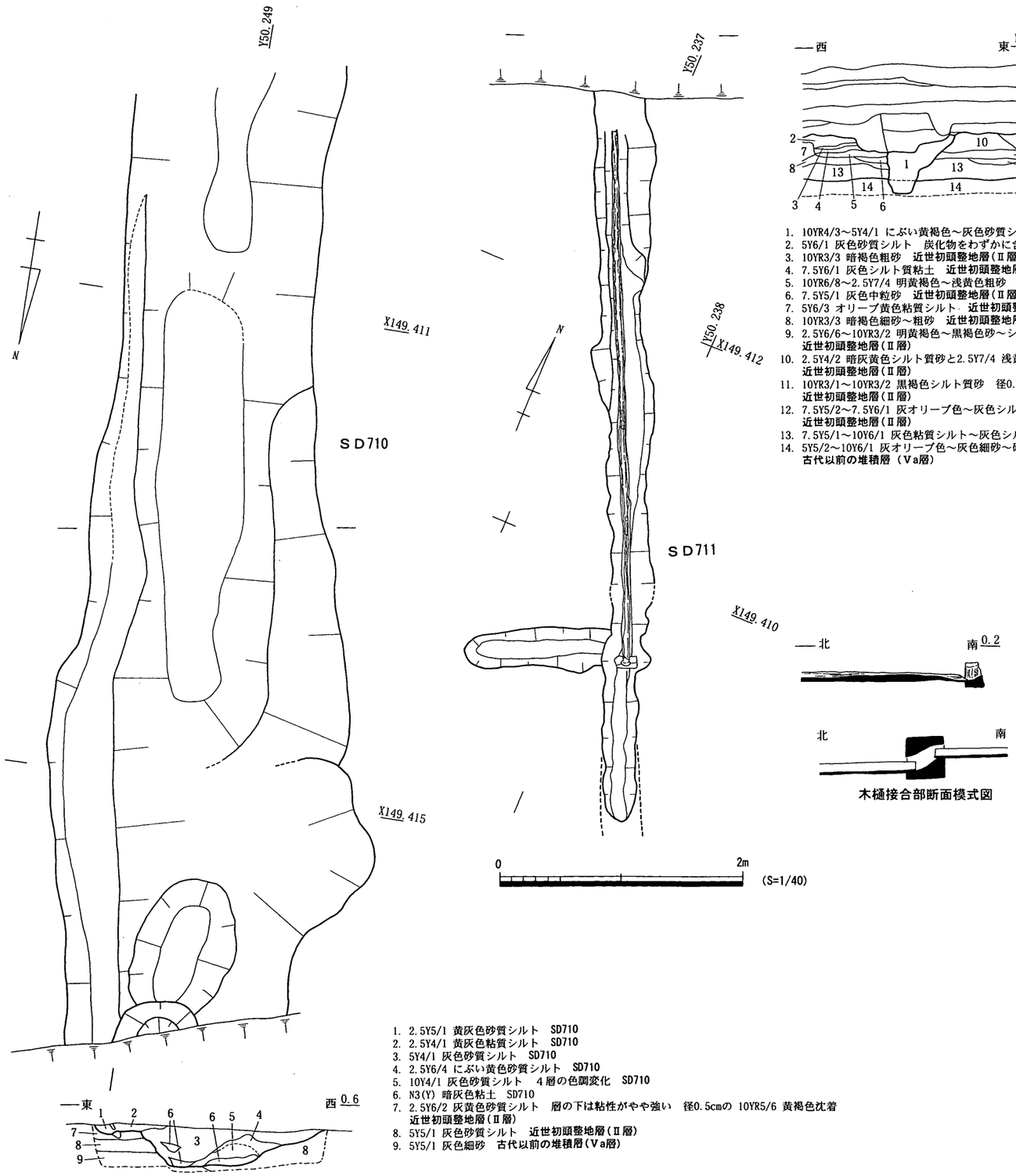


第156図　ＳＤ703・704出土遺物

が認められ、便器として使用されていたと考えられる。1462 ～ 1466 は中世の混入と考えられる遺物。1462・1463 は土師質土器杯。1464 は瓦器椀。1465 は龍泉窯系青磁碗。1466 は土師質土器足釜。

ＳＸ 542 裏込め出土遺物（1461）　1461 は土師質土器鍋。

ＳＸ 542 構成遺物（1468 ～ 1481）　1468 ～ 1470 は弥谷寺周辺産（柏・松田Ｂ１類）。1468 は宝篋印塔基礎部。上下端面にほぞ穴が認められる。上部は２段の段形。側面の表裏２面には格狭間が、残り２面には三角形と方形の文様が掘り込まれている。格狭間の形は室町期のものである。1469 は宝篋印塔笠部。上下端面にほぞ穴はない。上部は５段の段形で、下２段の幅が広い。下部は１段の段形。1468・1469 は同一個体の可能性が高い。1470 は五輪塔火輪。上端部のみにほぞ穴。軒は両端に向かって反り、軒端は垂直に切られる。屋根はゆるく外反しながら傾斜を持つ。



木樋接合部断面模式図

1. 10YR4/3～5Y4/1 にぶい黄褐色～灰色砂質シルト　底部は灰色をおびる　SD711
2. 5Y6/1 灰色砂質シルト　炭化物をわずかに含む　近世初頭整地層(Ⅱ層)
3. 10YR3/3 暗褐色粗砂　近世初頭整地層(Ⅱ層)
4. 7.5Y6/1 灰色シルト質粘土　近世初頭整地層(Ⅱ層)
5. 10YR6/8～2.5Y7/4 明黄褐色～浅黄色粗砂　近世初頭整地層(Ⅱ層)
6. 7.5Y5/1 灰色中粒砂　近世初頭整地層(Ⅱ層)
7. 5Y6/3 オリーブ黄色粘質シルト　近世初頭整地層(Ⅱ層)
8. 10YR3/3 暗褐色細砂～粗砂　近世初頭整地層(Ⅱ層)
9. 2.5Y6/6～10YR3/2 明黄褐色～黒褐色砂～シルト質砂　径0.5cm程度の7.5YR5/8 明褐色沈着 近世初頭整地層(Ⅱ層)
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト質砂と2.5Y7/4 浅黄色砂の混合層　径0.5cm程度の7.5YR5/8 明褐色沈着 近世初頭整地層(Ⅱ層)
11. 10YR3/1～10YR3/2 黒褐色シルト質砂　径0.5cm程度の2.5Y5/6 黄褐色沈着 近世初頭整地層(Ⅱ層)
12. 7.5Y5/2～7.5Y6/1 灰オリーブ色～灰色シルト質粘土　径0.5cm程度の2.5Y5/6 黄褐色沈着 近世初頭整地層(Ⅱ層)
13. 7.5Y5/1～10Y6/1 灰色粘質シルト～灰色シルト質砂　古代以前の堆積層(Ⅴa層)
14. 5Y5/2～10Y6/1 灰オリーブ色～灰色細砂～砂　2.5Y6/6 明黄褐色砂 古代以前の堆積層（Ⅴa層）

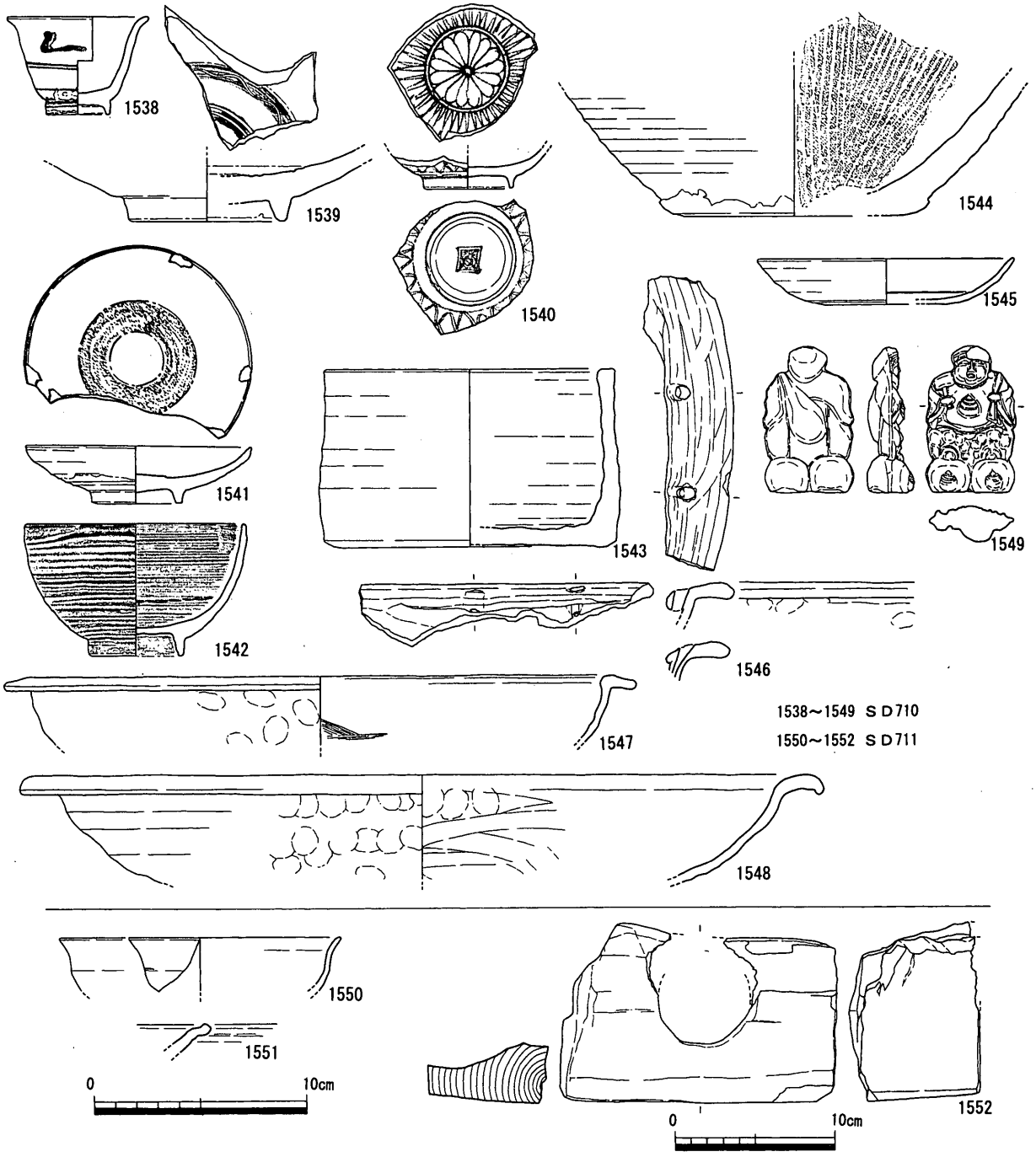
1. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト　SD710
2. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト　SD710
3. 5Y4/1 灰色砂質シルト　SD710
4. 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質シルト　SD710
5. 10Y4/1 灰色砂質シルト　4層の色調変化　SD710
6. N3(Y) 暗灰色粘土　SD710
7. 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト　層の下は粘性がやや強い　径0.5cmの 10YR5/6 黄褐色沈着 近世初頭整地層(Ⅱ層)
8. 5Y5/1 灰色砂質シルト　近世初頭整地層(Ⅱ層)
9. 5Y5/1 灰色細砂　古代以前の堆積層(Ⅴa層)

第157図　ＳＤ710・711 平・断面図

1471～1476は弥谷寺周辺産に類似するもの(柏・松田Ｂ２類)。径数cmの礫を含む。1471～1473は小型・簡素化した五輪塔火輪。軒の反りはなく、軒隅の突出も弱い。1473には方形のほぞ穴が確認できる。赤色粒を含む1474は弥谷寺周辺産（柏・松田Ｂ１類）としても違和感がない。1475・1476は地輪。いずれも下端面の掘り込みが浅く、1475には工具痕がある。

1477は火山石（柏・松田Ａ類）の層塔。上面にほぞ、下面にほぞ穴が確認できる。屋根は緩く直線的に下り、軒は若干斜めに傾斜する。本来は、ＳＸ004を構成する242・243と同一塔と考えられ、上から1477→243→242の順で層を構成していたと思われる。

1478～1481は豊島石の五輪塔火輪。1478～1480は上面のみにほぞ穴がある。軒は反っていな



第158図　ＳＤ710・711 出土遺物

い。屋根は直線的に傾斜して軒付近で大きく外反しながら軒隅に至る。軒隅の突出が弱く、軒幅の小さな円形のほぞ穴を持つもの（1478・1480）と軒幅は強く突出、軒幅が大きく、方形のほぞ穴を持つもの（1479）がある。

時期　刷毛目碗1457から18世紀前半（松本・佐藤様相５）埋没と考えられる。

ＳＤ504（第151～154図）

Ｇ区中央部で検出した南北方向の溝。本溝は、前述のように並行するＳＤ502とともに道路の側溝であった可能性が想定できる。最終的にはブロックを多量に含む土で埋め戻されている。

また、Ｇ区北壁際では、本溝掘り下げ後に15世紀中葉～後半の井戸ＳＥ521を検出した。

ＳＤ504出土遺物（1482～1524）　1482は弥谷寺周辺産に類似する石材（柏・松田Ｂ２類）の五輪塔火輪。径数cmの礫を含有する。小型で軒は外反せず、軒隅の突出も弱い。屋根は直線的に傾斜し、途中で屈曲して軒隅に至る。1483は肥前系磁器碗。1484・1485は肥前系磁器皿。1486は肥前系陶器瓶。胴部には鉄釉が刷毛目状に施され、頸胴部境の釉色は浅黄色、口頸部は青色を呈している。1487・1488は肥前系陶器碗。1489は産地不明陶器。部分的にしか残存していないが、平面形は楕円形に近く、側面形は両端が反り上がる形状の鉢と推測される。底部外面には胎土目積みの痕跡が残る。内面には胎土目状の突起物が添付されている。この突起物には釉が掛かっているが、いずれも一部を欠損しており、窯詰め時に別個体と重ねられていたことが推測される。「内面に胎土目を添付→釉掛け→窯詰め」の工程が想定できるのであろうか。1490は備前灯明皿。1491～1494は土師質土器杯。1495は土師質土器杯転用の円盤状加工品。1496は備前鉢。1497は備前擂鉢。1498は土師質土器擂鉢。1499・1500は土師質土器鉢。1501・1502は瓦質土器羽釜。高松城跡（西の丸町地区）ＳＸｃ13出土資料（松本編2003　757・758）に比べて、口縁部の内傾度がやや強いように見える。

1503～1523は中世遺物で、本来はＳＥ521に伴うと考えられるもの。1503・1504は土師質土器小皿。佐藤ＢⅢ－５型式。1505～1510は土師質土器杯。1505・1506は１ａ型式、1507・1509は１ｃ型式、1508は１ｂ型式、1510は１ｄ型式。1511は白磁碗。1512は青磁碗。1513は瓦質焼成の楠井窯産擂鉢。1514は東播系須恵器鉢。1515は備前擂鉢。乗岡中世５ｂ期。1517は備前甕。1518・1519は亀山窯系須恵器甕。1520・1521は土師質土器鍋。1522・1523は瓦質土器羽釜。1524飯蛸壺。吊手部上端面にはナデによる若干の窪みが認められる。

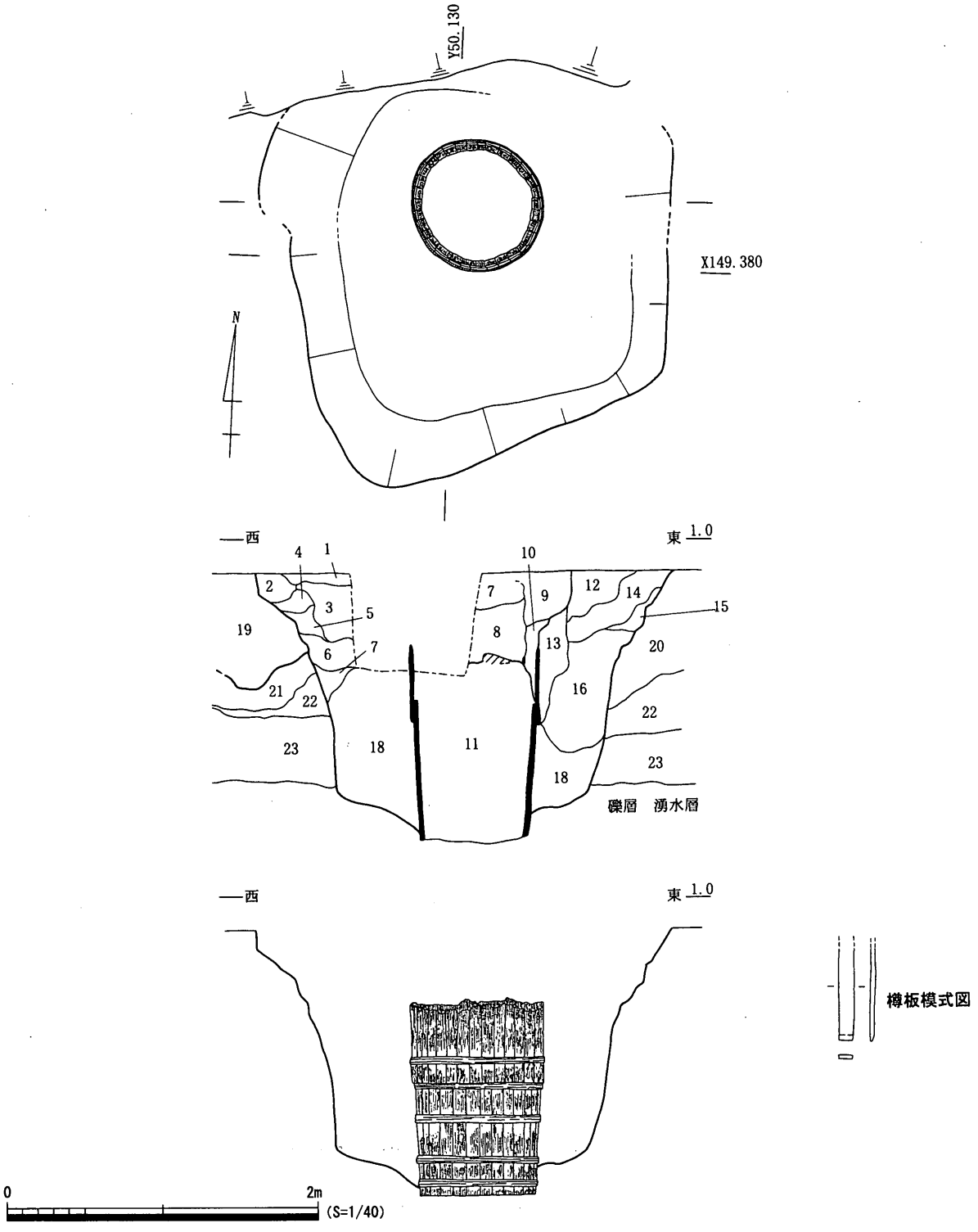
時期　二重網目文を施す1483、刷毛目碗1487、蛍手碗1488、備前灯明皿1490から18世紀前半（松本・佐藤様相５）埋没と判断できる。

ＳＤ703（第155・156図）

Ｉ区東部で検出した南北方向の水路と考えられる溝。周辺地形から、南から北への流水方向が考えられる。Ｉ区北端ではＳＫ711に一部破壊されている。

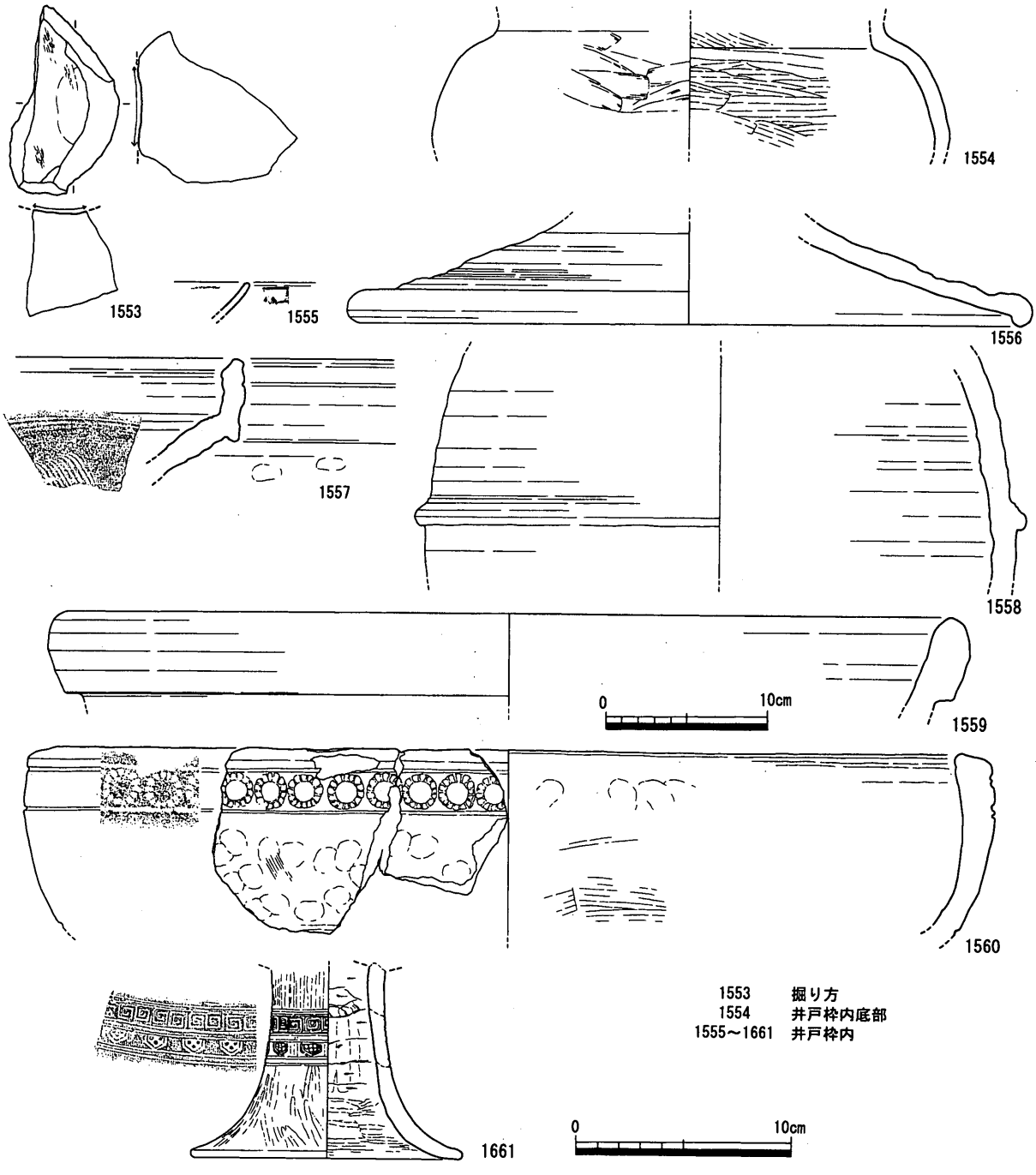
出土遺物（1525～1534）　1525は肥前系磁器碗。1526は肥前系陶器碗。1527は施釉陶器碗。1528・1529は肥前系陶器鉢。1530は土師質土器皿。1531は備前擂鉢。1532は鍋。1533・1534は御厩系焙烙。

時期　1525・1526・1531から18世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。



1. 10YR5/2 灰黄褐色弱粘質土 **埋め戻し土**
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 Fe?Mn?の沈着あり **埋め戻し土**
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 7.5YR5/6 明褐色砂質土・2.5Y6/3 にぶい黄色粘土・5Y4/1 灰色粘土ブロックを多く含む 炭化物含む **埋め戻し土**
4. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土ブロック含む **埋め戻し土**
5. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土 4層より橙色味強い **埋め戻し土**
6. 7.5Y4/1 灰色粘質土 7.5YR7/6 明褐色砂質土・2.5Y6/3 にぶい黄色粘土ブロック 多く含む 炭化物少量含む **埋め戻し**
7. 10YR4/2 灰黄褐色弱粘質土 埋め戻し土
8. 10YR4/2 灰黄褐色弱粘質土 10YR5/6 黄褐色砂多く含む 井戸枠近く5.0～10.0cm大の安山岩礫多くあり **埋め戻し土**
9. 10YR4/1 褐灰色弱粘質土 Mnの沈着激しい **埋め戻し土**
10. 10YR4/3 にぶい黄褐色弱粘質土 5Y4/1 灰色粘質土ブロック含む **埋め戻し土**
11. N3(YR) 暗灰色粘質土 5.0～30.0cm大の安山岩礫多量に含む、伊野氏間に土がある感じ **井戸枠裏込め**
12. 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質土 N4(Y)暗灰色粘土・2.5Y6/1 黄灰色・7.5Y5/3 灰オリーブ色粘土ブロックを密に含む **井戸枠裏込め**
13. 5Y4/1 灰色弱粘質土 2.5Y5/4 黄褐色・7.5Y5/3 灰オリーブ色粘土ブロック多く含む **井戸枠裏込め**
14. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 N4(Y) 暗灰色粘土・2.5Y6/1 黄灰色粘土ブロック含む **井戸枠裏込め**
15. 2.5Y5/1 黄灰色砂質土 **井戸裏込め**
16. 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 N4(Y) 暗灰色・7.5Y5/3 灰オリーブ色粘土ブロック含む **井戸枠裏込め**
17. 2.5Y4/1 黄灰色弱粘質土 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土ブロック含む **井戸枠裏込め**
18. 10BG4/1 暗青灰色砂質土 **井戸枠裏込め**
19. SD013
20. 2.5Y5/3 オリーブ褐色砂質土 **中世前半堆積層？(Ⅳ層？)**
21. 5Y5/4 オリーブ色砂質土 5Y5/6 オリーブ色砂質土含む
22. 5Y4/2 灰オリーブ色粘質土 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土ブロック、10YR5/6 黄褐色粘土ブロック・N4/ 灰色粘土ブロック含む
23. 5B3/1 暗青灰色粘質土 砂粒多く含む **古代以前の堆積層(Ⅴa層)**

第159図 ＳＥ301平・断面図



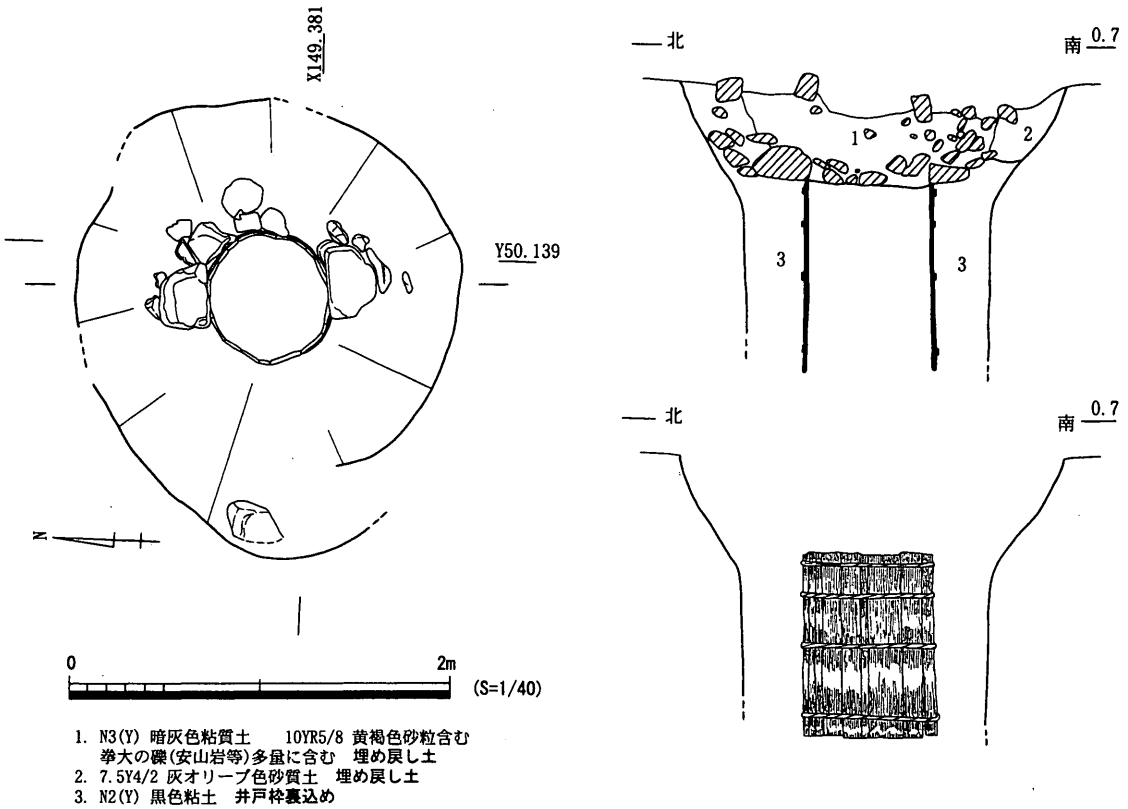
第160図　ＳＥ301出土遺物

ＳＤ 704（第 155・156 図）

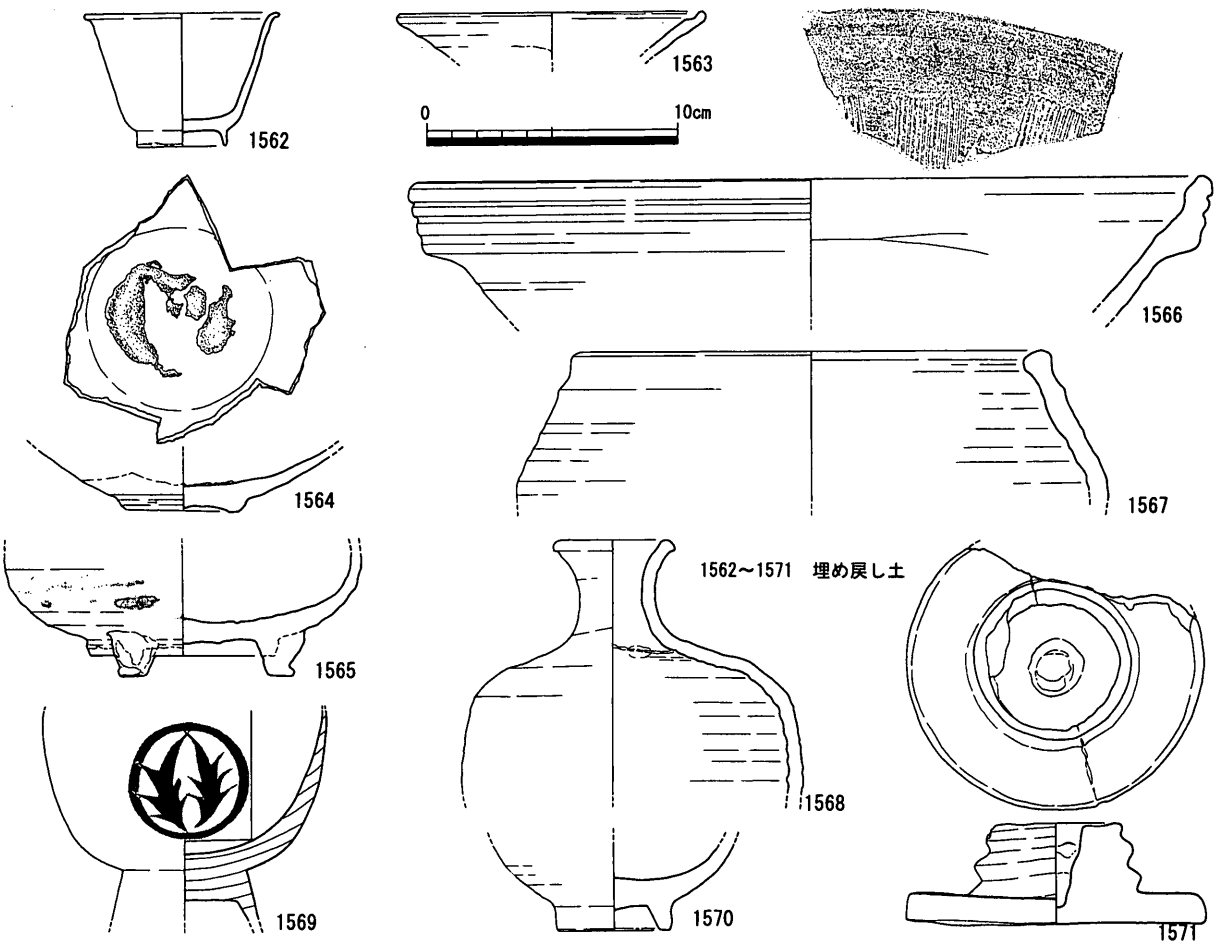
Ｉ区東部で検出した断面Ｖ字型の溝。ＳＤ 703 と同様、南北方向の水路と考えられる遺構。埋土はブロックを多量に含み、人為的な埋め戻しが行われたことがわかる。ＳＤ 703 とは近接し、断面形も異なることから同時併存は考えにくく、出土遺物からは、ＳＤ 703 に先行するものと想定できる。

出土遺物（1533 ～ 1537）　1535 は肥前系磁器碗。1536 は平瓦転用の円盤状加工品。1537 は肥前系陶器碗。砂目積みの痕跡が残る。

時期　出土遺物は少量であるが、1535・1537 から 17 世紀後半（松本・佐藤様相４）埋没と考えたい。



第161図　ＳＥ302平・断面図



第162図　ＳＥ302出土遺物

ＳＤ 705（第 155 図）

Ｉ区中央部で検出した南北方向の浅い溝。埋土中に流水の痕跡は見られず、壁面の立ち上がりが緩やかで、底部も不定形であることから落ち込み状遺構の可能性もある。

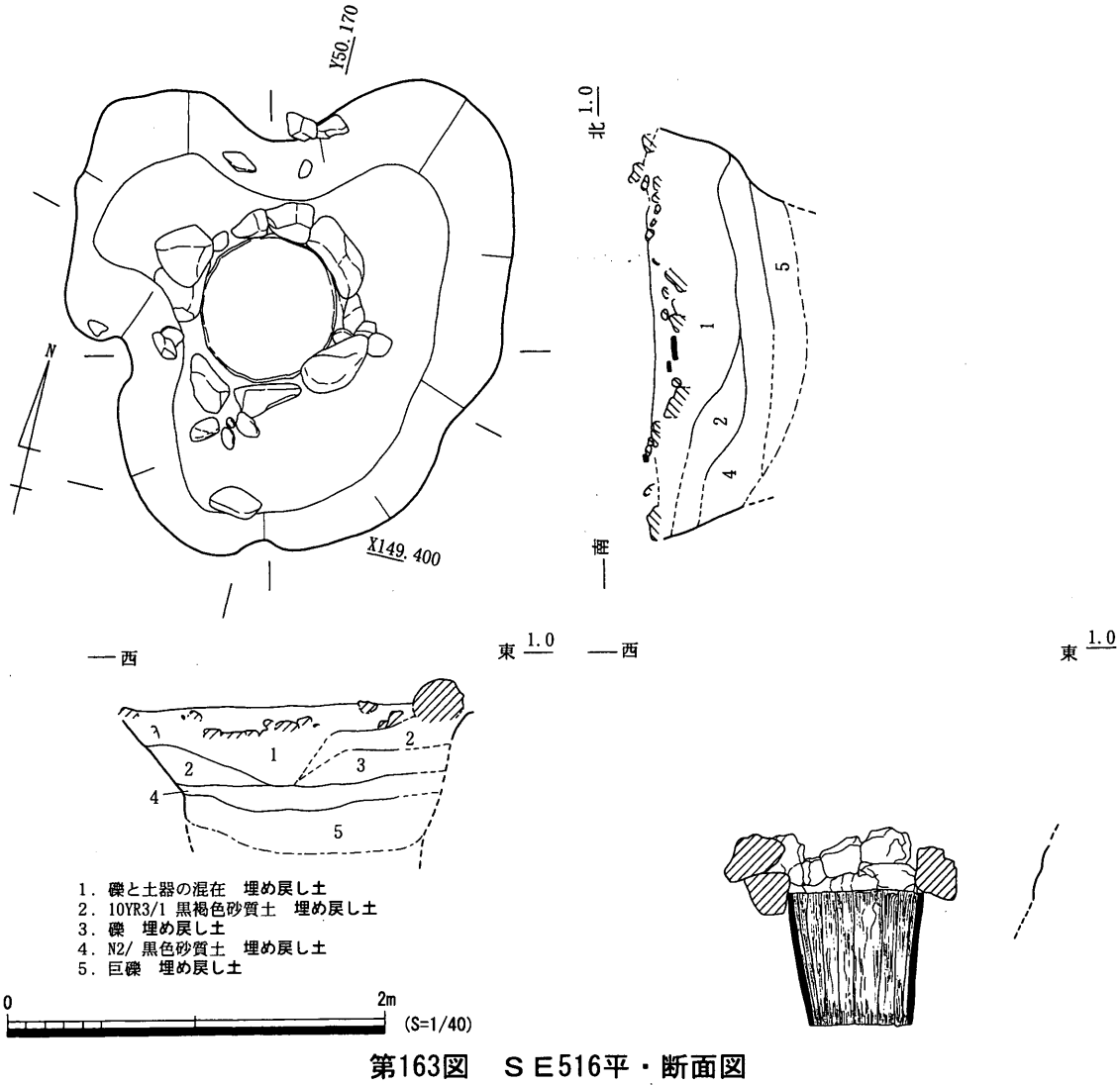
時期　少量出土した遺物は 17 世紀初頭に比定できるものの、Ⅱ層上面で検出した遺構であるため、17 世紀中葉以降であることは確実である。

ＳＤ 710（第 157・158 図）

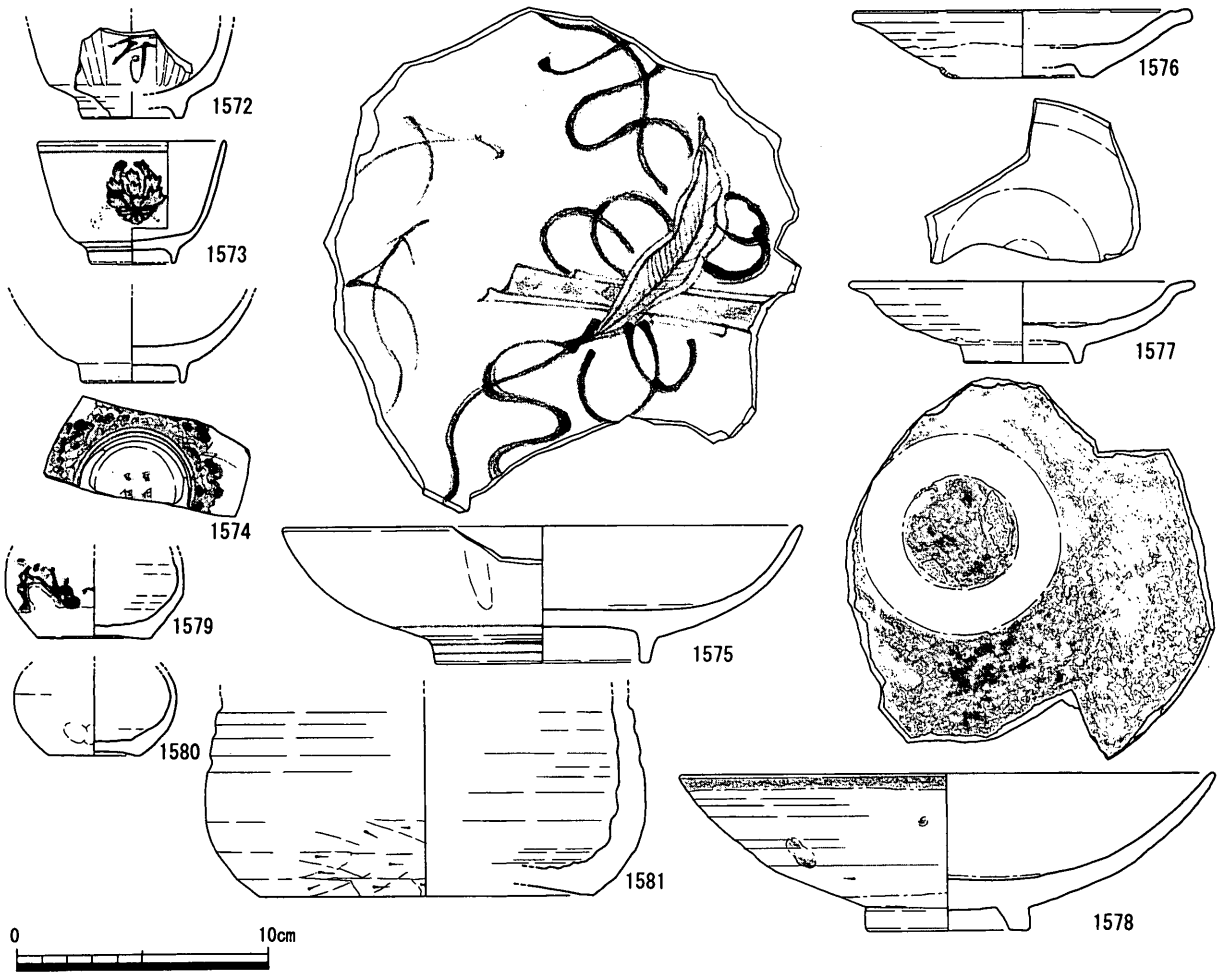
Ｊ区東部で検出した南北方向の溝。底面の埋土からは流水の痕跡は認められない。

出土遺物（1538 ～ 1549）　肥前系磁器小杯。1539 は肥前系磁器皿。1540 は肥前系磁器碗。1541 は肥前系磁器皿。1542 は肥前系陶器碗。1543 は備前鉢。1544 は備前擂鉢。1545 は土師質土器杯。1546 ～ 1548 は御厩系焙烙。1549 は大黒天を模した型成形の土製玩具。

時期　1542・1548 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）埋没と考えられる。



第163図　ＳＥ516平・断面図



第164図　ＳＥ516出土遺物（１）

ＳＤ 711（第 157・158 図）

Ｊ区中央部で検出した南北方向の木樋。Ｊ区南部で検出した接続部材には、南北方向に貫通するように孔が設けられている。南側の孔が、北側のものに比べて若干高い位置にあり、南から北への導水が考えられる。

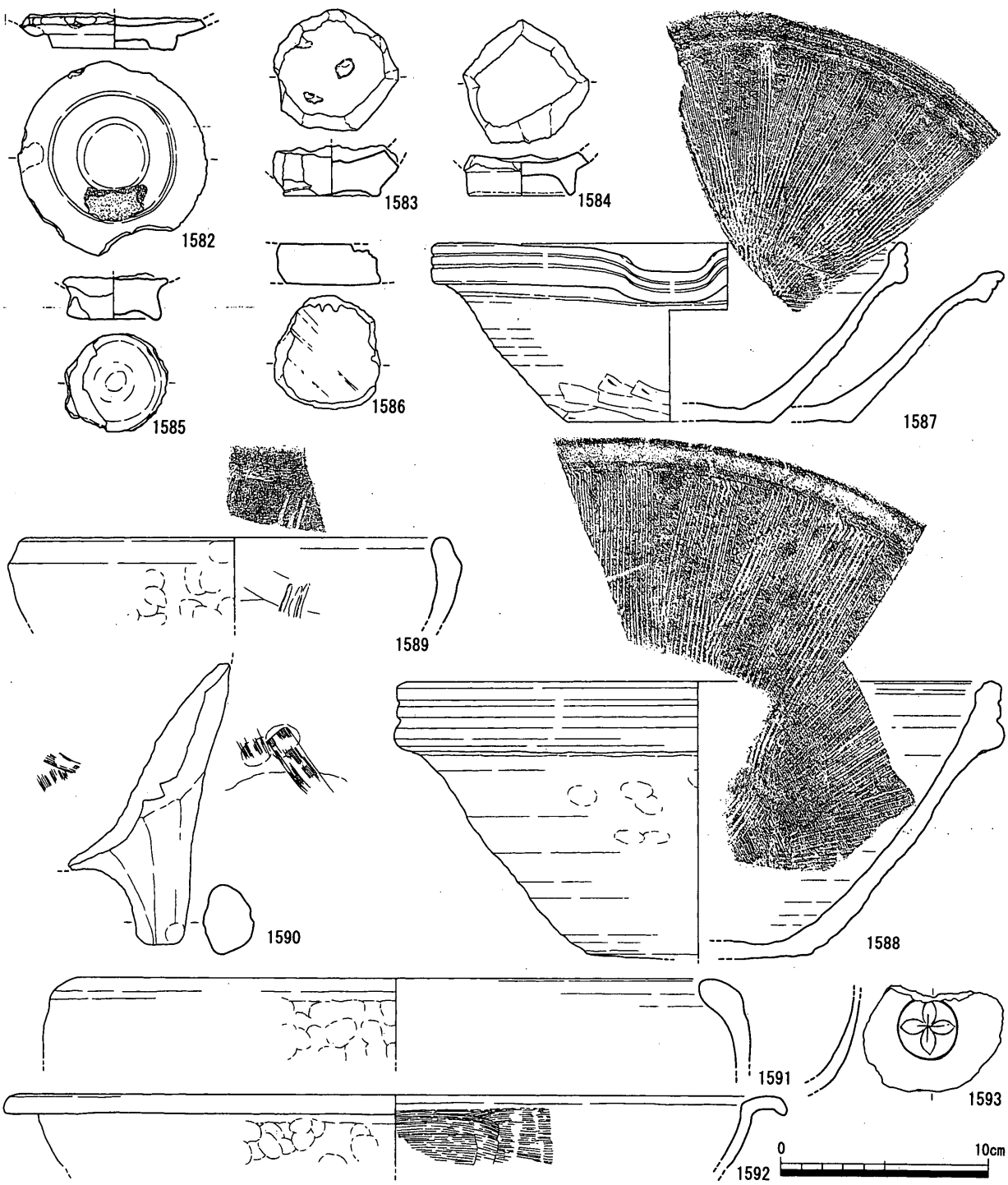
出土遺物（1550 ～ 1552）　1550 は肥前系磁器皿小片。1551 は肥前系陶器碗小片。いずれも木樋の掘り方内からの出土。1552 は木樋接続部材。

時期　出土陶磁器は小片で少量であることから時期決定は困難であるが、17 世紀中葉以降と考えたい。

井戸（ＳＥ）

ＳＥ 301（第 159・160 図）

Ｄ区西部で検出した井戸。井側は結物２段で構成されているが、上段の上半部は残存していない。土層の観察からは、井側の抜き取り痕が確認できないため、上段結物の上半部は腐食したと思われる。井側の下端部は湧水層に達している。廃絶に際して、礫とブロックを多量に含む土で埋め戻されている。



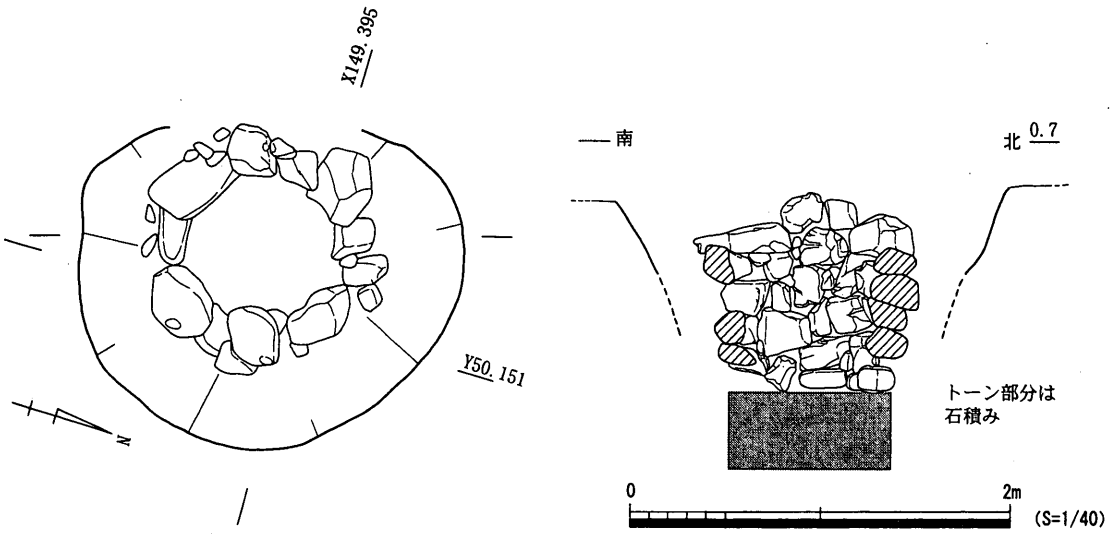
第165図　ＳＥ516出土遺物（２）

掘り方出土遺物（1553）　1553 は安山岩製の砥石。使用痕が確認できる１面以外は折損している。

井戸枠内底部出土遺物（1554）　1554 は瓦質土器羽釜。

埋め戻し土出土遺物（1555 ～ 1661）　1555 は漳州窯系青花碗。1556 は施釉陶器蓋。1557 は備前擂鉢。乗岡近世０ａ期(中世６ａ期)。1558 は備前水屋甕か。1559 は備前大甕。1560 は瓦質土器火鉢。胎土は粗く、在地産の可能性が高い。1561 は瓦質土器花瓶。1560・1561 中世の瓦質土器であるが、二次焼成のためか、ともにカーボンの付着は認められない。

時期　本遺構の埋没時期は、1555 から 16 世紀末～ 17 世紀初頭と考えられる。長期間の使用が想定しやすい備前擂鉢 1557（16 世紀前半に比定可）についても組成上は違和感がない。1554・1556



第166図　ＳＥ519平・断面図

の帰属時期は不明ながら近世の遺物と考えられ、明らかな中世遺物 1560・1561 については混入とするのが妥当であろう。

ＳＥ 302（第 161・162 図）

Ｄ区東部で検出した井戸。1 段の結物の直上には板状の安山岩礫が円形に配され、更に上位には多量の礫がみられたことから、結物の上位に石積みを持った井戸であると思われる。

出土遺物（1562 ～ 1571）　1562 は肥前系磁器小杯。1563 は肥前系陶器溝縁皿。1564 は砂目積み痕が残る肥前系陶器皿。1565 は３方向に脚部をもつ肥前系陶器碗。1566 は備前擂鉢。乗岡中世２ｂ期か。1567 は土師質土器鉢。1568 は備前徳利。1569 は漆器椀。金で施されたと思われる家紋は剥がれ落ち、痕跡のみ認められる。1570 は中世の青磁碗。混入品であろう。1571 は土師質のねじ。バリが残存し、型成形であることが分かる。完成品であるが、近代以降の混入の可能性も考えられる。

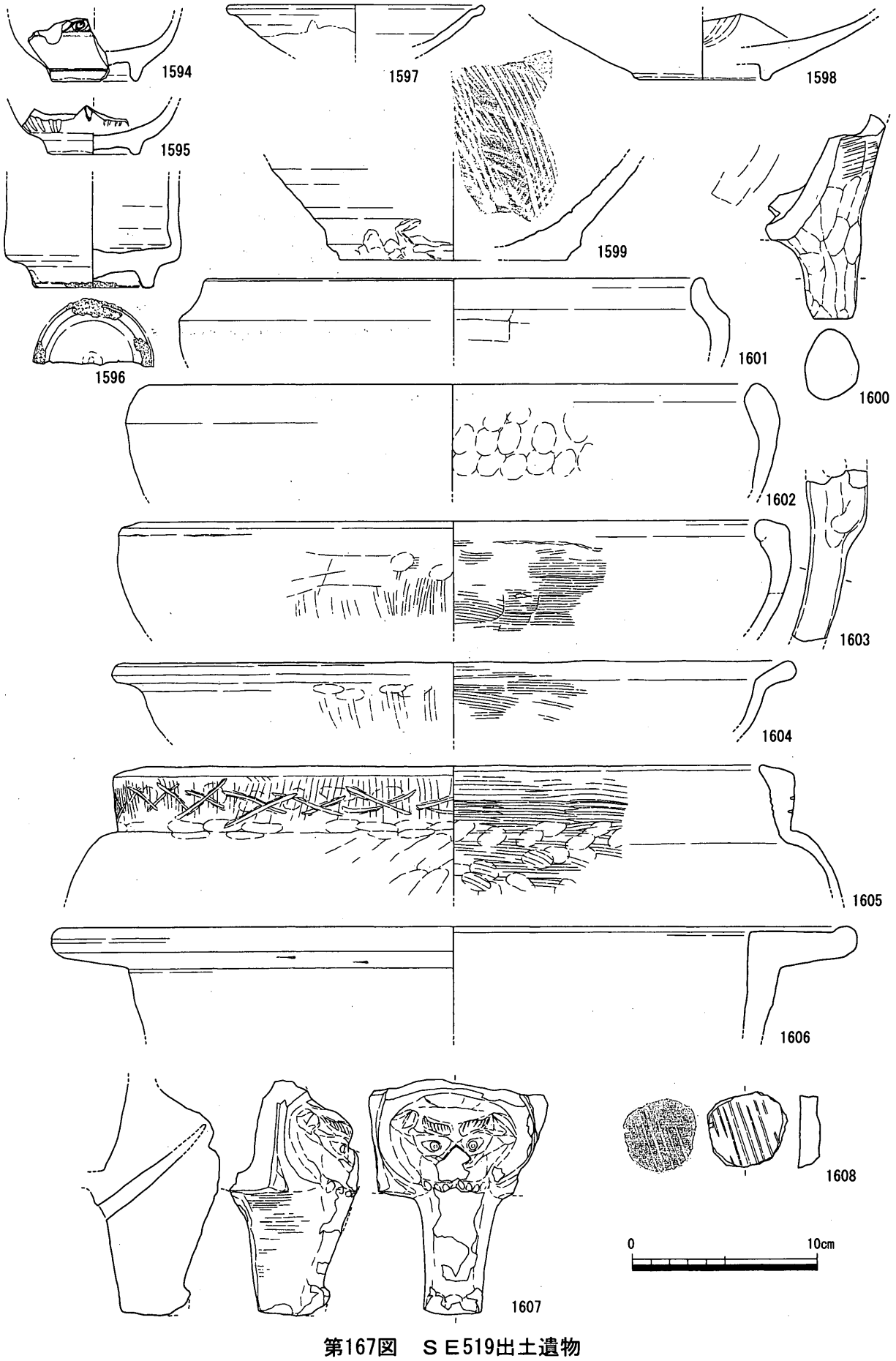
時期　1566 から 17 世紀後半（松本・佐藤様相４）と考えられる。

ＳＥ 516（第 163 ～ 165 図）

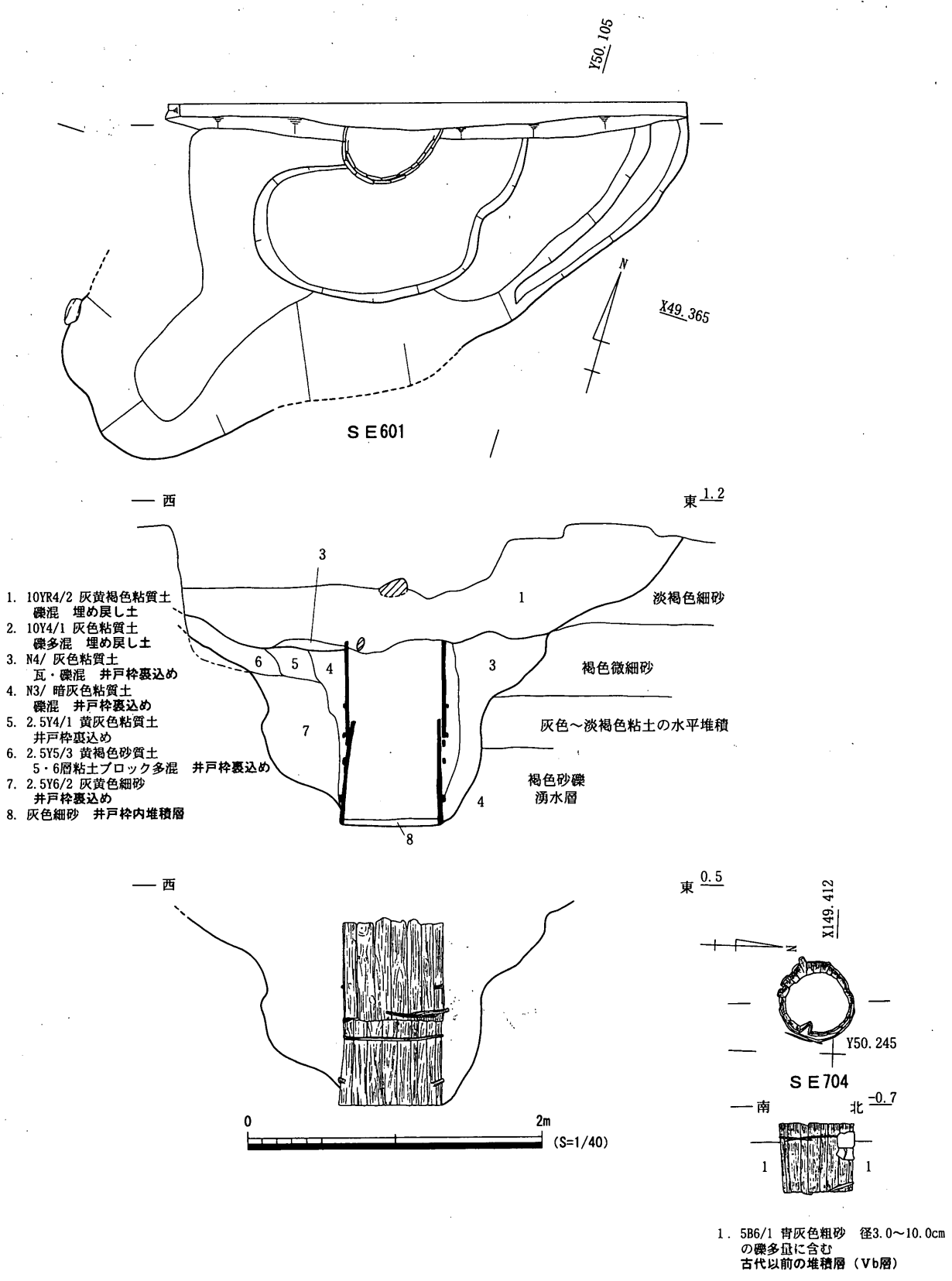
Ｇ区中央部で検出した、結物１段の上位に石積みをもつ構造の井戸。石積みは１～２段しか残存しておらず、埋め戻し土中には多量の礫が含まれていることから、廃絶時には石積みの上部が破壊されたことがわかる。

出土遺物（1572 ～ 1593）　1572 ～ 1574 は肥前系磁器碗。コンニャク印判で文様が施されている。1573 には漆継の痕跡が確認できる。1575 は肥前系磁器皿。1576 は肥前系陶器溝縁皿。1577・1578 は蛇ノ目釉剥ぎが認められる肥前系陶器皿。1579・1580 は備前壺。1581 は備前鉢。1582 ～ 1586 は円盤状加工品。1582 は畳付部分に砂目積み痕が残る肥前系陶器、1583 は肥前系陶器、1584 は京・信楽系陶器碗、1585 は胎土中に黒雲母を多量に含む土師質土器、1586 は平瓦の転用。1587・1588 は乗岡近世３期の備前擂鉢。1590・1591 は土師質土器鉢。1592 は御厩系焙烙。1593 は漆器椀。

時期　1573 ～ 1588 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）廃絶と考えられる。



第167図　ＳＥ519出土遺物

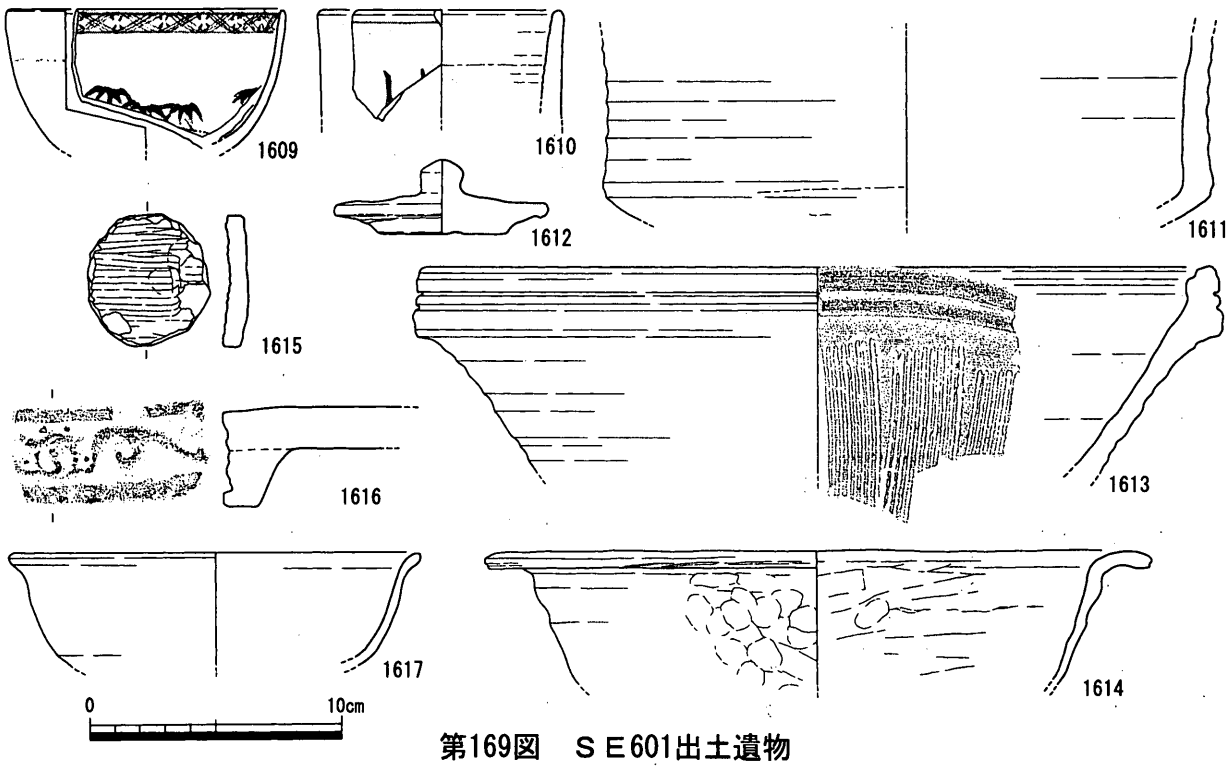


第168図　ＳＥ601・704平・断面図

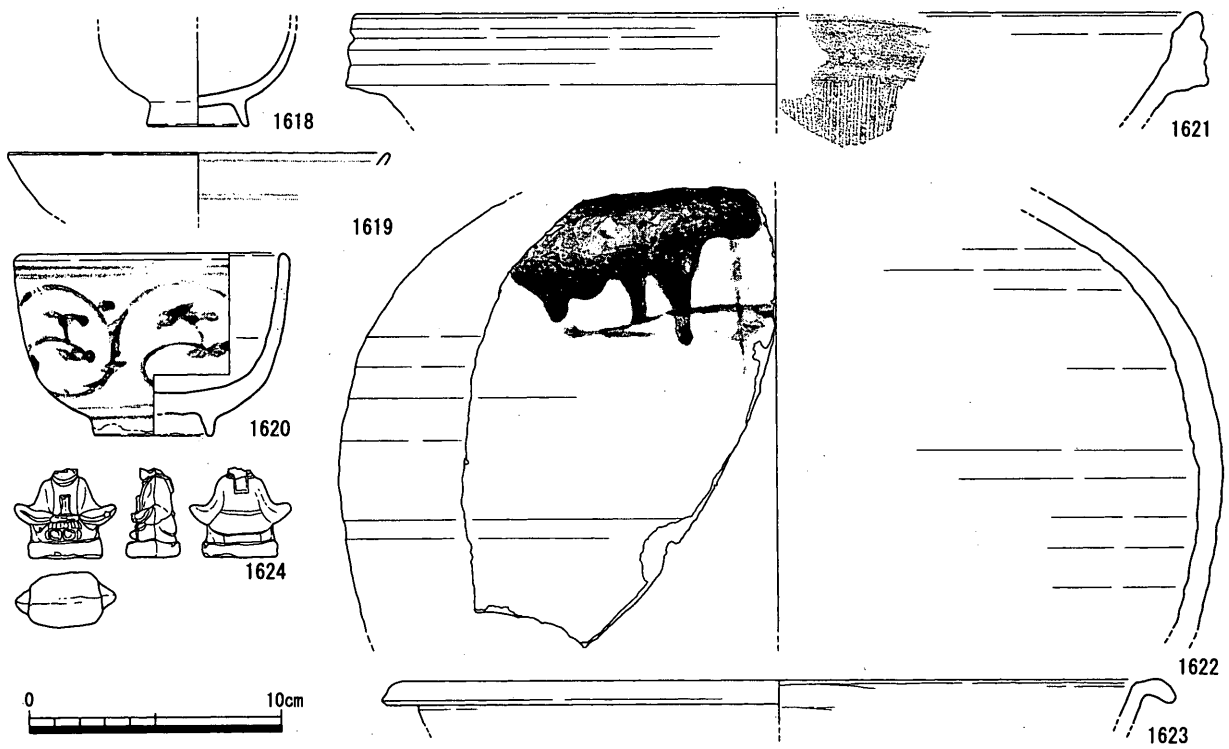
ＳＥ519（第166・167図）

Ｇ区南西部で検出した石積みの井戸。調査途中で崩落したため、最下部まで図化できなかったが、第116図のトーン部分まで石積みが認められた。

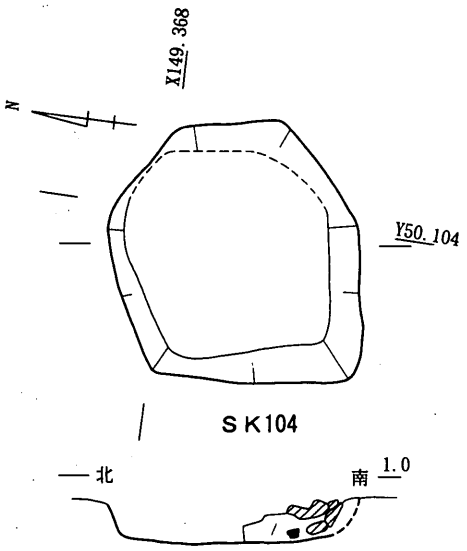
出土遺物（1594 ～ 1608） 1594・1595 は肥前系磁器碗。1596 の碗は肥前系陶器か。1597・1598 は肥前系陶器皿。1599 は備前擂鉢。斜め方向の擂り目から、乗岡近世 1 期の所産と判断できる。1600 ～ 1602 は土師質土器鉢。1561 の口縁直下には、強い回転ナデを施されることにより、屈曲部が形成されている。1603 は外耳付きの土師質土器鍋。1604 は御厩系焙烙。1605・1606 は器種不明



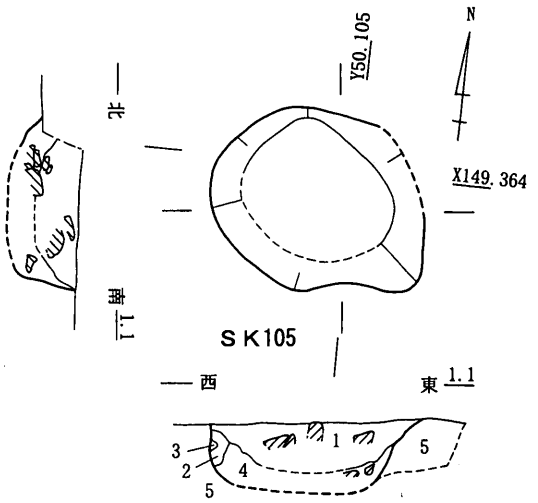
第169図　ＳＥ601出土遺物



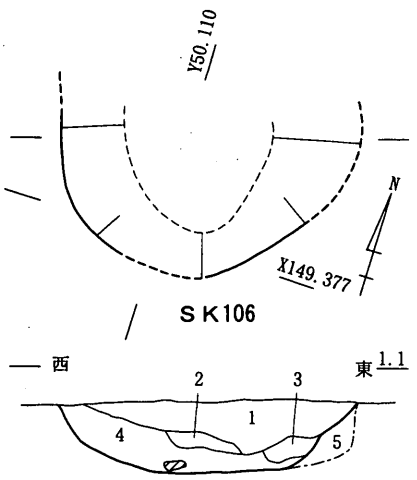
第170図　ＳＫ007出土遺物



1. 10YR3/2 黒褐色粘質土

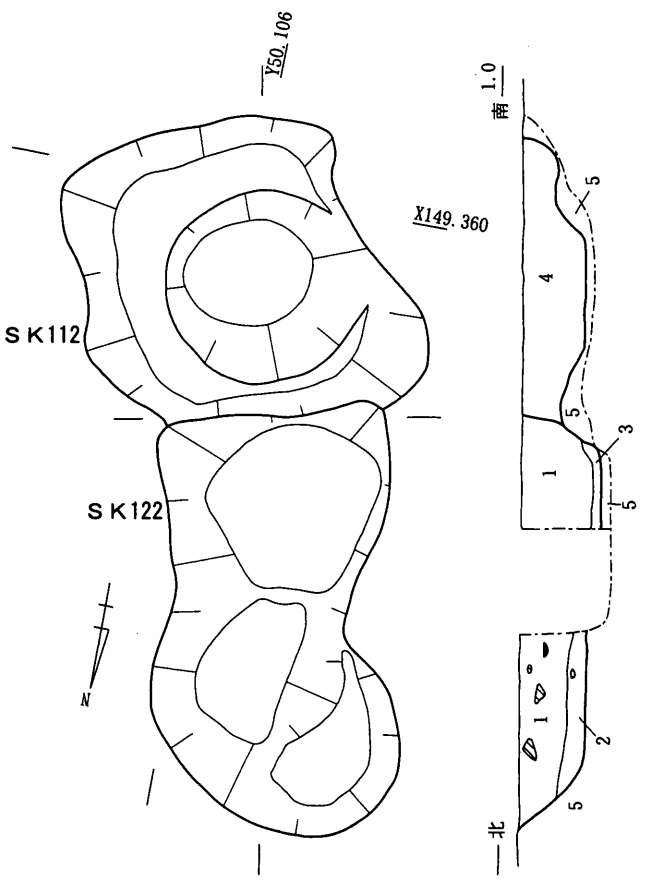


1. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土
2. 炭化物層
3. 2.5Y5/4 黄褐色粘質土
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土　炭多混
5. 2.5Y5/3 黄褐色細砂質土　中世前半堆積層(Ⅳ層)



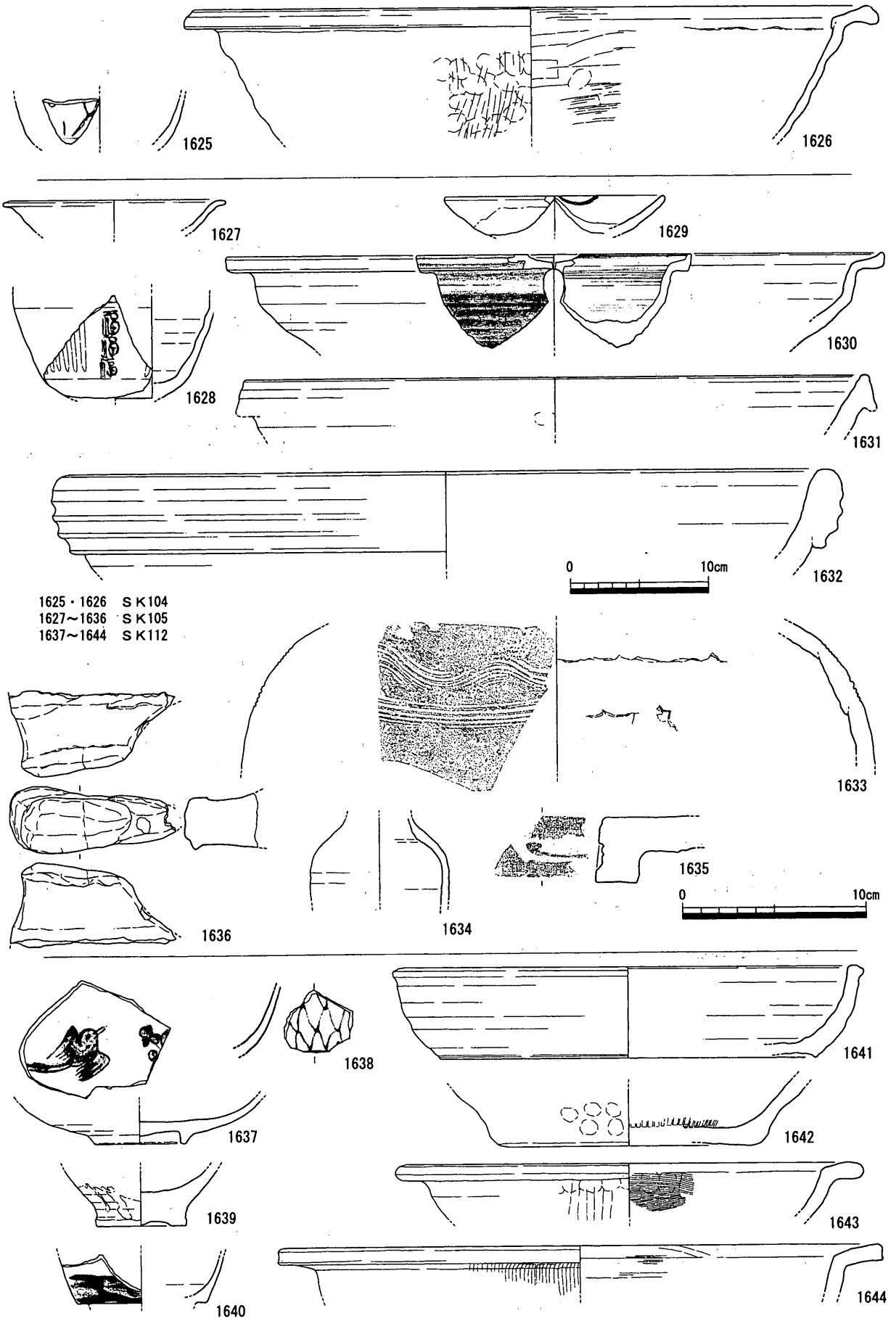
1. 10YR3/2 黒褐色粘質土　炭化物多混　焼土少混
2. 10YR3/2 黒褐色粘質土　2.5Y5/6 粘土小ブロック多混
3. 2.5Y7/4 浅黄色細砂質土
4. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土　炭化物少混　羽釜完形品混
5. 10Y7/6 明黄褐色細砂　中世前半堆積層(Ⅳ層)

0　2m
(S=1/40)



1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土　2.5Y5/6 粘土小ブロック　炭化物多混
2. 2.5Y4/2 細砂質土
3. 黒色炭化物
4. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土　2.5Y5/6 粘土ブロック多混
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土　中世前半堆積層(Ⅳ層)

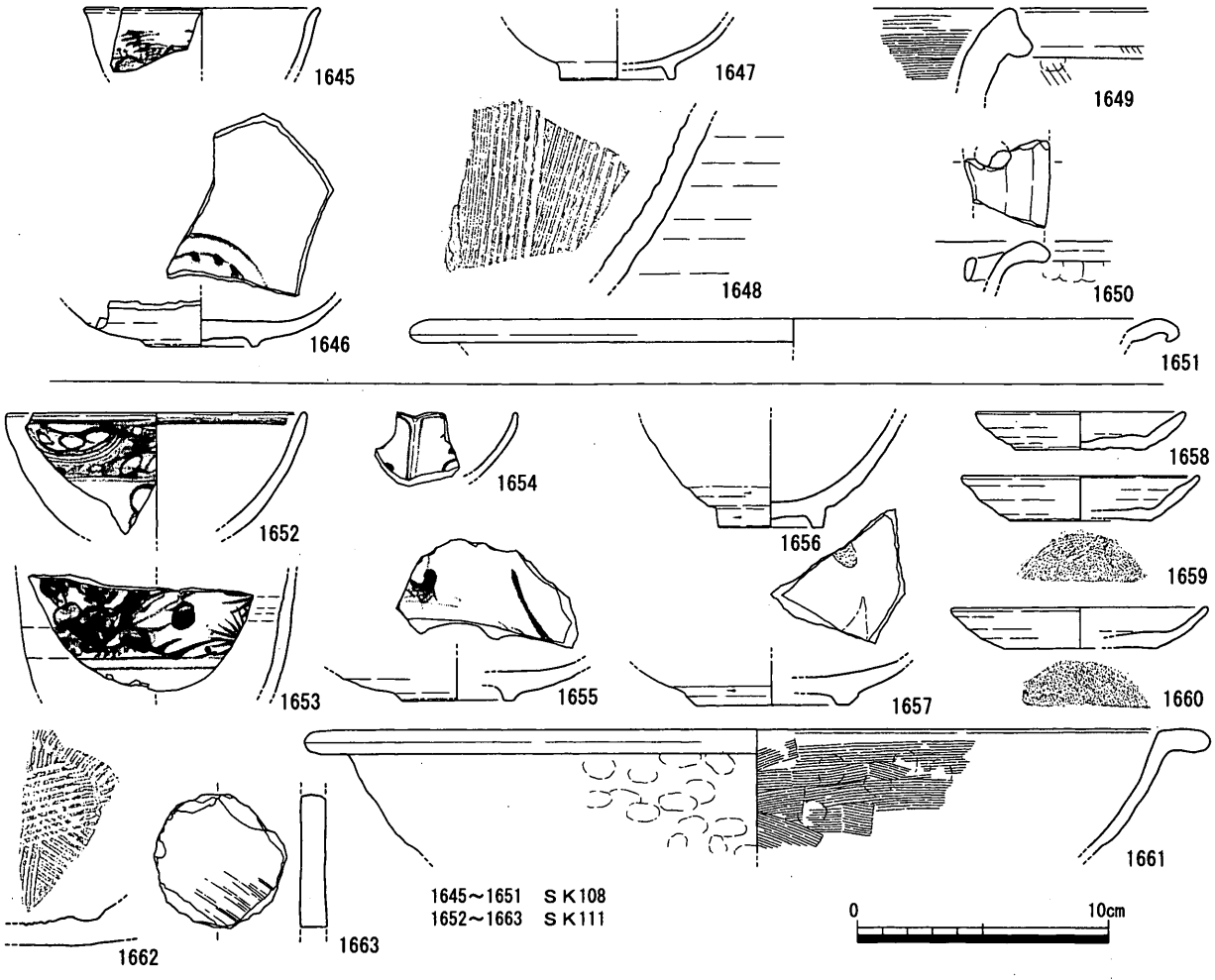
第171図　SK104・105・106・112・122平・断面図



第172図　ＳＫ104・105・112出土遺物

1. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土　炭混　SK108
2. 2.5Y5/3 黄褐色細砂　SK108
3. 2.5Y5/3 黄褐色細砂　SK108
4. 2.5Y6/2 灰黄色砂質土　炭混　SK108
5. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土　SK108・SK111
6. 2.5Y5/3 黄褐色細砂　炭多混　SK108
7. 黒色炭化物　SK108
8. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　炭混　SK111
9. 2.5Y5/4 黄褐色細砂　中世前半堆積層(Ⅳ層)
10. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土　炭・2.5Y8/6 黄色粘土塊混　SK128
11. 5Y6/3 オリーブ黄色細砂　中世前半堆積層(Ⅳ層)
12. 10YR3/1 黒褐色粘質土　炭混　SK111
13. 5Y2/1 黒色粘質土　炭多混　SK111
14. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土　SK111
15. 2.5Y2/1 黒色粘質土　SK111
16. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂　炭色粘質土混　SK111
17. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂　SK111
18. 10YR3/2 黒褐色粘質土　炭少混　SK126
19. 10YR2/3 黒褐色粘質土　炭混　SK126
20. 2.5Y7/3 浅黄色細砂　炭極多混　SK126
21. 10YR3/2 黒褐色粘質土　炭少混　SK126
22. 黒色炭化物　SK126
23. 2.5Y7/2 灰黄色細砂　炭多混　SK126
24. 5Y3/2 オリーブ黒砂質土　炭混　SK108
25. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土　SK108
26. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土　SK108
27. 2.5Y5/4 黄褐色細砂　中世前半以前の堆積層(Ⅳ・Ⅴ層)

第173図　ＳＫ108・111・126・127・128平・断面図



第174図　ＳＫ108・111出土遺物

の瓦質土器。1607は瓦質土器火鉢の脚部。内面から外面に向かって穿孔が行われているが、貫通はしていない。この穿孔の目的は不明である。1608は備前擂鉢を転用した円盤状加工品。

時期　1594・1595・1604から17世紀後半～18世紀前半（松本・佐藤様相４・５）と考えられる。

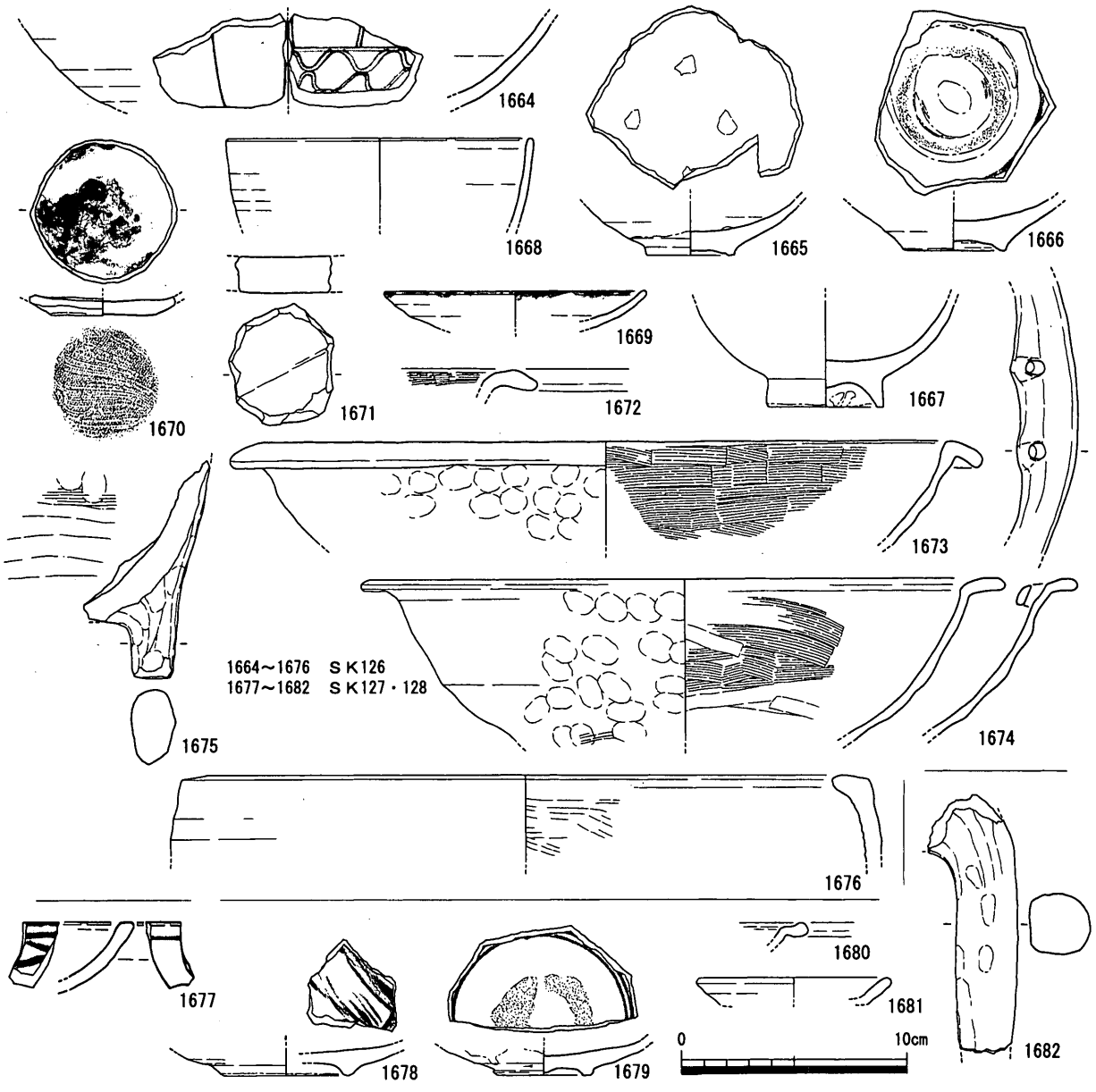
ＳＥ601（第168・169図）

Ｈ区西部で検出した、結物２段を井側とする井戸。下段結物の中位で湧水層に達している。遺構面から検出した結物上端までは70cm程度の間がみられることから、井側としてさらに上部構造を有していたことは間違いない。また、土層の観察からは、本井戸廃絶時に上部構造の抜き取りが行われたことが看守できる。

出土遺物（1609～1617）　1609・1610は肥前系磁器碗。1611は瀬戸・美濃系陶器碗。1612は肥前系陶器蓋。1613は備前擂鉢。擂り目がやや密であることから、乗岡近世３期と思われる。1614は瓦質土器鍋。1615は土師質土器鉢転用の円盤状加工品。1616は軒平瓦。1617は龍泉窯系青磁碗。中世の混入であろう。

時期　1609・1610・1613から17世紀後半～18世紀前半（松本・佐藤様相４・５）廃絶と考えられる。

ＳＥ704（第168図）



第175図　ＳＫ126、ＳＫ127・128出土遺物

Ｊ区東部で検出した結物を井側とする井戸。本遺跡で確認できる他の井戸と比べて、小規模である。検出部分より上位の構造については、撹乱のため不明である。また、北東部の裏込め部分には平瓦が詰められている。

時期　裏込め内から出土した平瓦以外の遺物が確認できなかったため、時期は不明であるが、周辺には17世紀前葉～18世紀前半の遺構が認められるため、ほぼ同時期の所産であると思われる。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ007（第170図）

Ａ区北東部で検出した楕円形の土坑。

出土遺物(1618～1624)　1618は肥前系磁器碗。1619は肥前系磁器皿。1620は陶胎染付碗。1621

は備前擂鉢。1622 は施釉陶器壺。

時期　1618・1619・1620・1621 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

ＳＫ 104（第 171・172 図）

Ｂ区中央部やや北西よりで検出した平面不定形の土坑。南端部の落ち込み部分からは安山岩礫数個が出土している。

出土遺物（1625・1626）　1625 は肥前系磁器碗。文様は一重網目文か。1626 は瓦質土器鍋。

時期　出土遺物が少量のため、断定はできないものの 17 世紀後半（松本・佐藤様相４）に比定できる。

ＳＫ 105（第 171・172 図）

Ｂ区中央部やや南西寄りで検出した土坑。炭化物を多量に含む埋土は本遺構の南に位置するＳＫ 112・122 と類似し、ＳＫ 105・112・122 で土坑列を形成するものと考えられる。

出土遺物（1627 ～ 1636）　1627 は磁器碗。1628 は肥前系磁器碗。1629・1630 は肥前系陶器皿。1631 は混入と考えられる東播系須恵器鉢。1632・1633 は備前甕。1634 は備前瓶。1635 は軒平瓦。1636 は把手状に成形された安山岩製の不明石製品。窪みの部分は摩滅しており、紐状のものを掛けて使用していたことが推測できる。

時期　1628・1630 から 17 世紀後半（松本・佐藤様相４）と考えられる。

ＳＫ 112・122（第 171・172 図）

ＳＫ 105 の南で検出した２基、もしくは３基の土坑。前述のように、埋土･位置関係からＳＫ 105 と土坑列をなしていた（Ｂ区西土坑列）と考えられるが、本土坑列の約 1.5 m東でも同様の土坑列が並列して存在する。

出土遺物（1637 ～ 1644）　1637 は肥前系磁器皿。1638 は肥前系磁器碗。1639 は肥前系陶器碗。1640 は肥前系陶器天目茶碗。1641 は備前鉢。1542 は土師質土器擂鉢。1643 は瓦質土器鍋。1644 は土師質土器鍋。

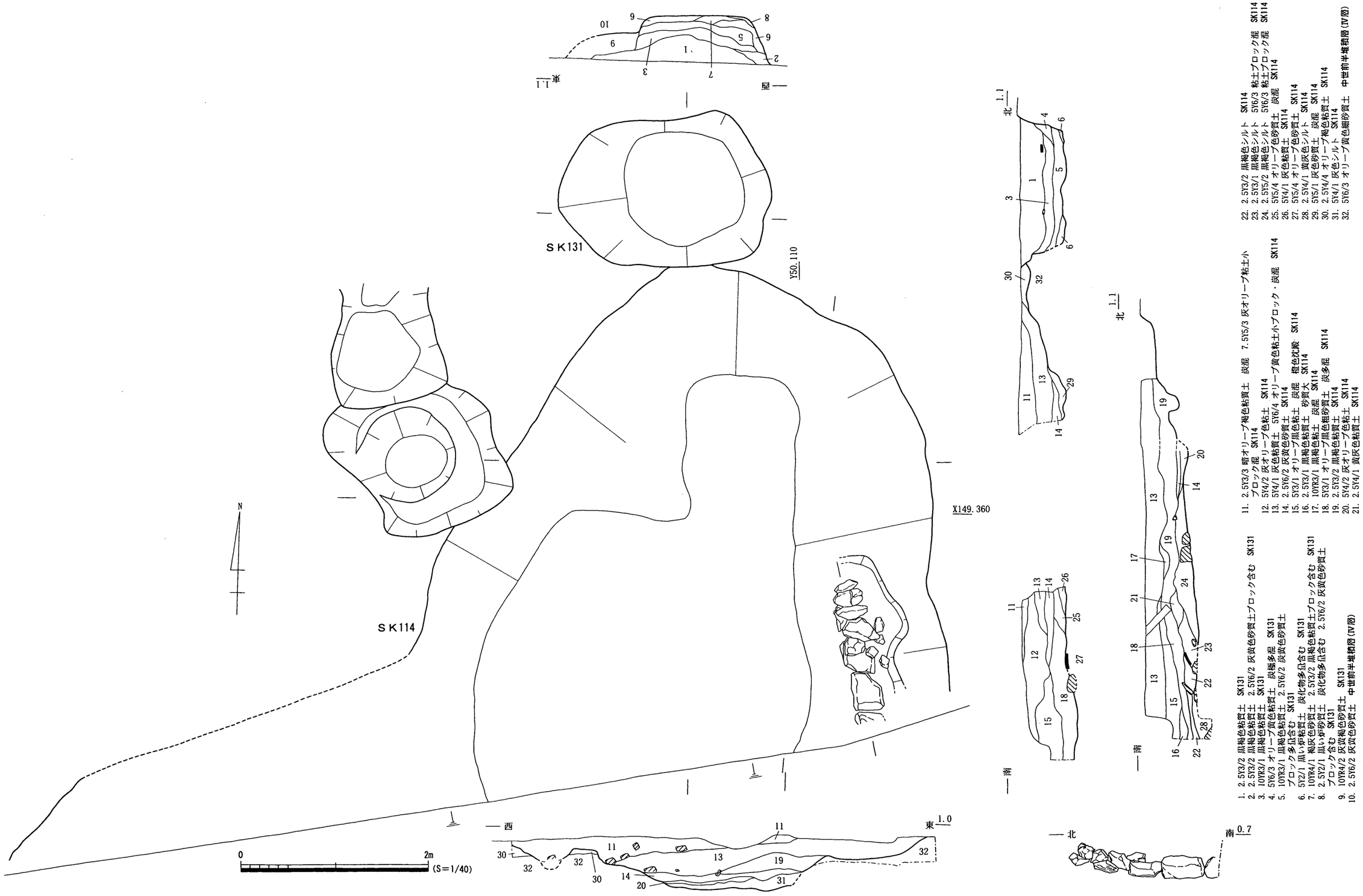
時期　1637、一重網目文が施された 1638 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

ＳＫ 108・111・126・127・128（第 173 ～ 175 図）

Ｂ区中央部で検出した南北方向の土坑列。この土坑列は、埋土中に炭化物・粘土ブロックを多量に含むことから人為的に埋め戻されたものであることは確実であり、廃棄土坑の可能性が高い。また、土坑間の埋土の峻別は困難で、土坑間の先後関係についても土質や含有物の微妙な差異での判断となっている。この埋土は 1.5m 西に位置する土坑列（ＳＫ 105・112・122）とも類似し、同様の性格を有する遺構群であると考えられる。

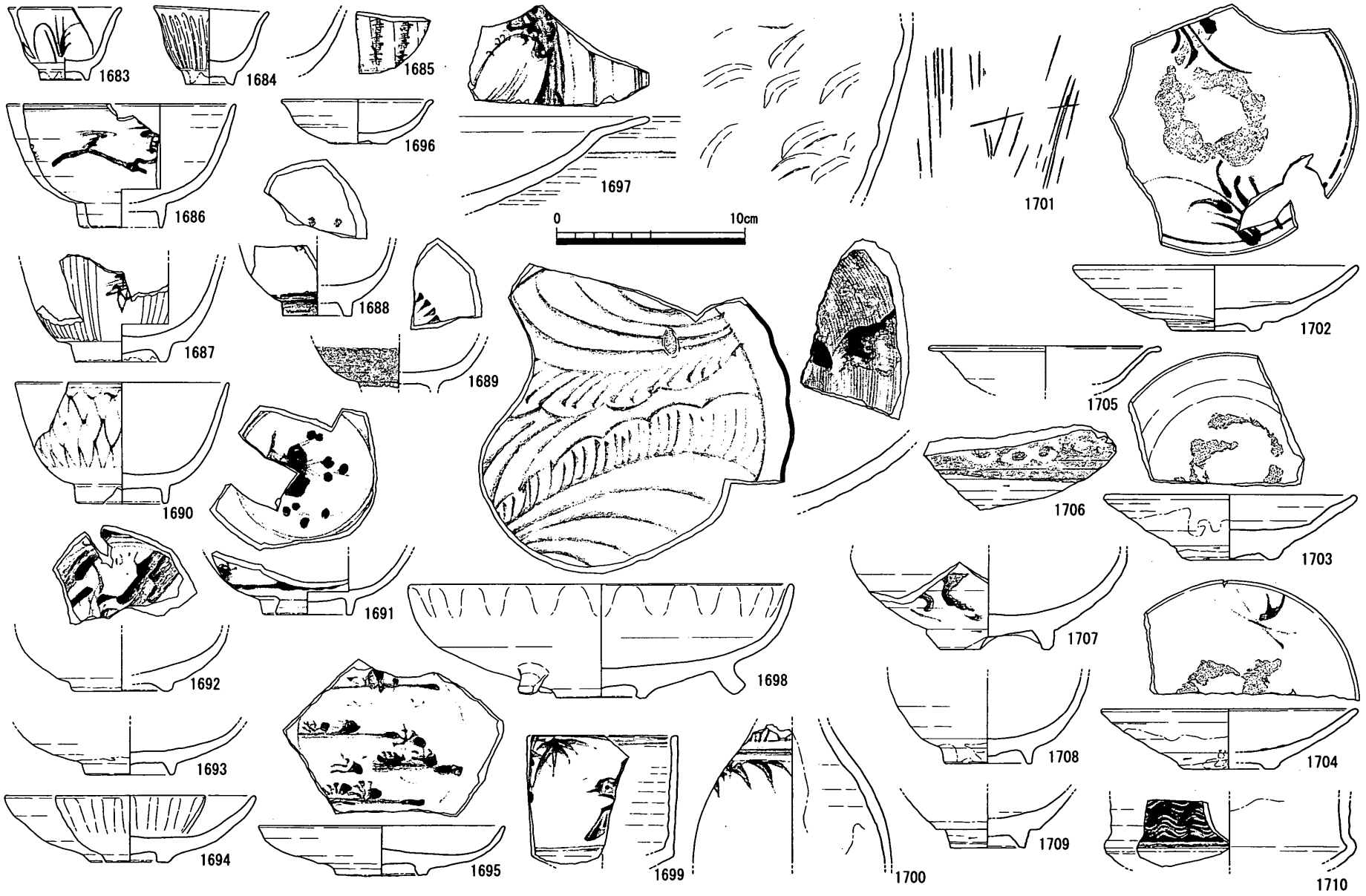
ＳＫ 108 出土遺物（1645 ～ 1651）　1645 は漳州窯系青花碗。1646 は肥前系磁器皿。1647 は京・信楽系陶器碗。1648 は備前擂鉢。1649 は亀山系須恵器甕。1650・1651 は瓦質土器焙烙。

ＳＫ 111 出土遺物（1652 ～ 1663）　1652 は肥前系磁器碗。1653 は肥前系磁器壺。1654・1655 は肥前系磁器皿。1656 は肥前系陶器天目茶碗。1657 は肥前系陶器皿。1658 ～ 1660 は土師質土器杯。1661 は瓦質土器焙烙。1662 は備前擂鉢。1663 は備前甕転用の円盤状加工品。

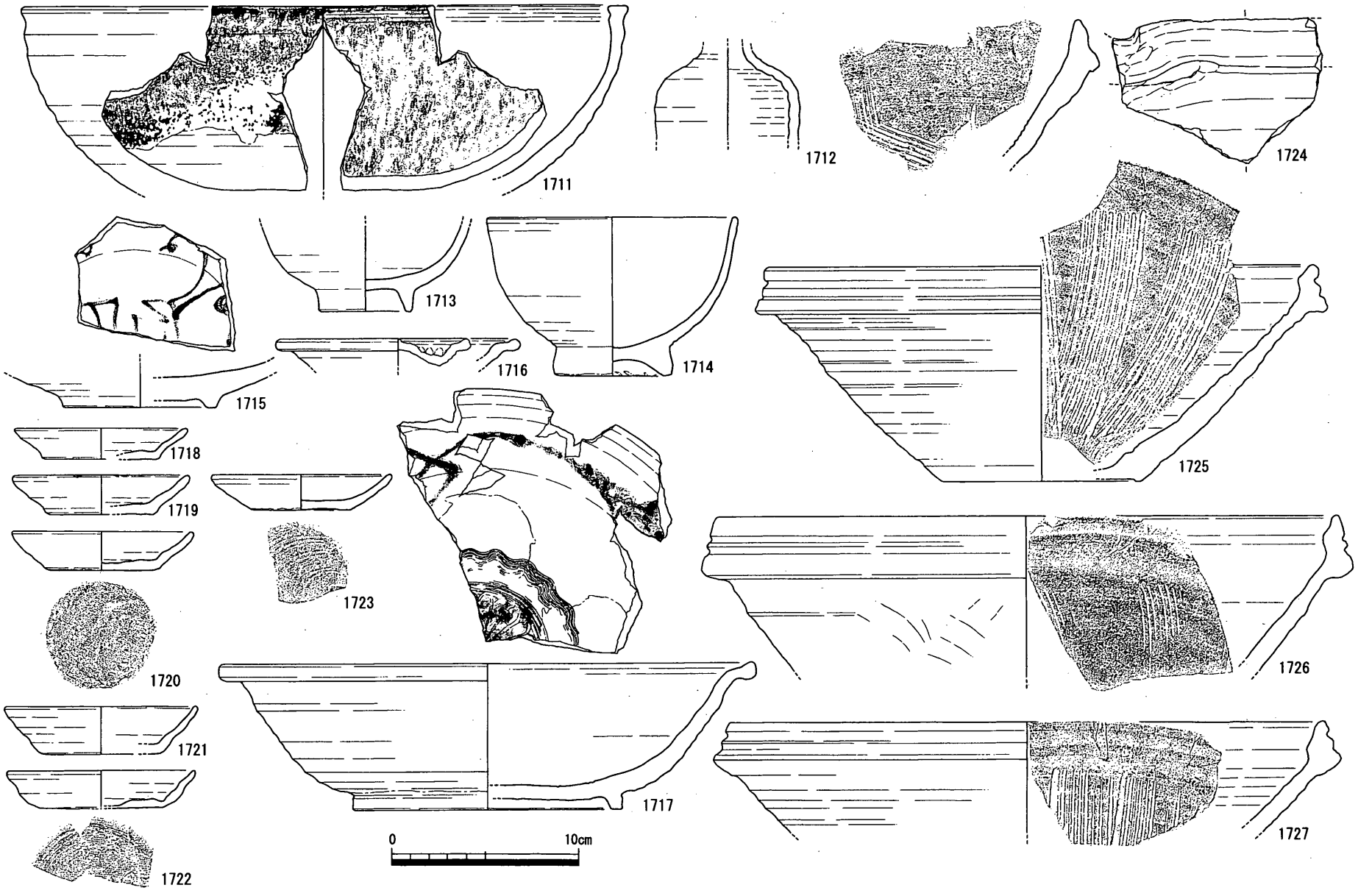


1. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土　SK131
2. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土　2.5Y6/2 灰黄色砂質土ブロック含む　SK131
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土　SK131
4. 5Y6/3 オリーブ黄色粘質土　炭褐多混　SK131
5. 10YR3/1 黒褐色粘質土　2.5Y6/2 炭黄色砂質土ブロック多量含む　SK131
6. 5Y2/1 黒い炉粘質土　炭化物多量含む　SK131
7. 10YR4/1 褐灰色砂質土　2.5Y3/2 黒褐色粘質土ブロック含む　SK131
8. 2.5Y2/1 黒い炉砂質土　炭化物多量含む　2.5Y6/2 灰黄色砂質土ブロック含む　SK131
9. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土　SK131
10. 2.5Y6/2 灰黄色砂質土　中世前半堆積層(IV層)
11. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土　炭混　7.5Y5/3 灰オリーブ粘土小ブロック混　SK114
12. 5Y4/2 灰オリーブ色粘土　SK114
13. 5Y4/1 灰色粘質土　5Y6/4 オリーブ黄色粘土小ブロック・炭混　SK114
14. 2.5Y6/2 灰黄色砂質土　SK114
15. 5Y3/1 オリーブ黒色粘土　炭混　橙色沈殿　SK114
16. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土　砂質大　SK114
17. 10YR3/1 黒褐色粘土　炭混　SK114
18. 5Y3/1 オリーブ黒色粘砂質土　炭多混　SK114
19. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土　SK114
20. 5Y4/2 灰オリーブ色粘土　SK114
21. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土　SK114
22. 2.5Y3/2 黒褐色シルト　SK114
23. 2.5Y3/1 黒褐色シルト　5Y6/3 粘土ブロック混　SK114
24. 2.5Y5/2 黒褐色シルト　5Y6/3 粘土ブロック混　SK114
25. 5Y5/4 オリーブ色砂質土　炭混　SK114
26. 5Y4/1 灰色粘質土　SK114
27. 5Y5/4 オリーブ色砂質土　SK114
28. 2.5Y4/1 黄灰色シルト　SK114
29. 5Y5/1 灰色砂質土　炭混　SK114
30. 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土　SK114
31. 5Y4/1 灰色シルト　SK114
32. 5Y6/3 オリーブ黄色細砂質土　中世前半堆積層(IV層)

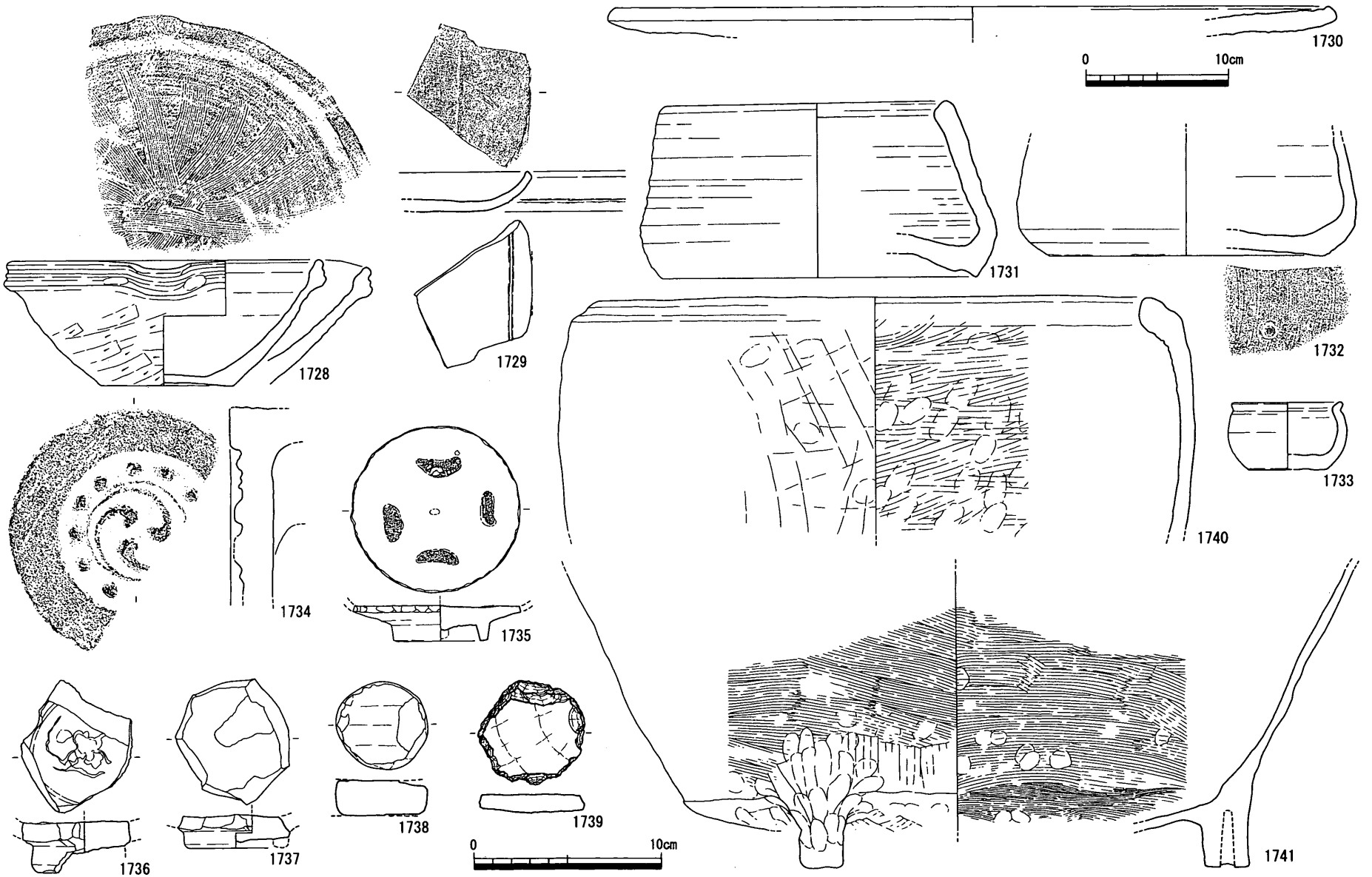
第176図　ＳＫ114・131平・断面図



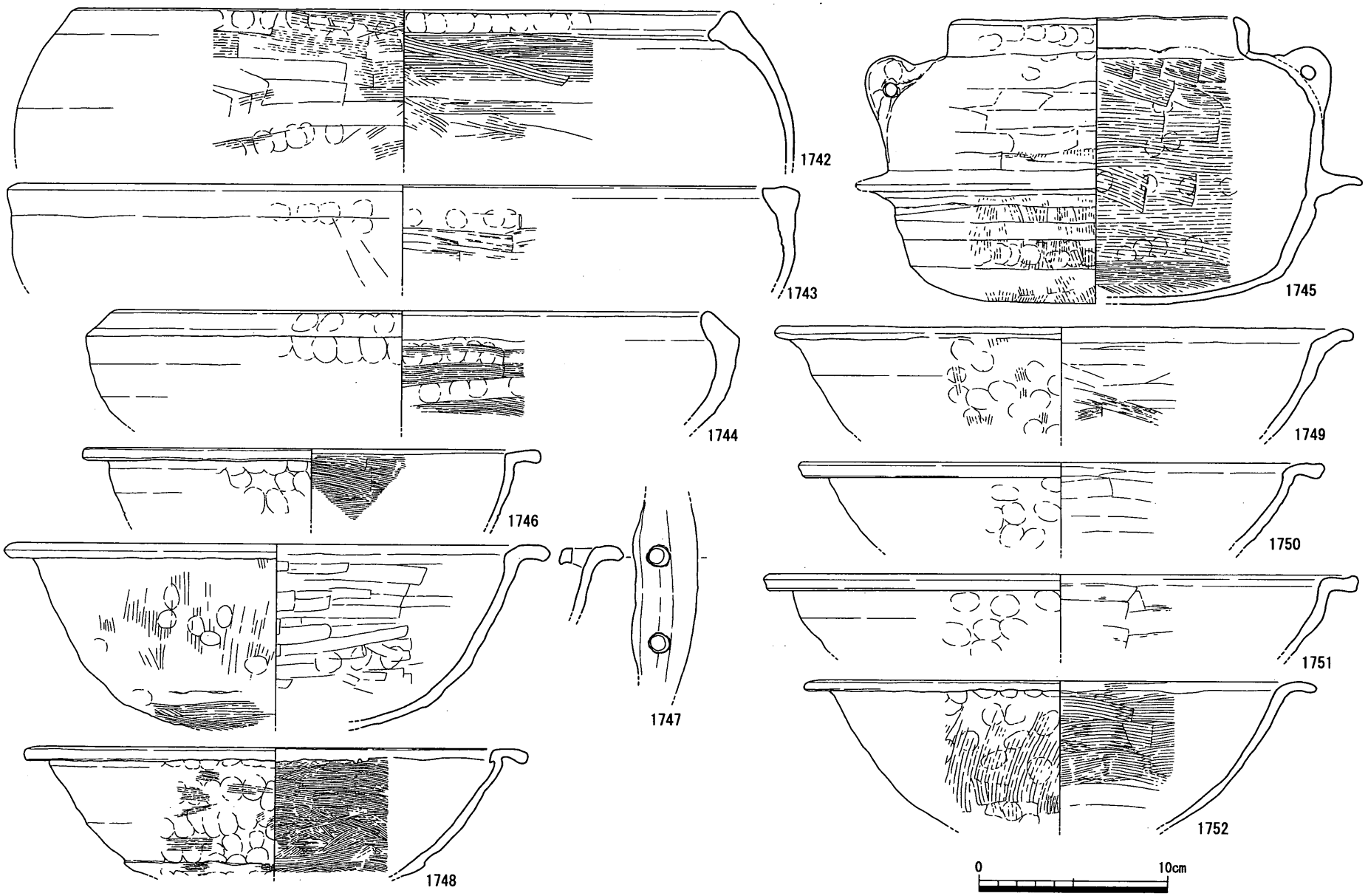
第177図　ＳＫ114出土遺物（１）



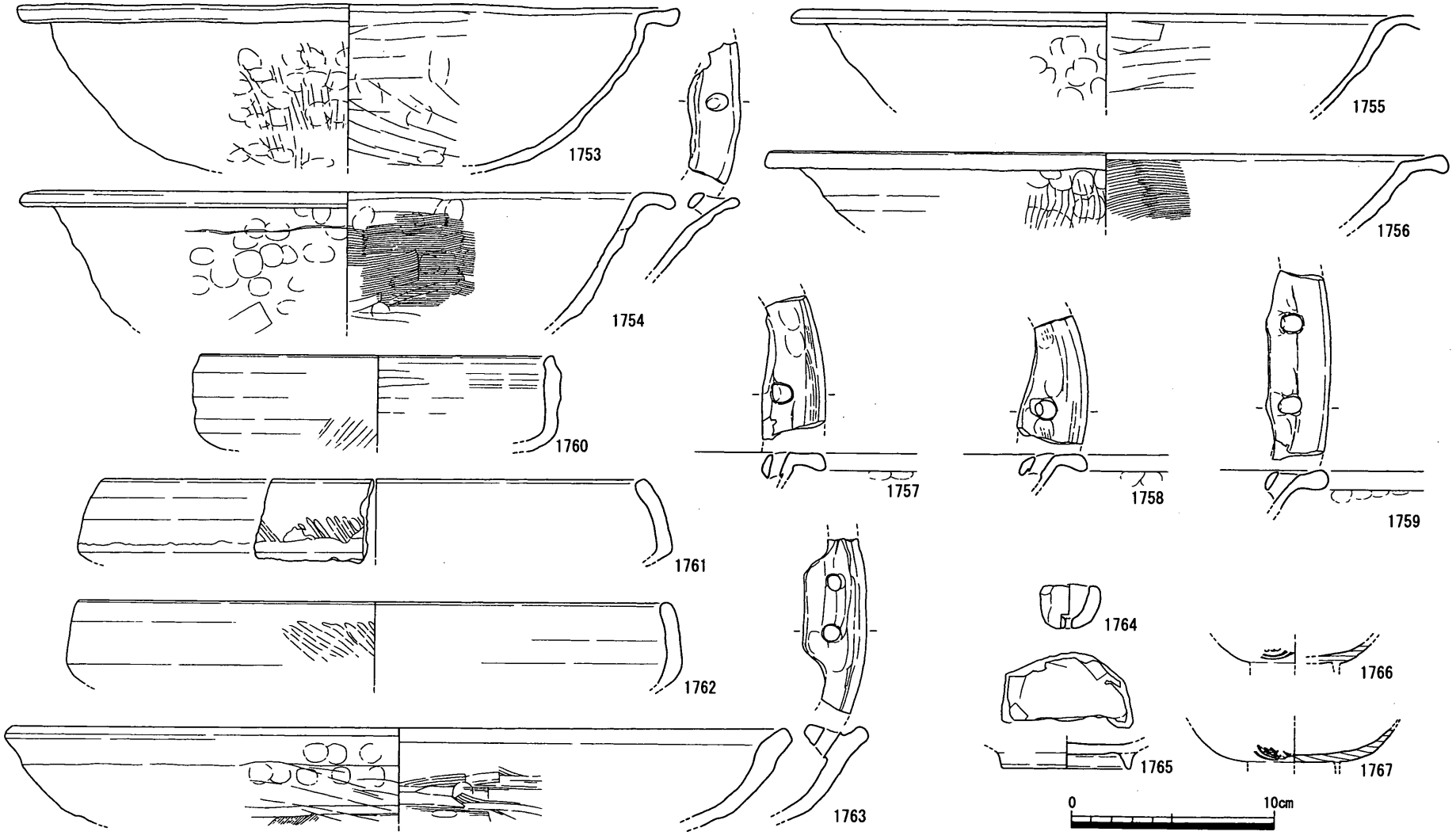
第178図　ＳＫ114出土遺物（２）



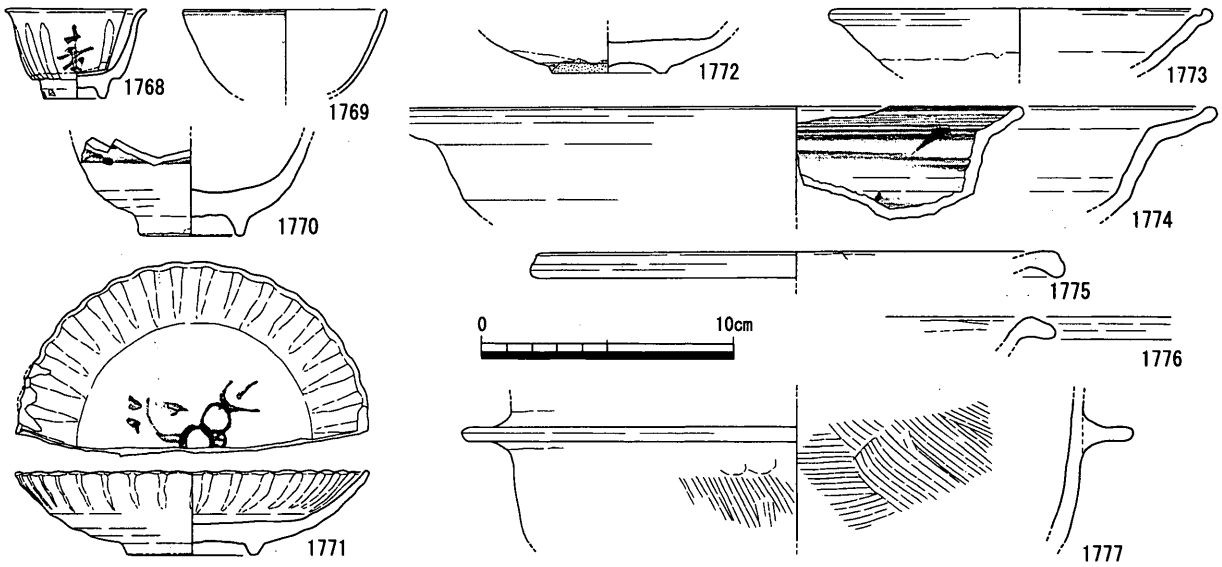
第179図　ＳＫ114出土遺物（３）



第180図　ＳＫ114出土遺物（４）



第181図　ＳＫ114出土遺物（５）



第182図　ＳＫ131出土遺物

ＳＫ 126 出土遺物（1664 ～ 1676）　1664 は肥前系磁器皿。1665 は肥前系陶器碗。1666 は肥前系陶器皿。1667 は肥前系陶器碗。1668 は施釉陶器碗。1669 は土師質土器杯。1670・1671 は円盤状加工品。1670 は土師質土器杯転用、1671 は平瓦転用。1672 ～ 1674 は御厩系焙烙。1675・1676 は土師質土器甕。

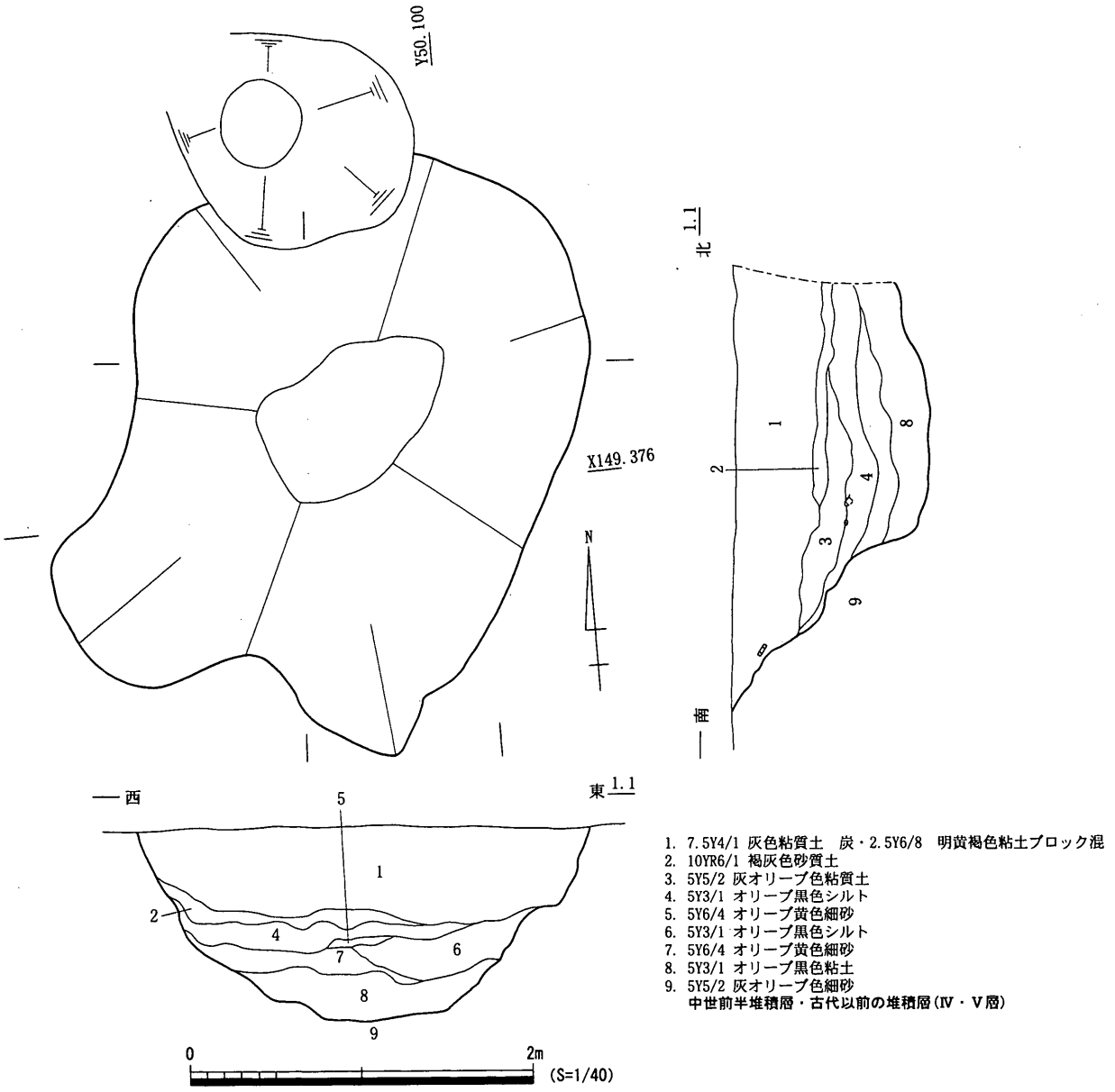
ＳＫ 127・128 出土遺物（1677 ～ 1682）　1677・1678 は肥前系磁器皿。1679・1680 は肥前系陶器皿。1681 は土師質土器杯。1682 は土師質土器足釜脚部。

時 期　ＳＫ 108 は 1647、ＳＫ 111 は 1652 ～ 1655、ＳＫ 126 は 1664・1667、ＳＫ 127・128 は 1677・1678 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）埋没と判断でき、遺構の切り合いはごく短期間に生じたものと考えられる。

ＳＫ 114（第 176 ～ 181 図）

Ｂ区中央南端部で検出した巨大な土坑。東西方向の溝状遺構ＳＤ 009 上層埋没後に形成されている。本土坑の東壁はテラス状を呈し、南北方向の石列が築かれている。この石列遺構の性格は不明であるが、ＳＤ 009 上層に伴うものである可能性も否定できない。埋土中には多量の炭化物とブロック土が含まれ、人為的に埋め戻された土抗であることが分かる。出土遺物も破片が多量に認められることから廃棄土坑であると考えられるが、本土坑の面積が大きな点から、複数の土坑が切り合っていることも想定されるため、出土遺物に一括性があるとは断定できない。

出土遺物（1683 ～ 1767）　1683・1684 は肥前系磁器小杯。1685 ～ 1692 は肥前系磁器碗。1693 ～ 1697 は肥前系磁器皿。1698 は青磁釉が施された肥前系磁器皿。1699 は肥前系磁器筒形碗。1700 は肥前系磁器瓶。1701 は肥前系？陶器瓶。外面にはタタキの痕跡、内面には当て具痕が残る。1702 ～ 1705 は肥前系陶器皿。1706 は肥前系陶器鉢。1707 ～ 1710 は肥前系陶器碗。1707 は高台に３箇所の刳り込みが認められる。1711 は肥前系陶器鉢。1712 は陶器瓶。1713・1714 は肥前系陶器碗。1715 は陶胎染付皿。1716・1717 は瀬戸・美濃系陶器皿。1718 ～ 1723 は土師質土器皿。1724 ～ 1728 は備前擂鉢。1729 は備前皿か。底部外面には布目が認められる。1730 は備前大皿。1731 ～ 1733 は備前鉢。1734 は軒丸瓦。1735 ～ 1739 は円盤状加工品。1735 は肥前系陶器碗、1736・1737



第183図　ＳＫ124平・断面図

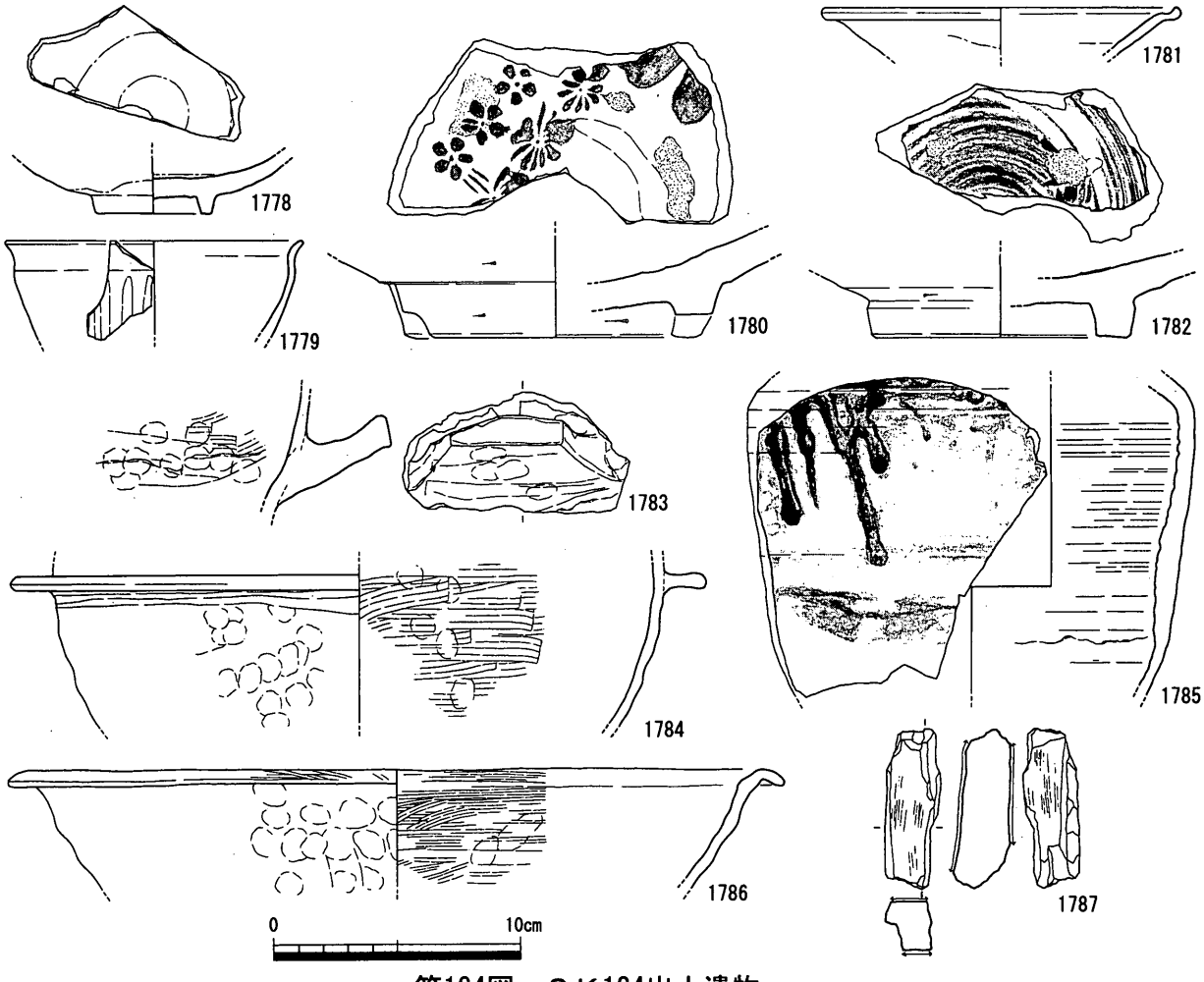
は龍泉窯系青磁碗、1738 は平瓦の転用。1739 は安山岩製。1740 ～ 1743 は土師質土器鉢。1744 は土師質土器鍋。1745 は瓦質土器羽釜。1746 ～ 1759 は御厩系焙烙。1760 ～ 1762 は関西系焙烙。1763 は瓦質土器焙烙。1764 は半球状の小型土製品。底部？には穿孔が認められる。1765 は吉備系土師質土器椀。1766・1767 は漆器椀。

時期　出土遺物から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）埋没と判断できる。ただし、17 世紀後半（松本・佐藤様相４）の遺物も一定量含むことから時期幅を持つ可能性と、単一遺構ではない可能性を考えておきたい。

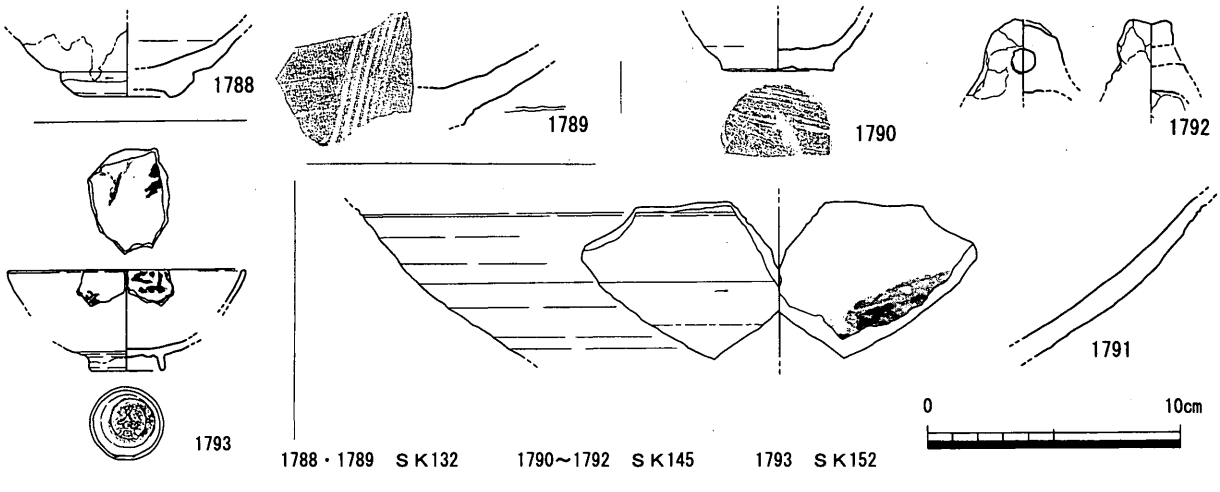
ＳＫ 131（第 176・182 図）

ＳＫ 128 の南に位置し、ＳＫ 106・111・126・127・128 とともに、大規模土坑ＳＫ 114 の北端部に隣接する。本遺構は、層位関係からＳＫ 114 北端部埋没後に掘削されたと判断したが、土質の違いはかなり微妙であったため、ＳＫ 114 との先後関係については逆転する可能性もある。

出土遺物（1768 ～ 1777）　1768 は肥前系磁器小杯。1769・1770 は肥前系磁器碗。1771 ～ 1773



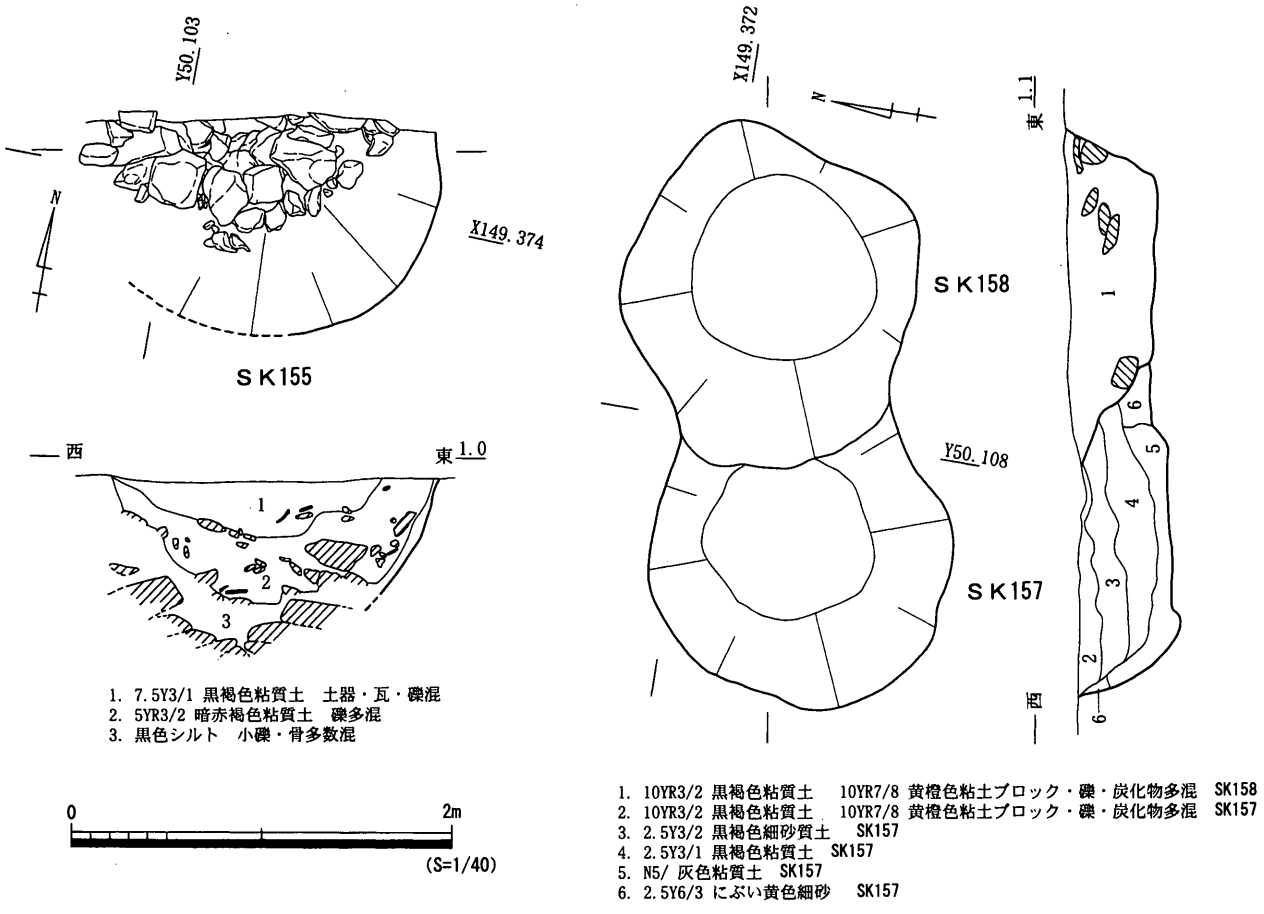
第184図　ＳＫ124出土遺物



第185図　ＳＫ132・145・152出土遺物

は肥前系磁器皿。1774は肥前系陶器皿。1775は土師質土器鍋。1776は瓦質土器鍋。1777は瓦質土器羽釜。

時期　1771からは17世紀後半（松本・佐藤様相４）と考えられるが、北に位置するＳＫ108・111・126・127・128と南に隣接するＳＫ114との位置関係を考慮すれば、多少降る時期（18世紀



第186図　ＳＫ155・157・158平・断面図

初頭～前半）の遺構と考えられる。

ＳＫ 124（第 183・184 図）

Ｂ区北西部で検出した平面不定形の土坑。底部には、堆水状態であったことを示す黒色粘土層が堆積していることから、掘削後一定期間はオープンな状態であったと考えられる。

出土遺物（1778 ～ 1787）　1778 は白磁皿。1779 は肥前系磁器碗。1780 は肥前系陶器皿。約 40％残存している高台に２箇所の刳り込みが認められ、本来は３箇所に刳り込みがあったものと思われる。1781・1782 は肥前系陶器皿。1783 は器種不明の瓦質土器。外面に把手状の突起が認められる。1784 は瓦質土器羽釜。1785 は信楽系陶器？壺。1786 は瓦質土器焙烙。1787 は安山岩製の方柱状砥石。残存面４面中２面に使用痕が確認できる。

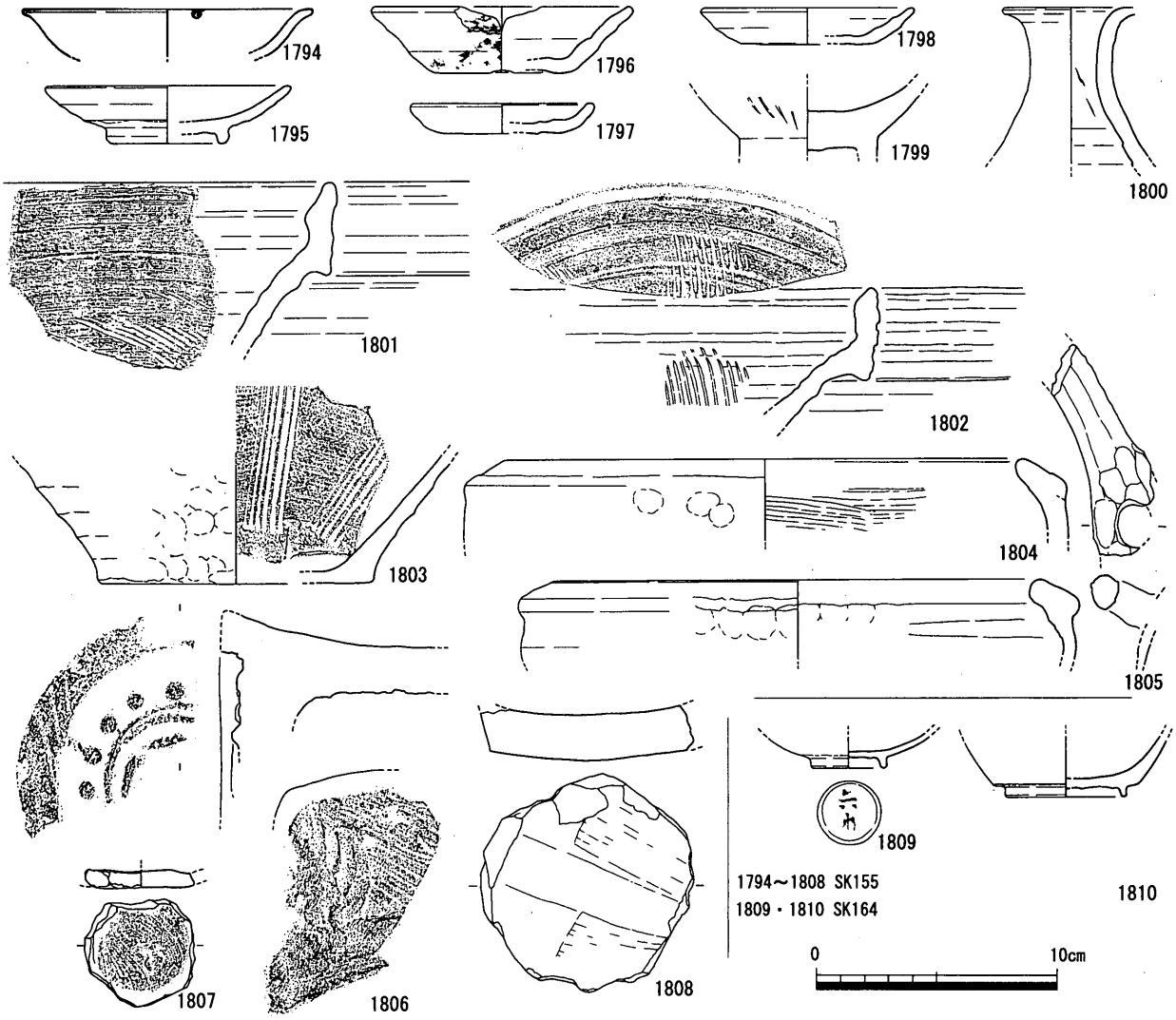
時期　1779・1782・1786 から 17 世紀中葉（松本・佐藤様相３）と考えられる。

ＳＫ 132（第 185 図）

Ｂ区東土坑列に先行する土坑。土坑列と本土坑との関連性が薄いことは、埋土が異なっていることから判断できる。

出土遺物（1788・1789）　1788 は肥前系陶器碗。1789 は備前擂鉢。

時期　出土遺物が小片で、出土量も少ないため断定し難いが、17 世紀前半～中葉（松本・佐藤様相２～３）と考えたい。



第187図　ＳＫ155・164出土遺物

ＳＫ 145（第 185 図）

Ｂ区南東部で検出した平面形円形の土坑。

出土遺物（1790 ～ 1792）　1790 は土師質土器杯。1791 は肥前系陶器皿。1792 は飯蛸壺。

時期　1791 から 17 世紀後半（松本・佐藤様相４）と考えられる。

ＳＫ 152（第 185 図）

Ｂ区南西で検出した土坑。

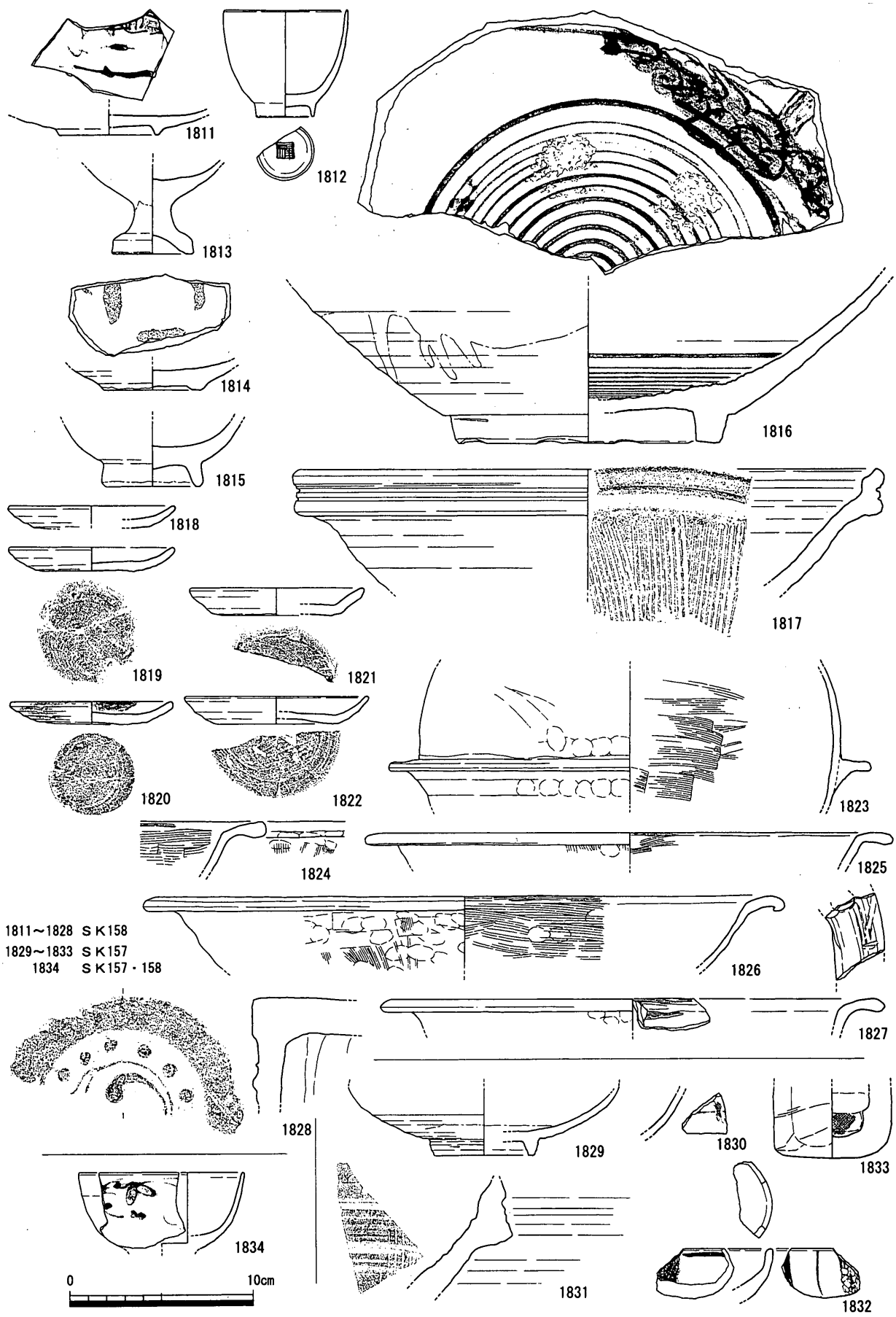
出土遺物（1793）　1793 は理平焼碗か。高台内には「畠」の刻印が認められる。

時期　18 世紀以降と思われるが、詳細な時期は不明である。

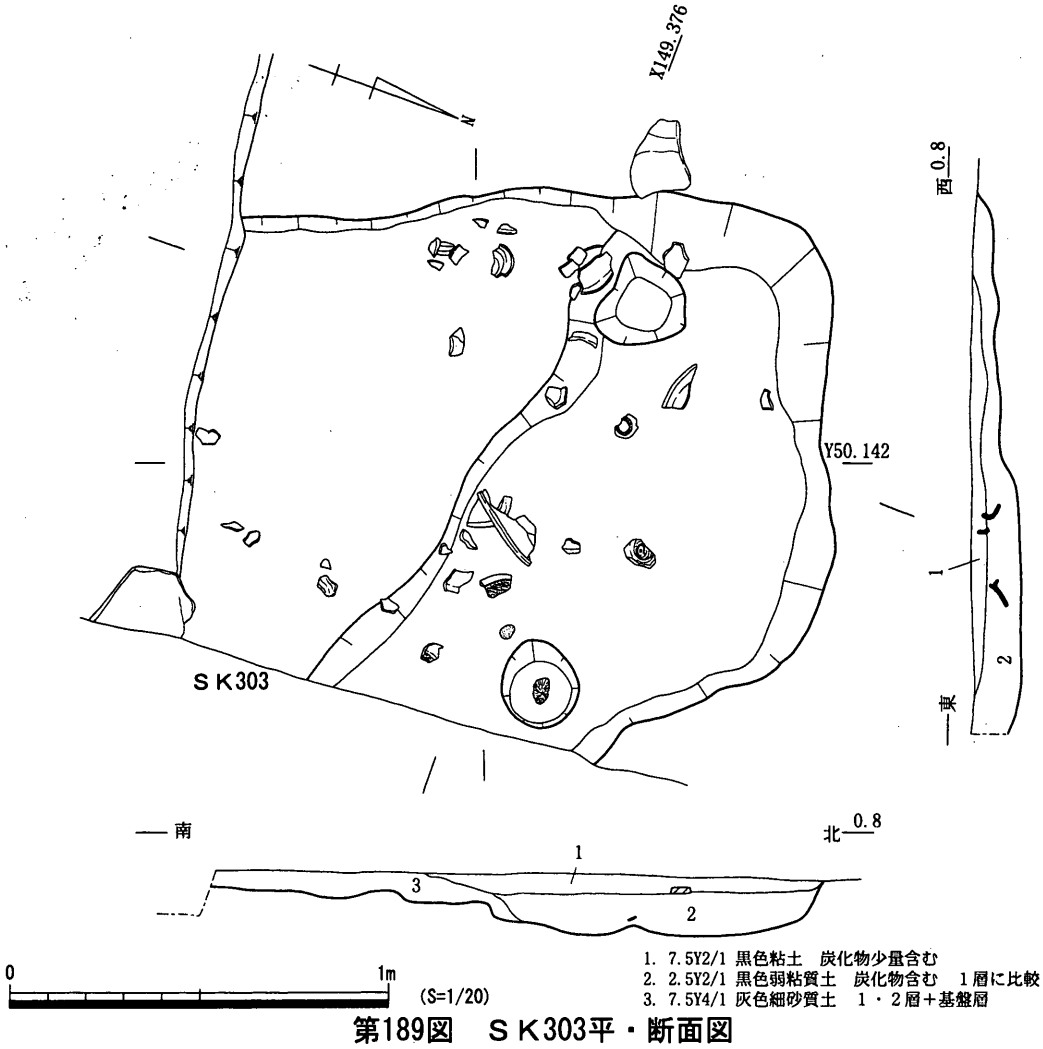
ＳＫ 155（第 186・187 図）

Ｂ区北西部で検出した土坑。北部は調査地外に延びるため、全体形は不明である。本土坑は、かなり多量の礫と炭化物、骨を含む土で埋め戻されている。

出土遺物（1794 ～ 1808）　1794 は白磁碗。1795 は肥前系陶器皿。1796 は備前杯。1797・1798 は土師質土器杯。1799 は龍泉窯系青磁碗。1800 は備前徳利。1801・1802 は備前擂鉢。1803 は土師質土器擂鉢。1804・1805 は土師質土器鍋。1806 は軒丸瓦。1807 は土師質土器杯転用、1808 は平瓦転

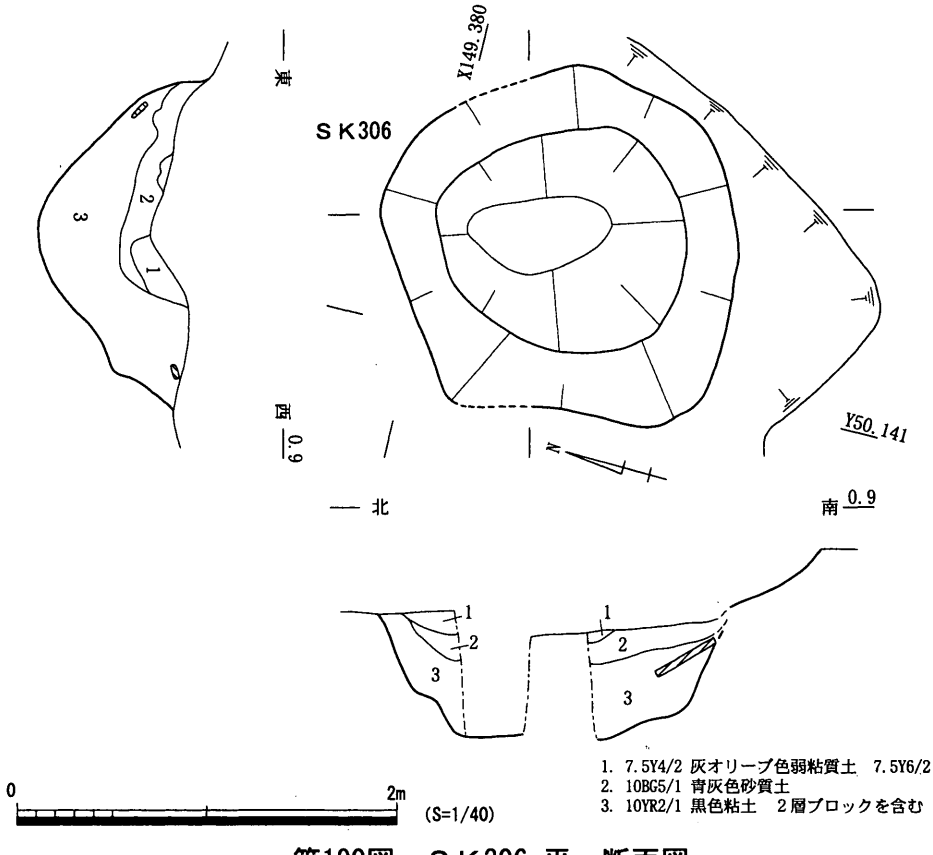


第188図　ＳＫ157・158出土遺物



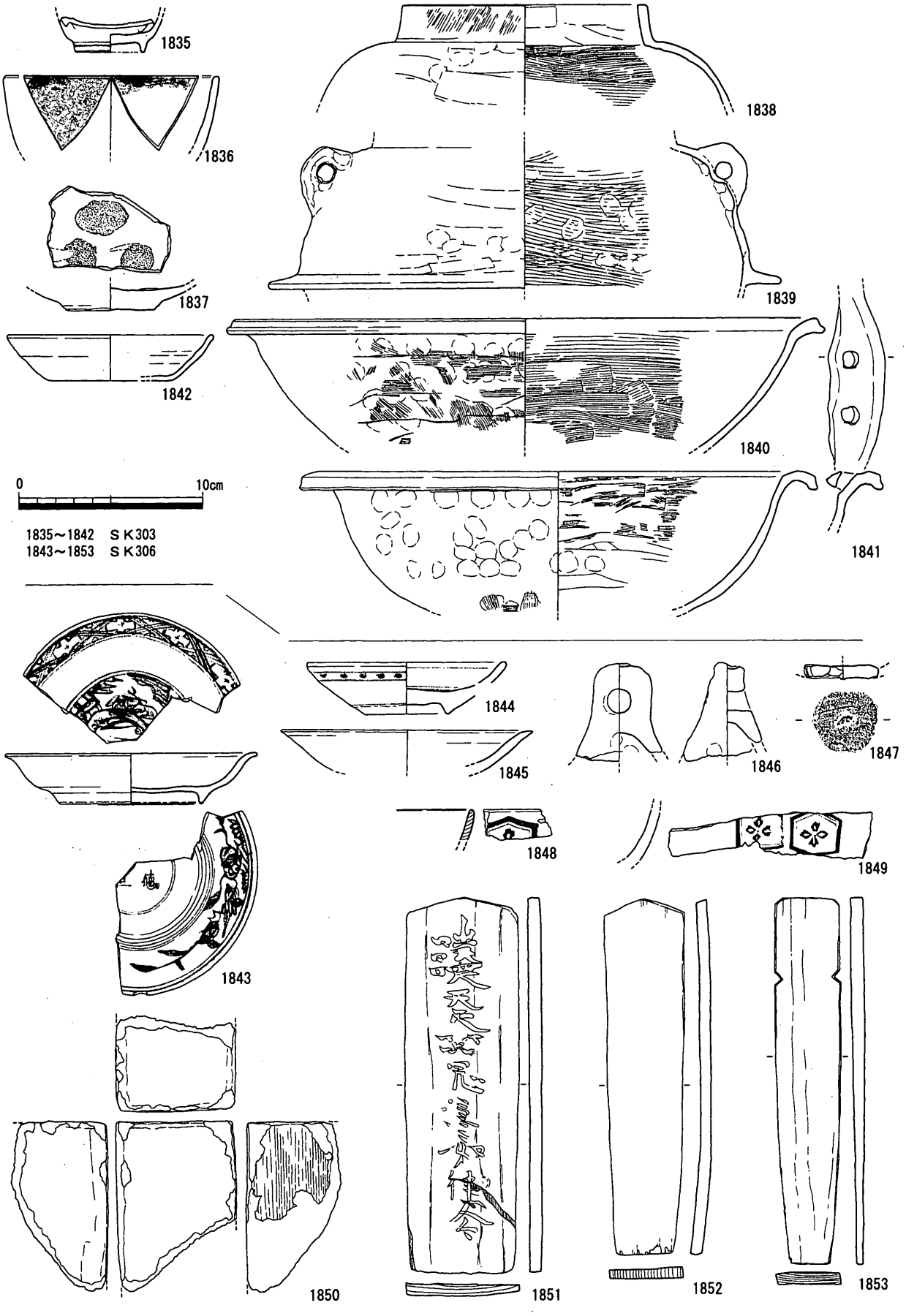
1. 7.5Y2/1 黒色粘土　炭化物少量含む
2. 2.5Y2/1 黒色弱粘質土　炭化物含む　1層に比較して粘性弱い
3. 7.5Y4/1 灰色細砂質土　1・2層＋基盤層

第189図　SK303平・断面図

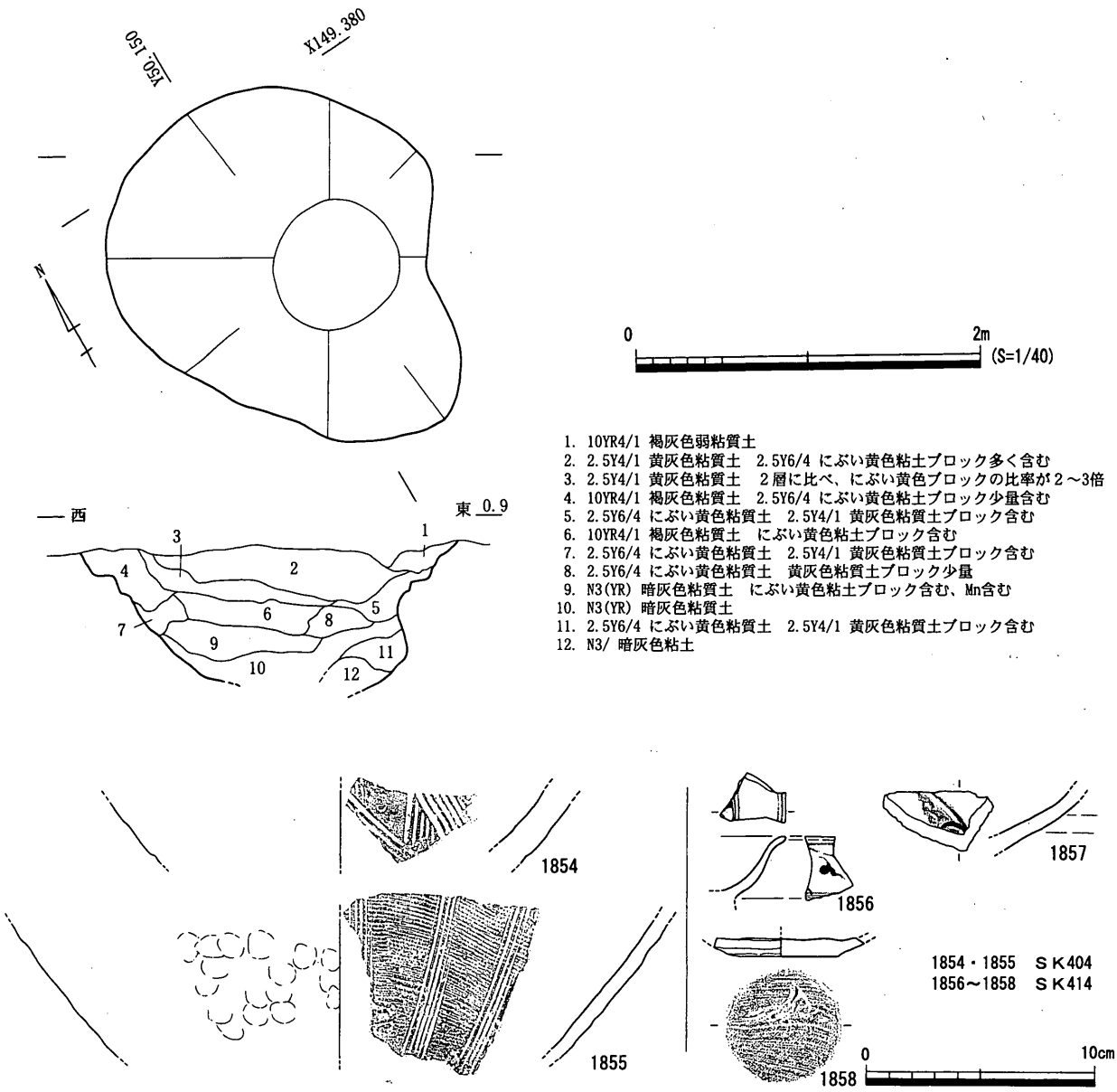


1. 7.5Y4/2 灰オリーブ色弱粘質土　7.5Y6/2 灰オリーブ色ブロックを含む
2. 10BG5/1 青灰色砂質土
3. 10YR2/1 黒色粘土　2層ブロックを含む　木片(木製品)を多量に含む

第190図　SK306 平・断面図



第191図　ＳＫ303・306出土遺物



第192図　ＳＫ414 平・断面図、SK404・414出土遺物

用の円盤状加工品。

ＳＫ 164（187 図）

Ｂ区東部で検出した長楕円形に近い不整円形の平面形を持つ土坑。埋土の土質・色調から撹乱の可能性も想定できる。

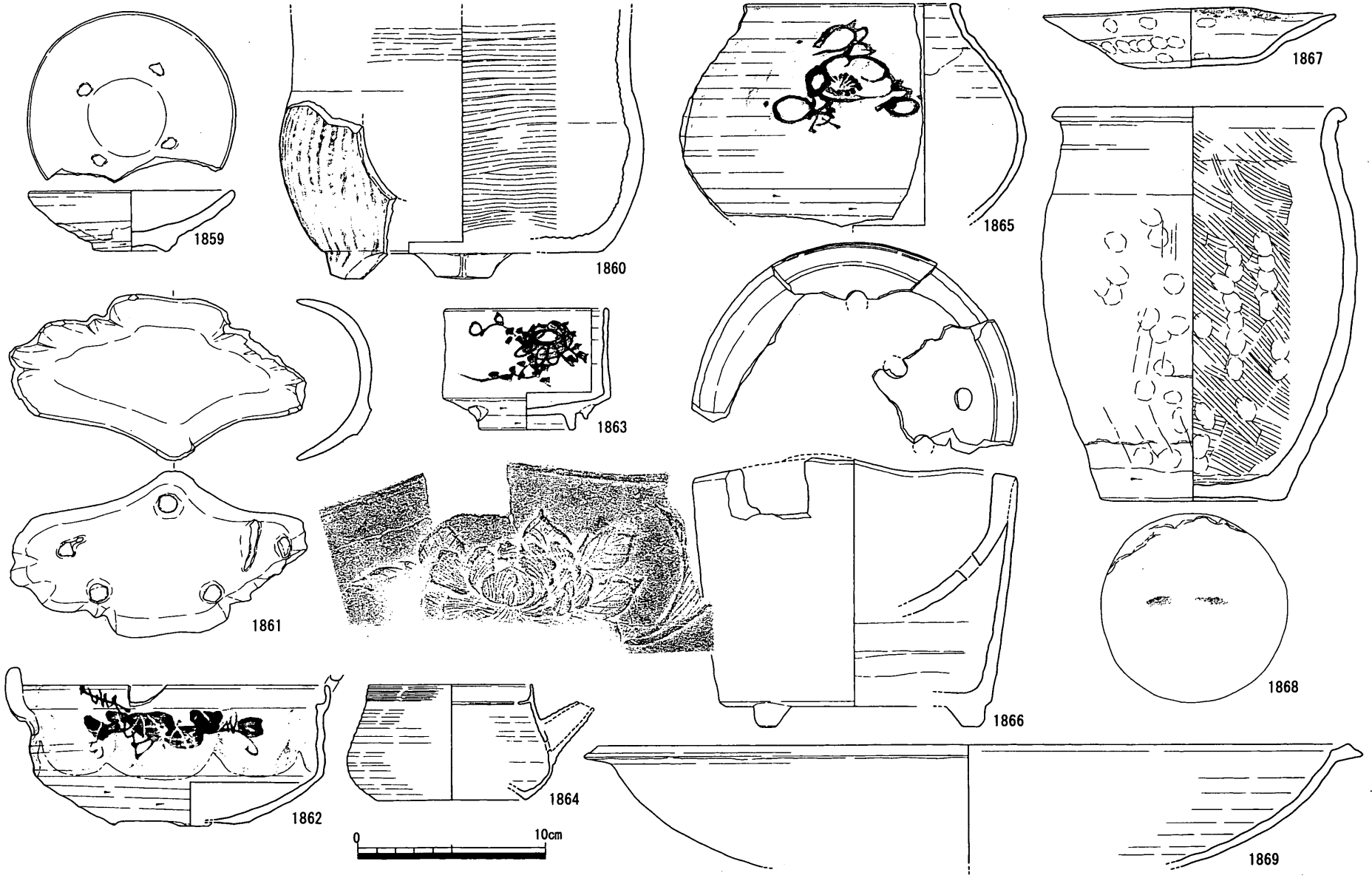
出土遺物（1809・1810）　1809・1810 は京・信楽系陶器碗。いずれも、高台内面に墨書が認められる。

時期　出土遺物からは 18 世紀代と判断できるが、上述のとおり撹乱とも考えられる。

ＳＫ 157・158（第 186・188 図）

Ｂ区北部で検出した切り合う２基の円形土坑。

ＳＫ 158 出土遺物（1811 ～ 1828）　1811 は肥前系磁器皿。1812 は肥前系磁器皿。1813 は肥前系磁器碗。1814 は肥前系陶器皿。1815 は肥前系陶器碗。1816 は肥前系陶器皿。1817 は備前擂鉢。



第193図　ＳＫ501出土遺物

1818 ～ 1822 は土師質土器杯。1823 は瓦質土器羽釜。1824 は土師質土器鍋。1825 は瓦質土器鍋。1826・1827 は瓦質土器焙烙。1828 は軒丸瓦。

ＳＫ 157 出土遺物（1829 ～ 1833） 1829 は肥前系陶器皿。1830 は肥前系陶器碗。1831 は備前擂鉢。1832 は織部。1833 は焼塩壺。

ＳＫ 157・158 出土遺物（1834） 1834 は肥前系磁器碗。

時期 ＳＫ 157・158 ともに 17 世紀後半を主体とする 17 世紀後半～ 18 世紀前半と考えられる。

ＳＫ 303（第 189・191 図）

Ｄ区南東部で検出した浅い土坑。埋土が周辺の土壌化層と近似しており、検出が困難であったため、周辺には調査時に認識できなかった遺構が存在する可能性も否定できない。

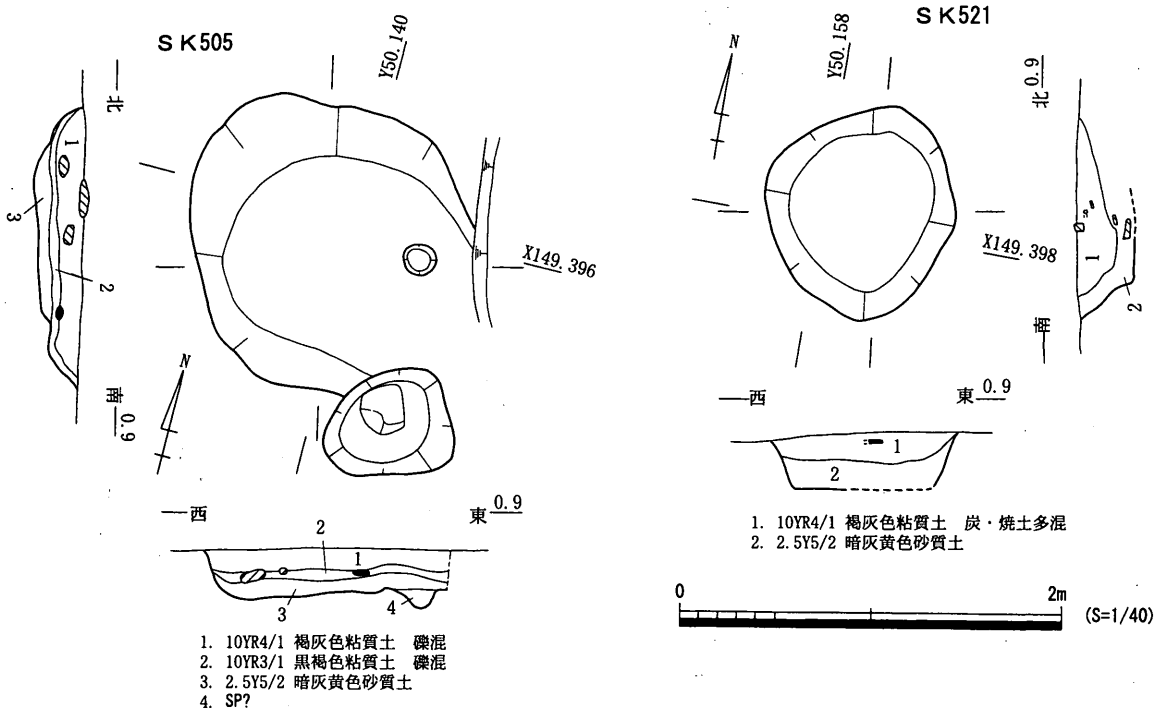
出土遺物(1835 ～ 1842) 1835 は肥前系磁器小杯。1836 は青磁碗。1837 は瀬戸・美濃系碗。1838・1839 は瓦質土器羽釜。1840 は瓦質土器焙烙。1841 は瓦質土器鍋。1842 は 14 世紀前葉の土師質土器杯。

時期 1836・1840・1841 から 17 世紀後半（松本・佐藤様相４）と考えられる。

ＳＫ 306（第 190・191 図）

Ｄ区東部で検出した円形の土坑。埋土は、黒色系でかなり粘性が強いため、堆水状態であったことが容易に推測できる。また、３層の下位からは 1848 ～ 1853 といった漆器片、呪符木簡等の製品のほか、多量の木片が出土している。

出土遺物（1843 ～ 1853） 1843 は景徳鎮窯系青花皿。1844 は漳州窯系青花皿。1845 は土師質土器杯。1846 は飯蛸壺。1847 は土師質土器杯転用の円盤状加工品。1848・1849 は漆器椀。1850 は煉瓦か。1851 は呪符木簡。墨はすでに失われているが、その痕跡がわずかに確認できる。釈文は「咄呋喔□□（符籙）鬼急々如律令」。1852 は上部先端が尖る板状の木製品。墨の跡は確認できない。



第194図 ＳＫ505・521平・断面図

1853は側縁2片に切り込みを持つ板状木製品。1852と同様、墨の痕跡は認められない。

時期　1843・1844から16世紀末～17世紀初頭（松本・佐藤様相1）と考えられる。

ＳＫ404（第192図）

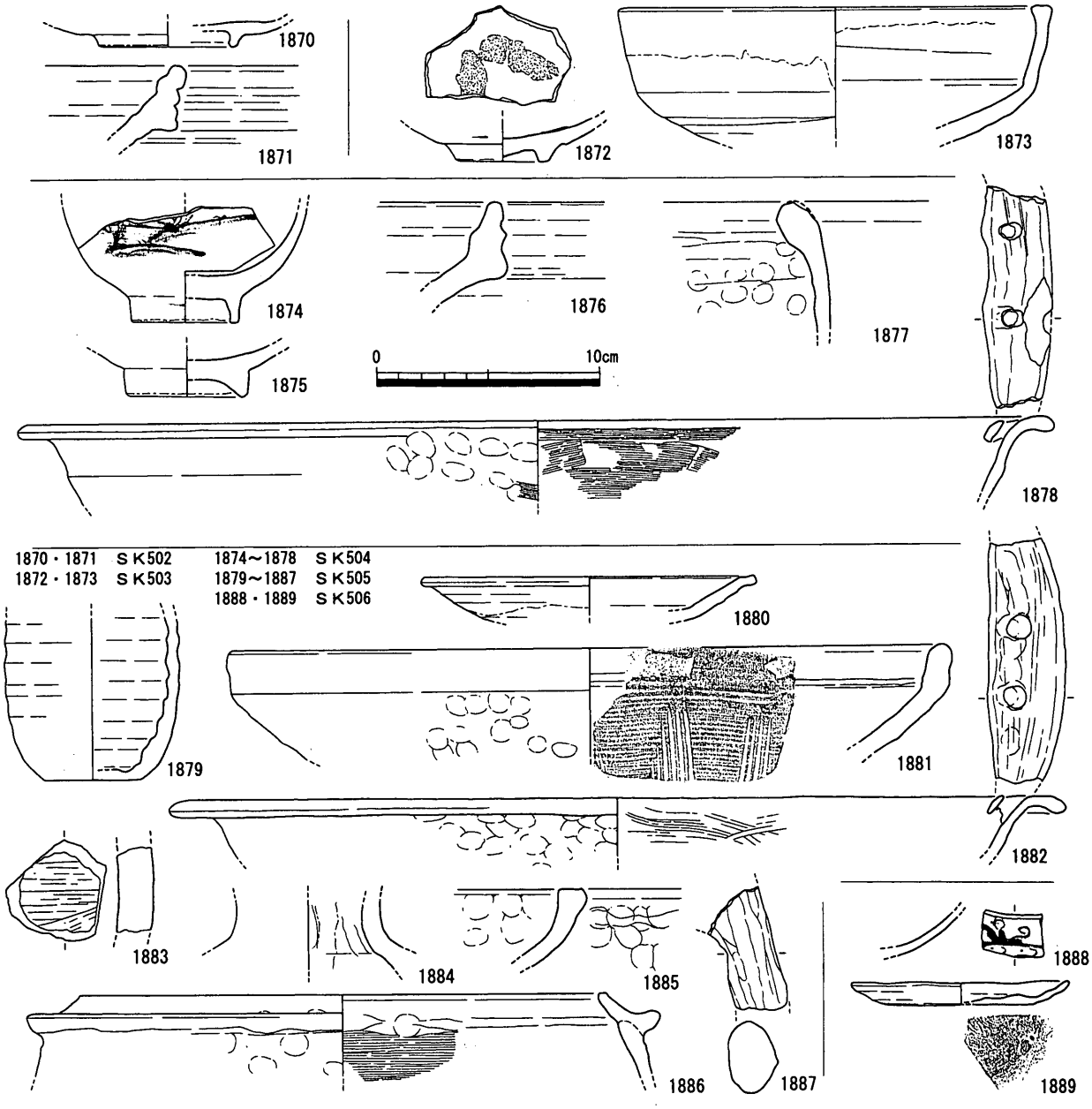
Ｄ区南東部で検出した土坑。埋土はブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された土坑であることがわかる。底面が湧水層に達していることから井戸であった可能性も考えられる。

出土遺物（1854・1855）　1854は備前擂鉢。1855は土師質土器擂鉢。

時期　出土遺物は16世紀末～17世紀前葉を示すが、ＳＤ008埋没後に掘り込まれていることから、17世紀前葉以降の所産と判断できる。

ＳＫ414（第192図）

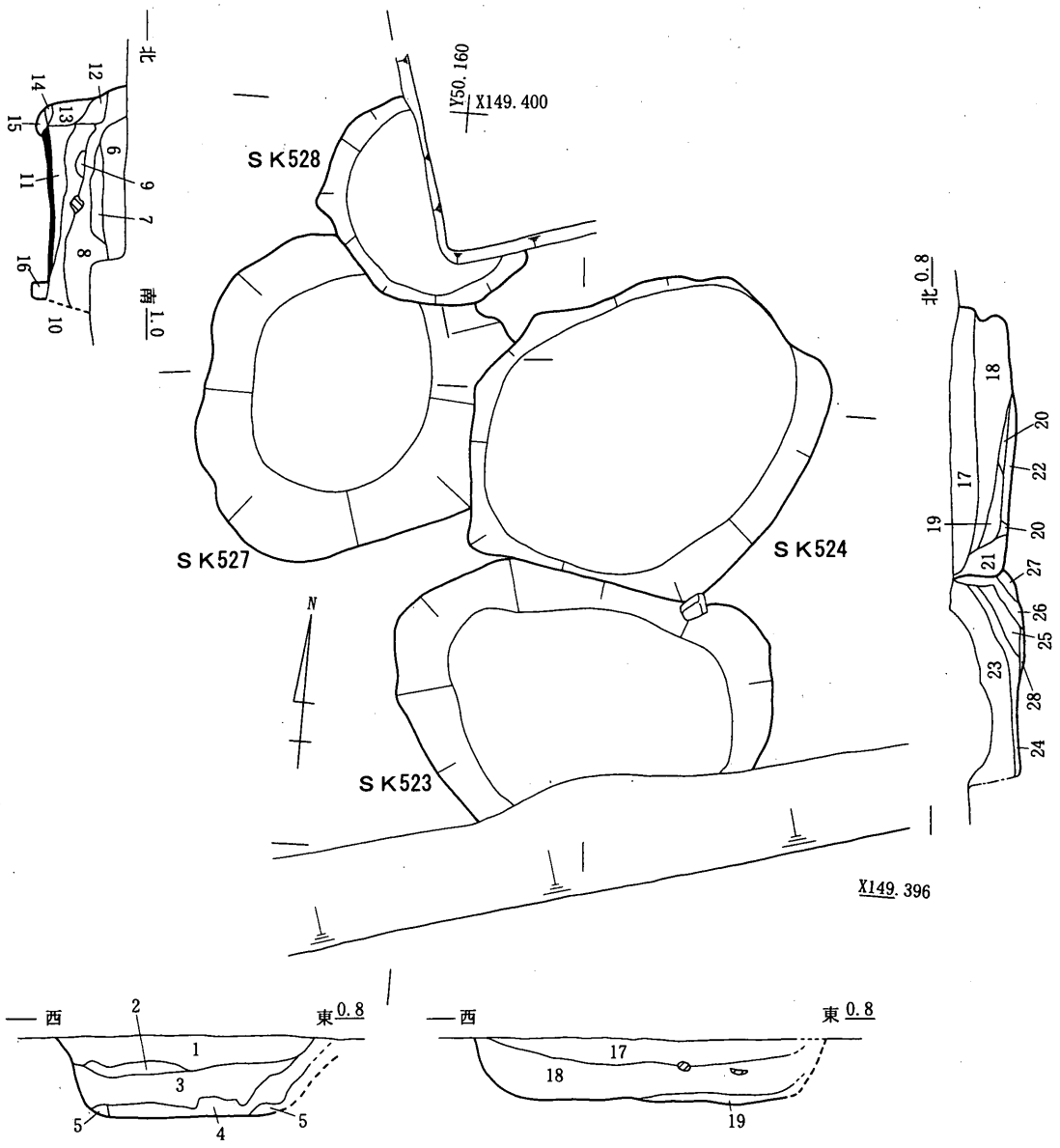
Ｅ区南東部で検出した土坑。底部付近には暗灰色粘土が堆積し、それより上位はブロックを多



第195図　ＳＫ502～506出土遺物

く含む層であるため、一定期間オープンで堆水状態の後、人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。

出土遺物（1856 ～ 1858） 1856 は漳州窯系青花皿。1857 は肥前系陶器皿。1858 は土師質土器転用の円盤状加工品。



1. 10YR3/2 黒褐色粘質土　炭混　SK527
2. 10YR5/1 褐灰色粘土　SK527
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土　砂質強い　SK527
4. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土　２層多混　SK527
5. 2.5Y5/3 黄褐色細砂　SK527
6. 10YR3/1 黒褐色粘質土　炭混　SK528
7. 5Y5/2 灰オリーブ色粘土　SK528
8. 10YR3/2 黒褐色粘質土　SK528
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土　SK528
10. 10YR4/1 褐灰色粘質土　炭、粘土ブロック少混　SK528
11. 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂　水平の自然堆積　SK528
12. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土　粘土ブロック混　10層と同じ？　SK528
13. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土　粘土ブロック混　SK528
14. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土　SK528
15. 2.5Y5/3 黄褐色砂質土　SK528
16. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土　SK528
17. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土　SK528
18. 5Y4/1 灰色粘質土　砂質強い　炭多混
19. N2/ 黒色炭化物
20. 5Y4/1 灰色粘質土　砂質強い　炭極多混
21. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土　砂質強い　炭多混
22. 5Y5/1 炭色粘土
23. 5Y4/1 灰色粘質土　炭多混　砂質強い
24. N3/ 暗灰色炭化物
25. 5Y4/1 灰色粘質土　炭多混　砂質強い　この境に炭の薄い層
26. 5Y4/1 灰色粘質土　炭多混　砂質強い
27. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土
28. N2/ 黒色炭化物

0　2m　(S=1/40)

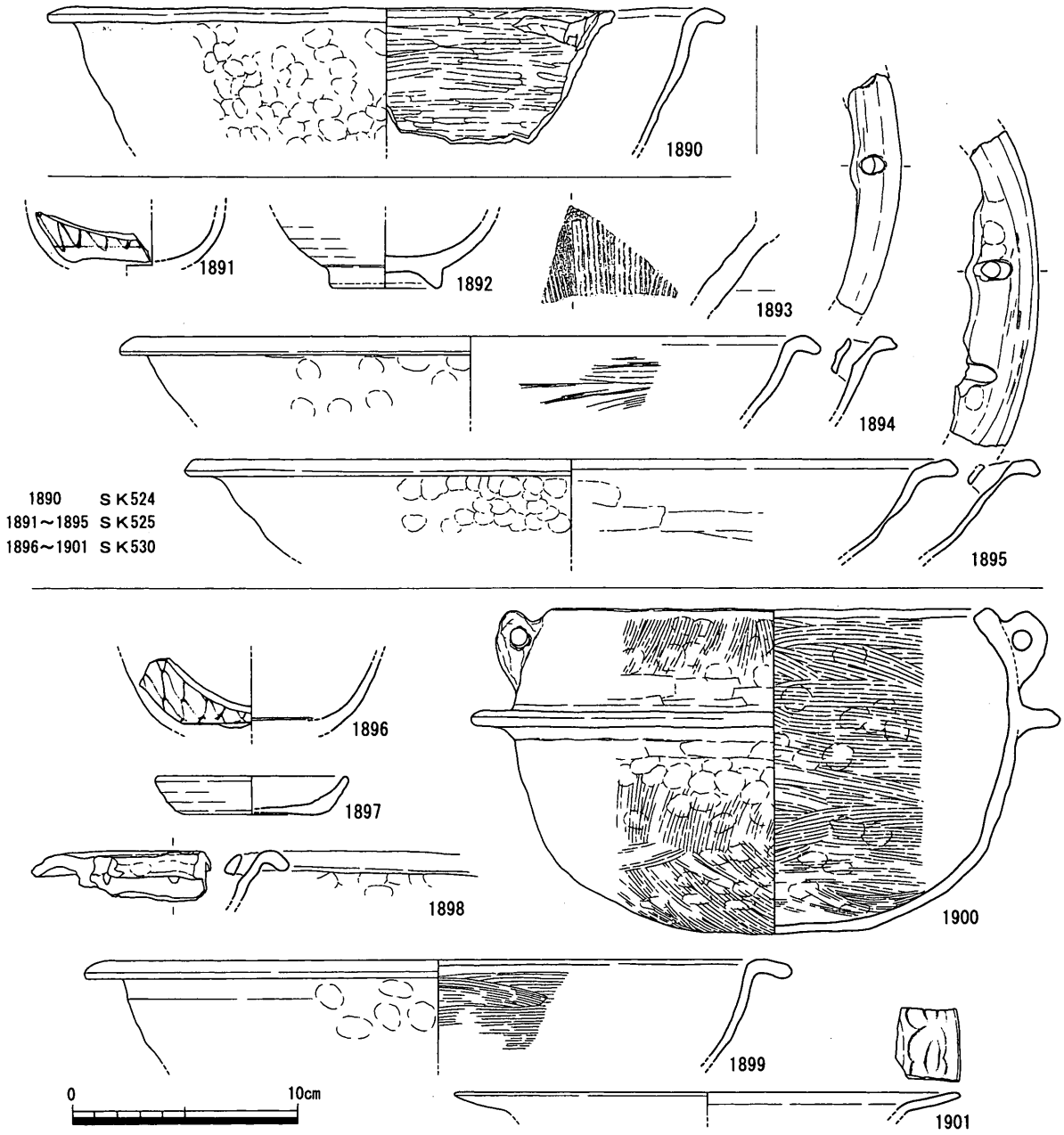
第196図　ＳＫ524・525・527・528平・断面図

時期　1857から17世紀後半（松本・佐藤様相４）に埋め戻されたと考えられる。

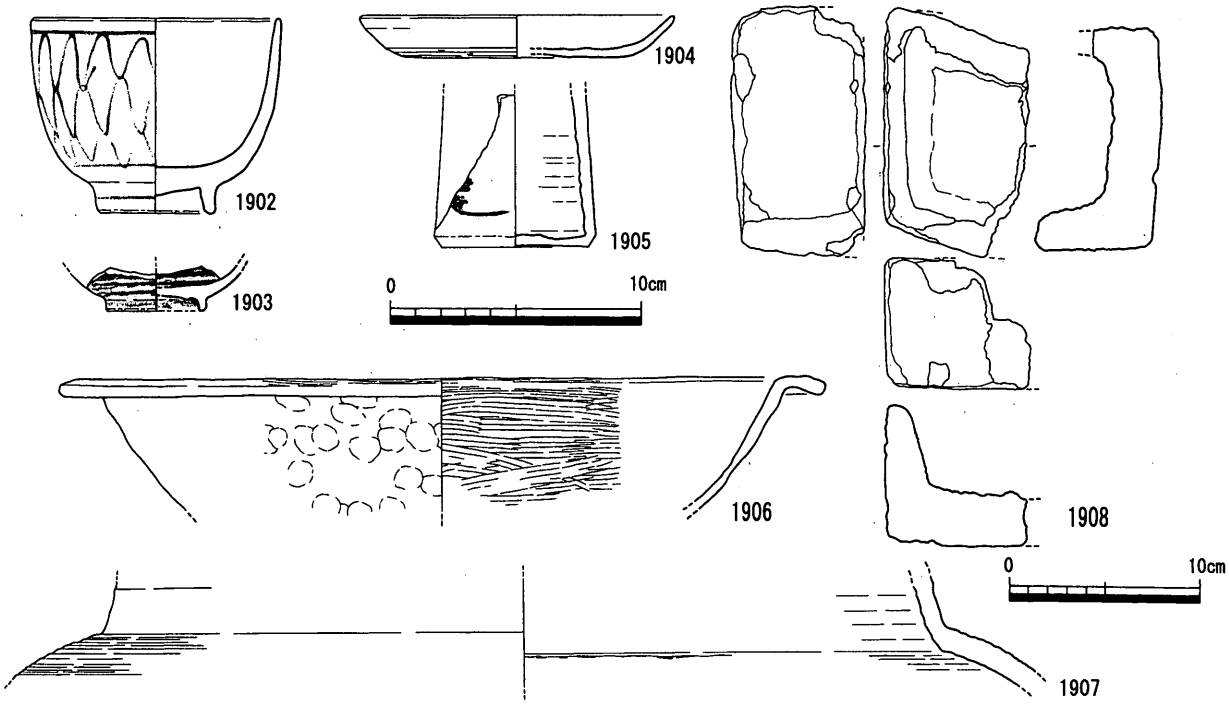
ＳＫ501（第193図）

Ｇ区西端部で検出した平面方形の土坑。土層断面の記録がないため、人為的に埋め戻されたかどうかは不明である。ただし、完形の遺物が多数を占めることなどからみて、一括廃棄土坑の可能性は高いと思われる。

出土遺物（1859～1869）　1859は肥前系陶器碗。1860は土師質土器火鉢。1861は施釉陶器皿。1862・1863は施釉陶器碗。1864は陶器急須。1865は施釉陶器鉢。1866は土師質土器焜炉。1867は完形の京都系土師器皿。図化は行っていないが完形の京都系土師器皿がさらに１点出土している。1868は土師質土器蛸壺。底部外面には「一」が墨書で記されている。使用時に他の所有者と



第197図　ＳＫ524・525・530出土遺物



第198図　ＳＫ576出土遺物

の区別を行うために記されたものであろう。頸部が若干摩滅していることと併せて、実際に蛸壺漁に使用された可能性がある。なお、型成形ではないことから、高松城跡（西の丸町地区）ＳＸｂ01・02出土資料（佐藤編2003）に先行するものであろう。1869は外型成形の御厩系焙烙。

時期　1869から19世紀末埋没の土坑と考えられる。1859・1867は明らかに古い時期を示すが、完形であること、京都系土師器皿（1867）については２点見られることから、単なる「混入」であるとは片づけられない。これらの遺物が一括廃棄されたのであれば、通常、所有者はすべてをセットで所持していたと考えられる。所有者は肥前系陶器碗や京都系土師器皿を伝世品として所持、もしくは付近を掘り返して入手したのであろうか。両遺物の製作時期には隔たりがあり、それぞれの時期の遺物が周辺の地下に埋まっていることを考慮すると、後者の可能性が高いと思われる。

ＳＫ502（第195図）

Ｇ区北西部で検出した土坑。

出土遺物（1870・1871）　1870は肥前系磁器皿。1871は備前擂鉢。

時期　1871から18世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

ＳＫ503（第195図）

Ｇ区西部で、ＳＫ504の南に近接して検出した土坑。土層断面の記録が無く、性格は不明である。

出土遺物（1872・1873）　1872・1873は肥前系磁器碗。

時期　1873から17世紀後半（松本・佐藤様相４）と考えられる。

ＳＫ504（第195図）

Ｇ区西部で、ＳＫ503の北に近接して検出した性格不明の土坑。

出土遺物（1874～1878）　1874は肥前系磁器碗。1875は肥前系陶器碗。1876は備前擂鉢。1877は土師質土器鉢。1878は瓦質土器焙烙。

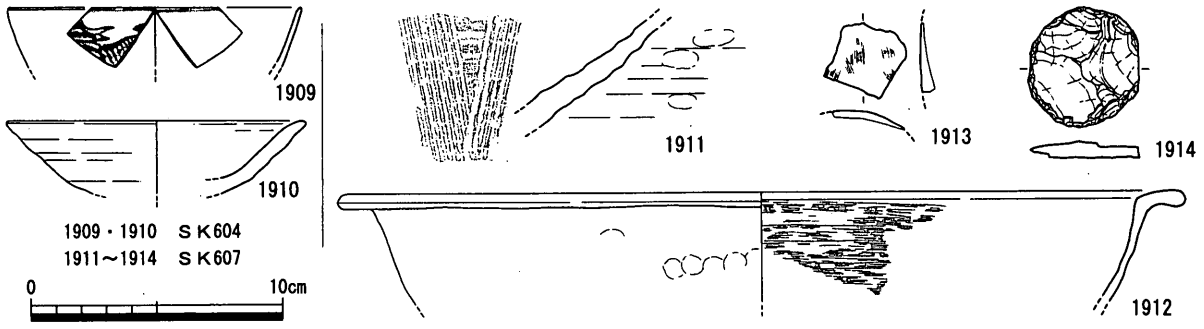
時期　埋没時期は、1875・1876から18世紀前半（松本・佐藤様相５）に比定できる。

ＳＫ505（第194・195図）

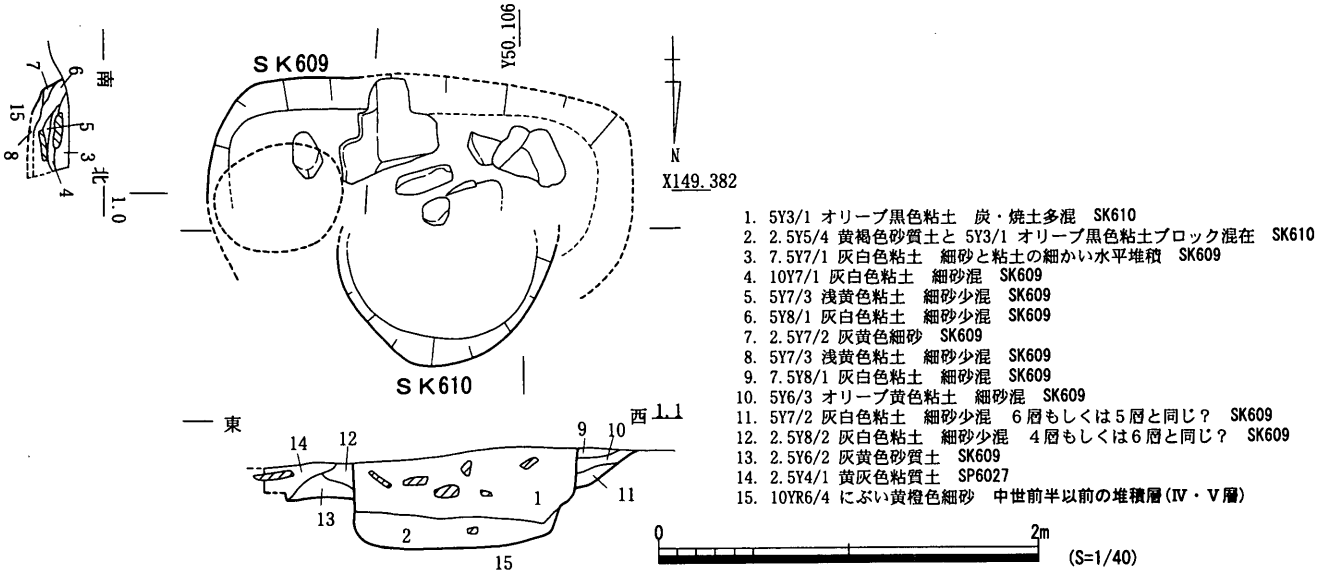
Ｇ区西部で、ＳＫ506の北に隣接して検出した土坑。埋土には礫が混じり、人為的に埋め戻されたと思われるが、詳細な性格は不明である。

出土遺物（1879～1887）　1879は備前壺。1880は肥前系陶器皿。1881は土師質土器擂鉢。復元図よりも多少内傾する可能性もある。1882は瓦質土器焙烙。1883は備前甕転用の円盤状加工品。1884は古瀬戸水柱。藤澤前期３～４。1885は土師質土器鍋。1886・1887は土師質土器足釜。中世遺物1884～1887は混入であろう。

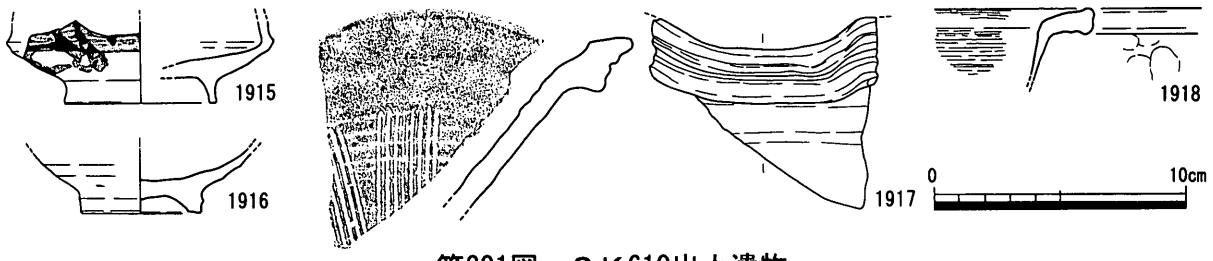
時期　1881の存在から18世紀前半（松本・佐藤様相５）と判断できる。



第199図　ＳＫ604・607出土遺物



第200図　ＳＫ609・610平・断面図



第201図　ＳＫ610出土遺物

ＳＫ 506（第 195 図）

Ｇ区西部で、ＳＫ 505 の南に隣接して検出した土坑。土層断面の記録が無く、性格は不明である。

出土遺物（1888・1889） 1887 は景徳鎮窯系青花碗。1889 は佐藤ＡⅥ形式の土師質土器皿。

時期 1889 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

ＳＫ 524・525・527・528（第 196・197 図）

Ｇ地区中央部で検出した土坑群。このうちＳＫ 527 はＳＤ 502 埋没後に掘削されている。また、位置関係から見て、ＳＫ 519・522・521・526 と土坑群を形成する可能性がある。

ＳＫ 528 は、土層観察から底部に板を敷いた土坑であることが判明している。ＳＫ 524・525・527 についても、壁面の立ち上がりが急であること、埋土の堆積単位がＳＫ 528 と類似していることから、同様の構造を持った土坑であったと思われる。さらに、ＳＫ 732 を参考にすれば、これらの土坑に結桶が設置されていた可能性が高い。

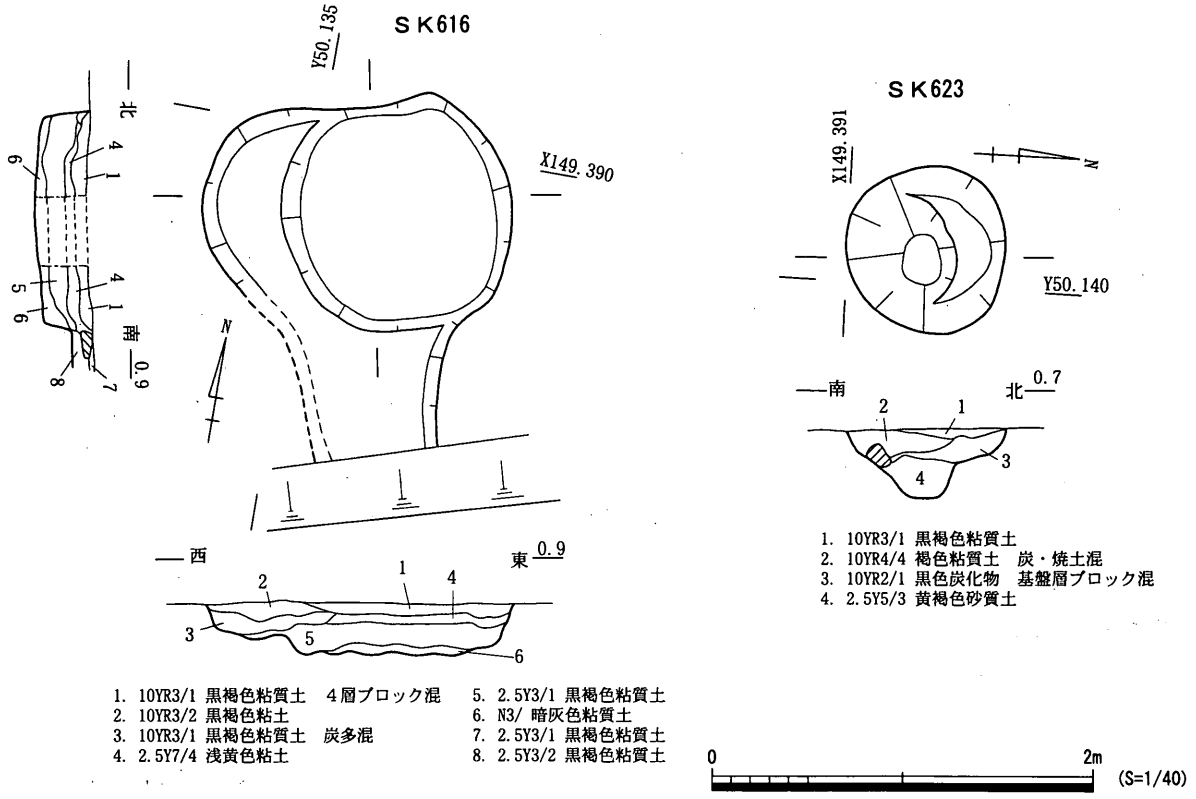
ＳＫ 524 出土遺物（1890） 1890 は瓦質土器焙烙。

ＳＫ 525 出土遺物（1891 ～ 1895） 1891 は肥前系磁器碗。1892 は肥前系陶器碗。1893 は備前擂鉢。1894・1895 は瓦質土器焙烙。

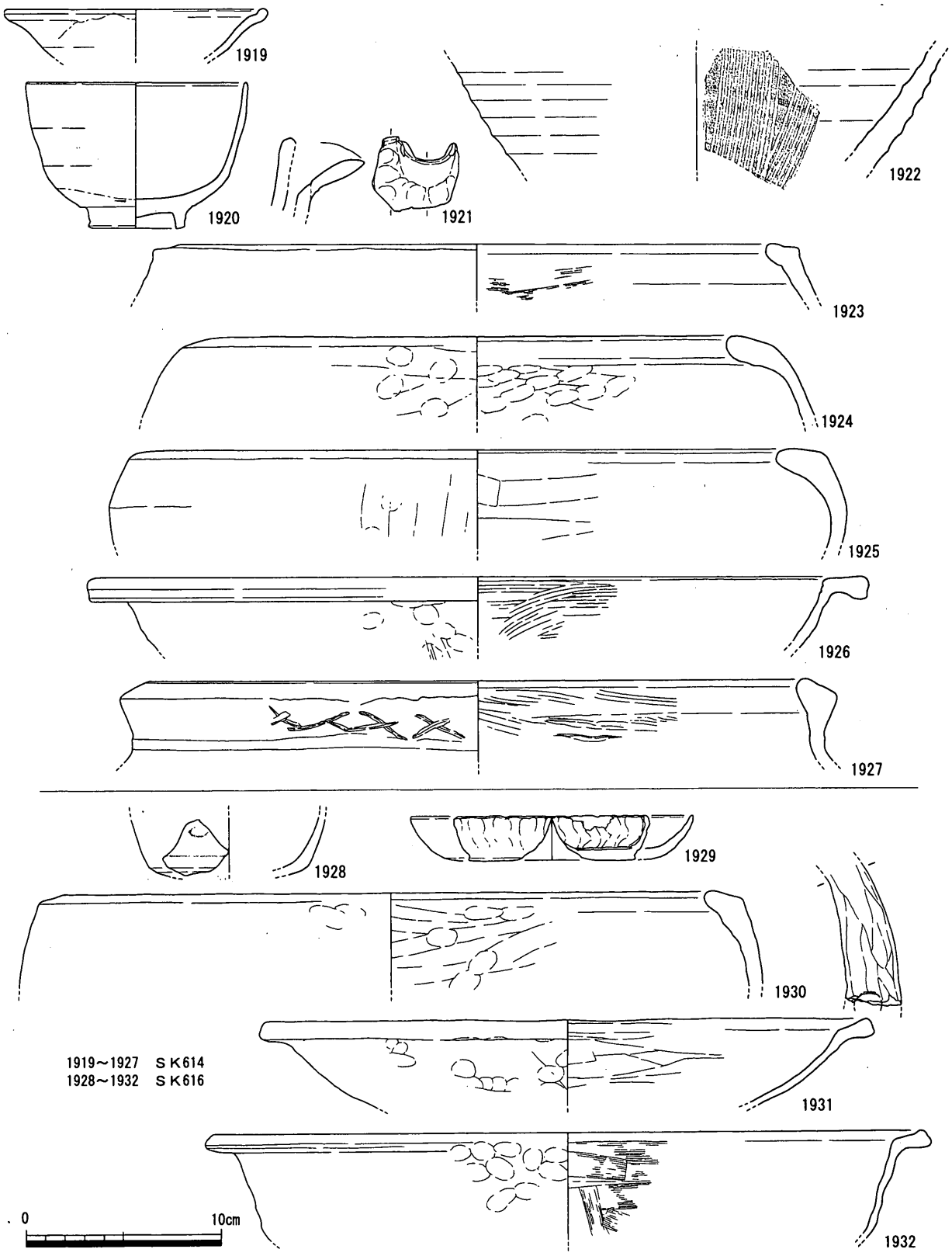
時期 いずれの土坑も、焙烙が認められることから 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

ＳＫ 530（第 197 図）

Ｇ区東部で検出した土坑。詳細な記録が無く、性格は不明である。



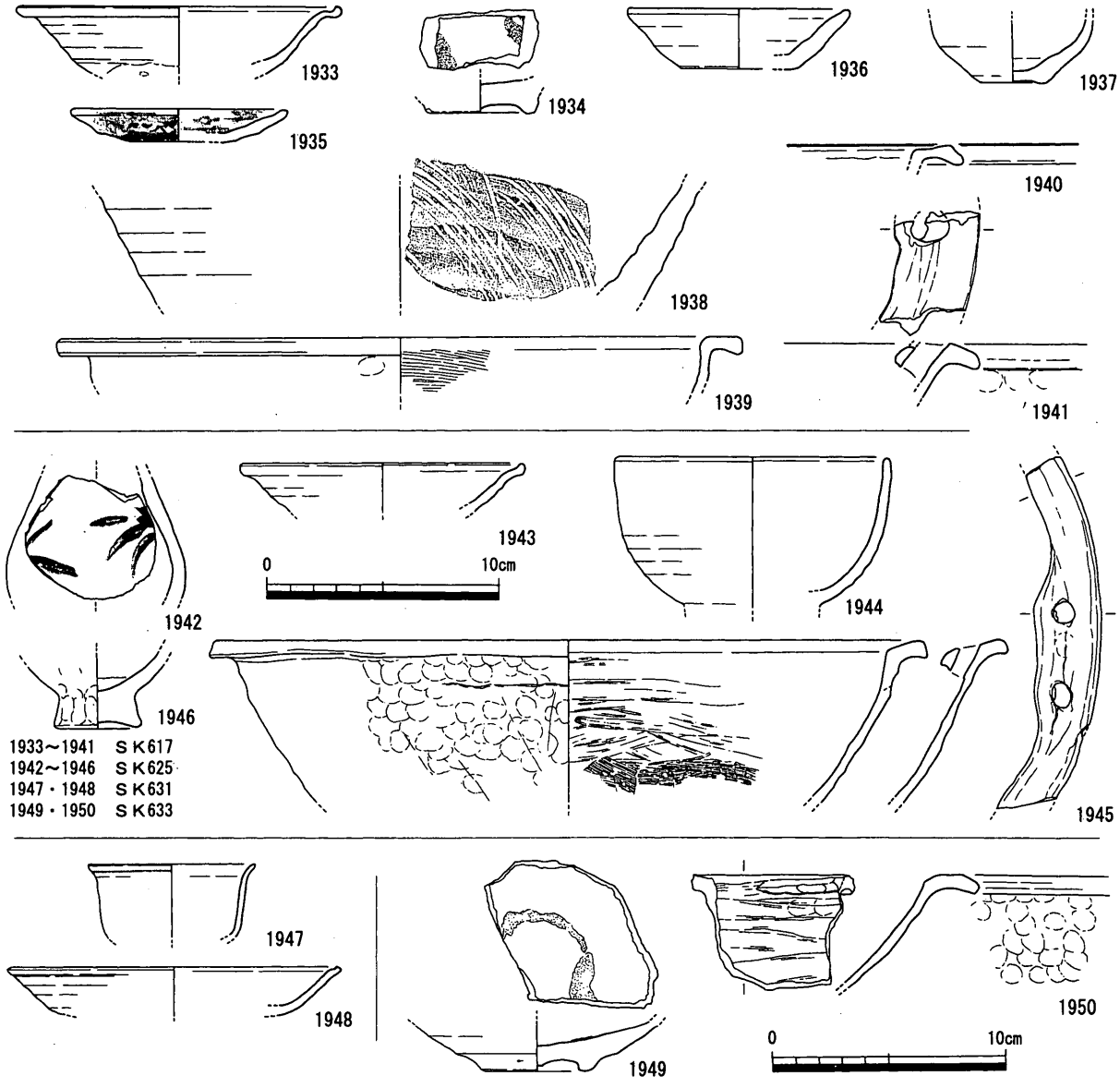
第202図　ＳＫ616・623平・断面図



第203図　ＳＫ614・616出土遺物

出土遺物（1896 ～ 1901）　1896 は肥前系磁器碗。1897 は土師質土器皿。1898 は瓦質土器焙烙。1899 は瓦質土器鍋。1900 は瓦質土器羽釜。1901 は肥前系磁器（青磁）皿。

時期　1898 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相 5）と考えられる。



第204図　ＳＫ617・625・631・633出土遺物

ＳＫ 576（第 198 図）

平面不定形の落ち込み状土坑。Ｇ区東部からＬ区西部にかけて認められる大規模な撹乱の西に近接して検出した。

出土遺物（1902 ～ 1908）　1902 は肥前系磁器碗。1903 は肥前系陶器碗。1904 は土師質土器皿。1905 は京・信楽系陶器？碗。1906 は瓦質土器焙烙。1907 は陶器甕。1908 は粗い凝灰石を刳り込んだ石製品。容器か。

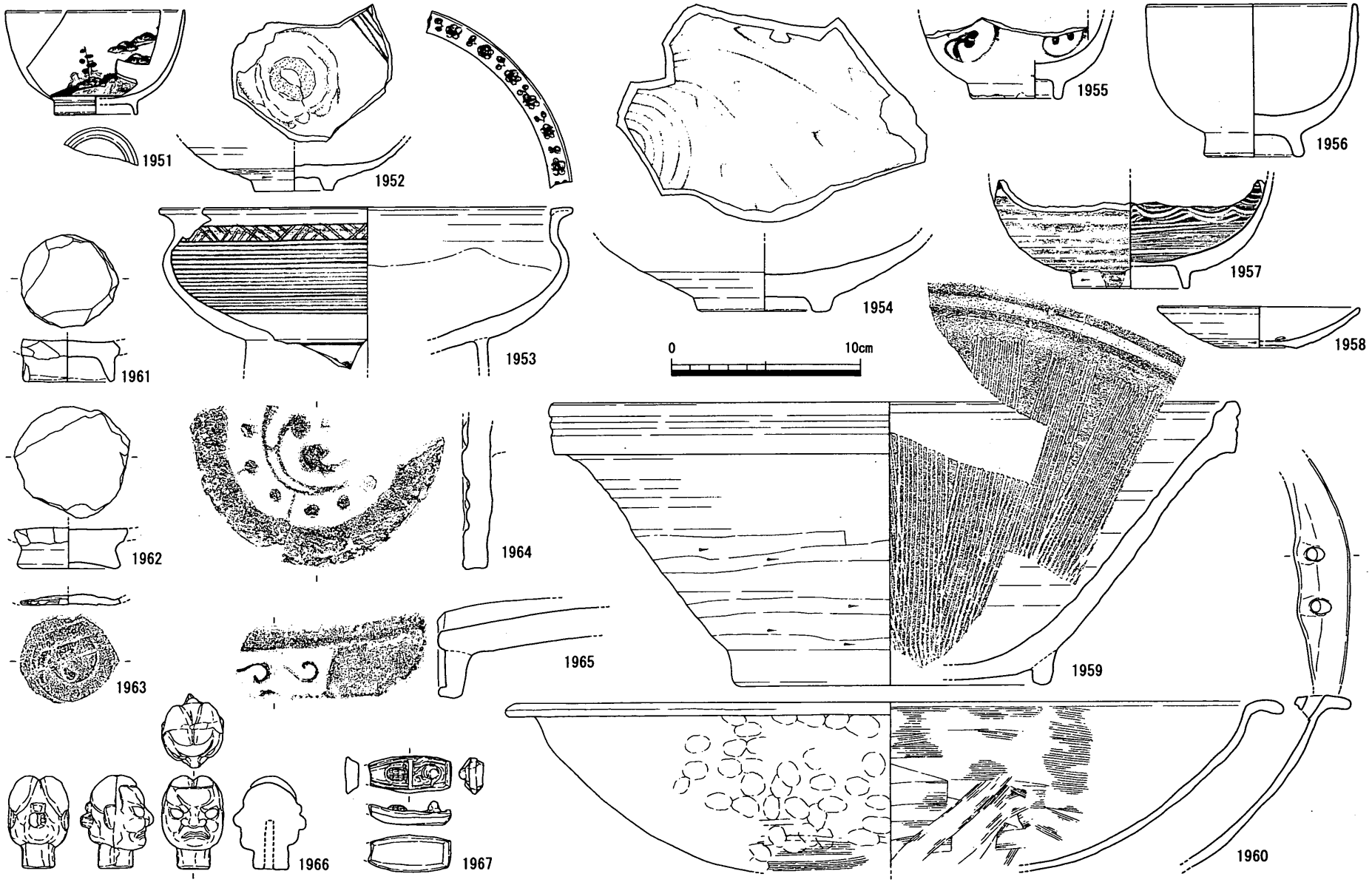
時期　1903・1906 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）埋没と考えられる。

ＳＫ 604（第 199 図）

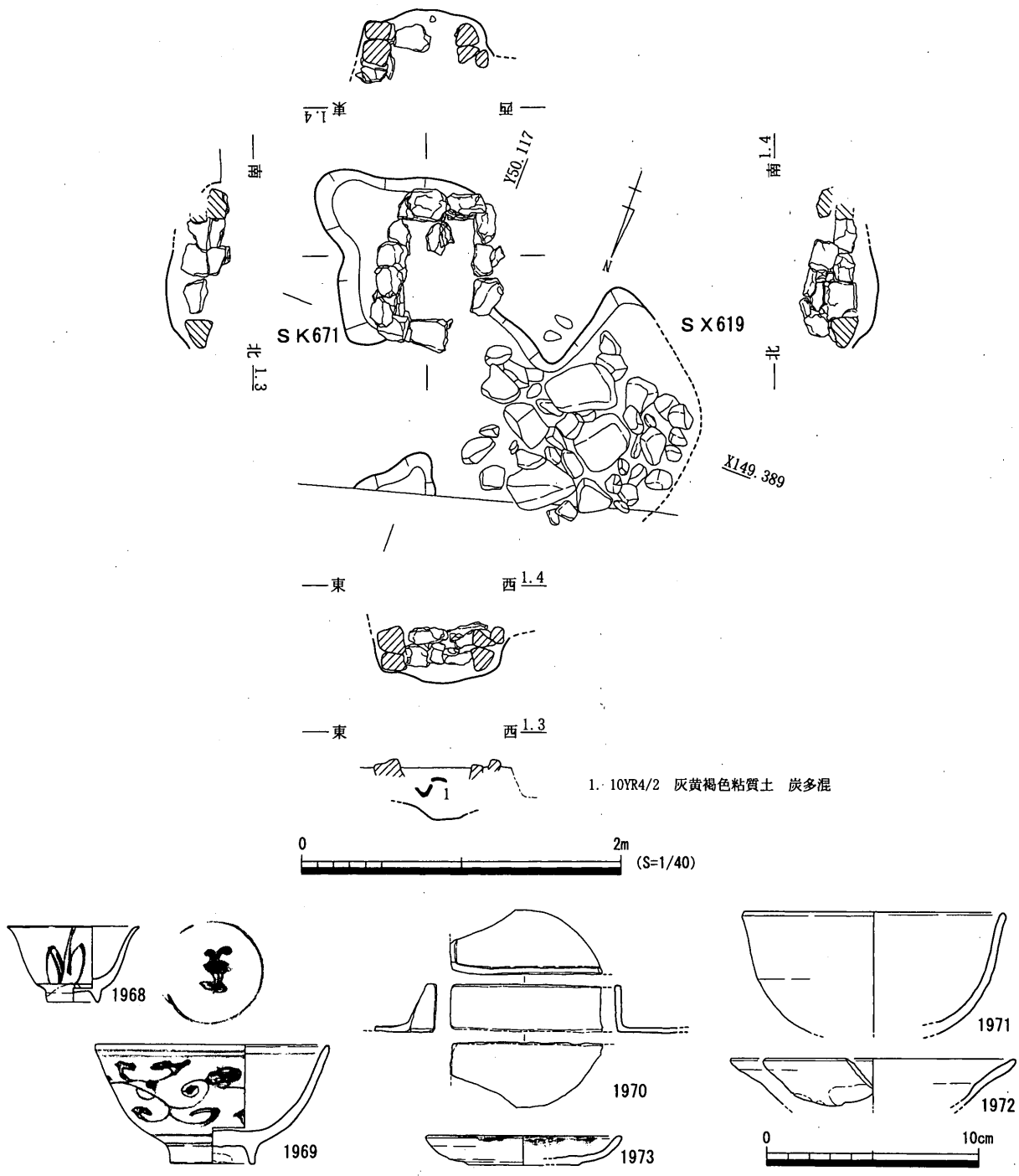
Ｈ区南端部で検出した土坑。南半部が調査地外になるため、全体形は不明である。

出土遺物（1909・1910）　1909 は肥前系磁器碗。1910 は土師質土器杯。

時期　1909 から 17 世紀後半（松本・佐藤様相４）埋没と判断できる。



第205図　ＳＫ632出土遺物



第206図　ＳＫ671・ＳＸ619平・断面図、ＳＫ671出土遺物

ＳＫ 607（第 199 図）

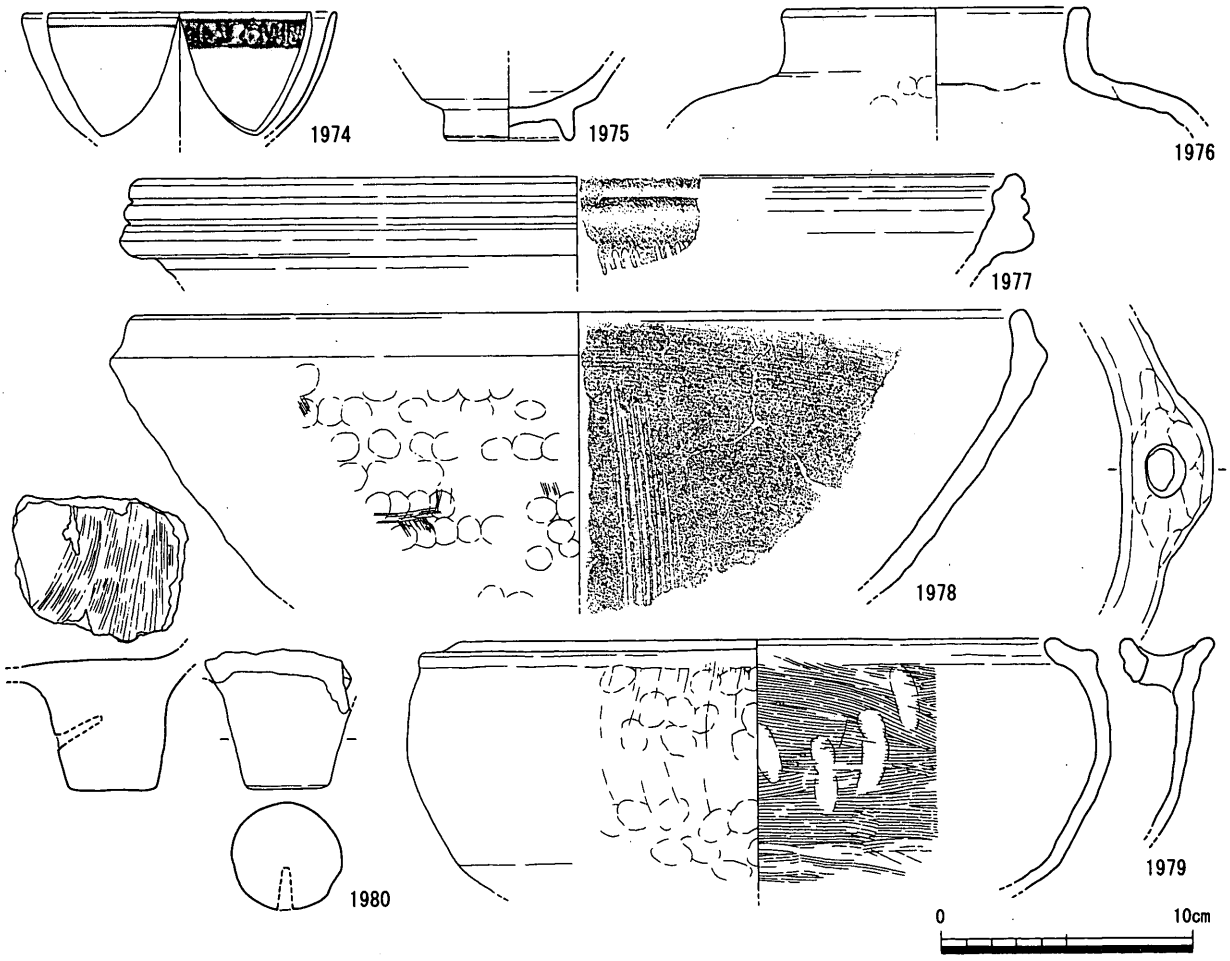
Ｈ区南端部で検出した土坑。

出土遺物（1911 ～ 1914）　1911 は備前擂鉢。1912 は瓦質土器焙烙。1913 は安山岩製砥石小片。1914 は安山岩製の円盤状加工品。

時期　出土遺物はいずれも小片で時期決定に困難を伴うが、1912 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）としておく。

ＳＫ 610（第 200・201 図）

Ｈ区南部で検出した土坑。中世の土坑ＳＫ 609（山本Ｃ２類の吉備系土師質土器椀が出土）埋没



第207図　ＳＸ619出土遺物

後に掘り込まれている。埋土中には安山岩礫と焼土ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された遺構であることが分かる。ただし、詳細な性格は不明である。

出土遺物(1915～1918)　1915は肥前系磁器碗。1916は肥前系陶器？碗。1917は備前擂鉢。1918は土師質土器鍋。

時期　1917から17世紀後半～18世紀前半（松本・佐藤様相４～５）と考えられる。

ＳＫ614（第203図）

Ｈ区東部、ＳＫ616の北で検出した落ち込み状の土坑。土層断面等の記録が無く、詳細は不明である。

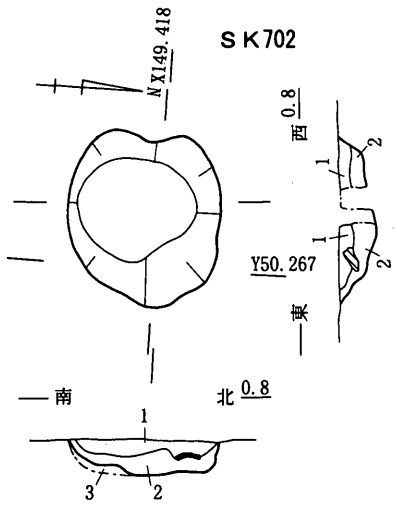
出土遺物（1919～1927）　1919は肥前系陶器碗。1920は肥前系磁器碗。1921は施釉陶器の注口部片。鉢か。1922は備前擂鉢。1923～1925は土師質土器鉢。1926は瓦質土器鍋。1927は器種不明の瓦質土器。

時期　1919から17世紀中葉以降と判断できる。

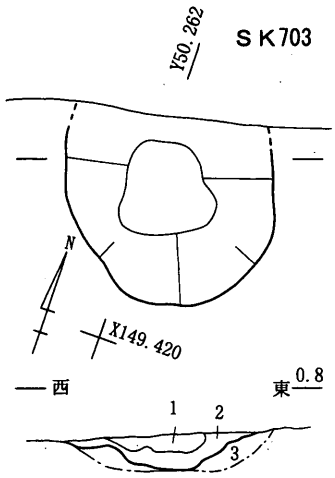
ＳＫ616（第202・203図）

Ｈ区東部で、ＳＫ614の南に近接して検出した土坑。北東部の深い部分と、それ以外の調査区外へ延びる浅い部分との間には明瞭な段があり、２基の遺構が切り合っている可能性もある。

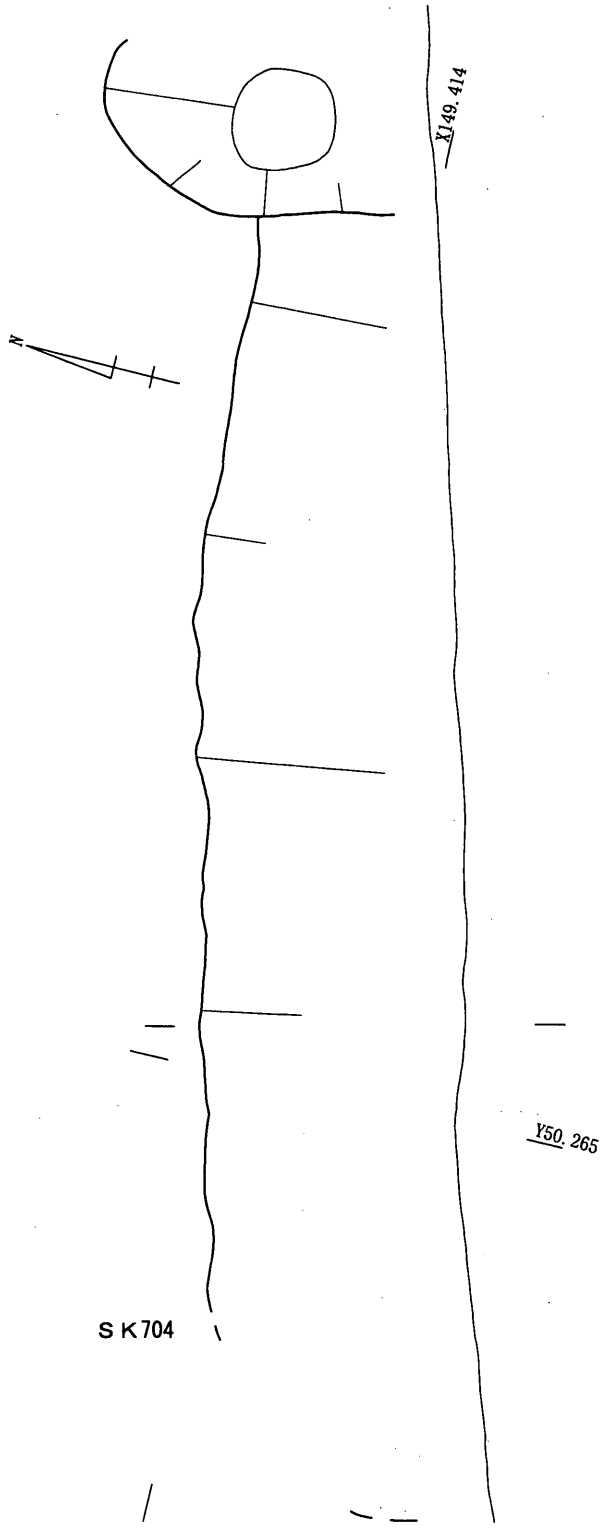
出土遺物（1928～1932）　1928は肥前系磁器碗。1929は肥前系磁器皿。1930・1932は瓦質土器



1. 2.5Y5/6 黄褐色砂質シルト　炭化物を一部含む　径0.2～0.5mの2.5Y6/8明黄褐色砂質シルトブロック均一に含む
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト
3. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト　2層に比べやや暗い

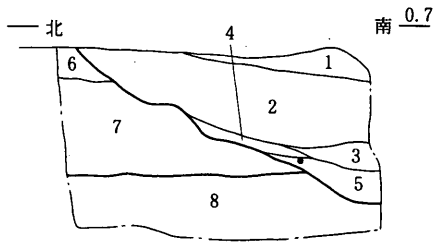


1. 10YR4/4 褐色粗砂　炭化物を一部含む
2. 5Y2/1 黒色粘質シルト　炭化物層
3. 2.5Y6/6 明黄褐色シルト質砂

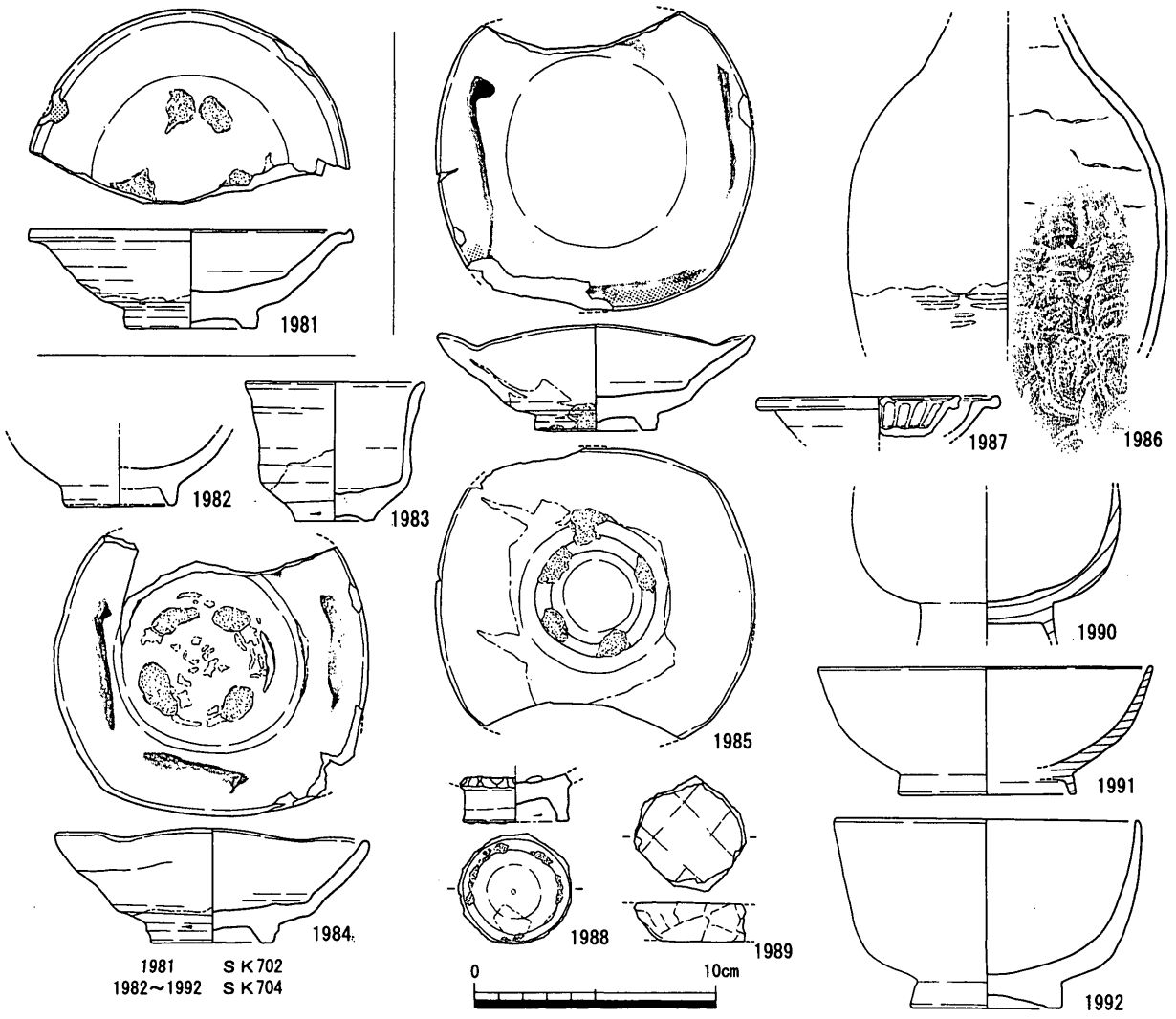


0　2m　(S=1/40)

1. 2.5YR6/2 灰黄色細砂　SK704
2. 7.5YR5/1 褐灰色砂　径2.0～10.0cmの小礫多量に含む　部分的に7.5YR5/8 明褐色化(酸化)　SK704
3. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質細砂　SK704
4. N5(YR) 灰色シルト　部分的に7.5YR5/8 明褐色化(酸化)　SK704
5. N3/ 暗灰色シルト質粘土　若干細砂粒含む　SK704
6. 5Y5/1 灰色シルト質砂　SX717上層
7. N5(YR) 灰色シルト質砂　径2.0～5.0cmの小礫若干含む。径0.05～0.1cmの砂粒含む　部分的に7.5YR5/8 明褐色化(酸化)　SK717
8. N4/ 灰色シルト　部分的に細砂～シルト質粘土　SX717下層



第208図　SK702・703・704平・断面図



第209図　ＳＫ702・704出土遺物

焙烙。

時期　1930・1931 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

ＳＫ 617（第 204 図）

Ｈ区東端部で検出した平面形が円形の土坑。ＳＫ 623 とは切り合い関係にある。

出土遺物（1933 ～ 1941）　1933 は肥前系陶器皿。1934 は肥前系陶器碗。1935 は土師質土器皿。1936 は備前皿。1937 は備前壺。1938 は備前擂鉢。1939 は瓦質土器鍋。1940・1941 は瓦質土器焙烙。

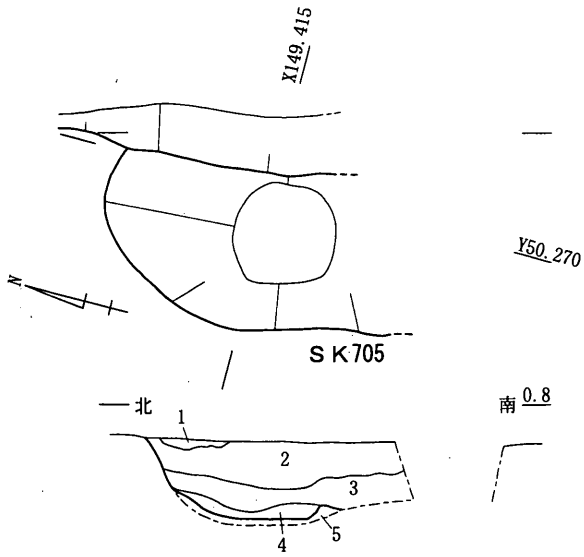
時期　1935・1940・1941 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）埋没と考えられる。

ＳＫ 625（第 204 図）

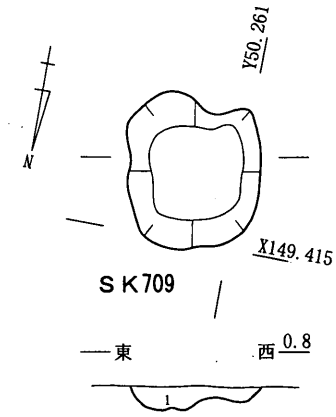
Ｈ区中央やや東よりで検出した土坑。中世の区画溝ＳＤ 013 埋没後に掘削されている。

出土遺物（1942 ～ 1946）　1942 は肥前系磁器瓶。1943 は肥前系陶器皿。1944 は肥前系陶器碗。1945 は瓦質土器焙烙。1946 は弥生時代後期の製塩土器。香東川下流域産（下川津Ｂ類土器）に特徴的な角閃石・黒雲母を多量に含む胎土を有する。

時期　1944・1945 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）埋没遺構と判断できる。

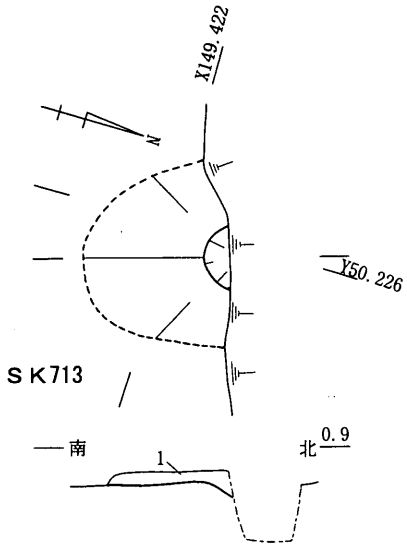


1. 10YR6/6 明黄褐色シルト質砂　径1.0cmの礫を均一に含む(SK704と似ている)
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質砂　径1.0cmの明黄褐色ブロックを含む
3. 5Y4/1　灰色砂質シルト　径1.0cm大の明黄褐色ブロックを均一に含む
2層より粘性が強い　径1.0～2.0cmの礫を多く含む
4. 7.5Y4/1 灰色粘質シルト　径1.0cm大の明黄褐色ブロックを均一に含む
3層より粘性が強い
5. 5Y6/2 灰オリーブ色シルト質粘土　径1.0cm小の明黄褐色ブロックを均一に含む

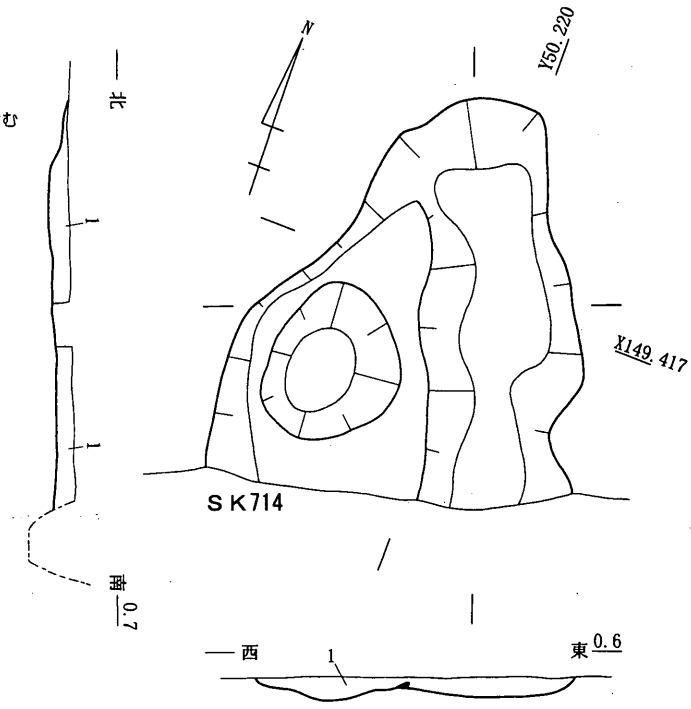


1. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト　炭化物を均一に含む
径1.0cm小の10Y6/6 明黄褐色ブロックを均一に含む

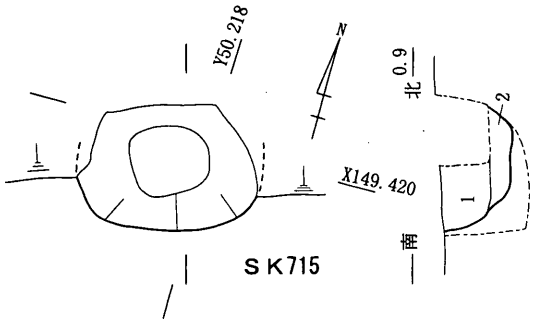
0　2m (S=1/40)



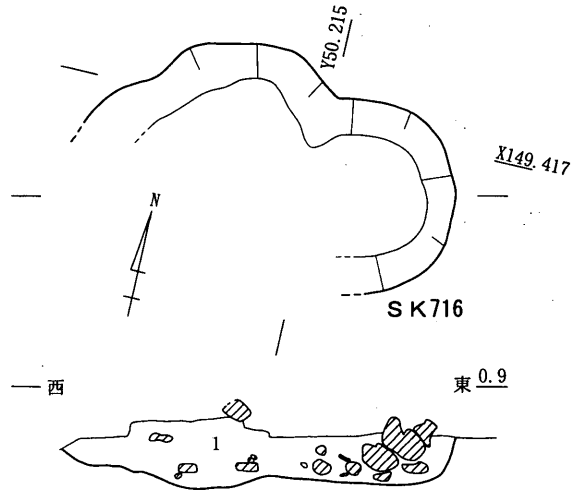
1. 10YR5/1～10YR4/1 褐灰色シルト質砂　径0.2～0.5cmの 10YR5/2
灰黄色シルトブロック多量に含む　炭化物含む　10YR6/4 にぶい
黄褐色粗砂(基盤層)まだらに含む



1. 2.5Y5/1 シルト質砂　10YR4/4 にぶい黄褐色粗砂(基盤層)ブロック多量に含む



1. 10YR5/1 褐灰色シルト質砂　径0.2～0.1cmの小礫若干含む
2. N5(YR) 灰色砂質シルト



1. 10YR5/1～10YR4/1 褐灰色砂質シルト　炭化物若干含む

第210図　ＳＫ705・709・713～716平・断面図

ＳＫ 631（第 204 図）

Ｈ区北西部で検出した平面形が不定形の、浅い落ち込み状土坑。

出土遺物（1947・1948） 1947 は肥前系磁器小杯。1948 は肥前系陶器皿。

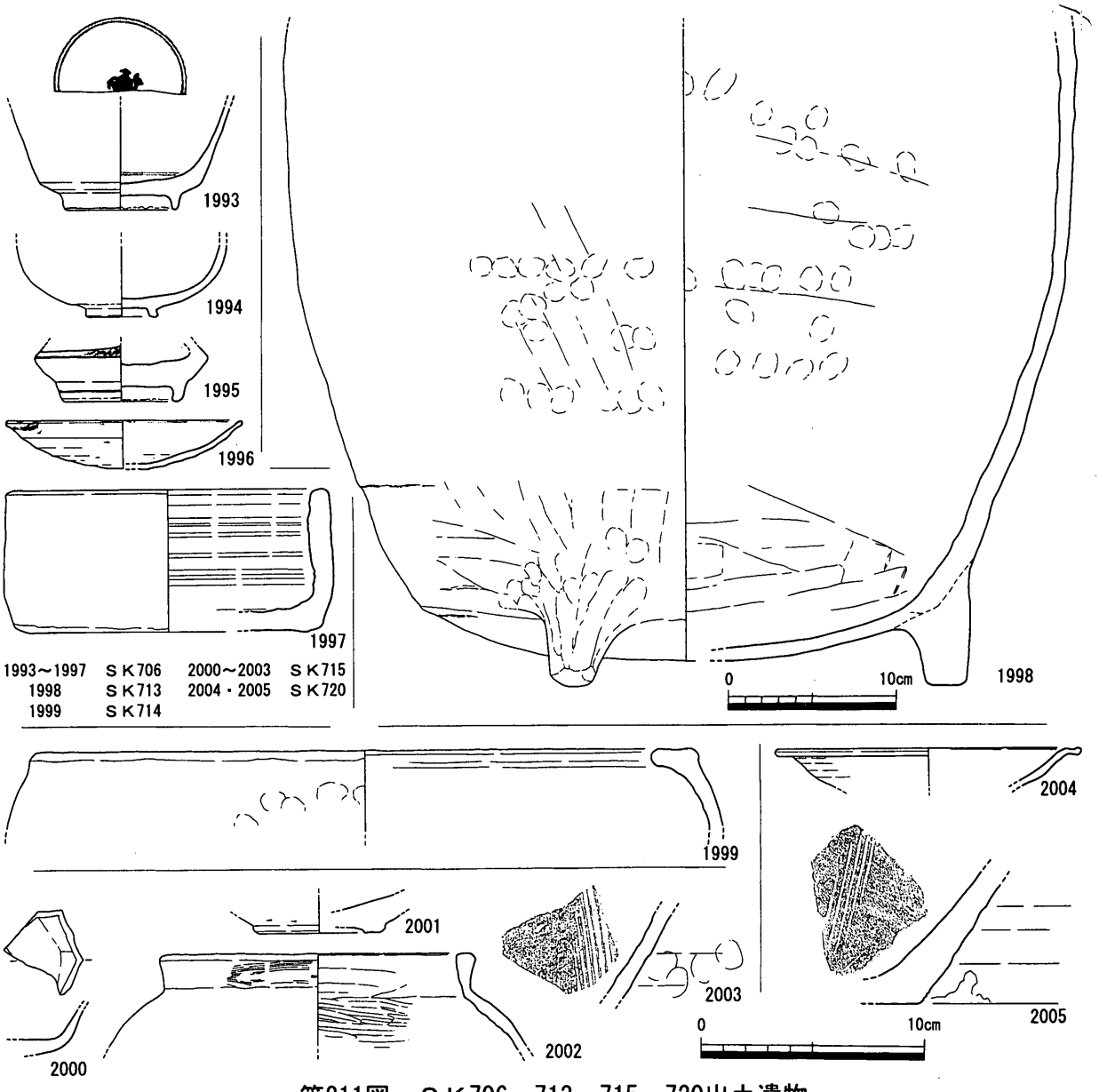
時期 小破片２点の出土遺物では時期を判断し難いが、17 世紀中葉（松本・佐藤様相３）埋没と考えられる。

ＳＫ 633（第 204 図）

Ｈ区北西部で、ＳＫ 631 の西、ＳＫ 632 の北に近接して検出した落ち込み状の土坑。平面形は不定形。

出土遺物（1949・1950） 1949 は肥前系陶器皿。1950 は瓦質土器焙烙。

時期 1950 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。



第211図　ＳＫ706・713～715・720出土遺物

ＳＫ 632（第 205 図）

Ｈ区北西部、ＳＫ 632 の南に隣接する位置で検出した、平面形が不定形の土坑。

出土遺物（1951 ～ 1967） 1951 は肥前系磁器碗。1952 は肥前系陶器皿。1953 は肥前系磁器鉢。1954 は肥前系磁器（青磁）皿。1955 は陶胎染付碗。1956・1957 は肥前系陶器碗。1958 は施釉陶器皿。1959 は備前擂鉢。1960 は瓦質土器焙烙。1961 ～ 1963 は円盤状加工品。1961 は京・信楽系陶器碗、1964 は器種不明の土師質土器、1963 は土師質土器杯の転用。1966 は型成形による土製の木偶。1967 は施釉陶器の船形玩具。

時期 1951・1955 ～ 1957・1959・1960 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）埋没と考えられる。

ＳＫ 671・ＳＸ 619（第 206 図）

Ｈ区中央北端部で検出。ＳＫ 671 は平面形長方形の石組の土坑。直方体に近い形状の安山岩礫が２段積まれている。ＳＸ 619 はＳＫ 671 の北西に隣接し、平面形不定形の土坑内から安山岩礫が多量に出土している。おそらくＳＫ 671 と同様の構造を持った土坑であったものと思われる。

ＳＫ 671 出土遺物（1968 ～ 1973） 1968 は肥前系磁器小杯。1969 は肥前系磁器碗。1970 は器種不明の磁器。1971 は肥前系陶器碗。1972 は肥前系陶器皿。1973 は土師質土器皿。

ＳＸ 619 出土遺物（1974 ～ 1980） 1974・1975 は肥前系磁器碗。1976 は土師質土器壺。1977 は備前擂鉢。1978 は土師質土器鉢。1979 は土師質土器鍋。1980 は瓦質土器脚部。

時期 1971 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

ＳＫ 702（第 208・209 図）

Ｉ区で検出した土坑。

1981 は肥前系陶器皿。口縁部の一箇所が打ち欠かれ、その部分に煤が付着していることから灯明皿として使用されたことが分かる。

時期 1981 が溝縁皿であることから、17 世紀中葉（松本・佐藤様相３）と考えられる。

ＳＫ 704（第 208・209 図）

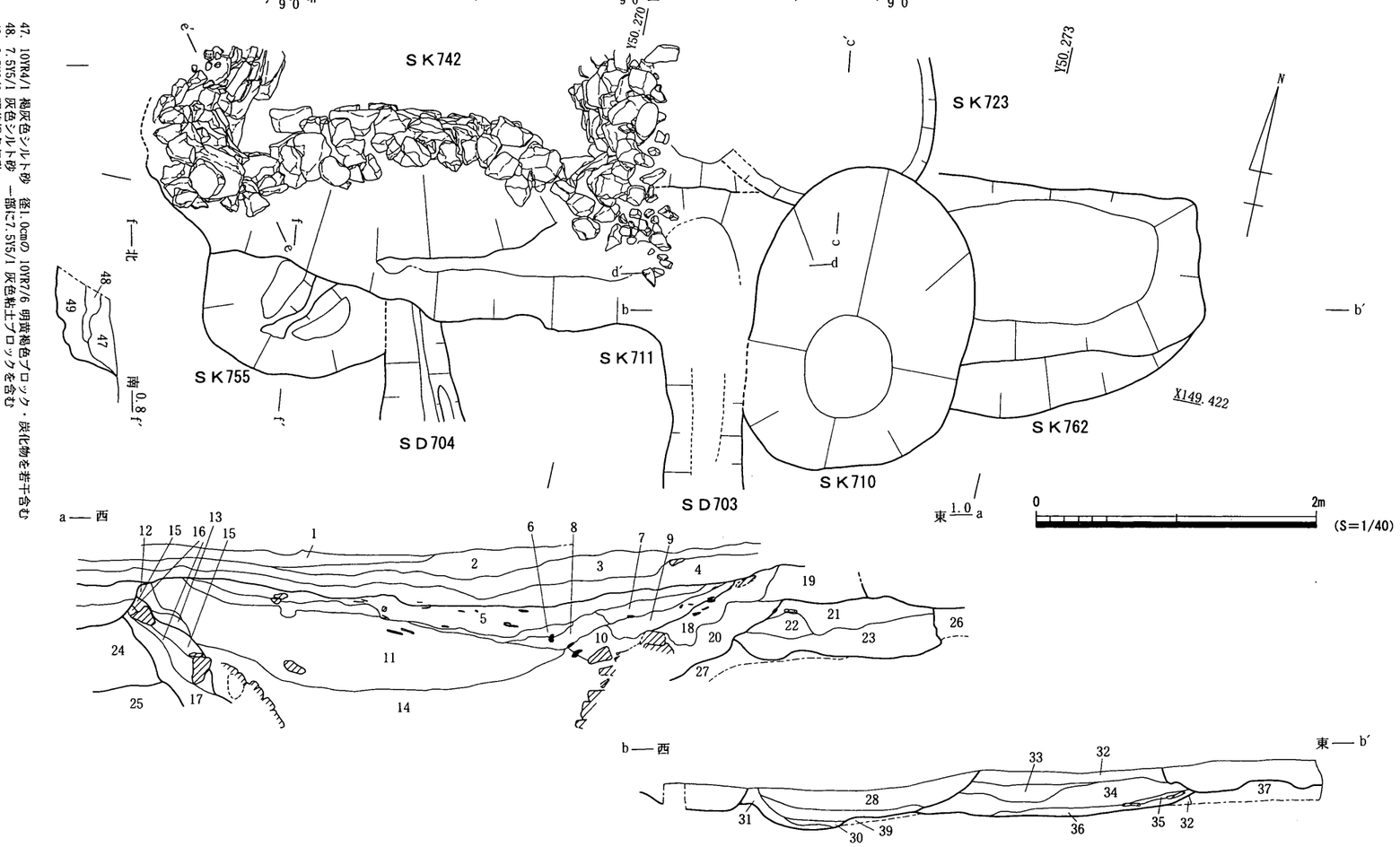
Ｉ区南端部で検出した土坑。東部と南部は調査地外にあたるため、全体形は不明である。当該部分では、本遺構形成以前にも東西方向を指向するＳＸ 717 下層、ＳＸ 717 上層が築かれており、その要因が地割に制約されていたためであるとすれば、16 世紀末から本遺構埋没までの間、地割の変更が行われなかったことを示している。

出土遺物（1982 ～ 1992） 1982 は肥前系磁器碗。1983 は肥前系陶器小碗。1984・1985 は肥前系陶器碗。1986 は肥前系陶器瓶。外面にはタタキの痕跡が、内面には当て具痕が確認できる。1987 は瀬戸・美濃系陶器皿。1988 は肥前系陶器碗転用の円盤状加工品。1989 は平瓦転用の円盤状加工品。1990 ～ 1992 は漆器椀。

時期 ＳＸ 717 埋め戻し後に掘り込まれた土坑であることから、17 世紀前葉と考えられる。

ＳＸ 705（第 210 図）

Ｉ区南端部で検出した土坑。東半分はＳＤ 704 に破壊されている。遺物は出土していない。



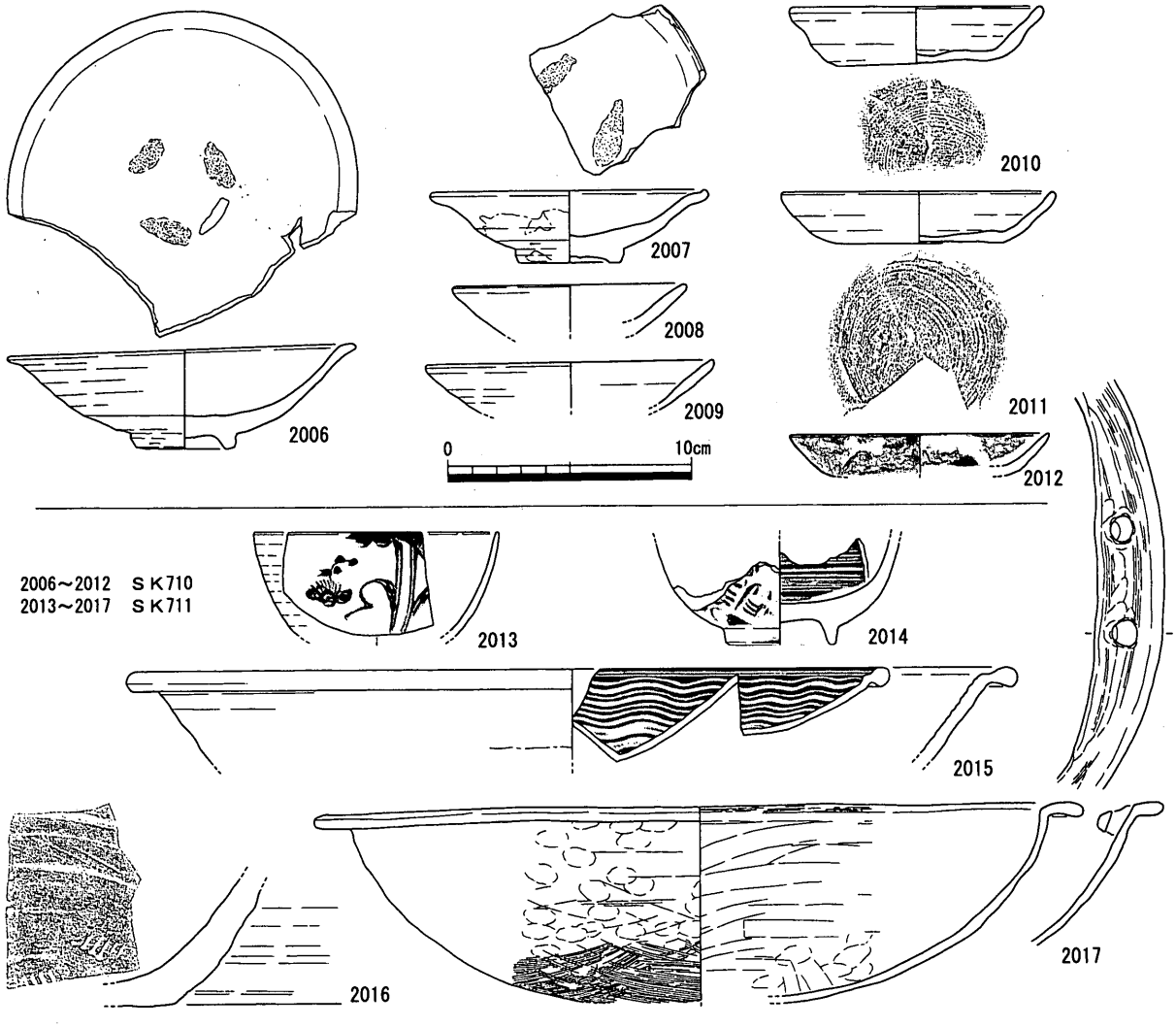
47. 10YR4/1 褐灰色シルト砂　径1.0cmの10YR7/6 明黄褐色ブロック・炭化物を若干含む
48. 7.5Y5/1 灰色シルト砂　一部に7.5Y5/1 灰色粘土ブロックを含む
49. 2.5Y6/6 明黄褐色細砂

40. 7.5Y5/1 灰色シルト質粘土
41. 5Y5/3 灰オリーブ色砂質シルト
42. 5Y6/2 灰オリーブ色砂質シルト　5Y6/6 オリーブ色が沈殿　古代以前の堆積層（Ⅴa層）

43. 2.5Y3/2 黒褐色シルト質粘土　径2.5～3.0cm程度の礫を少量含む　SK711
44. 2.5Y3/2 黒褐色シルト質粘土と 2.5Y5/3 黄褐色細砂の混合層
径2.5～3.0cmの礫を少量含む　SK711
45. 2.5Y3/1 黒褐色粘土　43層に比べやや灰味が強い　炭化物を均一に含む
拳大の礫を まばらに含む　SK711
46. 5Y6/1 灰色砂質シルト　古代以前の堆積層（Ⅴa層）

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト　炭化物を均一に含む　近代整地層（Ⅱ層）
2. 10YR5/6 褐色砂質シルト　炭化物と径1.0cmの礫を均一に含む　近代整地層（Ⅱ層）
3. 10YR4/4 褐色砂質シルト　2.5Y6/6 明黄褐色粘土を多量に含む　炭化物と径1.0cmの礫を均一に含む　近代整地層（Ⅱ層）
4. 10YR4/4 褐色砂質シルト　径0.5～2.0cmの2.5Y6/6 明黄褐色砂質シルトブロックをやや多く含む　炭化物・径1.0cmの礫を均一に含む　近代整地層（Ⅱ層）
5. 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト　炭化物・遺物・礫を多量に含む　SK742 埋め戻し土
6. 2.5Y7/6 明黄褐色粘土　部分的に 10YR5/4 にぶい黄褐色砂が混入　SK742 埋め戻し土
7. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルトと径2.5～3.0cmの10YR6/1 褐灰色粘土ブロックの混合層
粘土ブロックは10YR6/8 明黄褐色、7.5YR5/8 明褐色に変色　SK742 埋め戻し土
8. 7.5Y4/1 灰色粘土と2.5Y4/1 黄灰色粘質シルトの混合層　SK742 埋め戻し土
9. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト　炭化物・遺物・径1.0cm程度の礫を多量に含む
径0.5cmの2.5Y7/8 黄色ブロック点在　SK742 埋め戻し土
10. 10YR3/1 黒褐色粘質シルト　SK742 堆積土
11. 7.5Y4/1 灰色粘土　SK742 堆積土
12. 10YR4/1 褐灰色シルト質粘土　SK742 堆積土
13. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト　径1.0cmの礫・炭化物を若干含む
一部 10YR5/8 黄褐色ブロックを含む　SK742 堆積土
14. 10Y4/1 灰色粘土と灰色砂の混合層　径2.0cmの礫・有機物を多く含む
SK742 埋積土
15. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト　径1.0～3.0cmの礫を均一に含む
SK742 裏込め
16. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト　径1.0～3.0cmの10YR7/8～10YR6/8
黄橙～明黄褐色ブロックを均一に含む　SK742 裏込め
17. 5Y7/4 浅黄色シルト質砂　SK742 裏込め
18. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト　炭化物、径1.0～2.0cmの礫・遺物を均一に含む
全体に径0.5cmの2.5Y6/6 明黄褐色ブロックをやや多く含む　SK742 裏込め
19. 10YR4/1 褐灰色砂質シルト　径1.0cm程度の礫をわずかに含む　SK742 裏込め
20. 5Y4/1 灰色シルト質粘土　炭化物を均一に含む　径2.0cm程度の礫を少量含む
SK742 裏込め
21. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルトと2.5Y7/6 明黄褐色ブロックの混合層　SK722
22. 5Y6/1 灰色シルト質砂を基盤層と2.5Y6/6 明黄褐色ブロックの混合層　SK722
23. 5Y4/1 灰色シルト質砂　径2.0cm程度の2.5Y6/6 明黄褐色ブロックを多量に含む
SK722
24. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト質砂　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
25. 5N5/1 青灰色砂質シルト　下ほど礫を多く含む　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
26. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト　10Y6/8 明黄褐色が沈着
27. N4/ 灰色シルト質砂　古代以前の堆積層（Ⅴa層）
28. 2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト　SK710
29. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト　SK710
30. 5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト　炭化物を含まない
SK710
31. 5Y4/1 灰色シルト質砂　径1.0cmの2.5Y6/6 明黄褐色
ブロックを多く含む　SK710
32. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト質砂　炭化物を若干含む
径0.5cmの10YR6/6 明黄褐色砂質シルトブロックを東側で多く含む　SK762
33. 10YR4/1 褐灰色シルト質砂　SK762
34. 2.5Y7/8 黄色粗砂　SK762
35. 5Y5/1 灰色砂質シルト　SK762
36. 5Y5/1 灰色シルト質粘土　層の下部に炭化物が帯状に堆積
層の上部に遺物を多く含む　SK762
37. 5Y6/1 灰色砂質シルト　撹乱の影響で色調変化
古代以前の堆積層（Ⅴa層）
38. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルトと2.5Y6/6 明黄褐色砂質シルトとの混合層
古代以前の堆積層（Ⅴa層）
39. 2.5Y7/6 明黄褐色砂質シルト　一部5Y6/2 灰オリーブ色
古代以前の堆積層（Ⅴa層）

第212図　ＳＫ710・711・723・742・755・762・平・断面図



第213図　ＳＫ710・711出土遺物

時期　Ⅱ層上面から掘り込まれていることから、17 世紀前葉以降であることは確実であるが、詳細な時期は不明である。

ＳＫ 706（第 211 図）

Ⅰ区北端で検出した土坑。北部が調査地外にあたるため、全体形は不明である。

出土遺物（1993 ～ 1997）　1993 は肥前系磁器碗。1994 は肥前系陶器碗。1995 は器種不明の肥前系磁器。1996 は備前灯明皿。1997 は備前鉢。

時期　17 世紀後半と考えられる。

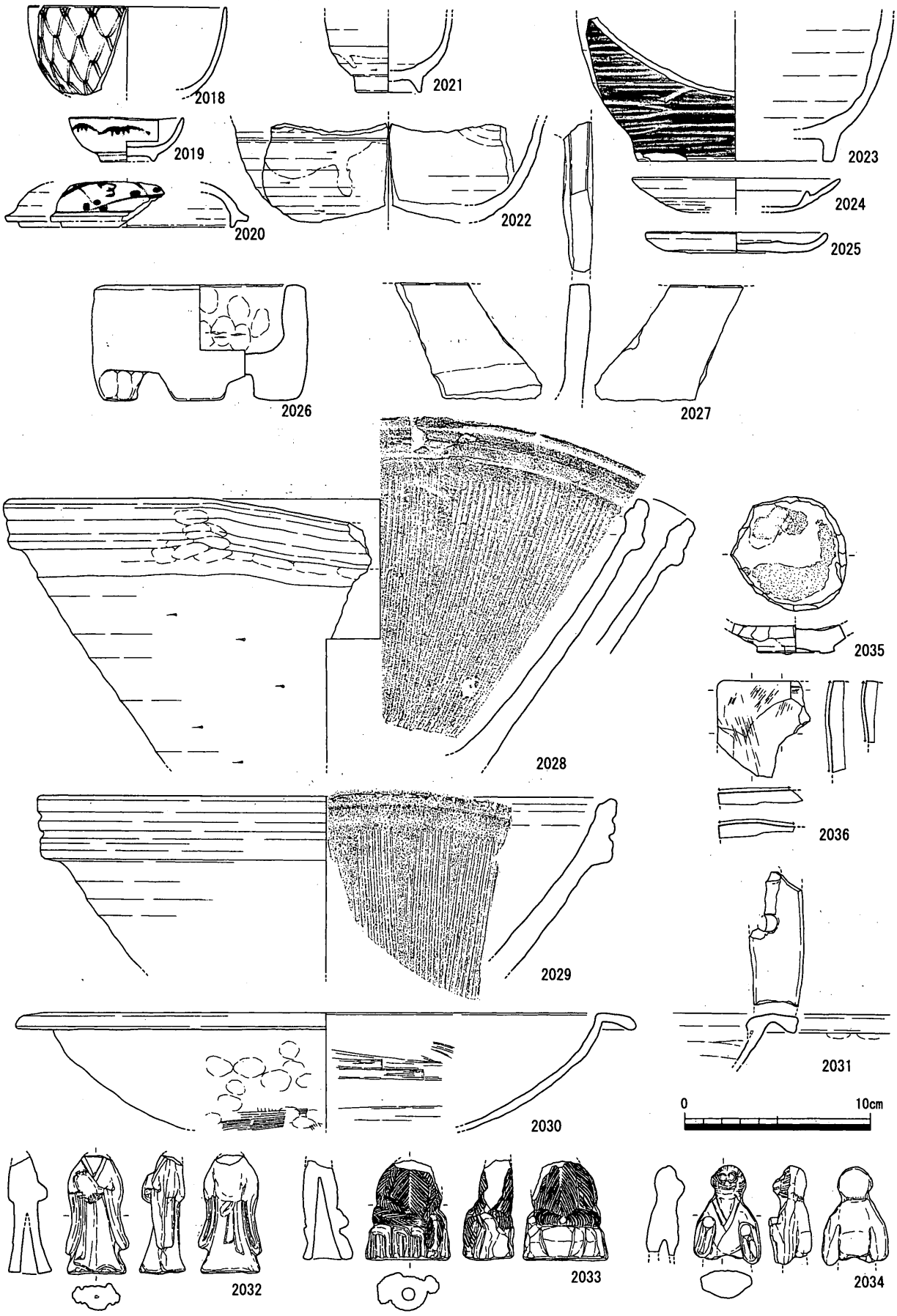
ＳＫ 713（第 210・211 図）

Ｌ区北東部で検出した浅い土坑。土坑内からは容量の大きな土師質土器鉢 1 個体のみが出土した。浅く掘り込み、鉢を設置していたものと思われる。

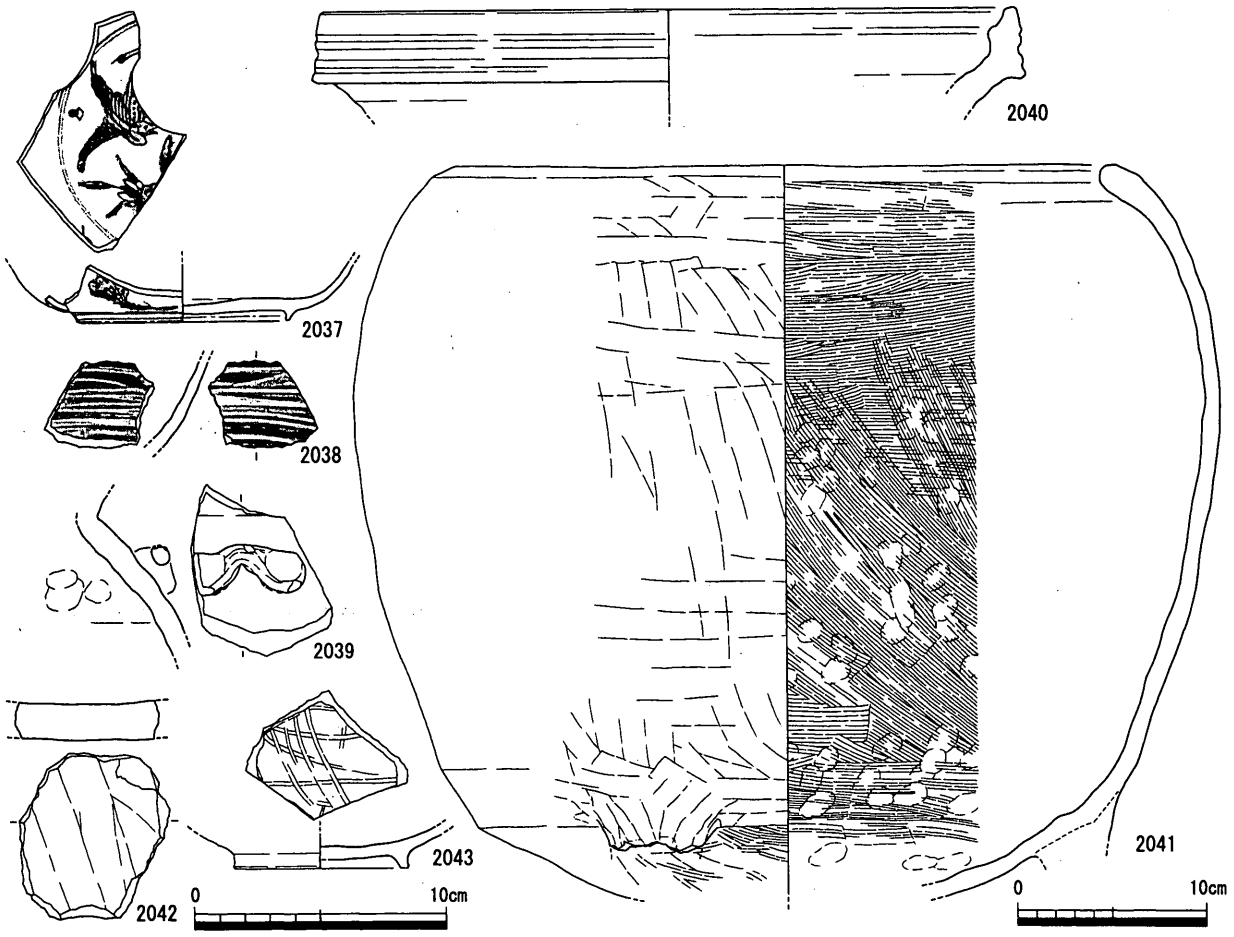
出土遺物（1998）　1998 は土師質土器鉢。

時期　1998 から 17 世紀前半と考えられる。

ＳＫ 714（第 210・211 図）



第214図　ＳＫ742出土遺物



第215図　ＳＫ762出土遺物

Ｌ区中央南端部で検出した平面形が不定形の土坑。基盤層ブロックを多く含む埋土から見て人為的に埋め戻しが行われたことは確実である。

出土遺物（1999）　1999 は土師質土器鉢。

時期　出土遺物から 17 世紀前半と考えられる。

ＳＫ 715（第 210・211 図）

Ｌ区中央北端部で検出した土坑。埋土からは、人為的な埋め戻しか否かは判断できない。

出土遺物（2000 ～ 2003）　2000 は肥前系磁器八角鉢。2001 は肥前系陶器皿。2002 は土師質土器壺。2003 は備前擂鉢。

時期　時期比定は困難であるが、2000 から 18 世紀前半と捉えられる。

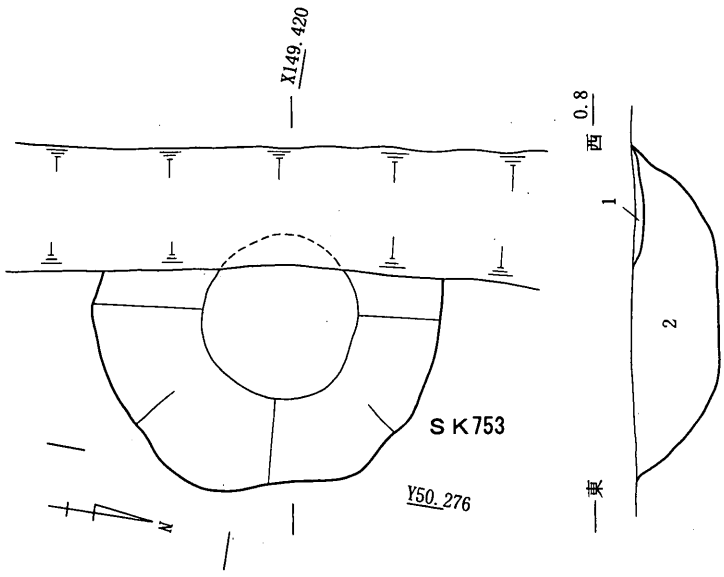
ＳＫ 716（第 210 図）

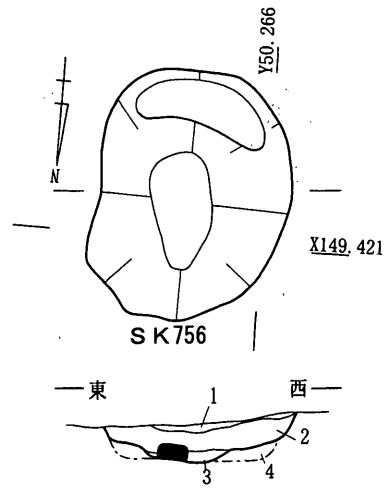
Ｌ区中央部で検出した礫を多量に含む土坑。本遺構埋没後にＳＡ 702 が築かれている。出土遺物は認められない。

時期　詳細な時期は不明である。

ＳＫ 720（第 211 図）

Ｌ区中央部で検出した平面形楕円形の土坑。本土坑埋没後にＳＡ 702 が築かれている。

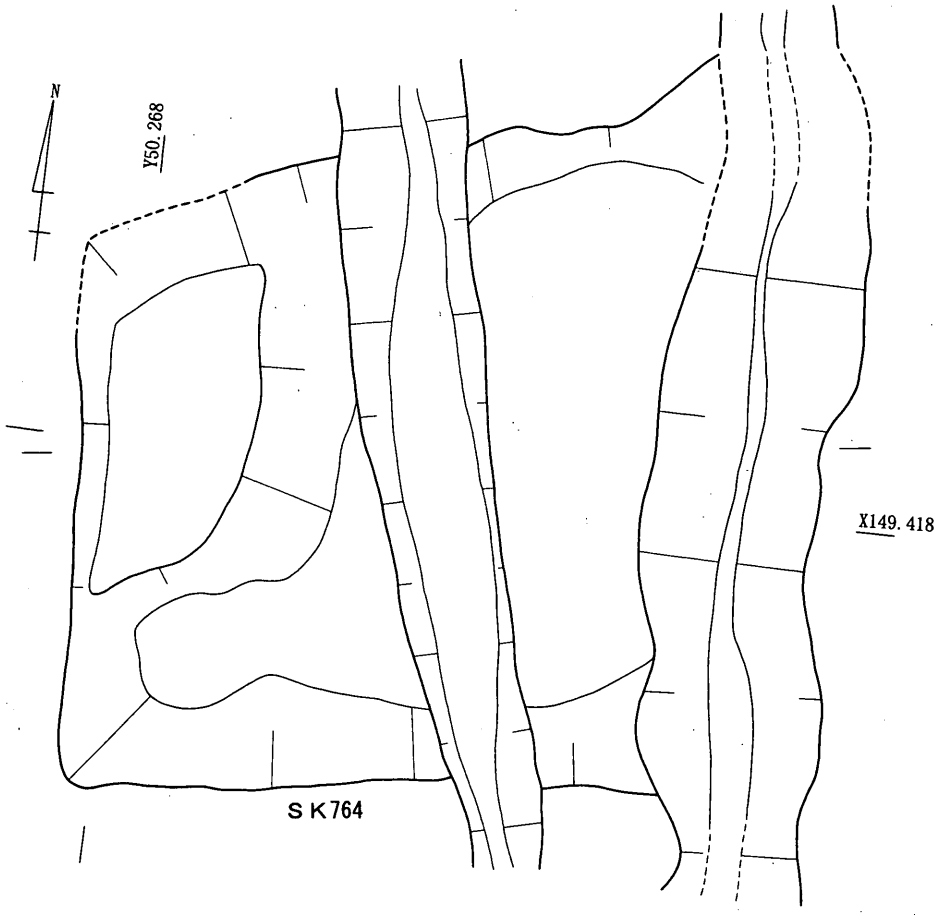


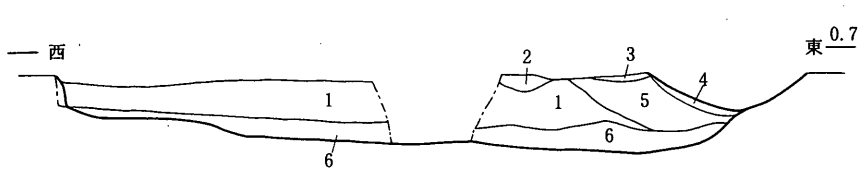


1. 5Y4/1 灰色砂質シルト　撹乱
2. 5Y5/1 灰色シルト質砂　径1.0～5.0cmの礫を多く含む　礫の周囲は 7.5Y6/8 橙色の鉄分が沈着
炭化物をわずかに含む

1. 10YR3/3 暗褐色砂質シルト
2. 2.5Y6/6 明黄褐色粗砂　径0.1cm粗砂
3. 5Y5/1 灰色砂　径0.1cm以内
4. 5Y5/1 灰色シルト質砂　基盤層

0　2m
(S=1/40)





1. 2.5Y7/8 黄色粗砂　径3.0cm程度の礫を少量含む
2. 10YR4/1 褐色灰色粘質シルト　径1.0cm小の炭化物を多く含む
径3.0cm程度の粘土ブロックを一部含む　径2.0cm程度の礫を少量含む
3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト質砂
4. 10YR3/1 黒褐色シルト質砂　3層に比べ褐色が強い
5. 2.5Y3/2 黒褐色粗砂　径2.0cm程度の礫を少量含む
2層に似ている　SD703 の影響で着色か？
6. 10YR3/3 暗褐色砂　2層より砂粒が細かい　径2.0cm程度の礫を少量含む

第216図　SK753・756・764平・断面図

出土遺物（2004・2005） 2004は肥前系陶器皿。2005は備前擂鉢。

時期 2004から17世紀中葉（松本・佐藤様相３）と考えられる。

ＳＫ710（第212・213図）

Ｉ区北東部、ＳＫ742の南東に近接して検出した土坑。

出土遺物（2006～2012） 2006・2007は肥前系陶器皿。2008～2012は土師質土器皿。

時期 2007は17世紀中葉の遺物であるが、本土坑がＳＫ762埋没後に掘削されていることから18世紀前半（ＳＫ762埋没時期）と考えたい。

ＳＫ711（第212・213図）

Ｉ区北東部ＳＫ742の南に隣接して検出した土坑。ＳＫ710・ＳＤ703埋没後に掘削されていている。

出土遺物（2013～2017） 2013は焼成不良の肥前系磁器碗。2014は肥前系陶器碗。2015は肥前系陶器皿。2016は備前擂鉢。2017は瓦質土器焙烙。

時期 2014・2015から18世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

ＳＫ742（第212・214図）

Ｉ区北東部で検出した石組土坑。南辺が大きく内湾しているが、南西角の石積に不整合が認められることから見て、本来は直線であったものが土圧で湾曲したものであろう。

残存している石組頂部のレベルから下位には灰色～黒褐色の粘質シルト～粘土層が、上位にはブロックを含む土が認められ、時間をかけてある程度埋没した後、最終的に埋め戻されたと判断できる。よって、出土遺物の一括性は低いと言えよう。

出土遺物（2018～2034） 2018は肥前系磁器碗。2019は肥前系磁器杯。2020は肥前系磁器蓋。2021は肥前系陶器天目茶碗。2022は瀬戸・美濃系壺か。2023は肥前系陶器壺。2024は備前灯明皿。2025は土師質土器皿。2026は土師質土器鉢。2027は器種不明の施釉陶器。2028・2029は備前擂鉢。2030・2031は瓦質土器焙烙。2032～2034は型成形の土製玩具。

時期 出土遺物の主体は18世紀前半であるが、最終埋没時期は、2018・2019・2025から18世紀後半（松本・佐藤様相６）埋没と考えられる。

ＳＫ762（第212・215図）

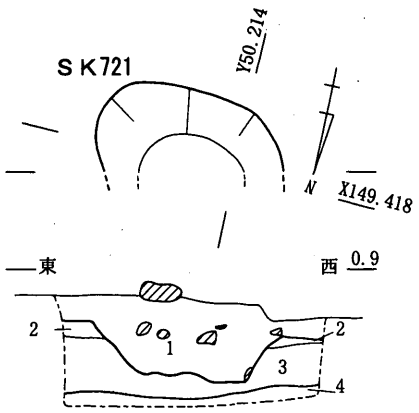
Ｉ区北東部で検出した、長方形に近い平面形の土坑。人為的な埋め戻しの痕跡が認められる。遺構間の切り合い関係からＳＫ710・723に先行することは確実である。

出土遺物(2037～2043) 2037は景徳鎮窯系青花皿。2038は肥前系陶器碗。2039は備前壺。2040は備前擂鉢。2041は土師質土器鉢。2042は平瓦転用の円盤状加工品。2043は瓦器椀。

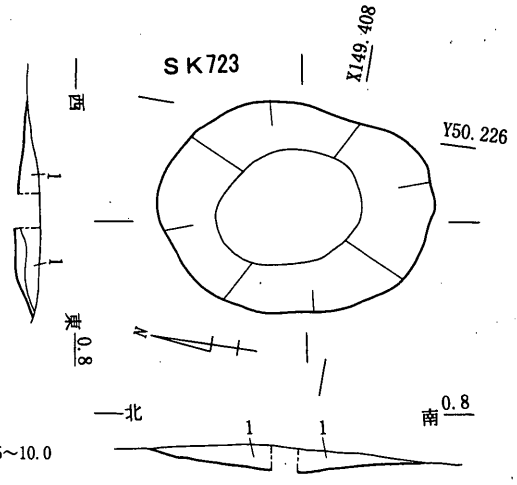
時期 2038から18世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

ＳＫ723・755・762（第212・217図）

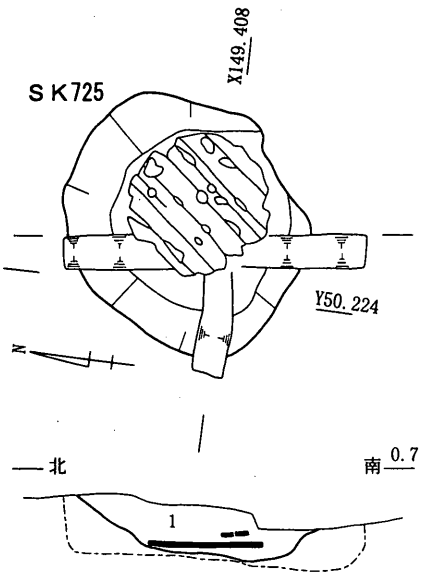
Ｉ区北東部で検出した土坑。いずれも人為的な埋め戻しの痕跡が確認できるが、詳細な性格は不明である。



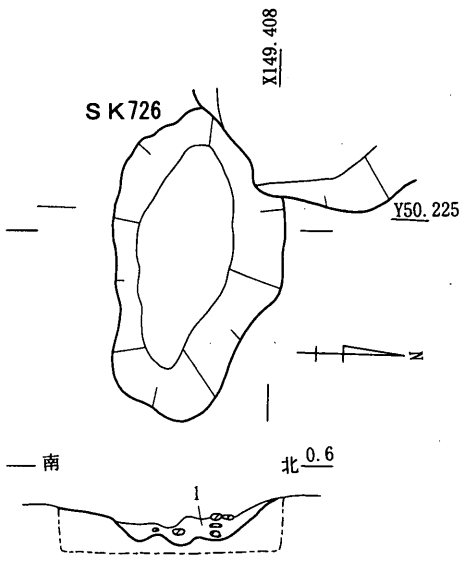
1. 5Y4/1～N4/ 灰色砂質シルト　径0.5cm～1.0cmの2層・3層ブロック含む　炭化物含む　径0.5～10.0cmの礫含む
2. 10YR6/1 褐灰色粗砂　近世初頭整地層(Ⅱ層)
3. 10YR5/1 褐灰色シルト質砂　径1.0～3.0cmの2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルトブロック・径0.5～2.0cmの10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂ブロック含む　径0.5～2.0cmの小礫含む　近世初頭整地層(Ⅱ層)
4. 5Y6/2 ～5Y6/3 灰オリーブ～オリーブ黄色粗砂　しまりは強い　径0.2～1.0cmの小礫少量含む　古代以前の堆積層(Va層)



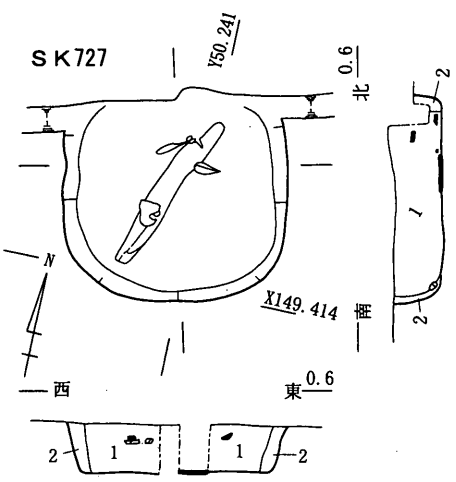
1. 10YR4/1～10YR4/2 褐灰色～灰黄褐色シルト質砂



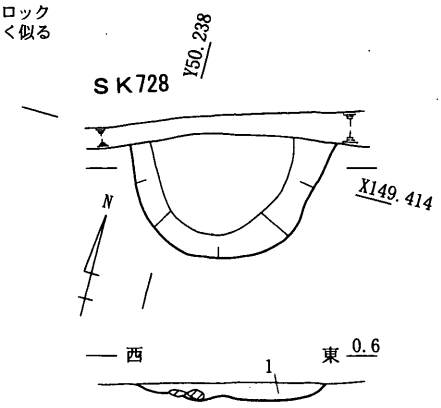
1. 10YR5/2～10YR5/3 灰黄褐色～にぶい黄褐色砂　径0.2～1.0cmのN5(YR) 灰色シルト質砂ブロック多量含む　径0.2～0.5cmの 10YR6/2 灰黄褐色粘土質シルトブロック少量含む(基盤層によく似る含有物で分層)



1. 10YR5/2～10YR6/2 灰黄褐色砂　径2.0～5.0cmのN5(YR) 灰色シルト質砂ブロック含む

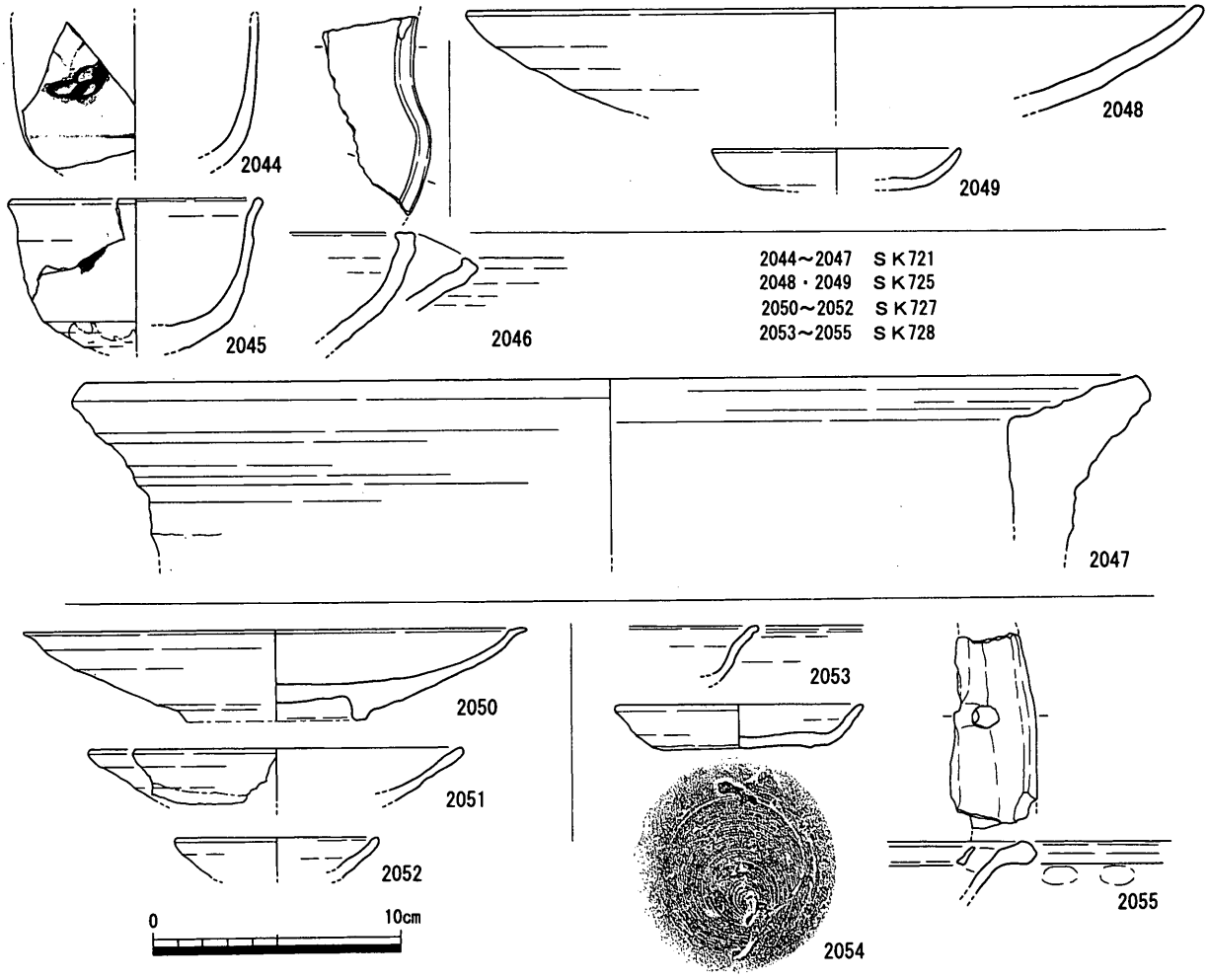


1. 10YR5/2～10YR5/3 灰黄褐色～にぶい黄橙色砂　径2.0～8.0cmの礫少量含む　径0.2～0.5cmのN5(YR) 灰色砂質シルトブロック少量含む
2. 2.5Y5/1 黄灰色シルト質砂



1. 10YR5/2～10YR5/3 灰黄褐色～にぶい黄橙色砂　径2.0～8.0cmの礫少量含む　径0.2～0.5cmのN5(YR) 灰色砂質シルトブロック少量含む

第217図　SK721・723・725～728平・断面図



第218図　ＳＫ721・725・727・728出土遺物

遺構間の切り合いの関係から、ＳＫ 723 はＳＫ 710 に先行し、ＳＫ 762 埋没後に形成されたことが分かる。一方、ＳＫ 755 はＳＫ 742 に先行する。

時期　ＳＫ 723 は 18 世紀前半（ＳＫ 710・762 埋没時期）、ＳＫ 755 は 18 世紀前半（ＳＫ 742 埋没時期）以前と判断できる。

ＳＫ 753（第 216 図）

Ｉ区東部で検出した平面形が円形の土坑。小円礫を多量に含むシルト質砂層で埋め戻されている。

時期　遺物が出土していないため、時期は不明である。

ＳＫ 756（第 216 図）

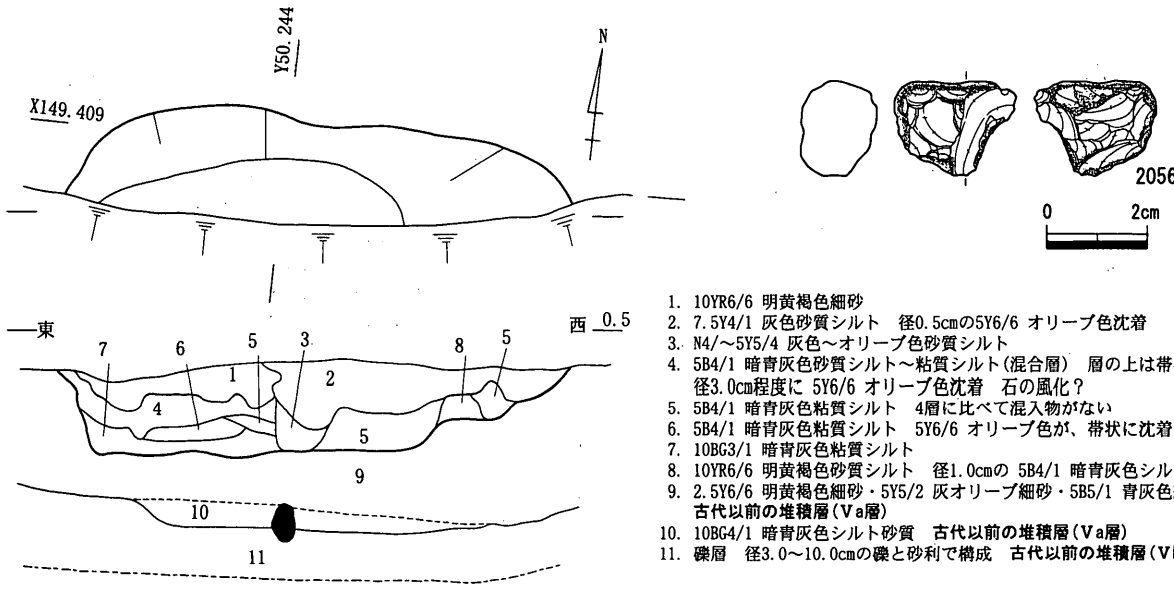
Ｉ区中央部で検出した土坑。土層断面からは、人為的な埋め戻しが行われたか否かは判断できない。

底面から軒丸瓦が 1 点出土している。

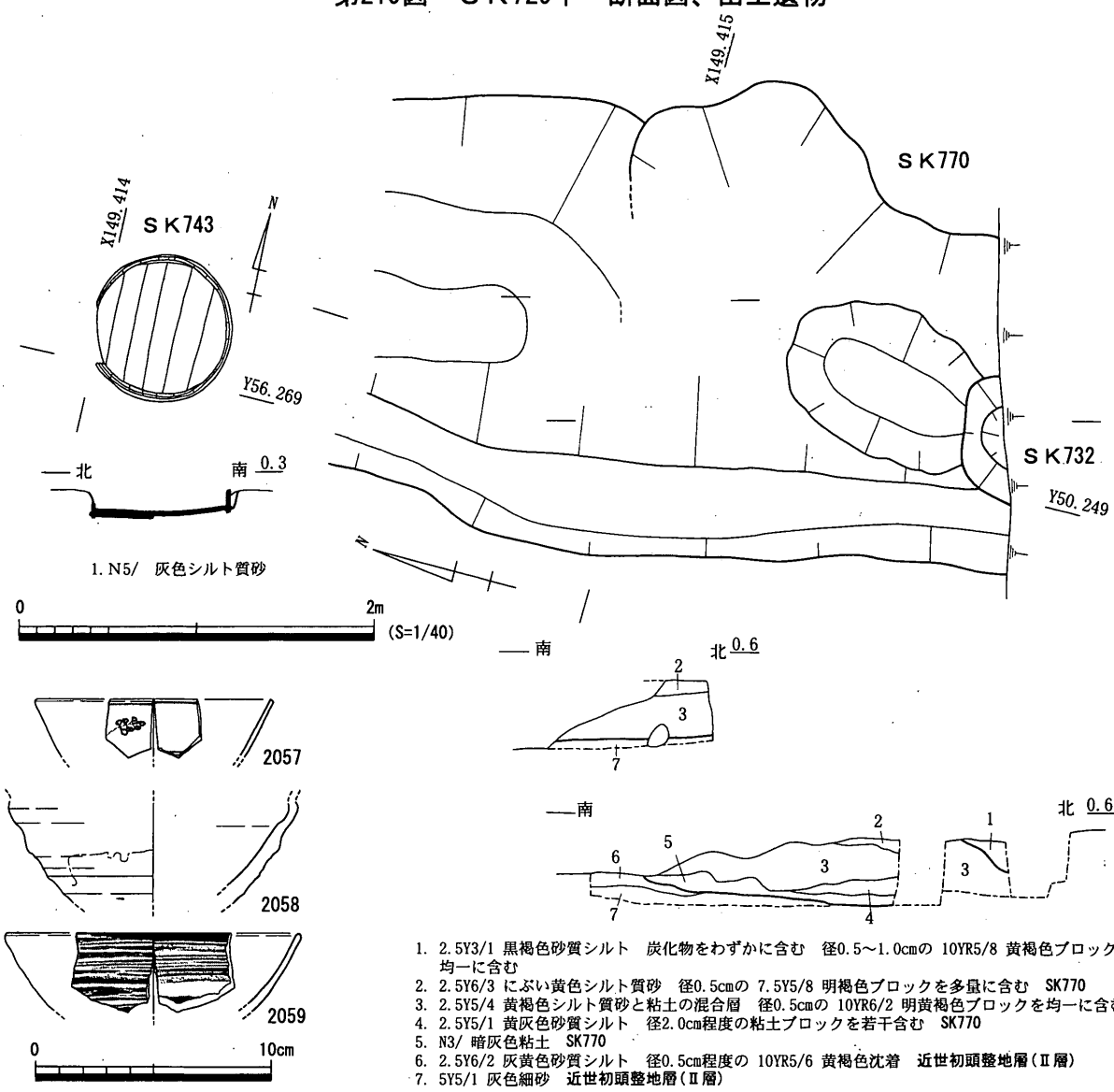
時期　出土した軒丸瓦が 17 世紀ものであることから、本土坑は 17 世紀以降の埋没と考えられる。

ＳＫ 764（第 216 図）

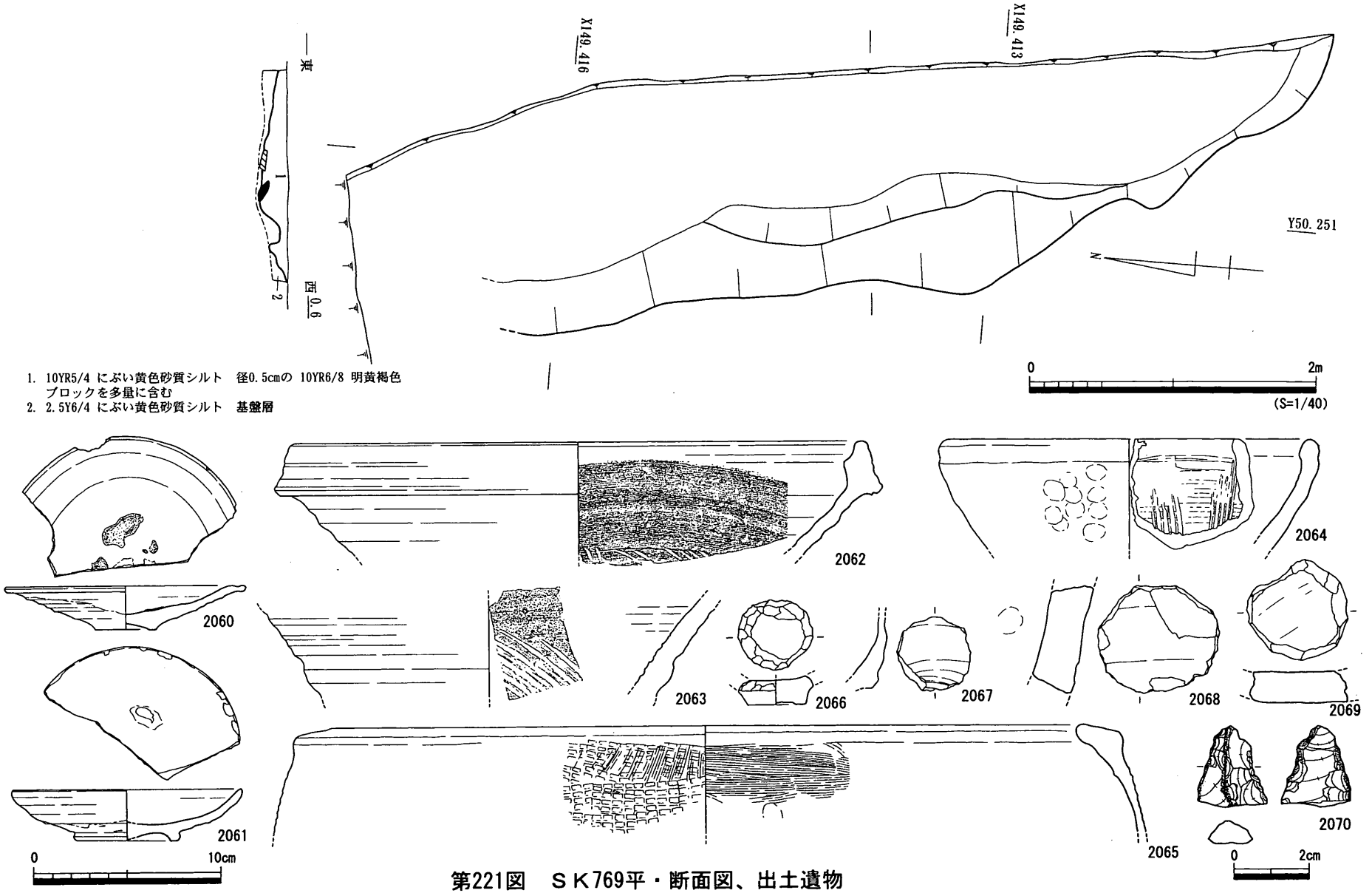
Ｉ区東部で検出した平面方形の土坑。土坑内は粗砂層を中心とする層が堆積していた。性格は



第219図 ＳＫ729平・断面図、出土遺物



第220図 ＳＫ732・743・770平・断面図、ＳＫ770出土遺物



第221図　ＳＫ769平・断面図、出土遺物

不明である。本土坑埋没後にＳＤ 703・704 が掘削されている。

時期　18 世紀前半（ＳＤ 703 埋没時期）以降であることは確実であるが、出土遺物が皆無のため詳細な時期は不明である。

ＳＫ 721（第 217・218 図）

Ｌ区中央北端部で検出した平面円形の土坑。土坑内は、炭化物・ブロックを含む土で埋め戻されている。

出土遺物（2044 ～ 2047）　2044 は肥前系磁器碗。2045 は肥前系陶器碗。2046 は器種不明の肥前系陶器。2047 は備前か。

時期　2044 から 17 世紀後半（松本・佐藤様相４）と考えられる。

ＳＫ 723（第 217 図）

Ｊ区西部で検出した平面楕円形の土坑。人為的な埋め戻しが確認できず、壁面の傾斜が緩やかで浅いことから、落ち込み状の遺構である可能性もある。

時期　遺物が出土していないため、時期は不明である。

ＳＫ 725（第 217・218 図）

Ｊ区西部、ＳＫ 723 の南東部で検出した土坑。平坦な底部には結桶の底板と考えられる木製品が残存していた。ＳＫ 732 と同様の結桶設置土坑と考えられる。

出土遺物（2048・2049）　2048 は肥前系陶器皿。2049 は土師質土器皿。

時期　2049 から 17 世紀後半（松本・佐藤様相４）と考えられる。

ＳＫ 726（第 217 図）

Ｊ区で検出した平面楕円形の土坑。ＳＫ 725 に先行する。底面には起伏が認められ、埋土中にブロックを含むことから、掘削された後、短期間で埋め戻されたものと思われる。

時期　出土遺物が皆無のため、時期は不明である。

ＳＫ 727（第 217・218 図）

Ｊ区中央北端部で検出した土坑。平面形は正方形に近い円形で、断面形は壁面が急角度で立ち上がる台形を呈している。底部中央には長方形の板材が残存し、断面壁際には垂直方向の土が認められることから、ＳＫ 732 と同様に結桶が設置されていた土坑であると考えられる。

出土遺物（2050 ～ 2052）　2050 は肥前系磁器皿。2051 は肥前系陶器皿。2052 は土師質土器皿。

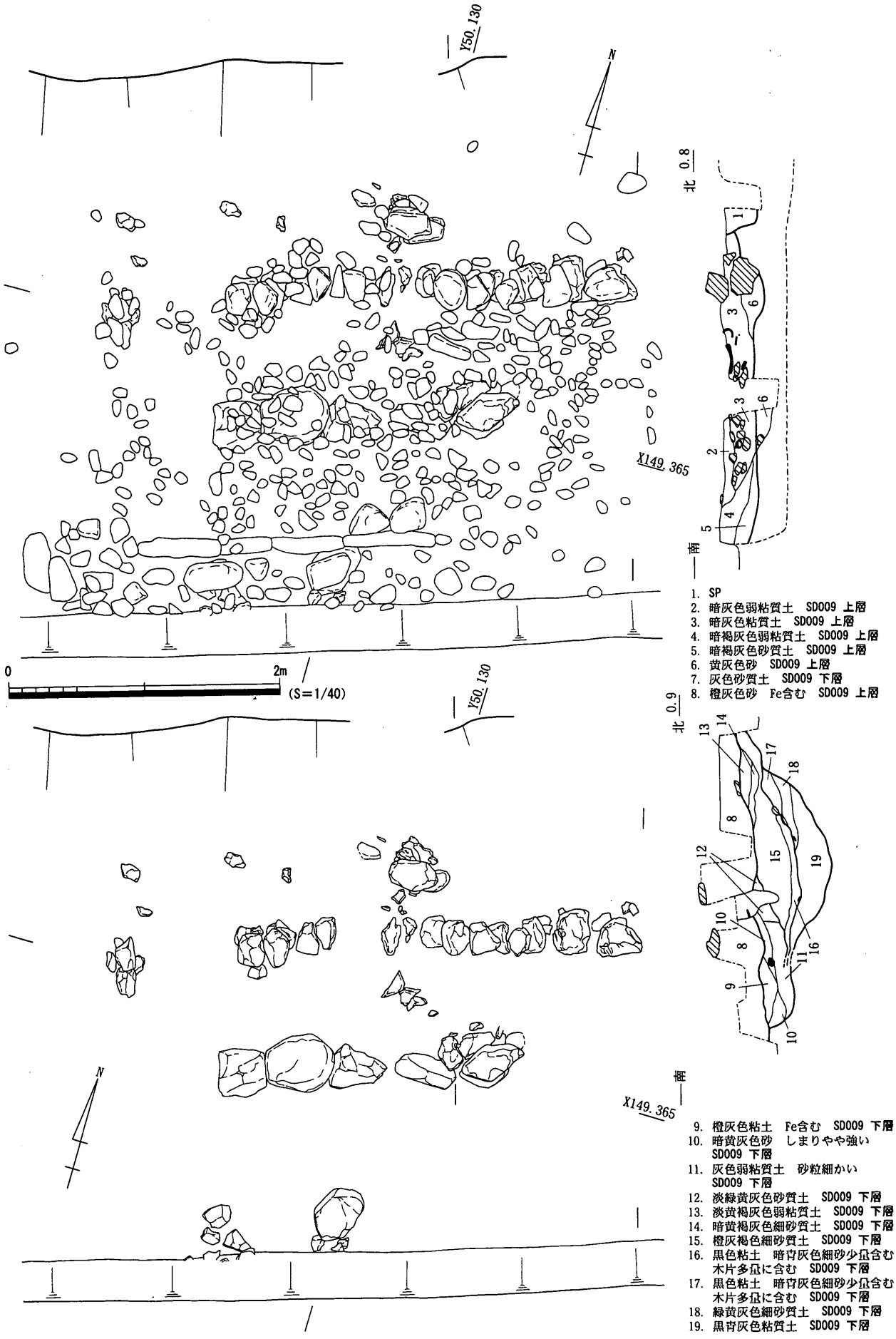
時期　2050 から 17 世紀後半頃と考えられる。

ＳＫ 728（第 217・218 図）

Ｊ区中央部北端で検出した土坑。

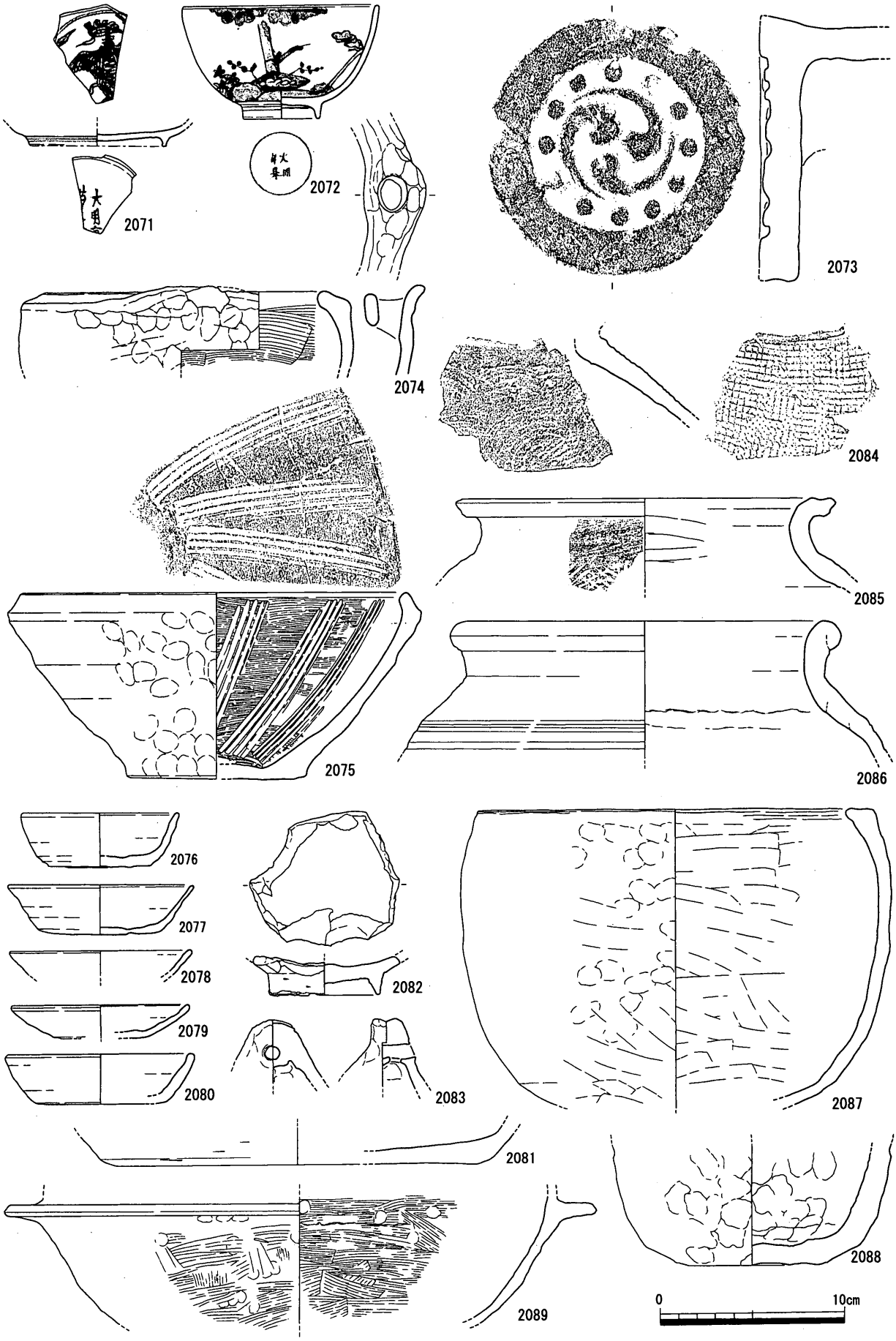
出土遺物（2053 ～ 2055）　2053 は肥前系陶器皿。2054 は土師質土器皿。2055 は瓦質土器焙烙。

時期　時期決定を行う確実な材料に乏しいが、2054・2055 から 17 世紀後半（松本・佐藤様相４）としておきたい。

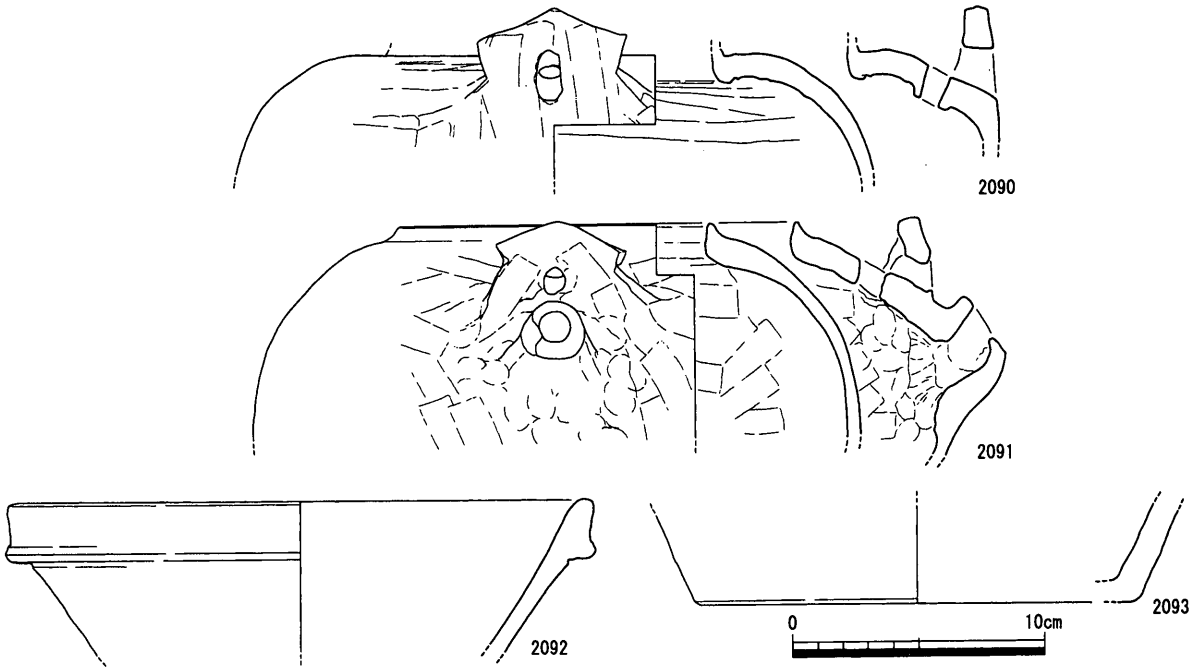


1. SP
2. 暗灰色弱粘質土　SD009 上層
3. 暗灰色粘質土　SD009 上層
4. 暗褐灰色弱粘質土　SD009 上層
5. 暗褐灰色砂質土　SD009 上層
6. 黄灰色砂　SD009 上層
7. 灰色砂質土　SD009 下層
8. 橙灰色砂　Fe含む　SD009 上層
9. 橙灰色粘土　Fe含む　SD009 下層
10. 暗黄灰色砂　しまりやや強い　SD009 下層
11. 灰色弱粘質土　砂粒細かい　SD009 下層
12. 淡緑黄灰色砂質土　SD009 下層
13. 淡黄褐灰色弱粘質土　SD009 下層
14. 暗黄褐灰色細砂質土　SD009 下層
15. 橙灰褐色細砂質土　SD009 下層
16. 黒色粘土　暗青灰色細砂少量含む　木片多量に含む　SD009 下層
17. 黒色粘土　暗青灰色細砂少量含む　木片多量に含む　SD009 下層
18. 緑黄灰色細砂質土　SD009 下層
19. 黒青灰色粘質土　SD009 下層

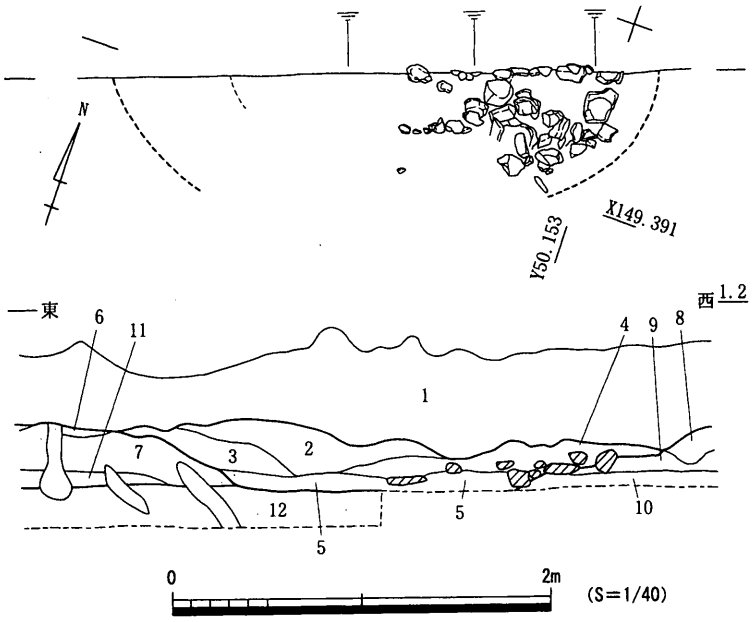
第222図　ＳＸ001平・断面図



第223図　ＳＸ001出土遺物（１）



第224図　ＳＸ001出土遺物（２）



1. 7.5YR3/2 黒褐色弱粘質土　炭化物・土器細片・0.5cm大の小礫をまばらに含む(均一)　近代整地層
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色弱粘質土　0.1cm～0.5cm大の小礫を多量に含む　SX003
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土　2層より砂質が強い　SX003
4. 7.5YR3/1 黒褐色弱粘質土　しまり弱い　SD009 上層
5. 10YR2/2 黒褐色弱粘質土　SX003
6. 10YR4/2+10YR6/8 灰黄褐色細砂質土＋にぶい黄橙色細砂質土 SD009
7. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土　しまり強い　Fe多く含む　SD009 上層
8. 10YR4/4 褐色弱粘質土　Fe・0.2cm大の砂粒・2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質土ブロックを多量に含む　SD009 上層
9. 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質土　SD009 上層
10. 5YR2/1 黒褐色細砂粘土　SD009 上層
11. 2.5Y4/1 黄灰色細砂質土　しまりは比較的強い　SD009 上層
12. 2.5Y5/4 黄褐色細砂弱粘質土　古代以前の堆積層（Ｖa層）

第225図　ＳＸ003平・断面図

ＳＫ 729（第 219 図）

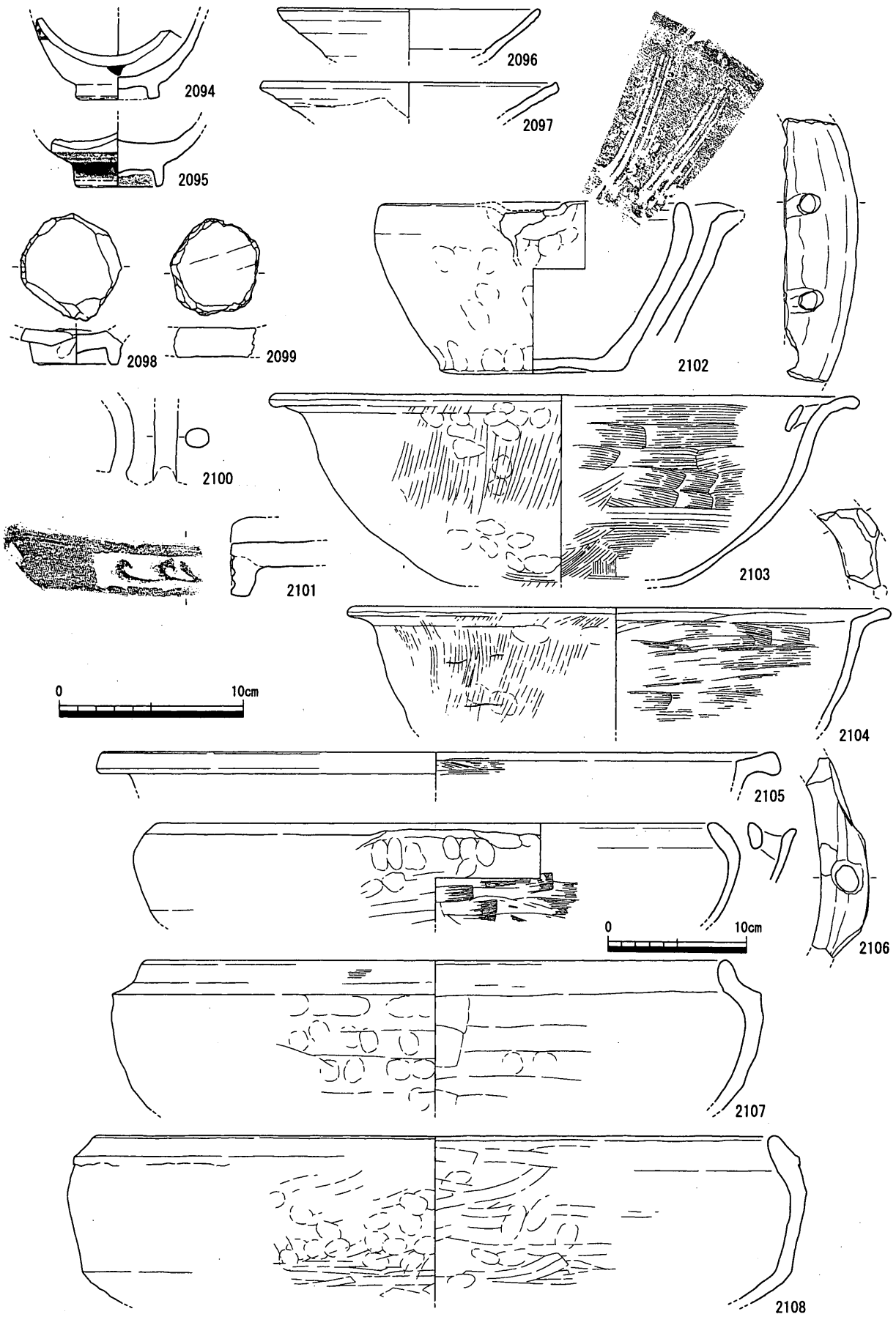
Ｊ区中央南部で検出した土坑。土坑の北部は撹乱により破壊されている。

出土遺物（2056）　2056 は青緑色系チャート製の火打石。

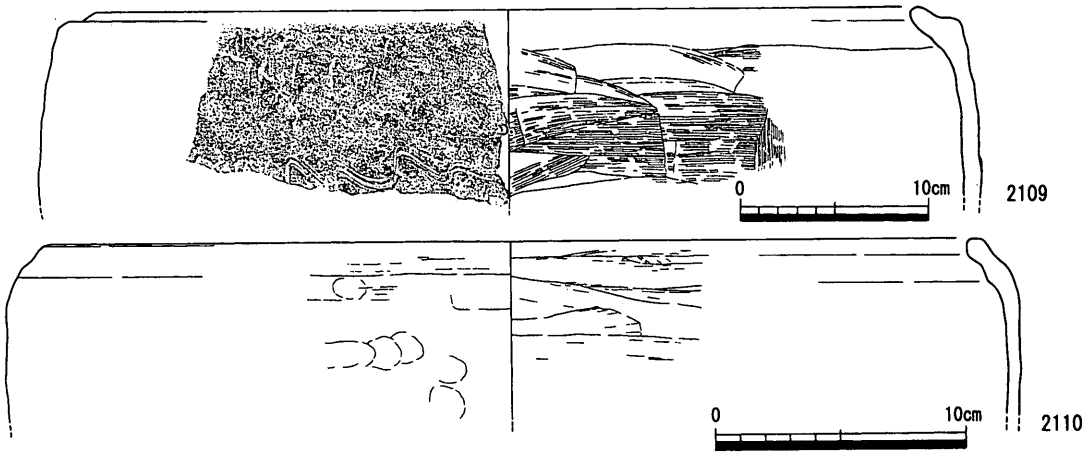
時期　周辺の遺構から見て近世段階の遺構であることは間違いないが、出土遺物が火打石のみであるため、詳細時期は不明である。

ＳＫ 732（第 220 図）

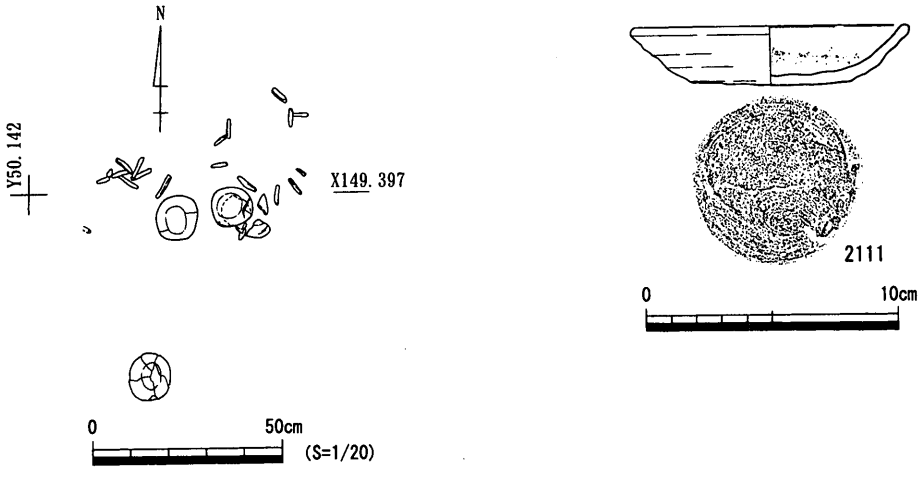
Ｌ区西部の、Ｇ区東部からＬ区東部にかけて大規模な撹乱の東に近接して検出した結桶設置土坑。



第226図　ＳＸ003出土遺物（１）



第227図　ＳＸ003出土遺物（２）



第228図　ＳＸ531遺物出土状況、出土遺物

時期　出土遺物が皆無のため、時期は不明である。

ＳＫ 743（第 220 図）

Ｊ区北東部で検出した土坑。

時期　遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、ＳＫ 770 より 18 世紀前半以前と考えられる。

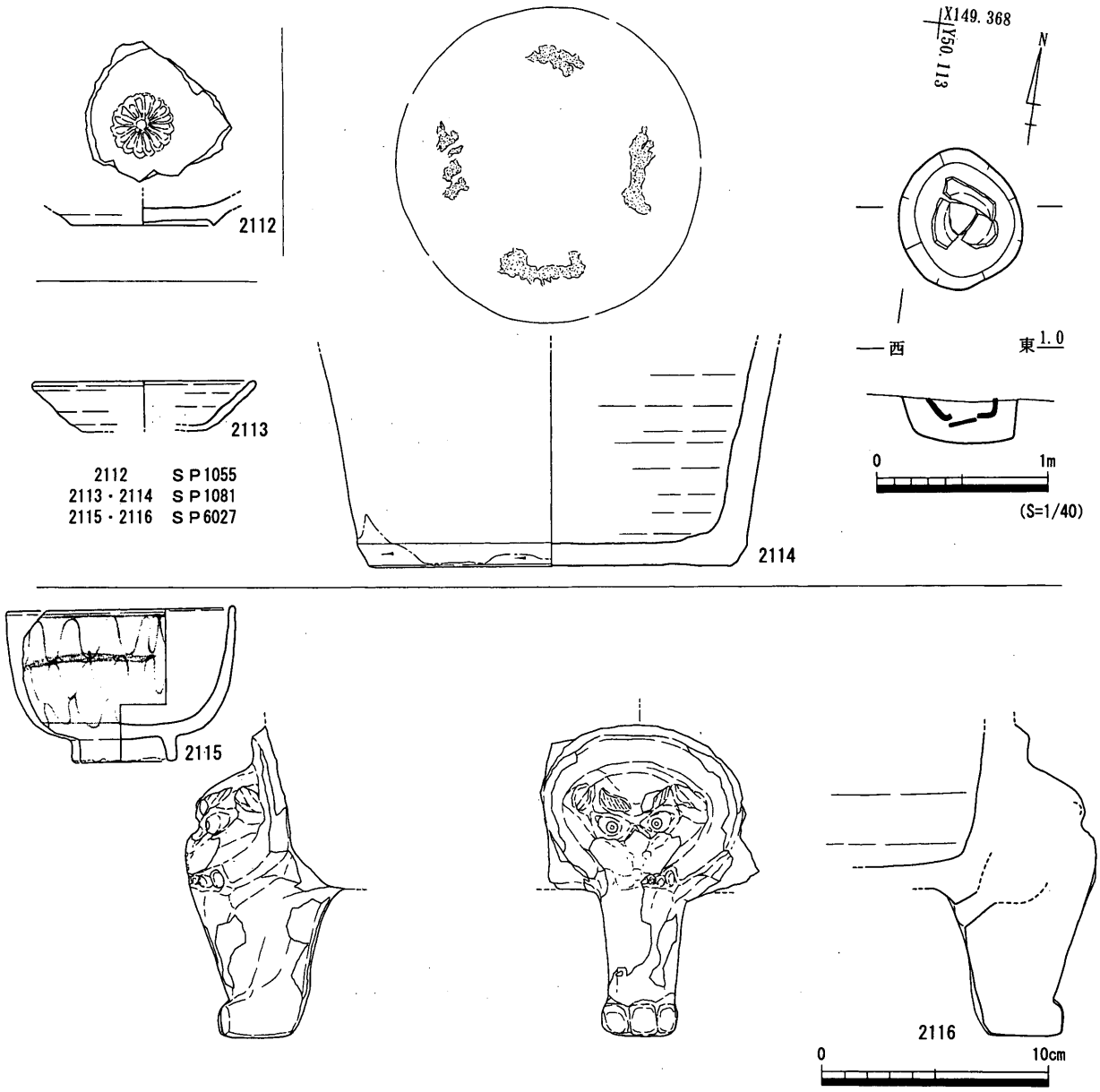
ＳＫ 770（220 図）

Ｊ区北東部で検出した平面不定形の土坑。ＳＤ 710 埋没後に掘削され、ＳＫ 732 に先行することが土層観察から判断できる。

出土遺物（2057 ～ 2059）　2057 は肥前系磁器碗。2058 は瀬戸・美濃系陶器天目茶碗。2059 は肥前系陶器碗。

時期　2059 から 18 世紀前半（松本・佐藤様相５）と考えられる。

ＳＫ 769（第 221 図）



第229図　ＳＰ1055・6027出土遺物、ＳＰ1081平・断面図、出土遺物

Ｊ区東端部、Ｉ区に隣接する部分で確認した落ち込み状の土坑。Ｉ区西端部では、遺構面の認識を誤り、本土坑の連続する部分を検出し得なかった。よって、全体形は不明である。

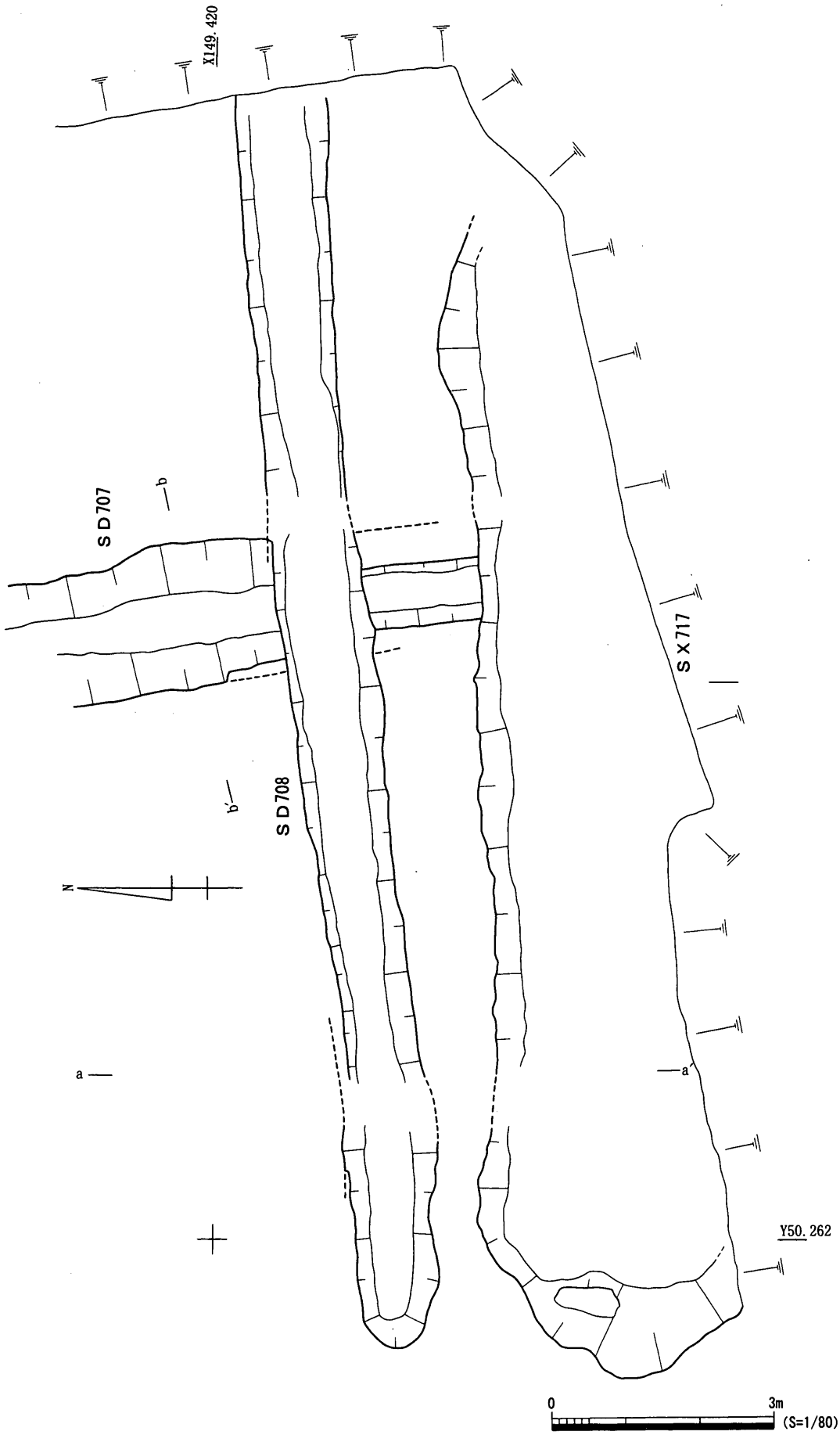
出土遺物（2060 ～ 2070）　2060・2061 は肥前系陶器皿。2062・2063 は備前擂鉢。2064 は土師質土器擂鉢。2065 は土師質土器鉢。2066 ～ 2069 は円盤状加工品。2066・2067 は肥前系陶器、2068 は備前鉢。2069 は平瓦の転用品。2070 は青緑系チャート製の火打石。

時期　2060 から 17 世紀中葉（松本・佐藤様相３）と考えられる。

その他の遺構（ＳＸ）

ＳＸ 001（第 222 ～ 224 図）

Ａ区南西部、ＳＤ 009 上層に伴って検出した石列状の遺構と、その上位で検出した、破壊された



第230図　ＳＤ707・708・ＳＸ717平面図

石積みの痕跡と考えられる集石遺構。本遺構は、本来は石積み状を呈し、ＳＤ 009 上層の北岸を固定する護岸として機能していたものであろう。多量の出土遺物は、その大多数は集石部分から出土していることから、本遺構廃絶時に廃棄されたものであろう。

出土遺物(2071 ～ 2093)　2071 は景徳鎮窯系青花皿。2072 は肥前系磁器碗。2073 は軒丸瓦。2074 は土師質土器鍋。2075 は土師質土器擂鉢。2076 ～ 2079 は土師質土器杯。2080 は須恵器杯。2081 は古瀬戸折縁深皿。藤澤中期１。2082 は白磁碗転用の円盤状加工品。2083 は飯蛸壺。2084 は亀山窯系須恵器甕。2085 は東播系須恵器甕。2086 は備前甕。2087 は土師質土器甕。2088 は土師器坩堝。2089 は瓦質土器羽釜。2090・2091 は瓦質土器茶釜。2092・2093 は滑石製石鍋。

時期　本遺構の廃絶時期は、ＳＤ 009 上層の埋め戻しに伴うとすれば、17 世紀中葉と考えられる。構築時期はＳＤ 009 上層が機能している期間（16 世紀末～ 17 世紀中葉）のうち、いずれかであろう。

ＳＸ 003（第 225 ～ 227 図）

Ａ区南東部で検出した集石遺構。人為的な掘り込み、もしくは窪地状の部分に礫が東側から投棄されたような状態で検出された。

出土遺物（2094 ～ 2110）　2094・2095 は肥前系磁器碗。2096・2097 は肥前系陶器皿。2098 は肥前系磁器碗転用の円盤状加工品。2099 は平瓦転用の円盤状加工品。2100 は施釉陶器の把手。瀬戸・美濃系陶器か。2101 は軒丸瓦。2102 は土師質土器擂鉢。2103・2104 は瓦質土器焙烙。2105 は瓦質土器鍋。2106 ～ 2108 は土師質土器鍋。2109・2110 は土師質土器鉢。

時期　やや降る時期のもの（2094・2095）も含むが、2096・2097、2102 ～ 2108 から 17 世紀中葉～後半主体と考えたい。

ＳＸ 531（第 228 図）

Ｇ区で検出した土師質土器杯集中部。周辺からは細管状土錘が多量に出土した。

出土遺物　2111 は土師質土器杯。

時期　回転糸切りで底部を切り離している杯から、近世と考えられる。

ピット（ＳＰ）

ＳＰ 1055（第 229 図）

出土遺物　2112 は瀬戸・美濃系皿。

時期　17 世紀前半と考えられる。

ＳＰ 1081（第 229 図）

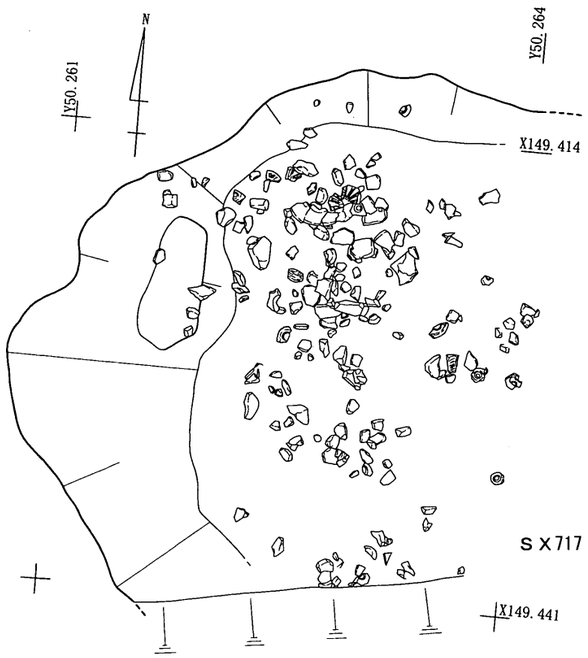
Ｂ区で検出したピット。大谷焼甕（2114）底部が、正位で設置されていた。

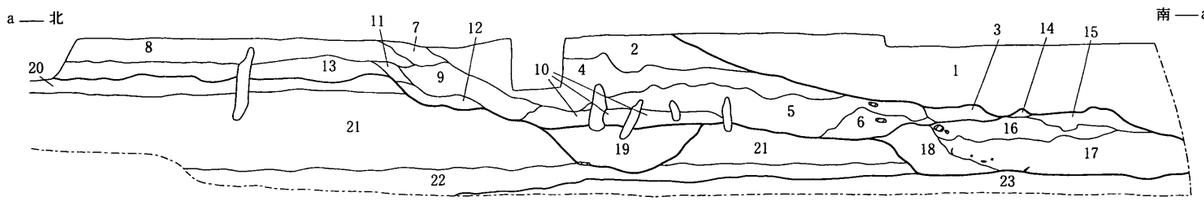
出土遺物（2113・2114）　2113 は 14 世紀中葉の土師質土器杯。2114 は大谷焼甕。

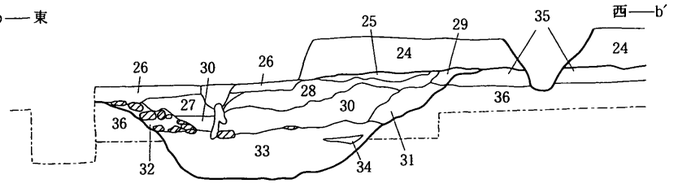
時期　2114 から 19 世紀中葉以降と判断できる。2113 は混入であろう。

ＳＰ 6027（第 229 図）

出土遺物（2115・2116）　2115 は肥前系磁器碗。一重網目文内に、魚の表現の痕跡と思われる横

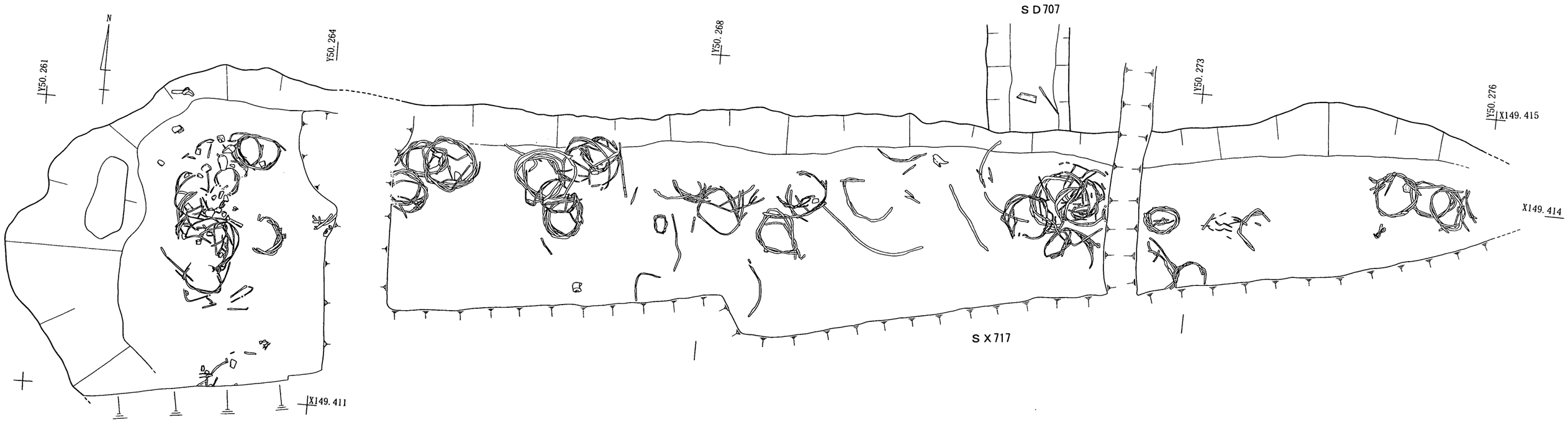




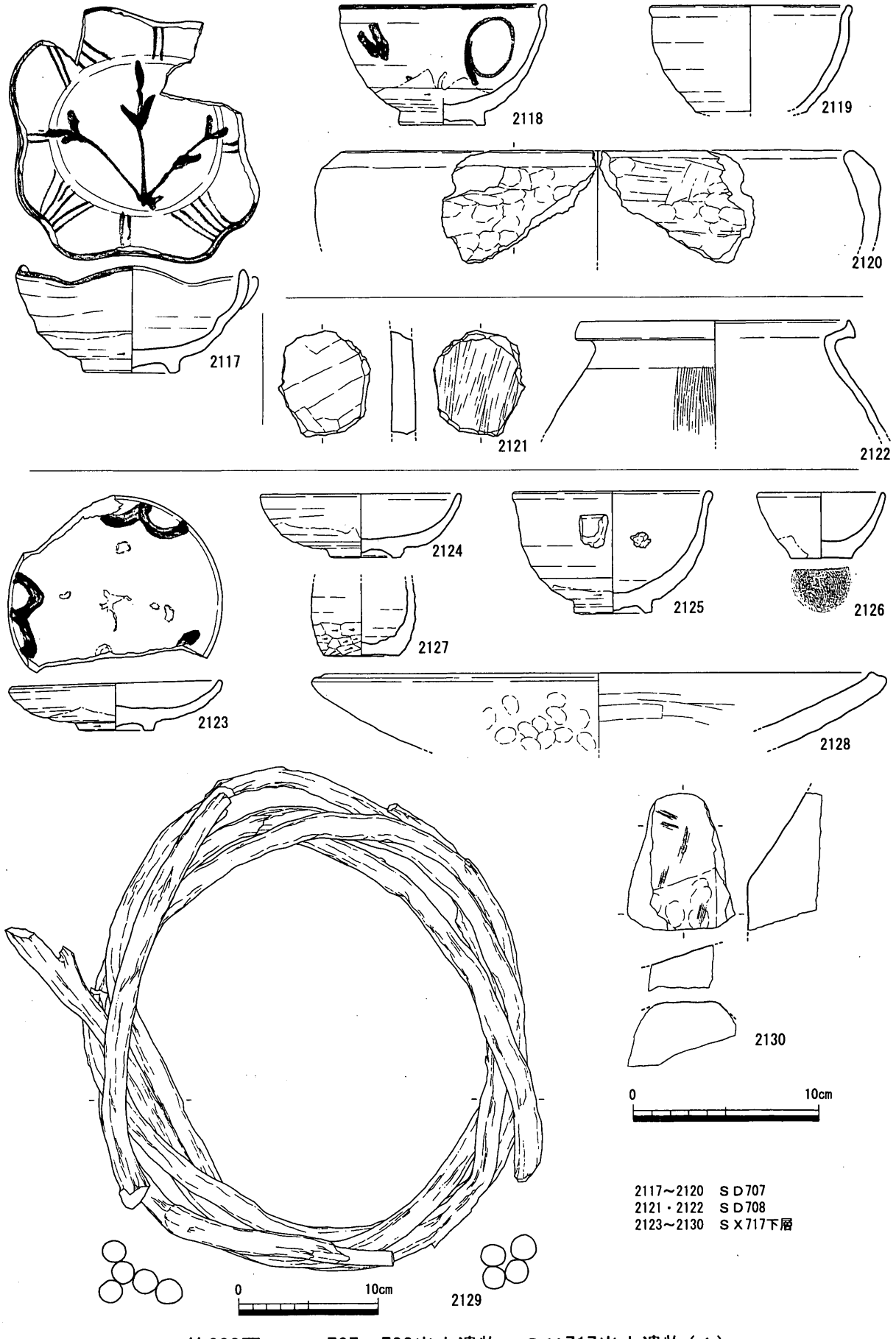


1. 2.5Y5/1～10YR5/2 黄灰色～灰黄褐色シルト質砂　径1.0～5.0cmのN4(YR) 灰色粘土質シルトブロック多量・径0.5～2.0cmの 5Y6/4～2.5Y6/6 にぶい黄色～明黄褐色砂質シルト～シルトブロック多量・径0.2～1.0cmの砂粒多量に含む　まだらに 7.5YR5/6 明褐色化(酸化)顕著　SX717 上層
2. 2.5Y5/1～5Y5/1 黄灰色～灰色シルト質砂～砂質シルト　径0.2～1.0cmの 7.5Y6/2～7.5Y6/6 灰黄色～明黄褐色砂質シルト～シルトブロック多量に含む　近世初頭整地層(Ⅱ層)
3. N4/ 灰色粘土層シルト　炭化物少量含む　近世初頭整地層(Ⅱ層)
4. 2.5Y6/4～2.5Y6/6 にぶい黄色～明黄褐色シルト質砂～砂質シルト　径0.2～1.0cmの 7.5Y6/2～7.5Y6/6 灰黄色～明黄褐色砂質シルト～シルトブロック多量に含む　まだらに 7.5YR5/6 明褐色化(酸化)顕著　近世初頭整地層(Ⅱ層)
5. N5/2.5Y5/1 灰色～黄灰色砂質シルト～シルト質砂　径0.5～1.0cmの 7.5Y6/2～7.5Y6/6 灰黄色～明黄褐色砂質シルト～シルトブロック含む　まだらに 7.5YR5/6 明褐色化(酸化)顕著　近世初頭整地層(Ⅱ層)
6. N5/ 灰色砂質シルト　5層とよく似る　近世初頭整地層(Ⅱ層)
7. 10YR5/1 褐灰色シルト質砂　径0.5～3.0cmの N5/ 灰色シルトブロック含む
8. 5Y5/2～5Y6/1 灰オリーブ色～灰色シルト質砂　径0.5～3.0cmの N5/ 灰色シルトブロック・径0.5～2.0cmの 7.5Y7/3 浅黄色砂質シルトブロック多量に含む、径0.2～0.5cmの砂粒含む　まだらに 7.5YR5/6 明褐色化(酸化)顕著　近世初頭整地層(Ⅱ層)
9. 5Y6/1 灰色シルト質砂　8層に似る　近世初頭整地層(Ⅱ層)
10. N5(YR) 灰色シルト～砂質シルト　径0.5～1.0cmの 2.5Y6/2～2.5Y6/6 灰黄色～明黄褐色砂質シルト～シルトブロック含む　まだらに 7.5YR5/6 明褐色化(酸化)顕著　近世初頭整地層(Ⅱ層)
11. 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト　まだらに 7.5YR5/6 明褐色化(酸化)顕著　近世初頭整地層(Ⅱ層)
12. N6(YR) 灰色シルト質砂　まだらに 7.5YR5/6 明褐色化(酸化)顕著　近世初頭整地層(Ⅱ層)
13. 2.5Y6/1～2.5Y6/2 黄灰色～灰黄色砂質シルト～シルト質砂　径0.5～1.0cmの 7.5Y7/3 浅黄色砂質シルトブロック含む　まだらに 7.5YR5/6 明褐色化(酸化)顕著　近世初頭整地層(Ⅱ層)
14. N4/ 灰色粘土　ブロック　SX717 下層
15. 2.5Y8/2～2.5Y7/4 灰白色～浅黄色細砂　部分的に16・17層ブロック含む　SX717 下層
16. N4/ 灰色粘質シルト　帯状に細かい砂粒含む　SX717 下層
17. N4/～N3/ 灰色～暗灰色粘土層　砂粒を若干含む　SX717 下層
18. N4/ 灰色シルト～粘土質シルト　径0.2～0.5cmの21層ブロック若干含む　砂粒をブロック状に若干含む　SX717 下層
19. N4/ 灰色粘土　SD707
20. N5(YR) 灰色シルト質砂　13層より灰色強い　古代以前の堆積層(Va層)
21. 2.5Y6/2～2.5Y5/1 灰黄色～灰色砂質シルト　径0.5～1.0cmの砂粒若干含む　径0.2～0.5cmの砂粒含む　古代以前の堆積層(Va層)
22. N5/ 灰色砂質シルト～粘土質シルト　径0.5～1.0cmの砂粒若干含む　径0.2～0.5cmの砂粒含む　21層に比べ色調と土質が多少異なる　古代以前の堆積層(Va層)
23. 10BG6/1～10BG5/1 青灰色粗砂　径1.0～10.0cmの礫多量に含む　古代以前の堆積層(Vb層)
24. 5Y5/2～5Y6/1 灰オリーブ色～灰色シルト質砂　径0.5～3.0cmの N5/ 灰色シルトブロック・径0.5～2.0cmの 7.5Y7/3 浅黄色砂質シルトブロック多量に含む(両ブロックが混じった層)・径0.2～0.5cmの砂粒含む　近代初頭整地層(Ⅱ層)
25. N5(YR) 灰色細砂　径0.5～2.0cmの N5/ 灰色シルトブロック含む　SD708
26. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質砂　径0.5～2.0cmの N5/ 灰色シルト・5Y6/3 オリーブ黄色シルトブロック含む　SD708
27. 5Y5/1～5Y5/2 灰～灰オリーブ色砂質シルト　径0.5～2.0cmの N5/ 灰色シルトブロック多量に含む　(5Y6/3 オリーブ黄色シルトブロック含む(前者ブロックの量を除き、基本的には26層と同じ含有物) SD708
28. N5(YR) 灰色砂質シルト～シルト質砂　径0.5～5.0cmの 5Y6/1～5Y6/3 灰色～オリーブ黄色シルトブロック　多量に含む、径0.5～2.0cmの N5/ 灰色シルトブロック多量に含む　SD508
29. N5(YR) 灰色砂質シルト～シルト質砂　径0.5～2.0cmの N5/ 灰色シルトブロック多量に含む　SD708
30. N5/ 灰色砂質シルト　径0.5～8.0cmの 5Y6/1～5Y6/3 灰色～オリーブ黄色ブロック含む、一部径10.0cmの N5/ 灰色シルト質粘土ブロック含む　SD708
31. N5/ 灰色シルト質砂　径0.5～2.0cmの 5Y6/1～5Y6/3 灰色～オリーブ黄色ブロック少量含む　SD708
32. N4/ 灰色粘土～粘土質シルト　礫多量含む(東側から投棄)　SD708
33. N4/ 灰色粘土　SD708
34. N4/ 灰色砂　33層をブロック状に若干含む　SD708
35. N4/～N5/ 灰色シルト質砂　部分的に酸化。若干土器片？(粗い胎土で素焼き)含む　古代以前の堆積層(Va層)
36. 2.5Y6/2～2.5Y5/1 灰黄色～灰色砂質シルト　径0.5～1.0cmの砂粒若干含む、径0.2～0.5cmの砂粒含む　古代以前の堆積層(Va層)

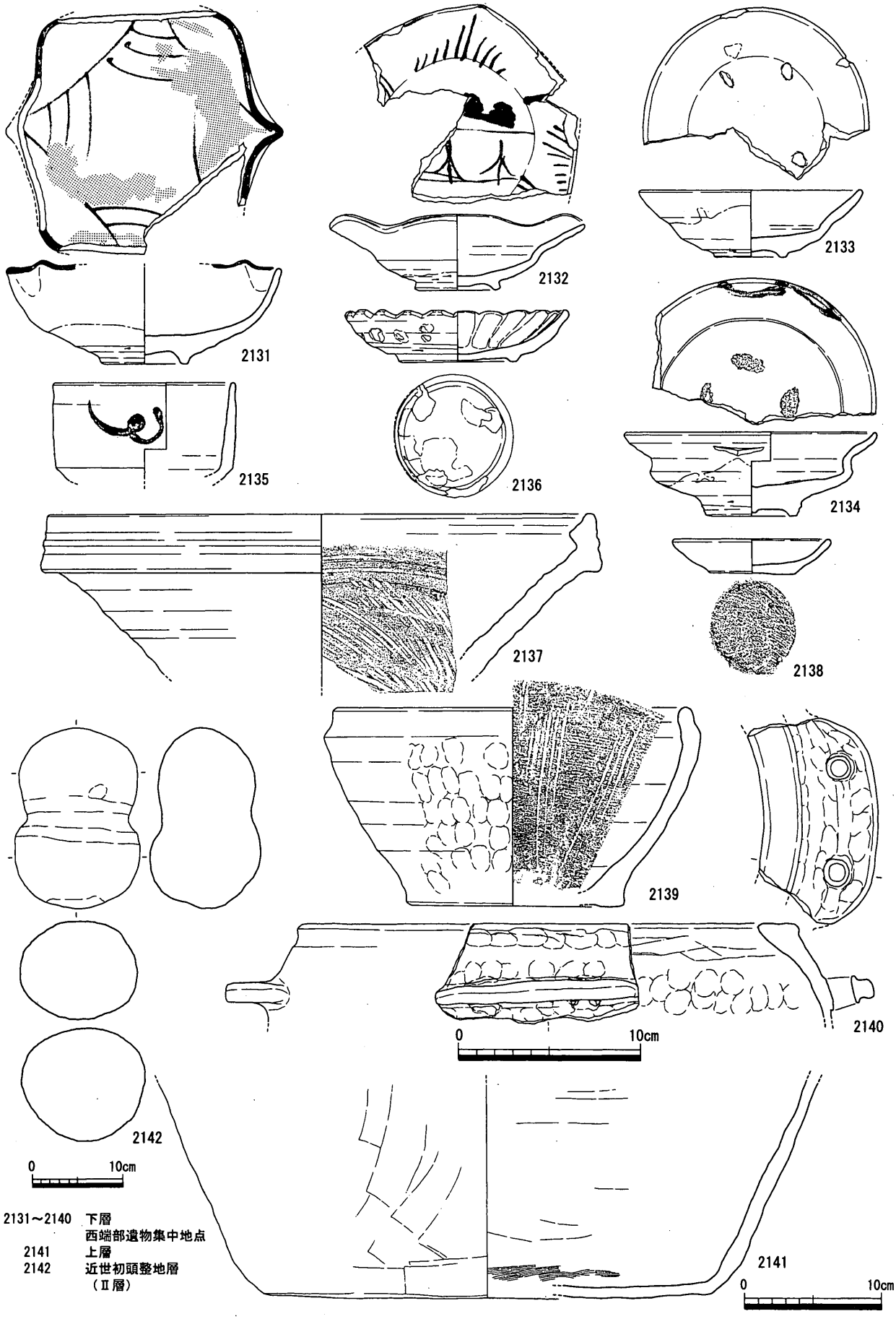
0　2m　(S=1/40)



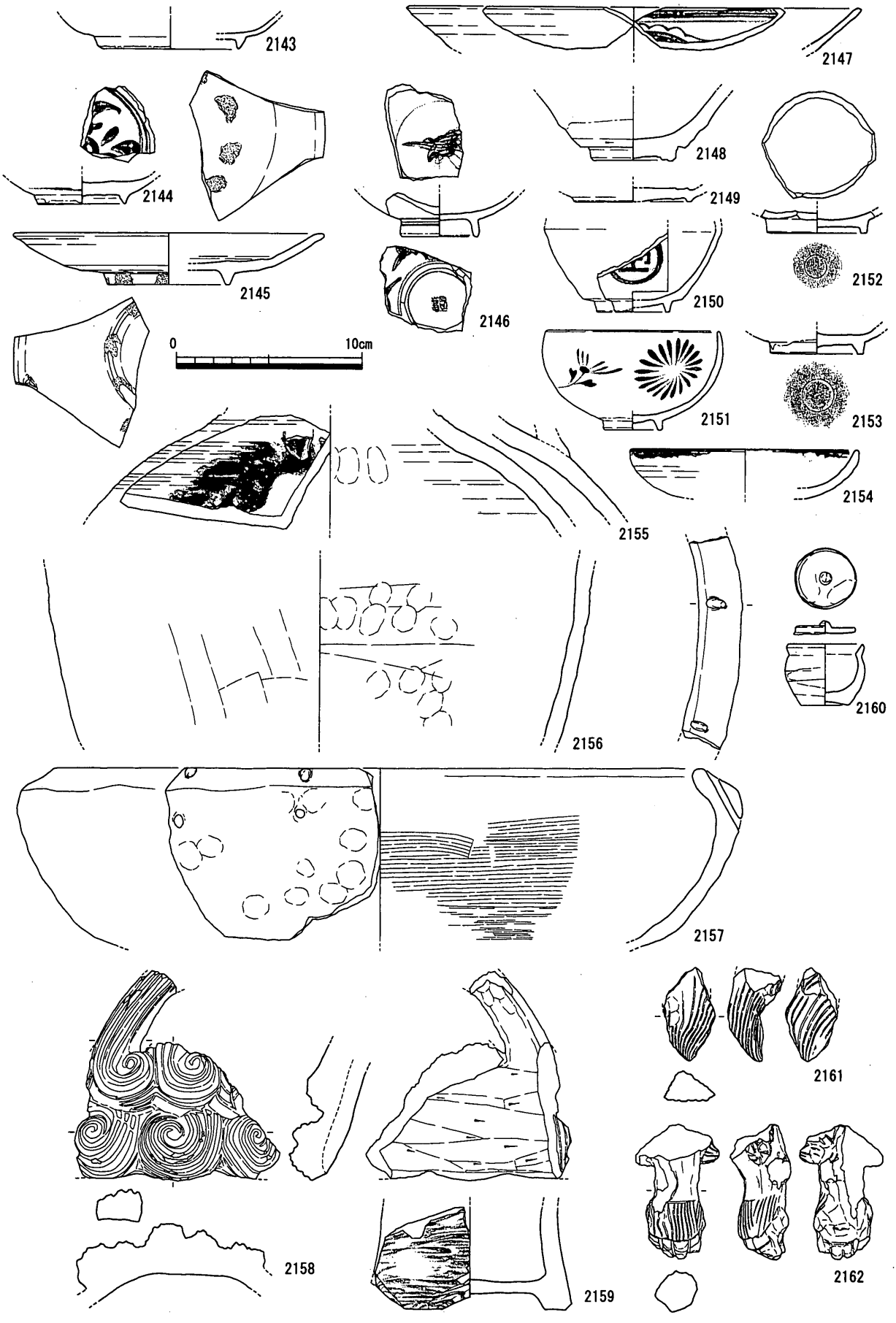
第231図　ＳＸ717平・断面図、ＳＤ707・708断面図



第232図　ＳＤ707・708出土遺物、ＳＸ717出土遺物（１）



第233図　ＳＸ717出土遺物（２）



第234図　近世遺構外出土遺物（1）

棒が描かれている。2116は瓦質土器火鉢の脚部か。

時期　2115から17世紀中葉（松本・佐藤様相３）と考えられる。

2. 16世紀末～17世紀初頭（Ⅱ層下面）の遺構と遺物

第２節で述べたように、中世以来Ｉ・Ｊ・Ｌ区は地形的に降っており、17世紀初頭に整地される（近世初頭整地層Ⅱ層）ことで、Ａ～Ｈ区とほぼ同レベルの遺構面となっている。Ｉ区では整地以前の遺構を検出したため、本項で報告することとする。

近世初頭整地層下面では南北・東西方向の溝状遺構ＳＤ707・708と東西方向の落ち込み状遺構ＳＸ717を検出した。それぞれの遺構には明確な先後関係が認められ、ＳＤ707→ＳＤ708→ＳＸ717の順で遺構が形成されている。埋土の観察から、いずれも流水状態にあったとは考えられず、導水・排水を目的とした遺構とは言えない。さらにＳＤ708とＳＸ717の東端収束位置はほぼ揃っていることから、これらの遺構は、地割などを表示する性格を有する遺構である可能性が高い。

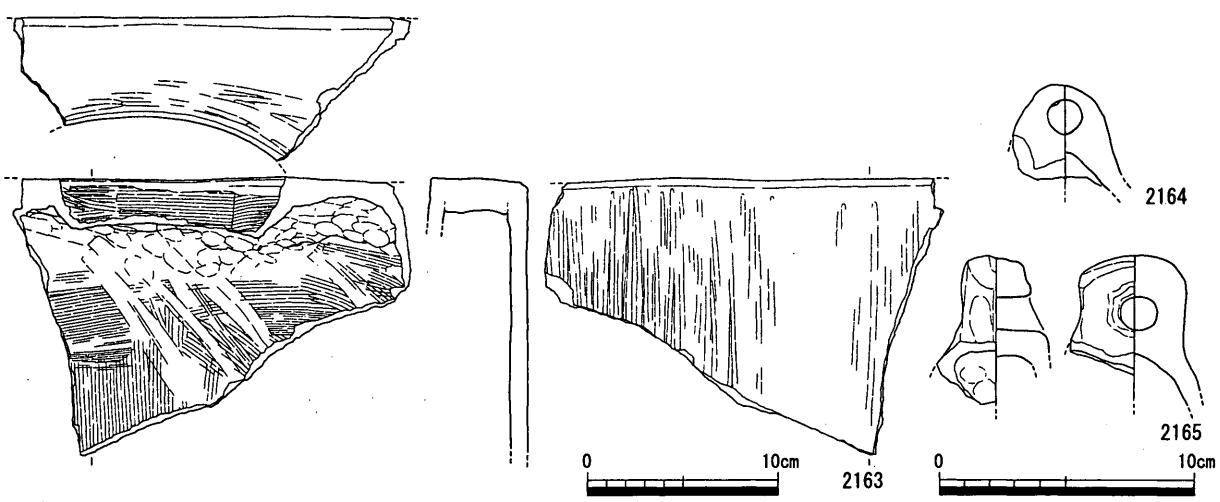
また、遺構の主軸方向が17世紀中葉に描かれた『高松城下図屏風』の地割方向と合致することは、『高松城下図屏風』に表現されている地割の形成が17世紀初頭以前の高松城築城期にまで遡ることを示している。

溝状遺構（ＳＤ）

ＳＤ707・708（第230～232図）

ＳＤ707はⅡ層（近世初頭整地層）下面で検出した南北方向の溝。ＳＤ708は東西方向の溝。いずれも粘土質シルト～粘土層の堆積が認められ、滞水状態であったことが推測され、導水目的の遺構ではないことが分かる。ＳＤ708については、西端部が収束していることからも同様の判断が可能である。

ＳＤ707出土遺物（2117～2120）　2117・2118は肥前系陶器碗。2119は肥前系陶器天目茶碗。2120は土師質土器鉢。



第235図　近世遺構外出土遺物（２）

ＳＤ 708 出土遺物（2121・2122） 2121 は備前陶器甕転用の円盤状加工品。2122 は後期の弥生土器。色調は褐色で、胎土中には角閃石を多量に含む。

時期 2117・2118 から 16 世紀末～ 17 世紀初頭と考えられる。

その他の遺構（ＳＸ）

ＳＸ 717（第 230 ～ 233 図）

Ⅰ区南部のⅡ層下面で検出した、検出長が東西 16 m、南北５m、深さ 0.9 mの大規模な落ち込み状遺構。本遺構の東端と南端は調査地外にあたり遺構の全体形は不明であるものの、西端部が弧を描くことから、南辺は北辺に並行するものと考えられる。本遺構はＳＤ 707 埋没後に掘り込まれて一定期間機能した後（ＳＸ 717 下層）、17 世紀初頭に整地に伴い埋め戻され（近世初頭整地層）、再度ほぼ同じ位置に落ち込み状遺構が形成されている（ＳＸ 717 上層）。さらに、ＳＸ 717 上層埋没後にＳＫ 704 が掘り込まれている。

本遺構の斜面際の底部には、遺構の形状に合わせて輪状を呈する植物製品が並べられている。輪状植物製品は、直径３～５ cm 程度の植物２～３本を撚ったものを直径 20 ～ 30cm 程度の輪状にしたものである。３～５個体の輪状植物製品が交互に重ねられた状態のものを１つの単位とし、複数の単位を検出した。個体同士は重ねられているのみで、撚り合わせられたり、結び付けられたりしたような痕跡は認められない。この植物製品の性格について、荷揚げ場や船の着岸施設などの可能性を考慮したものの、いずれにしても推測の域を出ないという結論となった。

西端部からは、北西方向から投棄されたと思われる多量の遺物が出土した。出土遺物中に、瀬戸・美濃系陶器（2136）、在地産の土師質土器（2139）がごく少量見られるほかは、大多数が胎土目積み痕の残る肥前系陶器で、消費地の一般的な組成とは大きく異なる。また、これらの肥前系陶器は、高台畳付部分などに使用痕が確認できず、二次的な被熱によると思われる媒の付着したものが認められる。このため、近隣に一時的に集積された肥前系陶器がなんらかの原因で火を受けて商品価値を失ったため、この場所に廃棄されたとみることも可能で、廃棄の一括性が高い資料と考えられる。

下層出土遺物（2123 ～ 2140） 2123・2124 は肥前系陶器碗。2125 は肥前系陶器天目茶碗。内外面にはそれぞれ、他の個体の口縁部片・体部片が付着しており、窯詰め時に同器種を積み重ねていたことが分かる。2126 は肥前系陶器杯。2128 は土師質土器皿か。2129 は輪状植物製品。2130 は砂岩製砥石。大部分は欠損している。2131 ～ 2134 は肥前系陶器皿。2131・2132 は口縁部をつまんで向付状に成形している。2131 には媒が付着している（第 233 図のトーン部分）。2136 は瀬戸・美濃系皿。2137 は備前擂鉢。2138 は土師質土器皿。2139 は土師質土器鉢。2140 は瓦質土器鍋か。

上層出土遺物（2141） 2141 は土師質土器鉢。

近世初頭整地層（Ⅱ層）出土遺物（2142） 2142 は空風輪。

時期 2131 ～ 2139 から 16 世紀末～ 17 世紀初頭と判断できる。

遺構外出土遺物（第 234・235 図）

出土遺物（2143 ～ 2165） 2143 は白磁皿。2144 は漳州窯系青花皿。2145 は朝鮮半島産白磁器皿。

2146は肥前系磁器碗。高台内には、染付で描かれた銘の上から、朱で「福」と描かれている。2147は肥前系磁器皿。2148は瀬戸・美濃系天目茶碗。2149は陶器皿。2150は理兵焼と思われる京・信楽系陶器碗。2151は京・信楽系陶器碗。2152は京・信楽系陶器転用の円盤状加工品。高台内に禽の銘が見られる。2153は施釉陶器碗。高台内には銘が認められる。2154は不明陶器灯明皿。2155は信楽壺。2156は土師質土器鉢。外面に押印が認められる。2157は土師質土器鍋。2158は施釉陶器。2159は器種不明の土師質土器。灰白色の胎土に橙色の胎土がマーブル状に練り込まれている。2160は備前？小壺。2161・2162は施釉陶器人形。2163は竈。2164・2165は飯蛸壺。2165は吊手部上端面が平坦に仕上げられている。

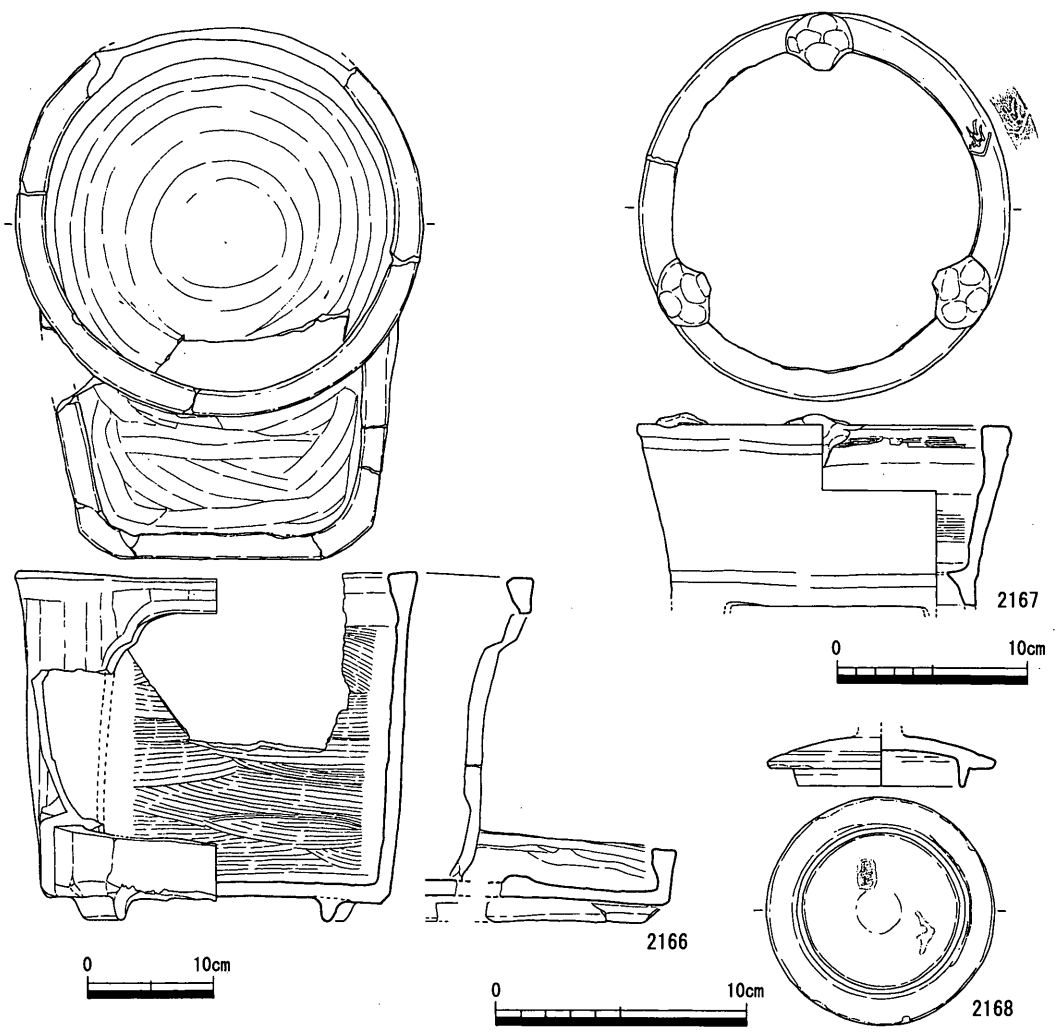
3. 近代の遺構と遺物

ＳＫ106（第236図）

Ｂ区北東部で検出した土坑。詳細は不明である。

出土遺物　2166は土師質土器焜炉。2167は土師質土器さや鉢。2160は施釉陶器蓋。内面には「屋島」の刻印が認められる。

時期　19世紀後半と考えられる。



第236図　ＳＫ106出土遺物

第５節　土錘

1. はじめに

浜ノ町遺跡からは土錘が1000点近く出土しているが、半数以上は遺構外出土である。ただし、その多くは中世のものであるという見通しがあったため、まず、確実に中世遺構から出土した土錘をもとに特徴を抽出した。その後、遺構外もしくは近世遺構から出土した土錘のうち中世土錘の特徴を有するものを含めて、分類を行った。ちなみに、出土した土錘の大半は中世段階の所産であるという結論を得ている。

2. 分類の方法

まず、土錘の機能差を示すと想定されるレベルでの分類を行い（有溝、管状、細形管状、有溝穿孔、分銅形）、下位レベルとして生産地・製作集団の相違を念頭においた形状・胎土を基準として分類を行った。

有溝土錘

全体形はラグビーボール状を呈し、両側縁に溝が施されるもの。断面形から工字状土錘とも呼ばれる。本遺跡では主流をなすタイプ。

有溝１ａ類（2169～2170）　平面形楕円形。溝の窪みは明瞭。色調は褐色～にぶい黄橙色を示し、胎土には径1.0～5.0mmの石英を多量に含む。2170は胴部中央の片面に刺突が認められる。大形（2169・2170）・小型（2171）あり。

有溝１ｂ類（2172）　形状は１ａ類とほぼ同じ。ただし胎土中にかなり多量の石英を含む。

有溝２類（2173～2175）　平面形はやや先端が尖り気味の長楕円形。溝の窪みは他のタイプに比べてやや浅い。色調は灰黄褐色～浅黄橙色。胎土は径0.5mm～3.0mmの石英・長石を少量含む。１類に比べるとかなり少量に映る。大型（2174～2175）・中型（2173）あり。

有溝３類（2176・2177）　平面形はやや長めの楕円形。色調は浅黄橙色～灰白色。胎土に径0.5mm～2.0mmの石英を少量含む。赤色粒は少量確認できる。溝の窪みはやや丸みを帯びて窪む。形状・胎土共に２類に近いが、先端部の曖昧さと胎土の緻密さを考慮して別タイプとした。大型（2177）・小型（2176）あり。

有溝４類（2178～2181）　平面形は先端が尖り気味の長楕円形。中央部分に平坦面を持つ。溝の窪みは明瞭で、端部はやや薄い。色調は浅黄橙色～淡橙色を示し、希に橙色のものもある。胎土には径0.5mm～3.0mmの石英を多量に含み、赤色粒が目立つ。また、胎土や焼成状況が要因のためか、器面の剥落が多く認められ、特に側縁端部の欠損頻度は高い。大型（2179～2181）・小型（2178）あり。

有溝５類（2182～2184）　平面形はやや長めの杏仁形で、中央部が平坦もしくは若干窪む。溝の窪みは明瞭で、他のタイプに比べてさほど丸みを持たない。色調は暗褐色～にぶい褐色を呈し、胎土中には径0.5mm～2.0mmの石英を少量含み、黒雲母が認められる。最も緻密な胎土を持つ。中

型（2182・2183）・小型（2184）あり。

有溝６類（2185 ～ 2187） 平面形は杏仁形。胴部中央部分が窪むため、断面形は「X」字状を呈する。色調は浅黄橙色～淡橙色・橙色、胎土は径 0.5mm ～ 3.0mm の石英・長石・赤色粒を多量に含む。有溝４類とほぼ同様の胎土。側縁端部に欠損が多く認められることも４類と類似する。大型のみ。

管状土錘

管状１類（2188･2189） 平面形は球形に近い楕円形。色調は浅黄橙色～灰白色。胎土には径 0.5mm ～ 3.0mm の石英を多く含み、赤色粒も認められる。胎土・色調の特徴は有溝４類・有溝６類と類似する。大型（2189）・小型（2188）あり。

管状２類（2190・2191） 平面形は１類よりやや長い楕円形。色調は浅黄橙色～灰白色。胎土には径 0.5mm ～ 3.0mm の石英を多量に含む。管状１類に比べて胎土は多少粗い。小型のみ。

管状３ａ類（2192） 平面形は側面に直線をやや持ち、端部がすぼまる形。色調は暗褐色～にぶい褐色を呈し、胎土中には径 0.5mm ～ 2.0mm の石英を少量含み、黒雲母が目立つ。比較的緻密で、有溝５類の胎土に似る。中型。

管状３ｂ類（2193） 平面形は３ａ類同様、側面に若干の直線部分を持つ楕円形。色調はにぶい橙色で、胎土には径 0.5mm ～ 2.0mm 以下の石英を含む。３ａ類に比べれば胎土は粗い。中型。

管状４類（2194） 側面に明瞭な直線を持つ平面形長方形。色調は灰白色。胎土はかなり緻密で、径 1.0mm ～ 3.0mm の石英を若干含む程度である。中型１点のみの出土。

管状５類（2195） 側面に直線を持ち、端部はすぼまる形。瓦質焼成。径 0.5mm ～ 2.0mm の石英を少量胎土中に含む。大型１点のみの出土。

細形管状土錘（2196・2197）

管状土錘であるが、明らかに形態が異なり、刺網に使用されたものと考えられるため、管状土錘とは別に分類を行った。胎土等から数タイプに分類が可能と思われるが、資料数が少ないことからここでは一括した。

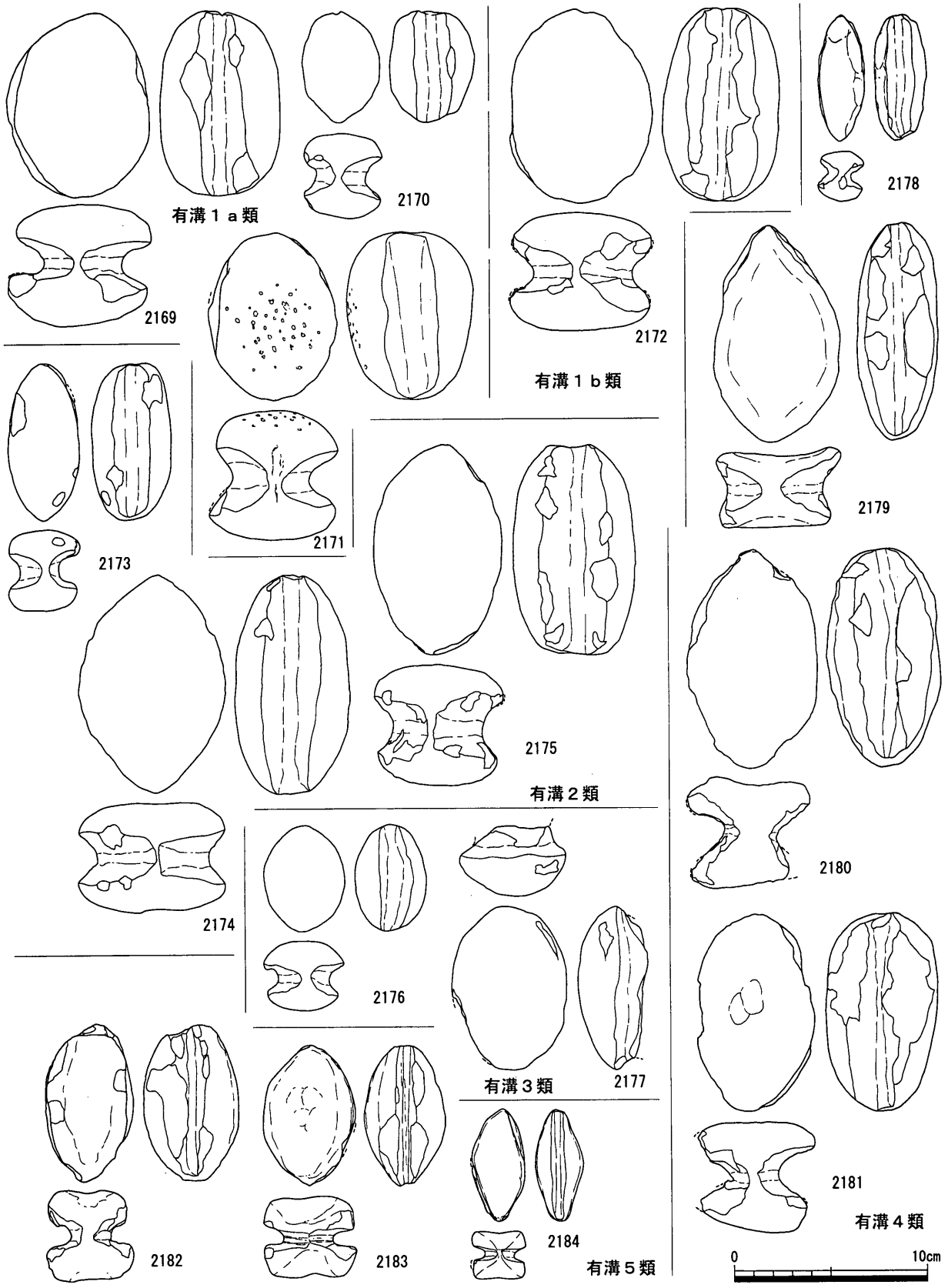
有溝穿孔土錘（2198・2199）

平面形楕円形で、中央長軸方向に溝を持ち、その溝を挟んで両側に２つずつ計４つの孔を持つ。近世以後はタイ網のカズラ縄のおもりとして使用されていた。

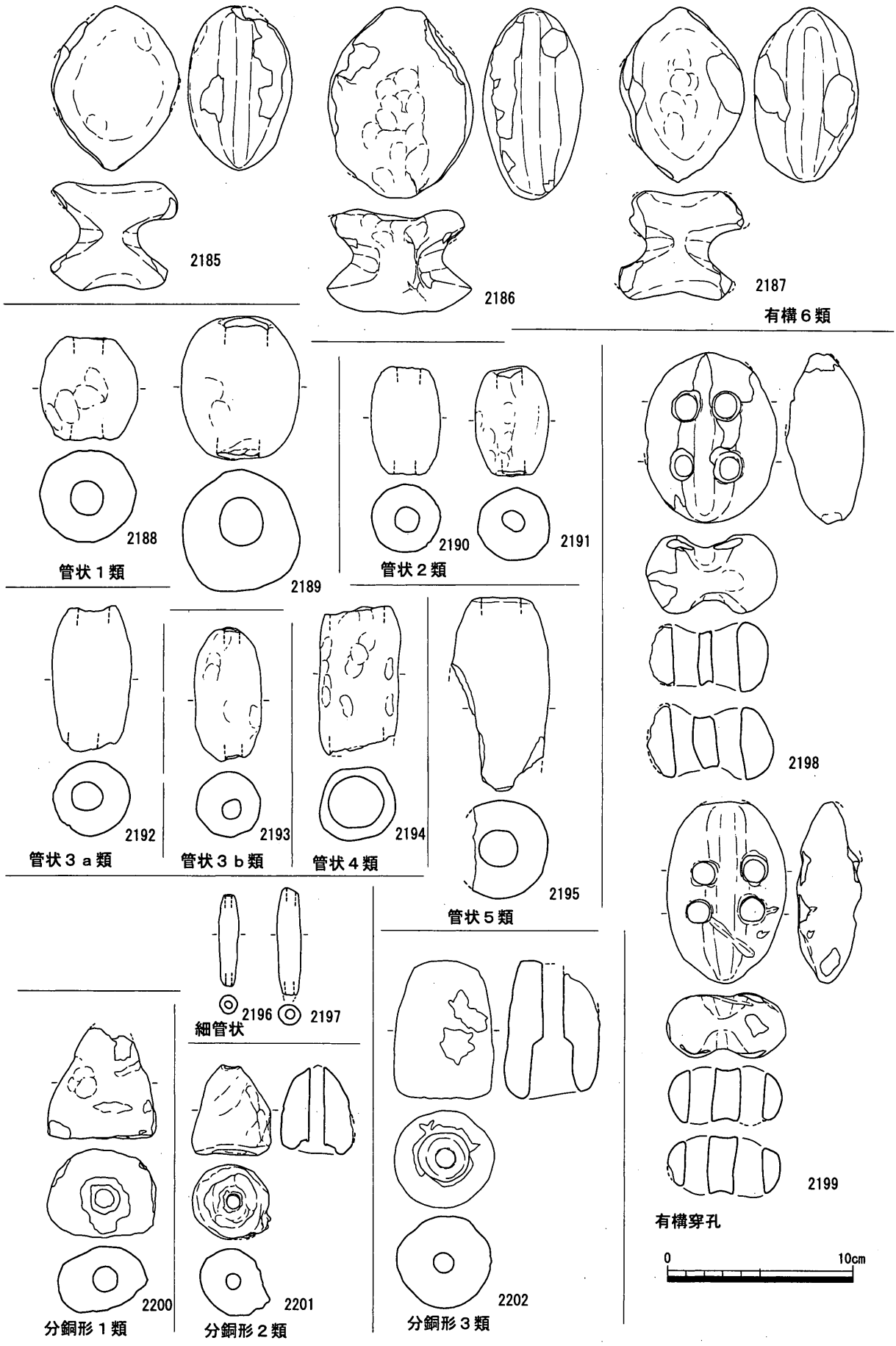
出土した２点はいずれも撹乱からの出土で、時期は不明である。ただし、同時に出土した遺物には中世の土器・土錘も多数含み、これらの土錘も中世にまで遡る可能性も十分に考えられる。なお、直島町積浦遺跡では 15 ～ 16 世紀の遺物に共伴して出土している（佐藤 2003）。

2198 は色調橙色で、胎土に径 0.5mm ～ 3.0mm の多量の石英と、赤色粒を若干含む。有溝４類の焼成・胎土に類似する。

2199 の色調は灰黄色。胎土中には多量の石英（径 0.5mm ～ 3.0mm）を含み、黒雲母が確認できる。2198 との明瞭な違いは黒雲母の有無である。


有溝１ａ類
2169
2170
有溝１ｂ類
2172
2178
2171
2173
2179
2175
有溝２類
2174
2176
2180
有溝３類
2177
2181
有溝４類
2182
2183
2184
有溝５類
0
10cm

第237図　土錘（１）


2185
2186
2187
有構６類
2188
管状１類
2189
2190
2191
管状２類
2192
管状３ａ類
2193
管状３ｂ類
2194
管状４類
2195
管状５類
2196
2197
細管状
2198
2199
有構穿孔
0
10cm
2200
分銅形１類
2201
分銅形２類
2202
分銅形３類

第238図　土錘（２）

分銅形土錘

分銅形を呈する土錘。

分銅形１類（2200） 丸みを持った四角錐形。色調はにぶい黄褐色。径 1.0mm ～ 5.0mm の石英および黒雲母をかなり多量に含む。底面は平坦。

分銅形２類（2201） 底面中央部分は若干窪む。穿孔は上部から行われている。色調は灰白色。胎土に径 0.5mm ～ 2.0mm の石英を少量含み、赤色粒は少量確認できる。有溝３類の胎土に類似する。

分銅形３類（2202） 上部がすぼまる円筒形。孔は内部で段差を持つ。色調は浅黄橙色。胎土に径 0.5 ～ 3.0mm の石英を多量に含み、赤色粒も目立つ。有溝４類の胎土に類似する。

3. 類型の差と生産地の差異

最も出土量の多い有溝土錘のうち、４類と６類は胎土・焼成がかなり近似しているが、その他の１～３・５類は胎土・焼成・形状ともに明瞭に異なる。これらの差異が生産地の違いによるものであるとすれば、最低でも５つの生産地を想定できる。また、管状土錘の一部には、有溝土錘と同様の胎土・焼成を有するものがある一方、少数ではあるが、管状５類のような瓦質焼成のものも認められ、さらに多くの生産地から土錘が供給されている状況が捉えられる。

第６節　中世瓦

1. はじめに

浜ノ町遺跡では軒瓦を含む中世瓦が出土している。そのほとんどが近世遺構、もしくは遺構外からの出土であるため、第３節とは別に報告することとした。

香川県内における鎌倉～室町期の瓦生産遺跡は、天王谷遺跡（東かがわ市　長井編 2003)、聖通寺瓦窯跡（綾歌郡宇多津町　西岡 1994)、佐伯八幡山瓦窯跡（善通寺市　安藤 1967）などが確認されているものの、本遺跡以外に集落遺跡から軒瓦を含むまとまった資料は得られていない。そのため、本節では消費地における瓦の実態（軒瓦の文様パターン・製作技法）把握を目的として報告を行う。

また、遺跡内での出土分布についても触れる。

2. 軒平瓦

文様パターンの分類

Ａ１類（2203・2204・2208）　宝珠の中心飾りをもち、外側に珠文が配されるもの。中心飾りと珠文の周囲には圏線をもつ。同パターンの文様をもつ軒平瓦は、坂出市青海町白峰寺にみられる（安藤 1967 － 199 以下同様に安藤 1967 に掲載されている瓦の番号)。ただしこの資料は、中心飾りの外側に４つの珠文をもつ点で 2203 とは異なる。

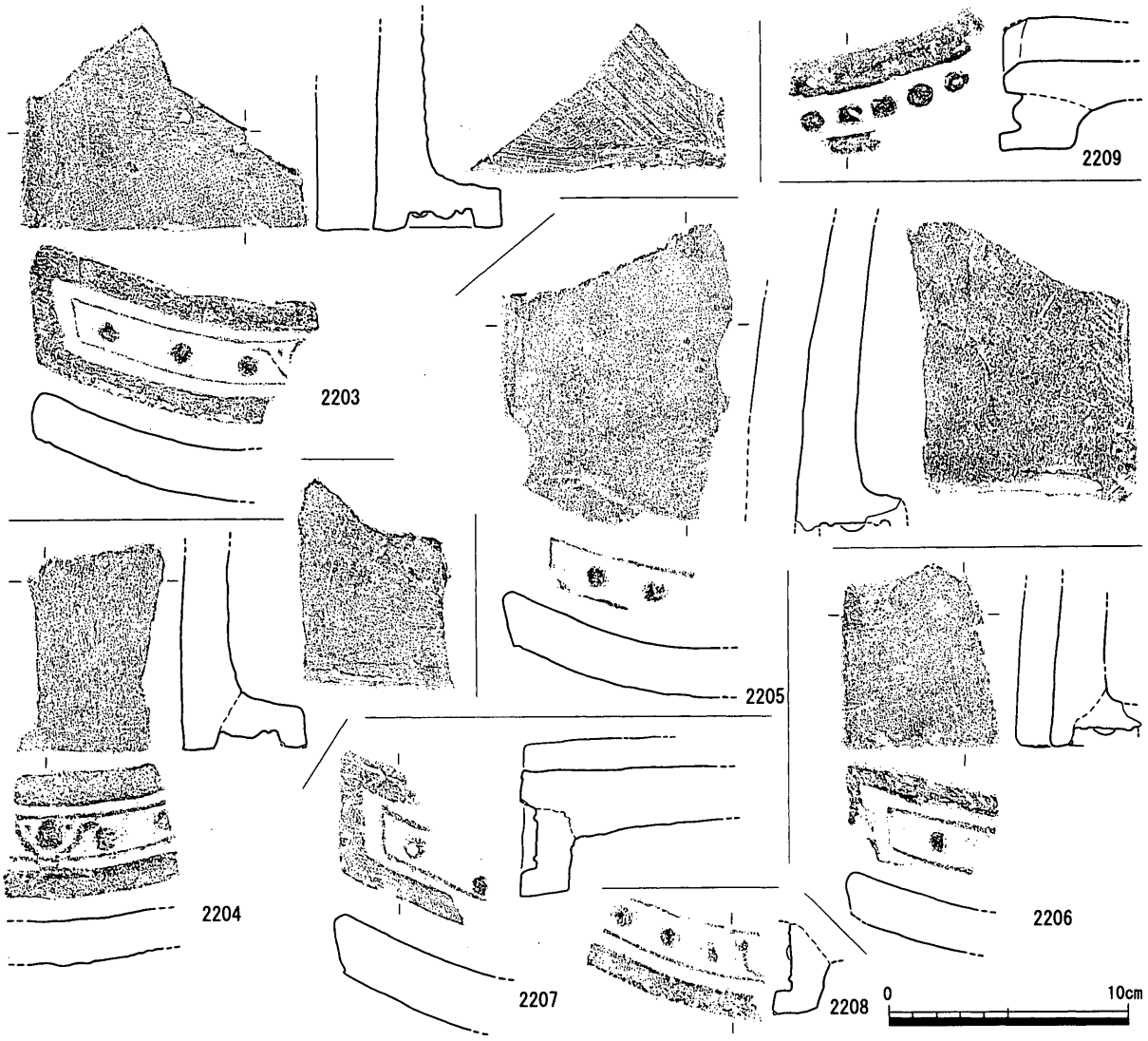
Ａ２類（2205・2206・2207）　珠文・圏線をもつが、欠損のため中心飾りが不明なもの。ただし、珠文の形状等からみて、2203・2204・2208 と同様の中心飾りを有していた可能性は高い。
2206 の凹面には布目痕が残る。凸面の板ナデは、瓦当接合部を横方向に行われた後、縦方向に行われている。2207 はＳＥ 521（15 世紀中葉）からの出土。凹面・凸面ともに板ナデ痕が確認できる。凸面の板ナデは、縦方向に行われた後、瓦当接合部のみ横方向に行われている。

Ｂ類（2209）　中心飾りがなく、連珠文のみをもつもの。中心飾があるＡ１類に比べて、珠文が大きく、珠文間の幅が狭い。中心飾のない連珠文をもつ軒平瓦は、根香寺（高松市中山町　80)、筆山廃寺（善通寺市善通寺町　250)、善通寺（善通寺市善通寺町　315)、加茂神社（多度津町南鴨　330)、岡本八幡神社（豊中町岡本　350)、高良神社（豊中町寺家　355)、本山寺（豊中町寺家　358)、法蓮寺（高瀬町下麻　373）にある。ただし、2209 のように、瓦頭の高さがなく、１つの珠文径が大きく、珠文間の幅が極端に狭いものは認められない。

瓦当部・平瓦接合時の調整手法の分類

瓦当部と平瓦を接合する際に、瓦当裏面から平瓦凸面にかけて行われる調整手法を分類する。

１ａ類（2203・2204・2206・2207）　瓦当部と平瓦を接合した後、平瓦凸面に、接合部分にかなり近い位置まで縦方向の板ナデを施す。その後、接合部分のみ横方向に板ナデを行う。



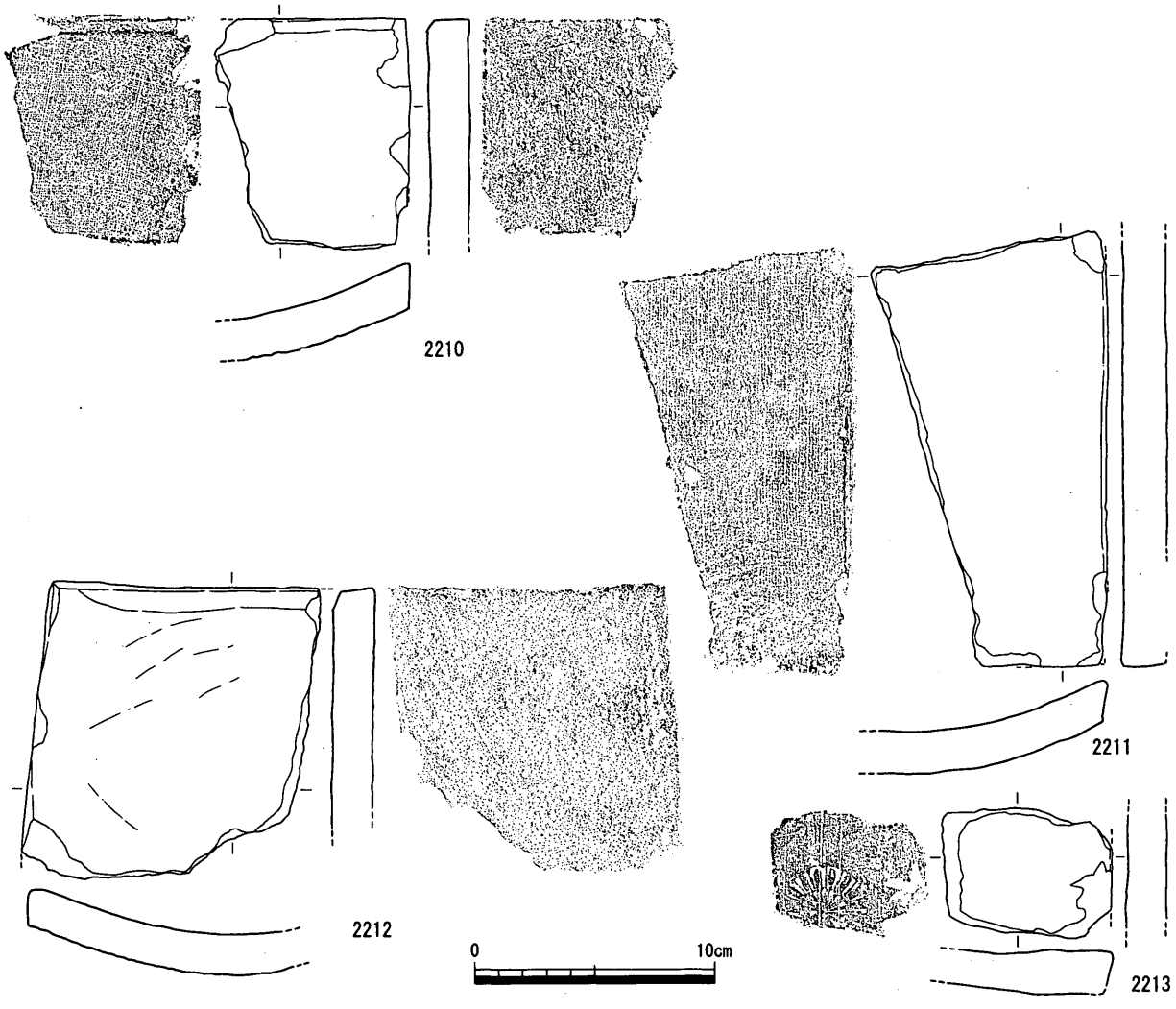
第239図　中世瓦（1）

1ｂ類（2205）　瓦当部・平瓦接合後、平瓦凸面に、接合部分に近接する場所まで縦方向の板ナデを行う。その後の横ナデを施さない点で１ａ類と異なる。

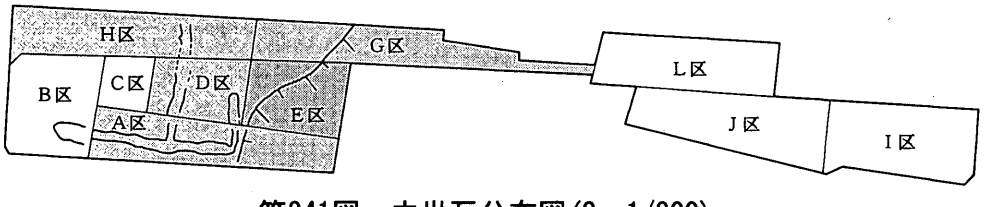
2類（2209）　瓦当部と平瓦を接合後、平瓦凸面から瓦当部裏面下端まで連続した縦方向の板ナデを行う。

各瓦の説明

2203は、文様パターンＡ１類で、中心飾りの外側に３つの珠文が配されている。接合時調整手法は１ａ類で、凹面には布目痕が見られる。2204はＳＥ520埋め戻し土中（15世紀初頭～中葉）からの出土。文様パターンはＡ１類、接合時調整手法は１ａ類。凹面は板ナデが施されているが、先行する布目痕が若干残る。2205の文様パターンはＡ２類、接合時調整手法は１ｂ類。凸面には斜め方向の後、縦方向に行われた板ナデ痕が認められる。凹面には布目痕が残る。2206は文様パターンＡ２類、接合時調整手法１ａ類。凹面には布目痕が認められる。2207の文様パターンはＡ２類、接合時調整手法は１ａ類。凹面にも板ナデが行われている。文様パターンＡ２類の2208については、接合時調整手法は欠損のため不明である。2209の文様パターンは連珠文のみのＢ類、接



第240図　中世瓦（2）



第241図　中世瓦分布図(S＝1/800)

調査区		A	B	C	D	E	G	H	I	J	L	計
平瓦（点）	凸面縄目	2	1	0	1	7	0	1	0	0	0	12
	凹面布目	0	0	0	1	2	1	2	0	0	0	6
	その他	12	1	2	5	40	7	16	0	0	0	83
		14	2	2	7	49	8	19	0	0	0	101
丸瓦（点）		0	1	0	0	3	2	0	0	0	0	6
計（点）		14	3	2	7	52	10	19	0	0	0	107
百分率（%）		13.1	2.8	1.9	6.5	48.6	9.3	17.8	0.0	0.0	0.0	100.0

第３表　調査区別中世瓦出土比率表

合時調整手法は２類である。凹面には板ナデが施され、瓦当部表面上端部には面取りが行われている。

文様パターンと瓦当部・平瓦接合時調整手法の相関関係について

文様パターンと瓦当部・平瓦接合時調整手法を属性として分析を行ったところ（第４表）相関関係があることが判明した。Ａ１類と、完存していればＡ１類であろうＡ２類には、基本的には１ａ類の調整が施される。Ｂ類には２類の調整が行われ、瓦当表面上端部の面取り、瓦当面の高さが低いこともＡ１・Ａ２類とは異なる。この差は時期差か、製作集団の差を反映していると考えられる。それぞれの瓦に詳細な年代を付与できないため確実ではないが、共伴遺物からみてもＡ１・Ａ２類とＢ類間にはさほど時期差があるようには思えないため、ここでは製作集団の差と捉えておく。そうであれば、少なくとも２つの製作集団から瓦の供給が行われていたことが推測できる。

調整手法＼文様パターン	Ａ１	Ａ２	Ｂ
１ａ	2203・2204	2206・2207	
１ｂ		2205	
２			2209

第４表　中世瓦文様パターン・接合時調整手法相関表

3. 平瓦

遺構から出土し、残存状況が比較的良好な３点と、押印が確認できる１点の平瓦について図化を行った。

2210はＳＸ642（13世紀末～15世紀後半）からの出土。凹面に布目痕、凸面に縦方向の板ナデ痕が認められる。狭端部には面取りが施されている。2211は凹面に布目痕、凸面に縦方向の板ナデ痕が確認できる。近世の護岸ＳＸ542裏込め土からの出土であるが、混入と考えて問題ないだろう。2212はＳＸ019（15世紀前葉）出土。狭端部は面取りが行われているが、側端部までは届いていない。凹面には板ナデが施されているが、布目が若干残る。凸面にも板ナデ痕が認められるが、先行する縄目痕が明瞭に残る。2213は凹面・凸面に板ナデが施された後、凹面に菊文が押印されている。

4. 遺跡内の分布状況

第３表は調査区ごとの出土一覧表である。Ｅ区から５割近い量が出土し、隣接するＡ・Ｇ・Ｈから１割弱が出土している。

Ｅ区は、第２節で触れたように当該地に本格的な集落が形成された段階では低地となっており、その後15世紀後半までの間に段階的に整地されたようである。瓦の多くはこの低地部の整地土中から出土しており、近隣に瓦を有する建物（寺院か）の存在が想定される。

第７節　近世瓦

1. はじめに

浜ノ町遺跡では近世瓦が多数出土しているが、中世瓦同様多くが遺構外からの出土である。遺構出土軒瓦については、第４節で共伴遺物と併せて掲載しているが、遺構外出土瓦も含めて整理・報告を行うため、第４節とは別に独立した節を設けることとした。

ただし、時間的な制約から、基本的には軒瓦・鬼瓦のみを対象とすることとした。佐藤 2003 a・2003 bでは、既往の高松城跡の発掘調査における出土瓦について詳細な分類・整理が行われており、基本的にはその方法に準じて、同笵関係に主眼を置いた分類を行った。その後、高松城跡（県民ホール地区）、高松城跡（歴史博物館地区）、高松城跡（西の丸町地区）との同笵関係を調査し、今回新たに認められたものについてのみ、本報告書で掲載することとした。

2. 軒平瓦

2214 ～ 2222 は宝珠文を中心飾りとし、左右に唐草文が配されるもの。佐藤ＸＸ類。

2214 は中心に宝珠文をもち、宝珠文の下から左右に向かって唐草文が蕨手状に延びるもの。

2215 は宝珠文を中心飾りとし、宝珠文の下から唐草文が上方に巻き込み、反転する（下）もの。

2216 ～ 2219 は中心飾りの宝珠文の下から延びる唐草文が下方に巻き込み、反転する（上）もの。

2220 ～ 2222 は大きく円形に近い宝珠文を中心飾りとし、その下から下方に巻き込む唐草文が延びる。さらにその外側には、上方に巻き込む唐草文が退化したと思われる「Ｖ」字状の文様が配される。

2223 ～ 2225 は上向三葉文を中心飾りとするもの。佐藤Ｖ類。

2223 は、上向三葉文の下から上方に巻き込む唐草文が左右にそれぞれ２本ずつ延びる。

2224・2225 は上向三葉文の下から下方に巻き込む唐草文が延び、更に２転（上方→下方）する。

2226 の中心飾りは、陽刻表現であることは確認できるが、形状・文様意匠については不明。

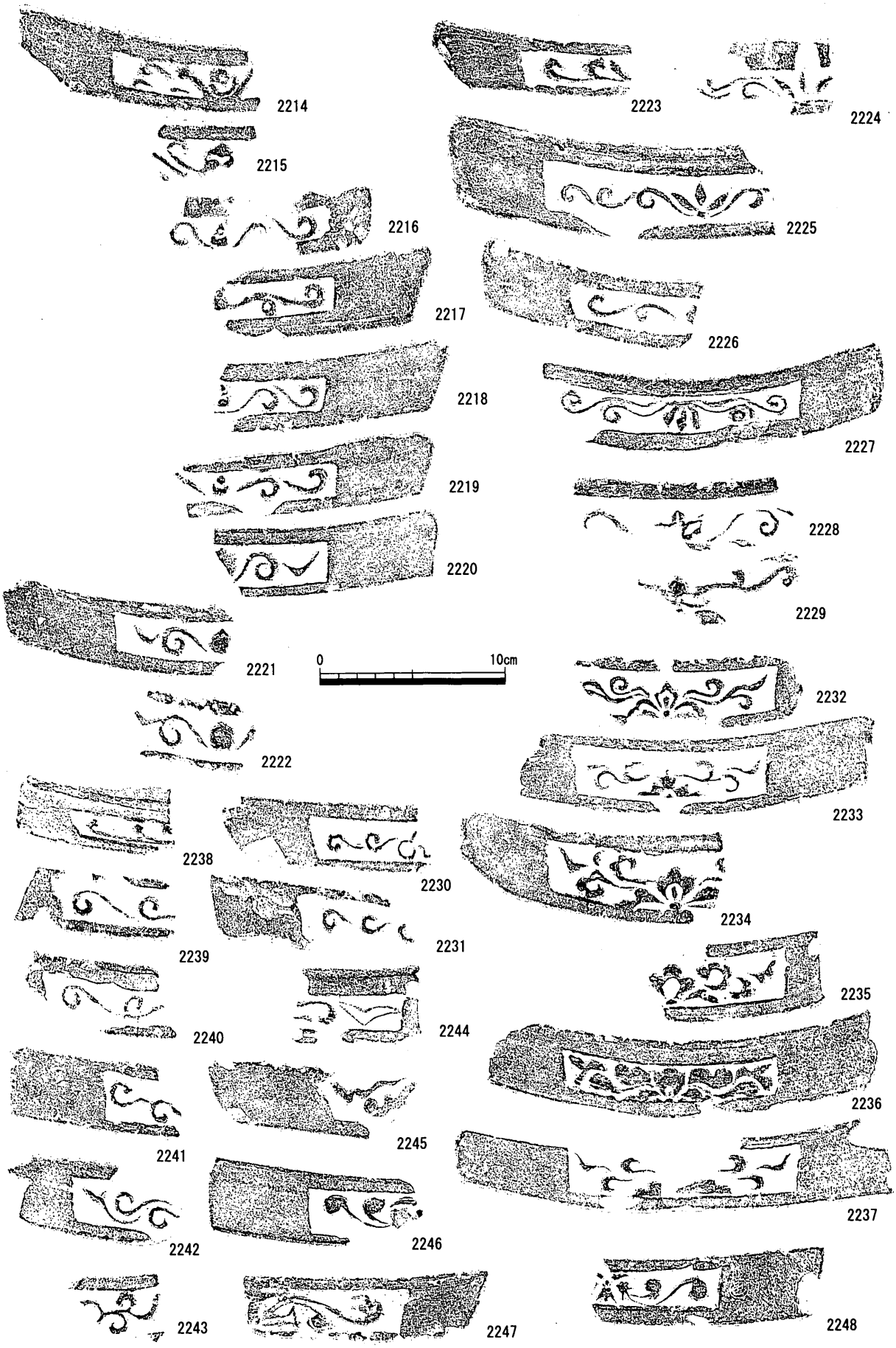
2227 は中心飾りに下向三葉文をもつもの。佐藤Ⅵ類。２本の細長い唐草文が、上向三葉文の上から波打つように延び、それぞれ上方・下方に巻き込む。

2228・2229 は中心飾りに、陽刻で３つの花弁の花文をもつもの。

2228 は中心飾りの下から上方に巻き込む唐草文が延び、その外側に唐草文、もしくは子葉があるもの。

2229 は中心飾りの中位から上方に巻き込む唐草文が延び、反転（下方）するもの。

2230・2231 は陽刻線で表現したクローバー状の文様を中心飾りとするもの。佐藤ＸＸＩ類。いず


2214
2215
2216
2217
2218
2219
2220
2221
2222
2223
2224
2225
2226
2227
2228
2229
0
10cm
2232
2233
2238
2230
2234
2239
2231
2235
2240
2244
2236
2241
2245
2237
2242
2246
2243
2247
2248

第242図　近世瓦（1）

れも、中心飾りの中位から上方に巻き込む唐草文が延び、反転する（下方）もの。

2232 ～ 2237 は上向の半裁花菱文を中心飾りとするもの。佐藤ＸＸⅡ類。

2232 は中心飾りの中位から唐草文が２本延び、それぞれ上方･下方に巻き込むもの。下方に巻き込む唐草文からは子葉が分かれる。

2233 は、中心飾りの上位から上方に巻き込む唐草文が延び、反転する（下方）もの。その外側には「Ｖ」字状の文様が付属する。

2234 は２本の唐草文が中心飾りの中位から延び、それぞれ上方･下方に巻き込む。その外側には２本の子葉をもつ。

2235 は上方に巻き込む唐草文２本、その外側に子葉１本をもつが、唐草文がかなり抽象化されている。

2236 は全体的にかなり抽象化された文様をもつもの。中心飾りの中位から延びる２本の唐草文は、上方・下方に巻き込むことがかろうじて確認できる。

2237 は、中心飾りの上位から上方・下方に巻き込む唐草文が延び、外側に子葉をもつ。唐草文１単位の長さはかなり短い。

2238 ～ 2246 は中心飾りを欠き、唐草文のみ残存するもの。

2247 は陽刻の十字文を半裁したものを中心飾りとする。中心飾りの中位からは２本の唐草文が延び、それぞれ上方・下方に巻き込む。

2248 は下方に拡がる三つ又文様を中心飾りとするもの。中心飾りの中位からは、上方･下方に巻き込む唐草文が延びる。

3. 軒丸瓦

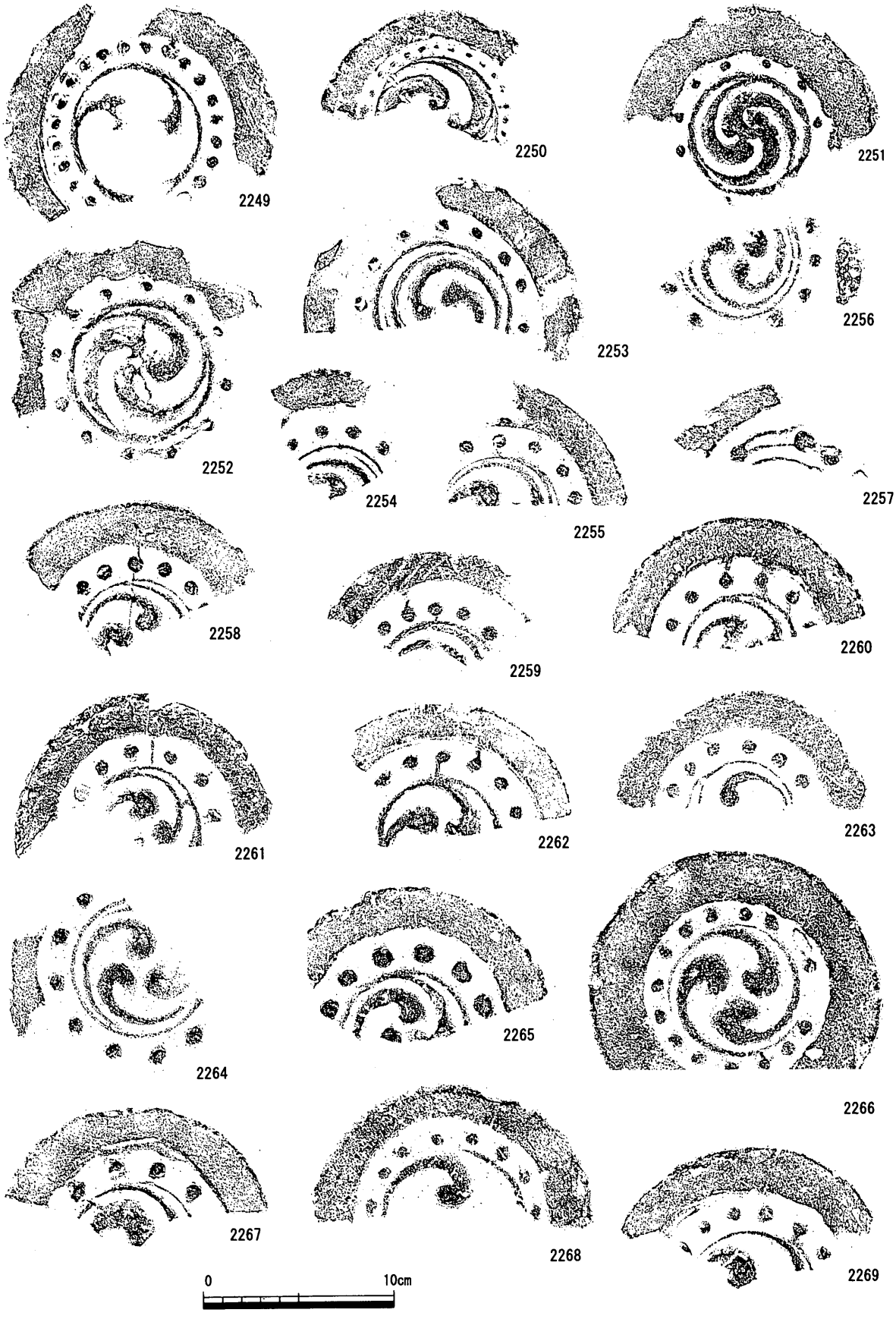
軒丸瓦については、内外区を画する圏線の有無・巴文尾部の形状・珠文の有無によって大きく分類されている（佐藤 2003）。文章中はこの分類に従って記述を行う。

2249・2250・2255・2259 ～ 2261・2263・2267 は、内外区間に圏線はないものの、内区の巴文尾部がつながり圏線状を呈する。佐藤軒丸瓦Ⅱ類。

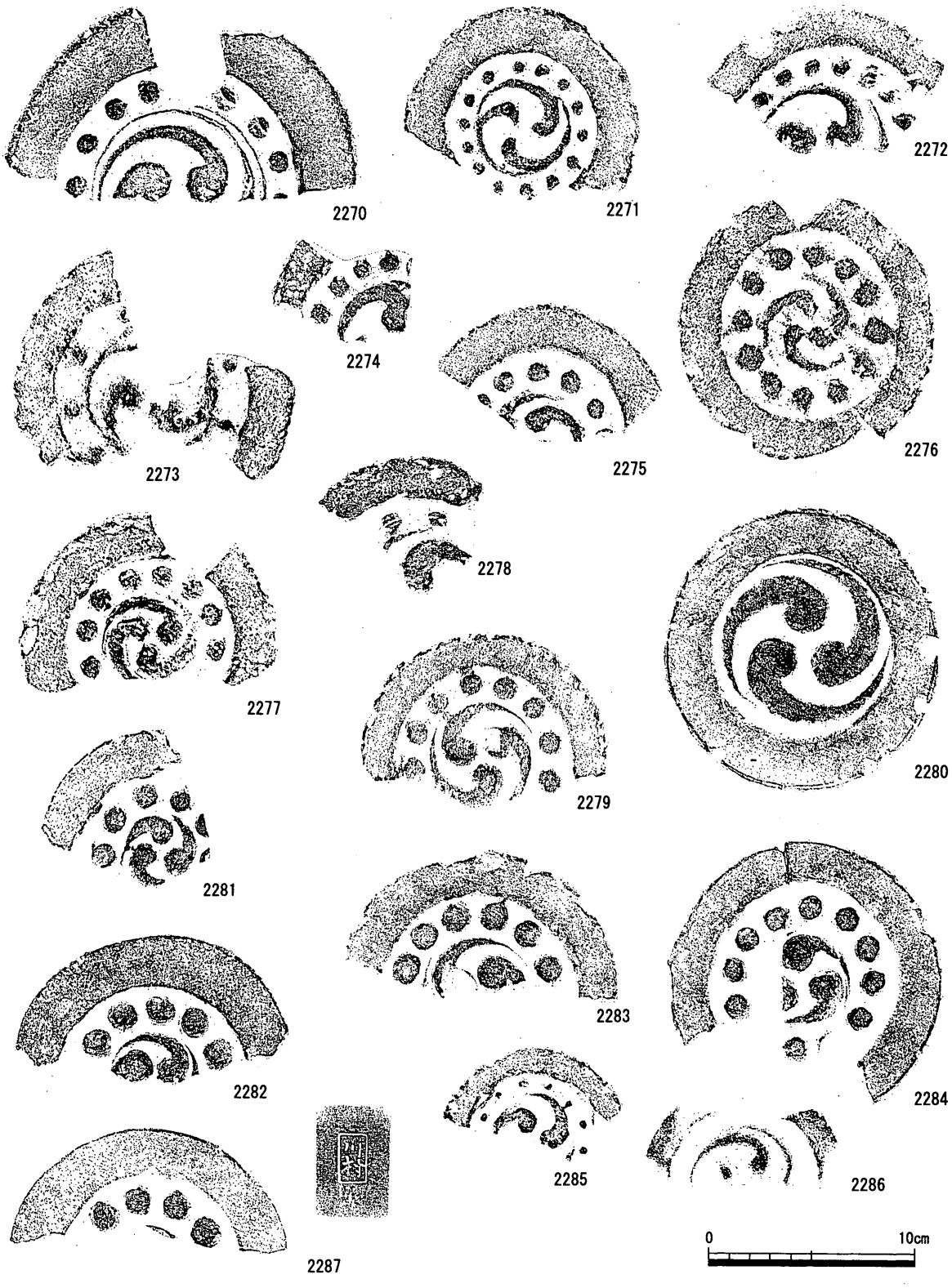
2251・2252 ～ 2256・2258・2262・2265・2273 は、内区と外区の間に圏線をもち、内区の巴文尾部間が接しない。巴文尾部先端部が圏線と接するものもある。佐藤軒丸瓦Ⅲ類。

2257 は、小破片のため全体像は不明であるが、巴文尾部、もしくは圏線状に珠文が配される。

2266・2268 ～ 2272・2274 ～ 2279・2281 ～ 2285 は、内区と外区の間に圏線をもたない。佐藤軒丸瓦Ⅳ類。


2249
2250
2251
2252
2253
2256
2254
2255
2257
2258
2259
2260
2261
2262
2263
2264
2265
2266
2267
2268
2269
0
10cm

第243図　近世瓦（2）


2270
2271
2272
2273
2274
2275
2276
2277
2278
2279
2280
2281
2282
2283
2284
2285
2286
2287
0
10cm

第244図　近世瓦（3）

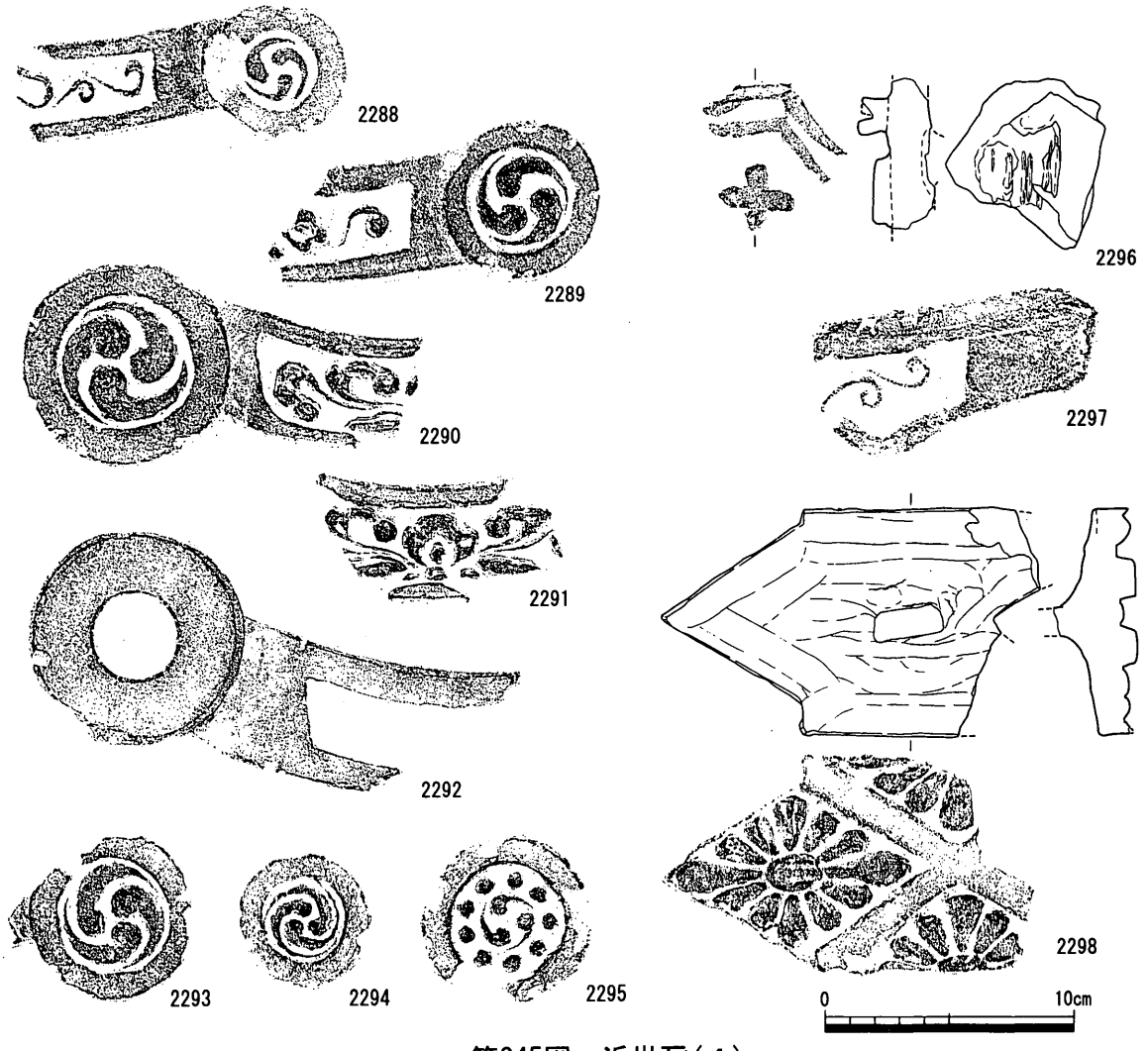
2280・2286は巴文のみで、珠文をもたない。佐藤軒丸瓦Ⅴ類。
2287は胴部側面に「川村」の刻印をもつ。

4. 軒桟瓦

2288は、陽刻線で表現したクローバー状の文様を平部の中心飾りとする。小丸部は珠文をもたない左巻き巴文。

2289～2291は平部の中心飾りに上向の半裁花菱文をもつもの。佐藤軒桟瓦Ⅱ類。
2289は中心飾り部分を欠損しているが、唐草文の形状から佐藤Ⅱ類の可能性が高いと思われる。小丸部は珠文を伴わない右巻きの巴文。
2290の小丸部は右巻きの巴文で、珠文をもたない。

2292は平部・小丸部ともに文様をもたない。



第245図　近世瓦（4）

2293 ～ 2295 は小丸部のみの資料。珠文をもたないもの（2293・2294）と８個の珠文をもつもの（2295）がある。

5. 鬼瓦

2296 は、小破片で全体像が不明であるが、十字文とそれを囲むような二重線（八角形か？）をもつ。
裏面には把手が剥離した痕跡が残る。

6. その他

2297 は、中心飾りが不明であるが、唐草文が上方に延び、反転（下方）する文様をもつ滴水瓦である。
2298 は棟飾り瓦。同形状・同文様の高松城跡（歴史博物館地区）1577 には「みまや村」の刻印が施されている（北山 1999）。

第４章　自然科学的分析

第１節　分析の目的

1. 木製品の樹種同定

複数の板材から構成されている曲物１個体について、同一の樹種から製作されているのか否かについて知見を得るために、井戸枠に使用されていた曲物４個体について樹種同定を行った。その結果、曲物本体については４個体すべてスギであり、同一樹種から製作されているとの結論を得た。また、板材同士を綴じ合わせるには、ヒノキが使用されている。

2. 花粉分析

香川県内では海浜部の発掘調査事例が少なく、植生などの環境的な知見もほとんど得られていない。そのため、海浜部の数少ない事例として、植生の基礎的な資料を得る目的で分析を行った。

3. 珪藻分析

16 世紀末～ 17 世紀初頭の落ち込み状遺構ＳＸ 717 と、その底面に並べられた輪状植物製品については、性格が不明である。ＳＸ 717 を小規模な船入り遺構と捉え、輪状植物製品を船体のクッション材とする可能性も考えられた。仮にそうであれば、海水が流入していたと考えられるため、海水の有無を判断するため分析を行い、「海水泥質干潟環境」であるとの結論を得た。常時海水が満ちているような状況ではなく、一時的（満潮時）に海水が流入する状況であれば、同様の分析結果となるため、珪藻分析の結果からは、船入り遺構の可能性を否定することはできない。

4. 鉄滓分析

本遺跡では、中世の可能性がある鉄滓が２点出土している。香川県内では、中世の鉄滓の分析はほとんど行われていないため、基礎的な資料を蓄積する目的で分析を行った。

第２節　香川県浜ノ町遺跡における樹種同定

1. はじめに

株式会社古環境研究所

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、浜ノ町遺跡より出土した、井戸枠、井戸枠綴じ紐、不明木製品の合計 28 点である。

3. 方法

カミソリを用いて、試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって 60 ～ 600 倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果を表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

スギ Cryptomeria japonica D. Don　スギ科

図版１・２・３

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10 細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ 40m、径２ｍに達する。材は軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

ヒノキ　Chamaecyparis obtusa Endl.　ヒノキ科

図版４

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で１分野に２個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、１～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靭、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

樹皮　bark

図版５

平滑な形状の組織が見られる。

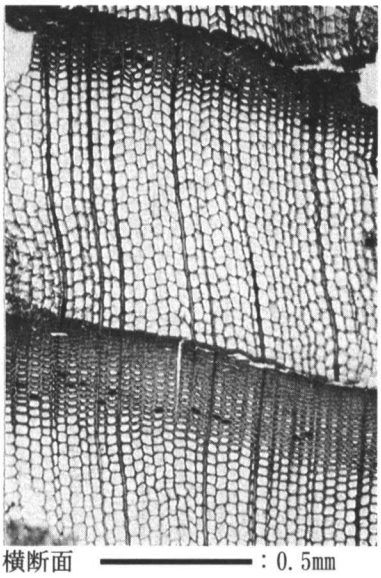
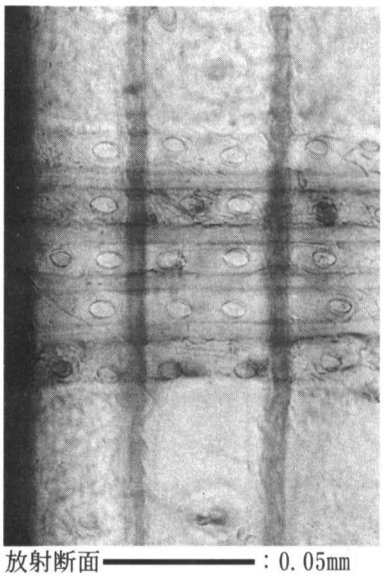
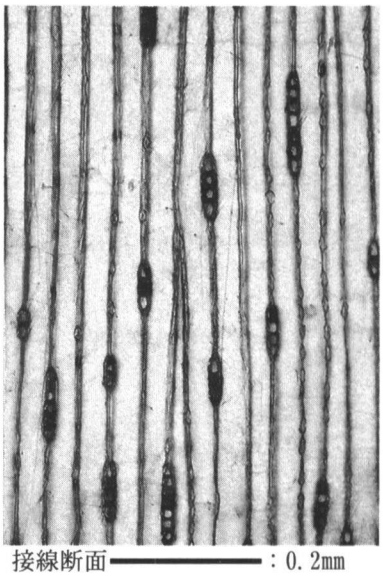
5. 所見

同定の結果、スギ16点、ヒノキ５点、樹皮７点であった。井戸枠にはモミ属、スギ、ヒノキなどの針葉樹が使われることが多い。

参考文献
佐伯浩・原田浩　1985『針葉樹材の細胞．木材の構造』文永堂出版　p.20-48.
佐伯浩・原田浩　1985『広葉樹材の細胞．木材の構造』文永堂出版　p.49-100.
島地謙・伊東隆夫　1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣　296p.

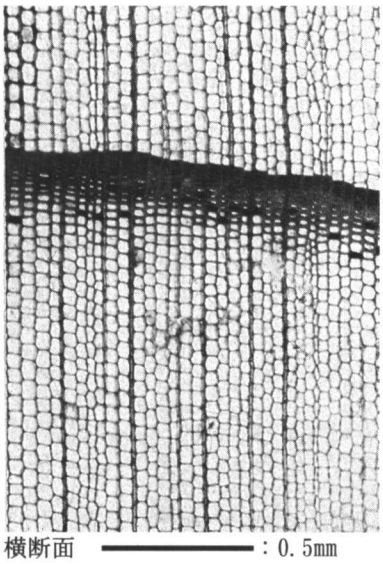
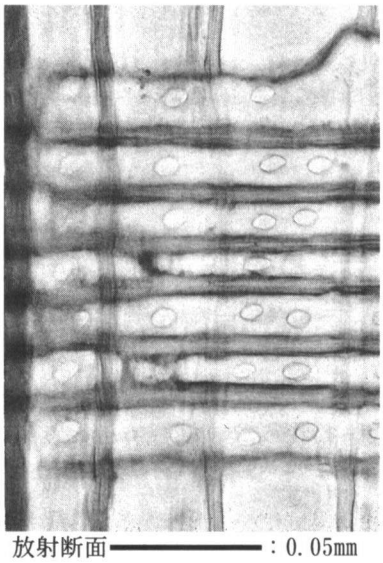
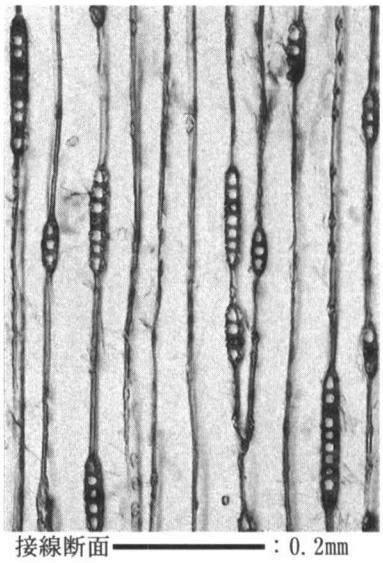
No.	出土位置	種類	結果（和名／学名）	
1	SE403	不明木製品	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
2	SE403	不明木製品	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
3	SE102	井戸枠上段 1	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
4	SE102	井戸枠上段 2	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
5	SE102	井戸枠上段 3	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
6	SE102	井戸枠下段外 1 綴じ紐	樹皮	*bark*
7	SE102	井戸枠下段外 2 綴じ紐	樹皮	*bark*
8	SE102	井戸枠上段 3 綴じ紐	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa Endl.*
9	SE102	井戸枠上段 1 綴じ紐	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa Endl.*
10	SE102	井戸枠上段 2 綴じ紐	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa Endl.*
11	SE102	井戸枠下段外 1	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
12	SE102	井戸枠下段外 2	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
13	SE102	井戸枠下段内 1	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
14	SE102	井戸枠下段内 2	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
15	SE102	井戸枠下段内 1 綴じ紐	樹皮	*bark*
16	SE102	井戸枠下段内 2 綴じ紐	樹皮	*bark*
17	SE304	井戸枠下段 1	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
18	SE304	井戸枠下段 2	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
19	SE304	井戸枠下段 3	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
20	SE304	井戸枠下段 4	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
21	SE304	井戸枠下段 1 綴じ紐	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa Endl.*
22	SE304	井戸枠下段 2 綴じ紐	樹皮	*bark*
23	SE304	井戸枠下段 3 綴じ紐	樹皮	*bark*
24	SE304	井戸枠下段 4 綴じ紐	ヒノキ	*Chamaecyparis obtusa Endl.*
25	SE304	井戸枠上段 1	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
26	SE304	井戸枠上段 1 綴じ紐	樹皮	*bark*
27	SE304	井戸枠上段 2	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*
28	SE304	井戸枠上段 3	スギ	*Cryptomeria japonica D.Don*

第５表　浜ノ町遺跡における樹種同定結果

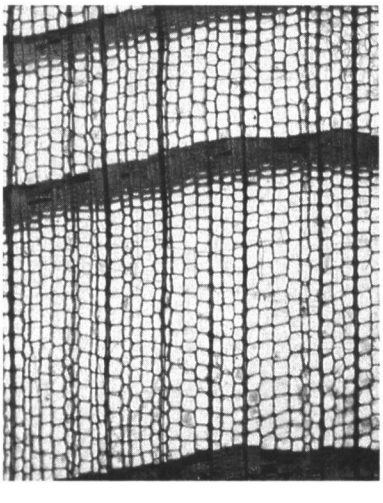
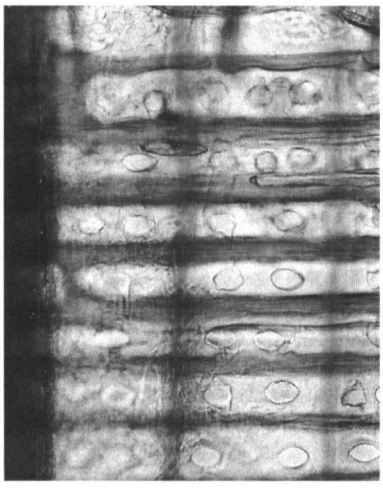
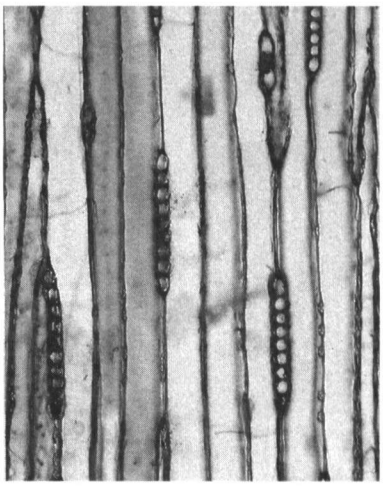
横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.05mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

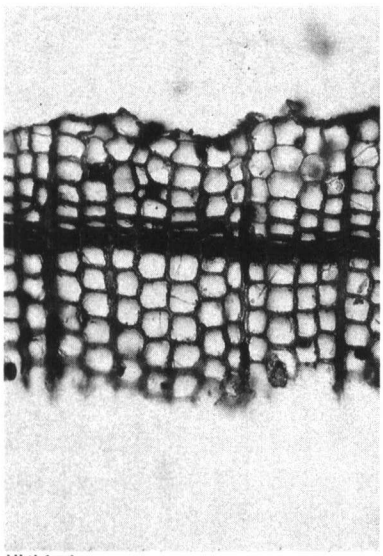
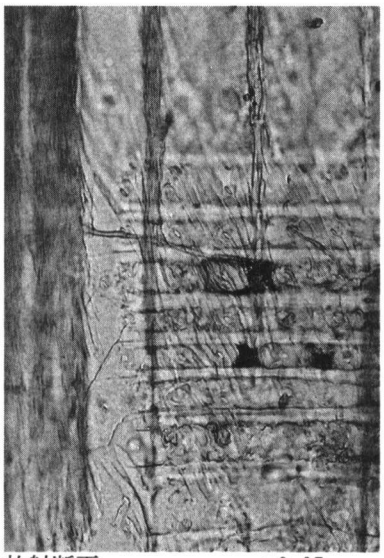
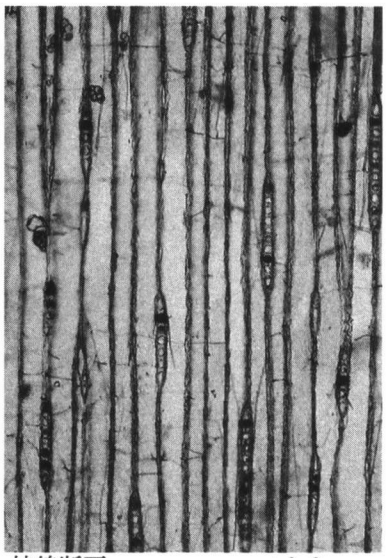
1.3　SE102　井戸枠上段1　スギ

横断面 ―――― : 0.5mm　放射断面 ―――― : 0.05mm　接線断面 ―――― : 0.2mm

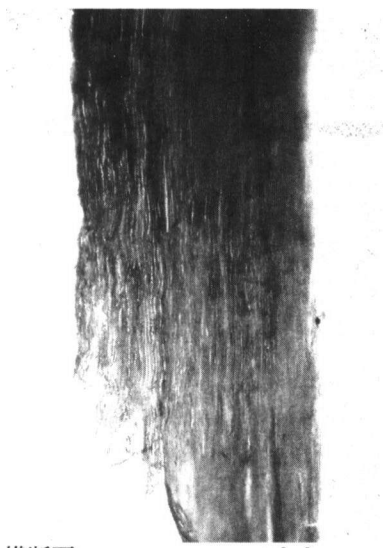
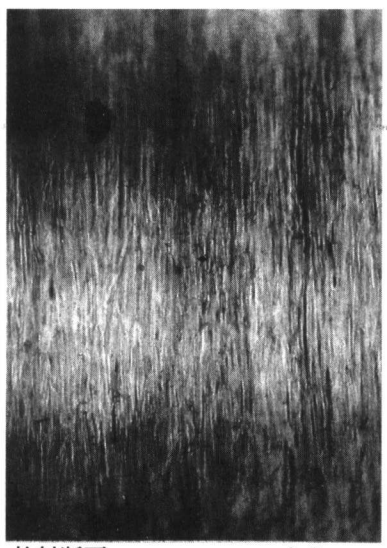
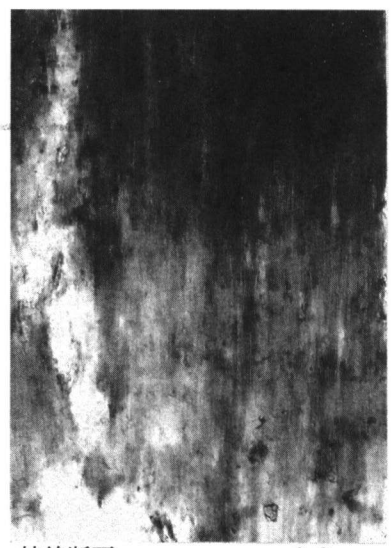
2.5　SE102　井戸枠上段3　スギ

横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.05mm　接線断面 ：0.2mm

4.21　SE304　井戸枠下段1綴じ紐　ヒノキ

横断面 ：0.2mm　放射断面 ：0.2mm　接線断面 ：0.2mm

5.22　SE304　井戸枠下段2綴じ紐　樹皮

第３節　浜ノ町遺跡の花粉化石

パレオ・ラボ　鈴木茂

高松市浜ノ町・錦町に所在する浜ノ町遺跡においては大規模な落ち込み状の遺構や屋敷地の区画溝などが検出されている。この浜ノ町遺跡で集落が形成される中世およびそれ以前、また城下町整備後である近世初頭における遺跡周辺の環境変遷についての情報を得る目的で土壌試料が採取された。以下にはこれら土壌試料について行った花粉分析の結果・考察を示し、遺構周辺の古植生について検討した。

1. 試料

分析試料は浜ノ町遺跡のＳＤ013（Ｄ区部分）の８層および14層より採取された２試料（試料No.8、No.14)、同遺跡ＳＸ717の16層、20･21層、22層の各層より採取された３試料（No.16、No.20、No.22）の総計５試料である（図１）。以下にこれら土壌試料の土相を簡単に記す。

ＳＤ013（Ｄ区部分）：上層の試料８は黄灰色の粘土混じり砂で、このＳＤ013が廃絶された後の層（埋め立て層？）と考えられている。下層の試料14は暗灰色の粘土で、ＳＤ013が機能していた時の堆積層である。時代は両試料とも14世紀と考えられている。

ＳＸ717：試料16は灰色～暗灰色の砂質粘土で、本遺構（落ち込み状の遺構）が開いていた時（17世紀初頭）の自然堆積土である。本遺構の基盤層である試料20は灰黄色～灰色の砂質シルト～シルト・粘土混じり砂、試料22は青灰色の粗砂で、径１～10cmのレキが多量に認められ、やや粘土分が混じっている。またこれら20～22層中からは古代（平安時代）以前の遺物が少量出土していることから、試料20は古代、試料22は古代以前と考えられている。

2. 分析方法

上記した５試料について以下のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約３～５ｇ）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂などを除去する。次に46％フッ化水素酸溶液を加え30分間放置する。水洗後、重液分離（臭化亜鉛溶液：比重2.1を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。次に、酢酸処理、続けてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。また、花粉化石の単体標本を適宜作成し、各々にPLC.SS番号を付し形態観察用および保存用とした。

3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉41、草本花粉30、形態分類を含むシダ植物胞子４、藻類２の計77である。これら花粉・胞子の一覧を表１に、また、主要な花粉・胞子の分布を図２（ＳＤ013)、図３（ＳＸ717）に示した。なお分布図について、樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また図および表においてハイ

フンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括していれてある。

ＳＤ 013：検鏡の結果、試料 14 の樹木類ではマツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）とコナラ属コナラ亜属が 20％弱の出現率を示して最も多く得られている。次いでスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）、クマシデ属－アサダ属、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属（以後シイ類と略す）などが 10％前後を示している。草本類は出現率 23％を示すイネ科が最も多く、次いでアカザ科－ヒユ科が多く観察されている。その他カヤツリグサ科、クワ科、ギシギシ属、ナデシコ科、キンポウゲ科、アブラナ科、ヘクソカズラ属、ヨモギ属、ヨモギ属を除く他のキク亜科、タンポポ亜科が１～７％を示している。

試料８はニヨウマツ類の最優占で特徴づけられ、マツ属不明（ニヨウマツ類かゴヨウマツ類かの区別がつかなかったもの）を合わせると 70％近くに達している。他はいずれも 10％以下で、その中ではスギとアカガシ亜属が５％を越えている。草本類ではやはりイネ科が最も多く、出現率は 34％を示している。次いでアブラナ科が 10％を越えて多く、その他カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、マメ科、キク科の各分類群が１％以上を示している。

ＳＸ 717：20, 22 の２試料においてはアカガシ亜属が 20％を越え高い出現率を示しているが、試料 16 ではほぼ半減している。またコナラ亜属も下部２試料では 15％前後と安定した出現を示しているが、やはり試料 16 では出現率を下げている。針葉樹類についてみると、試料 22 においてニヨウマツ類がアカガシ亜属に次いで多く得られているが、試料 20 では急減し、試料 16 では再び増加して最も高い出現率約 29％を示している。ヒノキ類はニヨウマツ類とは反対の産出傾向を示しており、試料 20 で最も多く観察されている。その他スギ、クマシデ属－アサダ属、クリ属、シイ類などが５％前後の出現率を示している。試料 22 の草本類はイネ科が 30％を越え、ヨモギ属もそれに近い出現率を示している。次いでカヤツリグサ科が７％を示しているが他は１％以下で、その中で水生植物のミズアオイ属（抽水植物）や湿生の分類群を含むキカシグサ属などが若干得られている。試料 20 ではヨモギ属が出現率 70％近くを示して圧倒的に多く、他はいずれも１％に達していない。試料 16 では再びイネ科が多産しており、出現率は 50％近くに達している。カヤツリグサ科も増加しており、その他ではソバ属やベニバナ属が観察されている。また水生植物のオモダカ属（抽水植物）、ミズアオイ属、湿生のキカシグサ属などが若干検出されている。

4. 遺跡周辺の古植生

ＳＤ 013：中世の 14 世紀と考えられている最下部の試料 14 ではニヨウマツ類とコナラ亜属が最優占しており、屋敷地周辺はこれら二次林要素の樹木が目立つ存在であったと推測される。また照葉樹林要素であるアカガシ亜属やシイ類、肥沃なところを好むエノキ属－ムクノキ属も付近に生育していたものと思われる。一方ツガ属やスギ、ヒノキ類などは一部屋敷地周辺に生育していた可能性も考えられるが、多くは遺跡周辺丘陵部などに生育していたものと思われる。草本花粉についてみるとイネ科に次いでアカザ科－ヒユ科が多く検出されており、その他ツユクサ属、ギシギシ属、ナデシコ科、キンポウゲ科、カタバミ属、セリ科、ナス属、ヨモギ属、タンポポ亜科などの雑草類と考えられる分類群が多く得られている。こうしたことからＳＤ 013 溝の土手はこれら雑草類で占められていたと推測され、これらに絡まるようにヒルガオ属やヘクソカズラ属といっ

たつる性の植物もみられたであろう。なお1個体のみであるがソバ属が検出されており、周辺においてソバの栽培が行われていた可能性も考えられる。またソバの実を利用することなどによりソバ属花粉が溝内に供給されたことも考えられ、さらに検討が必要であろう。

その後、同じ14世紀ではあるが溝が廃絶された頃になると屋敷地周辺は二次林化がさらに進み、ニヨウマツ類がいっそう目立つ存在となった。一方土手にみられた雑草類の多くは姿を消し、イネ科とアブラナ科が増加した。そのうちアブラナ科については野菜類など栽培種の可能性もあるが、花粉形態からそれらを区別することは難しく現時点では不明である。

ＳＸ717：古代や古代以前の遺跡周辺微高地上にはアカガシ亜属を主体にシイ類などを交えた照葉樹類が多くみられた。またコナラ亜属を中心にクマシデ属－アサダ属、クリ属などの落葉広葉樹類も一部に生育していた。一方ツガ属、ニヨウマツ類、スギ、ヒノキ類の温帯性針葉樹類は先にも記したが周辺丘陵部にその林分を広げていたものと思われる。草本花粉についてみると、イネ科がやや高い出現率を示しており、現在の水田において水田雑草として普通にみられる分類群であるミズアオイ属やキカシグサ属も少量ながら検出されている。こうしたことから本試料について予察的ではあるが植物珪酸体分析を試みた結果、イネの機動細胞珪酸体が認められた。よってこの時期遺跡周辺において水田稲作が行われていた可能性も考えられるが、本分析や水田遺構の確認などさらに検討が必要であろう。

その後イネ科花粉はほとんど得られなくなり、先の時代に水田稲作が行われていたとすると何らかの影響で稲作は行われなくなったと推測され、この時期ＳＸ717遺構周辺はヨモギ属の群落で覆われていたようである。

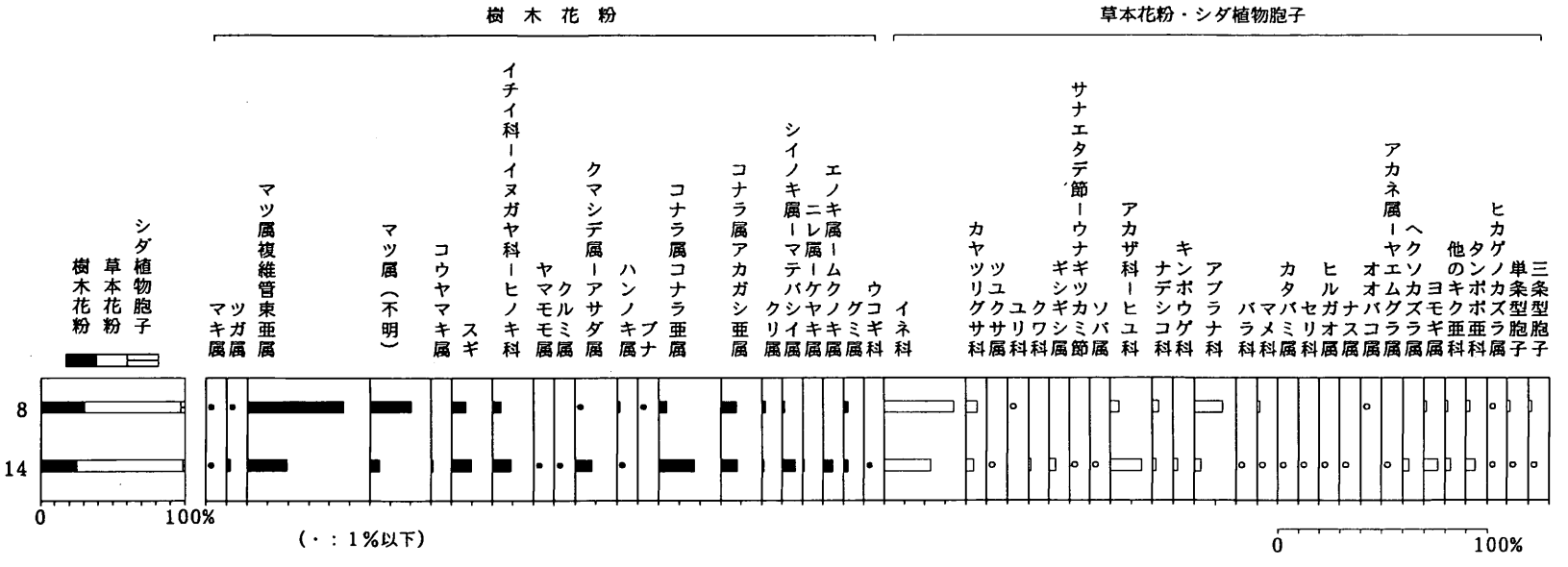
17世紀初頭のＳＸ717遺構は珪藻分析から干潟環境にあったとみられ、そうした周辺にニヨウマツ類を主体とした二次林要素が目立つ存在となっていた。またスギやヒノキ類などの温帯性針葉樹類やアカガシ亜属、シイ類などの照葉樹類は周辺丘陵部や微高地上に残存していた。さらにコナラ亜属やクマシデ属－アサダ属などの落葉広葉樹類も一部に生育していたであろう。草本花粉において再びイネ科花粉が多産しており、水田雑草を含む分類群であるオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属、サンショウモなども検出されており稲作の可能性が推察される。こうしたことから試料16についても予察的に植物珪酸体分析を試みた結果、イネの機動細胞珪酸体やイネの穎（籾殻）に形成される珪酸体の破片、およびイネ属型の単細胞珪酸体も観察された。このように植物珪酸体分析においても稲作の存在が指摘された。試料を採取したＳＸ717遺構は先にも記したように干潟環境であることから、この遺構周辺において水田稲作が営まれていたことが考えられ、そうしたところよりイネや水田雑草類の花粉および植物珪酸体が供給されたのであろう。またソバ属も得られており、一部でソバの栽培も行われていた可能性が考えられる。

なお1個体のみであるがベニバナ属が検出されている。時代は異なるが本遺構の試料22において回虫卵が、またＳＤ013の試料14からは鞭虫卵がそれぞれ1個体ずつ観察されている。17世紀初頭の浜ノ町遺跡においてこのような寄生虫卵に悩まされていたかは不明であるが、ベニバナが薬として用いられた結果遺構内に供給された可能性も考えられよう。またベニバナは染料や紅などの材料として用いられたことも考えられる。このように検出されたベニバナ属花粉は栽培というよりは何かに用いられた結果、遺構内に混入したものと思われる。

和名	学名	8	14	16	20	22	A	B	C	D
樹木										
マキ属	Podocarpus	1	1	-	-	1	-	-	-	-
モミ属	Abies	-	-	1	2	2	-	4	5	8
ツガ属	Tsuga	1	4	6	2	9	-	12	6	4
カラマツ属	Larix	-	-	1	-	-	-	-	-	-
マツ属単維管束亜属	Pinus subgen. Haploxylon	1	-	-	-	-	-	-	1	-
マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon	79	38	73	13	43	-	30	13	17
マツ属（不明）	Pinus (Unknown)	34	9	16	-	4	-	11	9	2
コウヤマキ属	Sciadopitys	-	2	1	3	4	-	12	5	4
スギ	Cryptomeria japonica D. Don	12	20	7	21	10	-	10	17	16
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	7	18	15	48	23	-	6	21	28
ヤナギ属	Salix	-	-	3	-	-	-	-	-	2
ヤマモモ属	Myrica	-	1	2	1	2	-	1	-	-
ノグルミ属	Platycarya	-	-	-	1	-	-	-	-	-
クルミ属	Juglans	-	1	1	1	1	-	1	1	2
クマシデ属-アサダ属	Carpinus-Ostrya	1	16	25	6	12	-	3	5	5
ハシバミ属	Corylus	-	-	-	-	1	-	-	-	-
カバノキ属	Betula	-	1	5	1	6	-	-	1	1
ハンノキ属	Alnus	2	1	8	-	2	-	1	-	1
ブナ	Fagus crenata Blume	1	-	1	-	-	-	-	-	1
イヌブナ	Fagus japonica Maxim.	-	-	-	1	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen.Lepidobalanus	7	34	29	35	33	-	42	38	49
コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen.Cyclobalanopsis	13	16	33	47	56	-	49	53	41
クリ属	Castanea	3	2	3	20	4	1	23	10	17
シイノキ属-マテバシイ属	Castanopsis-Pasania	2	13	12	13	5	-	10	31	21
ニレ属-ケヤキ属	Ulmus-Zelkova	-	2	4	2	2	-	3	8	5
エノキ属-ムクノキ属	Celtis-Aphanenthe	-	9	4	-	1	-	-	-	1
イスノキ属	Distylium	-	-	-	-	1	-	-	-	-
サンショウ属	Zanthoxylum	-	-	-	-	1	-	-	-	1
センダン属	Melia	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ユズリハ属	Daphniphyllum	-	-	-	1	-	-	-	-	-
アカメガシワ属	Mallotus	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	Rhus	-	-	-	-	1	-	-	-	-
モチノキ属	Ilex	-	-	1	1	1	-	-	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	1	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属	Acer	-	-	-	-	-	-	-	1	-
トチノキ属	Aesculus	-	-	1	1	1	-	-	-	-
マタタビ属	Actinidia	-	-	-	3	3	-	-	-	-
ツバキ属	Camellia	-	-	1	-	-	-	-	-	-
グミ属	Elaeagnus	4	5	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	1	-	-	1	-	-	-	-
アオキ属	Aucuba	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	Symplocos	-	-	-	-	1	-	-	-	-
草本										
ガマ属	Typha	-	-	-	-	-	-	-	1	1
オモダカ属	Sagittaria	-	-	1	-	-	-	-	-	-
イネ科	Gramineae	188	179	512	8	280	1	18	16	42
カヤツリグサ科	Cyperaceae	29	28	83	1	59	1	3	3	3
ツユクサ属	Commelina	-	7	-	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	Monochoria	-	-	1	-	1	-	-	-	-
ユリ科	Liliaceae	1	-	3	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	8	5	2	7	-	1	-	-
ギシギシ属	Rumex	-	23	6	2	-	-	-	-	-
サナエタデ属-ウナギツカミ節	Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon	-	2	-	-	4	-	-	-	1
イタドリ節	Polygonum sect. Reynoutria	-	-	-	1	2	-	-	1	-
他のタデ属	other Polygonum	-	-	4	-	1	-	-	-	-
ソバ属	Fagopyrum	-	1	2	-	-	-	-	-	-
アカザ科-ヒユ科	Chenopodiaceae · Amaranthaceae	23	116	35	1	5	-	4	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	16	13	4	-	1	-	-	-	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	-	17	4	1	4	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	74	25	20	-	-	-	-	-	-
バラ科	Rosaceae	-	1	1	-	-	-	-	-	-
マメ科	Leguminosae	8	4	3	-	-	-	-	-	-
カタバミ属	Oxalis	-	4	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	Rotala	-	-	2	-	1	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	4	3	-	2	-	-	-	-
ヒルガオ属	Calystegia	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ナス属	Solanum	-	2	9	-	-	-	-	-	-
オオバコ属	Plantago	1	-	-	-	2	-	-	-	-
アカネ属-ヤエムグラ属	Rubia-Galium	-	3	2	-	-	-	-	-	-
ヘクソカズラ属	Paederia	-	23	1	-	-	-	-	-	-
ベニバナ属	Carthamus	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	Artemisia	7	52	73	558	219	3	51	21	76
他のキク亜科	other Tubuliflorae	7	22	5	2	1	-	-	1	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	11	35	13	-	1	-	2	-	-
シダ植物										
ヒカゲノカズラ属	Lycopodium	2	1	3	-	2	-	1	2	1
サンショウモ	Salvinia natans	-	-	1	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	8	5	3	7	9	2	103	19	24
三条型胞子	Trilete spore	9	6	12	4	6	2	53	4	4
緑藻類										
クンショウモ属	Pediastrum	-	-	1	-	4	-	-	-	-
黄緑色藻類	Botryococcus braunii Kutzing	-	-	2	-	-	-	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	168	196	255	223	231	1	218	225	226
草本花粉	Nonarboreal pollen	365	570	793	576	590	5	79	43	123
シダ植物胞子	Spores	19	12	19	11	17	4	157	25	29
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	552	778	1067	810	838	10	454	293	378
不明花粉	Unknown pollen	19	46	19	21	11	0	52	31	32

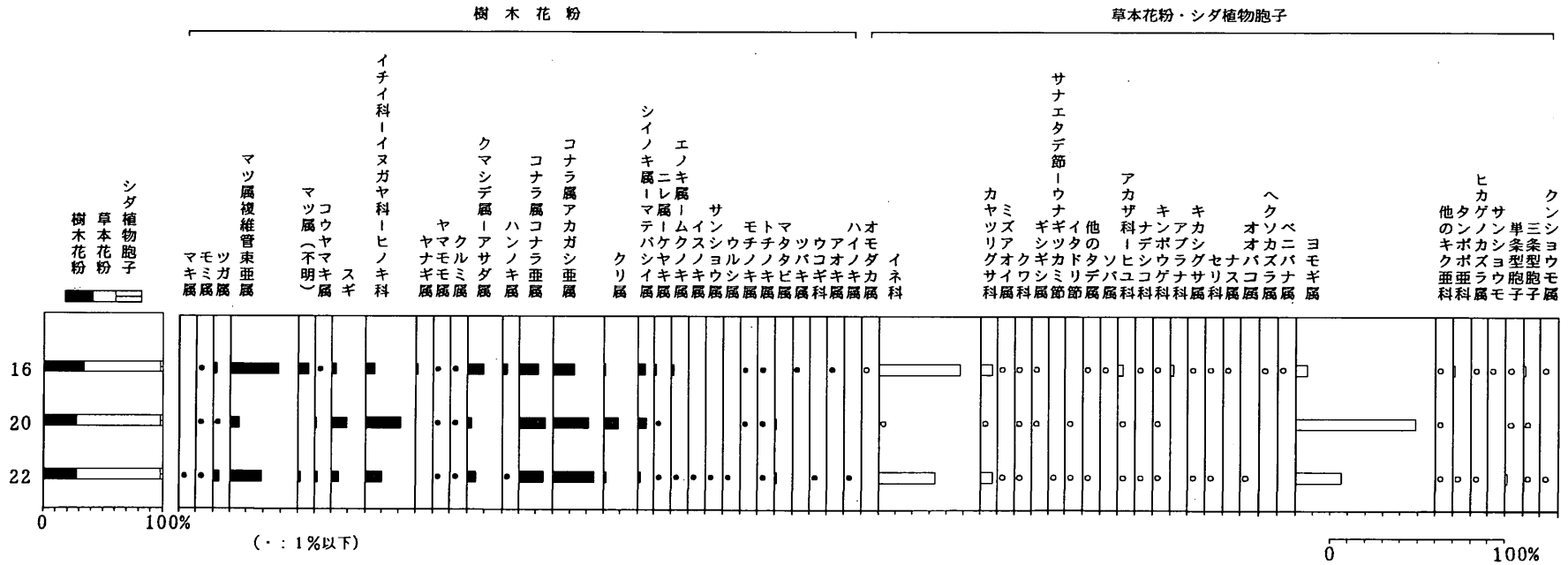
T. - C. は Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceae を示す

第６表　産出花粉化石一覧表



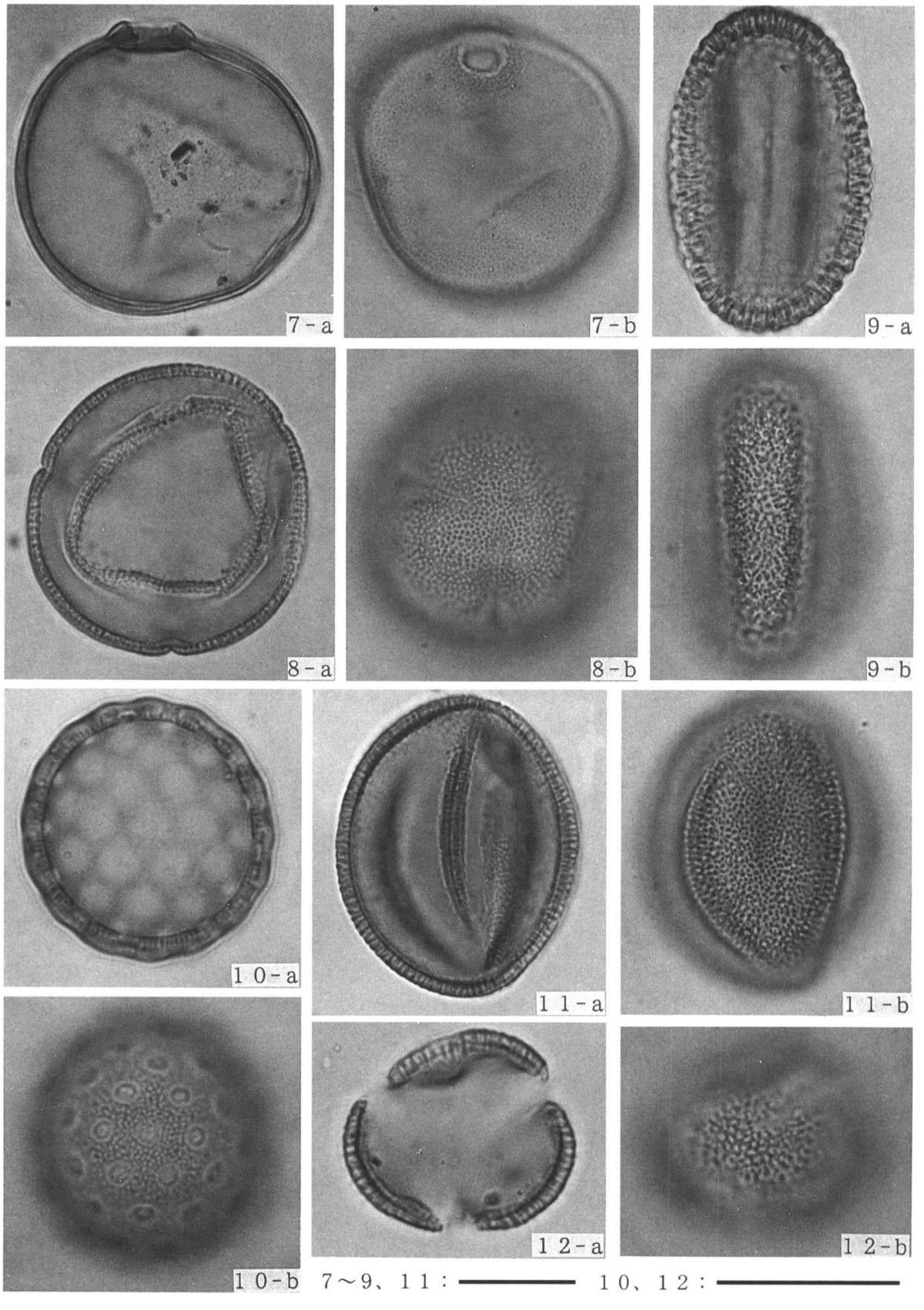
第246図　浜ノ町遺跡ＳＤ013の主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）



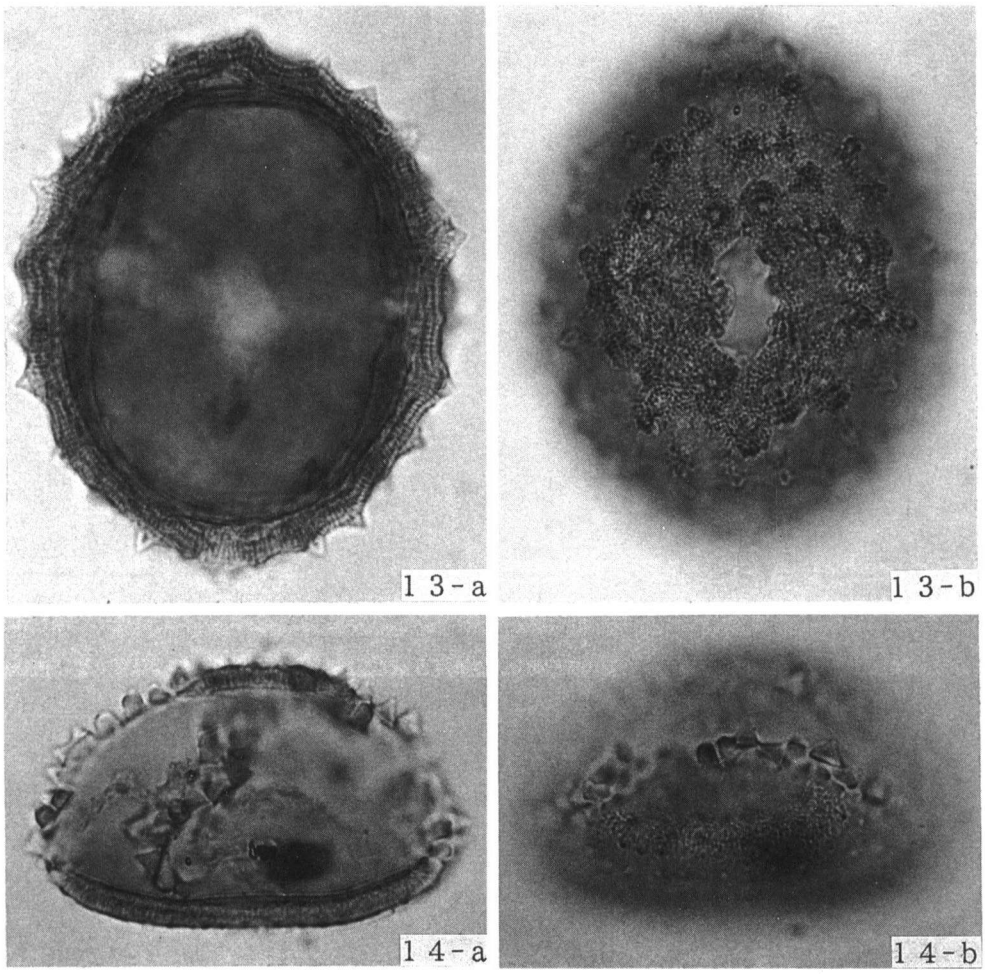
第247図　浜ノ町遺跡ＳＸ717の主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）



浜ノ町遺跡の花粉化石(scale bar:20μm)

7：イネ科　PLC.SS 3299　S X717、16層　　10：アガサ科型　PLC.SS 3296　S D013、14層



浜ノ町遺跡の花粉化石(scale bar:20μm)

13：ベニバナ属　PLC.SS 3301　SX717、16層　　14：ツユクサ属　PLC.SS 3297　SD013、14層